

目が覚めたらダークライ。そしてトレーナーは可愛い女の子。

ただのポケモン好き

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつの間にか僕はダークライになっていた。

そしてポケモンの世界に行くと言われた彼女と瓜二つの女の子を見つけた。だから僕は彼女のポケモンとなって一緒に旅をしながらジムバッジを8つ集めてチャンピオンを目指す！ しかし彼女はトレーナーとしての腕、ポケモンへの知識。どちらも一流で……

▼出てくるポケモンは第七世代までです。

▼主人公はポケモンガチ勢ではないので、知識はないです。

▼原作のトレーナーは出さないとす。

▼メガシンカ／Zワザなどの要素はありますが、ダイヤモンドは無し。

▼ゲーム本編以外のポケモンの要素も含まれます。

▼俺TUEEE要素は薄いです。

目次

1 旅の始まり

プロローグ | 1

1話 ポケモンになってから | 3

2話 僕のトレーナー | 7

3話 初めてのポケモンバトル | 12

4話 そして旅に出る | 19

5話 愛されなかったポケモン | 25

6話 彼女の答え | 30

7話 VS トロピウス | 38

8話 お小遣い稼ぎ | 42

9話 チャンピオン | 50

10話 ジム戦 | 57

11話 VS フリージオ | 63

12話 エピソード：ダーククライ | 67

2 動き出す組織

13話 悪の組織 | 72

14話 メアの戦い方 | 78

15話 新しい技 | 85

16話 戦友 | 90

17話 四人はいつも | 95

18話 カイヨウシティへ！ | 101

19話 ナナとダーククライ | 107

20話 優しさ | 117

21話 VS スピアー | 124

2 2話	トレーナー	130
2 3話	2つ目のジム戦	135
2 4話	新たな可能性	143
3	バトル大会	
2 5話	シノノタウン	147
2 6話	特訓!	152
2 7話	シノノカップ開幕	158
2 8話	二回戦	168
2 9話	ウルガモス	174
3 0話	メアのわがまま	181
3 1話	つよいポケモン	189
3 2話	準決勝。そして白騎士降臨	195
3 3話	チャンピオンを目指すということ	205
3 4話	決勝戦	211
3 5話	夢	217
3 6話	エピソード：ナナ	223
3 7話	V S ゴウ団	228
3 8話	暴走	235
3 9話	強くなりたい	241
4	修行して、その後	
4 0話	新：旅の始まり	245
4 1話	目撃情報	252
4 2話	ポケモン会談	258
4 3話	メロエッタ	266
4 4話	幻のポケモン	271

45話	ヴィラン	276
46話	ポケモンが好き	282
47話	開戦	290
48話	ナイトメアシフト	296
49話	悪夢姫	303
50話	ダグトリオ山脈での出来事	310
51話	四匹目	316
51話	3つ目のジム戦	321
52話	お父さん	330
幕間1	『レジアイスとの戦い』	336
幕間2	『レジアイスとの戦い』	341
幕間3	『レジアイスとの戦い』	346
5	ゴウー団との決戦	
53話	ゴウー団掃討戦	349
54話	炸裂!! Zワザ	353
55話	V S ラテイオス	359
56話	漂流	365
57話	奈菜とナナ	373
58話	脱出	379
59話	現状とこれから	389
60話	スピアーカップ	394
61話	V S メガスピアー	401
62話	怒り	412
63話	V S ヒードラン	421
64話	ヒーロー	430

65話 悪と男とポケモンの御伽噺

6 さらなる高みへ

66話 お招き

67話 完全敗北

68話 弱くて病んで……

69話 Next Stage

70話 ゴウ団の新幹部

71話 再開

72話 博士の元で

73話 別次元の生物

74話 ギラティナというポケモン

75話 四天王アリス

76話 異能力に近い技術

77話 VSナナ

78話 バトルタワー

79話 恐怖のジム戦

80話 波乱の気配

7 VSウルトラビースト

81話 オープニング

82話 UBと海の王子

83話 VSミミッキュ

84話 VSデンジユモク

85話 洞窟探索

86話 ほろびのうた

87話 7つ目のジム戦

438

442

449

455

461

468

474

480

487

495

503

510

519

528

539

548

556

565

575

585

593

602

615

1 旅の始まり プロローグ

木漏れ日が差し込む病室。そこは怖いくらい静かで、時間が止まって
いるかのような感じがした。ベッドには魚のように無表情な彼女。
体はやせ細っていて、肌は怖いくらい白く、手で触れると氷のように
冷たくて生きてないというが嫌でも分かる。彼女は既に死んでいる
のだ。不治の病だった。長くない命だというのは分かっていた。し
かし二十二という若さで死ぬのはあんまりだ。

彼女とは八歳になる頃から一緒に過ごしていた自分でも、長い付き
合いだっただと思う。僕は彼女が好きだった。彼女も僕が好きだった。
病気が治ったら結婚しようという約束もしていた。だけど、病気が治
ることはなかった。彼女はあまりに呆気なく死んだ。そして僕はま
だ彼女が死んだという現実を受け止められずにいた。

不思議なことに悲しいとかは一切思わない。あるのは虚無。感情
は彼女が死ぬわけがないと現実を否定する。しかし理性は現実を受
け止めろという。その二つの感情がぶつかって心は虚無に包まれる。

改めて彼女の亡骸を見る。飾り気のない病院服。それはあまりに
彼女に似合わない。彼女の生前はロリータ服を着るのが好きだった。
少し特殊な趣味とは思いますが、事実である。もつともここ半年は病状が
悪化して、外に出ることも出来ず、一日中病院服を着ることを強制さ
せられていた。そのため入院してからはずっとゲームをしていた記
憶しかない。

彼女との思い出を振り返りながら髪を指の腹で触る。死んだ彼女
の髪が砂時計の砂のようにサラサラと落ちる。彼女の髪は世にも珍
しい銀髪。しかし、それがとても美しく僕も好きだった。彼女も自
分の髪を誇りだと言っていた。そういえば目の色も美しかった。赤
薔薇のような赤い目だ。もつとも彼女は自分の目の色は気に入って
いなかったが。

これから彼女の家族来て、あまり言いたくはないが彼女の死後の処

理をするだろう。ここにいても僕は邪魔だから、そろそろ帰るべきだろう。そう思い、席を立とうとした時だった。机の上に置かれた物に少だけ目を奪われた。彼女が死ぬ直前まで遊んでいた携帯型ゲーム機。たしかプレイしていたゲームはポケットモンスターウルトラサン。通称ポケモンUSだ。僕もポケモンは小学生の頃に少だけやっていたからゲームについては分かる。そういえば彼女は結局どこまでポケモンを進めたのだろうか。彼女の生きた証を知りたい。そんな想いでゲーム機に触れて、ポケモンを開いてみる。

彼女のデータはポケモンリーグの目の前でセーブされていた。ポケモンはどれも六十レベル前後。そういえば彼女はチャンピオンに勝って殿堂入りしたいって言っていたな。もつともその夢も叶わない。でも彼女の代わりに僕がクリアしたい。そして彼女の夢は叶ったことになるだろうか。そんなことを思いながらポケモンを始める。そうすれば彼女も心残りがなしで逝けるだろうか。しかし、やってる途中に何故か物凄い睡魔に襲われて……寝てはいけないと必死に抗ってプレイしていたが気づいたら僕は寝落ちをしていた。

「……あれ？」

目を覚ますと不思議なことに森の中にいた。妙に体が軽い。ここはどこだろうか。辺りを見回すと小さな水溜りがあるのに気付いた。そして水溜りに写る自分の姿を見て驚愕した。

「えっ？」

そこには『人間』の姿はなかった。

あるのはポケモンの姿。

たしか名前は——ダークライ。

1話 ポケモンになつてから

ダークライ。

あんこくポケモンと言われている、人々を眠らせる力を持っている。また悪夢を見せて自分の身を守る幻のポケモン。一説によると悪夢を見せるときダークライに悪気はないらしい。

頭を全力回転させて『ダークライ』というポケモンについて思い出すが、それしか思い出せない。そしてもつと真面目にポケモンをやっておけばよかったと後悔する。たしかポケモンには種族値とか個体値というものが存在していたはずだ。しかし僕には分からない。

僕もポケモンをやつてはいたが、ガチではない。だが、殿堂入りをして終わらせるくらいにはやつていた人間だ。正直に言うとポケモンは小学生くらいの頃にプラチナをやつていただけ。タイプ相性も分かるが、それだけ。イツシュ地方以降の彼女のやつてるウルトラサンを横目に見ていただけだから、分かるのと分からないのがあるし、シンオウ地方以前のポケモンだって記憶は曖昧だ。しかし、ダークライというポケモンがとんでもないレアポケモンだということも分かる。基本的に幻のポケモンと伝説のポケモンは希少価値が高いというのも知っている。

もつともこれが夢の可能性もある。だけど、これは夢ではないと本能が訴えかけている。もつというなら異世界転生に近いナニカだ。だから僕も目が覚めるまではここが現実だと思つて過ごすつもりだ。しかし過ごすと言つても人目につかないようにひっそりと暮らすだろうが。

正直言つてポケモンバトルとか御免だし、ダークライみたいな幻のポケモンがいると分かったら大騒ぎになる。だから身を隠しながらひっそりと暮らすのだ。そう思いながら慣れない体を動かしながら森を彷徨う。そうすると背後から何者かに話しかけられた。

「おい、お前！ 見ない顔だなー！」

誰だ？

そう思いながら声をする方を向く。すると、そこには白い体に黄色

い頬をしたりリスがいた。たしか名前はパチリスだ。そして考えてみたら僕はポケモンだ。つまりポケモンの言葉が分かるのか。

「なんてポケモンだ？」

「……ダークライ」

「聞いたことないな。しかし、どうしてここにいる？」

「気付いたらここにいた」

「ここはフシギバナ様の縄張りだ！ 用事がないなら出ていけ！」

なるほど。野生の世界だから縄張りというものがあるのか。もつとも関わるのも面倒だし大人しく従うが。

「分かった。しかし僕はどこに行けばいい？」

「ここから右に真っ直ぐ行くと川がある。その川を渡った先少し前までオーロットの縄張りだったが、そのオーロットもトレーナーに捕まり、今は誰の物でもない。だから、そこに行け」

「トレーナー？」

もちろん意味は分かる。おそらくポケモントレーナーのことだろう。しかしここでポケモントレーナーというのはどういうものなのを確認しておきたい。

「トレーナーを知らないでよく生きてこられたな……トレーナーというのはポケモンを捕まえて戦わせてくれる人間のことだ。しかし悪い奴らではない。多くのポケモンは戦いが好きだし、戦う場所を求めている」

「ならパチリスはどうしてトレーナーに捕まらないんだ？」

「たしかにトレーナーに仕えるのはポケモンにとって最大の幸せと言える。しかしトレーナーに仕えるということは、そいつと死ぬ時まで一緒に過ごすことになる。だから俺は俺が仕えるに相応しいトレーナーが来るのを待っているんだ」

「なるほど……」

考えてみたら、それもそうか。トレーナーなら誰でも良いというわけじゃない。ポケモンにだってトレーナーを選ぶ権利くらいあるよな。

「基本的に俺たちは人間が好きだ。だから相当な荒くれものじゃない

ポケモンでもない限りポケモンを持っていない人間は襲わない。人間とポケモンは心地良い共存関係を築いているからな。お前も間違っても人に襲い掛かるんじゃないぞ。そして困っている人間がいたら手を貸してやれよ」

そうして僕はパチリスと別れた。ポケモンと人間の関係。もつと殺伐としているものだと思っていたけど、違うものみたいだな。まだ分からないことだらけだ。でも、やっぱりバトルはしたくない。痛そうだし……。というより技を僕は出せるのだろうか。どうやって技を出すのかまったく分からない。試しに技を出してみたいが、僕はダークライ。ダークライは比較的強いポケモンだと記憶している。下手したら技の威力が高すぎて大惨事になるかもしれない。だからやめておいた方が無難だろう。

「……お願い！」

歩いて川に出るとモンスターボールをパチリスに投げる少女がいた。先程のパチリスとは別個体だろう。そのパチリスは簡単にボールを尻尾で弾いて、森の奥深くへと逃げていった。そして少女は泣き崩れる。そんな少女に近くにいたコラツタが心配そうに寄り添う。

「やっぱり、私にはトレーナーの素質なんてないわ……。お兄ちゃんみたいになれないわ」

僕は少女を見て驚愕した。そして涙が流れた。なぜなら少女の姿が……

「ナナはダメな子なんです……。学校でも成績最下位……」

さらに少女が一人称で自分の名前を言う。ナナという僕の彼女と同じ名前。死んだ僕の彼女の名前。そして、なによりも彼女と瓜二つの容姿。彼女が誇りに思っていた雪のように白い髪。それになにより赤色の目。年齢は少し若いけど……。間違いなく彼女だ。僕の好きだったあの人だ。僕はのんびりと彼女に近づく。

「な、なにー！」

僕の姿を見て彼女が怯える。近くにいたコラツタが唸る。少しうるさいな。でも傷付けるのか可哀想だ。不思議なことにどうすればいいか分かる。僕は真っ黒な手をかざしてコラツタを眠らせる。僕

はダークライ。眠らせるのは得意だ……

「……ナナ」

「ポケモンが喋った？」

言葉が通じたことに少し驚く。いや、考えてみたら幻のポケモンだし、そのくらしいの不思議能力はあるのか。特にダークライはアニメの映画でも喋っていた気がする。しかし言葉がなんか変な気がする。少しカタコトな気がする。まあいい。

「オマエの……ユメを……イエ」

「お、お兄ちゃんみたいなた立派なポケモントレーナーになること！ポケモンリーグを優勝してチャンピオンになってお兄ちゃんを超えたい！」

彼女と同じ夢。ポケモンリーグを優勝してチャンピオンになる。彼女の手助けをしたい。彼女をチャンピオンにしたい。心の底からそう思った。あの時に果たせなかった夢。今度こそ果たしたい。彼女の夢は僕の夢だ。

「ソコの……ボール……」

「え？」

「ワレをつかまエロ……オマエの……ポケモンに……なつてやる！」
「う、うん！」

優しく彼女がモンスターボールで僕に触れる。そしてボールに吸い込まれる。ちよつとでも抵抗すれば簡単に出られそうだ。でも抵抗はしない。僕は彼女のポケモンになって、彼女の夢を叶えたい。彼女が果たせなかった夢を次こそは果たしたい。強くそう思ったのだ。

僕はその日、彼女のポケモンになり彼女をチャンピオンにすると決めたのだった。

2話 僕のトレーナー

「ナ、ナナさん！……どこでそのポケモンを……」

ナナのポケモンになってから小さな村に連れられた。彼女の話だと今日は初めてのポケモンゲットだったらしい。そしてゲットしたポケモンを学校の先生に見せて、ちよつとした余興の後に正式なトレーナーとなり、旅に出るみたいだ。ちなみに彼女の持っていたコラッタは借りたポケモンで彼女のポケモンではないとか。

ちなみに僕は現在ボールの中にいる。モンスターボールは入ってみると狭いなんてことはなかった。広さ的には十平米くらいはあるだろうか。少なくとも多少の運動なら出来るくらいだ。外の景色も見ることが出来る。モンスターボールの赤い部分がクリア素材になっていて、そこから見る事が出来るのだ。そのためボールに布などを被せられたら外は見れなくなるだろうが。もちろん外の音も聞こえる。

「どこって……エラニ森です……」

「あなた、このポケモンがなんだか分かっているんですか？」

「いいえ……ただ、このポケモンが寄ってきて、自分からボールに入っ
て……」

そして学校の先生は大騒ぎだ。さすがにダークライは僕の思っていた通り珍しいポケモンに分類されるらしい。もっとも、問題はそこではないみたいだが……

「このポケモンはダークライと言います。個体の目撃数が極端に少なく、世の中では幻のポケモンと呼ばれています。それこそ何人ものトレーナーが喉から手が出るほど欲しがる超が付くレアポケモン。下手したら悪い大人がダークライ目当てに寄ってくるかもしれませんね」

「で、でも、この子は私が初めて捕まえたポケモンです！ 私はこの子と旅がしたいですー！」

「……問題はそこじゃないのです」

「えっ？」

「ダークライ。その特性はナイトメアと言われていて、周りの人やポケモンに悪夢を見せるのです。ダークライと旅をするという事は眠りにつく度に悪夢に苛まれます。特にイツシユ地方であったストレンジャーハウス的事件は……つと、少し話がズレましたね。ともかく、あなたはそれに耐えられるのですか?」

先生が指摘する問題点。それは僕の特性だ。ダークライの特性が一番の問題なのだ。

「それは……」

「出来ないなら逃がしなさい。その方があなたにとつてもダークライにとつても良いでしょうね」

少しだけ間が空く。それからナナが小さな口を開いて恐る恐る発言した。目上の人に反発する。それがどんなに勇気のいることか。それでも彼女は、その発言にどんな責任が伴うのか彼女は小さきながらに理解した上で口を開いた。

「耐えられます! この子と一緒に耐えられます! そして乗り越えられます!」

「……いいでしょう。今の発言を忘れないでください。ポケモンと一緒に乗り越えるという考えはトレーナーとしての大事な考え方の一つですから」

「それじゃあ!」

「はい。ナナがダークライを連れて旅をするということ。そしてトレーナーになることを認めましょう」

「ありがとうございます!」

「それとこれを持っていきなさい」

そういうと先生は三日月の形をした緑色の羽を取り出した。とても綺麗な羽だ。これはなんなのだろうか? トレーナーであることを証明する免許証みたいなものだろうか?

「これは?」

『みかづきのはね』と言う道具です。一説によるとクレセリアというポケモンと関係があるようですが、詳しいことは不明。その羽は悪夢を払うと言われています。少しは効果があるでしょう」

「みかづきのはね……そんな貴重そうなものを本当にいいんですか？」

「昔に知人に貰ったものです。そういうこと言うなら別に渡さなくてもいいんですよ？」

「もらいます！ もらいます！ ありがとうございます！」

みかづきのはね。なんとなくだけと思いついてきた。ゲームでダークライの悪夢を払った道具。もつというならダークライの悪夢を払うだけの道具だ。僕の悪夢への効果は約束されているようなものだろう。

「それとポケモン図鑑です。出会ったポケモンの情報が全て保存されるメモリー機能と調べたいポケモンの名前を入れて、調べる辞書機能の二つがあります」

「はい」

ポケモン図鑑ってそんなハイテクだったかと頭を悩ませる。それに図鑑は博士から貰うもので、学校の先生から貰うものではないはずだ。そもそも僕の知っているポケモンの世界では学校なんてなかった。もしかしたら僕がゲームでやっていたポケモンとは大きく違うのかもしれない……

普段なら詳しく問いかけたいが、ポケモンがそんなことに興味を持つのはあまりに不自然だ。もつというならポケモンらしくない。それどころか気味が悪いと言われるのがオチ。つまり僕から聞くことは出来ない。

「先生！ いま帰ったぞー！」

そんなことを考えていた時に扉が開いて、二人の男の子が入ってくる。一人は赤毛で黄色のTシャツに膝までしか丈のないズボンを着た男。もう一人は耳が隠れるくらいまで長い黒髪に白いロングコートを見事に着こなした少しカッコイイ少年だ。

「おかえりなさい。ちゃんとポケモンは捕獲出来ました」

その先生の声に対して白いロングコートの方の男の子が丁寧に答える。

「はい。俺はコソクムシ。ボルノはフシギダネをゲットしました。そ

れとお借りしたコラツタをお返ししますね。先生」

そう言つて二人はポケモンを見せる。フシギダネは背中の子の大きな緑色の種が特徴的で最初に選ぶ三匹として有名だ。そしてコソクムシと彼が言つたポケモン。見た目はワラジムシみたいだが、とても小さくて弱そうだ。もつとも初めて見るポケモンで詳しくは知らないが。

「そういえばナナはどんなポケモンを捕まえたんが？」

「私は……」

ナナが僕を出そうとする。そんな時に再び扉が開いた。今後は女の子が入ってきた。茶髪で白いブラウスに緑色のスカートを履いた少女だ。

「ナナちゃんは成績最下位よ？ ポケモンを捕まえられなかつたつてオチじゃない？」

そして少し性格に棘があるようだ。

「そんなことないわ！」

「ええ！ うそ！ ナナちゃん絶対にポケモンをゲット出来ないと思つてナナちゃんの分のポケモンまで捕まえたのに……」

前言撤回。どうやらツンデレに近いなにかのようだ。もつとも、その表現で合つてるか不明だが。それから、女の子は何事もなかったかのようにテンションを上げてナナに聞く。

「どんなポケモン捕まえたの？ やっぱりパチリス？」

「私が捕まえたのはこの子だよ」

そして僕がボールから出された。Tシャツの子は興奮して、白いロングコートの子は驚き、女の子は目をキラキラさせながら見ていた。「ナナちゃん！ すごくカッコイイポケモンじゃん！ 名前はなんて言うの？」

「ダークライ」

「ふーん。ノエルは分かる？」

「ああ……ダークライは幻のポケモンと言われるくらい珍しくて、人々に悪夢を見せるんだ。しかしダークライに悪気はない。近くにいる者に悪夢を見せてしまう特性なんだ。間違いなく初心者向けの

ポケモンではないと思うよ」

「あ、悪夢！ ナナは大丈夫なのかよ？」

随分と騒がしくなってきた。白いロングコートの男の子はノエルと言うのか。先程の言葉遣いにダークライへの知識。おそらく優等生だろう。

「一応、先生からみかづきのはねを貰ったから大丈夫だと思う……」

「ふーん。難しくてオラには分からん！」

「みかづきのはねは悪夢を払う道具です。はたしてどこまで効果があるか……」

「まあーでもナナちゃんが選んだポケモン。私たちが口だしすることじゃないわ」

「それもそうだが……」

「ナナちゃんは成績最下位だけど、いざって時はしつかりやる子だから大丈夫だよ」

「それもそうだな」

「ていうか、これからバトルでしょ？ 頑張ってダークライ倒す方法考えないとなー」

……ん？ バトル？ まさかこれからポケモンバトルするの？

「ダークライ、言ったでしょ。ちよっとした余興があるって」

3話 初めてのポケモンバトル

ここはデトワール地方のエラニの村という場所らしい。この村は地図に載らないくらい辺境にある場所で小さいが、多くの強豪ポケモントレーナーの出身地だったりして、知名度は高い。また、ここではアルナノ博士が先生を兼任して子供達にポケモンのことを教えている学校がある。そして、その生徒の一人が僕のトレーナーでもあるナナだ。

この生徒はナナを含めて四人。白いロングコートを着ているノエル、Tシャツに短パンのボルノ、茶髪で明るいツンデレのメア。そして世間では十歳になるとポケモンを持つことが許可されるが、この村では十歳にポケモンを持たせるのは危険だということで十二歳から。

学生が全員十二歳になると、その二週間後にポケモンを捕まえて、余興として捕まえたポケモン同士をトーナメント形式で学生同士で戦わせた後に正式なトレーナーになる。

そして現在、ポケモンバトルが始まってとじていた。

「コソクムシ。アクアジェットー！」

コソクムシと呼ばれたポケモンがコソコソとう素早く、動き水を纏う。それから目にも止まらぬ速さでフシギダネへと突っ込んでいった。

「フシギダネは攻撃をそのまま受けて、返しのつるのムチー！」

しかしフシギダネはものともせず受け止めて、つるのむちを放つ。バチンと大きな音が鳴ってコソクムシが吹き飛ばされた。その一撃でコソクムシはひんしになり、ボルノの勝ちが決まる。

「やっぱりコソクムシは扱いが難しい。あの素早い動きに、低い攻撃力。それをどう生かすかトレーナーの腕がとても問われる。もつと勉強しないと。とりあえずコソクムシはお疲れ様」

ノエルがコソクムシを抱え上げて、元気の欠片と傷薬を与えて回復をしていく。

「いやあ良い勝負だった」

「ああ。また頼むよ。ボルノ」

それから二人は握手をした。そして遂に僕の番だ。バトルは怖い。どうにかして逃げたい。そもそも技ってどうやって出すんだよ。

「ダークライ！ 頑張ろうね！」

しかしナナの声を聞いて勝たなきゃと思う。ここで逃げるわけにはいかないんだ。なんとしてでも僕は勝たないといけないんだ！

「それではナナVSメルの試合を始める。両者はポケモンを！」

「お願い！ ダークライ！」

「任せたわよ！ ハスボー！」

相手のポケモンはハスボーか。頭に乗った皿みたいなおおきな葉っぱが特徴的なポケモン。さて、どうするか。

「バトルスタート！」

「はっばカッター！」

「避けてダークライ！」

メルは開始の合図と同時に攻撃を仕掛けてくる。はっばが宙を舞い、文字通りカッターのように体を切る。避けようにも間に合わない。血は出ないが、軽く鋭い痛みを感じる。しかし、そこまで傷口は深くなさそうだ。まだまだ余裕で戦えるな。

「……ダークライ。あやしいかぜ！」

「……？」

あやしいかぜってどうやって出すんだよ！ いや、いきなり言われなくても分かんねえから！

とりあえず風だよな。つまり風を起こせばいいんだよな。うん。それでどうやって風を起こせばいいんだよ！

「だから、あやしいかぜよ！ あやしいかぜ！」

「こないならこっちからいくわ！ ハスボー！ はっばカッター！」

やばいな。とりあえずやってみるしかねえか。

そう思いながら風を起こすイメージで手を振り下ろした。すると紫色の突風が巻き起こった。突風は飛んでくる葉っぱを全て落として、ハスボーを吹き飛ばした。

「もしかして、このダークライって……」

それからナナが少しだけ考え込む。一体なにを考えているのか。しかし、そんなナナにお構いなくバトルは進行していく。

「ハスツッ！（マスター！ 指示を！）」

ハスボーが起き上がって鳴く。同じポケモンだからなのか喋っていることが分かる。

「そうね。近づいてゼロ距離でみずでっぼう！」

「ハスツツ！（了解！）」

「ダークライ。近づくまえにさつきと同じあやしいかぜでハスボーを倒して」

ナナの方を見て頷き、再びあやしいかぜを起こす。技の使い方は分かった。手を振るうと再び紫色の風が起こり、ハスボーに襲い掛かる。しかしハスボーは迷うことなく、そのままこちらに突っ込んできた。

「ハスツ（マスターの命令はゼロ距離でみずでっぼう。吹き飛ばされるわけにはいかないんでね）」

なんとという信念だ。僕は再び手を振ってあやしいかぜを起こす。しかしハスボーは怯むことなく、こちらへと向かってくる。

「ダークライ！ 落ち着いて！」

「……」

「みずでっぼうを撃つときに一瞬だけ隙が生まれるはず。その時に手で払い飛ばしなさい」

そんなことが出来るのか？ いや、今はナナを信じてやってみるしかない。それに手で払うだけならワザじゃないし、僕にも出来るからな。

「ハスツツツツ（食らいやがれ）」

「今よ！ ダークライ！」

ゼロ距離になると同時に手でハスボーを払おうとする。しかし相手の方が一枚上手だった。結果から言うと払うのは失敗に終わった。

「ハスボー。なきごえ！」

「ハスツツツツ」

「しまった！ ダークライ。すぐに後ろに下がって距離を取って！」

ナナの指示に従おうとするが間に合わない。ハスボーの意味を持たない鳴き声。それが僕に襲い掛かる。あまりに甲高い声は頭が痛くなり、攻撃しようとする意志すら奪う。それでも役目を果たそうと手でハスボーを払うが、上手く力が入らず大した威力にならない。ハスボーは吹き飛ばされないように踏ん張って、僕との距離を保つてそのままみずでつぼうを撃つ。

「ダークライ！」

ゼロ距離でのみずでつぼうは想像を絶する威力を誇った。水の勢いに吹き飛ばされて地面に叩きつけられる。意識が朦朧とする。最後の力を振り絞り、なんとか立ち上がる。ハスボーを倒す。それだけでいいんだ。

「ダークライ！ あやしいかぜで勝負を決めて！」

「ハスボーはみずでつぼうで迎え撃つて！」

みずでつぼうが飛んでくる。死ぬ気で手を振り上げて、風を起こす。紫色の風はみずでつぼうを巻き込んで、ハスボーを吹き飛ばす。そしてハスボーは近くにあった木に叩きつけられた。幸いにも起き上がる素振りはない。

「ハスボー！」

メルがハスボーに駆け寄って元気の欠片と傷薬で回復させる。ハスボーはすぐに目を覚まして、申し訳なきように鳴いた。

「ハスウ……（申し訳ございません……）」

「いいのよ。ハスボー」

そうしてハスボーはボールへと戻っていく。

「ハスボー。戦闘不能！ 勝者ナナ！」

「やったね！ ダークライ！」

それからナナが僕に駆け寄って抱きついてくる。女の子特有の甘い匂いが鼻腔をくすぐるが、それどころではない。

「あ、ごめん！ まずは回復だよね」

ナナは僕の傷に気付くとすぐに傷薬を使う。傷薬の効きは強く、すぐに体が楽になってきた。傷薬の効き目は想像以上に強いようだ。

しかし、これがポケモンバトルか。多少の痛みはあるが耐えられな

いものではない。ただ楽しいものではないな。でもナナの喜ぶ顔が見れるのは悪くないな。

「……先生。次のバトルは辞退してもいいですか？」

そんな矢先にナナが僕に抱きつきながら先生に尋ねた。僕は勝つた。トーナメント形式だから、ここから決勝のはずだ。それなのに辞退？

「うちのダークライ。今の勝負でかなり疲れているみたいですから」「そうですか？」

「なるべくポケモンには無理をさせたくないんです。特に今のダークライの動きを見てみると技の出し方も知らないようでした。そのことから、このダークライは生まれて間もない赤子に近い状態と考えられます。もつと言うならバトルは初めてでかなりの緊張もあつたと思うんです」

「良いでしょう。しかし相変わらず凄い観察眼ですね。もつとも成績最下位の事実は変わりませんが」

そういえばナナは成績最下位と言っていたな。今の感じだと特に悪い感じでもなかったが、なぜ成績最下位なのだろうか？

「褒めてくださるなら成績を上げてくれても良いですよ？」

「ええ。さすがにあればトレーナーとしては最悪ですから」

僕はナナに向かって頭を傾げる。ナナのどこが問題なのかと問いかけるように。それにナナは察して答える。

「実は運動音痴なの。それこそポケモンにボールを当てられないくらいに」

ああ……そういえば初めて会った時にパチリスに遊ばれていたな。簡単に尻尾でボールが弾かれていたな。でも、それだけで最下位までなるものなのか？

「ダークライ。ナナさんは成績最下位ですが悪いトレーナーではありませんよ。むしろ同年齢に限定したら、相当な実力になるでしょう。ただ、この村のトレーナーって優等生揃いなんですよ。もつとも私の教育が良いというのもありますけど」

「とりあえず先生の言う通り私を信じて。絶対にダークライに後悔は

させないから」

そうしてエラニ村の余興でナナは準優勝を収めた。もつともナナの辞退という形で幕を閉じたので、少し盛り上がりには欠けたが。他の三人はあれから、すぐに旅に出た。しかしナナだけは僕の容態を見て旅立ちを明日にした。初めてのポケモンバトルということもあり、かなり疲れていたから旅立ちが明日になるのは個人的にもありがたい。

そして、その夜。僕はナナの部屋にいた。ナナは僕をボールから出して畏まりまった雰囲気僕の方を見る。

「……ダークライ」

「ナンダ？」

「どうして私を選んだの？」

彼女からの真剣な問いかけ。適当にぼやかすことは出来る。しかし、こればかりは真面目に答えなければならぬ気がした。

「……オレの……タイセツな人に……ニテイタカラ」

「そつか。どんな人だったの？」

「君とオナジ……綺麗な銀髪に……美シイ深紅の目……」

「なるほど……赤子のダークライ。それなのに何故か大切な人が出来るくらい生きている。不思議な存在。幻のポケモンってそういうものなのかな？」

その時に初めて気付いた。話しながら自分が泣いていたことに。今思えば彼女が死んでから涙を流したのは初めてだったかもしれない。泣いたことで強く彼女が死んだということを実感する。ナナは彼女と同じ容姿で同じ名前だ。しかし彼女とは違う。あくまで別人なのだ。ナナはナナであり、彼女ではないのだ。

「ダークライ。分かっているとと思うけど私は貴方の大切な人とは違う。私はエラニの村で生まれたナナ」

分かっている。そんなことは分かっている。それでも僕は君に彼女を重ねてしまう。あまりに彼女に似ているから……

「そして今の貴方は私のダークライ。私の大切なポケモンで私にとって必要な存在なのよ。でも、私も貴方の大切な人と同じくらい貴方の

ことを大切に思っているし大事にする。それだけは絶対に約束する。私と貴方の二人で……どんな壁だって乗り越えていこう？　だからこれからも私に力を貸して。ダークライ」

ああ、そうだ。

彼女はナナとは違う。それでもナナは同じくらい僕を大切にしてくれて、寄り添ってくれるんだ。彼女が僕の心の隙間を埋めてくれる存在。これから僕と一緒に生きてくれる存在なんだ。

ずっとトレーナーとポケモンは主従関係にあると思っていた。しかしそれは違うんだ。ポケモンとトレーナーは対等な関係なんだ。ポケモンがトレーナーを必要として、トレーナーがポケモンを必要とする。だから一緒にいるんだ。そこには上も下も存在しない、

「ナナ……僕のトレーナーになってくれてありがとう」

「こちらこそ。私のポケモンになってくれてありがとうね。そして絶対にポケモンリーグを優勝してチャンピオンになろうね！」

彼女とナナは別人だ。それでも彼女の無念とナナの夢は同じだった。そして僕は彼女の夢を僕の力で叶えさせてあげたいと強く思った。

4話　そして旅に出る

夜が明けた。そしてナナが家族や先生に挨拶を済ませて旅に出る。ナナの衣装は黒い水玉のワンピースに黒一色のシヨルダーバッグという軽装。バッグの中にはモンスターボールに傷薬などの道具。それに寝袋や地図といった最低限の荷物だけ。今はまだ少ない荷物だけど旅をしていくうちにパンパンになっていくのだろう。ちなみに僕はボールから出て、彼女と一緒に隣を歩いている。

「ダークライ。私達はこれからエラニの森を抜けて、ハクガ山を登ってハクガシティに行つてそこでジム戦をするの」

「……ウム」

「でもエラニの森の野生のポケモンは弱くはない。だから最大限の注意をしてね」

そんな話をしながら歩く。整っていない獣道を掻き分けながら進む。エラニの村は地図にすら乗っていないド田舎。道が整っていないのは当然と言えるだろう。

「あとポケモンもあと一体くらい欲しいところね」

「ドンナ……ポケモンを……ツカマエル？」

「そうね……出来れば癖が強くない扱いやすいポケモンがいいわね」

癖が強くないポケモンか。恐らくビードルとかは覚える技が少なくて扱いにくい部類になるのだろう。そうするとフシギダネみたいな最初に選ぶポケモンになるのだろうか？

「まあ急ぎでもないし、ポケモンは見つけたら捕まえるって感じでいいかな」

そんな時だった。背後から物音がした。ナナもそれに気付いて、すぐに構える。

後ろから出てきたのはスピアーだった。スピアーを見てナナは顔色を青くした。それから僕に叫んで一気に走る。

「スピッ！（いざ尋常に勝負！）」

「ダークライ！　逃げるよ！」

「タタカワナイノカ？」

「無理よ！ スピアーには勝てない！」

「ヤツテミナイト分カラナイダロ！」

スピアーは序盤のポケモン。そして僕は幻のポケモン。負ける道理はないはずだ。

「……分かったわよ。ダークライ！ あやしいかぜ！」

そうとうとナナは足を止めて振り返り、指示をだす。どうやらナナも戦う気らしい。

僕も言われた通りに手を振ってあやしいかぜを起こす。しかしスピアーにはビクともしない。スピアーは加速して、そのまま突進してくる。

「ダークライ！ 横に動いて、後ろからあやしいかぜを撃つて！」

指示通り横に体を動かすが、スピアーはすぐに反応して再びこちらに向かってくる。

「正面からのあやしいかぜは通用しない。恐らくそれは来ると分かっててスピアーが風を受け流す態勢を保ってるから。だから背後からあやしいかぜを撃てば、受け流せずにダメージが入るはず！」

なるほど。そういうことか。しかし問題はどうやって後ろに回るか。このスピアーはあまりに早くて隙がない。それどころか早くなってないか？ 再びギリギリでスピアーの一撃を避ける。そしてスピアーの方を見ようとした時だった。スピアーは既に僕の目の前にいた。

「スピッ！ (勝負あり！)」

「グッ！」

腹に今まで体験したことのない痛みが走る。痛みのあまり絶叫しそうになるが、なんとか堪える。それから吹き飛ばされて木に叩きつけられて背中に強い衝撃が襲う。起き上がろうとするが体は言うことを聞かずに痙攣する。まずい……ここで死ぬのか？

「あのスピアー。動きながらこうそくいどうをしたんだわ。それに最期の一撃は恐らくシザークロス……もつと私が早く気付いていれば！」

ナナは僕に駆け寄って、金色の欠片を食べさせる。その欠片を食べ

ると体から力が湧いてきて、再び体が言うことを効くようになった。
「ダークライ。逃げるよ！」

「アア……」

ナナは僕をボールに戻して走る。スピアーは勝ち誇ったように空を舞って踊る。完全にスピアーを舐めていた。まさか、あそこまで強いとは……

「この森のスピアーは狡猾なことで有名。それにあなたは悪タイプ。虫タイプの攻撃は致命傷になる……そんなことは分かっていた。ほんとにごめんなさい！」

ナナはボール越しに走りながら必死に謝っていた。違う。これは完全に僕のせいだ。ナナは最初は逃げようと言っていた。きちんと相手との力量を見切っていたんだ。それなのに僕が無茶を言っ……

それにナナの指示は完璧だった。ただ僕がナナの指示通りに動けなかった。指示通りに後ろからあやしいかぜを撃てれば、勝っていた可能性もあった。無理な戦いと分かっていたながら最後まで勝ちを諦めていなかった。それなのに……

「ダークライ。あなたは悪くないわ。最終的に戦おうと判断したのも私。あなたのせいじゃないわ」

違う！ 違う！ 違う！

ナナは悪くない。悪いのは全て僕だ！ 僕が完璧にナナの指示通りに動けていたら勝っていた！ 悪いのは僕なんだ！

そう言おうとボールの中で暴れる。それにナナが気付いたのか、足を止めて僕をボールから出す。

「……ダークライ？ 傷は大丈夫なの？」

「ナナは……ワルクナイ！ 全テ……僕の……」

「……分かったわ。でも私の指示が的確じゃなかったのも事実。これは二人の敗北。どっちかが悪いんじゃない。それでどう？」

「ソナ……」

「……ダークライ。次こそはあのスピアーに勝つわよ。それまでエラニの森を出ない。それで今回の件はなかったことにする。どう？」

「……勝テル……ノカ?」

「私と貴方の二人なら絶対だね」

そういうとナナはペンと地図を出して、ルートを書き換える。エラニの森を真つ直ぐ抜けるルートから、少しズレた場所に丸を付ける。「ここは『ヤメノ砦』という廃墟。今じゃ誰もいなくてポケモンの溜まり場よ」

「ウム……」

「ここで少し修行しましょう。そうしないとスピアーには勝てないわ」

修行か。恐らくレベル上げというやつだろう。つまりひたすらポケモンを倒すのか。話しながらナナはスピアーについて考察したことを話す。

「恐らくスピアーのシザークロスはちよつとやそつとの修行じゃ、どうやっても耐えることはできないわ」

「……」

「だから一撃も食らってはいけない。こうそくいどうをされたら反応するのは至難の業になる。だからこうそくいどうをされる前に倒す。簡単に言うなら短期決戦ね」

「ドウスレバイイ?」

「あやしいかぜは広範囲で牽制には良い技。でも威力が足りないわ。だから高威力の技を覚えて、それをスピアーより先に叩き込むの」

高威力の技か。どうやってそれを覚えるか……

「基本的にポケモンは四通りの技の覚え方があるの」

「ウム」

「一つ目は自然と覚える技。二つ目は修行することで覚える技、三つ目は人から教わる技」

「四つ目ハ?」

「なんらかの事情で本来なら覚えるはずのない技を覚えるパターンよ。少し前にホウエン地方でれいとうパンチを覚えたバシャーモが話題になったことがあるわ」

そういうこともあるのか。それで僕は一体どんな技を……

「本来なら凶鑑で覚えられる技を調べてから、その技の修行をするのが一般的なんだけど、幻のポケモンと伝説のポケモンはデータが無いのよね……貴方なにか分からない？」

「……分カラナイ」

「そう。とりあえず相手はスピアー。そして次のジムは氷タイプ。だから『やきつくす』を覚えてみようか」

「かえんほうしゃデハナイノカ？」

「貴方の見た目的に出来ないと思うの……」

「やきつくすも大シテ変ワラナイ気ガ……」

「それが結構違うのよ。かえんほうしゃは炎を出す器官を持つポケモンに限定されているのに対して、やきつくすは炎を出す器官を持たないポケモン。例えばヤマミラミヤドンカラスが覚える事例が確認されているの。だから貴方でも覚えられる可能性はあるわよ」

ナナが真面目に説明する。明らかに高度な内容なのが分かる。間違はなく十二歳で身に付ける知識ではないだろう。しかも、それだけの知識があっても彼女の学校でも成績は最下位。もしかしたらあの学校は普通の学校じゃなくて、有数のエリートを集めた学校なのではないかと勘ぐってしまう。

「恐らくやきつくすの炎は鬼火に近い感じ。つまり怨念に近いなにかでも代用出来るんじゃないかと私は思うの」

「……ヤツテミル」

なにはともあれ、今はやきつくすを覚えることに集中しよう。ナナが言うのだから間違はなく覚えることができるだろう。

それから色々話を聞きながら歩いてヤメノ砦を目指す。幸いにも野生のポケモンに出会うことはなく、夕方には無事に辿り着くことが出来た。

ヤメノ砦は砦がいくつか密集している場所だった。しかしどれも相当な年月が経っていて、そこら中に苔が生えている。そして周りには様々なポケモンがいた。コロモリにプリンといった森とは一風変わったポケモンが生息していた。そしてナナは近くの砦に入り、寝袋に入ると僕に『おやすみ』と一言だけ言って眠りについた。

そして、その夜に夢を見た。

『コロシテヤル』

その一言だけが聞こえる夢を。

5話 愛されなかったポケモン

「……ダークライ。みかづきのはねはあるよね？」

「ソコに……」

「私ね……今日の夜……悪夢を見たんだ」

「ドンナユメだ？」

「『コロシテヤル』と一言だけ聞こえる夢」

「僕も……同ジ夢を見タ」

「みかづきのはね。昨日、ダークライの傍で寝て悪夢を見なかったことから効果は本物と考えていい。それなのに悪夢を見た。つまり、あれは悪夢ではない可能性が高い……か」

悪夢ではない可能性。

つまりなんらかのメッセージか。そんなことが出来るポケモンがいるのか？

「テレパシーと仮定するか。あれがテレパシーによるメッセージだとすると、こちら辺に私達を好ましく思っていないポケモンがいる」

敵意を持ったポケモン。前に会ったパチリスの話では『相当な荒くれものじゃない限りポケモンは人を襲わない』だった。しかし今回は明らかに『コロシテヤル』という脅迫をされている。つまり人に敵意を持ったイレギュラーな野生ポケモン……

「まあとりあえず今はやきつくすの練習をしましょう。ダークライ」

ナナは鞆からオレンのみを取り出して、そう言った。

それからはひたすら技の練習が始まった。方法はいたってシンプルで地面に置かれたオレンのみを炎で焼く。僕は何度もそれに挑戦して、彼女も傍で見届けていた。

深く息を吸い、炎を出すイメージで吐く。それを何度も繰り返す。しかし炎が出る気配は一切なかった。

そして、そんな僕を見てナナが一言だけ口を開いた。

「そういえばヤミラミは手から炎を出して、やきつくすをしていたわね」

その発言から数秒後に技には遠く及ばないが、小さな炎が出て、焚

火くらいなら出来るようになった。また、今日の昼はナナが釣ってきた川魚を串刺しにして僕が出した炎で焼いて食べた。感想としては少し塩かしようゆが欲しかった。

そして今日の修行は炎が出せるようになったところから進歩はなかった。そして再びの夜。ナナはマイペースなのか、なんの警戒もすることなく機能と同じように眠りについた。

それに対して僕は起きていた。恐らく、またあのポケモンがなにか仕掛けてくるはずだ。それにあのポケモンがなにをするか分からない。ナナに危害を啜えられたら溜まったものではない。僕はナナのポケモンであり、彼女を守る義務があるのだ。

「ムンナア……（殺す……）」

あのピンクの貯金箱みたいなポケモンが犯人か。すぐに攻撃をしようとする。何者だろうがナナを傷付ける奴は許さない！ そう思った時だった。

「ダークライ。待って」

寝ていたはずのナナが起きて僕を静止する。もしかして彼女は狸寝入りをしていたのか！ それに対してピンクのポケモンも驚きを見せる。このポケモンもナナは寝ていると思ってたらしい。

「ムンナアアアアア！（寝ていたんじゃないのか！）」

「あのポケモンはムンナね。夢を食べるポケモン。おそらく私達の夢を食べてからテレパシーでメッセージを送った。だからあの一言だけが記憶に残った……ってところかしら」

「ナナ……ドウスル……」

「とりあえず様子見よ。ここまで人を恨むなんて相当な事情があるはず」

「ムンナアアアア！（うるせええええよ！）」

「ダークライ。避けて！」

ムンナが突進をしてくる。明らかにスピーアーより遅い。僕は余裕を持ってムンナの攻撃を回避する。そして、あやしいかぜで追撃も出来そう。しかしナナから追撃の指示は出ていない。それはやめておこう。

「なんて攻撃力……」

「ソウカ？」

「今のは技でもなんでもない体当たりよ。もしも、このムンナが技としていたいあたりを覚えたら今の三倍の威力は出るわね」

「ゴワツ……」

「ムンナア……（ああ、ならこうしてやる）」

「この技はマズい……でもムンナを攻撃するわけにはいかない……
ダークライ！ これを受け取って！」

そう言つてナナはカゴのみを僕に投げた。僕はそれをキャッチする。それからムンナは欠伸をした。その欠伸と共にナナが倒れこむ。それから僕も強い眠気に襲われた。

「あくび……受けた相手を眠くする技……ダークライ。攻撃だけは……ダメ」

そういつてナナは倒れていびきをかいて眠り始める。こちららも一瞬だけ意識を失ったが、気付いたら目覚める。手元には齧ったカゴのみがあつた。おそらく眠らされたのだろう。しかし幸いにもカゴのみで起きたということか。

「人は裏切るぞ。お前もいつか裏切られる」

ムンナが僕に語りかける。憎悪のこもった目でこちらを見ながら……

「ゴミ個体値！ 真面目な性格だからいらない！ そう言われたことはあるか！」

「……ない」

「いいか。人なんて碌なものではない。ポケモンを道具としてしか見ていないのだ！」

「……お前になにがあつた？」

「知りたきや教えてやろう。俺は……」

くくく

俺の名前はムンナ。

生まれた場所は自転車の上だった。その時には近くにはウルガモスというポケモンがいた。彼が俺の主人だ。彼と一緒に冒険が始め

るんだ。幼い俺はそう思ってた。ワクワクしていた。しかし、そんな期待は一瞬で裏切られた。

『うわ、攻撃がVで性格が真面目。くそゴミじゃん……いらねえ』

そう言われて自転車から投げ捨てられた。それから俺は様々な野生ポケモンに襲われながら日々を必死に生き抜いた。三年が経ってやっと安住の地を見つけた。そんな時に再び人間に会った。草むらで怯える俺にモンスターボールを叩きつけて、捕獲した。そして次の主人はこう言った。

『真面目とかシンクロ要因に使えないから(笑) ゴミポケモン乙。死んどけ』

そう言って、俺はボックスで放置された。周りには様々なポケモンが死んだ目をしてボックスを彷徨っていた。与えられる人口フードを無心で食べる生活。そんな生活が五年続いたある日、俺は見知らぬスーツの男に逃がされた。なんでも『ポケモン愛護管理法違反』だそう。うだ。

今度の地は見知らぬ地。そこにも様々なポケモンがいた。生きるのにも一苦労。しかしやつの思いで、俺は俺が普通に暮らせる場所を見つけた。しかし、そこにお前達が現れた。その時の俺は怒りで狂いそうだったよ。トレーナーと仲良く笑ってるお前の存在が！

く

「なんだよ……それ……」

ムンナの話に思わず啞然とした。あまりに鬼畜過ぎる。そんなことがまかり通つていいのか。僕は怒りに震えそうだった。許せない。いくらなんでも酷すぎる。

「なんで俺ばかり、こんな目に遭うんだよ！俺がなにをしたって……」

「ダークライ。もう攻撃していいわ。あやしいかぜ」

そんな時だった。氷のように冷たい声が響いた。間違ひなくナナの声だ。しかも今まで聞いたことのないくらい冷たい声。

「早くそこのムンナにあやしいかぜを撃ちなさいって言ってるのよ！」

フラフラとした足取りで睨むようにムンナを見ながら僕に指示を出す。僕は首を横に振る。そうするとナナはさらに強い口調で言った。

「ダークライ！ あやしいかぜ！ さっさとムンナに攻撃しなさい！」

その時のナナはいつもの優しいナナと違って、とても怖かった。

6話 彼女の答え

その時のナナの声はあまりに怖かった。俺は不本意ながらナナに従って手を振ってあやしいかぜを撃つ。それがムンナに襲い掛かる。ムンナは苦しそうな悲鳴を上げて、吹き飛ばされてこちらを睨む。

「ムンナアアアア！（人間の奴隷が！）」

再びムンナが突進をしてくる。ナナはそれを見ながら再び冷たい声で言う。

『あやしいかぜで迎え撃て』と。

僕は泣く泣く、それに従う。ムンナは容易く吹き飛ばされる。それと同時にナナはモンスターボールをムンナへと投げつけた。モンスターボールは綺麗な弧を描き、ムンナへと当たる。それこそ運動音痴のナナとは思えないくらい綺麗に……

モンスターボールは数回揺れて止まる。ムンナが出てくる様子はない。恐らく捕獲に成功したのだろう。それから優しくムンナのボールを拾うとナナは僕に軽く告げる。ムンナの人生の背景にあるものを。

「……『三値説』。同種のポケモンの能力値は個体によって差があり、16進数を使って分別することが出来る。そして性格によって伸びやすい能力値が違うという説。最初は説だったのがやがて宗教になった。でも、ある日を境に国際法で信仰すら禁止されている邪教よ」

「……」

「それでも今も一部には熱狂的な信者はいる。恐らく、その信者の被害に遭ったのが、このムンナね。吐き気がする。気分が悪いわ」

「ナンデ……ソナ『ムンナ』をつかマエタ！」

三値教？ そんなのどうでもいい。ムンナは放っておいてあげた方が良かったはずだ。これ以上、人の都合に巻き込むこともないはずだ。それなのにナナは……

「オマエはムンナの話ヲ……」

「あの子の特性はシンクロよ……」

「ダカラ、ドウシタ！」

「嫌でも、あの子の想いが届くのよ。寝ててもシンクロであの子の話が聞こえるのよ！」

「ソレナラ……」

「……あの子。捕まえなかったらどうなると思う？」

「……」

「ずっと人を恨んだまま寂しく死んでいくんだよ。そんなのってあんまりじゃん！ 別に私がムンナを捕まえて、ムンナと旅をして、ムンナにまた人間が好きになってももらえるようにしたっていいじゃん！」

ああ、そうか……

それがナナの答えなのか。ナナは優しいんだ。だからムンナを放っておくことが出来なかったんだ。でもムンナの人に対する恨みは恐らくナナの想像以上に深い。そんなムンナがナナに心を開くのだろうか……

「それに私はこのムンナで勝ちたい。このムンナで勝って、『お前らが捨てたムンナはすごく強いんだぞ！』って見返したい。どんなポケモンだって勝てるんだって証明したい」

それだけ言うとナナはムンナをボールから出す。ムンナはボールから出るとこちらを強く睨んでいた。それに対してナナは笑顔を返して、ムンナを抱きかかえて傷薬を塗る。

「ムンナアアア！（お前なんか信用出来るか！）」

「ムンナ。これから私と一緒に旅をしましょう？」

「ムンナア！（どうせお前も途中で捨てるんだろ！）」

想像通りムンナはナナに対して反抗的な態度を示していた。しかしナナも譲る気は一切ないようだ。

「あなたの技の『あくび』。そしてダークライの特性『ナイトメア』。この相性はすごくいいわ。私はあなたみたいな優秀なポケモンを捨てたりしない」

「ムンナ！（？つけ）」

「それとムンナ。あなたに『とっしん』を覚えてほしいのだけど……」

「ムンナ！（は？） どうして俺がそんなことを……」

「本来ならムンナはとっしんを覚ええない。でも、あなたの動きを見てる限りだと覚えられる気がするのよね……」

「ムンツッ！（だからなんだよ！）」

「それに技でもない体当たりであの威力なのだから、覚えたらとんでもないことになるわ」

マイペースに話を進めるナナ。それはまるでムンナの警戒を解そうとしているようだった。それからナナは優しくムンナに一つの提案をした。

「ねえムンナ。これから私と一緒にポケモンバトルをしない？」

「ンナっ！（誰がそんなことを！）」

「丁度ここにあまいみつがあつてね。これを使うとポケモンの理性を一時的に奪って瞬く間に野生ポケモンが襲ってくるのよね」

そういうとナナはムンナの話聞くことなく迷わず、あまいみつを投げた。その匂いに釣られて物陰からグラエナが現れる。それに対してナナは少し笑っていた。

「グラエナ。悪タイプのポケモンで相性は不利だけど、この子と私なら余裕かしら！」

「グラッ！」

意味を持たない鳴き声を上げて、グラエナがムンナにおそいかつてくる。それを見てナナはすぐにムンナに指示を出す。

「上に飛んで避けてのろいをして！」

「ムンナッ！（どうして俺がその技を覚えてることを知っている！）」

ムンナも自分が痛いのは嫌なのか、ナナの指示通りに上に飛んでのろいをうつ。それによってムンナのスピードが一段階くらい落ちて、鈍足になる。

「あれほどの人への恨みを持つてるなら使えろと思つたわ。続けて地面に降りてあくび！」

「ンナッ！（やればいいんだろ！）」

ムンナがグラエナの前に立って欠伸をする。そうするとグラエナがフラフラしながらガクリと倒れ込んで、いびきをかいて寝始める。

もちろんナナはその隙を見逃さない。

「ムンナ。そのまま勢いをつけて体当たりよ！」

「ムンナアア！（仕方ねえな！）」

すごい勢いでグラエナに突進するムンナ。それによりグラエナは吹き飛ばされる。そして寝たまま気絶してしまう。これは勝負あり。ムンナの勝ちだ。

「……これ改めてみると『やつあたり』かな？」

「ンナツ……？（そういえばグラエナってこんな弱かったか？）」

「それとムンナ。休む暇はないみたいだよ」

ナナがそう言うのと再びグラエナが出てくる。しかも、その数は三匹。恐らくこいつらもあまいみつにつられてやってきたのだろう。さすがにこの数はキツイだろう。恐らくグラエナの攻撃を一撃でも受ければムンナはやられる。つまり一瞬の油断すら許さない状況だ。

「ムンナア……（まだ死にたくねえぞ）」

「大丈夫。ちゃんと私の指示通りに動いてくれたら勝てるわよ」

それから二時間近く戦いは続いた。あまいみつに釣られて無数に現れるグラエナ。一撃でも受ければ負けるという極限状態。それをものともせずナナはムンナに的確な指示を飛ばして、グラエナの攻撃を捌いて、やつあたりで倒していく。最初は渋々従っていたムンナだったが、途中からは大人しくナナの指示に従っていた。ムンナも分かっていたのだろう。ナナの指示通りに動かなければグラエナの攻撃を受けてしまうということに。

そして二時間が経ち、あまいみつの香りが消えてグラエナが寄ってこなくなる。さすがに二人とも疲れたのか、戦いが終わると同時にその場に倒れ込んだ。

「さすがにつつかれた！」

「ムンナア……（もう、動けねえ……）」

「ムンナ。お疲れ様」

ナナは劳いの言葉をムンナにかけてボールに戻す。そしてナナは倒れたまま動かず、僕に話しかけてきた。

「ダークライ。ムンナのことよろしくね」

「アア……」

「あの子。相当強いわよ……正直グラエナを一撃で倒せるくらいの攻撃力があつたから良かったけど、それがなかったら危なかったわね……」

「モシ、ムンナが負けテイタラ……」

「そしたらやばかったわ……でも不思議とムンナと一緒になら負ける気がしなかったのよね。それこそグラエナが千匹いても勝てた気がするの」

そういうとナナは立ち上がり、僕の方を見て一言だけ言った。

「そしてダーククライ。今から戦える？」

ナナの一言と同時に茂みから野生のトロピウスが現れたのだった。僕の倍近くある巨体は凄い迫力で思わず後退りしそうになる。その姿はまるで怪物だ。そしてトロピウスは首を振って、僕の体を吹き飛ばそうとする。それに感付いたのかなナナが『伏せて!』と一言だけ言って辛うじて回避する。息を突く暇もなくバトルが始まった。

「ダーククライ! あやしいかぜ!」

「ウスツ! (貧弱! 貧弱!)」

あやしいかぜを撃つがトロピウスは翼を羽ばたいて、風をなんなく払う。そして上空からはっぱカッターで追撃をしてくる。僕はそれを横に動いて回避。再びあやしいかぜを撃つが、トロピウスには届かない。

「あのトロピウス。相当戦い慣れている……恐らく、ここら辺のヌシだわ」

「ドウスル？」

「とりあえず策が思いつくまで、攻撃を避け続けて!」

「リヨウカイ!」

このトロピウスにあやしいかぜは通用しない。つまり他の攻撃方法を考えなければならぬ。しかし僕が使える技はあやしいかぜだけ……どうすればいい?

そんな矢先にナナが叫んだ。

「ダーククライ。はっぱカッターを避けてナイトヘッド!」

「……？」

「ナイトヘッドは恐ろしい幻を見せて相手を襲う技よ！ そのイメージでやってみて！」

なるほど……つまりこういうことか？

僕は幻を見せるイメージで手に力を込めて掲げる。なんとなくダーククライの体について分かってきた。基本的に技を使うときは腕だ。やりたいことをイメージして腕に力を籠める。そうすると胸から腕へと力が伝わり、技を引き起こすことが出来る。するとトロピウスが少しだけ暴れ始めた。

「……ダメージは入ってるけど、全然効いてない！」

「セウスッ（そんな小細工通用するか！）」

トロピウスが首を降って僕の腹を叩いた。それはクリーンヒットで思いつき吹き飛ばされた。あまりに重い一撃だが、スピアーのシザークロスよりは痛くない。もつとも痛くないわけじゃないが……

「ダーククライ！」

「平気ダ……」

トロピウスはバサバサと音を立てながら、降り立つ。そして僕には目もくれずにナナの方へと向かっていく。まさか、このトロピウスの狙いはナナか！

「セウ、セウス……（よくも私の可愛いグラエナを痛めつけてくれたな。その代金は高くつくぞ）」

話が見えてきた。このトロピウスはナナの考察通りヌシ。そして恐らくグラエナはトロピウスの部下のようなもの。そのグラエナをナナが傷つけた。だから怒っているんだ。

「ナナに……手を出すな！」

トロピウスは首を降ってナナを殴り飛ばそうとする。僕は間一髪でナナとトロピウスの間に入り、トロピウスの一撃をナナに代わって受ける。

「……ダーククライ！ ボールに戻って！ ここから逃げるよ！」

ダメだ。おそらくトロピウスはここから逃がしてくれない。どこまでも追ってくるだろう。ここで倒さなければナナの命が危ない。

僕はナナに対して首を横に振る。なんとしても、このトロピウスだけは倒す！

「ダークライ。戻って！」

「ダメダー！」

モンスターボールの赤い光が僕を連れ戻そうとする。それを無理矢理、手で弾いて拒否する。それに体力がゴソツと奪われる。ボールの拘束力は想像以上に強いな。でも今だけは従うわけにはいかない。

そういえばトロピウスは草タイプのポケモンだったな。今は未完成の技。あれを完成させれば勝てるかもしれない。たしかナナは言っていた。怨念に近いなかで炎を出すと。炎自体は出ている。しかし火力が足りない。おそらくエネルギーが足りていないから。そして炎を出すエネルギー。おそらくそれは怨念や呪いという類のもの。

呪え。もつと呪え！ そうしないとトロピウスには勝てない！

ナナを守れない！

そんな時だった。ナナが衝突にムンナの話をした。凄惨な扱いを受けた無垢なムンナの話。

「……ダークライ。ムンナの話、覚えてる？」

「……」

「あれどう思う？ 許せないと思わない？ やきつくしてやりたいと思わない？」

その一言でなにかが吹っ切れた。手で空気を薙ぎ払う。青色の炎が地面を駆ける。ああ、ほんとにムンナの話は聞いてるだけでイラつとする。でもやつと分かった。この怒りこそが憎しみ。それこそが怨念に近いなにか。その様子を見てナナが声を大にして叫んだ。

「ダークライ！ やきつくす!!」

地を走る青の炎は、そのままトロピウスを襲う。トロピウスの周りを囲い、言葉通りにトロピウスをやきつくした。トロピウスは足掻くが、炎からは逃れられない。炎はまとわりついてやきつくすまで離れない。

やがてトロピウスは力尽きて倒れ込む。それと同時に炎を払い、解

除する。これがやきつくすという技。無我夢中だったけど正解した。

「……やったね！ ダークライ！」

「ナントカ……勝テタ……」

「とりあえずここから離れましょう……いつトロピウスが起き上がるか分からないわ」

そんな時だった。ドシンと地響きが響く。まさか！

「セウス……（なかなかやるな）」

「まさか今の攻撃でまだ動けるといふの！」

「セウウウウスッ！（私の全力の一撃を喰らうがいい！）」

トロピウスが大きく空を飛んだ。それと同時に辺りに花が生える。

それは綺麗な花畑だった。それを見てナナの顔が青ざめていく。ナ

ナは震えながら小さな声で呟いた。

『ブルームシャインエクストラ……嘘でしょ』と。

7話 VS トロピウス

トロピウスが光を集める。太陽と錯覚しそうになりそうなくらい眩い光。これは明らかにヤバイ。普通のワザとは明らかに違う。喰らったら瀕死なんかでは間違いなく済まない。しかも、あの規模だとナナも巻き込まれる。

「……ダーククライ。ごめん、ちよつと万事休す」

あきらめるな。考えろ。あのトロピウスを止めなければ、ナナもが危ない。逃げようにも間に合わない。なら倒すか？ 無理だ。トロピウスの方が動くのは早い。なら僕が盾となり、ナナを庇う。もうそれしかない。そう思った矢先だった。体が浮かされて、ナナと一緒に後ろへと投げられる、それから想像を絶する熱量を持った光が僕たちのいた場所を焼き尽くした。

「ンナツァ……（諦めてるんじゃねえよ……）」

焼け野原となったその場所にはボロボロになったムンナがいた。どうやらムンナがボールから飛び出して念力で僕たちを飛ばして、助けたらしい。

どうして人間嫌いのこいつがそんなことを……

そんなムンナを見てナナが声を張り上げて、叫ぶ。

「ムンナー！」

「ンナツ……（勘違いするなよ。あんたに死なれたら寝覚め悪いから助けただけだからな）」

そうしてムンナが倒れた。ナナの目に涙が溜まる。元気の欠片を片手にすぐにムンナに駆け寄ろうとするが、僕がそれを必死に抑える。いまムンナを助けにいけばトロピウスの餌食になる。つまりナナが傷つく。

「……ナナ。先にアイツを倒ス」

「そうね……私の大切なポケモンを傷付けたあいつだけは痛い目に遭ってもらうわ！」

恐らく先程のやきつくすでトロピウスも相当のダメージを受けている。あともう一撃叩き込めば間違いなく倒せるはず。しかしトロ

ピウスもそれを警戒してくる。簡単に叩き込むのは至難の業だ……

「ダークライ。私にあやしいかぜを撃つて！」

「……ハ？」

いや、待て。ナナはなにを言っている。極限状態に追い込まれ過ぎて気でも狂ったのか？

それにナナはポケモンじゃない。そこまで攻撃力のないあやしいかぜとは言え、人間相手に撃つにはあまりに危険すぎる。

「いいから早く！」

ナナを信じよう。恐らくなんかの策があるはずだ。僕は心の中で謝りながら、あやしいかぜをナナに撃った。紫色の突風がナナに襲い掛かる。ナナの軽い体は上空へと吹き飛ばされて地面へと叩きつけられる。ドシンと鈍い音がする。ナナの頭から血が出る。それでもナナはフラフラと立ち上がりながら叫んだ。あまりに痛々しくて、見るに堪えない。それでもナナは叫ぶ。「もう一度」と。

「無理ダー！」

「私に従って！絶対に勝たせてあげるから！」

泣きながらももう一度、あやしいかぜをナナに撃つ。ナナが木に叩きつけられる。またゴシンツと鈍い音がした。それと同時に僕の体にかがみなぎってきた。それを確認したナナは口から血を吐き捨てて、悪魔のような笑みで微笑み、それからトロピウスを睨む。

「随分と痛いわね……でも、あなたを倒す準備は整った。ダークライ！反撃するわよ！」

「アア！」

あとから聞いた話だが、あやしいかぜには稀にポケモンの身体能力を強化することがあるらしい。ナナはそれを把握していて、僕の身体能力を高めるために自分の体にあやしいかぜを撃たせていた。決して気が狂ったわけではなかったのだ。彼女は自分も駒にして、勝利への方程式を完成させていていたのだ。

「ダークライ。トロピウスに出来るだけ近づいて！」

言われた通り、空を飛んでトロピウスと距離を詰める。それにトロピウスが感付いたのか、はっぱカッターで迎撃をしてくる。しかしナ

ナはそれもお見通しだ。

「もうその技は見切ったわよ！ 右に避けたら、そのまま前進。それから四秒後辺りに再びくるから、それは左に避けてあやしいかぜ！」

ナナの指示通りに動いて全て見切る。彼女の指示は完璧だった。トロピウスの技の出すタイミングも完全に一致。はっぱカッターに掠ることもない。そして言われた通りにあやしいかぜを撃つ。それをトロピウスは羽ばたいて払う。しかしナナはそれすらも計算していた。

「……かかったわね。ダークライ。やきつくす！」

僕の放ったやきつくすは怖いくらいにあっさり決まった。不思議なことにトロピウスは避ける素振りすら見せなかった。トロピウスに青い炎が纏わりつく。それを払おうと必死に暴れるが、纏わりついた炎は取れない。そして炎に焼かれ、意識を失って空から落ちてズシンという音とともに砂埃が舞った。

「トロピウス。あなた余裕そうに見せていたけど実際はあやしいかぜを払うのに相当苦労してたのでしょうか？」

「……」

「特に最後のあやしいかぜ。ダークライの身体能力が上がったことで威力も上がり、あなたの想像を上回った。だから払うのに手一杯になり、やきつくすへの警戒が怠った」

ナナはトロピウスに話しながらムンナに近づいて、抱きかかえて元気の欠片を食べさせる。そして同時に日が昇り始める。朝日がナナを照らす。ナナはふらふらした足取りで近づいてトロピウスにも元気の欠片を食べさせて回復させる。

「ダークライ。ムンナ。そして私。誰か一人でも欠けたら勝てなかったわ。それとトロピウス。今回はありがとね。あなたのおかげで私達はまた一つ強くなれたわ」

そうしてトロピウスとのバトルは終わった。僕とナナとムンナ。一人のトレーナーと二体のポケモンの勝ちで終わったのだ。

「あなたの受けたダメージ。これが私のムンナをZワザで必要以上に傷付けた罪よ」

それだけ言うとナナも限界を迎えたの、その場に倒れ込んだ。そんな時に再びトロピウスが立ち上がる。十分にダメージは与えた。それでも立てるのはナナがトロピウスに元気の欠片を食べさせたからだろう。最悪だ。今はナナが指示を出せる状況ではない。それに僕も万全の状態ではない。また、あのトロピウスの相手をするのは不可能だ。

「……構えるな。もうやる気はない」

「そうかよ」

「この娘には天晴じゃ……まさか、ここまでのトレーナーがいるとはな」

「ナナはチャンピオンになるトレーナーだぞ？」

「随分と大きく出たものだな。そのトレーナーの知恵と優しさに免じて、グラエナの件は不問にしといてやる」

それだけ言うとトロピウスはどこかに羽ばたいていった。そしてナナが目覚めたのは明日の昼であった。

8話 お小遣い稼ぎ

「さて、行きましようか」

ナナは目覚めると同時に自分に傷薬を塗って、すぐに旅を再開させた。

もちろん怪我の痕は一切ない。傷薬を塗って、その場で完治したのだ。まさかポケモンに使う傷薬が人間にも有効だったとは。そしてムンナの傷は相当重く、まだ目覚めることはなかった。

「さすがにムンナはポケットモンスターで見てもらわないとダメね」

「……最後の……トロピウスの……アレはナンダ？」

「私もあまり詳しくは知らないんだけど、恐らくアローラ地方に伝わるZワザでしょうね。学校で教わった限りだとZリングとZクリスタルが必要で、トレーナーの想いをポケモンに重ねて互いにゼンリョクを解き放つ大技」

待て。あのトロピウスにトレーナーがいるというのか？

今の説明だとZワザはトレーナーがいないと使えないと言っているようなものだぞ。

「でも、もしもトレーナーの想いに匹敵するエネルギーを単独で生み出すことが出来たのなら理論上はポケモンだけでもZワザを使えてもおかしくないわ」

「ソンナコトが……」

「もつとも普通は無理よ。でも、そうじゃないと野生のトロピウスのZワザは説明がつかないわ。あのトロピウスが特別な個体だった。そう考えた方が自然よ、なんていったってポケモンは今の科学でも分らないことだらけなんだから」

そういえばZワザは言われてみれば生前の彼女がウルトラサンで使っていた気がしなくもない。たしか、その時はバトルに一度だけつて制約があったよな。この世界ではどうなのだろうか？

「ん？ Zワザが連発出来るかって？ あれはポケモンとトレーナーに相当な負担を強いる技だから推奨はしないけど、出来ないこともないわよ。もつとも大体のトレーナーは体力がついていなくて一日

に一度が限界。それに体力がもって私がZワザを使えたとしても、ポケモンに負担はかけたくないからZワザは一日に一回しか打たないわね」

ナナが僕の考えを読み取ったのか補足的な説明をする。それに対してナナは「自分のポケモンの考えていることくらいトレーナーなんだから分かるよ」とだけ言った。しかし、もしも僕があのとロピウスのようにナナの力を必要とせずにZワザを撃てるようになったら、もっとナナの役に立てるだろうか……

「他にもトレーナーと協力して行うことなら一部のポケモンでのみ確認されたカロス発祥のメガシンカ、それに事例が片手で数えるほどしかない、キズナ現象というものもあるのだけど……」

その時だった。草木が揺れて、そこからスピアーが飛び出してくる。それを見たナナは溜息をこぼした後に戦闘態勢に入る。そして間違いない。このスピアーはあの時に僕を倒したスピアーと同一個体だ。

「まったく……ムンナがやられてポケモンセンターに急いでるというのに……」

「ドウスル？」

「さっきと倒してポケモンセンターに直行するわよ。今の貴方なら負けないでしょう。ダークライ」

「スピッ！（どのくらい強くなったか見せてもらおう！）」

「ダークライ！ やきつくす！」

青い炎を弧を描くように地面を走らして、スピアーを囲む。そして炎は意思を持っていくかのようにスピアーに襲い掛かる。しかしスピアーの動きは早く、炎がスピアーを捉えることはなかった。それを見てナナが下唇を噛む。

「随分と頭が回る個体ね！ 頭が回る分、トロピウスよりも数段厄介かしら！」

それからスピアーは僕に近づいて、シザークロスを撃ってくる。それを僕はナナの指示を受けることなく難なく躲す。そして気のせいか動きが少しだけ前よりも遅い気がした。

「相手が遅くなったわけじゃない。貴方が前より成長したのよ」
「ナルホド」

「そのまま、あやしいかぜ!」

手を振り上げて紫色の突風を起こす。前回と同じようにスピアーは躲そうとするが、想像以上の威力だったのかバランスを崩す。そしてナナがスピアーに出来た一瞬の隙を見逃すはずがなかった。

「ダークライ。そのままやきつくす!」

手を振って青い炎を地面に走らせる。炎は的確にスピアーを捉えて、体を焦がしていく、

スピアーは炎を払おうと必死に暴れ、なんとか振り払う。しかしナナはそれも見越したのか次の指示を僕に飛ばしていた。

「スピアーが炎を払ったタイミングでゼロ距離であやしいかぜ」

僕はスピアーに近づき、ナナの指示通りに炎を払うと同時にあやしいかぜを叩き込んだ。あやしいかぜは今後こそスピアーに直撃して戦闘不能になる。

「……スピアーの傷はトロピウスみたいに重くなさそうだし、自分で回復出来る範囲だろうから欠片はいらねいね。それとダークライ。お疲れ様」

あのスピアーにこんなあっさり勝てたのか？ 正直、もっと苦戦するものかと思っていたが……

「こうそくいどうをされたらやばかったわ。長引けば苦戦は必須。だから早めに勝負を決めたのよ。やっぱりこのスピアーは桁違いに強いわね」

ナナの采配があつてこそか。スピアーを簡単に倒したナナの姿。会ってからまだ数日しか経っていないのに不思議と大きく成長している気がした。彼女が全てのジムを制して、ポケモンリーグに挑む時。彼女はどこまで強くなっているのだろうか。

それから森を歩き、すぐにポケモンセンターに着いた。ハクガ山のももにあるポケモンセンターだ。ナナはすぐにジョーイさんにムンナを預けて容態を見てもらう。幸いにもナナの適切な処置のおかげで明日には普通に動けるようになるそうだ。そしてナナのテン

シヨンはありえないくらい低かった。

「はあ……」

「ドウシタ？」

「明日からハクガ山を登るのよ」

「ソウダナ」

「つまり登山よ？」

ああ。そういえばナナは運動音痴だと言っていたな。これから山を登るからテンシヨンが低いのか。もっとも見た感じだとロープウェイとかもなさそうだ。大人しく登山するしかないだろう。

「それに今は暖かいけど、標高が高くなると雪が積もるくらいの雪山になる。つまり、それなりに着込む必要もあるから、防寒着も買わなくちゃ……」

「ナルホド」

「マグマツグとか捕まえれば楽なんだけど、ここら辺は生息地じゃないし……」

登山か。もっともダーククライ常に宙に浮いてるおかげもあって歩いたりしても全然疲れないんですけどね！ いやあダーククライで良かった。うん。

「そうだ！ ダーククライが私を背負ってもらってハクガ山を登ればいいんだわ！」

「……エ？」

「平気よ！ 行く方向は私が指示を出すから。それに世の中にはウインディやケンタロスに乗って旅をするトレーナーもいるし、珍しいことじゃないわ！」

「ア、アノ……」

「それじゃあダーククライ！ 明日は頼んだわよ！」

こりや無理だな。こういう時の女は強い。生前の彼女がそうだった。一度そうと決まれば、絶対に折れることはない。これは仕方ない。諦めて彼女を背負って登山するしかないか。

「さて、それじゃあムンナが回復するまでの間、登山用の道具を揃えないとね」

そして財布を見て、ナナが青ざめた。まさか……

「ダークライ……お金がない！」

「フアツ！」

「旅立つ前に元気の欠片と傷薬を買い過ぎたあ……それにここの宿泊費高すぎ」

おいおいどうすんだよ。この旅、ほんとに大丈夫なのかよ？

「というわけでダークライ！ ポケモンバトルよ！」

「ン？」

「ポケモンバトルをした時、それを公式戦とするならば負けたトレーナーは所持金の約三割を勝者に支払わなければならない。そして支払えない場合はリーグ等の大会への参加を約一年の間、禁止とするって法律があるのよ」

えっぐ！ いや、普通にえぐい。しかし、だからゲームで勝負に勝つとお金が貰えたのか。まさかそんな背景があったとは。しかし断られたらどうするのだろうか？

ゲームと違ってポケモンバトルをしないという選択肢だつてあるだろう。

「基本的に相当な事情がない限りはポケモンバトルを断らないわ。特に法とかはないけど、暗黙の了解ってやつね」

「ナルホド」

「それじゃあ小遣い稼ぎするわよ！」

まるで悪の組織みたいだな。まあ法を破ってるわけで悪いというわけではないから問題はないのだが、倫理的にどうなのだという話である。それからナナは近くにいた短パン小僧にポケモンバトルを申し込む。短パン小僧は二つ返事でOKを出す。すんなりとバトルが始まることになった。

「いけっ！ ドンファン！」

「ダークライ！」

相手のポケモンはドンファンか。ボールから出てくると同時にドシンと大きな地響きが響く。そして短パン小僧が叫んだ。

「ドンファン！ ころがる！」

「ダークライ。右に四歩くらい移動してあやしいかぜ」

僕は言われた通りにした。見事にジャストタイミングの擦れ擦れでころがるを避ける。そして後ろから、あやしいかぜを叩き込んでドンファンを一撃ノックアウト。

「はい。私の勝ち。それじゃ所持金の三割ちようだい？」

「え？」

「そういうルールがあるのはトレーナーなら知ってるよね？」

短パン小僧は涙目になりながらナナに二千円を渡して、ドンファンをボールに戻して去っていった。怖い。完全にやっтерることがチンピラのそれだ。ていうか、秒殺出来るくらいナナと一般トレーナーに実力差があるのかよ……

「さて、次はあそこのミニスカートの女の子と戦おうか？」

そうして再びバトルが始まった。相手のポケモンはドーミラー。今度のバトルは酷かった。僕が出てくるとナナはすぐにあやしいかぜを命じて相手に行動をする暇も与えずにバトルを終わらせた。そうして千五百円を奪う。

「良い感じだね！ ダークライ！」

「……少し弱スギナイカ？」

「そりやそうでしょうね。ここに来るトレーナーなんて大体がジム戦で勝てないから、勝つために強いポケモンを捕まえようとエラニの森に向かうトレーナーが大半だからね」

「ドウイウコトダ？」

「考えてみなさい。自分のポケモンじゃ勝てないから強い野生ポケモン捕まえて勝ちますなんて思考をしているトレーナーが強いと思う？ それに仮にエラニの森で強いポケモンを捕まえたところでトロピウスに勝った貴方なら勝算は充分にあるわ」

「ソウイウコトカ……」

「そしてあとは経験の少なそうな子供を狙うことで勝利を確かなものにしていく。こちらの負ける可能性を極限まで抑えた良い作戦だわ」

どうやらうちのトレーナーは随分と下衆な性格をしているようだ。もつともルールを守ってやっていることだから悪いことではないの

だが……

「でも、狙いはそこじゃないのよ」

「……？」

なにを考えている。そう思った矢先だった。ナナが随分とガタイの良い男に肩をトントンと叩かれた。ナナが振り返ると男が怖い顔をして、こちらを見る。

「初心者狩りで小遣い稼ぎとは褒められた行為じゃねえな。嬢ちゃん」

「禁止はされていないわよ？」

「そうだな……俺とポケモンバトルしろ。嬢ちゃんが勝ったら俺の所持金の全て。約五万円を全てやろう。でも俺が勝ったらしつかり反省してもらおうか」

「望むところよ」

そうして再びポケモンバトルが始まった。少しだけナナも真剣な表情になる。そして男がボールを投げる。

「いきな。アリゲイツ！」

「お願い。ダークライ！」

相手はアリゲイツか。相性の有利不利はない。強いて言うならメインになるやきつくすの相性が悪いくらいか。そんなことを考えているとナナから予想外の指示が飛んでくる。

「ダークライ。上空に飛んで！」

珍しい指示だな。言われた通りにプカプカと上を飛んでいく。そして地面を見下した。大体ポケモンセンターの屋根くらいまで飛んだ辺りでストップと合図がくる。ポケモンセンターが二階建ての高さの建造物だから、高さ的には結構あるよな、うん。

「小癩な！ アリゲイツ！ みずでっぼう！」

「ダークライ。あやしいかぜでみずでっぼうをアリゲイツに返してあげて」

「しまった！ アリゲイツ！ 避ける！」

言われた通りにあやしいかぜを撃つとみずでっぼうの勢いは殺され、無力化される。その様子を見て男は悔しそうに睨む。対するナナ

は余裕の表情だ。

「この高さならアリゲイツの得意な牙技は届かないわね。そうなること残された技はみずでっぼうくらいだけど、ここまで距離を離されると勢いは落ちて、みずでっぼうは本来の威力の半分も出せないんじゃないかしら？ それこそあやしいかぜで簡単に落とせるくらいの威力しか」

「……卑怯だぞ」

「ルール違反じゃないわ。これも作戦よ。あなたは飛行タイプのポケモンが飛んで戦っていたら文句を言うのかしら？」

「……くそっ！」

「ダークライ。あやしいかぜをアリゲイツに当たるまで撃ちなさい」

僕は上からあやしいかぜをアリゲイツに向かって撃つ。最初のうちはアリゲイツも避けていたが、やがて体力が切れてきたのか、動きが鈍り、あやしいかぜに当たるようになる、一度当たったら隙が生まれて、二度、三度と当たり、ひんしになった。

「五万円。ごちそうさまです」

「……俺はどうすれば良かったんだ」

「同じ状況なら私だったら地面にみずでっぼうを撃って、その反動で宙を舞って、牙技で勝負を決めるかしら。それにしても良いアリゲイツだったわよ。また戦える日を楽しみにしているわ」

「じ、嬢ちゃん！ 名前を教えてください！」

「ナナよ」

「俺はゲイル！ いつかリベンジしてやるからな！」

ナナはゲイルに軽く手を振った。その時のナナは笑顔だった。五万円という大金が手元に入ったことに。

「初心者狩りをしていると正義感に釣られたトレーナーが相場以上の金銭を賭けてポケモンバトルを挑むことが稀にある。それを振り返りにすれば旅には困らない。先生の言った通りだわ」

なにはともあれ、ナナの金銭ピンチは難なく逃れることが出来た。

9話 チャンピオン

「お預かりしたムンナはすっかり元気になりましたよ」

「ありがとうございます。ジョーイさん」

ナナはムンナを引き取ると防寒着を着込んでハクガ山に登り始めた。僕にお姫様抱っこをされた状態で。なぜ、お姫様抱っこなのか。簡単な話である。ダークライの背中では安定しないのである。ダークライは人と違って構造的に背中に手を回しにくい。そのため背中が安定しないから、おんぶだと居心地が悪い。よってお姫様抱っこに追いついたのである。

幸いにもナナは重くなかったため、特に負担になるということはない。それに胸にしがみつくとナナは少しだけ可愛いから悪くもない。

「ダークライ。その分かれ道は右ね」

「リョウカイ」

分かれ道を曲がると不運にもイワークに出くわす。僕はナナをそつと降ろして戦闘態勢をとる。そして、ナナの指示であやしいかぜを撃ち、イワークを倒すと再びナナをお姫様抱っこして登山を再開させる。

「そういえばダークライは飛べるよね?」

「アア」

「どこまで飛べるの? 今後のポケモンバトルの戦略を練る上で把握しておきたいな」

「ドコマデモ飛ベル……ダガ、長時間ノ飛行は厳シイ」

ダークライの体は飛べる。宙に浮かぶ延長線上のような感じで飛べるのだ。試したことはないが、恐らく雲に手が届くくらいまでは飛べるだろう。しかし空中に長時間いるのは厳しい。滞在出来るのは三分といったところだろう。そして人やポケモンを載せると重さに耐えられなくなり、飛べなくなる。だから移動は出来ない。

「でも、ダークライってずっと浮いてるよね?」

「重力に反発スルヨウナ感じダ……逆にコレ以上は下リレヌ」

「なるほど。浮力のイメージかしら?」

ああ。それだ！ ダークライの体になってから常に水面にいるよ
うな感じなんだ！

「ソウダ」

「ただ飛ぶというイメージは難しいわね……飛行タイプの飛び方とは
明らかに違うわけだし、なにかを噴射する様子もないし」

ナナはブツブツと言いながら考える。正直、僕だってなんで飛べる
か分かっていないのだ。恐らく答えは出ないだろう。そして途中に
ある洞窟に入る。この洞窟を抜けると次は雪山になる。これから
は山の内側を通るが。これからは外側になるのだ。そして雪山を歩
いていくと街が見える。そこがハクガシテイ。ハクガシテイはハク
ガ山の頂上付近に作られた山なのだ。

「……ダークライ。降ろして」

洞窟を進んでいると少しだけ大きな広間に出た。そこには赤いマ
ントに軍服みたいな服を着た銀髪でナナと同じ赤い目をした男がい
た。ナナはその銀髪の男を無言で見ていた。

まるで知り合いのようだ。少しだけ空気が重くなると男はポケモ
ンを出した。出てきてきたポケモンはウナギのようなポケモンだっ
た。しかし、そのウナギは不思議なことに宙を浮いている。彼女はそ
のポケモンを見て、僕に指示を出す。『お願い。ダークライ』といつも
のように。そして、すぐに指示が飛んできた。

「ダークライ！ あやしいかぜー！」

言われた通りにあやしいかぜを撃つ。しかし男は眉一つ動かさな
い。そして一言だけ言う。

「受ける。シビルドン」

シビルドンと言われたポケモンはあやしいかぜを見事に受け切っ
た。傷一つ付いていない。それを見てナナが舌打ちをする。そして
再び僕に指示を出す。

「やきつくすー！」

青い炎がシビルドンを言われたポケモンを囲う。しかしシビルド
ンは軽く身震いして炎を払った。ただの身震いだけで僕の炎が払わ
れたのだ。完全に格が違う。明らかに勝てる相手じゃない。今のシ

ビルドンの動きで、それがハッキリと分かった。完全に次元が違うのだ。

「……ダークライ。もういいわ」

ナナも察したのか僕に指示を出すのを辞めた。完全に降参した様子だった。初めてだ。ここまで手も足も出ない相手というのは……

「もう終わりかい？」

「うん……やっぱり桁違いだよ……お兄ちゃん」

その言葉に僕は驚愕した。まさか、この人がナナの兄だと言うのか！

「久しぶり。ナナ。旅に出たというから様子を見に来たよ」

「お兄ちゃんは強すぎます！」

「それが経験の差というものだ。ナナも知つての通りポケモンにはレベルが存在する。レベルが違えばダメージすら与えられなくなる」

ああ、やっぱりこの世界にもあるのか。ゲームと同じくレベルというものだ。恐らく相当レベルの高いシビルドンだろう。あまりに圧倒的で覇気が違い過ぎる。

「しかしレベルを上げればどんなポケモンだって強くなれる。それを忘れないように」

「はい」

「そして俺を超えるって言うのは、この次元まで到達するということだよ。ナナ」

「ええ。私は絶対になりますから。お兄ちゃんと同じチャンピオンに！」

「ふっ……それならナナが来る時まで負けるわけにはいかないな」

「いまとんでもないことを言わなかったか？」

聞き間違いじゃなかったらナナはチャンピオンと言った。つまり、それはナナがチャンピオンの妹だということになる。まさか血統からして優秀な子だったとは……

「しかしダークライか。随分と珍しいポケモンを捕まえたな。俺も実物を見るのは初めてだ」

「お兄ちゃんもダークライを知ってるの？」

「ああ。名前だけならな。ダークライは広い技範囲に素早い動き、そして高い攻撃力を誇るポケモンだが、打たれ弱いところがあるから今のシビルドンのような攻撃を受けるといふ戦い方は不向き。しかしダークライの本当の強さはそこじゃないけどな」

「ダークライの本当の強さ……」

「答えは聞かないのか？」

「聞いても教えてくれないでしょ……それにダークライの戦い方は私が旅の中で見つけていくものだから」

「よくいった！ まあー答えを自分で探そうともせず、すぐに聞くやつは強くなれない」

ダークライの本当の戦い方。今とは違う戦い方があるというのか？

それは一体なんなのか……もしかして俺はダークライの本当の強さを引き出せていないんじゃないのか？

「それで話を戻すがナナはどこまで学校でレベルについて習った？」

「レベルを上げる方法はポケモンバトルをすること。そしてポケモンの現在のレベルを確認する術はない。同一種のポケモンでも、身体能力に大きな差があり、その差をレベルと表現したところまでかな」

「そうそう。まさか、ここまで満点回答の答えが来るとは。普通のトレーナーなんてレベルはポケモンの強さを表すものとしか答えられないんだぜ」

「それで、その様子だとお兄ちゃんはレベルについて私に伝えたいことがあるのんだよね」

「ああ。最近、ポケモンと旅して気付いたんだが、ポケモンのレベルつてバトルで勝っただけじゃ上がらないみたいなんだ。これから検証を重ねて、論文を書いて博士に報告するつもりだ」

「え？ それってすごい大発見じゃん！」

「ああ。だからナナには俺が気付いたポケモンのレベルを上げる方法の仮定の話しようと思う。今日はそれを伝えに来たんだ。そして実際に試してみてもデータを集めてほしいんだ」

ゲームでは少なくとも野生ポケモンを倒していたらレベルは上がった。しかし、それはおかしな話だ。それだと自分より格下をひたすら倒してもレベルが上がるのだ。そんなことが本当にありえるのだろうか。もしもそうだとしたら弱いポケモンを集めてレベル上げのために狩る施設があってもおかしくない。しかし、そんな施設がある雰囲気はない。

「それってなに?」

「ポケモンのレベルが上がる条件。それは恐らく『困難を乗り越えること』だ。つまり強いポケモンと戦って、勝てばそれだけレベルが上がる。逆に弱いポケモンをいくら倒してもレベルには一切影響しない。それが俺の仮説だ」

「そういえば……」

「心当たりがあるのか?」

「うん。とんでもなく強いトロピウスを倒してからダークライの動きが前より明らかに速くなった。それに攻撃力も随分と上がった。そこから辺にいるトレーナーのポケモンなら一撃で倒せるくらいには……」

「間違いなくレベルが上がったと見ていいな」

「だよな」

「しかし、論文として書くにはもっと実例が欲しいところだな……」

「お兄ちゃん。長話になるなら外で話さない?」

「そうだな」

そうしてナナとチャンピオンは洞窟の外へと歩き始めた。心なしかナナの声がワントーン高くなっていった気がした。それに先程から明らかに口調も違い過ぎる。兄の近くだとも性格は変わるものなのだろうか……

「……ナナ。気付いてるか」

「うん。あと数秒後に野生ポケモンが飛び出してくる。この音的にドーミラーかな?」

「正解」

ナナの言った通りにドーミラーが飛び出してきた。そういえばナ

ナは毎回、野生ポケモンが飛び出す少し前には反応していた。考えてみたらそれは誰にでも出来ることではない。もしかしてナナはバトル面以外でもトレーナーとして優秀なのではないか？

「私が倒すねー！ ダーククライ！ あやしいかぜー！」
いつものようにあやしいかぜを撃つ。紫色の突風がドーミラーを襲い、一瞬で撃退する。

「まあそうなるか。ハクガ山よりエラニの森のポケモンの方が強い。エラニの森を抜けてきたナナのお相手にもならないのは当然か」

「お兄ちゃん。改めて言っておくけど、私はこのダーククライとお兄ちゃんを超えるからね」

「……その日が来るのを期待してるよ」

そうして洞窟から出て、チャンピオンは飛び立っていった。ナナはそれを手を振って見送った。あれが現チャンピオン。そして超えるべき壁か。

「あーやっぱりお兄ちゃんは規格外だわ！ あそこまで頑張ったのにダメージすら与えられなかった。強くなっと思ったんだけどなあ」
正直に言うとお僕もあれは完全に予想外だった。チャンピオンに勝てるとは思っていなかったが、少しくらいはダメージを与えられると思っていた。でも現実が違う。明らかに格が違う。

「まあ旅を始めて数日の私達がチャンピオンと対等に戦えるっていうのもおかしい話か」

たしかに。それもそうか。こんな簡単にチャンピオンにダメージを与えられたら、威厳の欠片もない。誰だってチャンピオンになれてしまう。

「でも、お兄ちゃんの腕が衰えてなくて満足！」

「……？」

「だって超える壁は高い方が楽しいでしょ？」

圧倒的な力の差。それを見せられても彼女は兄を超えるつもりでいる。それなら僕もそれに答えよう。彼女の想いに全力で答えよう。彼女が折れる、その時まで僕も諦めない。

「さあダーククライ。街が見えたよ。私達が始めて訪れる街。ハクガシ

「テイよ！」

そして僕たちは初めてのジム戦をする。

10話 ジム戦

ジム。それはデトワール地方に8つ配置されている道場のようなものである。ジムにはジムリーダーという強いトレーナーがいて、つとジムバッチを貰える。そしてジムバッチを8つ集めるとポケモンリーグという大会に参加出来る。そして、その大会で優勝すると四天王への挑戦権を得ることが出来る。そして四天王全員に勝つてようやくチャンピオンすなわちなナの兄と戦えるのだ。そこでチャンピオンと戦い、勝つことが出来れば晴れてチャンピオンになることが出来るのだ。

「ダークライ。ムンナ。いくわよ！」

そして始めてジムの前に立つナナ。目の前にある氷で出来たドーム。これがジムだ。これから始まる。初めてのジム戦。それはどんなものだろう。どんなポケモンと戦えるだろうか。そんなことを考えると不思議とワクワクしていた。

「ムンナ。緊張しないで。ポケモンバトルで大事なのは楽しむことだよ」

「ンナッ！（うるせえよ！ 緊張なんかしてねえし！）」

「ふふっ。期待してるわよ」

扉を開くと氷のスタジアムがあった。目の前には上半身裸で髪の毛が一本もない男がいた。しかし体はかなりがっしりしている。これがジムリーダー。ものすごい覇気だ。

「よくきたな。俺の名はニリン。氷タイプの使い手だ。お前の名前と所持バツジ数を言え！」

「ナナ。ジムバッチは0です！」

「初めてか。それなら俺の使えるポケモンは二体。そしてナナのポケモンも二体。これは面白いバトルになりそうだな！」

「よろしくお願ひします！」

「おうよ。さっそく始めようではないか！」

ニリンがボールを投げる。出てきたポケモンはタマザラシ。

それに対してナナはムンナを繰り出した。僕は二番手か。

「フハハハハハ！　いくぞ！」

「ええ！　ムンナ。頑張ろうね！」

「ムンナアアア（お前は俺がいないとダメなんだな！）」

「ゆけっ、タマザラシ！　アイスボールだ！」

タマザラシのアイスボール。それはあまりに速かった。それこそナナの指示が間に合わないくらいに。ムンナが吹き飛ばされて、ナナが唾然とする。しかしムンナは何事もなく立ち上がる。それからのナナの反応は速かった。

「ムンナ。のろいをしてもう一度タマザラシの攻撃を受けて！」

「そうくるかあ！　それは悪手だあ！　タマザラシはそのままアイスボールじゃ！」

「ムンナ！」

ムンナが雪玉のように転がってきたタマザラシに跳ね飛ばされる。しかしムンナは思っていたよりダメージを受けてないようで、簡単に立ち上がる。

「アイスボール。攻撃が当たるまで、続いて、威力が倍増する技というのは知っています」

「……ほう？」

「のろいすると硬くなるんですよ。そしてムンナは元々丈夫ですから、二度目くらいのアイスボールなら受けれると判断したんです」

「……知識はあるようだな。でも三度目はどうだ？」

「ムンナ！　やつあたりを右二十度に撃った後に左六十度に撃つて！」

「ムンナアア（あいよ！）」

やつあたりをして、転がってくるタマザラシを回避。しかしタマザラシも転がり続けて追撃する。そこでナナが言った左六十度にやつあたり。それは追撃を回避するための動作だった。そこまで完全に計算していたのだ。そしてタマザラシの動きが止まる。その隙は見逃さない。

「ムンナ！　タマザラシにやつあたり！」

「……タマザラシ。まるくなるで攻撃を流せ！」

タマザラシはまるくなくなって完全にムンナの攻撃を受ける。しかし、おかしい。ムンナの攻撃が明らかにグラエナと戦った時より低い。どういうことだ？

「やつあたりはポケモンがトレーナーを嫌ってれば嫌ってるほど強くなる技。ちよつとお前さんのムンナ。なつきすぎじゃないか？」

「ンナッ！（そんなわけあるか！俺は大嫌いだ！）」

「そうなのムンナ？」

「ンンンンナッ（お前なんか大嫌いだわ！）」

おう……なんていうツンデレ。ていうかある程度、真面目に指示に従う時点で相当ナナのこと気に入ってるよな。しかもトロピウスの時にボールから勝手に出て、庇うくらいだし。

「自分のポケモンのことすら把握してないとはくだらん。タマザラシ。ぜったいれいどで終わらせて……」

「それを待ってました。ムンナ。あくび」

ムンナが欠伸をする。それによってタマザラシがぜったいれいどを撃つ前に眠りにつく。さすがあくび。ほんとに恐ろしい技だ。ナナは眠ったタマザラシを見て不気味に笑った。

「フツ。大技を出すと、先程のアイスボールの時とは比べ物にならない隙が出来るんですよ。それこそ簡単にあくびを受けるくらいに。それとムンナ。お疲れ様。そして、ナイトメアの始まりですよ？」

ナナはムンナをボールに戻す。そして僕にフィールドに行けと合図する。やつと僕の出番か。このタマザラシ。倒してしまっただよな。

「いきなさい。ダークライ」

僕がフィールドに入る。それと同時にタマザラシがジタバタと暴れて苦しみ始めた。顔には恐怖が見える。これがナナの作戦だ。そしてニリンはなにが起こっているのか分からずにいた。ポケモンが眠ったと思ったら、もがき苦しむ。その事態を呑み込めていないのだ。

「な、なにが起こってる！」

「このポケモンはダークライ。周りのポケモンに悪夢を見せるんです

よね。言うならば特性ナイトメア」

「初めて見るポケモンだから警戒はしていたが……完全に予想外だ」

「ダークライ。そのままタマザラシをあやしいかぜで飛ばしてあげなさい」

手を振るい、紫色の突風をいつものように起こす。それにタマザラシは吹き飛ばされ、宙を舞い、地面に叩きつけられた。そして地面に叩きつけられてもタマザラシは悪夢に苦しんでいた。そこに再び、あやしいかぜを撃って追撃。今度はタマザラシを壁に叩きつけた。それと同時にタマザラシは戦闘不能になり、僕の体から力がみなぎる。

「……タマザラシ。ゆっくりと休んでくれ」

「ダークライ。気を抜かないで。相手はジムリーダー。今までのトレーナーとは違うわよ」

「ゆけっ！ フリージオー！」

次は氷の壁のようなポケモンが出てきた。口には氷で出来た鎖のような髭がブラブラと付属している。そしてナナはフリージオをそのまま僕で倒すつもりだ。先程のナイトメア作戦は既に見せている。同じ手はジムリーダーに二度は通用しない。だから、そのまま僕で押し切るつもりだ。

「……ダークライ！ やきつくす！」

青い炎がフィールドを駆け巡る。炎がフリージオを捉えると、そのまま覆っていく。相手は氷タイプ。まともに喰らえばタダでは済まないはずだ。たとえジムリーダーのポケモンであろうと。

「……俺に挑むトレーナーはみんな同じことを考えるんだよな。『氷タイプには炎って』」

その時だった。フリージオにまとわりついていた炎が凍り付いた。さすがにナナもそれには啞然とする。まさか炎を凍らせてくるとは……

「お前さんが予想外な手を使うように俺も予想外の手を使う。ポケモンバトルってそういうものだろ？ そしてフリージオはこうそくすピン」

「ジオツ（フハハハハ）」

こうそくスピピンで払われた凍った炎の破片が僕の体に突き刺さる。しかも勢いは相当早く、かなりのダメージが体に響く。そしてフリージオはスピピンをしたまま、こちらに突っ込んできて僕の体を吹き飛ばした。しかし、なんとか踏ん張り、壁にぶつかるのだけは回避する。あれは相当厄介だな。

「さて、フリージオ。じこさいせい」

「ジオオオオオツ（振り出しに戻るぜええええ！）」

「……ナナ。ドウスル？」

「ダークライ。あやしいかぜ！」

「無駄なことを。フリージオ。くろいきり！」

辺り一面の言葉通りの黒い霧が蔓延する。それを吸うと体からドツと力が抜けた。動けないほどではない。なんというか体の軽い感じがなくなったみたいだ。

「しまった！」

「これであやしいかぜによるドーピングはなくなったな」

しかも、先程のあやしいかぜでもフリージオは殆どダメージを受けていない。あのフリージオな並み大抵の攻撃では倒せない。弱い攻撃ならじこさいせいで回復されて終わる。

「……ダークライ。やきつくすをフィールド全体にお願い！」

「むだなことよ！ フリージオ。れいとうビームで手を凍らせてしまえ！」

「ジオオオオオオオオオオオ（さあさあさあ祭りの時間だぜ！）」

「ナツ！」

手を振って、炎を起こそうとした。しかし手が氷で止められてピクリとも動かない。手を動かすことが出来ないのだ。これじゃあ炎を出すどころか、あやしいかぜも起こせない！

「そして、こうそくスピピン！」

「ジオツ！（勝負あり！）」

フリージオのこうそくスピピンは僕の腹にダイレクトに当たり、吹き飛ばした。予想以上に重い一撃は僕を倒すのには充分だった。

「ダークライ！」

ナナが叫ぶ。しかし、もう遅い。僕はフィールド外の壁に叩きつけられた。それによって意識を失う。僕は戦闘不能となったのだ。

「……おつかれさま」

そしてボールに戻された。ボールに入っただけですぐに意識を取り戻す。そして外を見た。

「さああと一体は手負いのムンナ！ どうする。ナナ！」

「どうするって勝ちますよ」

試合はまだ続いていた。ナナはまだ勝負を捨てていなかった。

11話 VSフリージオ

「ムンナ。勝つわよ」

「ンナツ！（なに当たり前のこと言ってるんだよ）」

もう後がない。ムンナが負けたら僕たちの負けだ。そしてフリージオの攻略の糸口は一切掴めずにいた。あの高すぎる防御力にじこさいせいという回復技。それをどうやって攻略するつもりなのだろうか。

「ムンナ！ あくび！」

「フリージオ。目をつぶれ！」

ムンナの得意のあくび。ニシンは既に攻略法を見出したようで、簡単に攻略してしまう。

それに対してナナが下唇を噛む。

「ムンナ。今のままじゃ勝てない」

「ンナツ？（は？）」

「だから、戦いの中で次のステップに成長するわよ！ 私もムンナも！」

「ムンナアアア（あったりめえだ！）」

「くだらん。フリージオ。れいとうビーム」

「ジオツ（凍り付け）」

「ムンナ。右に避けて！」

ナナの指示通りにムンナは動く。見事にれいとうビームを避けて、フリージオの真横に周り、その一瞬にナナが指示を出す。

「そのままやつあたり！」

「くだらん！」

フリージオは攻撃をそのまま受ける。ムンナの攻撃でもビクともしない。あまりに硬すぎる。このフリージオを倒す手はないのか……

「フリージオ！ こうそくスピーン！」

「しまった！」

ムンナがフリージオの攻撃をもろに喰らう。しかしムンナはなん

とか耐えたようでナナの方を見て、まだやれると言いたげに頷く。しかしムンナも相当なダメージを受けてるはずだ。恐らく、あと一度でもこうそくスピンを受けたら……

「……ねえムンナ。さっきのタマザラシの動き。覚えてる？」

「ンナツ（ああ！）」

「あれと同じ要領で動いて！」

「ンンンナア！（信じてるぜ。ナナ！）」

ムンナはその場で転がり始めた。これはまさか……！

「ムンナ！ ころがるよ！」

「フリージオ。れいとうビームでムンナを向かい打て！」

「ジオツ（容易い）」

「正面から来る！ 重心を少し右に傾けて避けて！」

「なっ！」

「あとは直線！ そのまま突っ込みなさい！」

ムンナのころがるがフリージオに命中した。それに対してフリージオが吹き飛ばされる。しかしすぐに起き上がり態勢を整える。初めてフリージオが見せたダメージらしいダメージだ。これならいける！

「……普通のムンナはころがるは覚えなないだろ！」

「うちのムンナは賢いの。普通のムンナと一緒にしないでくれる？」

「へっ！ 面白ええ！ 燃えてきたぜええええ！ あんたら最高だよ！」

「ムンナ。そのままころがるを続けてフリージオにもう一撃決めなさい！」

「フリージオ！ ムンナをこうそくスピンで迎え撃て！」

ムンナのころがる。フリージオのこうそくスピン。それらがぶつかり合い、互いに吹き飛ばされる。それによりムンナもフリージオもボロボロになる。しかし両者必死にトレーナーの想いに答えようと立ち上がった。あと一撃だ。あと一撃でも入れた方が勝つ！

「ムンナ！ ころがる！」

「フリージオ！ ムンナに勢いがつく前にれいとうビームでとどめだ

！」

「しまった！」

フリージオのれいとうビームの方が僅かに速かった。れいとうビームはムンナに直撃してムンナを凍らせる。もうムンナは動けない。でもムンナもナナもまだ諦めていなかった。

「ンナッ……ンナッ！（くそっ……動けよ！）」

「ジオッ。ジオ（諦めろ。もう俺の勝ちだ）」

「ムンナ。頑張って！」

「諦めろ。あの状況でれいとうビームを受けてなお、戦闘不能にならないのが奇跡だ」

「ムンナ！ 私をチャンピオンの高みまで連れて行ってよ！ 私にはムンナの力が必要なの！」

「フリージオ！ とどめのこうそくスピンだ」

その時だった。ナナの呼び掛けに応えるかのようにカシャンとムンナの氷が割れた。ムンナがそのまま動き出す。この距離ではころがるは間に合わない。しかしムンナには策があるようだった。

「ンナッ！（仕方ねえな！）」

「ジオオオオオオオ（この技はやつあたりか。それは効かん！）」

「ンナア……（ちげよよ。おんがえしだよ）」

「ジ、ジオ！（な、なに！）」

ムンナはそのままフリージオを体で弾いた。こうそくスピンをしてるフリージオに突っ込んでいったのだ。ムンナもかなりのダメージを受ける。しかしムンナは踏ん張った。そして、そのままフリージオを弾き飛ばした。フリージオは地面に数回バウンドして戦闘不能になる。一撃。たった一撃がフリージオを打ち破ったのだ。ムンナがナナの想いに応えるかのように放ったおんがえしはフリージオを戦闘不能へと追い込み、勝利を掴んだのだった。

「ンナッ！ ンンンナア！（見たか！ 俺たちの勝ちだ！）」

そしてムンナは限界だったのか、その場にバタツと倒れ込んだ。ナナが慌ててムンナに駆け寄って元気の欠片を食べさせる。そしてムンナに優しい一言を言う。

「ありがとね。ムンナ」

「ンナア……（おうよ）」

「良いものを見せてもらった。ムンナに全力でぶつかり、ムンナを信用する。そんなナナだからこそムンナはナナの想いに答えたのだ」

「そうですね。ほんとに今回のバトルはムンナに助けられっぱなしでした。もちろんダーククライにも」

「さて、そんなムンナ、そしてダーククライの奮闘にトレーナーであるナナの最後まで諦めない心を称え、ピュールバッジを授けよう！」

「ありがとございませす！」

そしてナナは初めてのジムバッジを手に入れた。ナナが無邪気に喜ぶ。お世辞にも簡単に勝てたとは言えないジム戦。何度も危うい場面はあった。しかし勝てたのだ。このメンバーだからこそ勝てたのだ。

しかし勝ったという実感が湧かないな。あのフリージオを倒したというのが未だに信じられない。それほどまでに強かった。

「改めてダーククライ！ ムンナ！ 勝ったよ！ みんなで初めてのジム戦に勝ったよ！」

でも僕たちは勝ったのだ。間違いなく勝ってジムバッジを手に入れたのだ。しかし同時に思った。僕はもつと強くならなければならないと。今回の僕は眠ったタマザラシを倒しただけ。タマザラシを眠らせたのはムンナ。そしてエース格のフリージオ。それに関しては手も足も出なかった。結局のところフリージオもムンナが倒したのだ。僕は殆ど活躍していないのだ。僕はほんとにナナをチャンピオンの高みに連れて行けるのだろうか？

周りが喜ぶ中で僕はボールの中で一人そう思っていた。

12話 エピソード：ダーククライ

ジム戦を終えて、その日はゆっくりと休むことになった。これからはハクガ山を西に降りて、海に向かい、デトワール地方最大の都市であるカイオウシティを目指すことになる。そして、そこで二戦目のジム戦だ。

「……ダーククライ。あなたジム戦で活躍出来なかったのを気に病んでるんでしょ？」

そして部屋でナナが僕の考えを見通したかのようにそう言った。事実その通りだった。僕は殆ど活躍出来ていない。今回もしも僕以外のポケモンだったら、すんなりと勝っていたはずだ。それこそエラニの森にいたスピアーを捕まえた方がよっぽど……

「……たしかに今回の貴方は殆ど活躍できていなかった。慰めても貴方は納得しないだろうか敢えてそう言うわ」
「……」

「でもね、それでいいのよ。私はポケモンに強さだけを求めてるわけじゃないから。強くなりたいたけなら、あのトロピウスみたいな個体を捕まえてるわ」

「……ナラ、ナナはナニを求メル？」

「そうね。上手く言えないのだけど『このポケモンと勝ちたい！』と思えるかどうかかしら。どうやって勝つかなんて心底どうでもいい。誰と勝つか。それが大事なのよ。だから綿は私が好きなダーククライやムンナと一緒に勝ちたいの。たとえ弱かったとしてもね」

「デモ……」

「そんな甘い考えじゃチャンピオンなんて夢のまた夢なのは分かっている。でも、どんな弱いポケモンでも強いトレーナーが使ったら輝けると思ってるの。だから私はもっと強くなるわ。あなた達でポケモンリーグを勝てるくらいに。だから、もう少しだけ私は見切りをつけなさいで一緒に旅をしてくれる？ ダーククライ。絶対に貴方を活躍させられるポケモントレーナーになってみせるから」

違う。そうじゃない。もっと責めてほしいんだ。『弱いダーククライ

なんていらない!』って。そういう彼女の欠点らしいところを見ないと……あまりに完璧過ぎて憂鬱になってくる。ナナは完璧過ぎる。僕みたいなポケモンが見合うトレーナーじゃないんだ。

その日、僕はナナの元から離れた。

夜の街を歩く。到着したらいきなりジム線だった。考えてみたら観光する暇もなかった。雪の街を一人寂しく歩く。今の僕じゃナナに見合わない。きつとこれからもナナの足枷になってしまう。だって僕は弱いから……

「よ、久しぶりだな!」

そんな時だった。僕の目の前に小さな白色のリスが現れた。黄色い頬袋をした可愛いリス。名前はたしかパチリスだ。

「どうしてここにいる?」

「なぜって俺も主人を見つけて、旅に出たからよ。今は自由時間。それで散歩してるのさ」

僕がダークライになって間もない頃に出会ったパチリス。まさかトレーナーに捕まっていたとは……

「それでダークライはどうしてここにいる?」

「僕もトレーナーを見つけたからな」

「そうか。とりあえず、これでも食えよ」

そう言うとパチリスは僕にモモンのみを渡してきた。僕はモモンのみを一口齧る。それはすごく甘かった。そういえばきのみってこんな味だったんだな……

「それでダークライのトレーナーはどこだ?」

「……」

「家出ってやつかあ。もしかしてトレーナーに不満があるのか。それならうちに来るか?」

「違う!」

「そんな怒るなって。俺のトレーナーは良いぞ。この間だって見事な采配で、ここのジムに勝ったしな。あそこまで才能のあるトレーナーはそうそういねえぜ」

才能のあるトレーナーか。ナナだって才能はある。それこそ、そこ

のパチリスのトレーナーとは引けを取らないくらいあるだろう。

「パチリスは不安に思わないのか？」

「ん？」

「トレーナーが天才過ぎて、もしかしたら自分が足を引つ張っているんじゃないかって思うことはないのか？ 自分なんかいない方が高見に行けると思うことは……」

「ああ、そういうことか。正直言うと俺もある」

「やっぱりそうなのか。しかしパチリスはどうして憂鬱にならないのだろうか。そんなトレーナーに付いていけるのだろうか。」

「……でも、それはトレーナーも同じなんだよ。トレーナーだって『ポケモンが優秀過ぎて自分のせいで全力を出せていないんじゃないか』って不安を抱えてる。だから互いに同じだと思うようになったら少し楽になった！」

「そうか……」

「お前が不安に思うってことは同じことをトレーナーだって不安に思っているはずだ。だから俺は強くなって相手に勝って『それは違う』ってことをトレーナーに教えてやるしかないと思った」

「……それでも勝てなかったら？」

「さあな。でも俺も全力、トレーナーも全力なら絶対に負けない。もしも負けたなら、お前自身が全力を出せていなかったんじゃないか？」

「全力か。あの時に勝てなかったのは俺がどこか本気になれずいたから。トロピウスの時は命の危険があったから全力だった。しかしジム戦は負けても死ぬことはない、心のどこかで気が抜けていたのかもしれない。」

「……ダークライ!!」

「そんな時だった。ナナが寝巻きのままこちらに走ってきた。髪もボサボサで息も切らしている。きつと街中を走り回って探したのだろう、この寒い夜の街の中で……」

「ここまで探しにくるなんて良いトレーナーじゃねえか」

「なら俺も良いトレーナーか？ パチリス」

「もちろん。ノエル」

そして反対側から白いロングコートを羽織った少年が現れる。そして少年の後ろにはダイオウゾクムシと武者を合わせたようなポケモンがいた。明らかに強そうなポケモン。あの時に見たポケモンとはまるで違う。この短期間にここまで変わるものなのか。そしてノエルの姿を確認するとパチリスは尻尾を振りながらノエルに駆け寄る。ノエルは駆け寄ってきたパチリスを優しく抱き抱えて撫でるとボールに戻した。

「久しぶり。ナナ」

「……あなたのゴソクムシ。グソクムシヤに進化したのね」

「ああ。なんていったって俺はチャンピオンになるからな」

「チャンピオンになるのは私よ」

ノエル。ナナと同じエラニの村出身のトレーナー。そしてナナの同期。しかし貫禄が明らかに数日前に旅を始めたトレーナーのものではない。それこそベテラントレーナーが纏うようなものだ。

「……期待を裏切らないでくれよ。俺の最大のライバル」

それだけいうとノエルは去っていった。グソクムシヤとパチリスを連れて……

ナナはそんなノエルを遠目に見ながら、そつと呟いた。

「さすがね……この短期間でグソクムシヤまで進化させるなんて」

それからナナは背後から僕に抱きついた。力強く抱きついた。そして泣きながら僕に言う。

「そしてダークライ……私を捨てないで……私にはあなたが必要なのだ！」

「ナナ……」

「私に悪いところがあったなら直すから！ 私はまだまだ貴方と旅をしたいの！ 弱くてもいいから貴方といたいのだ！」

僕もそつとナナを抱き返した。ほんとうに僕がナナと一緒にいても良いのか。きっとそれは良いのだろう。ナナ自身が僕がいなくて困るのだろう。

「……ダークライ」

「スマン……」

「私だつてごめんなさい。貴方のこと分かった気になつて、なにも分かつてなかつた」

「モット……強くナリタイ」

その言葉にナナが虚を衝かれたような反応をする。

それから、すぐに二つ返事で答えた。

「そうだね。私も強くなりたい。ダークライの力をもっと引き出せるくらい強くなりたい。だから一緒に強くなるう？」

その日から僕は晴れてナナのパートナーになれた気がした。

一人で強くなるんじゃない。一緒に強くなるんだ。ナナと二人で強くなるのだ。

これは僕が好きなの人の夢を叶える物語。

そして、僕とナナの二人で強くなる物語だ。

2 動き出す組織

13話 悪の組織

ハクガシテイを無事に知られる。そう思っていたのは幻想だった。現在、僕はソリから振り下ろされないように必死にしがみついていた。

これはハクガシテイ名物のオドシシの引っ張るソリに乗って山を下るものである。乗っている理由としては簡単だ。ナナが山下りは疲れるから嫌だと言ったからだ。

「ダークライ。ボールに今だけ戻れば？」

「ア、アア……」

今までボールから出て旅をしていた。理由としては簡単でナナと一緒にいたかったから。しかしさすがにこれは限界だ。僕はナナに言われた通り。大人しくボールに戻る。

そしてナナは何事もないかのように高速で山を下るソリの中で本を読んでいた。

山を下り終えて、雪林に着く。そして周りの安全を確認してからナナが僕をボールから出した。外の空気が体に染み渡る。やっぱり外の方が良いな。うん。

「……さて行きましようか」

雪道を西に向かって歩く。歩いていくたびに雪は減っていく。もう雪ともお別れか。そういえば次の街は海のほうだと言っていた。次の街は暖かいのだろうか？

「ここからカイヨウシテイまで結構、距離があるのよね。雪道が終わったら次は林。そこを抜けたら大きな平原に出て、まっすぐ歩くとカイヨウシテイよ」

「ウム……」

「まあどこかで野宿でもしましょう」

そんな時だった。ナナの目の前に二人のスーツ姿の男が立ち塞がった。しかも明らかに敵意を向けている。

「フフツ。ダークライなんて随分と珍しいポケモンを連れてますね」

「なんか私に用があるんですか？」

「はい。あなたのダークライを頂ければと思ひまして」

「お断りよ」

「それなら力づくで」

スーツの男二人が同時にボールを投げる。それは物凄い目付きが悪いポケモンだった。目の色が充血したように赤くなっており、邪悪な禍々しいオーラを放つヒトカゲが二体。

あれ？ おかしい。初めてのはずなのに、これに似たようなポケモンをどこかで見た気がする。

「……なに、そのポケモンは！」

「これは科学の力ですよ。我々『ゴウー団』の科学によって無理矢理、力を引き出したポケモン。名付けて『ダークポケモン』」

まずい。これは明らかに関わってはいけない団体だ。あまりこういう表現はしたくないのだが、恐らく『悪の組織』だろう。

「あなた達！ そんなことが許されると思ってるの？」

「強さだけが正義です」

「ダークライ。あやしいかぜ！」

僕は言われた通りにあやしいかぜでヒトカゲを吹き飛ばした。ヒトカゲが少しだけ痛がる素振りを見せる。しかし、なんともなかったかのように起き上がり、再び襲いかかってくる。仕方ない。ならもう一度だ。そう思った時だった。僕はナナに無理矢理ボールに戻された。ナナはボールに戻すなり、すぐに林の中を走る。それに対してゴウー団と名乗った輩も追ってくる。

「あれは間違いなくヤバいわ！ 勝てる勝てないの問題じゃない。ダークライ。絶対に正面から戦ったらダメ！ 私もダークライも怪我なんかじゃ済まない！」

ナナがボール越しにそう言って林の中を走り回る。しかしヒトカゲも追ってくる。炎を吐き、林を焼きながら追ってくる。なんだ、あのヒトカゲは……

「二応言っておくけど私もあのヒトカゲについてはなにも知らない

わ。それにダークポケモンなんて言葉に心当たりもない！ 完全に
非合法的なにかよ！」

そしてナナは茂みに飛び込んで、息を潜める。

「……あの小娘。どこに行きましたかね？」

「俺は知らねえぞ。しかしダークライを連れたトレーナーが本当にいるとは」

「まあいいです。今は戻りますよ」

そういうと男達は禍々しいオーラを放つユンゲラーを出して、テレポートをして、この場から去っていった。しかしナナもその場から動かない。いや、正しくは腰が抜けて動けないと言った方が正しいのかもしれない……

僕はナナを安心させるべく無理矢理ボールから出て、声をかける。

「ナナ……」

「ダークライ。もう大丈夫よ、起き上がるのに少し手を貸してくれる？」

僕はナナに手を貸す。ナナはそれを掴み、立ち上がった。今の連中は明らかにヤバそうな雰囲気だった。もしも、あの連中に捕まったら……

「……はあ怖かった」

明るそうに言うがナナの声は震えていた。しかしダークポケモン。生前にどこかで見た気がするんだよなあ。しかし間違いなくゲームには無かった要素。それじゃあどこで見たのだろうか？

しばらく考える。そして思い出した。ダークポケモンはポケモンGOの要素だ。ポケモンGOは本家の方ではないポケモンのゲーム。位置情報を使ったスマホで出来るゲームで一時期社会現象になっていた。そしてなんで知っているかと言うと偶然ネットニュースで取り上げられているのを見たからだ。しかしGOの方ではシャドウポケモンと呼ばれていたはずだ。それにGOロケット団という輩が使う技術で……

「とりあえずジュンサーさんに報告しなきゃ……」

ナナは携帯電話を使ってジュンサーさんに話す。しかし、シャドウ

ポケモン。そのことをなんとかして人間に伝えられれば良いのだが……

僕は人間の言葉を喋れるとは言え、カタコトだ。それに長時間の会話は難しい。一度に話せて数種類の単語くらいだ。それに実は喋るのは疲れる。相槌くらいなら問題なく出来るのだが……それ以上になるとキツイ。つまり喋って伝えるのは難しい。もしも間違って受け取られたら大変だ。

そして、ここにきて現れたポケモンGOの要素。今までは基本的にポケモン本編の要素だけだと考えていたが、それは違う可能性が出てきた。この世界はもしかしたら僕の知っているポケモンとは大きく異なるのかもしれない。クソ。どこかで僕と同じ転生者に会えば色々この世界について照らし合わせることが出来るというのに！

「しかし許せない……すごくヒトカゲが苦しそうだった」

「……ナラ。ドウスル？」

「なにも出来ないわよ。漫画の主人公なら立ち向かうのだろうけど、私は出来ない。だから悔しいのよ」

しかし狙いは完全に僕だった。それに僕はダークライ。あいつらのポケモンはダークポケモン。つまり『ダーク』が被っているのだ。いや、さすがにそれは考え過ぎか。

それから数分が経つとジュンサーさんが来た。ジュンサーさんは、ポケモンの世界で警察に位置する存在だ。そして、それとは別に色々な地方に飛び回り、世界的な犯罪の対処をする国際警察なんていうものもいるらしいが……

「なるほど……ダークポケモンにスーツの人間。そしてゴウー団ですか」

「はい」

「ゴウー団は人からポケモンを取って、そのポケモンを改造して戦わせたりする組織。そして三値説の信仰者の集まりです。そして目的は強くなること。ただそれだけの集団という話。最近は各地で被害報告が増えています……」

「強くなりたいたなら普通にポケモンを育てなさいよ」

ナナが呆れたように言う。しかしジュンサーさんは違った。

「それが奴らにとつて普通なのです。三値を信じて、良い個体が生まれるまで厳選して、そのポケモンをダークポケモンにしてさらに強くする。しかもそれだけに留まらず、人のポケモンを奪うこともある。でも、それが奴らにとつて当たり前なのです」

「狂ってるわ」

「そうですね。しかし強いのは事実です」

そうして被害届を出して、近くのポケモンセンターまで送ってもらい、ジュンサーさんと別れた。ポケモンセンターは活気があった。バトルをするトレーナーに、コーヒーを飲みながらポケモンと新聞を読むトレーナー。そんな様々なトレーナーがいた。

またナナは僕をボールから出しているの、物珍しさに勝負を挑むトレーナーもいた。もちろんナナは苦戦の一つもすることなく勝った。

しかし、あの事件を受けて僕をボールから出しているのは危険だと思うのだが、ナナいわく既に私の顔写真が組織内で出回っているだろうから隠す意味は無いとのことだった。

「現在二十八連勝。それなりに小遣いもあり」

ナナは財布をジャラジャラと鳴らしながら、そう言った。今回は初心者狩りではない。勝負を仕掛けてきた相手を返り討ちにしたただだ。恐らくなんの問題もないだろう。

「しかし外に出ればゴウー団に襲われる可能性もあり。旅を再開するのは危険。さて、どうしたものか」

旅はここにきて、壁にぶち当たっていた。ゲームなら悪の組織は返り討ちとなにも考えずに冒険していたが、現実はそうもいかない。ナナの言う通り勝てる勝てないの問題じゃないのだ。単純に危険すぎる。それが一番の大きな問題なのだ。

旅に危険は付き物なのは分かりきっていたこと。事実としてトロピウスとの戦いの時はこの上なく危険だった。しかし、あの時は悪意はなかった。だが今回は悪意がある。

「やあーやあーお困りのようだね」

「……またバトル？　ほんとに懲りないわねえ」

そんな手詰まりの中で黒い猫耳パーカーを着た女の子が声をかける。

声をかけてきた人に呆れたようにナナは返事する。しかし声の主は首を横に振った。猫耳パーカーで隠れていて顔は良く見えない。それじゃあ一体なんの用だというのか……

「あなたは！」

その時だった。ナナが声を挙げた。少しだけ喜びが混ざった声。彼女がフードを捲る。その顔は見覚えのあるものだった。忘れもしない。僕の初めてのバトルの相手。

「久しぶり！　ナナ！」

「メア！」

「困ってるようだから親友の私が来たよ！　嬉しい？」

14話　メアの戦い方

ナナとメアが親友かどうかはさておき、友人であるのはたしかだ。「そういえばナナはジムバッジいくつなの？」

「一つよ」

「それじゃあハクガのジムに勝ったんだ！　おめでとう！　まあナナなら楽勝だよね」

「楽勝でもなかったかな……というよりかなりギリギリだった」

「……ふーん。ジムリーダーってナナより強いんだ」

そういえばメアはナナより先に旅に出たよな。それなら先にハクガシティに着いてジム戦をしているはずだ。しかし口振りから察するにジム戦をしてないようだ。そう疑問に思っていると僕の疑問を察したのかナナが補足する。

「メアはトレーナーじゃないの。だからジム巡りもしてないのよ」

「ナルホド……」

「そうそう。まあそこら辺のトレーナーに負ける気はしないけどね。ちなみに私が旅をしている理由はアイドルになるため！　それにポルノは国際警察の一員になるために旅をしてるんだ。純粋にチャンピオンを目指して旅してるのってナナとノエルだけなんだよ」

旅をするということはチャンピオンを目指すということだと思っていた。しかし考えてみればポケモンの世界だって色々な仕事がある。そっち方面を目指すために旅をするトレーナーがいてもおかしくないだろう。

「もつとも一般的なアイドルは可愛くて歌って踊ればなれるんだけどね。でも私はそれに加えて戦えるアイドルになりたいんだ」

ちなみにポケモントレーナーというのはポケモンを持っているだけで名乗るものではない。一般的にポケモンを戦わせて生計を立てる人のことだ。つまり生計を立てる以外の目的でポケモンを戦わせる人は一般的にはトレーナーと呼ばないのだ。

しかし、この世界ではありとあらゆる職業でポケモンの知識があった方が便利である。それほどまでにポケモンの存在は人間の社会に

溶け込んでいた。そして、ポケモンの知識を深めるために旅をする人も多い。

「そうだ！ 折角だから私と戦おうよ！」

「いいわよ。でもお金を取られて泣かないでね？」

「ナナこそね」

そうしてポケモンバトルが始まった。勝負は1V51。ナナは僕を使うようだ。だから今回はムンナの順番は無し。相手が出すのは恐らくハスボー。それが進化してハスブレロか……

「お願い！ ニンファイア！」

「ファイア！（はい。ニンファイアちゃんの登場です！）」

あの時とは違うポケモンか。四つ足で純白の体。そしてピンクの耳、リボンのような触角がある全体的に可愛いポケモンだ。

「……ダークライ。侮らないで。相手はフェアリータイプで相性は不利よ」

いや、待て！ フェアリータイプってなんだよ！ ポケモンは全部で十七タイプだろ！ そんなツツコミも間に合わず電光掲示板にバトル開始の合図がされる。

「それじゃあ！ 戦闘開始！ ニンファイア！ スピードスター！」

「上に飛んでダークライ！」

こちらにピンク色の星が飛んでくる。ナナの指示を受けて迷わず反応したため、なんとか回避に成功するが、すぐに次の星が飛んでくる。僕はそれを自己判断であやしいかぜを使い、星と一緒にニンフィアを叩き落した。いくらナナが優秀だと言っても指示の伝達にはコマ数秒はかかる。だから時には自分で考えて動くことも必要だと判断した。そしてナナなら僕の考えを汲んで、すぐに適切な指示を送れる。そういうトレーナーだ。

「ナイス！ ダークライ！ そのままやきつくす！」

予想通りにナナも僕の意図を理解して、驚くことなく追撃の指示を出す。

いつものように青い炎を出して、地面に走らせて、ニンファイアに襲い掛かる。

しかしニンファイアはすぐに態勢を立て直した。そしてメアもニンファイアにすぐに指示を出す。

「ニンファイア。あまごいで炎を弱めたら、ようせいのかげで掻き消して！」

「ファイア！（熱いのは嫌いなのに！）」

暗雲がフィールド上空に生まれ、大雨が降り注ぐ。ニンファイアに襲い掛かろうとした炎は勢いは弱くする。それからニンファイアは吠えて、上風を起こして炎を掻き消した。普通ならこの程度の風で炎が消えることはない。しかし雨で弱まっていたのが、あまりに致命的過ぎた。

「ライブに火器の持ち込みは厳禁！」

「……なんて組み合わせ」

「攻撃技も工夫次第で防御に転用できる。学校で習ったよね？」

「ファイア（もつともすぐに止むけどね）」

「続いてにほんばれ！」

雨はニンファイアの言った通り数秒で止んだ。いや、正しくは止まされたのだ。天気はすぐに晴天になって。室内にも関わらず太陽光が降り注ぐ。仕組みなど分からない。ポケモンのワザとはそういうものなのだ。しかし、ここでなぜにほんばれをした？

僕もナナも意図が分からずにいた。そしてナナがメアに問いかける。これは明らかに炎技持ちのこちらに有利すぎる行為だ。

「にほんばれをすると炎技の威力が上がる。それはメアもご存知のはずよ」

「ええ。でも周りが見えない？」

メアに言われて辺りを見回す。すると辺りには虹がかかっていた。

まさか先程の雨は炎を消すためではないというのか！ 虹を作るためだけに雨を降らせたのか！

「メア。ふざけているの？」

「真面目だよ。そして私が目指すのはアイドルよ！」

「ファイア！（さあここからが本番だよ！）」

「

それと同時にメアはルンパツパを出した。しかしフィールドの外。ルール違反擦れ擦れだがアウトではない。そしてルンパツパはギターを持っていて音楽を奏で始める。

そしてメアが綺麗な歌声で歌いながら、踊り始める。

「……まさか！」

「フィィアア！（優れた音楽は生き物の更なる力を引き出す！）」

「ダークライ！ 出来る限りニンフィアと距離を取って！」

しかしニンフィアの方が早い。ニンフィアは僕より早く動き、背後を取り、後ろ蹴りを食らわせる。

それもトレーナーの指示を一切受けることなく。かなりの痛みを伴ったが、なんとか踏みとどまる。

だが、明らかに先程より早い！ 一体どうなっている！

「自己判断による行動。メアは歌っていて指示が出せない。だから、その場でニンフィアが最適解を考えて動いている。そして特性はフェアリースキン。それによりニンフィアの攻撃は全てフェアリータイプになり、あくタイプのダークライは抜群を突かれる……厄介ね」

「……ナー！」

「歌も無意味じゃない。ニンフィアはメアの歌で気分が高揚している。少し電子ゲームで使う表現をするならば歌と踊りでバフをかけている」

「ご名答！ これがアイドルの戦い方だよ！ ニンフィア決めるよ！」

曲が間奏の部分になり、メアが受け答えした。初めて見る戦い方だ。そして明らかに歪な戦い方。だけど間違いなく言える。メアのトレーナーの腕はかなりのものだ。ポケモンの力の引き出し方というものを把握している。現に僕の身体能力は上がっていない。恐らく、この歌はニンフィアにしか効かない。ニンフィアのための歌……

「ドレインキッス！」

「フィア。（お疲れ様）」

ニンフィアが僕に近づいてキスをした。それに体力がゴツソリ吸

われて、身動き一つ取れなくなっていく。まるで体が干からびていくようだ……

「戦闘終了かな？」

体を動かそうとする。しかし動かない。電光掲示板にそれを見て勝者ニンフィアの表記がされる。それを見てナナが僕に寄ってきて傷薬を使った。するとみるみるうちに体力が回復していき、体が動くようになる。

「これが私の戦い方。虹でなにもない場所をステージに変えて、歌でポケモンのテンションを上げていつも以上の力を引き出す。指示を出すだけがトレーナーじゃないんだよ」

「初めて見たわ……」

「今まで理論はあったんだよ。だけど指示を出さなくても技を撃てるポケモンっていうのがいなくてね。そんな時に賢いイーブイを見つけたの」

完全に初めて見る戦い方。しかし、どこか反則の気がする。たしかにルールは破っていないのだが、どうも納得いかぬ。これじゃあまるでニンフィアに負けたというよりトレーナーに負けたという感じだ。もつともポケモンと人間が互いに力を引き出し合っているわけだから理想形の関係と言えば理想的なのだが……

「これでリベンジ達成だよ。ナナ」

「次は負けないわよ」

そして勝負が終わるとナナは少くない金銭をメルに支払っていた。もつともこの前に二十八連勝なんていう記録が立つくらい。つまり全体で見れば黒字だ。そして、それからメアと一緒に夕食を取ることになった。どうやらナナのにもメアがの戦術は気になるところがあるようだ。

「ねえナナ。私の戦い方をどうやって突破する？」

「そうね……ハイパーボイスで歌を掻き消す。黒い霧を使うというものもありね。それに一時的な身体能力強化なら吠えるとかで強制的に交代をさせるっていうのも悪くはないわね」

「うんうん」

「でも一番手軽な対策は歌が終わるまで待つこと。例えばダークライのあやしいかぜの追加効果による身体能力とかはボールに戻すまで有効。しかしメアの歌は『メアが歌をやめたら解除される』じゃないかしら?」

「そうね。でもそれが出来るトレーナーが何人いるのかな?」

これがナナの同期の実力。ノエルといい、メルといい凄いトレーナーばかりだ。事実としてメアの歌が歌い終わるまで待つのは困難を極めるだろう。これならナナが学校で最下位だというのも領ける。それほどまでにメアは強かった。

「それにナナは一つだけ読み誤った」

「どこかしら?」

「私が指示を出していないという点。たしかに技の指示は出していないよ。でも動きの指示はすべて出してるんだよ」

「どうやって!」

「踊り。踊りの足の動きや靴底を鳴らす音で指示を出してるんだ」

「驚いた。ほんとにすごい技術ね」

ナナでさえ見抜けない合図。ナナレベルの人間を誤魔化せるなら相手に動きがバレることはまずありえない。しかも、これだけの実力でバトルは本業ではないと言っただけから驚きだ。

「私は見つけたいの。私にしか出来ないポケモンバトル、私にしか出来ないポケモンとの関わり方を。そして、それを見つげるために旅をしてるの」

「素敵ね」

自分にしか出来ないポケモンバトル。ナナはその言葉を静かに呟いた。なんとなくナナの考えていることが分かる。きっとナナは悩んでいるんだ。今の戦い方は本当に自分にしか出来ない戦い方なのかと。それこそパチリスの言った通り、ナナはここに来て自分の戦い方を疑い出している。それこそ『私は本当に僕たちの力を最大限に引き出せているのか』と。

でも同時に確信した。ナナはトレーナーとして申し分ない。しかもっと先にいける。まだまだ強くなれる。

「……メル。もつと教えて！ あなたの戦い方を！ 私も見つけたい。自分だけの戦い方を！ そのために色々なトレーナーの戦い方を知りたいの！」

ポケモンバトルを通して強くなるのはポケモンだけではない。トレーナーもそうなのだ。色々なトレーナーと戦って戦術を見て学ぶ。自分の想像もつかない観的からのポケモンのアプローチを知って、視野を広める。そうしてトレーナーとしてのレベルも上げていく。

「いよいよ！」

メアとの勝負。結果としては負けたが得られたものは大きかった。

15話 新しい技

あれから数時間メアと話した後にはナナは部屋に戻った。そしてペンと紙を持ってなにかを箇条書きしていた。そして途中で力尽きたのか、ぶつ倒れて寝た。

軽く横目でナナが書いていたものを見ると今までのポケモンバトルの内容が詳細に書かれていた。しかも書いてあるだけではない。負けた勝負は赤ペンでどうすれば勝てたのか。勝てた勝負は青ペンでどうすればもっと安定して勝てたのか。そして、どちらも共通して、そのトレーナーの癖と戦闘スタイルを書いていた。ナナは今までの対戦を振り返りながら、自分にしか出来ない戦い方を模索しているのだ。

次の日、ナナは視線を外すことなくずっと他人のポケモンバトルを見ていた。そして気付いたことがある。すぐにはメモするようになっていた。そしてポケモンバトルを見て二時間が経とうとした時だった。

「スリーパー。さいみんじゅつ」

「クソツッ！ 避ける！ コラツタ！」

「無駄です。かなしばりされたのを忘れました？」

その勝負の途中、ナナが急に立ち上がった。まるでなにかを閃いたかのようなだった。一体なにが分かったというのだろうか……

「……コラツタ……眠り！ どうして私は忘れてたんだろ！」

「ン？」

「ダークライ。やっと分かった！ あなたの本当の強さを引き出す方法が！ お兄ちゃんの言っていた意味が！」

それからナナは本を出した。山を下る時にソリで読んでいた本。タイトルは『シンオウ地方の怖いポケモン』というものだ。

「この百二十一ページ。【黒一色のポケモンが放つ闇の玉に触れた時、ありとあらゆるポケモンは立っていられない】恐らくそれは眠ったから！ そして！」

ナナが走り、ポケモンセンターの図書コーナーに行く。そこで『ポケモンの技大百科』という分厚い本を取り出し、とあるページを開い

た。そこには『ダークホール』と書かれていた。

「この技は今まで『ゆびをふる』という技でしか起こされていない技。この技は広範囲に触れたら即眠りの闇の玉を放つとされている強力な技。おそらく未発見のポケモンの限定技だろうと考察されていたの」

「ウム」

「さっきの『シンオウ地方の怖いポケモン』の内容と照らし合わせる。おそらく黒一色のポケモンというのはダークライ。そして使った技はダークホール。つまりダークホールを貴方なら使えるのよ！ダークライ！」

ナナは鼻息を荒くしながら興奮してそう言った。ダークホール。それを覚えた時がダークライの真価を発揮する時。そしてチャンピオンが言っていたダークライの本当の強さ。

「ダークライの強み。それは眠らせることにあるのだわ！」

しかし、ダークホールってどうやってやるのだろうか。

技の存在は分かった。しかしどうやって撃てばいいのだろうか。ダークホールという技のイメージが一切出来ない。闇の玉を放つ。つまり闇を作るということだ。それは一体どうやってやるのだろうか……

「そして、もう一つ」

「……ナンダ？」

「今までの戦いを振り返って分かったのだけどダークライには攻撃力が足りないわ。あやしいかぜもやきつくすもそれなりに使えているけど、それはダークライの攻撃力が高いから。本来は威力の低い技。だからダークホールに加えて『あくのはどう』を覚えるのよ！」

あくのはどう。これはどんな技なのだろうか。僕に習得できる技なのだろうか……

「あくのはどうはダークホールと違って色々なポケモンが使用している実例があるわ。体から悪意に満ちた恐ろしいオーラを発生させる技」

悪意か。それまた難しい注文だ……

そんな時、ナナのボールが揺れて勝手にムンナが出てきた。

「ンナッ！（悪意なら俺の専門分野だぜ！）」

「どうしたの？」

「ムンナアアア！（ちよつと表に出な！）」

ムンナは勝手にプカプカと歩いていき、どや顔で付いてくるように促す。そうして案内されたのはなんの変哲もないトレーニングスペースだった。

「ンンナ！　ンンンンナアアア！（人間ども！　ちよつと死に晒せえええ！）」

物騒なことを言いながら嫌悪を覚えるオーラを纏うムンナ。そして、そのオーラを一転凝縮させて、口から黒と紫色の光線を放った。それはもの凄い威力で遠くに積んであったタイヤの山を吹き飛ばした。これを見て、ナナが啞然とする。

「ねえダークライ。普通のムンナってあくのはどう覚えなのよ」「エ？」

「それをボールの外から概要を聞いただけで撃てるなんて少し凄すぎない？」

「ンナッ！（どんなもんだい！）」

「あとムンナ大好き！」

ナナがムンナをギュッと抱きしめる。それに対してムンナは赤面する。

「ン、ンナ！　ンンンナ！（や、やめろよ！　恥ずかしい！）」

しかしムンナも満更でもなさそうだ。

「でも、この子。ほんとに頭いいわよ。本来は覚えないころがる。それにあくのはどうも覚えているんだもん。ここまで優秀な個体は滅多にいないわ」

「ンナ！　ンンンンンナ！（ころがるは普通のムンナでも出来る！　ていうか丸っぽいポケモンなら殆ど出来るわ！）」

しかし、これがあくのはどうか。人を憎み、そのエネルギーを一点に集めて放出する技。

なんとなくイメージは出来たが、だが悪意か……

「ンンンナア（あのゴウー団を思い出せ）」

ムンナが横でそう言う。ゴウー団。あいつらのことを思い出す。あのふざけた連中のことを……

「ンナ。（あいつらのせいで俺達の旅は止まってる）」

そうだな。あいつらがいなければ、なんの問題もなく旅に出るんだろうな。そう思ってた矢先だった。ムンナがあくびをした。僕はそれを間近で見て、眠りに落ちた。

※

目を覚ますと森の中。そしてナナの隣を普通に歩く。あれ？ 俺はなにを……

バンツ

そんな銃声が鳴ってナナが倒れる。僕はすぐにナナに駆け寄ろうとする。しかし後ろから網が飛んできて、身動きが取れなくなる。必死に足掻くが網は解けない。

そして近くに男がやってくる。間違いなくゴウー団だ。

「ガキの死亡確認。ダーククライ捕獲。さあダーククライ。俺が新しいパートナーだ」

誰がお前なんかのポケモンになるか！ そう叫ぼうとした時にブツリと意識が途切れた。

※

目を覚ますとナナがいた。そして普通にムンナもいる。これは一体なんなんだ……

今のは夢か。なにが起こった？

「ンンナ（今の夢でどう思った）」

ああ。そういうことかよ！ 分かったよ！ やってやるよ！

あの夢の時にもものすごい怒りが湧いたよ。自分でもおかしくなりそうなくらいドス黒い感情が湧いたよ！ そしてこれが悪意ってことなんだな！

今の感情をそのまま解き放つ。辺りが吹き飛ぶ。これがあくのは

どうか……

そんな時だった。ナナに抱かれているムンナが軽く叩かれて、ナナに怒られる。

「ンナッ！（いたっ！）」

「ムンナ。いつの間に『あくむ』なんて技を覚えて……そんな凶悪な技を勝手に使わないの」

「ンンナッ！（でも、あくのはどうの初歩は出来たじゃねえか！）」

「ていうか、このムンナ。明らかに覚えられる技が四つ超えてそうね……」

「ンンナッ！（あったりめえだ！ そこらのポケモンと一緒にするな！）」

ちなみに後ほどナナに聞いたところポケモンが覚えられる技に理論上は上限がないみたいだ。しかしポケモンが覚えられる技の数の平均を取ったところ四という数字になったことから多くのトレーナーはポケモンの技は最低四つ、多くても六つという前提で考える。ちなみに技を十も覚えるカイリユウというデタラメな存在もいるとか……

そしてもちろんだが技が一つしか覚えられないポケモンもいる。

「あくむ、あくび、ころがる、おんがえし、あくのはどう……恐らくやつあたりはおんがえしと入れ替わりで忘れただろうから現在五つね」
そのタイミングでナナの携帯が鳴った。どうやらメールが来たらしい。

ナナは溜息を洩らしながらムンナを戻した。そして僕に一言だけ言う。

「ダークライ。ちょっと訳ありで、ポケモンセンターから出るわよ！」

ポケモンセンターから出る！ ちょっと危険じゃないか！

「行き先はここから少し先にある墓場。歩いて三時間くらいの距離かな。ノエルがピンチみたいなの！ そしてこれが片付いたら旅を再開するわよ」

16話 戦友

「ナナ！ 私も行くわ！」

ポケモンセンターをナナが出ようとした時だった。メアがナナの後を追ってきて、声をかける。ナナは振り返ることなくメアに言った。

「あなたにもノエルからメールが！」

「ええ！ おそらく……」

「おう、お前ら！ ノエルからの指示だろ！ 乗っていけ！」

そんなタイミングでウインデイに乗ったボルノが現れる。ナナもメアは頷くと躊躇うことなくウインデイに乗った。そして乗ると同時にナナは僕をボールに戻した。

「タイミングから考えてメールは三人に一斉に送信されたよね」

「状況から判断してなにかあったのは間違いない」

「メールの内容は『早急に手を貸してほしい。場所は森の墓場』という内容だけ」

なるほど。なんとなく事態は掴めてきた。ノエルは間違いなく何者かに襲われている。そして、その相手はノエルの手に余る相手だと判断したから援軍を呼んだ。そんなところだろう。そしてナナ達はノエルに手を貸すために、動いた。

「……でも、なんでジョンサーさんじゃないんだ？」

「理由は二つだと思う。一つ目は電話を出来る状況じゃない。そして二つ目は私達の方が早く着くから。誕生日に先生から私達の貰った石を覚えてる？」

「ああ。メアがみずのいし、オラがほのおのいし」

「そして私がつきのいし、ノエルがやみのいし。恐らくノエルの貰った石を覚えていて、ガーデイを捕まえてウインデイにしていると考えるからだと思う」

「たしかにウインデイの速さはポケモンでも指折り。着くのは一瞬だと考えたわけか！」

そんな話をしていると墓場で数人相手に戦ってるノエルが見えた。

相手はゴウー団か！

「パチリス！ ほうでんだ！」

同時に数十体の禍々しいオーラを放つポケモンを倒す。しかしポケモン達はすぐに起き上がってくる。そしてナナはムンナを出して、あくのはどうでダークポケモンを吹き飛ばす。そしてメアはルンパツパのみずでっぼう。ボルノはそのままウエンデイにかえんほうしやをさせて相手のポケモンを抑制しながら登場する。

「みんな！」

「シエル！ 状況は！」

「見ての通りだ！ 怪しい奴らに襲われている！」

「あとは任せて！」

「気を付けろ。奴らのポケモンは何度でも起き上がってくるぞ」

見た感じだとポケモンは約十三体いた。どれもダークポケモンだ。そして団員の数は四人。三人はスーツだが、一人だけは赤いスーツだ。恐らく黒スーツは下っ端。そして赤スーツは偉い役職の人か。

しかしノエルは十三体ものポケモンと同時にやりあっていたのか。それだけでも相当の実力だと分かる。しかも見た感じだとパチリスは無傷。もつとも疲れてきてはいるが。

「ガキが増えて面倒ですね。早く始末してしまいなさい」

「イエッサー」

「やれやれ……大人しくグソクムシャを寄越せばいい話だというのに」

「ニンファイア！ お願い！」

メアがニンファイアを繰り出す。それを見てボルノもフシギソウを出した。なるほど。たしかにポケモンを複数出さない理由はないな。

「……ナナ！ ノエル！ 他のポケモンは！」

「まだなにがあるか分からないわ。動けるポケモンを一体は残しておいた方がいいと思う」

「ナナに同じく。だから僕もグソクムシャは温存だ」

「そういうことですか。そろそろ時間もありませんし、舐められるのも癪なので私も動くしましょう」

赤いスーツの男はそう言うのとボールからスピアーを出した。もちろんダークポケモンだ。そしてスピアーはとてつもない速さでシザークロスを撃ち、ニンフィアとフシギソウを吹き飛ばした。フシギソウはなんとか踏ん張るもニンフィアはその一撃で戦闘不能になる。メアはニンフィアをボールに戻すと悔しそうに赤いスーツの男を睨むしかなかった。

「スピアー。フシギソウにもう一度シザークロス」

「……ピア（……助けて）」

スピアーがシザークロスでフシギソウを吹き飛ばして戦闘不能に追い込む。そしてスピアーの声を聴いて僕はボールから飛び出してスピアーにあくのはどうを撃っていた。やっと初歩に踏み込んで、まだ完成には程遠かった技。しかし今の一撃は完璧に成功していた。今ならハッキリとやり方が分かる。悪意とはこういうことか。絶対にゴウー団を許さない。

「そうね。あなたなら怒るよね。だって、あのスピアーは……」

それだけ言うとナナはムンナをボールに戻した。ムンナもそれを受け入れる。あのスピアーは僕がエラニの森で戦って初めて負けた個体。自分でも気づかないうちにそんなスピアーに愛着が生まれていたみたいだ。だって、あのスピアーを汚されて、こんなにも怒りが湧いてくるのだから。

「戻って。ムンナ。さすがにこのスピアーはダーククライに集中しないと勝てない」

「ナナ……」

「このスピアーは私とダーククライに引き受けさせて。みんなは他のダークポケモンをお願い！」

「訳ありなんだな！ 分かった！」

それと同時にスピアーは僕の目の前に現れてシザークロスを叩き込む。だけど、一度見た動き。それに僕だってあの時より成長している。見切れないほどではない。

「ダーククライ！ あくのはどうを撃って、すぐに横にずれる！」

ナナの指示を忠実に守る。スピアーにしつかりと一撃を決める。

しかしスピアーはすぐに起き上がり、再びシザークロスが来る。けどナナに言われた通りに動くことで回避に成功する。

「やきつくすでスピアーの動きを封じて、そのままあやしいかぜでぶっ飛ばして！」

スピアーにやきつくすで炎を絡ませる。炎に一瞬だけ怯むが、すぐに炎を払い、シザークロスをしようと接近してくる。しかし僕は既にあやしいかぜを撃つ体制に入っている。そのままあやしいかぜでスピアーを飛ばす。しかも運よく体に力が湧いてくる。恐らくあやしいかぜの追加効果の身体能力強化。これは運がいい。

「さすがダークライ！しかしスピアーは虫タイプのポケモン！相性ではこちらが有利なのですよ！ さっさと止めをさせてしまいなさい！ スピアー！ こうそくいどう！」

「まずい！ 技が避けきれなく……いや、まだいける！ 考えろ！ 私！」

そしてナナが指示をする。右や左と移動する方向を言う。僕も無心で信じて従う。ナナが間違えるわけがない。そんな確信があった。

「……なぜだ！ なぜ当たらない！」

「分かるのよ……スピアーがどう動くか。数秒先のスピアーの動きが手に取るように分かる」

この速さだと目で見てからの判断は間に合わない。だから相手が動く前に指示をするしかないのだ。そのためには予測をするしかない。ナナの観察眼はピカイチだ。その観察眼があるからこそ、スピアーの動きの癖などを全て見切り、未来予知に近い予測をする。

「私はずっと考えていたの。自分にしか出来ない戦い方。そして答えは出た。先生に優れてると褒められた観察眼を使った完全なる予測！ これが私にしか出来ない戦い方よ！」

「そうですか！ でも避けてばかりで攻撃が出来ませんよ！ それにこれ以上速くなったら、もう対応出来ないんじゃないですか！ スピアー！ さらにこうそくいどう……」

「このタイミングでこうそくいどうをするのは予測済み！ そしてこうそくいどうをする時だけは攻撃をやめる必要がある！ ダークラ

イ！ やきつくすとあくのはどうを同時に撃つて！」

言われた通りに技を撃つ。あくのはどうの勢いに乗せて撃つやきつくす。威力はあくのはどうには劣るが、やきつくすの威力が上がる。悪意による上乘せされたやきつくす。虫の弱点は炎。その炎技をストレートに喰らったんだ。もう戦えないはずだ。誰もがそう思っていた。しかし完全に甘い考えだった。僕たちはダークポケモンを舐めすぎていた。

「……ピアッ（戦いたくない）」

「嘘でしょ！」

「さて、スピアー。こうそくいどう」

スピアーのこうそくいどう。もう無理だ。完全に追いつけなくなった。ナナの予測による指示を受けても反応が間に合わないのだ。

「ダーククライ！ 諦めるんじゃないわよ！ まだ勝負は終わってない！」

そんな時にナナに 責を受ける。そうだ。まだ勝負は終わっていない。諦めるには早すぎるのだ。このくらいの困難、乗り越えてやる！

「追いつけない？ ならバトルの中で成長すればいい！ 工夫でも技術でも追いつけないなら、成長で超えていく！」

ナナの叫びと同時に背後から音楽が響いた。それから間もなくメア歌声が響いた。

「ダーククライ。勝負はこれからだよ！ さあ戦闘開始！」

その合図と共に体中から力が湧いてくる。今までの比ではないくらい力が湧く。メアの歌はポケモンの身体能力を上げる。それはニンフィアとの戦いで実践済みだ。

「ナナ！ ダーククライ！ こんな奴らやつつけちゃえ！」

ああ、勝負はこれからか。絶対に勝つ！ そしてスピアーを救う！

17話 四人はいつも

スピアーの動きは先程より明らかに遅くなった。

いや、正確に言うならば僕らの速度があがったのだ。しかし現在も目に追うのがやっとの速さ。だけど今のスピアーの速さならナナの指示を受ければ、スピアーの攻撃を躲してあくのはどうを叩き込む余裕がある。前よりも何倍も威力が高いあくのはどう。それを喰らってもなお起き上がるスピアー。

「なんなのですか！ ダークスピアーが平凡なポケモンに負けるわけが無い！」

「その言葉を覚えておきなさい！ 次はしやがんで下からあくのはどう！」

再びスピアーを吹き飛ばす。しかし、それでも起き上がってくる。

まるでゾンビだ。ていいうか普通に活動限界のはずだ！ ここまでやって倒れないのは明らかにおかしい！

「ダークライ！ 攻撃をやめて！」

「何故だ！」

「このスピアーというよりダークポケモンは恐らく死ぬまで動き続ける！ つまり下手な攻撃はいたずらにスピアーを傷付けるだけよ！」
「よく気付きましたね。そう！ ダークポケモンは死ぬまで動き続ける最強のポケモンなのですよ！」

「……動揺しちゃダメ。恐らく止める方法はなんかしらある」

「ないないない！ そんなものはない！」

それからメアが人差し指を立てた。それを見てナナが冷や汗をか

く。
「ダークライ！ あと一分よ！」

そうだ！ メアの歌が途切れたら一気に身体能力が落ちるのだった。そうすると、スピアーと戦うのが厳しくなるのか。つまり一分以内にどうにかしなければならぬのだ。

「……そういうことなら策がある！」

「ボルノ！」

「スピアーを捕まえるんだ！ 頼む。ノエル！ さつき言った通りだ！」

「グソクムシャ！ であいがしら！」

ノエルがグソクムシャを出すと、グソクムシャは神速で動いて赤いスーツの男の腹を殴り飛ばした。

「グヘボベボカホッ！」

男はそのまま空へと飛んでいき、地面に叩きつけられ、意識を失う。

殴ると同時に起用にグソクムシャはスピアーのボールを器用に掴みとつており、啞えてボールをかみ砕く。まさかトレーナーを直接殴るのか！ それは盲点だった！ 考えてみたらこういう状況ならトレーナーを殴っても問題ないよな！

「ナナ！ これでスピアーは誰のポケモンでもなくなった！ つまり捕まえられる！」

それから同時にグソクムシャはアクアジェットで他の団員に近づき、ボールを奪い取って全て破壊していく。それと同時にノエルとボルノが他のダークポケモンを捕獲していく。

でも、それはまずい！ ナナはボールをポケモンに当てるのが苦手だ。しかも相手は高速で動き回るスピアー。そして、このタイミングでメアの歌が止まる。

「ダークライ。大丈夫。ナナはいぎという時はやる子だから。そして、もうナナの勝ちだよ」

スピアーがこちらに向かってくる。もう少しでシザークロスが当たる。当たったら物凄く痛いだろうなあとか思い始める。そしてスピアーの針が目の前に迫った時だった。スピアーはボールに吸い込まれる、ボールは数度揺れてピロンと鳴って止まった。

「だから言ったでしょ？」

ダメージが来なかったことに安堵する。それからグソクムシャが僕に近づいてきて頭をわしゃわしゃと撫でた。

「ムシャ（よく頑張ったな）」

そうしてグソクムシャは自分でボールに戻っていった。しかし、あのグソクムシャ。相当強いな。男を殴った時に一切の躊躇いがない

かった。それにあの素早さ。あの一瞬での確にボールの場所を判断して、強奪した後に全て破壊したのだ。

「いやあ危なかった。ボルノのボールを壊すという案がなかったらどうなっていたことか」

「しかしノエル。あなたどうして最初からグソクムシヤを使わなかったの？」

「あいつはタイマン用だ。ああいう多数のポケモンを相手したり、同時に複数のポケモンと戦うダブルバトルならパチリスの方が適任だからさ」

「それだけじゃないくせに……最初からダークポケモンが死ぬまで動くことを見破っていた。ダークポケモンを苦しめないために攻撃力が高すぎるグソクムシヤは使わなかった」

「想像に任せるよ」

ナナの問いかけに曖昧な答えをするノエル。しかし、それから付け足すように言った。

「でも死ぬまで戦うというのは本当に知らなかった。知っていたら教えている」

「まあそれは本当でしようね。意地悪なこと聞いて悪かったわね」

そして四人の戦いを見て分かった。みんな相当強い。観察することで完全な予測が出来るナナ。歌でポケモンをパワーアップさせられるメア。ありとあらゆる角度から物事を考えて、機転でどんなピンチだって切り抜けるボルノ。そして圧倒的な実力で全てをねじ伏せるノエル。どれもナナと同格以上と言って差し支えないがいろいろに……

そして恐らく、これから会うトレーナーの中には彼等さえ上回る者もいりだろう。少なくともポケモンリーグに出るトレーナーは彼等以上の天才……

それから間もなくジュンサーさんが来て、彼等の身柄は引き渡された。これから詳しく調べることでゴウー団の内情も分かるだろうとのこと。また赤いスーツの男を捕まえたことで少しはゴウー団の動きが大人しくなるだろうとも言っていた。つまり問題なく旅を再開

出来る

そして捕獲したダークポケモン。それに関しては既に元に戻す機械を開発済みであり、すぐに戻れるだろうとのことだった。しかしトラウマは残り、人間に怯えながら生きていくだろうとも言っていた。ちなみに機械に関して言えば開発したのはナナの先生を兼任していた、あの人だ。しかもダークポケモンの個体を確認してから三日で完成させたとか……

なにはともあれ、ゴウー団の一件はとりあえず解決した。

「……いや、だから絶対にヤドンの尻尾料理は残虐よ！」

「でもアローラの家庭料理だぜ」

それから間もなくして、理由はともかく四人集まったんだからということでポケモンセンターの一部屋を借りて打ち上げも兼ねた宴会をしていた。もちろん手持ちの全てのポケモンを出してだ。

「そもそもオラはヤドンの痛覚があるかが問題だと思うんだ」

「ていうか、こんな下らない話やめない？」

しかしヤドンのしっぱか。やっぱりポケモンを食べる文化はあるのだろうか。ナナはポケモンを食べるのは断固反対みたいだが。

「そうだな。それにしても全員が手持ちは二体か。これもなにかの縁かな」

「そういえばノエルはやみのいしをどうするの？」

「俺はヒトモシを捕まえたら、そいつに使おうかなと思ってる。それよりナナはムンナにつきのいしを使わないのか？」

「ええ、ムンナが進化したいと思う時までは温存するわ。それに体格が変わったらムンナも困るだろうし」

「ンナッ！（俺はまだムンナのままでいいや！）」

「そつか。しかしお前ら二人は随分と使うの早かったな」

「だってールンパツパが好きなんだもん！」

「右に同じっす！ ていうかコソクムシの進化随分と早くね？」

「ああ。それはちよつとハマして主のフシギバナに襲われてさ。それで頑張っつて倒したら、その時に進化してたわ。ちなみにこのパチリス

もその時に捕まえた奴」

「又シと言えば私も襲われたわ。その時はトロピウスだったんだけど、トレーナーいないのにZワザを撃ってきて命の危険を感じたわ」
「俺が相手したフシギバナなんてメガシンカしてきたからな。それに比べたらマシだろ。まさか野生ポケモンがメガシンカするなんて思ってもいなかった……あれってトレーナーとのキズナでやるものだろ」

積もる旅の話に華を咲かせる。ナナとノエルのどちらの旅が大変だったか争いが始まつたり、ほんとに賑やかで楽しい空間だった。

しかし、彼等はライバルだ。特にノエル。僕たちは彼を超えなければならぬのだ。ライバルとこんな関係で良いのかと少しだけ思うが、ギスギスしてるよりマシという結論にすぐに落ち着いた。そして次はどんなポケモンを捕まえたという話になった。

「やっぱり私はメロエツタ！ 音楽のポケモンなんて素敵！」

メアがそう言うのとボルノが幻のポケモンだから無理と言う。隣にダークライという幻のポケモンを最初に捕まえたナナがいることを忘れて。

「やっぱりオラはゲッコウガ！ あの忍者みたいな姿がカッコイイ！」

そしてボルノに関しては、ノエルから御三家を更に増やすのかと呆れられていた。ちなみに御三家というのは初心者オススメのポケモンの総称だとか。ちなみに御三家に含まれるポケモンは全てゲームで最初に選ぶポケモンである。

「やっぱり俺はヒトモシ。昔からシャンデラってポケモンが好きでさー」

それに対してナナも突っ込まなければとツツコミを考えるが、なにも浮かばないでアタフタする。それが少し可愛かった。そしてナナの捕まえたポケモンは……

「昔にアローラにやってきたウツロイドというポケモンがいるんだけど、私はその子のが……」

そしてナナの言ったポケモンはそれだけはやめとけと全会一致で

言われた。どうもウツロイドというポケモンは相当ヤバイポケモンらしい。一体どんなポケモンなのだろうか……

そんな会話が少し続いた後に、この会はお開きとなった。みんながそれぞれの旅路へと戻っていく。少なくとも僕はそう思っていた。翌朝、メアのこの一言を聞くまでは。

「ナナ！ これから一緒に旅をしよう！」

18話 カイヨウシテイへ！

意外なことにナナはメアの提案を受け入れた。それにゴウー団の動きは大人しくなる見通しだといえど、壊滅したわけではない。いつ襲撃されてもおかしくはないのだ。その時にナナもメアも一人だとあまりに危険過ぎる。そう判断したことからだ、

そしてメアと旅を始めて二日が経とうとしていた。森を抜けて現在は平原で休憩も兼ねた昼飯中だ。

「ゴウー団の本部がお兄ちゃんの活躍によって壊滅。しかしボスと幹部格には逃げられる。当分は大人しくなる見通し。しかし一部の残党はいるので注意すること」

ナナが新聞を読みながら僕に報告をする。あの赤いスーツの男はゴウー団の幹部だったらしく、色々なことが判明したそうだ。その結果としてチャンピオンであるナナの兄の手を借りて基地を一つ制圧する作戦が組まれた。結果としては大成功。なんでも無傷で終わったとか。

「ナナのお兄ちゃん強すぎない？」

「まあお兄ちゃんだし、あのくらいなら朝飯前だよ」

しかし無傷か。スピアー一体に苦戦を強いられていた僕たち。明らかに格が違うな。

それにやっぱりこの世界にはまだ見ぬ強敵がうじゃうじゃいるということ……

いくらナナが強くなったと言っても、まだチャンピオンの壁を破るには足りない。

「そして……」

ナナが三つ目のボールを持ちながら見つめる。中身はスピアー。一度博士に送り、ダークポケモンではなくなった。普通のスピアーだ。あれから引き取り手のいなかったスピアーはナナの手持ちになっっていた。

「どうしようか」

ナナはどうすればいいか。分からずにいた。恐らくスピアーも人

間に対して相当なトラウマを抱えている。だからナナとしても、どう関わればいいのか分からないのだ。その結果として未だにボールから出せないでいる。

「でも、そろそろ出さないと……おいで、スピアー」

ボールを投げて、あの事件から始めてスピアーを出す。スピアーはボールから出て怯えた表情を見せると、すぐに暴れ始めた。ナナがスピアーを落ちつかせようと触れようとするが、スピアーが腕を振り回してナナを傷付ける。

「いたっ！」

ナナの手から少し血が溢れる。僕はカツとなってスピアーにキレた。この野郎！ ナナを傷付けやがって！

「ダークライ。やめて」

スピアーを叩こうと近寄る僕をナナは静かに静止する。自分を言い聞かせて必死に怒りを抑える。ナナが再びスピアーに触れる。今度は怪我をしないように慎重に……

「スピアー。大丈夫だよ……私達は敵じゃない」
「……」

スピアーはなにも言わず、自らボールに戻った。ナナは少しだけ寂しそうな表情をした。それからバググから傷薬を出して、自分に使つてすぐに傷を治す。

「やっぱりダメか……」

スピアーに植え付けられた人間への恐怖心。それはあまりに大きかった。人に心を開くのはムンナ以上に時間がかかるだろう。

そんな時だった。上空を大きなボーマンダが飛んだ。ボーマンダの動きは早いだけではなく、突風も起こり体が吹き飛ばされそうになる。まるで真上をジェット機が走るかのようだ。

それから間もなく人が降ってくる。その人は落ちながらボーマンダを戻し、ナナの目の前に立った。

「お兄ちゃんー！」

再びチャンピオンが僕たちの前に現れたのだ。

そしてチャンピオンはナナの頭を撫でる。

「ナナ。ゴウー団の件。頑張ったな」

「うん！」

なんの用だろうか。この前にハクガ山で会ったばかりだ。あまりに早い再会ではないか？

「……さて、今回はちよつとした話だ。まず最初にダークポケモン。これは昔にオーレ地方という場所で研究されていたシャドーという男の研究を元に作成されたものだと分かった」

「なぜそのような話を？」

「敵については知っておけ。そうすれば見えてくるものがある。俺はお前にそれを教えるために来た。あと少し別れの挨拶だ」

「別れ？」

そんなナナの疑問を無視してチャンピオンは自分の話に戻す。

ナナもその話を真剣に聞いている。

「オーレ地方の事例とは違い、ポケモンは死ぬまで起き上がり、オーレは一般の人でも視認できる。そして当然ながらレベルも上がり、技も覚える。その代りオーレ地方の時よりもポケモンへの負担は大きい悪質な事例だ」

「なんてことを……」

「ダークポケモンの作成には莫大なエネルギーが必要なことも分かった。そして莫大なエネルギーは『コスモッグ』というポケモンから抽出している。そして現在は謎のポケモンであるコスモッグを助けるべく、その所在を調べているところだ。そんな中でアローラにコスモッグに関する資料があることが分かった」

「お兄ちゃん……」

「だから俺はちよつとアローラに行ってくる！ あと、これは俺からの些細なプレゼントだ！」

チャンピオンはそう言うってナナの手になにかを握らせるとボーマンダに乗って飛び去って行った。ていうか、この状況でチャンピオンがアローラに行くのかよ。

もしもゴウー団がコスモッグでネクロズマとかを引っ張り出して暴れたら誰が対処するんだよ……

「ナナ？ なにを貰ったの？」

「これは！」

ナナが手を開くとそこには遺伝子を連想させるデザインが刻まれた七色に光る宝珠が嵌め込まれた指輪あった。しかし、まさか指輪のプレゼントとは……

なんかこうもつと冒険やバトルに役立つものが欲しかった。

「ナナー！ これって！」

「キーストーン、でもメガシンカはポケモンにかなり負担を背負わせるから好きじゃないのよね。もつとも貰い物を捨てるのも悪いし、持っておくけど」

キーストーン。なんだそれは？ しかしナナも使う気はないようだし関係のない話。

しかもなんだかんと言つて指輪を普通に右の人差し指に嵌めているし。しかもアクセサリーとしても似合うな！ おい！

「一応ナナのポケモンだとスピアーがメガシンカ出来るのかな？」

「だから、させる気はないわよ……それにスピアナイトも持っていないし」

「そうだね。まあ当分は出番がないか」

そうして休憩は終わり、旅は再開される。長い平原をひたすら歩く。なにもない平原に整えられた道。途中でケンタロスの群れが走ったり、羊毛のために飼育されているメリープの牧場があったりと飽きることはなかった。

途中でメアがケンタロスを捕まえて乗って行こうと言ったがナナは却下する。なんでも旅なのだから歩くことに意味があり、歩くことで新たな発見があるとか。ハクガ山で僕にお姫様抱っこをさせたくせによく言えたものだとも思うが。そして夜になる。夕暮れ時に夕食を食べて、寝袋を広げて平原に寝転んで夜空を見る。夜空を見ると満点の星空に目を奪われる。生前では縁のなかった光景。日本でも田舎の方に行けば見ることが出来たのかもしれないが僕は見たことがなかった。

「ナナー！ 流れ星だよ！」

「……そうね」

「どうしたの？」

「星は綺麗でいいわね」

「なにを考えてるの？」

「メテノというポケモンのこと」

メテノ。初めて聞くポケモンだ。一体どんなポケモンなのだろうか……

「メテノは宇宙から降ってきて人がいないと死んじゃうポケモンなの」

そんなポケモンがいるのか。しかし人がいないと死ぬか。世の中には色々なポケモンがいるんだな。そして、の旅でメテノというポケモンにも会おうのだろうか。

「……人がいないと生きられないポケモンに対して人の存在が苦痛になるポケモンもいる。私のスピアーみたいだね」

「難しいね……でも人とポケモン。手を取り合って生きていけたらいいなと私は思うよ」

「メア。私は……なんでもない。おやすみ」

「おやすみ。ナナ。また明日」

そうして僕もボールに戻される。しかし人が捕まえないと死ぬポケモンか。もしも彼等がゴウー団のような連中に捕まったらどう思うのだろうか。ダークポケモンになっても生きられて良かったと思うのだろうか。もっとも僕はメテノではないので分からない。しかし人とポケモンの関わり方。そのテーマは長い時間考えることになるだろう。

人がポケモンにどう接するか。それと同じようにポケモンが人に接するの。それも難しい問題。そしてポケモンだけではなく、人と人でも同じことだ。互いに適切な距離感というものがあり、近すぎてもダメ。そして遠すぎてもダメ。それではスピアーとの適切な距離はどのくらいだろうか。

早朝に目が覚める。日が昇る前にナナ達も起きて、荷物を片付ける。そして綺麗な朝日に照らされながら街を目指して歩く。遠くに

見えるハクガ山。そしてぼんやりと見える都市。それがカイヨウシテイ。感慨深いものがある。エラニの村から始まり、森を抜けて山を越えて、再び森。そして長い平原をひたすら歩いてここまで来た。まだまだ旅は続く。それでもここまでよく歩いてこれたなと思う部分はある。

「……さて、ダーククライ。ここからが大変よ」

「ン？」

「ここからはカイヨウシテイ名物のバトルロード。金銭のやり取りが発生しない代わりに目が合ったら無言で始まるポケモンバトル。私達がどれだけ強くなったのか再確認よ！」

そうして僕たちはカイヨウシテイを真っ直ぐと目指した。それもノーストップだ。もちろん色々なトレーナーがいる。それでも足を止めない。

「サンダース！ かみな……」

「ダーククライ！ 撃たれる前にかくのはどう！ 続いて前方のゴーストにあやしいかぜ！」

「ルンパツパはみずでつぼうであそこのナックラーに攻撃！」

なにがポケモンバトルだ。常にトレーナーがポケモンを出している、いきなり攻撃を仕掛けてくるじゃないか！ まるで無法地帯だ。しかし、こつちも見つけたら攻撃を仕掛けて良いというのが有難い！ 「多いわね！ ダーククライ。戻って！ そしてムンナ！ 出番よ！」

僕がボールに戻され、ムンナがボールに出ってくる。そして状況をボールの外から見て把握していたのか、出てくると同時におんがえしで近くにいたヤナップを吹き飛ばす！

「ンンンンンナツツ！（やっつと俺の出番きたああああ！）」

「良いわよ！ ムンナ！ そのままころがるで突き抜けて！」

「ンンナツ！（よしきた！）」

そうして特にムンナはやられることなく無事にカイヨウシテイに到達した。

二つ目の街、そしてナナと来る初めての大都市だ！

19話 ナナとダークライ

カイヨウシティ。それは大きな街だった。まるで日本の新宿のような場所だ。高層ビルに囲まれて色々なお店もある。お菓子屋に服屋とか女の子向けのお店も多い。しかし僕は悲しきかな。ボールの中だ。理由は簡単。さすがにここでボールから出していると目立つから。

そしてナナは代わりにムンナをボールから出してジム戦よりも先に服屋に行っていた。

ちなみにメアとは一時的に別れ、数時間後にポケモンセンターで落ち合う予定となっている。

「見て！ ムンナ！ めちやくちや可愛くない？」

「ンナアアアアアアアア！（心底どうでもいいいいいいいい！）」

なんだこのムンナ！ どうでもいいならガチでそこ変われよ！

おい！ この野郎が！

「だよね！ 可愛いよね！」

いや、ナナは気付け！ こいつまったく絶賛してないぞ！

ていうかナナは僕のボールを更衣室に置いて着替えるなよ！

ボールの中からって普通に外が見えるんだよ！ つまり目の前でナナが生着替えしていて非常に目のやり場に困る。たしかに今までの旅でも寝巻きに着替えたりはしていた。でも、それはあくまで日常の動作。しかしここは違う。この試着室という密閉された空間で着替えられると普段だとありえないシチュエーションで戸惑うのだ！ まあ下着姿のナナも可愛いんだが……

「赤いワンピース。でもやっぱり私は黒の方が好きかな……ちよつと高いけどやっぱりこれかな」

僕はナナの着ようとした服に驚いた。この服。ナナが生前大好きだった服と同じだ。可愛らしいフリルに膨らんだスカート。そして赤いリボン。そして白色のタイツ。その姿には明らかに少女らしさがあった。それになによりも僕はこの服をよく知っている。ロリータ服だ。僕の彼女が大好きだった服……

ナナはロリータ服を着て、クルリと回る。

「うん！ 可愛い！ 少し動きにくいけど、これにしよう！」

桜月奈菜……

その名前が僕の口から漏れた。生前の僕の彼女の名前だ。そして今も忘れられない人。

気付いたらボールから出ていた。出たら怒られるということは分かっている。

「ち、ちよつと！ ダークライ！」

そのままナナを強く抱きしめる。ずっと会いたかった。こうして奈菜を抱きしめたかった。

「泣いて抱きついてどうしたの？ 怖い夢でも見た？」

「奈菜……」

「よしよし。ナナここにいるからね。ずっとダークライの傍にいるからね」

それからナナは僕をボールに戻して、会計を済ませます。お値段はなんと二十万。しかし躊躇うことなく出した。最近ポケモンバトルで勝ちが続いていたし、金銭に余裕はあるのだろう。

そしてナナはロリータ服だけ買おうと、その場で着替えて服屋を後にした。それからはポケモンセンターに戻り、メアと再会する。そのはずだった。しかし大都市のポケモンセンター。なにも起きないはずがなかった。

「おい、ポケモンバトルしよーぜ！」

「……ジムバッジは？」

「一つだ！」

「いいわよ。やりましょう」

キャップ帽を被った短パンの少年にバトルを仕掛けられる。ナナはボール越しに僕を見て様子を確認すると、頷いてバトルを受けた。

「ダークライ。頼んだわよ！」

「ゆけっ！ ヒノヤコマ」

「ヤマッ！（今回も勝つぞー）」

「ああ！ ヒノヤコマ。ニトロチャージ！」

炎を纏ってヒノヤコマが突進してくる。ナナはそれに対して「躲せ」とだけ指示を飛ばす。言われ通りに躲す。しかしヒノヤコマを怯むことなくニトロチャージをこちらに使ってくる。しかしナナから攻撃の指示が来ない。まるでなにかを警戒しているかのようだ。

「……ダーククライ。もう一度避けて！」

「避けるという指示をするのはお見通しだ！ ニトロチャージを撃つと見せかけてかげぶんしん！」

それによってヒノヤコマが五体くらいに増えた。増えるとかズルいだろ！

しかしナナはそれに対してニヤリと笑った。まるでこの瞬間を待っていたかのようだ。

「よし、ヒノヤコマ！ そのままニトロチャージ！」

五体のヒノヤコマ。それらがまとめてニトロチャージを撃つてくる。回避が楽とは言え、さすがに五体同時の攻撃を避けるのは厳しいか。そう思っていた時だった。

「ダーククライ！ あやしいかぜで全てのヒノヤコマを蹴散らして」

「な！」

ナナが初めて攻撃の指示をした。それに迷わず従い、全てのヒノヤコマを消す。

あれ、待て。全てのヒノヤコマ？ それなら本体はどこにいる？

「しまった！」

「ヒノヤコマ！ つるぎのまい！ そしてでんこうせっか！」

真上からヒノヤコマが降ってきて、僕を吹き飛ばした。中々に思い一撃。しかし耐えられないわけがない。簡単に立ち上がり、ヒノヤコマの方を見る。

「ぎっぎの五体。全てが残像……本体は遥か上空にいた……」

「ご名答！ そしてつるぎのまいをしたヒノヤコマは止まらないぜ！

もういちどでんこうせっか！」

「……ダーククライ。二歩下がって足元にあくのはどう」

言われた通りにあくのはどうを撃つ。どこにはなにもいない。少なくとも撃つた時には。しかし数秒後にでんこうせっかでとまれな

くなつたヒノヤコマが自分であくのはどうに突っ込んできて戦闘不能になった。さすがにでんこうせつかで殴られた時はヒヤリとしたが、問題なく勝てたな。

「クソッ！」

「勝負ありよ。お金頂戴」

少年はナナに二万近くの大金を支払うとヒノヤコマを抱き抱えてジョーイさんの方へと駆けて行った。ナナはラッキーと言いながら財布に二万円を入れていく。

「しかしトレーナーの質も随分と上がってきた。ちよつとでも油断してたら負けるわね」

「アア……」

たしかにそれは感じた。今までのトレーナーは先手で技を仕掛けてこちらの勝ちにもつていけるパターンが多かった。しかし今回はそういうわけにもいかなかった。格上とは言わないが、間違いなく強いトレーナー。もつともジムバツジ一つ持つてる時点でジムリーダーを一人倒したということ。強くて当たり前か。

「ナナ。終わった？」

「ええ。待たせてごめんなさい」

「ていうか、この服！　すごく可愛い！」

「メアは服は買わないの？」

「うん。今の猫耳パーカーに気に入ってるから」

「そっか。ていうかジム戦どうするの？」

ああ。そういえばこの街にもジムがあるのか。恐らく今回のジムも一筋縄ではいかないのだろうな。それこそ入念に作戦を立てないと勝てないくらいに……

「そうね……ジムに挑む前にムンナもダークライも私も強くなっておきたいのよね。それにスピアー。なんかスピアーを放置したままジム戦をするのも違う気がするの」

「スピアー……ナナはどうするの？」

「分からない。ただ……スピアーと仲良くなりたいと思う」

スピアーと仲良くなりたいか。しかし、それは難しいんじゃないか

と僕でも思う。スピアーの傷はそれほどまでに深い。

「そっか……でも焦っちゃダメだよ。スピアーにはスピアーのペースがあるんだからね」

「分かってるわ……」

「それじゃあ行こっ！ ビーチに！」

そうしてメアに導かれるまま夜のビーチに行くことになった。ここカイヨウシティは大都市であり、海に面している。そのためビーチも普通に存在している。

そして夜のコテージに行き、海を眺めながらピラフを優雅に食べていた。近くにはグラスに注がれたブドウジュース。まるで貴族にでもなったかのようだ。

「しかしメア。よくこんな高いお店を予約出来たわね」

「ここは予約じゃないんだよ。バトルで勝った者だけが食事を出るの」

「それじゃあメアは……！」

「うん！ 勝ったよ！ さすがにギリギリだったけどね……」

「フィィア！（可愛さでは余裕の私の勝ちだけどね！）」

ニンフィアはブレないな。しかしポケモンセンターで軽く手合わせした相手ですら相当な強さだった。恐らくこの街のトレーナーは全体的にレベルが高いと考えていいだろう。それでもメアは勝ったのだ。やはり相当な実力……

「明日はなにしようか」

「やっぱりポケモンバトルじゃないかしら。お金が足りないし」

「そうなるのかなー。でも勝ち続けると強いポケモントレーナーに目を付けられて痛い目に遭うよ」

「その時も返り討ちにするわよ」

「……そっか。うん！ そうだね。でも、その自信はいつか弱点になるかもね」

「……どういうこと？」

「たしかにナナは強いよ。でも世界にはナナに匹敵するトレーナーなんて山ほどいる。ハッキリと言うけど、最近少し自惚れてないかしら

「？」

「そんなこと……！」

「あるよ。ナナは私とノエルとボルノ……そしてチャンピオン以外には絶対に負けられないと思っている。そして負けたとしても負けを認めない」

「そうして何事もなかったかのようにメアはピラフを頬張り、笑顔になる。」

「美味しいね！ ナナ！」

「メアはさっきの話……」

「なんのこと？ 冷めないうちに食べよ！」

「そ、そうね」

あの時のメアの一言。まるで人格が変わったかのようなようだった。明らかに話を逸らした。まるでナナとの関係を拗れることを回避するかのようなのだ。そしてナナもメアとの関係が拗れることを嫌い。深くは言及しない。

「フィア〜（メアはナナちゃんに教えてあげたかったんだよ〜）」

「ナニヲ？」

「フィア（関係が拗れることを覚悟して告げたメアの勇気も汲んでほしいな）」

「……」

結局、メアは言っている意味が僕にはよく分からなかった。

ナナは強い。それこそ、そこら辺のトレーナーに負けるなんてことはありえない。それに僕だってあくのはどうを覚えてパワーアップしている。確実に成長していつてるのだ。そんな僕たちが負けるなんて……

「フィア。フィア（大事なものは勝ち負けじゃない。勝負からなにを学ぶかよ）」

このニンフィアは偉そうに言うが、こいつ自身はどうなのだろうか。こいつだってメアのポケモンになってそんなに日は経っていない。つまり先輩面される道理もないはずだ。それにメアだってそう。ナナより成績が良い。ただそれだけなのにどうして、そんなに偉

そんなことが言える？ あの時僕とのバトルに勝ったからか？
舐めやがって！

「ダークライ。喧嘩するならボールに戻りなさい」

「ナナー！」

「戻りなさい。今は食事中よ」

ナナは強引に僕をボールに戻す。出ようと足掻くがナナに強く握られていて、ビクともしない。ボールは外から力を加えられると内側から開かないのか！

「ごめんなさい。私のダークライが」

「ううん。私もニンファイアも挑発するようなこと言っただけだからごめんね。ニンファイアもボールに戻りなさい」

「ファイア！（なんでよ！）」

ニンファイアも目の前で問答無用でボールに戻される。ざまあみろだ。

「……しかし、あれね。あとでニンファイアとバトル頼めるかしら？」

「そうだね。そうしないとダークライもニンファイアも納得しないよね。それでこういうのはどう？ 『私達はポケモンに一切指示を出さないで戦わせる』」

食事を終えると異質なポケモンバトルがビーチで始まった。両者どちらも指示はなにも出さない。その方が互いに納得するだろうというメアの考えだ。正直に言ってありがたい。あそこまで言ったのだからトレーナーなしでやってほしいと思っていたところだ。虎の威を借りる狐ではないことを証明してもらおうか。

「ダークライ。ニンファイア。準備はいい？」

「アア……」

「フィン！（もちろん！）」

「それじゃバトル開始！」

ナナの合図でバトルが始まった。まず最初に僕はあやしいかぜを撃つ。しかしニンファイアは上に飛んで回避。そしてハイパーボイスを使ってくる。これを回避……あれ、音技の回避はどうすればいい？

そう思っているうちにものすごい衝撃波に襲われて、吹き飛ばされ

る。それからニンフィアは迷うことなく体当たりを溝に決めてくる。これがドストレートに入って再び吹き飛ばされる。そしてニンフィアは挑発するかのよう煽ってくる。

「ああ。弱い。相手にもなんない」

「なんだと！」

「結局あなたってナナちゃんがいないとなにも出来ないのね」

「そんなことはない！」

怒り任せで放つあくのはどう。それはニンフィアには当たらない。くそ！　なんで当たらない！　いつもなら間違いなく当たるというのに！

「少し遊んであげる」

「舐めやがって！」

「ほんと品のないポケモン。もつと頭を使いなよ」

あくのはどうをニンフィアに向かってうつつがまったく当たらない。全て簡単に躲される。なぜだ！　なぜ当たらない！　こいつだってトレーナーはいないはずだ！

「普通にやって技が当たるわけがない。あなたの技が今まで当たっていたのはナナちゃんが相手のポケモンの隙を的確に見破っていたから」

「……そんなこと！」

「ならどうして当たらないの？」

「すぐに当ててやる！」

再び撃つあくのはどう。しかしニンフィアは簡単に避ける。ちよこまかと動きやがって！　当たれば勝てるというのに！

「私とあなたでは私の方が強い。あなたは勝負からなにも学ばない。だから弱い」

「黙れ！　僕も成長している！」

「レベルが上がった。技を覚えた。そんな上っ面だけの成長は成長なんかじゃない。高い身体能力と強い技を覚えているポケモンが強いのか？　違うでしょ」

「じゃあ、強さとはなんだ！」

「そのくらい自分で考えなさい！」

ニンファイアが大きな声で吠えた。その吠声は衝撃波となる。まずい！ ハイパーボイスだ！ 反応しようとするが間に合わない。そのままぶっ飛ばされて戦闘不能に追い込まれた。薄れゆく意識の中でニンファイアの声が聞こえる。

「今回もあなたの負けよ」

すぐにナナは元気の欠片と傷薬を僕に使い。回復させる。勝てなかった。手も足も出なかった。自分が情けなくて仕方ない。まさかここまで返り討ちにされるなんて……

「ダークライ。大丈夫。いつか勝てるようになるわよ」

ナナはいつものように優しく言う。しかし本当にこれでいいのだろうか？

このままナナにおんぶだつこで良いのだろうか。

「それに貴方が弱くても私が勝てるようにしてあげるわよ。二人で強くなるうって言ったじゃん」

ナナが僕の頭をわしやわしやと撫でる。違う。それじゃあダメなんだ。僕とナナの二人で強くならないとダメなんだ。それだと強くなるのはナナだけじゃないか……

そんな時だった。バチンと叩く音がした。ナナの頬がメアによって平手打ちされる。それに対してナナは啞然としていた。

「ナナ。それは間違ってるよ」

「……メア？」

「今の言葉。ダークライを追い込むだけなんじゃないかな。トレイナーならポケモンに優しくするだけじゃダメなんだよ。時には厳しくすることも必要なんじゃない？ それが分からないならナナはトレイナー失格だよ」

「……私は私のやり方で勝つ」

「それでもいいよ。ナナがどうするか。それは私が言うことじゃない。それじゃあ私は部屋に戻るね。ナナ。また明日」

ニンファイアがボールに戻される。そしてメアはこの場を後にする。夜のビーチにナナと僕だけが残される。静かに追い打ちをかけるか

のように波の音が静寂に響く。

ナナは静かにボソリと言った。

「……ポケモンに優しくすることのなにかダメなのよ」

「ナナ……」

「だって——」

ナナがなにかを言った。だけど、その一言は波の音に掻き消されて聞こえなかった。

そして部屋に戻り、この日を終える。

その翌朝。ナナのモンスタールボールが一つ消えた。

20話 優しさ

ナナは窓ガラスが割れる音で目覚めた。その時に人影はなく、既にボールは消えていた。空はどんよりとした天気。今すぐにでも雨が降りそうだ。

消えたモンスターボールはスピアーのものだった。モンスターボールというのはポケモンとトレーナーの思い出の結晶。どんな鬼畜だろうが盗むなんてことはしない。もしも盗もうとするやつがいたら人間じゃないと誹謗されてもおかしくないだろう。

「……スピアー。無事でいて!」

ナナはすぐにジュンサーさんに報告した。それから五分も経たず、ジュンサーさんがやってきて調べた結果、ホテルの裏通りで割れたモンスターボールが見つかった。それと同時に一体で街の外を指しながら動くスピアーも……

状況から見て、泥棒ではない。恐らくスピアーの逃走。スピアーは自分でボールから出て、窓ガラスを壊して、自分のボールを持って逃亡した。そして目立たない場所でボールを破壊したのだろう。

幸いにもジュンサーさんはゴウー団の事件を知っており、スピアーの事情も把握していた。そのためナナがお咎めを受けたり、罪に問われることはなかった。

「ナナー。大変なの!」

スピアーを探しに行っていたメアが大慌てでナナの方へと息を切らしながらやってくる。その様子からして明らかに大変なことになっているのは間違いない。

「……スピアーが逃げる途中で何人かのトレーナーを瞬殺しちやったの!」

「え!」

「それ自体は問題ないんだけど、そのせいでめちゃくちゃ強い野生のスピアーがいるとトレーナーの間で話題になっていて、みんなスピアーをゲットしようとしてる!」

ナナがすぐに走り出した。手には新品のモンスターボール。まさ

か！

「ダークライ！ ムンナ!! お願い！」

僕とムンナがやっとボールから出される。言いたいことは分かる。スピアーを探せということなんだろう。しかし、それがスピアーのためになるのだろうか。

あくまでスピアーは自分の意志で逃げ出した。それなのに連れ戻すのは……

「言いたいことは分かる！ でも、あのスピアーを他のトレーナーに渡しちやダメ！」

「ンナツ（そうだな）」

そうか！ もしもスピアーが悪質なトレーナーの手に渡ったら、さらに人への不信感が強まり、傷が深まる。逃がすかどうかはさておき、スピアーを守るためにも今は再度捕まえる必要があるのか！

「スピアーを捕まえたらエラニの森に行くわ！ そこでスピアーを逃がすわよ！」

そうして僕達は分かれて探すことになった。一人で飛び回っていると背後からムンナがやってくる。

「ムンナ！ 分かれて探すんだろ！」

「ここは都市だ。考えてみたら別れるとお前が危険だ」

「どういうことだ」

「お前は幻のポケモンだろ。人のポケモンだろうが欲しい輩は無限にいる」

「そんなこと……」

「スピアーに続いて、お前まで消えたらナナがどうなるか考えろ！ あいつはしっかりとっているように見えるが、まだ十二歳なんだぞ！

俺達がフオローしないといけないだろ！」

考えてみたらナナは十二歳。それは日本だったら、まだ小学六年生に該当する年齢。ナナは大人びて見えるが子供なのだ。本来なら僕達が支えないといけないくらいの年齢なんだ。

「ナナだって完璧じゃない。今回みたいなダークライを単独行動させるようなミスだってする。そのミスに俺達は気付いてフオローしな

「いといけないんだよ！」

「そうだな……」

「スパイアーは人間にトラウマがある。こんな人が多い場所はすぐに離れたいはずだ。そうなると街の出口付近を指すはず……」

「なら、そこに行けば！」

「そうだ。しかしここには出口が三つある。俺達が来た平原に封鎖地域。そして次の街に行く道だ」

「……なら」

「そしてスパイアーもエラニの森に帰ろうとしてるなら行こうとする場所は明白だろ！」

僕達が通ってきた平原か。しかし最悪だ。あそこはバトルロードという場所でトレーナーも相当多い。つまりスパイアーが誰かに捕獲される可能性が高い……

「行くぞ！　ダークライ！」

「ああ！」

バトルロードに繋がる道を目指す。すると途中でスパイアーを見つけた。何人かのトレーナーがスパイアーを捕まようとポケモンを出す。しかしスパイアーは素早い動きでシザークロスを撃って、全て蹴散らしていく。その強さを見て、トレーナー達はさらに目を輝かせる。

「すげー！　絶対にあのスパイアーほしい！　ゆけっ！　ヤナップ！」

「ピアッ！（もう俺は自由になりたいんだ！）」

再び撃たれるスパイアーのシザークロス。それはヤナップを吹き飛ばした。そのまま逃れようとしたが今度はスパイアーの前にエアームドが立ち塞がる。

「こいつの技はシザークロスだけ！　それならエアームドで完封だぜ！」

スパイアーはエアームドにシザークロスを撃つ。しかしエアームドにはダメージが殆ど入らない。そしてエアームドがスパイアーに向かってブレイブバードを撃つ。それによってスパイアーが吹き飛ばされる。そしてトレーナーはスパイアーを捕まえようとモンスターボールを投げた。まずい！

「……やれやれだ」

しかしモンスターボールがスピアーに当たることはなかった。なぜならスピアーの体が浮いて、こちらへとプカプカと浮いてきたからだ。おそらくムンナがスピアーを浮かしたのだろう。しかし。そのせいで視線がこちらへと集中する。

「なんだ！ あの黒いポケモン！」

「すげー初めて見た！ 俺あいつ欲しい！ いけっ！ ブーバー！」

狙いは僕か。僕はナナのポケモンだからボールを投げられても入らないんだけどな。しかし、こいつらをどうするか……

「ピアッ！（もう嫌なんだ！）」

そう言っているうちにスピアーが逃げ出す。まずい！ 早くスピアーを追わないと！

しかし、僕の頬を炎が掠った。ブーバーのかえんほうしゃか！ まずはいつらを倒すのが先決か……

「ムンナ。どうする？」

「逃げてナナと合流してスピアーの捕獲が先決だな。しかし、それまでにスピアーが捕まらないか不安……」

「なら、私がナナちゃんに報告するよ」

そんな時だった。憎々しいあいつがビルの上から話しかける。あのメアのニンフィア。僕を見下し、小馬鹿にするやつ。誰がこいつの手なんか……

「ダークライ。今はそういうことをしてる場合か？ よく考えろ。私情とナナ。どっちの方が大事なんだ？」

「もうめんどくさい！ 私は勝手に報告に行くから、あなた達は勝手にしなさい！」

「助かる！」

ムンナがそう言うのとニンフィアはビルの屋上から飛び降り、見事な着地をして道路を走りながらナナの方に行った。悔しいが今は頼るしかないか。とりあえず僕達はスピアーを追わなければ！

「待て！ 僕の黒いポケモン！」

それとあいつら。完全にスピアーを忘れて狙いがこつちに変わっ

たな。僕たちが移動すると同時に付いてくる。そして、たまに攻撃を仕掛けてくる。めんどくさいし邪魔だ。

「邪魔だなー！」

ムンナはそれだけ言うと攻撃体制を取った。まさか！ 僕は恐れながらムンナに問う。

「ムンナ。どうするつもりだ」

「どうせナナが対応してくれるさー！」

ムンナがあくのはどうを飛ばす。あくのはどうが的確にブーバーに命中して一撃で戦闘不能に追い込む。それから他のポケモンにもあくのはどうを撃って一撃で確実に仕留める。こんなことをして大丈夫かよ！ あとで問題になったりしないか？

「行くぞー！」

「ムンナ……」

「ナナを信じろ！ きつとどうにかしてくれる！」

そうして街から出て、スピアーを追う。スピアーもダメージが蓄積されていったのか木陰で休んでいた。僕達はスピアーに近づこうとするがスピアーは威嚇する。

「く、くるなー！」

「別に連れ戻しにきたわけじゃねよ」

ムンナはそれだけ言うのとスピアーの横に座る。スピアーは警戒しながら、それを眺めていた。そしてムンナはスピアーに語りかける。

「俺だってお前と同じで人間が大嫌いだ。滅べばいいと思ってる」

「うそだー！」

「……ゴミ性格と言われ、生まれて間もない時に捨てられた。そして他のトレーナーに捕まって再びゴミだと言われて放置された。人間を嫌うなっていう方が無理な話だろ」

「なら、どうして……」

「最初は俺もすぐに逃げようと思った。だけど、あの女。いきなり『あまいみつ』を投げてグラエナの群れを呼んだんだ！ 一撃でも受けたら致命傷の状況だ」

「それで？」

「彼女に従った。そうしないと俺も死ぬからな。それで戦っているうちに思ったんだよ。ナナの指示に従うのも悪くねえかなって」

ムンナ。そう思ってたナナと旅をしていたのか。今まで聞いたことも語ることもしなかったから驚きだ。

「今だってナナ以外の人間は反吐が出るほど大嫌いだ」

「……だから、なんだっていうんだよ！」

「なんとも言わねえよ……ただナナはお前をエラニの森に戻そうとしている。それがお前にとって一番だと判断したんだろうな」

「え？」

「しかし、お前は他のトレーナーに捕まらないでエラニの森まで行けるのか？」

「……」

「今のナナが恐れてるのはそれだ。だからナナは他のトレーナーに捕まらないように俺たちに追うように命じた。それだけだ」

そんな時だった。ポツリポツリと雨が降り始めた。僕も雨から逃れるべく木陰に移動する。数分すると土砂降りの大雨だ。当分はここから動けないだろうな。

「……なあムンナ」

「なんだ。スピアー」

「吾輩はどうしたらいい？」

このスピアー。一人称は吾輩だったのか。初めて知った。

「人間は怖い……でも……ナナに従うのも悪くないと……少しだけ思う」

「……続ける」

「ナナは優しい。あの人達とは違うのは分かる。だけど、人を見ると凄く怖くて体が震えるんだ」

ナナがゴウー団とは違う。それはスピアーも分かっていたのか。それでも完全に信じられなくて、ナナに近づくことは出来ないか。難しい問題だな……

「スピアー。どうしてナナから離れたりしたんだ？」

「……ナナは僕のことをどこまでも気に掛ける。毎日寝る前にボール

越しに『おやすみ』と『おはよう』を言うんだ……それが辛いんだ」
「どういうことだ？」

僕は初めてスピアーに話しかけていた。ナナが優しい。それが辛いとは……

まさか厳しくされたいともいうのか？

「……こんなにも優しいのに怯えることしか出来ない自分。それに嫌気がさしたんだ。ナナと一緒にいると自分がどうして無力でどうしようもないクズの気がして……」

そんな時だった。スピアーに電撃が飛んできた。瞬時にムンナがスピアーを庇ったおかげでスピアーは無傷。しかしムンナが致命傷を受ける。それからねっとりした声が雨音に紛れて聞こえる。

「とつても強いスピアー。それとダークライみいつけた」

目の前にはマルマインと黄色いカツパを着た大人の女性がボールを構えてこちらを見ていた。

21話 VSスピアー

「ダークライ……すまねえ……」

ムンナは動けそうにない。そして女はやる気満々。おそらくスピアーを捕まえる気だ。つまりナナがいない状況で戦わなければならない。自分で考えて動かなければならないのだ。

「マルマイン！ エレキフィールドと同時に10万ボルト！」

地面全体に電撃が走り、目がチカチカする場所になり、それと同時にマルマインが電撃を飛ばす。それを右に避けて、あくのはどうを撃とうとする。しかし手が止まる。ニンフィアとの戦いを思い出したのだ。この攻撃は当たるのか。ナナの指示なしで当てられるのか。

「続けてかみなりよ！」

あまりにも速い電撃が空から降ってきて、僕の体を貫いた。そういえばメアが旅の途中で言っていた。雨の中での雷は速度が倍増するため避けるのは困難を極めると……

頭がクラクラする。僕にモンスターボールが飛んでくる。しかし吸い込まれることはなく弾かれる。女は驚きの表情を見せる。

「まさか人のポケモンなの！ それじゃあトレーナーはどこ？ ポケモンだけで行動させるなんて碌なトレーナーじゃないわね」

「ナナを馬鹿にスルナ！」

「……前言撤回。ポケモンに愛されている良いトレーナーなのね。でも未熟なのは確実」

体が動かない、まるで痺れたかのようなだ。そして女の人はマルマインをボールに戻した。そして地面の電気も消える。なんだったんだ今の技は……

「このスピアー。わけありなのね」

「……」

動け！ 動けよ！ 僕の体！

そう思っていると女は溜息を漏らして僕達に背を向ける。

「スピアーはあなた達に譲るわ。私の名前はキンラン。シノノタウンのジムリーダーよ。あなたとトレーナーの挑戦を楽しみに待ってる

わね」

女の人は歩いて去っていく。後ろ姿を見て初めて気付く。あのカッパはピカチュウをモチーフにしていたことに。だってカッパの後ろには明らかにピカチュウの尻尾が描かれていたのだから。

そんな時にナナとニンフィアが走って寄ってくる。ナナはカッパも傘もささず、ずぶ濡れとなっていた。女の人はナナの姿を見て足を止める。

「……あなたがダークライのトレーナー？」

「まさか、あなたが私のポケモンを！」

ナナは僕とムンナがダメージを受けていることに先程より明らかに早く走る。そして抱き抱えて、麻痺治しと傷薬を使いながら女を睨む。

「ええ。しかし驚いた。ダークライの親がチャンピオンの妹さんだったなんてね」

「お兄ちゃんを！」

「ええ。知ってるわよ。それじゃあね」

ナナが色々と尋ねようと叫ぶ。しかしキンランと名乗った女は足を止めずに去っていった。まるで話すことなんてなにもないと言いたげに。

「アノ女……」

「ダークライ？」

「シノノタウンの……ジムリーダー……と」

「シノノタウン。カイヨウシティの次に行く予定だった街……そこであの女に会えるのね」

そしてナナもやる気だ。遠くない未来にあの女にリベンジマッチか。それも悪くない。

「……スピアーも見つけたのね。本当に良かったわ」

ナナはスピアーを見て安堵する。そしてスピアーは震えている。まだ人間が怖いみたいだ。そんなスピアーにナナが言う。

「もうあなたは捕獲しないわ。スピアーはエラニの森に帰りたいんでしょ？ 私が連れていってあげるから一時的にボールに入ってくれ

るかしら」

ナナがスピアーの目の前にボールを置く。

「……スピッツ！（嫌だ！）」

「怖いのは分かっているわ。それでも……」

「ピアッ！（違う！）」

スピアーはボールを弾く。それから戦えと言わんばかりに飛び回る。

「ピイイイイイア！（吾輩はナナのポケモンになりたい！）」

「スピアー……分かったわ。ダークライ。まだ戦える？」

「アア……」

「よし、いくよ！ スピアーにあくのはどう！」

ナナもスピアーの考えていることが分かったみたいだ。言われた通りにスピアーにあくのはどうを撃つ。しかしスピアーは簡単に避ける。そしてこうそくいどうをして更に動きを速くする。

「ちゃんと正式にバトルしてゲットしてあげるわよ！ ダークライ！」

やきつくすで目の前に壁を作ってスピアーの攻撃を防いで！」

スピアーはバトルを望んでいる。ちゃんとしたバトルでゲットされて、ナナのポケモンになることを望んでいるのだ。これは儀式のようなもの。そしてスピアーの迷いを晴らすためのバトル。戦わなければ分からないことだってあるのだ。

「スピー！（そのくらい！）」

「あなたはそうくるわよね！ ダークライ！ スピアーのシザークロスを正面から受け止めて、あくのはどう！」

攻撃を受ける。ナナが今までのことのなかった指示。スピアーのシザークロスは重いが、いつもよりは軽い。受け止められないほどではない。そしてスピアーの手をそのまま掴み、ゼロ距離であくのはどうを撃って吹き飛ばす。

「やきつくすで作った炎の壁でスピアーは火傷した。それで攻撃力は下がった！」

ナナがチャンスだと言わんばかりにモンスターボールを投げる。しかしモンスターボールは大きく飛んでいく。忘れていた。ナナは

とんでもない運動音痴だ。特にボールを投げるのが苦手。でも、この局面で普通外すかよ！

「ピアアア！（吾輩は勝つ！）」

「嘘でしょ！ いや、そのくらいやってくるか！」

スピアーは火傷を気合いで治したのだ。そしてナナは笑っていた。まるで本気でバトルを楽しんでるようだった。あそこまで楽しそう
なナナは初めてみた。

「スピアーは楽しい？」

「ピアッ！（ああ！）」

「私も楽しい！ そして絶対にゲットしたくなつたわ！ ダークライ
！ いつも通り全力で行くわよ！ あやしいかぜー！」

スピアーに放つあやしいかぜ。しかし、それをスピアーは正面から
あやしいかぜを受けて受け流す。そんな光景をナナはニヤリと笑う。

「ダークライ。しゃがんで避けて、後ろからあやしいかぜー！」

「ピアッ！（なに！）」

スピアーはがあやしいかぜを受けられるのは受け流す態勢を保つ
ているから当たらない。そして背後からなら当てられるのだ。ナナ
はそれを狙っていた。あやしいかぜを当てると同時に身体能力が上
がる。

「……ピアッ！（効かん！）」

「気合いで耐えたわね！ ダークライ！ あくのはどうを決めちやい
なさいー！」

「本気で……イクゾー！」

「ピアッ！（いぎ尋常に勝負！）」

スピアーが物凄い勢いでこちらに突っ込んでくる。おそらくスピ
アーの大技。誰にも見せたことのない必殺技。スピアーも本気で勝
ちに来てるのだ。

「あれはメガホーン！ 虫ポケモン最強の技！ そしてスピアーが覚
えることのない技！ ワクワクするわね！ ダークライー！」

「アア！」

「避けるなんてつまらない真似はしないわ。スピアーの想いにも全

力で答えましょ。ダークライ！ 今までにないくらい強力なあくのはどう！」

「アタリマエダ！」

避けると命じられても今回ばかりは避けない。ここで避けるのはスピアーに失礼だ。正面から受け止める。僕はそう決めていた。ナナもそう決めている。

悪意を高める。周りに黒い波動が広がる。それをさらに集めていく。もつとだ。もつと大きく。周りの黒い波動の勢いが更に増す。そして大きな闇が生まれた。闇は球体となつて僕の真上を浮遊する。なんだこれは！ 明らかにあくのはどうではない！

でも時間がない。無我夢中でそれをスピアーに向かつて落とす。闇の球体はスピアーを包み込んだ。しかしスピアーは闇の球体から飛び出して。僕の腹に今までのどんな一撃よりも重い一撃を喰らわせる。意識が一瞬で吹き飛びそうになる。そんな時にナナの叫び声が聞こえる。

「まだ終わってない！ 気合いで立ちなさい！」

それが僕を震え上がらせた。気合いで倒れないように持ちこたえる。本来なら倒れるはずの一撃を負けられないという想いだけが駆り立てた。僕はスピアーの方を見る。

スピアーはぶつ倒れて寝ていた。まさか疲労が限界に……

「違う。恐らくダークライの一撃。あれはあくのはどうなんかじゃない。恐らく、あれがダークホール……」

しかしスピアーはすぐに目覚めて起き上がってくる。ナナはそれを驚きの表情で見っていた。まるで予想外と言いたげに。そしてスピアーの方を見て気付く。

「理屈は分らないけど、メガホーンの一部を自分に撃って、睡魔を払って目覚めた」

「ピアッ……（続きをやろうぜ）」

「もう終わりよ。スピアー」

ナナがボールを投げる。今度は真つ直ぐだ。スピアーは避けようとするが、ダメージが響いて動けない。スピアーはボールに吸い込ま

れていく。モンスターボールは何度も烈しく揺れる。ナナは祈るように必死に見ていた。そして音が鳴り、モンスターボールの揺れは止まった。

「……………スピアーはゲットよ!」

その時だった。この付近だけ日差しが当たる。まるで天気も祝福してくれてるかのようだ。

「ナナ。おめでとう」

メアが祝福する。この様子だとずっと前からいたようだ。バトルに夢中になりすぎてナナも僕も一切気づかなかった。

「メア。もしかして晴れたのって…………」

「野暮なこととは効かないの。でもポケモンゲットなんて大イベントが雨なんて最悪なんだから晴れて良かったじゃん」

「そうね」

そういうことか。この晴れはそのニンフィアがにほんばれをしたからだ。余計な気遣いをして…………もつともナナは満足しているよ。うなので強くは言わないが。

「これからどうするの?」

「みんなを回復させてジム戦に行くよ!」

そうして僕達はスピアーという仲間を加えて、二つ目のジムに挑む。

22話 トレーナー

ジムに行くが、不幸にも不在で今日はジム戦は出来なかった。仕方ないのでジムの予約をする。幸いにも明日予約することが出来たので、すぐにでもジム戦になりそうだ。そしてナナは腕試しも兼ねて空いた時間でエリートトレーナーの筆記試験の問題集を解いていた。別にエリートトレーナーになるつもりはない。しかし周りのトレーナーがどんな勉強をしているのか知りたいのももう少し知識を深めたいという理由で解いているのだ。僕も横で問題集を見る。この世界ではどんな勉強をしているか気になるしな。

『……炎に効果抜群の技を述べよ』

簡単だな。僕でも解ける。みず、じめん、いわだ。ナナもすらすら書く。それから問題に軽く目を通す。今の問題は絶対に抑えておきたい基本と書いてあった。そして基本は問題なく解けることを確認するとナナは応用にページを飛ばした。

そして問題の内容を見て僕は驚愕する。

「れいとうビームを撃つ炎タイプのポケモンはどのように撃つのか体の仕組みについて触れて説明せよ」

いや、分かるか！ こんな鬼難易度みたいな問題を誰が答えられんだよ！

そんな時にナナが横で答える。まるで僕が悩んでるのことに察したようだった。

「……引つ掛け問題よ。炎タイプで撃てるのはアローラ地方のガラガラだけ。また普通のガラガラも撃てる。つまりこれはガラガラがれいとうビームを撃てる理由を答える問題。そしてガラガラがれいとうビームを撃てるのはガラガラには喉の辺りに冷却器官が備わっているからよ。アローラガラガラもガラガラもタイプが違うだけで体の仕組みは変わらないの」

なんでナナは簡単に答えてるんだよ！ 絶対に普通は博士クラスじゃないとこんな問題は答えられないだろ！

「ちなみに冷却器官を持たないポケモンでもれいとうビームを撃つこ

とはあるわ。例えばヨノワール。それは黄泉の冷気を集めて、発射しているという説が濃厚ね」

「ナルホド……」

そしてナナは次の問題を見る。そして悩むことなくスラスラと答えを書いていく。どれも似たような感じの問題。ポケモンの体について理解していないと答えられない問題……

「エリートトレーナーは知識を問われる筆記試験。その場でレンタルしたポケモンで試験監督と戦う実技試験。その両方で合わせて百点を取れば一次試験を合格。続いて二次試験は自分の育てたポケモンを持っていき、一次試験の通過者同士でポケモンバトルを行い、勝てばエリートトレーナーに認められる」

「大変だな……」

「ええ。でも国際警察やレンジャーなどエリートトレーナーの資格を必須にしている職業は多いわ。もっとも合格は困難を極めるわ。しかし試験を全てスルーしてエリートトレーナーだと認めてもらう方法もある」

「……？」

「ジムバッジを八つ集める。たまに馬鹿がエリートトレーナーを目指すためにジム巡りをして、挫折するという話を聞くわ。もっともジムバッジを集める実力があれば試験なんて余裕なんだけどね」

「だろうな。ジムバッジ一つの入手する難しさ。それは身に染みて知っている。」

「……そして実を言うと最近少し悩んだ。筆記試験の問題を解いていたのも悩みがあるから」

「ナナが僕に言う。恐らくムンナもスピアーもボール越しに聞いているだろう。」

「私、ポケモントレーナーに向いているのかなって。筆記試験の問題が解ければ自信になるかと思っただけど、そんなことはないわね」

「……え？」

「優しさだけじゃダメ。理屈は分かる。それでも私はポケモンに厳しくしたくないの。だって上下関係が無くて、みんな仲良くの方が良い

「じゃん」

「ナナ……」

「だけど、それじゃあ強くなれない。優しいだけでやっていける世界じゃない」

ナナはメアに言われた言葉に本気で悩んでいた。メアの言葉を想像以上に真剣に受け止めていた。

「私には夢がない。お兄ちゃんみたいなポケモントレーナーになりたいたいという曖昧な目的だけで、ポケモントレーナーになってチャンピオンを目指している。だから甘い。ポケモンに対しても自分に対して……ダークライ。私はどうしたらいいかな？ もうトレーナーなんて辞めた方がいいのかな？」

「何故……僕に聞ク？」

僕はナナよりポケモンの知識もない。トレーナーでもない。ただのポケモンだ。そのポケモンが分かるわけがない。そんな僕のアドバイスは恐らく役に立たない。僕が辞めない方がいいと言ったとしても、それは僕の願望であり、ナナのためにはならない。

「モット……適任がイルダロ」

ナナが気付いたのか。部屋から出た。これはメアに聞くべきだ。メアならトレーナーとしての知識もある。それにナナに長年寄り添ってきた。そしてナナのことを本気で考えて、誰よりも見てくれる。ナナのためを思って嫌われる覚悟をしてまで本気で意見を言ったのがなによりもの証拠だ。恐らくナナの悩み相談として彼女以上の適任はいないだろう。

メアの部屋に行くとメアはバスローブ姿で出迎えてくれた。それからナナにモモンのみのジュースを出して、もてなす。それからナナはメアに全てを言った。メアは静かにそれを聞いていた。そして最後まで聞いてメアはゆつくりと口を開いた。

「ナナのそれは本当に優しさなの？」

「え？」

「ポケモンを育てるのに厳しさが必要な理由。それは強くするためじゃないと私は思う」

「…………どういうこと？」

「例えばポケモンがナナの元から離れたいと言うよ。その時にナナがいなくて生きていけるのかな？ ポケモンがなんらかの事情で自分から離れても生きていけるように育てるには厳しきも必要だよ。だって優しいだけじゃトレーナーがいないと生きていけないポケモンになっちゃうもん」

その時にメアの本当の真意が語られた。メアは強くなるためには厳しくしないといけないとは一言も言っていないのだ。メアはナナのことを否定していなかったのだ。それに対してナナも虚をつかれたような表情を見せる。

「あ…………」

「強さだけじゃない。ポケモンがトレーナー無しでも生きていける能力を育てるのがトレーナーだと思う。だってトレーナーはいつまでもポケモンと一緒にいるわけじゃないんだよ？ それが分からないならポケモントレーナー失格だよ」

「そうね…………」

「出会いがあれば別れもある。そして別れがあるから出会いもあるんだと私は思う」

ナナが何度か小声でメアの言葉をリピートする。ナナにもその言葉は響いたのだろう。

「旅は始まったばかりだよ。まだトレーナーをやめるには早い。やれるところまでやりきって、もう無理だ。そう思った時に判断しても遅くないじゃないかと思うよ」

「メア…………」

「最初から完璧なポケモンもトレーナーもいない。ナナはもつと強くなるよ。私が保証してあげる！ だから全力でジム戦を頑張ってください！ 今のナナなら絶対に勝てるから！」

その一言でナナが安心した表情を見せる。恐らくナナはその一言で救われたのだろう。やっぱりメアの元に来てよかった。

「それにあんなこと言ったけど私はナナのどこまでも甘いスタイル好きだよ。私にもつとナナの活躍見せて？ だってナナが勝ったり成

長したりすると自分のことのように嬉しいんだもん！ 実は私って
ナナのファン一号なんだよ？」

「メア……特等席で見せてあげる。私がチャンピオンになる瞬間を！

だから楽しみにしてて！」

「そこなくっちゃ！」

そうしてナナの悩みは晴れた。自分の目指す道。自分のやり方と
いうものがナナの中でも改めて見つかった気がした。そんな万全の
状態でナナはジムへと挑む。

23話 2つ目のジム戦

「へーい！ お嬢ちゃん！ ジムバッジはいくつかかな？」

「……一つ」

「グッド！ それじゃあ行くぜ！ 俺は岩タイプを使い手のトケイソウ！ 行くぜ！」

ナナの悩みが吹っ切れた翌日。ナナはロリータ服を着こなし、予定通りジムに挑んだ。今回は観戦席でメアも見ている。相手は金髪のちやらっぱい男。

「最初になにを出す？」

「お願い！ ムンナ！」

「ンナツ（俺が来た！）」

「バッド！ 岩に有利じゃないね」

「私は好きなポケモンで勝ちたい。ジム戦用のポケモンを捕まえるトレーナーではありませんか」

「エクセレント！ それじゃあ俺はウソツキー！」

「ウソツ（よろしくお願いします）」

コングが鳴った。開始合図があるバトルは久しぶりだな。

「ムンナ！ いわなだれが来るからウソツキーに近づいて！」

「ウソツキー。いわなだ……え？」

トケイソウは技名を言いかけてやめた。当たり前だ。実は今回は事前に下調べをしている。使うポケモンはウソツキーとオムスター。そして技もバトルスタイルも研究済み。そうすればナナの予測による未来予知の範囲内だ。

「ムンナ！ その一瞬を見落とさないで！ おんがえしで上に弾いて！」

「ンナツ！（最高の指示だぜ！）」

ウソツキーが宙を舞う、ムンナのおんがえしも前よりもパワーアップを遂げている。相手がどんなに強くてもムンナなら負けないだろう。

「そしてウソツキーより上に飛んで追撃おんがえし」

「ウソだろ……これがジムバッジ一つの実力かよ……」

「ウソツ……（限界つす）」

ウソツキーが戦闘不能になる。相手はあとオムスターだけだ。今回は楽に勝てそうだな。

「ちくしよう……油断したぜ」

「油断？」

「悪いね。だけど、ここからは俺もマジだぜ！」

オムスターが現れる。全て下調べした通りだ。

「オムスター！ 三連続でからをやぶる！」

「させない！ ムンナ！ あくのはどう！」

ムンナのあくのはどうを叩き込む。それにビクともしないオムスター。ナナが下唇を噛む。完全に計算が狂った。三連続でからをやぶる？ 聞いていた話だからをやぶるは一度までしか使わないという話だったが……

「言っただろ？ 本気で勝ちにいくって」

「ムンナ！ のろい！」

「俺は基本的にジムバッジ三つ以下のやつにはからをやぶるは一度までというマイルールがある。そうしないと誰も勝てないからな。でもそれじゃあ嬢ちゃんにはヌルすぎるだろ？」

「……もう一度のろい！」

「ジムリーダーは超えるべき壁だ。ジムバッジの数でポケモンに制限はかかる。だけど戦い方に制限はないんだぜ？」

「ムンナ。のろい！」

「さて、そろそろか。オムスター！ アクアジェット！」

「ムンナ！ おんがえし迎え撃って！」

「ンナツ（あとは任せたぞ！）」

ムンナのおんがえしとオムスターのアクアジェットが正面からぶつかり、砂埃が舞う。なんて激しいぶつかり合いだろうか。そして立っていたのはオムスター。ムンナは戦闘不能になっていた。

「お疲れ様。ムンナ」

「嬢ちゃんのムンナ！ 良かったぜ！」

「オムツ（ああ！）」

「……なんで他のトレーナーには手加減するんですか？」

「ジムリーダーっていうのは負けることに価値がある。つまり本気で挑んでやつと勝てるくらいじゃないといかん。そして嬢ちゃんならこれでも勝てるかと判断したのさ」

「そうですか。お願い！ スピアー！」

「ピアッ！（お任せを）」

それからナナはスピアーに痛みはないか。ちゃんと戦えるか問いかける。スピアーはそれに頷いて応える。スピアーにはなんの問題もなさそうだな。しかし、既に若干のダメージがあるようだ。少し不安だがスピアーを信じよう。

「嬢ちゃんのスタイルは知っているから不利でなかつダメージを受けているスピアーを出すことにはなにも言わんぜ。オムスター！ ロックブラスト！」

「スピアー！ 二秒後に右に避けたあとに上に飛んでシザークロス！」

そして動く際には忘れずにこうそくいどう！」

「ピアッ！（了解）」

スピアーは動きながらこうそくいどうをする。同時にオムスターが連続で飛ばす岩も全て避けてオムスターにシザークロスを決めた。決めると同時に再び自己判断でこうそくいどうをして、動きを俊敏にしていく。

「なあ……嬢ちゃん。もしかして数秒先の未来が見えてねえか？」

「さあ？ スピアー！ もう一度シザークロス！」

「オムスター！ からにこもるでやり過ぎせ！」

「だったらメガホーンで強引にぶち破ってやりなさい！」

スピアーはシザークロスをした後にオムスターから離れることなくお尻の針を使い、メガホーンでオムスターを吹き飛ばす。しかしオムスターはすぐに立ち上がる。この一撃でも致命傷にならないか。そしてジムリーダーは不気味に笑う。

「スピアーのメガホーン。そしてムンナのあくのはどう。本来覚えな
い技を覚えるポケモン達……育成の腕も相当か？ それともそらい

う個体を捕まえたのか……どっちだ?」

「後者よ。私がすごいんじゃないかってスピアーとムンナがすごいんですよ!」

「……そうか。オムスター。三秒後に右十五度にストーンエッジ!」

「スピアー。追撃をかけてメガホーン!」

スピアーが神速でオムスターに接近する。誰の眼にも追えない速さ。しかし数秒後にスピアーは地面から突き上げる岩に吹き飛ばされ、戦闘不能に追い込まれていた。

「スピアー!」

「言つとくが嬢ちゃんのやっている未来予知。俺も使えるんだぜ?」

「……」

「というよりも優れたトレーナーなら誰もが使える技だ。相手の癖や戦闘スタイルを見抜いて予知に等しい読みをする。そして優れたトレーナーというのは読まれたことすら読んで動く」

あつさりとスピアーまでやられた。既に簡単に勝てるなんて思っていない。そもそもジムリーダー相手に簡単に勝てるわけがなかったのだ。さすがジムリーダー……

「ありがとう。スピアー」

スピアーをボールに戻す。フィールドには余裕の姿を見せるオムスター。そのオムスターは今まで見たどんなポケモンよりも強そうに見えた。

「さて、残すは一体か」

「頼んだわよ。ダークライ」

「……ダークライ? 俺も始めて見るポケモンだな。だが、やることは変わらない!」

「行くよ! ダークライ!」

最後は僕か。相手は弱くない。おそらく相当な腕だ。しかしナナも腕で言えばジムリーダーにすら負けていない。勝てない相手じゃないはずだ。

「ダークライ。あくのはどう!」

「オムスター! 上に飛んでがんぜきふうじ!」

あくのはどうを撃つがオムスターは想像を絶する速さで動く。まるでエイリアンみたいだ。そして空から岩を降らせる。ナナは必死に指示を飛ばして、僕に避けさせる。

「……しまった！」

「オムスター。ハイドロポンプ！」

避けようとするが岩に囲まれて逃げ場がないことに気付く。もつと速く動けるなら岩と水の隙間に行き、避けることが出来る。しかしそれは今の僕には無理だ。これは完全に先手を取られた。最初からがんせきふうじを当てるつもりなんかなかった。逃げ道を塞ぐためだけの技。

でもまだ終わりじゃない！ 僕は独断であくのはどうを使ってハイドロポンプを迎え撃つ。しかしハイドロポンプの威力は強く、惜し負けそう。ちくしょう！

そんな時だった。ナナの声が響く。論理もない無茶な作戦。完全な根性論だ。

「ダークライ。ハイドロポンプをスピアーの時みたいに気合いで耐えて、カウンターのダークホール！」

思わず耳を疑う。まさか、あの技に耐えろと？ いや、さすがに無理だろ！

「嬢ちゃん！ さすがにそれはナツシング！」

「ごめん。ダークライ。でも今の私にはそれしか思い浮かばない。今はあなたに頼るしかないの！ あのスピアーのメガホーンを耐えた、あなたなら出来るはずよ！」

いや、耐えるなんて無理だ。だけど勝てるぜ。思い浮かんだ。この技の突破方法を。

そしてナナも同じことを考えている。あくのはどうをやめて、目にも止まらぬ速さで移動してオムスターの背後に回る。

『スピアー』

それがキーワードだ。技ではない。動き方だ。人間でも同じこと。姿勢や構えを変えれば動きがグンと上がることがある。

僕はスピアーと戦い、何度も間近で見てきた。だから出来た。スピ

アーという言葉でスピアーの動きを思い出す事が出来た。スピアーと同じ要領で動けば、速さは増して、反応できるようになる！」

「おいおいマジかよー！」

「あなたの未来予知は予測。つまり知らない技には対応できない！
つまりダークホールを避けることは出来ない！」

大きな闇の玉を作り、オムスターへと叩きつける。オムスターは深い眠りについて、地面へと落とされる。追い打ちをかけるようにオムスターに近づき、オムスターに触れてゼロ距離であくのはどうを撃つ。砂埃が舞い、ズシンという大きな音と同時にオムスターは地面へと落とされた。これは恐らく相当なダメージのはず……

「工夫でも技術でも追いつけないなら私達はバトルの中で成長する！」

いつか吐いたセリフ。あの時は出来なかったけど、今なら出来た。そしてオムスターは戦闘不能になっていない。しかしオムスターは強く悪夢にうなされる。悪い夢はオムスターへの肉体ダメージへと直結して、体力を蝕む。

「ダークライ！ 決めるよ！ あくのはどう！」

「オムスター。起きろ」

その冷たい声にオムスターはピクリと判断して目覚める。そして素早く動き、僕のはどうを避けた。なんだ今のは？

「悪いな。俺のオムスターはスパルタ教育を乗り越えた特別性で俺の声一つで状態異常の回避、そして技のデメリットを全て無しで撃てる訓練をされてる」

「な！」

「さてと、いいもんを見せてもらった。そしてジムリーダーとしての役目を忘れて本気でかちたくなつたぜ！」

カツコよく言うが、それは無駄だ。

「悪いな。もう勝負はとつくのとうに終わってるんだわ。僕達の勝ちで。」

「オムスターー！」

オムスターはその瞬間にドカツと倒れる。ナナが用意した切り札。

それが役に立ったな。しかしナナから聞いた時は驚いた。そしてスピアーもよくやった。

「なにが起こった!」

「オムスターの体を見てみなさい」

「……くつつきばり! いつの間に!」

そうだ。くつつきばりだ。マイナーな道具。持っているだけで体力を削る。そして触れると触れた相手に稀にくつつくことがある。

「しかしダーククライが持つてる様子は……」

「スピアーよ。あの子は速いから細かい部分まで見えないわよね。特に黄色と黒に塗装されたら、なおさら」

僕達の作戦。まず最初にムンナが一匹目を倒す。そして二匹目をムンナが弱らせて、次に出てきたスピアーがくつつきばりをくつつける。そして普通に気合いで倒す。

「私も普通なら思い浮かばないわ。でも色々とあってね」

この作戦を思い浮かんだのはダークポケモンのおかげだ。スピアーはダークポケモンの時に苦しかったことを思い出して、それを相手のポケモンに強要出来たなら強いのではないかと考えた。その結果が体に付いているだけでダメージを与えるくつつきばり。

最初はナナもスピアーにダメージを強いるということとやらうとは思わなかった。そもそもナナは絶対に思いつかない。それでは誰が提案したのか。スピアーだ。スピアーがジム戦の直前にゴミ箱から拾ってきたのだ。

「あと昔から言われてるの。エラニの森のスピアーは狡猾だつて」

エラニの森のスピアーが狡猾だと言われる理由を改めて理解した。賢さも相当高い。ホントにあの時のナナがスピアーから逃げようとした理由がよく分かる。

「……くつつきばりだけじゃねえな。オムスターがやられたのはムンナ、スピアー、ダーククライの攻撃を蓄積した結果でもある。これは完全に完敗だ! エールバッジをやらう!」

「やった!」

ナナが無邪気に喜ぶ。

僕たちは無事にジムを攻略した。二つ目のジムバッジを手に入れたのだ！

24話 新たな可能性

次の街はシノノタウン。行き方は蒸気機関車。歩いて行く案もあったが、『機関車の旅も素敵よね!』というメアの一言で機関車に乗ることになった。

主要時間は約二時間。つまり今すぐにも次のジム戦に挑める。あの女にリベンジマッチを挑むことが出来るのだ。

次の列車発車は翌日の十時。この大都市であるカイヨウシティともお別れだ。少しだけ名残惜しい気がしないこともない。そして実を言うと観光らしいことを初日しか出来ていないのであった。そのためナナはメアと一緒に観光をしていた。

「しかし、くつつきばりは意外だったよ 絶対にナナは使わない戦術だと思ってたから!」

「あれはスピアー自身が言い出したのよ」

「それめちやくちや頭良くない? さすがエラニの森のスピアー……」

「おい、その女」

歩いているとナナが男の人に呼び止められた。顔はフードで隠れていて見えない。そして声から察するに三十代近くの男性……

「なんですか?」

「ナナ。絶対に関わらない方がいいよ……」

不安そうに隣で見つめるメア。新手のナンパか?

だったらスルー安定過ぎる。そもそも女の子に話しかける成人男性とか事案だ。というよりロリコンだ。うん。

「……私は強さを追い求める者」

男の人はガンツとナナに肩をぶつける。そして明らかにわざと本を落とす。しかし本を拾う素振りは一切みせない。そのまま立ち上がり、どこかに歩いていった。今のは……

「ナナ! だ、大丈夫?」

「ええ……でも、この本……」

それは随分とボロい本だった。タイトルは『シンオウ昔話』という

もの。

興味本位で軽く開くと、そこには人間の大人より一回り近く大きい巨大な黒いポケモンが描かれていた。そして名前のところには『ダークライ』と。しかし僕の知っているダークライとは姿が少し違うような……

「……ナナ？」

『そのポケモン。周りを全て闇に包む。そして自身も闇に包まれる時、真の姿を見せた。その力、強大につき伝説のポケモンにすら引け取らぬ。名をダークライとする』

ナナは本の一文を読んだ。なんだこれは？ どういうことだ？

「あー！」

「メア。どうしたの？」

「メガシンカだよ！ きっとこれはメガシンカしたダークライのことなんだよ！」

「……本当にメガシンカなのかどうかは置いて、ダークライに真の姿があるのは間違いなさそうね。とりあえずこの本は預かっておきましょう」

ナナは本をバッグに入れた、恐らく偶然ではない。ナナが僕を所持しているのを知っていて、わざとぶつかった、ナナにこの本を渡すためだけに。しかし誰だ？

あの男の人は何者なんだ？ 強さを追い求める者。言っていたのはそれだけだ。

「ナナ。そういえばシノノタウンで大会があるらしいよ」

「賞品は？」

「なんか、つきのふえという骨董品みたい。賞品目当てで大会に出る人は殆どいなくて、腕試しって人が多そうな感じ」

「腕試しか……折角だし出てみようかしら」

「うんうん！ 応援してるね！」

旅は順調に進む。色々な災難はあったが、確実に進んでいる。最初はナナと二人で始まった旅だったが、仲間も増えた。これからもまだまだ増えていくだろう。

「……このヒトモシは個体値が悪い」

グソクムシヤを連れした少年はそう言いながらヒトモシを見逃す。グソクムシヤもそれを無言で見つめていた。まるでこのトレーナーはそうやると分かっているかのようだ。

「チパッ」

「パチリス。俺は昔から三値説を信仰している。絶対に人間にも才能があるようにポケモンにもバトルが得意な個体、不向きな個体というものがあるはずだ」

「チパッ」

「俺は絶対にチャンピオンになりたいんだ」

その少年は既にジムバッジの数は四つ。強さは折り紙付きだった。また全てのジムを苦戦することなく無傷で突破している。まさしく鬼のような強さ。

「弱いポケモンなんかいらぬ。欲しいのは強いポケモンだ」

そして少年の足元には大量のスーツ姿の人間が転がっていた。その数は二十人に及ぶだろう。全て少年が一人で倒したのだ。

「い、いけっりザードン！」

最後の残った一人がモンスターボールを投げる。それと同時に禍々しいオーラに赤い目をしたリザードンが現れる。少年はそれを退屈そうに見ていた。

「ダークポケモン……個体は強くてもトレーナーの命令を無視するようじゃ弱いよな」

「……え？」

「言い忘れてたけどグソクムシヤ。アクアブレイク」

次の瞬間にリザードンは空から落ちた。少年はグソクムシヤに命じてボールを破壊させる。そして迷うことなくリザードンを捕獲する。

「ダークポケモン。訓練には良かったんだけど、もう相手にもならない。ゴウー団残党狩りのレベル上げも終わりかな」

「な、なにを！」

「僕がゴウー団の残党狩りをする理由。それはレベル上げだ。ポケモンのレベルを上げるには格上を倒すしかないからね」

「ひ、ひえー！」

「それと罪はきちん償ってもらおう。反省してもらおう。お前達はこれから刑務所で暮らすんだ。僕は悪人ではない。悪い人を見つけたら警察に突き出す。そのくらいの常識はある」

少年は強くなるために手段は選ばない人間ではない。自分が悪いと思っただけは絶対にしない。それなのに三値説を信仰する理由。単純に彼は三値説のなにか悪いのか分かっていないのだ。彼の motto は『自分がされて嫌なことはしない』である。

だからポケモンを盗んだりはしない。しかし個体値厳選はする。何故なら自分が個体値厳選されても良いと思っっているから。

「しかし強いヒトモシ探すとゴウー団の残党狩りの両立は疲れるな」
「パチリッ！」

「ヒトモシがいたか。パチリス！ でんじは！」

そうして少年ノエルの個体値厳選が終わったのは四時間後だった。またノエルが墓場でゴウー団に襲われたのは偶然ではない。ノエルは自分からゴウー団を襲撃した。そして頃合いを見て、同級生がどのくらい強くなったのか確認するために呼び出した。そしてグソクムシヤを使わなかったのはパチリスのレベルを上げるため。

「やっぱり強くなるには本気の四天王かジムリーダーと戦うのが一番か。しかし、どうしたら俺に本気を出してくれるか……」

「そういうことなら私が手伝ってあげようか？」

そんなノエルに近づく女性がいた。それからノエルと女性は少し会話する。ノエルは女性の提案を快く受け入れた。ノエルの修行の旅はまだ続くのだ。

3 バトル大会

25話 シノノタウン

ガタンガタンと電車が揺れる。電車の中は静かだ。指定のボックス席にしたおかげで周りに迷惑になることはないのでムンナとスピーア、そして僕もボールから出ている。

しかし電車と言うが日本とはかなり違う。ボックス席なんて言うが実際は壁で区切られて小さな部屋になっている。恐らくポケモン連れに向けた配慮だろ。

そして近くにはメアとルンパツパ、それとあの生意気なニンファイアだ。

「あ！ 野生のオノノクスと戦ってるトレーナーがいるよ！」

「野生でオノノクスなんて随分と珍しいわね」

この電車はそこまで速くはない。具体的な速度は分からないが、外にいるポケモンを観察出来るくらい遅いと言えば分かるだろう。もつとも自転車よりも圧倒的に速いが。

「ダークライ。この電車は移動というより外を見て楽しむ目的で作られたものよ」

「ソウナノカ？」

「ええ。移動だけなら少しお金払ってケーシイみたいなテレポートを覚えたポケモン持つてるトレーナーにテレポートさせてもらうのが一般的よ。通称テレポート屋。生計を立てられるくらいは稼げないけど、お小遣い稼ぎとしては人気よ」

なるほど。たしかにポケモンがいる世界ならそうなるのか。しかしレポートで町だけを巡ってジムバッジを集めるのは少し味気ないなと思う。なんとなくナナが歩いて旅をする理由が分かった気がする。もつともこういう電車に乗るのもたまには悪くないが。

「……ていうか、ナナったら！ 電車でも新聞ばっかり読んで！」

「旅をするなら現在デトワール地方で起こってる出来事は把握した方がいいわ。場合によってはルートの変更をする必要もでてくるから」

「それでなんか面白いことは書いてありましたか？」

「旅に影響しそうなことは少しゴウー団の残党の動きが活発になって
いることだけね。それと遺跡から謎のポケモン発見。圧倒的な力を
持ち、調査員を倒したあと消息不明か」

「えー！　なんか大変なこと起きてない？」

「ゴウー団のことは予測の範疇よ」

「そっちじゃなくて遺跡の方よ！」

「どうせ少し大きなドダイトスとか、そういうオチに決まって……ん
？　古い文献を調べたところレジロックというポケモンと大きく似
ていることが判明？」

「レジロック？　なにそれ？」

「さあ？　私も聞いたことないわ」

なんか面白いことが起こってそうだな。しかしレジロック。どこ
かで聞いた気がするんだよな。たしか伝説のポケモンだった気がし
なくもない。まあ伝説のポケモンがホイホイいるわけないし気のせ
いだろう。恐らく新種だ。うん。

「まあでも遺跡の場所はカイヨウシティ北西の封鎖地域。私達には関
係ないわ」

「えー！　探しに行かないの？」

「当たり前でしょ。そもそも封鎖地域は強い野生ポケモンが多いから
安全のためにジムリーダーか四天王が認めた人しか入れないのよ？」

ていうかジムリーダーや四天王が認めたトレーナーを倒す野生ポ
ケモンとか少し強すぎではないか？　さすがにこれはマズいだろ
……

「他になんか面白い記事ないの？」

「あとは芸能人のスキャンダル、ポケモンの大量発生情報ばかりね」

「ふーん……」

「まあ大体は目を通したからご自由にどうぞ」

ナナがメアに新聞を渡すがメアは「そんなのいらない」と突き返す。
ナナは新聞を自分の手元に戻して、ゴミ箱に捨てる。そして窓に近づ
いて外を見た。外はただの平原だ。でもそこには様々な野生のポケ

モンヤトレーナーがいる。ナナは外を見て一瞬だけ笑った。

そんなナナにカシャリとカメラのシャッターを切る音がした。音がする方を見るとカメラを持ったメアがいた。

「メア。いつの間にそんなものを……」

「旅の記録は残したいなって思ってた昨日買っちゃった！ 記録を残すことで私達はここにいたという証明になる。絶対に消えない思い出になると思うんだ」

「今……の写真。撮る必要ある？」

「ナナが可愛かったからね。撮りたくなっちゃった」

「……まあいいわ。折角だから二人で集合写真でも撮りましょ」

ナナとメアが近づいて電車から見える景色を背景にツーショット写真を撮る。ナナは笑顔を作り、メアは笑いながらピースをしている。しかしナナの写真。僕も一枚欲しいな。

「ダークライ！ ムンナ！ スピアー！」

「……ン？」

ナナがメアのカメラを拝借して僕達の写真を撮る。それに一体なんの意味が……

「私やメアの写真だけじゃなくてポケモンお写真も欲しくなっちゃった。だってポケモンも一緒に旅をしてる仲間なんだから。ほら、ニンフィアとルンパツパも！」

カシャリと再びシャッター音が鳴る。なんか先程の静かな雰囲気から一気に賑やかになってきたな……

「ねえ！ ナナ！ 見て！」

「どうしたの？」

「ほら、あそこのウィンディに乗ってる少年！ ボルノよ！」

「ホントだ！ 方向的に私達と同じシノタウンよ！」

ボルノ。たしかナナの同級生だな。思っていたよりも早い再会にテンションを上げる。そして窓からボヤけてシノタウンが見えてくる。カイヨウシティ程ではないが、そこそこ大きな街だな。もうそろそろ電車の旅も終わりか。名残惜しい気もする……

「それじゃあシノタウンのジムも頑張ろうね！ みんな！」

シノノタウン。そこは変哲のない街である。しかし年中常に色々なイベントが開かれることから人は多い。そして新しい町というのはどんなものでもワクワクするもの。街にいたら最初に『シノノカップ』という地元の大会にエントリーを済ませた。

「ふーん……この大会に出るんだ」

そんな時だった。金髪の女性がナナの耳元で囁いた。それこそ息が当たるくらいの距離だ。ナナは思わず体をゾクツとさせる。

「来たね。チャンピオンの妹」

「私にはナナという名前があります……ジムリーダーのキンラン」

「ごめんね。私は弱い人の名前は覚ええない主義なの。名前を覚えてほしいなら分かるよね？ 折角だし、ここで手合わせしようか。マルマイン！」

「ダークライ！」

ナナが僕を出す。改めてジムリーダーの姿を見るとピカチュウの尻尾がプリントされたマントに太ももを？き出しにした白い縦セーターワンピースという可愛い格好をしている。もつともナナの方が可愛いが。しかし、ここは建物の中。だが周りもいつものことかと慌てる様子はない。これは本気でやってしまっただけなんだな。

「マルマイン。リフレクターとひかりのかべで周りを囲いなさい」

「……なにを？」

「周りに被害が及ばないようにステージを作ったのよ」

相手はマルマイン。あの時は手も足も出なかったが、今はナナもいる。勝てるまでは言わないが、良い勝負にはなるだろう。

「あなた。まさか私に一泡吹かせられると思ってないかしら？」

「ええ。これでもジムバッジは二つ。それなりに実力はありますから」

「マルマイン。だいたくはつ」

「ダークライ！ 離れて！」

ナナの指示通りマルマインから離れようとする。しかし見えない壁に阻まれ距離を離せない。マルマインが光り始めて、ドカンと爆発を起こす。爆発に巻き込まれて凄まじい衝撃波と爆風に吹き飛ばさ

れる。体がバキバキに折れそうなくらい痛い！

そんな僕にナナは迷わず駆け寄り、げんきのかけらを食べさせる。そしてナナはキンランを睨んでいた。

「リフレクターとひかりのかべで逃げ道を奪うのはルール違反かしら？」

「あなた、ポケモンをなんだと！」

「もしかしてマルマインにだいはくはつをさせたことを怒ってるの？

あれは私のポケモン。どう扱おうがあなたには関係のないはずよ？ それにルールにもだいはくはつやじばくといった技を使うなどいう規約はない」

「……ルール違反でないなら、なにをしてもいいと？」

「バトルというのはそういうものよ。倫理の話をするのならポケモンを戦わせること自体がアウトよ。もしも私の戦い方に怒るなら——この上ない偽善ね」

この人は違う。ナナとは戦闘スタイルが根本的に違う。しかし彼女も間違ったことを言っていない。そしてナナも言っていない。両者共に正しいのだ。

「ナナ。彼女を間違っているというなら方法はただ一つだよ」

「メア？」

「バトルで勝つ。少なくともポケモンバトルというものでは勝った方が正しい。それがバトルの世界だよ」

「そっちの女の子はよく分かってるじゃない。チャンピオンの妹。私のやり方が間違っているというのなら、私を倒して証明しなさい」

その時に僕は本能的に感じ取った。このジム戦。それは恐らくナナにとって一番キツイものになるだろうと。

26話 特訓!

この世界には色々なトレーナーがいる。ナナみたいにポケモンに寄り添うトレーナー、メアみたいにポケモンと一緒に戦うトレーナー。そしてキンランみたいな勝つためなら、どんな手段でも使うトレーナー……

「……なんなの！ あのジムリーダー！」

ナナはさつきから怒り心頭だ。しかし腑に落ちない。強くなりただけなら、ゴウー団に入つてダークポケモンの研究をすればいいはずだ。戦略は誹謗されるかもしれないが、キンランはポケモンを真面目に育てていた。どうしてそんなことをするのだろうか？

「でもルール違反にならないならなにをしてもいいというのは私も共感できる部分かな」

「メア？」

「例えばナナがジムでやったスピアーのくつきばり戦法。もしかしたら人によつては怒りを覚えるんじゃないかな？」

「それは……」

「それにダークライだって、『そんなポケモン知らないからルール違反だ！』という人も少なからずいると思うよ。結局のところルールに書いてないけど違反なんて言い始めたらキリがない。だって善悪の基準は人によつて違うんだから。つまりルールを守ればなにをしてもいいというのは、ある意味では正しいと思うよ」

「そうだけど……」

「文句があるなら勝つて言う。勝つて『ポケモンを思いやらない戦い方なんかに負けない』と言うしかないよ。文句があるならバトルで語るの」

「メア。随分とあのジムリーダーの肩を持つわね……」

「なんか共感出来たんだよね。でも少しだけイラツとくる部分はあつたからナナに勝つてぎゃふんと言わせてほしいけどね」

「……そうね」

ナナは少しだけ小さな声で言った。ナナも分かっているんだな。

色々と思うところはありますがキンランの実力は本物。勝つのは困難を極めるだろう。

「それだけじゃない。キンランのだいばくはつは完璧だった」

「わ！ ボルノ！ いつの間に！」

「いや、見かけたから普通に声をかけたただけだ」

背後からいきなり声をかけるボルノ。ほんとにいつの間に現れたな。こいつ。

「おつす。遠くからバトル見てたぜ。しかし、ジムリーダーっていうのは強いな」

「ボルノ。どういうこと？」

ナナがボルノに説明を求める。だいばくはつが完璧だったという意味を……

「ダークライだからやったんだ。恐らくキンランはダークライをもつとも厄介だと判断した。あと二体ならどうにかなると思ったんだ。そしてキンランはまだエースを出してもいない……」

「……どこまでも舐めてくれるわね」

「もつとも予測だけだな。しかし裏を返せばキンランはナナの手持ちでダークライ以外は警戒していないとも言える。攻略の際はそこだな」

なるほど。少し弱いポケモンで相手の一番強いポケモン道連れにして倒し、残ったポケモンを自分の一番強いポケモンで倒す。考えてみれば理に適った作戦だな。さすがジムリーダーといったところだ。

「ナナはこれからジム戦か？」

「しないわよ。色々思うところがあるけど今の私達じゃ逆立ちしても勝てない。そのくらいの実力差がある。だから当分は修行かな……」

「なるほど」

しかし修行か。これ以上強くなる具体案が思い浮かばない。技もある程度は覚えた。そうなると身体能力を上げるためにレベル上げだが、それは困難を乗り越えるしかない。そうなる……

向かった先は広場だった。そこで僕達は物理的な特訓をさせられ

ていた。ムンナにスピアー、そして僕は総体重の半分の重りをつけて走らされていた……

「ポケモンの強さはレベルだけじゃない。筋トレ等で基礎力を上げることが出来る。世間という『努力値』というやつね」

隣でメアのルンパツパ、ニンフィアも走らされている。ボルノのポケモンは常日頃からトレーニングをしていて今は休息日で筋肉を休ませる日だからスルーとか……

「というか三値説が絡むとかアウトだろ。いや、でもやってることは筋トレだ。それがアウトだとないがアウトなのか分からないな。禁止されているのは三知説の信仰。表現がアバウトなのだ……」

「三値説で問題になったのはポケモンを数値で判断すること。つまりアウトなのは『数値が全てだ』と思うこと』なのよ。よって筋トレで強くなると思うことはセーフよ」

「ナナ。誰に言ってるんだ？」

「ダークライよ。表現からして前に話した三値説に抵触しないか気にしてるようだったから。まあ大体考えてることは分かるのよ」

「それはすげーな」

「もつとも三値は『種族値』と『個体値』と『性格補正值』の三つを表す言葉なんだけど……ダークライはどうして努力値が三値だと思っただのかしら」

え、マジかよ！ 三値に努力値って含まれないのかよ！

なんか、それっぽいから含まれると思ってた。もつとも努力値というものが聞いたことがあるだけで詳しくは知らないのだが……

「ていうか、ナナ。そもそも三値説は口にするこゝと事態がタブーだ。先生も授業で教えたことがバレたら捕まるから絶対に口外するなども言ってたし」

「そうね。ダークライ。今の話は忘れなさい」

いや、三値説こわっ！ なんで普通に教えてるんだよ！ 明らかに詳しく知ることが罪になってるじゃねえか！ 扱的に邪教というより国家機密だろ……

「まあーうちの先生は聞いたらなんでも教えてくれたからな。ほんと

に恵まれた環境にいたとオラも思う」

「はあー……ていうか。ダークライ。ペースが落ちてるわ」

ナナに指摘されて、再びペースを上げる。いやキツイ。脇腹がいたなくなってきたぞ。ポケモンになつて一番キツイかもしれない。いい加減にぶつ倒れて休みたい……

「ファイア（情けないわね）」

「ナニヲ！」

「ファイア、ファイア（まあダークライだし、仕方ないか）」

ニンファイアに煽られる。そこまで言うなら見せてやるよ。まだまだいけるってことを！

「パツパツ！（みんなも頑張るんだぜ）」

ルンパツパがギターで音楽を奏でながら励ます。それで少しだけ力が湧いてくる。ていうかギターを演奏しながら走るってすごい体力と技術だな。ぶっちゃけダークライというポケモンよりルンパツパの方が強い気がしてきた。

「はい。ここまでだよみんなお疲れ～」

体がフラフラとしてきたタイミングでメアから終わりの合図がかかる。久々に疲れた。これを毎回行うのはキツイな……。周りも一体を除いて全員がぶつ倒れる。あのニンファイアも息を切らして横になつている。唯一余裕そうな表情を見せているのはルンパツパだけだ。しかし走るだけなら良いが、重りがキツイ。

「……今の鍛え方だと体力と筋力の増加が見込める。筋力は速さにつながるだけでなく、打撃系の攻撃の威力も上げる。しかし、やりすぎると実践的な動きを忘れかねない。適度にバトルも必要ね」

「そうだね。これからは私とナナで定期的に戦うようにしようか」

「ええ。でも今回の方法はポケモンへの負担が大きいわ……」

「分類的には筋トレなんだから負担がないとダメじゃない？」

「そうなのだけど……もっと効率的に出来ないかしら？」

「ちよつとあとで一緒に考えてみようか」

そうして一日を終えた。大会は明後日。どの規模なのか知らないが、やれることをやるんだ。今回の大会は一人三体までで相手のポケ

モンを全て戦闘不能にしたら勝ち。メアは二体しか持っていないから、今回は不参加だ。ナナとメアは二人で話に花を咲かせている。僕はボールから出て、部屋で勝手にリラックスしている。

「ダークライ。このモモンの中のジュース！ まじで美味いぞ！」

「ムンナ。なにを言う……オレンのみのジュースこそ至福」

「どれ？ お！ そっちもいけるな！」

「さて、ここで一曲行くぜ！」

「おう！ 歌え！ ルンパッパ！」

「それじゃあムンナさん。オーダーは……」

ほんとに大騒ぎだな。そんな時にメアがやってきて、ルンパッパからマイクを奪う。そしてルンパッパは代わりにギターを出す。そしてニンフィアもメアの足元に来る。

「そういうことなら私が歌うよ！ ミュージック！ スタート！」

「ルンパッ（おーけー！ メアー！）」

メアが華麗なステップを踏みながら可愛らしい歌声で歌い始める。その姿はまるでアイドル。ニンフィアがメアを引き立てるように踊る。そのせいもあり、メアから視線が離せない。

「歌と踊りは宴会を盛り上げる！ 私のミニライブだよ！」

「メア。あの歌をお願いできるかしら？」

「あーあの歌ね。良いよ」

いきなり現れたナナが横でリクエストを飛ばす。それは聞き覚えのない歌だった。でもナナは『その歌が聞きたかった』というような表情を見せていた。きつとナナにとって大事な歌なのだろう。

歌が歌い終わり、メアが微笑む。

「これで満足？」

「ええ。やっぱり良い曲ね」

「しかし恥ずかしいな。十歳の時のプレゼントとして歌った曲をまだ覚えてるなんて」

「当たり前よ。一番好きな曲なんだから」

……なんでここはイチャイチャしてるのだろうか。いや女性同士の距離というのはこのくらい近いものなのだろうか。

「ナナ！ 私は絶対に世界一のアイドルになってチャンピオンとなったナナのために歌うよ！ それでナナの戦いを盛り上げるんだ！」

「まさか、そのためにアイドル目指したの？」

「言っただけだったっけ？」

「驚いた……そんなこと言われたらチャンピオンになるしかないじゃない」

「やっぱりナナとメアの関係が分からない。というより、どうしてメアはナナにここまで尽くせるのだろうか。メアにとってナナはなんなのだろうか……」

「ダークライ。女の子には誰にも言わない秘密があるのよ」

メアについて考えているとナナから軽いお叱りを受けた。恐らく永遠に真実は分からないだろう。メアがナナを思っているのか。それは想像に任せるといっやつだろう。

「少なくともメアがナナをどう思っているのか。それを僕が知ることはない。」

27話 シノノカップ開幕

間もなく大会が始まる。ナナはロリータ服に着替えて準備を整えて開会式に出席していた。参加人数は全部で百二十三名。形式はトーナメント。四日かけて行われて全部で7回勝てばいい。規模としては相当大きいな。

「本日シノノカップを仕切らせていただくジムリーダーのキンランです。この大会はシノノタウンの活性化を目的とした大会。また扱いは公式戦のため金銭の移動は発生することはご了承ください」

え、まじ？ 大会でもあの法律が適用されるのか。しかも誰も驚いてない。まるで知っていて当然と言いたげだ。

「そして今回の景品はアローラ地方に伝わる伝説のポケモンのルナアローラと関係があるとされている「つきのふえ」というもの。こちらを目当てに大会に参加する方も少なからずいると思います」

まじかよ。伝説のポケモンを呼び出すふえって凄いな。しかしアローラ地方は少し遠いよな。そもそもキンランはどこで手に入れたのだろうか……

「そして大会が無事に開催されたことに最大限の感謝を」

キンランがボールを投げた。それにみんなが目を奪われて、震えた。僕も奈葉のDS越しに見たことがある伝説のポケモン。彼女はそれを惜しげもなく出した。

「カプウーコッコー！」

カプ・コケコだ。アローラ地方に伝わる守り神。そんなポケモンがどうして彼女が持っているのだろうか……

「こちらのポケモンは皆さんご存知だと思いますがカプ・コケコと呼ばれるポケモン。遠くの地方で縁があり、今は私のポケモンです。そしてこれは警告です。もしも良からぬことを考える輩がいるならば私とカプ・コケコが粛清すると」

明らかに別次元のポケモンだ。頭の中で何度も戦うシユミレーションをするが勝てるビジョンがまったく見えない。こんなポケモンに勝てるやつなんているのだろうかと疑ってしまう。もしもカプ・

コケコをジム戦で出されたら……

「それでは公正なバトルを期待しています」

それだけ言うとキンランはカップ・コケコを戻して去っていった。みんな腰が抜けたかのように動けない。それほどまでにカップ・コケコの存在は規格外だった。アナウンスでようやく現実に戻れたのかチラホラと歩き始める人達。これが伝説のポケモンの格……

ナナもすぐに移動する。そして第一回戦の準備をしようとする。そんな時にナナに声をかける女性がいた。それはキンランだ。

「やつほー」

「……なんですか？」

「私のコケコちゃんを見てどう思った？」

「凄いと思いましたよ……それでなんですか？」

キンランは一体なにを……ただの自慢ならやめてほしいんだが。

「カップ・コケコを出したのは貴方のためでもあるのよ」

「……は？」

「ダークライ。幻のポケモンというけど力は伝説のポケモンと同じくらいあるポケモンなの。つまり、ダークライはこれから私のカップ・コケコと同じ次元まで成長できるポケモン。ちよつとだけ目指す場所の参考になるかなって。それじゃあ一回戦頑張ってね」

あれと同じ覇気を僕が出すのか？ まったくイメージ出来ない。あのカップ・コケコと肩を並べる姿が……ていうか改めて思うとキンランは相当ナナを気に掛けているな。たまに厳しい態度を見せるが一周回ってツンデレに見えてきた。

「……ダークライ。いつも通りやるわよ」

第一回戦が始まる。ナナは最初に迷わず僕を出した。観客席から歓声上がる。やはりダークライというポケモンは珍しいらしく、注目の的だ。しかし、こんな目立つならスピアーの方が良かっただろ……

「ダークライ。あなたを出したのには理由があるのよ。私というトレーナーが現れたと世界に知らしめるというね！ ネームバリューは旅で役に立つからね！」

「いけっ！ ヤナツキー！」

相手のポケモンはヤナツキーか。さて、どうするか。

審判が試合開始の合図をする。それと同時に迷わず僕はあくのはどうを撃つ。ヤナツキーは避けきれず、壁に叩きつけられて戦闘不能になる。一撃でノックアウトか。

「ヤナツキー！ 戦闘不能！」

『おっつっつと！ ダークライ！ ナナの指示より先にあくのはどう！ そしてなんとという威力！ 一撃！ たった一撃だ！』

大会だと実況があるのか。少しうるさいが、まあそういうものだと割り切るしかないのだろうか。

「くそっ！ ヒヤツキー いけっ！」

「ダークライ。あくのはどう」

「ヒヤツキー！」

「ヒヤツキー。戦闘不能」

『ダークライ！ 圧倒的な速さで殲滅！ なんなんだこのポケモン！ あまりに強すぎる！ 完全に別次元だあ！』

出てくると同時にあくのはどうで戦闘不能にする。相手は残り一体か。

「……バオツキー！」

バオツキーがボールから出てくる。そこにナナは迷わず言う。

「ダークライ。あくのはどう」

手から出した紫色の光線は的確にバオツキーに当たり、壁へと叩きつけて戦闘不能になる。バトルというより完全に作業だったな。明らかに練度が足りていない。瞬時に技を避けるために指示を出す。もつというならトレーナーがあくのはどうを目で追えていない。だから避ける指示を出せない。だから先手必勝で勝負にすらならない。

「バオツキー！ 戦闘不能！ 勝者ナナ！」

『勝負を制したのはナナ！ 黒いロリータ服に身を包んだ少女は眉一つ動かさずに謎の黒いポケモン『ダークライ』一体で勝った！ これは期待の新人だ！』

ダークライという幻のポケモン。そして黒いロリータ服を着た美

少女。それが圧倒的な実力でねじ伏せた。話題になるなどという方が無理な話か。そうしてナナは自分の試合が終わったので観戦席に座る。今日は一回戦のみ。もうナナの出番はない。

「ナナ！ お疲れ！」

「ありがとう。メア」

「さすがダーククライ。やっぱりこのくらいはやらないとね」

「……なんであなたがここにいますか？ キンラン」

「なんでってメアちゃんと意気投合したから。それに仕切るって言っても形だけの主催者で審判とかは別だしね」

なんか随分とナナの近くにいることに馴染んできたな。僕はキンランが近くについても驚かなくなってきたぞ。

「それはそうとチャンピオンの妹さん、あなたは凄い話題よ」

「興味ないです」

「もう少ししたら通り名がつくんじゃないかしら。あんな可愛い服を着て整った顔をして強いんだからつくなという方が無理な話よ」

遅いくらいだ。ただでさえダーククライなんて使ってるんだから目立つはずだ。ナナが有名人になるのは避けて通れない道。そのことはナナも僕も分かって旅をしている。だって目指す場所はチャンピオンなのだから……

『おつつつと！ ウルガモスのねっふうが見事にキモリに当たる！』

そして戦闘不能！ 強いぞ！ ただのお坊ちやまではない！』

その時だった。ムンナのボールが震えていた。ナナは無言でムンナをボールから出して、抱き抱える。そしてムンナに声をかける。それに対してムンナは怯えながら言う。

「ムンナ。どうしたの？」

「ンナ……（あのトレーナー）」

「ムンナ？」

「ンナア……（僕を最初に捨てたトレーナー……）」

その時のナナの表情。それは怒りだった。ナナは無言で本気でキレていた。

「ダーククライ。絶対にあいつにだけは負けないわよ」

「アア」

「この上なくコテンパンにする。どんな負け方より惨めな敗北を味合わせてやりましょう」

しかし二度とムンナの前に現れないでほしかったものだ。あまりにムンナの教育に悪すぎる。しかしウルガモスは相当な強さだな。まったく虫は苦手なんだよ……

「ナナ。あのトレーナーと戦うとしたら三回戦だよ」

「複雑ね。そこまで残ってほしいような……残ってほしくないような……」

「恐らく残ると思う。トレーナーは素人同然の雑魚だけど、ウルガモスだけは強い」

「そう……」

「あのウルガモスは良く育てられる。でも、見た感じだとなついてないわね」

「え？」

「それだけじゃない。ウルガモスはトレーナーの指示を一切受けてないわ。つまり自分で勝手に動いている。完全にトレーナーを見限ってる」

さすがジムリーダー。軽く見ただけでそこまで分かるのか……

「恐らく強いトレーナーから貰い受けたポケモンでしょうね……あんなトレーナーに使われるウルガモスが不憫だわ」

ボロクソに言うジムリーダー。そこまで言っただけで良いものなのかとは思いますが、深くは追求しないでおこう。それから試合も進み、色々なトレーナーが出てくる。時間がかかる試合もあれば、瞬殺で終わる試合もある。

「ウインディ！ しんそくー！」

特に強かったのはウインディ。目にも止まらぬ速さで動いて、勝負にすらなっていないかった。そしてウインディを使うトレーナーはポルノ。まさか彼も大会に出ていたとは……

「かなり鍛えられたウインディね。今回の大会の優勝は今のウインディ使いかチャンピオンの妹さんのどちらかで決定かな。妹さんの

前の試合にいたドラピオン使いも悪くないけど、二人には少し劣る。しかしトレーナーの質が随分と下がってるわね」

それだけ言うとかインランは席から立った。まだ試合は終わってないぞ？

「それじゃあ私はそろそろタピオカの時間だから行くわ」

「タピオカ……」

「またね」

そうしてインランは去っていった。なんというかコメントに困る感じの人だったな。一回戦も終わり、この日はお開きになる。特に飛びぬけて強いというトレーナーは多くはなかった。しかしインランは注目していなかったが、ギャラドスを使うエリートトレーナー、ゴルーグというでかい巨人みたいなポケモンを使うトレーナーは少しだけ強そうな気がした。しかし強いて言うなら、そのくらいか。

大会一日目を終えてポケモンセンターに行くとナナの元に人が殺到した。『あのポケモンはなんなのか』『どこで手に入れたのか』など主に僕に関する話題だ。

ナナはそれらを全て適当にあしらう。ちなみに僕はボールの中でそんな光景を見ていた。そんな時に白いスーツので金髪の生意気な男がやってくる。年齢は二十代くらいだろうか。

「おいおい、強いポケモンに頼るだけのガキだろ。強いのはダークライ。それなのに勘違いして良い気になってるんじゃないやねえぜ」

「……勝手に言ってなさい」

ナナはイラつとした表情を一瞬だけ見せるが相手にもしない。しかしナナはムンナのボールが震えてるのに気付く。こいつがムンナを捨てたトレーナーか。

「おい、なんだよ？」

「……別に。私は疲れてるの。もう帰っていいかしら？」

「おい、なんだよ！ 逃げるのかよ」

ここでバトルしても良いが……まあナナは絶対にしないだろうな。売られた喧嘩を全て買うのが正しいわけじゃない。時には買ってはいけない喧嘩もあるのだ。

「あーもう！ うるさいな！ そこまで言うならナナの代わりに私がバトルしてあげる！ ルンパツパ！ お願い！」

メアが痺れを切らしたのかルンパツパを出す。しかし相手のトレーナーはぶつぶつと言う。しかしメアの『逃げるの？』の一言でキレてポケモンバトルが始まった。外のフィールドに移動する。相手のポケモンはもちろんウルガモス。それに対してメアはルンパツパだ。

「やっちゃえ！ ウルガモス！」

「ガモス……（だるっ……）」

「ルンパツパ。お願い」

メアはギターを持ったルンパツパを出す。ルンパツパをギターを引いて踊りながらフィールドに出た。そういえばルンパツパが戦うのは始めて見るな。もつともハスボーの時に一度だけ戦ったことはあるが。今思うとこのルンパツパが初めてのポケモンバトルの相手なんだよな。なんか感慨深いものがあるな。

「ルンシンパアアア（久々のポケモンバトルだぜ！）」

「ルンパツパ。小手調べのみずでっぼう！」

「へ！ くだらねえ！ そんな雑魚技！」

ウルガモスは無言で避ける。そして炎を体に纏い、ルンパツパに突っ込む。ルンパツパはそれをギターを引きながら回避。そして陽気な踊りを見せる。

「なにやってんだよ！ ウルガモス！」

「ルンパツパは陽気な音楽を聴くと細胞が活性化してパワーアップするの。そして私のルンパツパは陽気な音楽を求めるあまり、自分で陽気な音楽を奏でることに成功したルンパツパの中のルンパツパ。言うならばキング・オブ・ルンパツパだよ。さて、そろそろ本気でいこうか。あまごい！ そして戦闘開始だよ！」

雨が降る。ルンパツパは今までとは比較にならない速さでウルガモスに近づき、一撃で殴り飛ばした。その速さは鬼という表現が的確だろうか。少なくとも僕はまったく見えなかった。気付いたら吹き飛ばされているウルガモスがいた。そして、その光景にうろたえるト

レーナー……しかしウルガモスはすぐに立ち上がる。

「反則だろ！」

「ルンパツパの特性『すいすい』。雨が降っている時に速さが倍になるんだよ。今の私のルンパツパは間違いなく最強だよ」

「ズルだ！　そもそも楽器の持ち込み自体が……」

「楽器は公式でも正式な道具として認められているわ」

その試合に割って入るキンラン。ジムリーダーが言うならば正しいのだろう。しかし本当にどこから現れた……

「ガモス……ガモスッ（なんて強い……最高だぜ！）」

「お、おい！　ウルガモス！　勝手に動くな」

ウルガモスがルンパツパを倒そうとトレーナーの言うことを完全に無視して、ルンパツパに近づく。ルンパツパは陽気なステップで避けるが転んでしまう。ウルガモスはその隙を見逃すことなく、ルンパツパにつばさで攻撃した。

「まずい！……なんてね？」

しかしルンパツパは攻撃を受けると同時に消える。まるで残像を攻撃したかのようなだった。ウルガモスもそれに対して動揺を見せる。「いとを吐いて転ばせるのは見事だね。でも、私のルンパツパをそのくらいで攻略出来るなんて甘く見ないでくれるかな？　ウルガモス」

「ガモスッ！（まさか！）」

その時だった。ギターの音がウルガモスの背後で鳴った。ルンパツパはウルガモスの攻撃を一切受けることなく陽気な音楽をいつも通り奏でていた。それはまるで強者の余裕だ。

「みがわりよ。糸を吐くと同時にルンパツパは反応して身代わりに攻撃を受けさせた。みがわりという技は聞いたことくらいはあるでしょ？」

「なんだよ！　それ！　ずりいぞ！　ていうかルンパツパみたいな雑魚ポケに僕のポケモン様が負けるわけないだろ！　ウルガモス！」

「もう遅いよ。ルンパツパ！　なみのりいくよ！」

ルンパツパは大量の水を体から出した。それはやがて波となってウルガモスに襲いかかる。大量の水は凄まじい質量でウルガモスを

叩き潰したのだ。それに対してルンパツパは陽気に波の上で踊りながらギターを弾いていた。やがて波がなくなる頃には倒れているウルガモスがいた。なみのり。改めて見るとんでもない技だな。大きな波が襲いかかる。まるで津波が襲いかかるかのようだ。そしてフィールド全てを覆うため回避も困難を極める。ゲームでも秘伝技として、存在していて記憶にある技だが実際にみるとここまで桁違いな技だったとは……ていうか津波を簡単に引き起こすルンパツパ。改めて思うとんでもなくねえか？

「ウルガモス。戦闘不能。勝者はそっちの女の子とルンパツパね」

キンランがめんどくさそうに戦闘の裁定を行う。辺りから一気に歓声が巻き上がる。盛り上がる的に素人から見てもメアのルンパツパは強いみたいだな……

「なんなんだよ！　こんなの反則だろ！」

「なんでもいいけど負けたんだからお金ちょうだい？　それと私に手も足も出ないくせにナナに喧嘩売るのやめてくれるかな？　殴り飛ばしたくなるから。分かったら消えろ」

最後の一言だけはアイドルとは思えないくらいドスの効いた低いトーンで言う。そしてトレーナーはウルガモスをボールに戻して、二十万くらいの大金をメアに睨みながら渡す。

「……覚えてろよ。女の癖に」

「私は消えろって言ったよね」

「そういうのがムカつくんだよ！」

男はメアに殴りかかった。しかしメアは慌てる素振り一つ見せず体を少し横にずらして足で払って転ばせる。少女が大人の男を容易く倒す姿は少しだけ惹かれるものがあるな。

「私がアイドルを目指すのに真っ先に覚えたのは護身術だった。アイドルというのは危険を伴う仕事で男の人によく襲われたりするからね。私はリアルファイトしてもいいけど、どうする？」

さらっと言うけどメアさん、なんでそんなに強いんですかね……

ていうか、もしかしてナナも……

「私は無理よ。メアは多彩な才能の持ち主で努力家だから出来るだけ

よ」

ボール越しでも察したのか補足説明する。ナナは試合を見終える
と早歩きで自分に飛び火しないように部屋へと戻っていく。幸いにも
全員の注目が一気にメアに集まったおかげで特に騒ぎになることは
なかった。ナナは部屋に戻ると同時にムンナを出す。

「ムンナ。大丈夫？」

「ムンナ……（ああ……）」

「復讐したいの？」

ムンナが言い当てられたことに驚いたかのようにビクツとする。
ナナはそんなムンナを優しく撫でる。

「なら一緒に復讐しようか？ 私も相当イラつとききたし」

「ムンナ……（え？）」

「ムンナの気持ちも痛いくらい分かる。別に復讐を止めるつもりはな
い。でも直接的に危害を加えるのはダメよ。あんなやつのためにム
ンナが手を下す価値なんてない」

「ムンナ……（なら……）」

「あいつとの試合にムンナ一人で勝つ。そしてムンナを捨てたことを
後悔させてあげるのよ」

まあそこら辺が無難か。僕のナイトメアで悪夢を見せるとか物理
的に苦しめる方法はいくらでもある。だけど、やりすぎというのは良
くない。やりすぎれば被害者が加害者になる。

「だけど、どうするか。それはムンナ次第。もう関わるのすら嫌なら
ダークライで倒すわ」

ムンナはどこか納得いかないようだった。それに対してナナは追
い打ちをかけるように言う。

「もしも、それ以上の復讐を望むなら——その時は私のポケモンをや
めなさい」

ナナは選べと言わんばかりに言った。これから旅を続けるか、それ
とも復讐を優先するか。ムンナに選択を委ねたのだ。

28話 二回戦

第二回戦が始まる。相手は少し大人びた少女で最初のポケモンはペリッパーだ。ナナはそれに対しても僕を出す。僕が出ると同時に歓声が沸く。昨日の一件でナナのファンがある程度出来たようだ。それよりも気になるのは……

「それじゃあー・ ミュージックスタート！ 戦闘開始だよ！」

そう。何故かフィールドの傍にいるメアの存在だ。彼女はマイクを持つてルンパツパを出して、歌っていた。なんでも彼女の歌声に惚れたキンランから盛り上げ役としてスカウトがかかったとか。ウルガモスの時に戦っていなかったから、キンランがいつメアの歌を聞いたのか気になるが、それは置いておくとしよう。

「ペリッパー！ ハイドロポンプ！」

「ダークライ。あくのはどうで打ち返しなさい」

僕は飛んでくるハイドロポンプをあくのはどうでそのまま打ち返すという力技でペリッパーを一撃で仕掛ける。もっともメアの歌で身体能力が上がることはない。あれは対象のポケモンの波長や好みを全て把握して、もっともポケモンが好む歌と踊りをやることで行う技。無差別に出来るものではないしな。

「嘘でしょー！」

『ダークライ！ 相変わらずの力量差を見せつける！ 強いぞ！ あまりに強いぞ！ このポケモンに適うトレーナーはいるのか！』

「ペリッパー。戦闘不能」

ペリッパーがボールに戻っていく。メアの音楽が止まることはない。もう彼女の音楽はBGMとしてバトルに同化していた。

「お願い！ ゴースト！」

「ダークライ。あくのはどうを少し上の角度に」

『ゴーストが上に避けようとした瞬間にあくのはどうが当たった！ まるでそこに来るのが分かっていたようだ！ 必中なのか！ この技からは逃れられないのか！』

「…………え？」

相手のトレーナーが啞然とする。恐らく今の動きなら避けられる。ゴーストなら避けてくれるかと信用していたのだろう。しかし、そんなことはない。

ナナは一切の慈悲を与えずに一撃で叩き落す。悪いがこれが現実だ。

「ゴースト。戦闘不能」

「……フカマル」

脱力した少女は弱々しくフカマルを出す。フカマルはトレーナーとは対照的に元気いっぱい勝つ気である。僕はあくのはどうを撃とうとするがナナに止められる。そしてナナは表情を一つ変えることなく言う。

「来ないならいくわよ?」

「こんな強いポケモンにどう勝ってつていうのよ! 無理よ! やるならさっさとやりなさいよ! どうせ私は……」

「フカマルはやる気よ。それなのにトレーナーのあなたが諦めてどうするの?」

「……」

「バトルはまだ終わってない。ここまで頑張ってくれたあなたのポケモンのためにも全力でやりなさい」

「フカマル……ごめん。そして勝つわよ!」

女の子の目が変わる。諦めていた目から闘う者の目に。しかし敵に塩を送るか。なんでもいいが、これで負けたらお笑いだぞ。

「フカマル! りゆうせいぐん!」

「フカツツ (やってやる!)」

『これはドラゴンタイプ最高の技のりゆうせいぐんだ! ダーククライはどう対処する!』

天空から隕石が降ってくる。それは少しマズいな。さて、どうするか……

「ダーククライ。その身で受けなさい」

ナナも厳しい指示を出す。ここで受けるのは相手に対する敬意か。そして観客に格の違いを教えるアクションか。受けられないことはな

今回は相手が未完成の技に賭けるのが分かってたから受けたけど、本来なら絶対にしないわ」

ボール越しにそう言う。あの隕石が何個も降るとかとんでもねえ技だな。もしも本物のりゅうせいぐんを使うトレーナーと会ったらゾツとする。

「それにしてもりゅうせいぐんを受けて無傷なんて最初に比べて随分と強くなったわね」

まあたしかに……もしかしてナナは僕に自分の成長を実感させるために敢えて受けさせたのか！ それだけじゃない。敵に塩を送って本気にさせたのも全て僕の実力を……

「ダークライ。あなたの相手はジムリーダーやぬしとか強敵ばかりだった。だから強くなった実感がないかもしれない。でも一般トレーナーと戦えば圧倒できるくらい強くなったことを実感してほしかったのよ」

ナナ。まさかそんなことを考えていたとは。たしかに強くなった気はしていなかった。でも最初に比べたら間違いなく強くなっているんだよな。ナナと会った時の僕ならフカマルのりゅうせいぐんを耐えるなんて芸当は不可能だし、なによりもペリッパーでも苦戦をしていただろう。

「でも次の試合は我慢してね。次はムンナの番だから」

そうだな。次はムンナの因縁の相手だ。僕の出る幕じゃない。それに僕だけじゃなくてムンナも強くなっている。あんなトレーナーにムンナは負けはしない。そして三回戦。実は今日行われるのだ。この大会では一日目に一回戦、二日目に二回戦と三回戦、三日目に四回戦と準々決勝と準決勝。そして最終日に決勝戦というスケジュール。

ナナは会場から抜けて近くのお店でメアへの差し入れのど飴をいくつか買っていた。あの夜にムンナは復讐よりもナナと一緒にいることを選んだ。しかし実際に戦ってみてどう転ぶかまったく分からない。でも一つだけ分かるのは気持ちの良いポケモンバトルは出来ないだろうということだ。三回戦は絶対に碌なことにならない

だろうな……

のど飴を買い終えて会場に戻ると戦いは未だ続いている。しかしポケモンバトルより疲れを一切見せずに歌い続けるメアの方が凄い気がする……

メアもナナも凄すぎて時々忘れかけるが、まだ十二歳なんだよな。つまり小学六年生。小学六年生が歌と踊りで実力を認められて、スカウト。そしてこの規模の大会で歌って踊るって凄いことだよな。しかもぶっ続けで。大人でも相当キツイと思うんだよな……

そういえばメアは父親がカントー地方にあるマサラタウン出身とか言っていたな。それが関係あるかどうかは知らないが……

それから大会は続く。例のウルガモスも問題なく勝利を収める。つまり次にナナと戦うことが判明したわけだ。そしてボルノも問題なく勝つ。

『決まったあー！ ドラピオンの鮮やかな一撃がリザードを倒した！』

この男も強いぞおー！』

会場が盛り上がる。勝ったのは黒髪ロングゴートの少し怖い男。これで二回戦が終了となる。一体のポケモンだけで二回戦を突破してきたトレーナーはナナ含めて六人。

今のドラピオン使い、そしてギャラドス使い、ゴルーグ使い。あとはボルノ、ナナ、そして例のムンナを捨てたトレーナー。この大会でもこの辺りが優勝候補になってきたな。

「やっほー。私の歌どうだった？」

「良かったわよ。メア」

メアがナナの元にやってくる。二回戦も終わり、三十分の休憩時間だ。ナナがメアにのど飴を渡すとメアは目を輝かせて、のど飴を受け取る。まさかのど飴がそんなに嬉しかったのか……

「でも、こんなにも早く大舞台で歌うことになるなんて予想外だよ」
「それで歌ってみてどう？」

「やっぱり緊張するね。でも凄く楽しいよー！」

「それなら良かったわ」

「しかし次の勝負気を付けてね。負けるなんてことは万に一つもな

い。一応、私もキンランさんも近くにいるけど、正直に言っただけにをしてくるか分からない。女の子に殴りかかるような奴がまともなわけがない」

「……そうね」

「調べたら相手の名前はアレスって言って、どっかの社長の馬鹿息子みたい。そしてウルガモスは彼が育てたポケモンじゃなくて貰ったポケモンということも分かったわ。もっと言うなら会社は既に彼のお姉さんのものになって……旅をしているなんて聞こえは良いけど実態は島流しに近いものだね。もつとも彼がそれに気づいているかどうかは不明だけど」

なんとなく実態が掴めてきた。しかしやることは変わらない。バトルで勝てばいいのだ。

「そういえばメアに殴りかかった後はどうなったの？」

「ジュンサーさんから嚴重注意。それだけだよ」

「え……？」

「私が被害届を出さなかったからね。事件にすると裁判に呼び出しや事情聴取とかで旅どころじゃなくなるから」

「そうね。まあそこが落としどころかしら」

そんな感じでメアの休憩時間が終わり三回戦が始まる。ナナも控え室にいつてウォーミングアップする。ムンナをボールから出して体調不良はないか。精神的に安定しているか簡単な対話で念入りに調べていた。

「ムンナ。大丈夫。あなたなら絶対に負けないから！」

「ムンナ……（うん……）」

「でもやっぱり不安だよ。勝ち負けじゃない。会うことが怖いんだよね。本当にきつかったら言っただけ。その時はボールに戻すから」

そうしてムンナとウルガモスの戦いが始まるうとしていた……

29話 ウルガモス

「行っておいで。ムンナ」

『ナナ選手！ 出したのはダークライではない！ なんとムンナだ！』

一体どのような意図があるのだろうか！』

三回戦が始まった。幸いにもムンナはやる気だ。そしてこちらを相手は睨んでいた。二回戦と同じようにメアも会場にいる。恐らくまた歌うのだろうか。

「舐めやがって！ ムンナなんかクソ雑魚を出して！ 俺にはダークライを出す価値もねえと言いたいのか！」

「……勝手に言ってなさい。あなたは私のムンナに勝てない」

「ウルガモス！ 焼き焦がせ！」

「ムンナ。右に軽くステップ。それからあくのはどうで吹き飛ばして」

ウルガモスがボールから出ると同時に炎を吐き、ムンナを焼き焦がそうとする。しかしナナはそれを見越してムンナに的確な指示を出して、あくのはどうを撃つ。しかしウルガモスはビクともしない。さてナナはどう攻略するのか……

「俺のウルガモスにこんなしょぼい攻撃が効くわけないだろ！」

「知らないの？ 塵も積もれば山となるのよ」

ウルガモスが炎を巻き散らかす。しかしムンナには掠りもしない。その度にあくのはどうを当てて、じりじりとウルガモスを削っていく。一撃一撃のダメージは小さくとも、確実にダメージは蓄積される。

「なにやってんだよ！ ウルガモス！ ムンナなんて雑魚はさっさと倒せよ」

「……ムンナ。絶対にウルガモスに近づいたらダメよ」

「……ンナ？ (どうして?)」

「あのウルガモス。想像以上にバトル慣れしてる。近づいたら恐らく予想外で手痛い一撃を受ける」

「ンナ (分かった)」

会場の全員がナナの方が有利に見える。しかしナナだけは違った。ナナだけは自分が不利になっていると思っていた。そして、それは正しい。ナナとずっと一緒にいるから分かる。ナナは炎を避けるのが困難になっている。恐らくウルガモスはムンナの動きを見極め始めている。

「このウルガモス。想像以上に化け物……ムンナ！ 次は上よ！」
「ンナ（分かった）」

ウルガモスが炎を吐く。ムンナはそれを避けるが、ウルガモスはムンナに近づき、ムンナの体を掴んだ。しかしナナはそれを予測していた。特に焦る様子を見せることはない。

「ムンナ！ 慌てないで！ ころがるを使ったカウンター攻撃でウルガモスを叩き落としなさい！」

「ンンンンンンンナナナナ！（やってやるるるうううう！）」

ドスンと激しくウルガモスの巨体がフィールドに叩きつけられた。ムンナはころがることを止めずにウルガモスにじわじわとダメージを与えていく。その時だった。ギイイイイイアアヤアという嫌な音が会場全体に響いた。ムンナがそれにもがき苦しみ、その隙を突いてムンナを吹き飛ばす。

「……むしのさざめき！ そんな技を撃つ余裕があつたなんて」

シノノカップが始まって初めてナナが動揺を見せた。ムンナはロボロになりながらも立ち上がる。気合いで耐えたという感じだ。恐らく普通なら致命傷……

「ムンナ。まだ戦える？」

「ンナ！（ああ！）」

『今の一撃にムンナが耐えた！ ダークライだけではない！ ムンナも相当強いぞ！ この試合！ どっちが勝つか分からない接戦だ！』
しかしウルガモスもムンナのころがるで相当なダメージを負ったようだ。あと一撃でも当たれば負ける。互いにそんな状況だ。

「ウルガモス。ムンナ相手になにをやったんだよ！ さっさと……」

その時だった。誰も予想だにしていなかったことが起こった。ウルガモスが上に羽ばたき、自分のトレーナーに襲いかかったのだ。体当た

りで体を吹き飛ばし、自分のボールを破壊。そしてバッグを漁り、木の実をついばんで回復させていく。一体なにが……

「ガモスッ……（この時を待っていた……）」

ナナは瞬時にヤバい状況だと判断。試合中にも関わらずムンナに近づき、傷薬を使って回復させる。メアも歌をやめる。そして会場が騒めく。

「……ガモス……ガモス（待っていた。私に相応しいトレーナーを）」
「見限ったのね。ウルガモスがトレーナーを見限った。だから自分でボールを破壊して野生に戻ることを選んだ……つまりここにいるのは野生のウルガモス。そして野生のポケモンというのはどう動くかまったく分からない……」

ムンナを抱き抱えながら、冷静に分析するナナ。ナナはすぐに対応出来るように僕のボールを握る。しかしウルガモスはこちらを一切見ていなかった。見ていたのはメアの方だった。まさか……

「ガモスッ！（我が主人！）」

ウルガモスはメアに頭を下げて、跪いた。その様子をポカンとした表情でメアは見た。そしてメアはマイクを持ったまま口を開いた。

「えー……なにが起こったのかな？」

マイクはメアの声を拾い、会場に伝わる。

当然ながら大会は一時中断となった。困ったメアはとりあえずウルガモス保護のために腰にある新品のモンスターボールを軽く当てる。ウルガモスもそれに抵抗することなくあっさりウルガモスがゲットされる。

「と、とりあえずウルガモスゲット……だぜ……で、いいのかな？」

そしてメアがウルガモスを捕まえたことで、その場は落ち着いていた。ナナ達は現状の整理のために責任者のキンランに連れられて会場を後にした。ちなみにウルガモスのトレーナーは喚いていた。やがてキンランが冷静に分析する。そしてウルガモスの話をまとめるとこうらしい。

『今の主人は弱すぎる。だからメアに従うことにしたと』

もつと細かく言うのならウルガモスは主人を見限る計画は前々か

ら考えていたらしいが、野生のポケモンになるつもりはなかった。だから自分が従うに相応しいトレーナーを探していたが、しかし中々見つからない。そんな時に先日メアと戦い、負けた。ウルガモスはメアにフルボッコにされ、メアの戦いに感化されてメアのポケモンになりたくなつたとか。しかし、その場でアクションを起こさなかったのはメアの仲間である、ナナがどのようなトレーナーなのか手合わせを試みたかったから。そしてムンナと戦い、ある程度満足したウルガモスは計画を実行に移すことにしたのだ。少なくとも僕がボール越しで聞いた限りだとウルガモスはそう供述している。

「……まあポケモンがトレーナーを見限るのはよくある話。でもさすがに他のトレーナーの方が良いから抜けるなんて初めて聞いたわ」「えつと……キンランさん。このウルガモス。どうしたらいいんですか？」

「メアちゃんが捕まえたんだからメアちゃんのポケモンにするしかないわよ」

「ですよーまあ仕方ないか」

「いや、待て！ これは俺のウルガモスだ！ 人のポケモンを取ったら泥棒だろー！」

「あなたにウルガモスのトレーナーになる権利はウルガモスに捨てられた時点でないわ。トレーナーがポケモンを選ぶように、ポケモンにもトレーナーを選ぶ権利はあるのよ」

ナナが冷たくそう言う。しかし難しい問題だよな。どっちが良いか悪いかなんて言えない。あまりこういう表現はしたくないが、言うならば寝取りのようなもの。トレーナーとしてはやりきれないだろうな。しかしムンナにはきちんとバトルで勝って決着をつけてほしかった。なんかバトルが滅茶苦茶にされてすごく気分が悪い。この上ない消化不良だ。

「……それにポケモンを捨てたあなたがポケモンに捨てられて文句を言う資格なんてない」

「はっ！」

「私のムンナ。あなたが捨てたムンナよ」

ナナはムンナをボールから出す。そしてムンナを数秒見て悩む。こいつムンナを捨てたことすら忘れていたのか。なんて野郎だ。それで思い出しのか話を進めていく。

「……それで？ 弱い個体だから捨てた。そのなにか悪いんだよ」

その時だった。バチンと頬を叩く音が響いた。ナナが力強く頬を叩いたのだ。

「捨てられたムンナの気持ちはどうなるのよ！ あなたが捨ててムンナがどれだけ悲しい思いをしたと思ってるのよ！ あなたはムンナを卵から産んだのでしよう！ だったら責任を持ちなさいよ！ ポケモンは生き物なの！ 捨ててもポケモンの人生はずっと続いていくのよ！」

「ポケモンが生き物？ 違うね。ただの戦わせる道具だろ。それに捨てたポケモンがどうなるうが心底どうでもいい。ていうかムンナ強くなったな。俺のところに帰ってこいよ」

彼の高圧的な態度にムンナは震えて、ナナの影に隠れる。そしてナナは一步も引くことなく叫ぶ。

「……あなたにだけは絶対にムンナは返さない。ムンナはもう私の大事なポケモンよ！」

「はあーうつぎ。このムンナを卵から孵化させたのは俺。つまり俺のポケモンなの？ 理解出来た？ 俺なんか間違ったこと言ってる？」

今すぐにでもボールから出てぶん殴りたい。こいつはドクズだ。あまりに身勝手。まるでポケモンの育成をゲームだと思ってるみたいな感じ……

いや……この世界に長くいたから忘れていたが考えてみたらポケモンは元々ゲームの世界だな。それなら彼の考えもある意味正しいのか？ しかし少なくとも、この世界のポケモンには心がある。ゲームとは大きく違う。やはりポケモンをゲームだと思うのはご法度だな。

ここをゲームだというのは、ナナも含めて全ての存在を否定することになる。

「……分かったわ。それならバトルで決めましょう。どんなに話した

ところで話し合いは平行線。つまり時間の無駄。だったらバトルで決めるのが一番手っ取り早いでしょう?」

「そうだな。いけ、ムシャーナ!」

「シヤアア〜(二か月ぶりの外〜)」

出てきたムシャーナはやせ細っていた。まるで今にも倒れそうだな。そしてムシャーナの言動からして、ボールの中でずっと放置されていたのだろうか。

「ムンナ。いける?」

「ンナツ(まかせろ)」

「よし、ムンナ! それじゃあ頼んだわよ!」

「けっ! 俺のムシャーナは凶太い性格で6Vなんだぜ? 進化前で個体値クソのこいつが勝てるわけねえだろ!」

「ムンナ。おんがえし!」

勝負は一瞬だった。ムンナがムシャーナを吹き飛ばして一撃で戦闘不能にする。明らかに育てられていないムシャーナ。なんか可哀想だな。ムシャーナが。

「いや、おかしいだろ! 俺のムシャーナは6Vなんだぞ! それなのにゴミ個体で進化前のムンナにどうして負けるんだよ!」

「レベルよ。どんなに個体値が良くてもレベルに差があったら勝てないのよ。あなた個体値が良いことに甘えてポケモンを育てなかった。だから負けたのよ」

ナナはムンナをボールに戻す。ナナが言ったのはポケモンとの絆とかそういう根性論ではない。たしかな理論と根拠だった。そして敗因を真つ先にレベルと言う姿はナナの兄であるチャンピオンに重なって見えた。ナナは彼に背中を向けて歩いていく。

「二度と私の前に現れないで。不愉快で吐き気がするから」
たったそれだけ言い残して……

ちなみに三回戦の結果だが、ウルガモスの暴走により、彼の強制負け。そしてナナの勝ちという処理がなされていた。問題なく大会は進められそうだな。

ナナは部屋に戻り、ナナがシャワーでムンナの体を洗う。まるで労

わるように。

「ムンナ。今日はお疲れ」

「ンナツ（ほんとだぜ!）」

ムンナは既に震えることなく、堂々とナナに体を洗ってもらいながらくつろいでいた。まるでどこか吹っ切れたかのようにだった。

「ンナー（ありがとな）」

「なにが?」

「ムンナー（俺を大事なポケモンと言ってくれて）」

「当たり前よ。事実なんだから」

ナナはシャワーを止めて、ムンナをドライヤーで乾かしながら外を見る。そこにはウルガモスと特訓をしているメアの姿があった。どうやら正式にメアのポケモンという扱いになるようだ。しかし特訓というよりは身体能力テストだな。ウルガモスに色々な動作をさせて、その結果を紙にまとめている。

「メアの三匹目はウルガモス。変なゲットだったわね」

「ンンナ（これからアイツとも一緒に旅をするのか?）」

「そうなるわね。あの時は決着がつかなかったけど、また戦えるわね」

「ンナ……（勘弁してくれ）」

「同感。ただでさえ強いウルガモス。それをメアが扱うなんてゾツとするわ。もしも戦うことになったらムンナでどう勝とうかしら」

「ンナ（いや、俺で勝つのかよ!）」

「当たり前でしょ。炎と虫のウルガモスには全員が不利なんだし、それなら岩技を覚えているムンナじゃないと勝てないわ」

「ンナー（しょうがねえな）」

ちなみにこのあと彼がどうなったのか知らない。ただ一つ言えるのは起きたら一切の痕跡を残すことなく、この街から消えていた。

30話　メアのわがまま

「ナナ。一回だけ私と本気で戦ってみたい？」

メアから早朝にそんな提案をされた。これからシノノカップの四回戦も控えている。しかしムンナとスピーアはやる気だ。ナナもそれを察して受け入れる。

「もちろんよ。私もそろそろ本気でメアに勝ちたいと思ってた頃だったから」

「良かった！ 私！ 早くウルガモスと全力でバトルしたいの！」

バトルが始まる。メアが最初に出したのはウルガモス。前よりも生き生きとした姿を見せている。ナナはそれに対してムンナを出す。

「ムンナ！ 行くわよ！ 楽しみましょう！」

「ンナ！（ああ！）」

「ウルガモス！ 教えてあげるわ！ 本当のバトルの楽しさというやつを！ 戦闘開始だよ！ まずはねっぷう！」

「ムンナ！ ウルガモスより早くころがるよ！」

ナナの指示より先にムンナはころがり始めていた。しかしウルガモスは強く羽ばたき、熱風でムンナの勢いを相殺していく。

「ンナッ！（あっつ！）」

「良いよ！ ウルガモス！ 次はぼうふう！」

「ムンナ！ 三右に十三、四左八十四、前方に十二センチ、後方に三歩……」

辺り一面に竜巻が舞い起こる。逃げ場なんてない。見事なまでのフィールド全体の攻撃だ。しかしナナは片目を抑えながら、竜巻の動きを全て見極めて暗号に近い指示を送る。ムンナもそれに従い、ぼうふうを全て避けていく。

「さっすが！ でも、これで終わりよ！ ウルガモス！ ねっ……」

「今よ！ ムンナ！ あくび！」

「しまった！ もどってウルガモス！」

ムンナはピタリと立ち止まり、ウルガモスを眠気に誘った。そして寝落ちする前にメアは素早くウルガモスをボールに戻し、ニンフィア

を出す。

「着地の瞬間を逃さないで！ おんがえし！」

「ニンファイア！」

おんがえしはニンファイアにクリーンヒットする。しかしニンファイアは踏ん張って空中で一回転して後ろ足でムンナを蹴り、カウンターの一撃を決める。ムンナは少しだけ吹き飛ぶが、すぐに態勢を立て直す。

「驚いた。まさかぼうふうからねっぷうに切り替わるコンマ数秒の間であくびを撃つなんてね」

「こちらこそよ。あそこまで大規模な範囲攻撃をしてくるなんて……」

「ウルガモスが優秀だったからよ。それじゃあニンファイア！ ハイパーボイス！ 決めちゃうよ！」

「ムンナ！」

ムンナがハイパーボイスで一気に吹き飛ばされる。その一撃は重く、ムンナが戦闘不能になる。あのニンファイアは嫌いだが、実力は本物だな。そしてニンファイアとも決着をつけたいと思っていたところだ！

「……ダーククライ。やる気ね！ ムンナ。お疲れ様。そしてお願いね！ ダーククライ！」

「ファイア（また負けにきたの？）」

「……勝ちに来タ！」

「ダーククライ！ やきつくすでニンファイアの周りを覆って！」

青い炎を地面に走らせて、ニンファイアの逃げ道を奪う。さあ一気にいくぞ！

「真上からダークホールよ！」

空に飛んで、巨大な闇玉を作る。そして闇玉をニンファイアへと叩きつける。ニンファイアは避けようとしたが、周りが火に囲まれていることに驚愕する。逃げ場はないぞ！

「……ニンファイア。炎に突っ込んでダーククライに近づいて」

「ファイア（それしかないね）」

ニンファイアは迷うことなく炎に突進する。体中が火傷するが、ダークホールから逃れられたようだ。そしてニンファイアは飛んで、僕に一撃を喰らわせようとする。

「ダークライ。遠慮なくあくのはどうで地面に叩き落とさなさい」

「ニンファイア！」

「空からの遠距離攻撃。それだけで飛行能力のないポケモンを完封することだってありえる。空は取られたらバトルの敗北が決まるという人がいるくらいには重要な要素になる」

「そうだね。お疲れ様。ニンファイア」

戦闘不能になったニンファイアがボールに戻される。あのニンファイアに遂に勝ったのか！

やった！ ニンファイアに勝てた！ 遂に勝てた！

「良かったわね。でも、まだバトルは終わってないわよ。ダークライ」
「そうだよ！ それじゃあルンパツパ！ 戦闘開始だよ！」

ボールから出ると同時にルンパツパはギターを鳴らす。それと同時に僕の元まで飛んできて、地面に蹴り落とす。あまりに速い！ まったく気付けなかった！

「さあ空の有利はなくなったよ」

「ルンパアア！（バトルしようぜ！）」

「ルンパツパ！ そのままあまごい！」

ルンパツパが雨を降らす。やばい！ 例のあれがくる！

「ミュージックスタート！」

メアが歌い始める。まさか……！

「ダークライ。言わなくても分かるわよね？」

ナナが冷や汗をかく。ルンパツパは陽気な音楽で細胞を活性化させている。それに加えて特性で素早さをあげている。さらにメアの歌のドーピング……

「どんなに強くても寝たら終わりよ！ ダークライ！ ダークホールで眠らせてあげなさい！」

「ルンパツパ！ なみのり！」

なみのりという名の津波が襲いかかる。波が届くまでの数秒で

ダークホールをルンパツパに当てるのは至難の技。まずは闇の玉を作るまでに数秒。そして玉が出来たとしても、それは大玉。動きも遅くて簡単に避けられる。それならどうすればいい。そうだ！もつと小型にすればいい！

思い付いたら、すぐに実行へと移す。体から湧き出る闇を一点に！

ダークホールのイメージは全てを闇に叩き落すイメージだった。でも今度は違う！麻酔弾を撃つイメージだ！銃のイメージ！素早くて確にルンパツパの胸を貫け！

「……デキタ」

手の中にドングリサイズの闇の玉が出来る。僕は迷うことなくルンパツパにそれを撃った。それはルンパツパに命中して、ルンパツパの力が一瞬だけ抜ける。そのおかげで波の力は弱まる。しかしルンパツパはすぐに目覚めて、僕の目の前に現れる！しまった！

「ルンパツパ！ ハイドロポンプ！」

ハイドロポンプは僕を壁まで突き飛ばした。最後に見たルンパツパ。それは片手できのみを食べていた。あれは間違いなく、カゴのみだ。あれで眠りから目覚めたのか……

そういえばポケモンの道具ってポケモンが持てるなら何個でもいいの忘れてた……

「ダークライ！」

「私のルンパツパのハイドロポンプを耐えるポケモンなんていないんだから！」

体が動かない……ああ……戦闘不能か。すまない。ナナ。

「あとは任せてダークライ。それじゃあスピアー！ お願い！」

「スピッ！（お任せを！）」

その時だった。雨が止んだ。その隙をナナは見逃さない。メアもナナのしたいことに気付くが指示が間に合わない、先程は曲のフレーズの合間を使って指示を出していた。しかし今はサビの途中。歌を中断するのは不可能。中断すればルンパツパに動揺が生まれる。

「スピアー！ こうそくいどうからのメガホーン！」

「ルンパツパ！」

スピアーの一撃はルンパツパを吹き飛ばして一撃で戦闘不能まで追い込んだ。さすがスピアーだな。

「ルンパツパ。お疲れ様。そしてナナはやっぱり強いね」
「強いのはメアも同じよ」

「でも負けないんだから！　お願い！　ウルガモス！」

「ガモスッ！（私の番だ！）」

「……スピアー。シザークロス」
「うそ？」

それは一瞬だった。こうそくいどうをしたスピアーの動きは想像以上に速く、一撃でウルガモスの急所をシザークロスで攻撃したのだ。ウルガモスがバサツと倒れる。そしてウルガモスは立ち上がるうとするが上手く立てずにいる。

「エラニの森のスピアーは狡猾……シザークロスの時に両手の針を使ってウルガモスに麻痺毒を注入したんだね」

「そうよ。私のスピアーは狡猾で強いだよ！　スピアー！　今のうちにメガホーン！」

スピアーはそのまま勢いをつけてお尻の針を使い、メガホーンを打ち込み、ウルガモスを吹き飛ばした。その一撃でウルガモスは戦闘不能になる。この勝負！　ナナの勝ちだ！

「今回は勝てたと思っただけどなく」

「お疲れ様。とりあえずポケモン達を回復させて私達も朝ごはんを食べましょう」

「そうだね」

二人はいつも通り過ごす。しかし僕はメアに勝てたことが物凄く嬉しかった。あの強力な歌を攻略して、ぼろ負けしたニンフィアにリベンジも出来た。それが物凄く嬉しかったのだ。

そして朝食を食べて、のんびりしているとすぐに四回戦が始まる。メアとバトルをした後だが疲れもなく、体も問題なく動く。むしろ準備運動になったくらいだ。ナナは戦うためにフィールドに移動する。すると派手な紹介が行われた

まあナナが初戦というのもあるだろうな。

『四回戦！ 開幕！ 本日も突如現れた新人歌姫のメアちゃんが勝負を盛り上げるぞ！ 彼女は無名だが可愛さ、歌、踊り！ 全てが完璧！ このような逸材を発掘したシノノタウンのジムリーダーのキランに感謝だ！』

「みんな！ よろしくね！」

メアの一言で一気に歓声が巻き起こる。まさか既にメアのファンが出来ているのか！ 歌い始めてたった一日。しかもウルガモスの一件もあり途中で退場したんだぞ！

『実はメアちゃん！ バトルも相当強いらしいぞ！ 聞いた話によると今日の朝に例のダーククライ使いと互角の接戦だったとか！』

「ちよつとどこで見てたんですか？」

『そして第一セットは本大会で一番の注目株！ 先程の話にも出てきた少女！ メアとの関係も気になるが今は置いておこう！ また三回戦でアクシデントもあつたが圧倒的な強さとダーククライという謎のポケモンを使い、熱狂的なファンを作りながら順調に駒を進めるナナだ！』

「……こういう時はなんてコメントすればいいのかしら？」

『しかも噂によると現デトワール地方チャンピオンの実の妹だとか！

そして続いて現れるは、期待の新人のジョニー！ 毎回ギリギリの接戦を繰り広げ、気合いと絆で駒を進めてきたぞ！ さあナナのダーククライをどう攻略するのか！』

それから少しの雑談が入り、試合が始まる。ナナが出したのは僕だ。そして相手が出したのは駒みたいに戻るポケモンだ。名前はカポエラーというらしい。

「それじゃあ戦闘開始だよ！」

「カポエラー！ ……にど……」

「ダーククライ。あくのはどう」

メアの合図でカポエラーが仕掛けようとしたが、ナナの方が早い。ナナは僕に命じて一瞬でカポエラーを吹き飛ばす。僕もなにも考えずにナナの声と同時にあくのはどうを撃つようにしてるため、すぐに反応できる。

「カポエラー！」

『相変わらず強い！ ジョニー選手のエースのカポエラーが一撃で戦闘不能だ！ どうする！ ジョニー選手！』

「ありがとう。カポエラー。それじゃ頼んだよ！ ラッキー！」

「ダークライ。少し右方向にあくのはどう」

「右に躲せ！ ラッキー！」

少年は正面に来ると踏んだのか、ラッキーを右に移動させる。しかしナナの方が上手。ナナはラッキーが右に移動することまで読んで、僕に命じた。ラッキーにあくのはどうは直撃するがラッキーは普通に起き上がってくる。

「……忘れてたわ。ラッキーって丈夫なポケモンだったわね」

『すごいぞ！ 本大会で初めてダークライのあくのはどうを耐えた！』

もしかしたらジョニーは勝てるんじゃないか！』

「ダークライ。もう一度あくのはどう」

「ラッキー！」

ラッキーを再び吹き飛ばす。その一撃でラッキーは起き上がることはない。戦闘不能というやつだ。さすがに一撃で倒れないのは焦ったな。

「いくらラッキーと言えど一撃は絶えられても二撃目は無理よ」

『ラッキー戦闘不能！ 相変わらずの強さを見せつけたぞ！』

「あああああああああああああああああああ！」

「……くだらない」

ジョニーが発狂しながら頭を抱える。ナナはそれを静かに見ている。ジョニーは自暴自棄になりながらボールを投げる。最後のポケモンはモウカザルだ。ナナが出てくると同時に僕にあくのはどうを命じて一撃で戦闘不能に追い込む。うるさいくらいの実況が鳴り響く。ナナは相手に目もくれずにフィールドを後にした。ナナの強さに観客は魅せられて歓声上がる。実力差を痛いくらい見せられた相手は放心状態だった。

「ダークライ。お疲れ様」

そして観客席の戻り、ナナは試合観戦を続ける。四回戦にもなると

試合のレベルも高くなっていく。その中でも特に目立つのは三人。一人はボルノ。もう一人はドラピオン使いのミススという男。そしてギャラドスを使うエリートトレーナーのルイだ。この三人とナナだけは二体目を出すことなく勝ち、強さが飛びぬけている。

「しかし随分と私も観客に好かれたものね」

ナナはボールからムンナを出して抱き抱えながら試合を眺めていた。しかし観客に好かれたというが狙い通りだろ。

「私の名前は知られた。私が来たって世界に知らしめられたかな？」

「ムンナア？（それ意味があるのか？）」

「優れたトレーナーは幼少期から逸話がある。つまり今の私でも結果を残して、話題になれるようにならないとチャンピオンなんて夢のまた夢。それにネームバリューはあると便利だしね」

たしかに。やっぱり今回の大会でナナは敢えて一撃で倒すように立ち回っているな。それだけじゃない。スピアーにムンナを使わず、僕を使うことで大きく注目を集めている。そうして観客にアピールしているんだ。

「……準々決勝は恐らくダークライだけで終わる。でも準決勝以降はそんなに上手くないかな。ムンナもバトルに出る準備をしないと。それとスピアーもよろしくね」

準決勝の相手は恐らくドラピオン使いのトレーナーか。キンランはあまり注目してなかったがナナは警戒してるようだな。そして決勝戦はボルノかギャラドス使いと戦うと思って間違いないだろう。ボルノはナナと同じエラニの村出身。絶対に一筋縄ではいかない。間違いないメアと同等以上に苦戦を強いられる……

「そろそろ準々決勝が始まるわね。行きましようか」

そしてナナは次の試合の準備をする。

31話 つよいポケモン

「ダークライ！ もっと上に飛んでゴルグの追撃を逃れなさい！」

準々決勝。現在はナナが僕一人で相手のポケモンを二体倒して有利。しかし最後の一体が大問題だった。ゴルグとかいう巨人みたいなポケモン。めちゃくちゃ強いのだ。

「逃げながらあくのはどう！」

「ゴルグ！ ラスターカノンで向かえ打って！」

最初はいつも通り一撃だった。しかし問題はゴルグだ。あくのはどうを撃つが全てシャドーボールで迎え撃ってくるのだ。そして空中から攻撃を仕掛けようと考えたナナは僕を空に飛ばした。問題はその後だ。

なんとゴルグは手足を収納してロケットみたいにゴオオオオと炎を出しながら飛んだのだ。それには思わず唾然とするしかない。まさかあの巨体が飛ぶなんて思わないだろう！

そして現在は激しい空中戦となっている。ていうか3m近くの巨体が飛びながら襲いかかってくるのマジで怖いんだが！ ていうか本当にこいつポケモンなのかよ！ 絶対に古代人が作った兵器とかだろ！

「決めるよ！ ゴルグ！ はかいこうせん！」

ゴルグが一点にエネルギーを集め始める。待つて！ これ絶対にヤバイやつだから！ ていうかはかいこうせんって僕の記憶だとポケモンで一番威力の高い技だった気がするんだが！

「ダークライ。五秒後に体から力を抜いて落ちなさい」

「……エ？」

「いいから従いなさい」

そしてナナは動揺の一つも見せない。なんであんなヤバそうなのと戦って冷静にいられるんだよ！ 相手はゴルグとかいうポケモンかどうかすら怪しくて、歴代最強の敵と言っても過言じゃない！ ていうか下手したら伝説のポケモンだったたりするだろ！ 絶対に！

しかしナナにも考えがあるのだろう。僕は体から力を抜く。そう

すると飛んでるから重力に捕まり、地面に落下するわけだ。そのおかげではかいこうせんの下に入り、見事に回避に成功。さすがナナ！ 避ける算段があったんだな！ さすがに僕もあれを食らって平気な自信はない！

「はかいこうせんを撃ったあとは隙が生まれるわ！ あくのはどうよ！」

あくのはどうを撃ってゴルグに一撃を浴びせるがゴルグはビクともしない。ていうか終始無言でめっちゃくちゃ怖いんだが！

「ダークライ。大丈夫。ダメージは間違はなく入ってるわ」

『両者一步も譲らぬ接戦！ ダークライにここまで苦戦を強いたポケモンが今まで存在しただろうか！ そしてナナはどうやってゴルグを攻略するのか！』

「ナナ……」

「ダークライ。ダークホールはダメよ。あれはいざという時の切り札。今はまだ使うときじゃない」

ダークホールで眠らせればすぐなんだよな。まあたしかに準決勝に決勝を控えてるから手の内を晒したくないというのは分かるが……

「でも眠らせるのが手っ取り早いか。ダークライ。戻って。そして頼んだわよ！ ムンナ！」

「ンンナツ（準々決勝はダークライだけじゃなかったのかよ？）」

「ごめんね。思ってた以上にゴルグが強かった」

「ンナツ（まあいいけどよ）」

「へえーダークライを戻すんだ。なんか策があるのかな？ でも「つきのおえ」は私のものよ！」

「……ダークライだけが強いって思われてるけど、私のムンナもダークライと同じくらい強いよ。舐めてると痛い目に遭うよ？」

「まあいいわ！ ゴルグ！ ラスターカノン！」

ムンナはナナの指示通りに従い、避ける。しかしボール越しから見てもゴルグってマジでデカイよな。それに個人的にビジュアルも好きだ。もしもトレーナーになってたら間違いなくゲットしてるな。

うん。

「よし！ ムンナ！ あくびよ！」

「ウソ！ ゴルグ！ 起きてよ！」

お、ゴルグが寝た。つまり生物なのか。なんか少しだけ安心した。ていうかめちやくちや強いしカッコイイ。野生で見つけたらナナに手持ちに加えてもらおうようにお願いしよう。

「ムンナ。あくむ」

「ゴルウウウウウウウグウウウウ！」

ゴルグが悪夢にうなされて倒れる。そのまま戦闘不能だ。まさか敗因が悪夢になるとは。どんなにカッコイイポケモンでも怖い夢には勝てないんだな。

『勝者ナナ！ 強いのはやはりダークライだけではない！ 彼女のムンナも強かったあああ！』

「ムンナ。ダークライ。お疲れ様」

そしてフィールドを後にする。しかしゴルグは強かった。しかし知識があつたら変わったのだろうか。そろそろ全てのポケモンを覚えるべきな気はしてきた。

「ゴルグ。ゴレムポケモンで古代人に作られて、謎のエネルギーで動くポケモン。しかし作られたというわりには進化前のゴビットが存在していたりと少しだけ謎は多い。タイプは地面とゴースト。また胸の封印を剥がすとエネルギーが暴走するポケモンよ」

ナナがボール越しに察したのか凶鑑と同じくらい詳しく説明する。まさかナナはあのポケモンのことを知っていたとは……

「貴方みたいな幻のポケモンと伝説のポケモンを除いて今の凶鑑に載ってるポケモンならタイプと特徴くらいなら全て頭に入ってる。そうしないとチャンピオンを目指す土俵にすら立てない」

素直に凄いや思った。しかしナナくらいの知識でも伝説や幻を知らないのか。そうなるとホントに伝説のポケモンというのは一般トレーナーには名前すら伝っていない……

「ただウルトラビーストだけはエラニの村の人だけは知ってるわ。先生の研究テーマがウルトラビーストと普通のポケモンの違いだから

生活してるだけで耳に入るのよ」

「そういえばナナは欲しいポケモンでウツロイドと言っていた。思い出してみればウルトラサンで出てきたウルトラビーストというポケモン。設定は異世界のポケモンで、野生でいるようなポケモンではない。それなのにナナは知っていた。周りも驚く素振りを見せなかった。言われてみたらダークライを知らないのにウルトラビーストは知っていると不自然だよな。そしてウルトラビーストを知ってるのは先生……いや、今回は博士と言った方が適切か。その研究テーマだから。たしかにそれなら知っていたも不思議ではないか。」

「それでも伝説のポケモンをまったく知らないわけじゃないわよ。私もミュウツーくらいなら名前くらいは聞いたこともある」

なるほどな。ナナはボール越しにそんな話をしながら歩いて席へと戻っていく。そうするとナナの観戦席の近くにはキンランがいた。

「やっほー」

「なんですか?」

「準々決勝の勝ちを祝いにきたのよ。そして一つだけ質問」

「手短にお願いします」

「もしも仮に『遺伝子改良』の結果、優秀な個体が絶対に産まれる卵があったらどうする?」

「なんですか? そのあまりにピンポイントな問題」

「簡単な話よ。チャンピオンの妹さんはゴウー団に虐げられたスピアーや弱いから捨てられたムンナのように人に傷つけられたポケモンが多く傍にいる。もっともそのダークライはどうか私は知らない」

なるほど。そういうことか。なんとなくキンランの問いかけが見えてきた。

「簡単な話。遺伝子改良のあまり強くなりすぎたポケモンというのは優秀故に人を見下す傾向にある。そんな生まれたら人を下に見るようなポケモンにどう接するの?」

「そんな事態になったことないから分かりませんが、恐らく普通に接すると思いますよ」

今までナナが見てきたのはムンナやスパイアという人の被害にあったポケモン。そしてキンランのケースは逆。いうならば加害者のポケモン。

「昨日の彼のようにポケモンを卵から厳選するという話は私もよく聞く。厳選をすれば優秀なポケモンが産まれる。しかし何故か、どのトレーナーも自分の言うことをそのポケモンが素直に従うと思ってる。だけどそんなことにはない。簡単な話、強いポケモンというのはトレーナーに多くのことを求めて手懐けるのは困難を極める。もっとも某トレーナーのムシャーナは自分が強いということを自覚すらしていなかったから、そんなことにはならなかったけど」

「……強いポケモンは育てるのにも困難を極める……ですか」

「そう。そういうこと。だから普通のトレーナーは強い個体に手を出すことはあまり褒められた行為じゃない。自分と同じくらいの強さのポケモンと一緒に戦うのがなんだかんだ言っただけでやすいし、チームワークも良いから一番強くなる」

「なにが言いたいんですか？」

「最初に言った通りよ。強すぎるポケモンが生まれるのが約束された卵。あなたは孵化させて、そのポケモンのトレーナーになる？ それとも他の人に託す？ どうするの？」

この世界でよく聞くのが「弱いポケモンはいらない」だろう。しかし逆に「強いポケモンはいらない」というケースも存在する。そして強いから捕まえないというのはやってることは弱いポケモンはいらないと言う人と同じこと。しかし扱える自信がないのに孵化して親になるのは、そのポケモン的には幸せなのだろうか。いつそのこと捨てた方が幸せなのではないか？

「……産んでみて私の手に負えなかったら、強いトレーナーに託しますね」

「うんうん。なるほど。まあ君なら良いね。というわけで例の『遺伝子改良の末に強い個体が産まれることが約束された卵』を渡すね」

「ちよ、ちよっとー！」

「これは少し前に取り締まった犯罪組織からの押収品。私が悪いこと

して作ったわけじゃないから安心してね」

「ていうか、なんのポケモンの卵ですか！」

「御三家とだけ言っておくわ。あとは産まれてからのお楽しみ」

それだけ言いとキンランは消えた。ナナは卵を持ちながら困惑してる。まさかこのポケモンがナナの四匹目になるのか？

「……ピクリともしないから当分は生まれないのかな？　しかし捨てるわけにもいかないし、持つてるしかないじゃない」

しかし強いポケモン。一体どのくらい強いんだ……

ジムリーダーが強いというのだから相当強いんだろうな……

「はあ……ほんとに困ったわね。しかし御三家か。キモリやヒコザル辺りかしら……」

ナナは卵を抱えて悩みながら試合を見る。今の試合は例のドラピオン使い。もしも勝てば彼と戦うことになる。

「……やっぱりそういうスタイルみたいね。ドラピオンにはやっぱりスピアーね」

ナナは卵について考えながらも分析していた。恐らくナナの未来予知も使うことになるだろう。しかし、またドラピオン一体で勝った。相変わらず強いな。そして準々決勝も終わる。準決勝はナナとドラピオン使い、ボルノとギャラドスを使うエリートトレーナーの組み合わせとなった。残ったトレーナーは誰一人として準々決勝までに自分のポケモンをやられていない。もつと言うならばポケモンを一体しか見せていない。ナナはそんな相手をどう攻略するのだろうか……

32話 準決勝。そして白騎士降臨

『遂に準決勝！ 最初のカードは最強少女ナナと謎多きドラピオン使いだ！ とりあえず両者にインタビューを言ってみよう。まずはナナ！ 一言どうぞ！』

ナナにマイクが渡される。ナナはそれを受け取ると数秒だけ言うことを考えて喋り始めた。

「私は誰が相手だろうが全力で勝ちにいく。絶対に負けない！」

その一言はナナの覚悟が垣間見えた。会場にいる人に言い聞かせているのではない。自分に言い聞かせてるんだ。負けるわけにはいかない。

『負けないと言い切った！ それじゃあ次はドラピオン一体で駒を進め、冷酷無慈悲な戦いで勝ち進めていったネオンにインタビュー行ってみよう！』

『私は私のやり方で勝つ。そして世界を変える。この大会は言うならば改革の第一歩である！ 私も負ける気はない！』

それを言い終わるとメアが実況からマイクを掠め取る。そして可愛い声で仕切る。

『それじゃあインタビューも終わったところでシノノカップ準決勝！ 第一試合ナナVSネオンいってみよう！ 両者！ 戦闘開始だよ！』

一気に会場が沸き立つ。ネオンは迷うことなくドラピオンを出し始める。ドシンと重々しい着地。ナナもそれに負けまいとボールを投げてスピアーを出す。

「ほう……：：～

「全力で勝ちにいきますから」

『さあ開幕だ！』

マイクはいつの間にか実況の元に戻っていて、戦いの火蓋が切られる。メアが歌い始めると同時にナナは動き始めた。

「スピアー！ 先手必勝よ！ メガホーンで吹き飛ばしなさい！」

「メガホーンだど！ ドラピオン！ 頼んだぞ！」

スピアーは神速でドラピオンに接近して、メガホーンを叩き込む。しかしドラピオンを爪で見事にメガホーンを受け止める。その状況でドラピオンはトレーナーの指示を受けることなくかえんほうしやを放つ。しかしナナがギリギリで見切り、スピアーに引くように指示してダメージを免れた。

『なんとという攻防だ！ さすが準決勝！ 今までの勝負とは明らかにレベルが違う！』

「……かえんほうしや。普通のドラピオンは覚えなない技ね」

「それを言うなら君のスピアーのメガホーンも同じじゃないか」

「そうね……でも、あなたはもう私のスピアーについてこられない。いくよ。こうそくいどう」

その時だった。ドラピオンが鬼の形相でスピアーを見ていた。スピアーはそれに怯えている。しかし、すぐに動くが明らかに動きは早くなっていない。こうそくいどうをしただろ！

「……こわいかお。対象のポケモンの素早さを落とす技」

「ご名答」

「でも私の方が早い。スピアー。動きながらこうそくいどう！ もっとうこうそくいどうよ！」

「なにっ！」

スピアーはドラピオンを上回る速度でこうそくいどうを重ねている。素早さを下げるなら、下げられるより先に上げればいい。それがナナの回答。

「……スピアー。そのままメガホーン！」

「ドラピオン！」

ドラピオンがスピアーに吹き飛ばされる。しかし途中で態勢を整え直し、すぐに地面に降りる。そしてドラピオンはそのまま穴を掘り始めた。

「あなをほる。厄介な技ね。スピアー！ 穴に潜ってそのままドラピオンを追尾！」

「……ドラピオン。穴から出たら、その穴に向かってかえんほうしや！」

「ダメ。転回しても間に合わない。それなら……スピアー。そのまま真っ直ぐよ！」

「ドラピオンは地上に出ると地面に向かってかえんほうしやを撃つた。穴の中という避け場のない空間。スピアーは炎を避けられない。ナナもそれを理解している。だからスピアーに敢えて直進させた。スピアーは炎を纏いながら穴から出てくる。そして自分がなにをすべきなのか分かっているかのようにシザークロスをドラピオンに叩き込んだ。ドラピオンは膝をつく。しかし倒れない。だけどスピアーは信念で背後からもう一撃を喰らわせる。」

「ドラアー！（グハアッ）」

そしてドラピオンが倒れる。スピアーは炎を払い、なんとか立っているが虫の息。おそらく一撃でも喰らえば戦闘不能は免れないだろう。その状態のドラピオンにスピアーは一撃を決めたのだ。

「ドラピオン！」

『ドラピオン！ 戦闘不能！ 凄まじい攻防だった！ しかしスピアーが意地を見せて、あのドラピオンを打ち破った！ さすがナナだ！』

「スピアー。まだやれる？」

「ピアッ！（ああ）」

「その言葉を信じるわよ」

『ナナはそのままスピアーで戦闘を続けるようだ！ そしてネオンはなにを出すのか！』

「……さすがに一筋縄ではいかないか。ヘルガー！ いけっ！」

「ヘルツ（さあ狩りの時間だぜ）」

「スピアー！ そのままシザークロス！」

「ヘルツツ（遅い！）」

ヘルガーはスピアーの一撃を躲すとスピアーに噛みつく。スピアーは呻くが体を無理矢理動かして、軽くヘルガーに針を刺す。そしてスピアーは倒れる。

『スピアー！ 戦闘不能！ 両者一步も譲らない激闘！ そしてスピ

「アーの動きを完全に見切ったヘルガー！　これは強いぞ！」

「スピアー。よく頑張ったわね。そして出番よ。ダーククライ！」

「スピアーをボールに戻して、僕の出番がやってくる。このヘルガーをどうやって攻略するのか……」

「ダーククライ。もう出し惜しみはしないわ！　ダークホール！」

「このヘルガーは速い。いつものダークホールは当たらない。それならルンパツパ戦でやったあれをするんだ。一点に凝縮して弾丸を撃つイメージ。それでヘルガーを貫け！」

「ヘルガー！　飛んで避ける！」

「ヘルツ（うつ）」

「どうした！　ヘルガー！」

「ヘルガーは痺れたかのように動かない。これはスピアーの麻痺毒だ。それで微妙に痺れているんだ。だから一瞬だけ動けない。スピアー！　よくやった！」

「スピアーの麻痺毒よ！　状態異常とまではいかないけど一瞬だけ動きを止めるなら十分すぎる！　そして、そのまま眠りなさい！」

「ヘルガー！」

「ヘルガーはダークホールに当たり、眠り始める。しかしヘルガーが見てるのは悪夢だ。ヘルガーは悪夢にうなされて呻いている。」

『おっと！　ヘルガー！　寝ているだけなのに呻いている！　一体どういうことだ！』

「……私のヘルガーになにをした！」

「ズルはしてないわよ。ダーククライの特性はナイトメア。それは近くで寝ている生き物全てに悪夢を見せる。そして悪夢は精神を蝕み、体力を削る」

「……まさか！」

「そう。敢えてダークホールは今まで使わずに隠していた。言ったでしょ？　全力で勝ちにいってくて」

「くそっ！　戻……」

「ダーククライ。その隙を逃さないで！　あくのはどう！」

「ボールになんか戻させない。逃がすなんてことはしない。ナナに

言われた通りにヘルガーにあくのはどうを撃つ。しかし一撃じゃ倒れない。ヘルガーは悪タイプで悪の技は効きにくい。だから連射だ！

「ヘルガー！」

『ヘルガー！ 戦闘不能だ！ まさかダーククライにそんな一面があったとは！ あまりに恐ろしいぞ！ ダーククライ！ 思わぬ隠し球！ ネオンはどう対応する！』

「……ヘルガー。お疲れ様。そしてラプラス！ 勝ってこい！」

「ダーククライ！ 飛んで上からあくのはどうを撃ちまくりなさい！」

ラプラスはボールから出ると同時にれいとうビームで僕を狙うが、ナナの指示で難なく避ける。そして上からあくのはどうでラプラスを一方向的に攻撃する。

「くっ……ラプラス！ こおりのつぶて！」

氷の塊がこちらに飛んでくる。それを僕はギリギリで避けていく。そして避けながらあくのはどうでラプラスを削っていく。

「無駄よ。ラプラスほどの巨体は飛べない。上空に攻撃する手段はこおりのつぶてくらい。そしてこおりのつぶては見切った」

「……ちよつと頭が覚めてきた。ラプラスはたしかに飛べない。だけど泳げるんだよ。ラプラス！ なみのり！ それからのしかかりでダーククライを地面に落とせ！」

大きな波が会場に巻き起こる。ラプラスはそれに乗ってこちらに迫ってくる。しかしナナはそれを見越していた。僕に一言だけ命じる。

「ダークホール」

手に小さな球を作る。それをラプラスに飛ばす。しかラプラスはそれを弾いたのだ。間違いなく当たった。しかしダークホールでも眠りにならない。

「ダーククライは動揺しない。その場で少し後ろに移動。それだけでいいわ」

「な！」

ラプラスが飛びかかってくる。しかし届かない。そのまま地面に

落ちていく。もしもナナの指示通りに移動しなければ危なかったな
……

「しんぴのまもりね。だからダークホールでも眠らなかつた」
「……」

「あなたのポケモンはトレーナーの指示を受けなくても自分で判断して動く。それにより指示が伝わるまでの差を無くし、素早い動きを可能にしている。だからこそ不測の事態への反応が遅れる。例えばヘルガーの時のダークホールが良い例ね」

「そこまで分かつてたのか……」

「ええ。戦う前に下調べは終わっていたわ。あなたの弱い部分。そして強い部分も知っている。だから最初に素早いスピアーを出してエースのドラピオンを倒した。おそらくドラピオンならダークホールを回避、そして指示がなくても臨機応変に対応されると踏んだから。想定外だったのはドラピオンのかえんほうしゃとヘルガーの素早さ。でも、そこはスピアーが頑張ってくれて助かったわ」

「……まだ勝負は終わってねえぞ！ 私は世界を変える！ 私はポケモンが自分で考えて戦うスタイルが主流になるように世界を変えるんだ！ そうだろ！ ラプラス！」

「ラプウウウ！（えええ！）」

「最期の一撃だ！ ラプラス！ ぜつ……」

「ダークライ。あくのはどう」

ラプラスの動きより僕の方が早い。ラプラスにあくのはどうは直撃して戦闘不能に追い込む。いや、さすが準決勝。なかなか強かつたな……

「最期のラプラスのぜつたいれいど。ラプラス自身が指示を受けずに打てれば間に合ったわね。ポケモンが考えて動く。その戦い方ひとつでも参考になったわ。でも、それは野生のポケモンとなにが違うのかしら？」

『ラプラス！ 戦闘不能！ 相変わらずの強さでナナは試合を制した！ そして次は決勝戦だ！』

「……悪いと言ってるわけじゃないわ。簡単な話よ。この戦略の場

合、トレーナーの役割はなんなのか。どうしたら野生のポケモンと差別化出来るか。それをするにはどうしたらいいのか。そこを考えたらもっと強くなるはずよ」

「野生のポケモンとの差別化か。たしかにポケモンの判断だけで戦うなら野生のポケモンと同じだな。そしてナナ。良いポケモンバトルだった。もしもまた会う機会があったら……」

「その時はまたバトルしましょう。ネオン」

ナナとネオンが握手をして。互いに健闘を称えあう。その光景に観客は大いに盛り上がっている。しかしポケモンが自分で考えて動くことで速さを上げるか。それはナナがいなくなにもできなくなる僕の課題かもしれないな……

「ムンナ。そんなに怒らないで。絶対に決勝戦では出番があるから」

ナナはムンナのボール越しにそう言っていた。どうやらムンナは自分の出番がなかったことに怒ってるみたいだ。考えてみたらこの大会でムンナの出番は殆どないもんな。

「……分かったわよ。あとでポフィン買うから機嫌を直しなさい」

ナナは少し早歩きで売店に行き、ポフィンを買おうと観客席に戻る。席に戻ったと絹は既にボルノの試合が始まっていた。

「ウインディは炎タイプ！ それなら私のギャラドスが有利よ！」

試合は互いに一体目。ウインディとギャラドスの試合。ギャラドスは攻撃を仕掛けているが、ウインディには当たっていない。しかしタイプの異なるウインディが有利だが……

「……ウインディ。しんそくでギャラドスの背後をとってかみなりのきばー！」

ウインディが言葉通り神速で動く、ギャラドスはそれに反応出来ない。その隙を突き、ウインディがギャラドスの喉に電気を帯びた歯で噛みつく。ギャラドスはそれに耐え切れず倒れた。

『ギャラドス！ 戦闘不能！ 途中までギャラドスが有利に見えていたが、なにが起こった！』

「……トレーナーの動揺を誘ったな。今まで互角だと思っていたのに急に一撃で倒されることでトレーナーは動揺する。それをするため

に敢えて互角のようにボルノはウインディに手を抜かせていた」

横で捕捉をするかのようにナナの隣で白いフードの男が補足する。ナナはその顔を見て驚く。まるで騎士のような男だ。黒髪に白い服が似合う。言うならば白騎士か？

それならナナは黒姫だ。いや、でもこいつが騎士でナナが姫というのも癪だから、その考えはやめよう。

「……ノエル！」

「メアから連絡がきたから見てきたからレポート屋に頼んで今日の昼頃にシノノシティに来てみたが、面白い大会もやってるんだな」

「ノエルも参加すればよかったのに」

「遊ぶ暇があるなら俺は修行する。それに俺の手持ちは今は三匹だが、ヒトモシは調整中で実際は二体だから出られん」

「あなたはそういう人だったわね」

「……ただボルノもナナも参加するなら少し出れば良かったかなとは思うけどね」

笑いながらノエルはそう言う。しかしノエルが大会に参加していたらどうなっていたことか……

「ノエル。あれからどう？」

「レポート屋に頼んでジム巡りしてバッジは五つだけど……」

「だけど？」

「どう足掻いても勝てない人に出会ってな。その人の弟子として現在は修行中」

「……ノエルが手も足も出ない人って誰よ！」

「デトワール地方の四天王の一人『メグ』先生だよ。いま俺の右にいるだろ？」

「やつほー。フェアリータイプの使い手のメグだよ」

少し小柄だが胸だけは大きい桃色の髪の女性がこちらに挨拶する。彼女もノエルと同じ白いフードを被っている。そして、彼女が四天王……

デトワール地方の四天王は四人。そこにいるフェアリータイプの使い手の『メグ』とゴーストタイプの使い手『アリス』にひこうタイ

プの使い手『ドルマ』。そしてドラゴンタイプの使い手で元チャンピオンの『エンペラー』と。少なくともナナからそう聞いている。「なるほど。君がノエル君の同期で現チャンピオン『カナタ』の妹さんか」

「……こんにちは」

「そんなに畏まらないでいいんだよ」

「しかし、どうして四天王ともあろうものが弟子を？」

「簡単だよ。私はノエルに可能性を感じた。やっぱりエラニの村出身のトレーナーは才能が桁違いだと改めて思ったよ。それに才能溢れる若者を育成するのも強者の仕事だからね」

「なるほど」

「そしてノエルはきつとカナタを超えるよ。彼の才能はピカイチだしね」

「それは無理ね」

ナナの左から声がする。そこにいたのはキンランだった。ほんといつの間に……

「カナタは誰にも負けない。彼はポケモンマスターになる人よ」

「ふーん。やっぱりキンランはカナタのこと好きなの？ まあカナタと一緒に旅をした仲だもんね。二年も男女が一緒にいて、関係が進展しないわけないか」

「……は？」

ナナが啞然とする。ていうか何気にとんでもない発言してねえか！ キンランがナナのお兄さんと一緒に旅？ ちよつと情報の処理が追いつかないんだが！

ていうかナナの反応からしてキンランが兄と一緒に旅をしていたのも知らないっほいな。

『おつつつと！ フシギソウの見事な一撃！ それにより準決勝が決着！』

そんな話をしていると準決勝が終わっていた。完全にこっちに気を取られて試合を見逃した……

「キンランさん。どういふことですか？」

「どうもこうもないわよ。私はカナタ……あなたのお兄さんとカイヨウシテイで会って一緒に旅をした。それだけよ」

「初耳……」

「聞かれなかったし、言う必要もなかったからね」

「ふーん。ていうか久々にポケモンバトルしようよ。キンラン」

「いいわよ。あとでやりましょう」

333話 チャンピオンを目指すということ

シノノカップ三日目が終わった現在。僕たちはポケモンセンターの一室を借りて宴会をしていた。メグさんの提案で行われた宴会。メンバーはナナ、キンラン、メグ、ノエル。そこにメアとボルノが来ている。しかしナナとノエルだけは浮かない顔だった。あんなことがあつたら無理もないか。

キンランとメグのポケモンバトル。それはあまりに別次元。それこそ今までのポケモンバトルがお遊びにしてしまうくらいだ。内容は一対一で戦ったポケモンはエモンガとメレシーという普通のポケモン。結果は僅差でメグの勝ち。これがトップの戦いか……

「ノエル。チャンピオンの妹さん。分かったかしら？ これがチャンピオンになるということなのよ。たしかにあなた達は強い。でも、チャンピオンには遠く及ばない」

「まあーそのためにノエルには私がいるんだよ」

キンランの厳しい言葉に対してメグが励ますように言う。しかしどう考えても彼女達と同じ次元になれる気がしない。常にフィールド全体を覆う全体攻撃。それを見切り避ける。ナナのやる未来予知なんて当たり前のようにやる。どう考える異常なポケモンバトルだ。そして、その異常なポケモンバトルを出来る様にならなければダメなのだ。

「……ナナ？」

「まったく分からなかった……なんの技を使ってるのか……ポケモンがどう動いているのかすら分からなかった」

「強いポケモントレーナーは知識や対応力だけじゃなくて動体視力……時には体力も必要になるのよ。ポケモンだけが強いわけじゃないのよ」

キンランはナナにアドバイスするように言う。大会が終わった後のジム戦はキンランとやることになる。果たして今の僕たちで勝てるのか？

——どう足掻いても勝てるビジョンが見えない。

「しかしシノノカップで盛り上がりを見せる三人がまさか全員がエラニの村出身とはね。決勝を飾る二人はもちろんのこと、歌や踊りで会場を魅せて既に固定ファンまで出来てるメアちゃん。完全にエラニの村の身内大会な。まあ私はなんでもいいけど。そういえばメグの弟子くんは、いつ私のジムに挑むの?」

「今はメグ先生から修行の一環としてジム戦禁止令が出てますから当分は先になります」

「そう。なら挑戦の日を楽しみに待ってるわ。そしてチャンピオンの妹さんは?」

「シノノカップが終わった翌日には挑むつもり……でした」

「でした?」

「でも正直に言うとな勝てる気がしない……だから……」

「それなら来るといいわ。勝ちだけが全てじゃない。敗北から学ぶこともある。きつと私との勝負は良い経験になるはずよ」

「……ていうか伝説のポケモンが認めるトレーナーが弱いわけがないじゃん。そもそもジムリーダーなんて普通は何回も負けて、対策を必死に練って倒すもの。負けることが当たり前なんだよ」

メアが気楽にそう言う。たしかにその通りだ。今まで一回で勝っていたのが異常。本来なら、そのくらい高い壁なのだ。

「二人とも気楽にいこ? たしかに強いけど二人とも二十歳を超えた大人。それに対して私達はまだ十二歳。あと八年もあるんだよ?」

「……八年しかないのよ」

ナナがぼそりとそう言う。しかし場の雰囲気が悪くなってきたな。もし今より強くなるならどうすればいいのだろうか。ナナも僕も強くなった。しかしまだ上はいる。その上に行くために大切なものは……

「チャンピオンの妹さん……いいえ、ナナ。はつきり言うけど今のあなたにはチャンピオンはおろかジムバッジを8つ集めることすら無理よ」

「え?」

キンランが怖いくらいストレートに言う。かなり厳しい言葉だな。

「……私のなかがダメなんですか？」

「あなたのスタイルよ。たしかにナナはトレーナーとしての才能もある」

「ならー！」

「……ポケモンがダメ。あなたのポケモンはバトルに不向き過ぎる。優秀なスピアーに賢いムンナはまだいい。だけど問題はダーククライ。ずっと戦いを見てきたけどダーククライは自分の一番良い動き方、それに戦いの立ち回りをなにも知らない。それが結果としてナナの足を引っ張っている。催眠と高威力の特殊技の攻撃。たしかに強い。だけど。それは他のポケモン……例えばゲンガーでも出来るはず」

……僕が足手纏い？ え？ どういうこと？

「あなたのダーククライ。自分がダーククライという幻のポケモンであることにかまけて自分が特別だと思い込んでいる。それが成長を阻害している。個体としては最悪よ」

「……これ以上、私のダーククライを愚弄しないでもらえますか？」

「事実よ。あなたは自分のするあまり大事にするあまりポケモンの短所に気付けない。また弱い個体を見捨てることも出来ない。だから、あなたが強くても弱いポケモンで戦い続けるというハンデを背負って戦わなければならない。そして強いと言ってもハンデを帳消しに出来るくらい、あなたは強くない」

「ならもつと強くなる。どんなポケモンでも勝てるくらい……」

「どうやって？ ポケモンバトルはトレーナーだけが強かったらいいわけじゃない。ポケモンとトレーナーの二人三脚で行うものよ。もしも、あなたのトレーナーだけが強くなって勝つというのはポケモンバトルだと私は思わない」

「……」

『強いポケモン。弱いポケモン。本当に強いトレーナーなら好きなポケモンで勝てるように頑張るべき』。というあるトレーナーの名言が全地方に伝わっているわね。それはトレーナーだけが強くなれというわけじゃない。弱いポケモンを強く育てるのが強いトレーナーという意味だと思う。そしてナナにはバトルの才能はあってもポケ

モンを育てる才能はない」

「ならダーククライと一緒にチャンピオンになれないってことですか？」

「そうよ……というのも酷ね。一晩だけあなたのダーククライ貸して。あなたに合ったダーククライの使い方を考えてあげるから」

* * *

そして夜の森。ナナはキンランにしぶしぶボールを預けた。そして今はキンランと二人。彼女は僕に様々な動きをさせて色々な技を撃たせた。この女……なにが狙いだ？

「まあー大体が分かったわ。一つは撃つ技の威力が低い、二つは技を出すまでの判断が遅い、三つは技を出すことでしか戦えない」

分かってる。そんなことは分かっている。ならどうすればいいんだ？

「……ポツ拳を教えるわ。フェルム地方という場所では不思議な石を使って『フェルムバトル』というポケモンと人間が完璧なコミュニケーションをして行うバトルがある。そしてフェルムバトルのポケモンの動きが人間の武術や拳法に近いことからポケモンの拳法。略してポツ拳として伝わった。今はマイナーな技術だけど」

ポツ拳。それはどうやるのだろうか。そんなことを考えているとキンランがモンスターボールを投げた。そこからマルマインが現れる。

「ダーククライ。このマルマインを技を使わずに倒しなさい」

「……エ？」

「技ではない攻撃。それがポツ拳。多くのポケモンやトレーナーは名称まで知らなくてもよくやっつてるわ。メアのニンフィアの後ろ足の蹴り、ナナのスピアーの麻痺毒、そして準決勝でネオンのドラピオンがやった爪で技を受け止める。その技ではないがバトルで使える技は全てポツ拳という名称で行われる。さあマルマイン。10ボルト」

マルマインから微弱な電気が飛んでくる。僕は慌てて、それを避ける。しかしポツ拳か。人間で言うならアッパーとか背負い投げを技と言い、普通のパンチや蹴りがポツ拳に該当するのだろうか。そうい

うことなら!

「……ヌッ!」

マルマインに近づき、僕の細い手でマルマインを叩く。しかしビクともしない。ほんとにこんなのに意味があるのか!

「ポツ拳はダメージを与えるものじゃない。技を当てるための隙をつくる技術よ。そこを意識しなさい」

なるほど。しかしあまりに威力が低い。隙を与えるのも不可。それならあくのはどう。しかし技を撃つのは禁止。なら技とも呼べない威力のものなら? どうだ?

溜める時間をゼロにしてデコピン程度の威力しかないあくのはどう。それを撃つ!

「ヌッ!」

指先から紫色のビームを発射する。当たった場所から砂埃が舞う。しかしマルマインは無傷だ。今までは片手を使って少しいた。しかしこれは指だけ。威力もかなり落ちるが、感覚的に撃てる。これは使いやすくいいな! よし、ここからだ!

「マルマイン。お疲れ様」

「……エ?」

「私はあなたのトレーナーじゃない。教える義務もないのよ。ここまでするようになったら後は自分でトレーニング出来るはずよ」

キンランはそれだけ言うのと去っていった。

そして茂みからナナが出てくる。まさかずっと見ていたのか……

「ポツ拳……私も初めて聞いた技術だわ」

「ナナ……」

「私もあれから考えたのよ。たしかにダークライは弱い。それは否定の出来ない事実だと思う。だけど私は信じてる。ダークライはまだ強くなるって」

「ソレデ……イイノカ?」

「私は弱いからという理由でポケモンを捨てるトレーナーにだけはなりたくない。でもキンランの言うことも事実……正直に言うとチャンピオンなんて夢は捨てるのが正解の気もする。だけど私はやっぱり」

りチャンピオンという夢も諦めきれない」

「……」

「だから決めたよ。今は全力でやろう。全力で足掻いていけるところまでいこうよ。チャンピオンの夢を諦めるのは足掻いて負けて泣き叫んで心が折れた時。今はまだその時じゃないと思わない？」

ああ。そうだな。ナナはチャンピオンを目指すが目指さない。矛盾だけどそう言うしかない。ナナはチャンピオンになろうとした経験は無駄にならないからチャンピオンを目指すということなのだろ。つまりチャンピオンを目標にするが、本気でチャンピオンになろうとはしない。それがナナの答えなのだ。

「ポケモンの厳選とかするのがチャンピオンを本気で目指すということなら私はチャンピオンを本気で目指さない。気楽に目指す。それが私の答えよ！ それだけの話よ！」

「ナナ！」

「ダークライは弱い？ よくも好き勝手言ってくれたわね！ だったらダークライで倒して、それを間違ってたと言わせてやるだけよ！ ああ！ なんてこんな当たり前のことすら忘れてたのかしら！ それに育てるのが苦手？ だったら彼女の言ってたポツ拳を一晚でマスターしてあげるわよ！ ダークライ！ 今夜は特訓よ！」

そうして夜通しの特訓が始まった。まだ完璧とは言えない。だけど僕は少しだけポツ拳を習得することが出来た。そしてなによりも僕は前よりもナナを好きになった。

34話 決勝戦

『遂に決勝戦！ もはや説明もいらないうらう！ 戦うのはナナとポルノ！ どんな熱戦をするのか期待が高まるどころだ』

「初めてね。あなたと自分のポケモンで戦うのは」

「そうだな。でもオラは負けないぞ」

「私も。早く戦いましょう」

ナナは結局一睡もしていない。クマをメアに頼んでメイクで隠して戦いに臨んだ現状だ。コンディションは最悪と言っても過言ではない。

「行くわよ！ ムンナ！」

「頼んだぞ！ ウインディ！」

『それじゃあバトル開始だ！』

『みんなーいくよ！ 戦闘開始だよ！』

メアがメイクを取り出し、歌い始める。それが開始の合図だ。

「ムンナ！ 右に飛んで！」

「ウインディ！ しんそく！」

ナナは明らかにウインディの指示より先にムンナに指示を出して避けていた。そしてムンナは避けると同時にころがるでウインディにキツイ一撃を喰らわせる。あの晩はポツ拳の練習だけではない。ナナの新たな戦闘スタイルの練習もしていた。ナナだけの勝負にならないための戦い方。

「ムンナ。ゼロハチ秒後に背後からしんそくからのほのおのきば。それを避けられたらかえんほうしゃ」

「ウインディ！ もう一度だ！」

ナナの指示を受けてムンナが避ける。これが新たなナナのバトルスタイル。ナナは相手の攻撃のタイミングだけをポケモンに伝え、ポケモンがナナから受けた情報を自分で整理して考えて動く。野生のポケモンと同意義になる。これは準決勝でネオンの戦い方を見て、それをナナ流に仕上げたもの。そうすることで伝達の時間を抑えて素早く動ける。名づけるなら『ワイルドスタイル』だ。

「ナナ。これが新しい戦い方なんだね？」

「ええ。もう少しポケモンにも頑張ってもらうことにしたわ。ムンナ。またしんそくがくる。今度は少しだけ右にくるから注意ね」

「ンナツ（了解）」

「ウインディ！ しんそく！」

ムンナは再び避ける。ウインディは速い。見てから指示じゃ間に合わない。しかしナナは見るより先に予知で指示をする。だが予測から指示。ムンナが聞いて判断。それでも間に合わない。だからこそその最小限の情報に抑えたワイルドスタイル。

『すごいぞ！ あのウインディの攻撃を意図も容易く避けている！ さすがナナだ！』

「ガルルルッ（どんなカラクリだ）」

「予測だ。オラとウインディの癖を完全に分析して必中の予測を立てて指示。だから当たらない。ウインディ。ここは引こう」

「ガルッ」

ウインディがボールに戻される。そして次のポケモンが現れる。それは青い人型のポケモン。僕でも知ってるポケモンだった。

「ゆけっ！ ルカリオ！」

「カリオツ！（私の出番か！）」

「いつの間にそんなポケモンを……」

「ナナ。悪いがもうオラとは勝負にならない。何故って？ ルカリオは最強だから」

その時だった。ルカリオとボルノの腕が光り始める。一体何なんなんだ！

「……うそでしょ！」

「ナナも知ってるだろ。メガシンカは」

『おつつつと！ なんとルカリオがメガシンカだ！ まさかここまで隠しているとは！ ボルノ！ 底が見えない！ ナナはどう対抗するのか！』

ルカリオの姿が大きく変貌する。少しだけ体も大きくなり、一部が赤黒くなっている。それに目付きもかなり悪い。これがメガシンカ

なのか？

「ムン……」

その時にいたのは吹き飛ばされて壁に練り込むムンナだった。なにが起きた！ まったく目で追えていない！

『なにが起こった！ とりあえず分かるのはムンナが戦闘不能だということだ！ ナナが手も足も出ていない！ あまりに強すぎる！』

「ムンナ。お疲れ様……頼んだわよ！ スピアー！」

「遅い」

次の瞬間。スピアーは倒れていた。目の前にはメガルカリオが無言で佇む。そんな嘘だろ。こんなのどうやって戦うんだよ……

『……スピアー、戦闘不能なのか？ 一体なにが起こった？』

あまりに突拍子のない出来事に司会も困惑している。会場も事態を飲み込めず唾然としている。そんな中でナナは笑っていた。ニヤリと少しだけ。

「だから言っただろ。勝負にならないと」

「……ねえダーククライ。このメガルカリオを倒したら私達はもつと強くなれるわよ」

ああ。ナナは諦めていない。まだ勝つ気でいるんだ。策もなし。相手の動きも見えない。一撃でも受ければ即敗北。さらに相性は不利。最悪のクソゲーで無理ゲー。だからこそ勝てた時はもつと強くなれる。

「行くわよ！ ダーククライ！」

「このくらいじゃナナはへこたれないよな！」

『でたああああああ！ 津にダーククライだ！ ダーククライはどう戦う！』

相手の動きは見えない。どう戦う。思い出せ。今までの全てをここで出し切れ。そうすれば勝てる。相手はポケモン。それなら無敵なんてことはない！

『ダーククライ！ 上に逃げたああああ！』

メガルカリオは空を飛べない。それなら空に行けばこちらが有利だ！

「油断しないで！ メガルカリオの脚力なら普通にジャンプで追ってくる！」

ナナの声が届く。それと同時に足を伸ばす。普段は収納して見ることのない足。それでメガルカリオが来るであろう位置に蹴りを入れる。完全に出鱈目な蹴りだ。しかし見事に当たる。そして僕の蹴りは少し重いぞ。これがポツ拳だ！

「ルカリオ！」

『なんとダーククライ！ メガルカリオに見事に一撃を入れた！』

その隙を逃すな！ ここでメガルカリオを眠らせる！ そのままダークホールだ！ もちろん素早く、的確に。一撃集中……いや、ダメだ。恐らく避けられる。それなら避けられないものを考えろ。避けられないもの……雨だ！ 雨のイメージだ。

今度は弾丸ではない雨粒のイメージ！ 雨を起すのは雲！ それなら闇で空を覆えばいい！ そう思い、空に手を伸ばす。薄い闇に膜ができるが、雲には遠く及ばない！

「ダーククライ！ くるわよ！」

いや、いい！ この膜からマシンガンのように小粒の闇を発射する。しかしそれなら膜である必要はない。球体だ。大きな球体から小さな闇の玉を放てば全方位に攻撃が出来る。

「これがあなたの進化ね！ ダーククライ！ そのままダークホールを決めなさい！」

「イケエエエエエエエエエエエエエエエエエ！」

闇の玉はフィールド全域に放たれる。しかしルカリオは青い骨のようなものを出して全て払っていく。これでもまだルカリオの頂には届かないか！

「ルカリオ。はどうだん！」

「あくのはどうで打ち消して！」

青い球がこちらに飛んでくる。一瞬だけ、どう対処するか悩むがナナの指示が飛んできて反射的に従い、難を逃れる。しかしルカリオは既に動いている。地を蹴り、宙を飛んでいる。僕もすぐにダークホールで対抗するがルカリオは再び青い骨のようなもので払う。

「ルカリオ！ そのままボールラッシュで地面に叩き落せ！ そしてインファイトで追い打ち！」

頭がカチ割られるかのような痛みに襲われる。それから地面に落とされ、衝撃が走る。しかし休む暇なんかない。ルカリオの殴る蹴るの連続攻撃。連撃の全てが重く、吐きそうになる。意識を手放しそうになる。だけど僕は勝つと決めた！ まだやれる！ 薄れゆく意識。その中でルカリオの胸を目掛けてダークホールだ！

「ルカリオ！」

ばたりとルカリオが倒れる。ダークホールが当たった。すぐに追いつき打ちをかえよう。そう思う。しかし地面にのめり込んだ体が動かない。クソツッ！ あと一歩なのに！ 頼むから今だけは言うことを聞いてくれ！僕はナナを勝たせてあげたいんだ！

「ダーククライ！」

勝たなきゃ。ナナのために勝たなきゃ……こんなところで止まらせてられないんだ！

『立つっつたあああああ！ ダーククライが立った！ あの状況から起き上がったぞ！』

意識が飛びそうだ。立ってるのがやっと……手に力を込める。あくのはどうを一撃だけでもルカリオに……そうしないと……

『しかしダーククライ！ その場で倒れる！ 戦闘不能！ 勝者はボルドだ！』

体から力が抜ける。まだだ！ まだ勝負は終わって……

「ダーククライ。お疲れ様」

ナナ……僕はまだ戦える……何度でも起き上がって……

「私達は負けたのよ。完膚なきまでに」

負けた。その言葉で一気に体から力が抜けた。これでも敵わない。ここまでやっても眠らせた止まりなのかよ！ こんなに全力でやって！ 戦いの中で成長しても届かないのかよ！

「ミト……メ……ナイ」

「ダーククライ。今は休みなさい」

ナナは僕にげんきのかけらを食べさせて傷薬を使ってボールに戻

す。完全に活動限界だ。それでも体が痺れて動かない……悔しい。すごく悔しい。

「……ボルノ。いい勝負だったわ」

「ああ。久々に戦えて良かった」

それからナナとボルノが握手して、この場は幕引きとなった。

あまりに圧倒的な力の差。ボルノのポケモンを一匹も倒せなかった。メガルカリオに痛手の一つも負けられなかった。そんな中で表彰式。ボルノにつきのおえが渡される。そしてキンランが少し長い話をして幕引きとなった。ナナはそれから誰とも会話することなく部屋に戻った。ベッドで一人泣いていた。自分の無力さに打ちひしがれていた。その日の空気はこの上なく重かった。

35話 夢

ナナがベッドで泣いている時と同時刻。決勝戦を無事に制したボルノはある男と部屋の一室で話していた。

「新入り。シノノカップを勝ち進み、無事につきのふえを回収出来たようだな。約束通り入団試験は合格だ」

「ありがとうございます。ブルーさん」

「……恐らくつきを求めてゴウー団の襲撃。それも幹部格……下手したらボスレベルが現れる。早速で悪いが、その時に私のチームの一員として働いてもらうぞ」

この男は国際警察の一人である。国際警察は基本的に幾つかのチームに分かれて行動している。そのチームを任されている一人がここにブルー。そして彼の率いるチームをブルーチームと呼ぶ。そしてボルノはブルーチームに入るべく入団試験を受けていた。内容は簡単で『つきのふえの入手』である。

「ゴウー団はコスモッグというポケモンを保持している。そしてつきのふえで呼び出すルナアラというポケモン。それはコスモッグと大きく関わっているという話もある。そんなものをゴウー団に渡すわけにはいかないからな」

「しかし、どうして大会中に襲撃しなかったのでしょうか？」

「あの場にはキンランがいた。彼女と正面からやるのはゴウー団も避けたかったはず。だから狙うなら優勝者につきのふえが渡った後だ。」

ボルノには夢があった。それは国際警察に入り。悪を取り締まるという夢が。しかし国際警察に入るなんて簡単なことではない。国際警察に入る条件は昔から一つだけだと言われている。それは国際警察を見つけ、その人に頼んで入団試験を受けさせてもらう。まず最初に国際警察を見つけられるのかという試練で試されるのだ。

そしてボルノは先日ナナ達とゴウー団と対決した。その際に偶然にもボルノは見つけてしまったのだ。国際警察の人間を。それは彼にとってまたとないチャンスだった。そして彼は必死に頼み込み、実

技試験から筆記試験など様々な困難を与えられることになる。しかし彼は必死に乗り越え、なんとか入団試験を受けさせてもらうまで進めた。そして現在に至るのだ。

「ボルノ。改めて聞くが国際警察は甘い仕事じゃない。時には死ぬ危険もある。そういう場所に身を置くという覚悟は出来てるか？」

「はい。このボルノには悪を倒すという夢があります。その夢のためなら——なんだってやります」

「そうか。だが、ここに誓え。従うのは国際警察ではない。己の正義、そして法に従うことを」

「誓います」

「フツ……これから頼むぞ。ボルノ。あとは追って連絡する」

そして男がボールからエルレイドを出して、テレポートをして消える。部屋にはボルノが一人残されることになった。そして誰かが部屋をノックする音がする。ボルノを訪ねてくる客だ。ボルノは席から立ち、「扉を開く。」

「ああ……ノエルか」

「ボルノ。今から俺とポケモンバトルをしないか？」

そして夜のフィールドを借りて行われる。内容は簡単な一対一。単純な実力勝負だ。

「しかしノエルから勝負を仕掛けるなんて珍しいな」

「ちよつとした敵討ちだ。俺の好きな人をボコしたんだ。そのくらい許せよ」

「ナナへの気持ちは今も変わらずか」

「当たり前だ。俺はナナに振り向かせるためにチャンピオンになるんだからな。グソクムシヤ。少し俺のワガママに付き合えよ」

「ルカリオ！ 頼むぞ！」

この戦いは二人しか知らない。ノエルの想いに限ってはボルノしか知らない。ノエルはチャンピオンになる日まで絶対にナナへの想いを明かさない。ノエルが強さを求めるのは全てナナのため。彼はナナのためならなんだってする覚悟だ。

「……早くメガシンカしろよ。本気のお前を倒さなきゃ意味がない」

「ルカリオ！ 行くぞ！」

ボルノとルカリオが光り、ルカリオの姿が変貌する。しかしノエルは怯みもしない。グソクムシヤも動揺せずに冷静に構える。

「そちらからどうぞ！」

「ルカリオ！ はどうだん！」

「グソクムシヤ。やれ」

青い弾。グソクムシヤは頷くと迷わず拳で叩き割った。それからボルノがはどうだんで追撃を命じる。メガルカリオは何発も撃ってグソクムシヤを追い詰めようとする。しかしグソクムシヤはゴツイ腕を使って全て対処する。まるで出来て当たり前と言いたげに。

「そろそろ行くか。グソクムシヤ……であいがしら」

声と同時にメガルカリオは宙に舞っていた。空中で態勢を整えてカウンターのを狙う。ボルノも見逃さない。すぐにカウンターの一撃を指示する。

「ルカリオ！ インファイト！」

「グソクムシヤ。腕を掴んでそのまま叩き落せ」

グソクムシヤはメガルカリオのインファイトを完璧に見極めていた。最初の一撃のパンチ。それを少しだけ体を捻り、回避。腕を掴んで、メガルカリオの体を回して勢いをつけた後に地面へと叩き落した。ドシンと音が鳴り、地面にクレーターが出来る。

「グソクムシヤ。ぼさっとするな。アクアブレイクで追撃だ」

グソクムシヤは拳に水を纏い、それを力に変えてメガルカリオの腹に一撃。それから二撃、三撃と追い打ちをかけていく。そして六撃目を撃とうとした時に手を止める。

「……ムシヤ（もう終わりだな）」

地面には意識を失ってるルカリオがいた。もちろんメガは解除。戦闘不能だ。それを確認すると「お疲れ」と一言だけ言ってノエルはグソクムシヤをボールに戻した。

「ボルノ。俺の勝ちでいいよな？」

「完敗だよ……ノエル」

「こんな夜中に俺の我儘に付き合ってくれてありがとうな」

ノエルがそれだけ言うのと帰ろうとした。そんな時に息を切らしながらメアが走ってきた。その様子に二人はキョトンとする。

「……ゴウー団が襲撃にやってきた!」

「なんだって! ジムリーダーに連絡は!」

「した! でも、いきなりテレポートで現れて大混乱よ!」

そう。二人が戦ってる間にゴウー団の襲撃があったのだ。ポケモンのテレポートで現れて襲撃。そのため物音一つしなかった。ノエルはグソクムシヤを出して、すぐに事態の収集のために走る。しかし目の前にダークドヒドイデが三匹くらい現れる。それに対してノエルは舌打ちをする。

「くそつ! よりによってドヒドイデかよ……」

「ノエル! それだけじゃない! 近くにゴウー団がない! つまりボールを破壊して無力化が出来ない!」

走ってきたボルノが辺りを分析して言う。ダークポケモンは死ぬまで戦う。そのためボールを破壊して、野生になったところを捕獲して無力化させていた。そしてボールはゴウー団の団員が持っている。そして今は近くにゴウー団はいない。つまりボール破壊の技が使えないのだ。

「……こんな時にナナがいたらダークホールで眠らせて無力化出来るのに」

メアがぼやくように言う。しかし既にウルガモスを出して自衛の準備は出来ていた。

「しかし、なんでここにゴウー団が来るのよ」

「分からん。だが考えるのは後だ!」

「そうね! それとドヒドイデのトーチカに気を付けて! 下手したら毒状態になる!」

メアがウルガモスに命じて炎でドヒドイデを払う。しかしドヒドイデは怯まず、こちらに襲いかかってくる。それに対してメア達は後ろに一歩下がりに対応する。

本来ならグソクムシヤ等で吹き飛ばしたい。しかし触れたポケモ

ンに毒を喰らわせるトーチカを恐れ、接触技を使えないのだ。ダークドヒドイデというポケモンは厄介極まりない。高い耐久がダークになり、更に上がる。そして触れたポケモンを毒を浴びせる可能性がある。

攻略するのは困難を極めるのだった。ダークドヒドイデに任せ、団員は別のところにいる。その采配はあまりに賢い一手だった。

「……どうする?」

「一人が足止めして、二人が進むのが無難だと思う」

「ボルノに同感だ。またはジムリーダーかメグ先生が来るのを待つか……」

「待つ? それまでに被害は増えるよ。ノエルとボルノが動けば少しは被害を減らせるんじゃないかな?」

「なら囿になってくれよ! メア!」
「任せて! さあ行きなさい」

メアがルンパツパを出して毒を受けることを覚悟でドヒドイデを吹き飛ばす。それと同時にノエルとボルノが駆け抜けてダークドヒドイデを突破する。そして走りながらノエルが問いかける。

「ボルノ! ルカリオは戦えるか!」

「無理! さすがにあの傷だとキツイ! ていうかノエルのグソクムシヤがやりすぎなんだよ!」

「ムシヤ…… (すまん……)」

「なるほど……ゴウー団の相手は?」

「それはウィンディで大丈夫! これからどうする?」

「俺はナナの部屋に向かう! 他は任せていいか!」

「お前はホントにナナが好きだな! でもナナの力も借りたいのは事実! 行けよ! ナナの部屋に!」

「恩に着る!」

ノエルがそのまま走る。それから何匹かダークポケモンが出てくるが、ノエルは難なく全て吹き飛ばしていく。そして起き上がってくる前に走って逃げる。そして階段を見つけて駆け上り、ナナの部屋を真っ直ぐ目指す。

「ナナ！」

そしてナナの部屋に辿り着いた。そこにはぐっすりと死体のように眠るナナ。そしてナナを抱き抱える黒髪の女性がいた。

「あら、随分とイケメンが来たわね！」

「……あなたは？」

「ゴウー団の幹部よ。名前はマリアでいいかしら」

「ナナを離せ！」

「嫌よ。じゃあね」

女はケーシイを出してテレポートをして消える。ノエルは舌打ちしてだけ叫んだ。ノエルの雄叫びだけが辺りに響き渡った。

36話 エピソード：ナナ

私は目を覚ます。手足は束縛されて動かない。口には布で喋るところのままならない。そして腰にボールもない。なにが起こったか三秒くらい考えた。恐らく私は拉致られたのだろう……誰に？ なののために？

ていうかダークライ！ ムンナ！ スピアー！ みんなは！

「暴れても無駄よ」

「……ん……んん！」

「ごめんなさい。これじゃ喋れないわね」

女が近づいてきて、私の口から布を外す。やっと喋れるようになった。ハッキリと分かる。私のポケモンが奪われたということは。

「私のポケモンを返して！」

「……ダークライ以外なら条件付きで良いわよ」

「ふざけないで！」

「私はあなたに可能性を感じたのよ。悪の素質」

悪の素質。なにを言っている？ この女の狙いはなんだ。そもそも誰が私を拉致したのだろうか。まずはこの拘束から逃れなければ……

「ナナ。きつとあなたは素晴らしい悪になるわ。この世界には私の弟のように『ポケモンは人間の道具』だと思ってる人は多くいる。でもナナは『人間はポケモンの道具』だと思ってる。歪んでるわ。普通の人とは違う歪み。そして悪とは周りと違うということ、その歪みは悪として最高なものだわ。だから私はナナに仲間になってほしいの……」

そんな時だった。警報器が鳴り響く。女は軽く微笑むと私に一言だけ言う。

「少し邪魔者が来たみたい。あとでたくさん遊びましょう……そして私達の仲間にならないようならどんな辱めを受けてもらおうかしら？」

女は部屋から出ていく。私はしばらくは震えて動けなかった。最

後の脅迫に近い言葉が怖いんじゃない。誰にも言ったことのない本性を始めて当てられた。それがなによりも怖かった……

* * *

私は幼少期から普遍的な教育を受けていた。しかし、それが問題だった。

ポケモンを虐めてはいけない。ポケモンは人間の道具じゃない。そんな当たり前の教育だ。しかし私は壊れていた。その当たり前の教育を受けるうちにポケモンを神様に等しいなにか。自分より上の存在だから大切にしなければならぬと思ってしまうのだ。

それが私の最初の歪み。そして少しだけポケモンと触れ合うようになる。ポケモンは炎を吐いたり、空を飛んだり人間とは明らかに違う。その時に強く私は感じた。『人間はポケモンにおいて種族的に劣っている』と。それは自分より上の存在という考えの裏付けとなった。私の考えは正しかったと思った。そして始めて見たポケモンバトル。

それを見て思ったのは『どうして人間如きがポケモンに命令してるんだろう?』だ。そして幼い私は幼稚な答えを出してしまうのだ。『ポケモンが人間を使ってる。人間がポケモンの道具なんだ』と。

それから私はエラニの村に行き、ポケモンの力を最大限に発揮出来る道具になるために必死に勉強した。そんな中で私はチャンピオンとなったお兄ちゃんの戦いを見る。それに私は魅入られた。『私はお兄ちゃんみたいな立派な道具になりたい』と強く思った。

チャンピオン。それは優れたポケモンの道具であることの証明だ。だから私はチャンピオンになって一番良い道具だと証明しなければならぬ。

エラニの村で勉強中に私はウツロイドというポケモンについて知った。それは寄生して神経毒で対象を自らの欲望のままに動く化け物にするポケモン。しかし毒にはウツロイドを守るように心理誘導する作用もある。素敵だ。人を完全に道具として扱うポケモン。私はそれに惹かれないわけがなかったのだ。

そして遂に旅立ちの日。何故か私を求めるダークライに会った。

私は言われた通りに捕まえた。だってダークライがそれを望んだから。そしてダークライは私を大切な人に似てたから選んだと言った。その時に私は気付いた。

違う！

これは違う！ ダークライが求めてるのは私じゃない！

私みたいに歪んでる人間じゃない！

そんな考えが脳裏に過った。その時に私は気付いた。私の考え方って異常だったんだ。ダークライの愛しい人を見る目に気付かされた。だってそれは道具を見る目じゃない。明らかに大切な人を見る目だったから。だから私は答えた。

——私は貴方の大切な人とは違う……と。

それから強くダークライを愛しく思った。私のポケモンなんだ。対等なパートナーなのだと思えた。だから私はダークライに言う。私に必要だと。

私がまともな人間になるためにダークライは必要だ。そしてダークライと一緒にどんな壁だって乗り越えていける。私の歪みという壁さえも……もしも私が真人間になればダークライの大切な人になれるかな？

それからムンナに出会う、トレーナーに捨てられたムンナ。私はムンナの話聞いた時に怒りが沸いた。これは恐らく人間如きがポケモンを雑に扱ったことへの怒り。でも、それは悪い考えだと思ったからすぐにやめる。しかし同時に私は思った。ムンナにもダークライと同じ『大切な人を見る目』が出来るようになってほしいと。だから私はムンナを捕まえた。人間を少しでも好きになってほしい。何故か、そう思った。

ある時にお金がなくなる。だから私は他のトレーナーを狩ることにした。どうせポケモンの力を満身に発揮することの出来ない道具だ。いくらお金を搾り取ろうが問題ない。やがて正義感で私に挑むトレーナーが現れる。まるで私が悪いと言いたげに。それは想像通りだがムカつく。私はたしかに歪んでるかもしれない。しかし負ける方が悪いのだ。ポケモンの道具になれない奴らが悪いのだ。そ

れなのにどうして私が悪人扱いだ？

くだらない。ほんとにくだらない。もうなにが正義なのか分からなくなってきた。とりあえずお金は欲しいので倒す。しかしダークライの表情はどこか不満そうだ。弱い者虐めって悪いことなんだ。私は初めて気付いた。これからはこういうことはやめようと思った。私は真人間になるんだ！

そしてジム戦を突破して私の元からダークライが離れる。私は焦った。もしかしたらダークライは私の本性を知って離れたのではないかと不安になる。ダークライを見つけて私はホツとする。それから気付く。私はダークライに捨てられたくない。ダークライと一緒にいたいということに……

私は色々な人に会う。そして学ぶ。真人間とはなんなのか。正しいポケモンとの関係性とはなんなのか……だけど、まだ答えは出ない。

ねえ……旅が終わる頃には真人間になってダークライの大切な人になれるかな？

* * *

「……ダークライ。どこなの？」

あらから何時間経っただろうか。私は力なく呟く。ダークライと一緒にいたい。私にはダークライが必要だ。まだ旅は途中なんだよ。私にはダークライが必要なんだよ……ダークライがいないと……

無音の部屋、なにもない部屋。無力な私。ねえどうして私がこんな目に遭わないとおいけないの？ やっぱり私が歪んでたから？

でも歪んでることのなにが悪いの？ そもそも正しいってどういうことなの？

なんで私は悪なの？ ていうかもうどうでもいい！ 私はダークライといたい！ まだダークライと旅をしたい！ ねえ……だれか………助けて！

その時だった。目の前の扉が壊された。白いロングコートの男性がグソクムシャを連れてコツンコツンとこちらに歩いてくる。どうして彼が……

「悪い。少し遅れた」

「ノエル！ どうしてここに！」

「決まってるだろ。ナナを助けにきた」

37話 VSゴウー団

ノエルは私に近づいて縄を切る。それで私は自由の身になる。手足も動く。しかしポケモンはいない。完全に戦力外。でも出来ることはあるはずだ。

「……ナナ。これは」

「モンスターボール。中身はメアのニンフィアだ。お守り代わりに持たせてくれた」

ありがとう。メア。これで私も戦える。たしかメアのニンフィアはハイパーボイスを使えたはず。基本的にはそれを軸に戦う。そして接近されたドレインキッズで勝負を仕掛ければいい。それだけ把握してれば充分だ。

「……ノエル。ここはどこなの？」

「飛行船の中だ。国際警察のブルールさんとジムリーダーのキンランさん、それにメグ先生とテレポートを使って四人で潜入した。それとナナは戦えるか？ 無理そうなら戻すが……」

「戦えるわよ。そういうえば相手は誰なの？」

「ゴウー団だ。もちろん使ってくるのはダークポケモン」

「なるほど……厄介ね。それでどうする？ 私としては今すぐにダークライを取り返したいわ」

「それならダークライのボールを探そう。それと今回の目的は二つ。ナナの奪還……それとゴウー団の幹部を捉える。つまり制圧戦も兼ねている」

制圧戦か。これをチャンスとばかりにゴウー団を完全に壊滅させるつもりね。四天王とジムリーダー。面子としては充分。だけど逃げられる可能性はもちろんある。こちらがテレポートで移動したように相手もテレポートで逃げられる。そうなるなら『くろいまなざし』を覚えたポケモンがほしいところだけど……

「ただ戦闘は避けるぞ。それは大人に任せよう。俺達はナナのボールを隠れて探す」

「分かったわ」

「行くぞ」

ノエルが歩くと同時に私もノエルの後ろにつく。物陰に隠れながら散策する。辺りは慌ただしい雰囲気だ。サイレンがガンガンに鳴って頭が割れそうになる。これはキンランさん達が攻め込んでいるからだろう。そんな時だった。

「バチュ」

私の足元にバチュルが現れる。普通のバチュルだ。話には聞いていたが随分と小さい。どのくらい小さいかと言うと私の小指に乗るくらい……ポケモンだから戦えるだろうがバチュルが戦うところはイメージが出来ない。そんなバチュルはまるでついてこいと言いたげに歩き始める。このバチュルは一体……

「キンランさんのバチュルだ。恐らく場所が分かったから案内するつもりだろう」

「なるほど……ジムリーダーのポケモンってことは戦力に数えてもいいのかしら？」

「いいと思うぞ。言うことを聞くかどうか分からんが」

それはそうだ。バチュルに頼むのは本当に危ない時だけ。基本的にはメアのニンフィアで済ましたいところ。しかし、そんな簡単にいくとは思えない。相手はゴウー団。しかも今回は前の襲撃と違って敵の本拠地に取り込む形になっている。

そんなことを考えてると目の前に赤と白の色を合わせ持つ戦闘機のようなポケモンが吹き飛んできた。ノエルが合図する。これは敵だと。

「グソクムシャ！　であいがしら！」

「ニンフィア！　ハイパーボイスをお願い！」

二つの攻撃。そのポケモンは意図も容易く避ける。しかし避けた時の行動が隙になった。カプ・コケコが目の前に現れて、そのポケモンに電撃を喰らわせる。しかし、そのポケモンは結界のようなものを作り、攻撃を防ぐ。そして透明になりこの場から消える。

「ノエル！　あのポケモン分かる？」

「恐らくラティアスだ！　伝説のポケモンで……」

「カップ・コケコ！ ナナの後ろにワイルドボルト！」

キンランさんがやってきてカップ・コケコに命じて私の方にカップ・コケコを飛ばしてくる。私は慌ててしゃがむ。するとカップ・コケコはなにかにぶつかる。そこから先程のラティアスというポケモンが現れる。

「ここは私に任せていきなさい！ ラティアスクラスのポケモンが相手だと邪魔よ！」

「分かりました！」

「気を付けて。このラティアスは幹部のポケモンよ！ そして見ての通りダークポケモンになってない。ダークになってないのに命令を聞くということは伝説のポケモンに認められるだけの強者よ！」

それから軽い爆発が起こる。カップ・コケコとラティアスの激しいぶつかり合いだ。ここにいるのは危険だ。私達は走ってその場を後にする。

「……ラティアスは光を屈折させて姿を消すポケモンだ」

「だから、あの時に消えたのね。しかしどうしてダークポケモンにしないのかしら？」

「弱くなるからだろうな。ダークポケモンは身体能力として上がるが言うことを聞かなくなる。だから基本的には強いトレーナーが育てたポケモンには劣るんだ」

「なるほど……もしもそれを理解した上で敢えてダークポケモンにしてないなら厄介ね」

ラティアス。聞くまで名前すら分からなかった。もしもキンランさんが来なければ透明化に対応出来ず死んでいた。ここにきて知識不足が響いてきた。帰ったら少しだけ勉強しないと。しかし再びラティアスと同レベルのポケモンが出たらどう対処すればいいのか……

「ナナ！ あの部屋だ！」

そんなことを考えながら走っていると、ある部屋に辿り着いた。そして部屋の中には私を拉致した例の女がいた。

「私のラティアスからよく逃げられたね。潜入者」

「ダークライを返して！」

「嫌よ。ラティオス。やっっておしまい」

ボールの中から今度は青と白の戦闘機のようなポケモンが出てくる。ラティオスの色違いのようなポケモンだ。最悪だ……まだいたなんて……

「ラティオスとラティアス。どちらも高額を叩いて買った『むげんのチケツト』で行った南の孤島という場所で捕まえた正真正銘の私のポケモンよ」

「なるほど。あくまでラティ兄弟に関しては非合法なことはしてないと」

「そうよ。さあラティオス。シャドーボール！」

「ラティー！」

こちらにダイレクトに技が飛んでくる。しかしノエルのグソクムシャが素早く動き、私達を庇う。そしてノエルの指示を動くことなく反撃に移行。だがラティオスは素早く、簡単にグソクムシャの攻撃を躲す。それと同時に私はニンフィアに命じて行動をさせる。ニンフィアは領いて私の指示通りに動き出した。

「見事ね」

「……ラティオスは争いを好まないポケモンだ。それをまさかここまです好戦的な性格に出来るとはな」

「争いを好むラティオスがいても不思議じゃないでしょう。人間にも色々な考え方を持つポケモンがいるのと同じよ。それとも争いを好むラティオスはラティオスに在らずと言いたいわけ？ だとしたら不快ね」

「いいや、本来は争いを好まないポケモンをここまで好戦的に育てたことに素直に感服したんだよ。でも話を聞く限りだとラティオスは元々そういう性格みたいだけだな！」

このラティオス。なついている。それに相当な信頼関係もある。ゴウー団と言えどトレーナーとしては真つ当な強者ということか……

しかし、それにも関わらず人のポケモンを平気で盗る。ポケモンと切り離されることがどんなに辛いことか理解した上で平然と行える。

恐らく彼女は『自分に関係なければなんでもいい』と思ってる。それが彼女の悪の部分。

「ああ……思い出した。どこかで見たことあるような気はしてた」「なにかしら?」

「お前。二コロノクス社の社長だろ。どうしてこんな大物がここにいるんだよ」

「何故か? 私を捕まえて吐かせればいいじゃない」

二コロノクス社。エネルギー関係の研究をしている大企業だ。たしか最近に長女が会社を受け継いだと聞いたことがある。本来なら次男が受け継ぐ予定だったが、あまりに馬鹿だったからとか……あれ? そういえば?

「そつちの嬢ちゃんは私のことを知ってるはずよ。だって貴方は私の弟をシノノカップで倒してるもの」

「……ムナナの捨てたトレーナーのお姉さんですか」

「正解。もつともあそこまで失態を晒されると、私も恥ずかしいし、なによりあんなのが弟だと思われたくないから秘密裏に処理しちやつたけど」

ああ。だからあれから見かけなかったのか。少しだけ納得した。ぶつちやけどうでもいい。それよりも今はどうやって彼女を倒すか。弟の方とは違って相当な強さだ……

「……それはそうとそちらの男の子は誰に連絡したのかしら?」

「メグ先生。この地方の四天王と言えば分かるか?」

「そう……楽しみだわ。私と四天王。どっちが強いのかしら!」

次の瞬間にグソクムシャが吹き飛ばされる。グソクムシャは戦闘不能。ノエルもすぐにボールに戻す。やっぱり力の差は歴然か……

「そして、あなた達も終わりよ。でもチャンスはあげる。ポケモンを全て捧げてゴウー団に入り、私の部下になる。そしたら見逃してあげる」

「断る」

「残念だわ」

ラティオスがシャドーボールをこちらに撃とうとする。それと同

時に私の元にニンファイアがやってきて私を庇うように覆いかぶさる。そしてニンファイアはボールを咥えていた。私はそれを受け取り、夢中で投げて、中のポケモンに指示を飛ばす。

「ダークライ！ あくのはどうで迎え撃って！」

「なんですって！」

助かった。グソクムシヤと会話で気を引く。その間にニンファイアがボールを『ほしがる』を使って入手した。ほしがるは相手の道具を自分の道具にする技。それを使って奪い返したのだ。全てが上手くいって助かった。

「ラティオス！ すぐにトリックで取り返して！」

しかしラティオスは動けない。まるで痺れたかのようだ。よく見るとラティオスの首元にバチユルがいた。バチユルのでんじはでラティオスを麻痺にしたのか！

「ナナ！ 逃げるぞ！」

「待って！ ムンナとスピアーが……！」

「これだろ？」

驚くことにノエルの手には私のボールがあった。いつの間に！

「モシッ」

「俺のヒトモシのトリックで返してもらった。もう滞在する理由はないだろ」

「ありがとう！」

「気にするな。俺達は仲間だろ！」

私達はそのまま走って部屋を後にする。ラティオスはバチユルが抑えている。ここは撤退して逃げるべきだ。ゴウー団の相手は大人たちに任せるべきだ。

「やつほー二人とも大丈夫？」

「メグさん！ 敵は二口ロノクス社の社長でラティオスを使います！」

「分かった！ とりあえずレポートで飛ばすよ！ あとは任せよう！」

そして私達は瞬く間にシノノシティに戻された。無事にポケモンを取り返して帰還に成功したのだった。

38話 暴走

現在はシノタウンのポケモンセンター近くにある広場いる。ポケモンセンターの中はボロボロだが、既に落ち着いたのか復旧作業中だった。広場にいるのは単純に襲われたポケモンの治療中で中にスペースがないからだ。それから僕は自分の体を見る。いつも通りの黒い手。なんの違和感もないダークライの体だ。ゴウー団に拉致された時、もちろん僕もボールから出ようとはした。しかし謎の力で内部からボールが開かなかった。恐らくそういう技術もあるのだろう。そしてノエルはグソクムシャを回復させていつでも戦えるように準備をしていた。

「メア。ニンフィア貸してくれてありがとう」

「私のニンフィア。役に立った？」

「ええ。とつても」

ナナはニンフィアのボールをメアに戻す。そして近くにはボロボロのルンパッパとウルガモス。それにボルノも疲れ果てている。恐らく凄い大惨事だったのだろう。

「……しかしキンランさんとメグ先生はまだ戻らないのか」

「ラティ兄弟が相手よ……簡単に勝てるとは思えない」

「そうだな」

しかし奴らは僕を捕まえてどうするつもりだったんだ？

そんな時だった。ドシンと大きな音が響いた。まるでジェット機が墜落したような音。

「逃がさないよ」

そして落ちたものを確認する。それはラティオスだった。

「……ラティオスに乗って追ってきたのか！」

「ナナ。あのラティオス。先程よりも随分と弱ってる」

ラティオスを見るとかなりのダメージを負っていた。それに先程のバチュルの麻痺も治っていない。これは勝機があるのか？

「しかし四天王は強いわ。ダークポケモンで足止めしながらの逃亡がやっと。テレポートをやる隙も与えてくれないときた。でもテレ

ポートに警戒して物理的な方法で逃げるのは想像してなかったみたい。あれかな。想像力が足りないよってやつ？」

「ナナ。逃げ場はない。戦うぞ」

「そうね！ ダークライ！ ダークホール！」

「ヒトモシはシャドーボール！ グソクムシヤはであいがしら！」

ノエルは二体のポケモンと同時に指示をした。僕は闇色の球を作り。そこからマシンガンのようにダークホールを飛ばす。しかしラティオスはそれを華麗に避ける。またヒトモシのシャドーボールは同じくシャドーボールで相殺。グソクムシヤのであいがしらは膜のようなバリアを出して防ぐ。

「弱い！ 弱い！ 弱い！ ラティオス！ りゅうせいぐん！」

空から大量の隕石が降ってくる。これはマズい！ 僕はナナに覆いかぶさり、その身でりゅうせいぐんを受ける。空から落ちる隕石は熱を帯びていて当たると体中が焼けるように痛い。りゅうせいぐんは辺りに一帯に降り、落ちた地点にクレーターを作る。建物は壊れ、しばらくしたら辺りは焼け野原になっていた。高威力で広範囲の技。グソクムシヤも倒れ、それどころかノエルやメアすらボロボロだ。幸いにも直撃は免れたようだが、無傷とはいかず意識はなさそうだ。

「ナナ！」

「ダークライ……私は大丈夫……よ」

僕はナナに覆いかぶさり守った。しかし庇われたと言えど至近距離で隕石が当たって無傷のわけがない！ 直撃はしなくとも隕石には熱もあるし、衝撃波もある。それこそ近くにいたら火傷するくらいの。そしてナナがガクリと意識を失う！ こいつ！

「クソガキが手こずらせてくれたわね」

ラティオス使いの女がこちらに近づいてくる。この女がナナに危害を加えた。そう思うと体の奥から熱いナニカが走り始めた。こいつだけは許さない。手を振るう。ゴガガガという音とも地面が抉れ、ラティオスが吹き飛ぶ。

「なにー！」

「ユルサナイ……」

体中から力が湧いてくる。今ならなんでも出来る。手始めに女。破壊してやろうか。破壊。そうだ。破壊だ。全てを壊す。目に入るもの全てだ。嫌い。憎い。だから壊したい……

「ああ……これがボスの言っていた現象ね。出来れば捕獲したいけど、時間はないわね。ラテイオス逃げるわよ」

ラテイオスに乗って女が飛んでいく。すぐに追おうとするが体に電撃が走り、動けなくなる。誰だ？ 何故？ 邪魔をする！

「……恐らくダークライの体内にある『やみのエネルギー』が暴走しているのね」

「キエロー！」

邪魔をした女！ ああ許せない！ 憎い！ 壊したい！

「……ポケモンレンジャーでもいたら落ち着かせられるのだけど、そんなに美味しい話もないわよね。これは困ったわ……とりあえず倒すしかないわね」

僕は女に手を振るう。再び地面を抉る闇のビームを飛ばすが、女はカップ・コケコに抱き抱えられて上空に逃げていた。

「ピカチュウ。お願い！」

「ピカッ！（うん！）」

ピカチュウ。そう呼ばれたポケモンが空から降ってくる。どこかで見えた気がするポケモン。しかし思い出せない。まあいい！ そんなポケモンなど一捻りだ！

「ピカチュウ。ボルテッカー」

その時だった。腹に凄まじい痛みが走る。力が一気にぬけていく。なにか起きた！ まったく目で追えなかった、なにをした！

「そのままアイアンテール」

頭が叩かれる。その一撃でドシンと体が倒される。起きようと思うが体に力が入らない。力がどんどん抜けていく……ああ……ああああああ！

「よく勘違いされるのだけど私の手持ちで一番強いのはカップ・コケコじゃなくてピカチュウなのよね。それじゃあ終わりにしましょう」

「ピカ？（あれやるの？）」

「ええ」

女の腕とピカチュウが光り始める。一体なにをする気だ！

「ゼンリョクで勝負を決めるわよ。ピカチュウ！ 1000まんボルト！」

最後に見たのは七色の電撃。それだけだった。僕の記憶はそこで途絶えていた。

* * *

「ダークライー！」

目を覚ますと、どこかの部屋だった。そしてナナが僕に抱きつく。なにがあったんだろうか。そうだ。たしかラティオスのりゅうせいぐんで襲われて……あれ？

「今回はダークライの持つ『やみのエネルギー』の暴走。基本的にダークライというポケモンはやみのエネルギーを放出して戦う。例えばダークホールなんかが良い例ね」

「それで大丈夫なのですか？」

「感情が高ぶって暴走しただけだから問題はないと思うわ。ただ姿の変貌もあった。もしかしたら今の姿がダークライの本来の姿なのかもしれない。もつともダークライ自体が珍しくて、研究中のポケモンだから断定は出来ないけど。とりあえず暴走したメガシンカくらいに捉えておきなさい」

暴走と言われても記憶にない。でも凄く良い気分になって……

「……それより今回のゴウー団の襲撃。私とメグがいながら取り逃がすなんてどう協会に報告すればいいのよ……」

「いやあラティオスとラティアスが想像以上に強かったんだから仕方ないね」

「ていうか私のバチユルが麻痺まで追い込んで手負いにしたんだからきちんと仕留めなさいよー！」

「ちやんとくろいまなざしでレポート封じたよ。そしたらまさか飛行船から飛び降りて逃げ出すなんてメグも予想外。だから代わりにゴウー団の下っ端を全て一人で仕留めたじゃん」

「はあ……それよりも問題は同時刻に起こったメラオ大監獄の襲撃

よ。それにより前に捉えた幹部が逃亡。そして二口ロクス社のマリア社長が幹部の一人だと判明するも証拠がないため逮捕は不可。最悪この上ないわよ……せめて私達でマリアを現行犯で捕縛出来れば話は違っただけだ……」

「でもマリアは相当強かったね。ボスがそれ以上に強力なトレーナーだとしたらなんかしら対策を立てない」と

メグさんとキンランさんの言い争いで色々な情報が飛び交う。また雲行きが怪しくなってきたな。まだゴウー団の脅威は残っているということだろう。しかし勢力が落ちたと言えど、あの規模つて全盛期はただけやばかったんだよ……

それにしてもテレポートの技が強すぎる。あれにより今回みたいな奇襲から逃亡まで全て可能にしている。テレポートがある以上は常に警戒しないといけないことになる。

「まあやられっぱなしというのも癪だし、私達もそろそろ攻め込みたいよね」

「そうね。でも奴らの狙いはダーククライ。つまりダーククライがいるところに彼らが来る。つまり裏を返せば私達がナナと常に連絡を取れる状態にして、ナナから連絡を受けたらテレポートで移動して、そこから攻めればいいんじゃないかしら」

「なるほど。そういうわけでナナちゃんはあとで私とキンランと絶対に連絡先を交換してね」

「はい……」

ていうかジムリーダーじゃなくてジュンサーさんや国際警察が動けよ。なんどこんな事態になってるんだよ。マジで。もしかして無能なのか？

「ダーククライ。基本的にジュンサーさんはエリートトレーナーくらいの戦闘能力がないわよ」

「エ？？」

「ジュンサーさんが通報を受ける。小物ならその場で対応。ゴウー団みたいな場合は近くのジムリーダーや四天王、ベテラントレーナーに連絡して対処を求める。ちなみに国際警察なら相応の強さはあるけ

ど、あれは忙しいから対応してる暇なんてないでしょうね」

いつも通りのナナからの補足説明。まあ納得できたようなできないような……

「ていうか連絡は取れない。なにをしてるか内情が掴めない国際警察が一番の問題なのよ。まあ実績があるから強く言えないし、仕事をしてるのは分かってるけど……」

キンランさんがぼやくように言う。国際警察って恐らく地球でいうところのFBIみたいなものなんだろうな。

「そういえば、貴方の友達のボルノ君。国際警察になったみたいでけど、どこに行くって言うってた?」

「場所までは知りませんがネットの掲示板『ワザップ』に色違いボルケニオンの目撃情報があるから調査に行くとか……」

「色違いボルケニオんねえ……絶対にデマの気がするわ」

ボルノはこの街から旅立ったのか。ていうかあれからどのくらいの時が経ったのだろうか。そこまで経ってはいないと思うが……

「ダークライ。あれから数時間も経ってないから安心していいわよ」

そんなもんか。しかし、そろそろ旅の方針を決めないとな。これからどうするのか。なにをするのか決めなければ……

「それとキンランさん」

「なに?」

「明日、ジム戦をお願いできないでしょうか?」

「いいわよ」

そんなことを僕が考えてる中でナナは既に今後の方針を決めていた。

39話 強くなりたい

「改めて聞いわ。挑戦者ナナ。ジムバッジは二つで間違いないかしら？」

「はい！」

「三つ目のジムになるのね。規約に沿って私は一体のポケモンしか使わないわ」

ジムの規約によりジムリーダーは挑戦者のバッジ数に応じて使うポケモンを変えなければならない。一つ以下の場合には育て始めて半年以下のポケモンを二体。二つの場合は事前にジム協会に申請した少し強力なポケモンを一匹。そして六つ以下はジムリーダーの各自の判断に任せて適切なポケモンを使う。そして七つ集めたトレーナーが挑戦者としてやってきた時にはジムリーダーは一切の手加減をせず、本気で戦う。そんな感じの内容だ。

ジムの一番の難関。それは三つ目と言っても過言ではない。何故なら圧倒的な力量差があるポケモンを数や機転で倒せるのかどうかを試すものなのだから……

「それじゃあ行くわよ。シビルドン」

「お願い！ ムンナ！」

「ンナツ（任せろ）」

キンランさんはシビルドンという電気ウナギみたいなポケモンを出す。このポケモンは見たことがある。ナナのお兄さんが使ってたポケモンだ。それに対してナナはムンナ。果たしてどう立ち回るのか……

「ムンナ！ お……」

「でんじほう」

一瞬だった。電気を帯びた球が飛んできて、ムンナを弾いたのだ。ムンナはなんとか立ち上がるが、体が痺れているのか思うように動けないでいる。

「あなたがシノノカップでやった速攻術。同じことをしただけよ」

同じだ。僕はあくのはどうで他のトレーナーを瞬殺していた。そ

れと同じことをキンランさんはやっているのだ。まさかやる側からやられる側になるとは……

「ムンナ！ まだやれる？」

「ンナ……（ああ……）」

「もう一度でんじほう」

そんなやり取りをしてる間に再び飛んでくる。ムンナは避けようとするが体が痺れて動けない。呆気なく当たり、一撃で戦闘不能になる。まるで砲台だ。あんなのどうやって攻略すればいい……いや、違う。攻撃方法が遠距離に変わっただけでメガルカリオの時と同じなんだ……

「まだやるわよね？」

「ええ……ありがとう。ムンナ」

ナナはムンナをボールに戻す。あの時と同じだ。このままじゃメガルカリオの時と同じだ。それならどう対応する？ それを考えなければ……

「スピアー！ お願い！」

「スピッツ！（お任せを！）」

「そちらからどうぞ！」

「一撃で決めるわよ！ メガホーン！」

スピアーが特攻する。それに対してシビルドンは尻尾を振るい、スピアーを叩いた。幸いにも大きなダメージはないようでスピアーはすぐに起き上がる。

「無駄よ。無駄なのよ」

「……もう一度メガホーン！」

「でんじほう」

シビルドンが電気で出来た球体をスピアーに飛ばす。スピアーはそれを避けてシビルドンに近づくが、球体は転回してスピアーを背後から叩いた。明らかに物理法則に反した動き。そんなのありかよ！

「スピアーー！」

「私は一言もでんじほうが一度避けたら終わりなんて言っていないわ」

スピアーは戦闘不能だった。ナナは「ありがとう」と一言だけ呟い

てスピアーをボールに戻す。そして無言で僕を出した。さて、どう攻略するか。

「ダークライ。ダークホールを使う時のやみのちからを意識しなさい」

「……なんですか?」

「折角だから稽古してあげるわ。また暴走されたら面倒だし」

ナナが下唇を噛む。なにかを言おうとするがグツと堪える。そして別の言葉を吐いた。それは驚くべきことだった。

「……よろしくお願いします」

「随分と素直ね」

「ゴウー団に襲われて私は強くないといけないと思っただんです。私のポケモンを守るためにも。だから私は……」

「そこまででいいわ。とりあえずダークホールを撃つイメージでやみのエネルギーを貯めなさい」

「ダークライ。やってみて」

言われた通りにする。ダークホールの要領で体内のエネルギーを流す。ダークホールの時はそれを放出していた。しかし今は違う。体内に抑え込むんだ。段々と頭がボォーとしてくる。視界がぼやける。体の中から破壊衝動が湧く。全てを壊したい……!」

「今よ! 外に放出!」

キンランさんが叫ぶ。言われた通りに一点に集めて手からエネルギーを放出する。それは今までに体験したことのないような威力を誇り、フィールドを抉った。シビルドンはそれを飛んで回避。誰にも当たらない。しかしナナは威力の高さに唾然とする。それから僕の手に激しい痛みと脱力感に襲われる。ダメだ……体が動かない……

「キンランさん……今のは?」

「あくのはどうよ」

「……明らかにいつものと威力が桁違いです!」

「デルビルとヘルガーのあくのはどうが同じ威力? 違うでしょ。伝説や幻のポケモンのあくのはどうなら本来はこのくらいの威力があるはずよ。簡単な話。今までのダークライのあくのはどうが未完

成だった。それだけの話。驚くことじゃないわ」

「……なる……ほど」

「今から私はダークライにとどめをさす。ナナはどうする?」

「降参します」

そうしてジム戦は終わった。あまりに呆気なく負けた。最後には稽古になるというあまりに酷い負け方だ。でも何故か清々しい気分だった。ナナとキンランさんが握手をする。

それからナナが頭を下げた。そしてキンランさんをお願いする。

「キンランさん! お願いがあります!」

「なにかしら?」

「私にポケモンバトルを教えてください! 私はもっと強くなりたい! ダークライの力を引き出せるようになりたい!」

ナナはキンランさんに教えを乞いたのだ。キンランさんは少しだけ考える。そしてナナに一言だけ問いかける。

「ナナ。あなたはなんのために強くなりたいの?」

「自分を変えたいからです。強くなれば変われる……違う。変われば強くなれる。私は強くなりたいわけじゃありません。今の自分から変わりたい」

「……なるほど。いいわよ。でもハードだから覚悟してね」

そうしてナナの修行が本格的に始まるのだった。

4 修行して、その後 40話 新：旅の始まり

あれから三ヶ月という相当な時間が経った。今の時期は冬で雪が積もる。

ナナはキンランさんとの修行を先日終えた。そして次の街のアメコミタウンを目指してナナたちは林の中を歩いていった。

「メア。こんな律義に私の修行が終わるの待たなくても良かったのに」

「別に先を急ぐ旅じゃないし、いいんだよ。私も歌と踊りの腕を磨けたし」

三ヶ月。驚くことにメアはナナの修行が終わるのを待っていたのだ。この三ヶ月は色々なことがあった。まずゴウー団はあれから勢力を更に拡大した。今では全盛期並みの規模になっているとか。ちなみにチャンピオンはまだアローラ地方から帰ってきていない。

この三ヶ月で僕たちは相当強くなった。しかし一度もキンランさんに勝てなかった。最後の出発前にジム戦もしたが、勝てずに終わった。つまり現在もジムバッジの数は二つだ。

「……そういえば今日の新聞読んだ？」

「ええ。レジ系のポケモンが封鎖地域から逃亡して現在もデトワール地方を目的不明のまま放浪してるって話でしょ。今では立派な観光名物。ゲットしようと思っただけで返り討ちに遭うトレーナーは後知れず」

「ねー怖いよね」

「こっちの方は目撃情報がないから大丈夫よ」

「それよりも問題はポケモンリーグの開催が残り五ヶ月ということよ。つまり五ヶ月以内で残りのジムバッジを集める必要がある」

「分かってるよ。しかもアメコミタウンはジムバッジのない街ってというのが痛いよね」

「ルートの徒歩なら途中で嫌でもアメコミタウンに寄るのよ。そしてアメコミタウンに行ったら南西にある山を超えてデスステイを

目指す。そこで四つ目ね」

早く次のジム戦をやりたい。修行の成果を見せたい。

そんな気持の高ぶりが止まらない。

「あー待って！ ストップ！」

そんな時だった。ナナ達の近くをミネズミが走り抜ける。それを追う赤髪の男性とゴンベ。そしてナナ達を見かけると足を止めた。

「はあ……はあ……」

「あの、どうかしたんですか？」

メアが男性に声をかける。その男性はダウンコートをしっかりと着込んだ防寒対策万全という格好をした男性だった。

「実はミネズミに僕のスパイスを取られてしまっただけ！ 瓶に入れているから食べられはしないと思うが困るんです！ 可愛い旅の方！ お願いします！ 助けてください！」

「これのことね。ここら辺のミネズミはすぐに人の物を盗るから注意が必要なのよね」

ナナがスパイスを取り出す。男性は目を丸くする。ナナの傍にはムンナがドヤ顔をしている。やったことは簡単だ。ミネズミが見えると同時にナナは素早くムンナを出してトリックを使って取り返したのだ。ちなみにトリックは修行で覚えたものだ。

「おお！ ベリーグッド！ 素晴らしい腕前です！ 迅速な判断に適切な対応。なによりもそこに至るまでの速さ。あなた名前は？」

「ナナよ」

「ナナ！ 良い名前！ 私はベアルン。見習い料理人で一流の料理人を目指して旅をしています！」

「そう。まあ無事に取り返せたみたいで良かったわ。私達はもう行くわ」

「待ってください！ 僕に恩返しさせてください！ そうだ！ 折角だから僕の料理を召し上がりませんか？」

「……そうね。折角だからいただきましようか」

ナナとメアの目が変わった。実は我々の旅の食事、それは基本的なきのみ、もしくはカ〇リーメイトみたいなものなのだ。つまりまとも

な食事というのは街に着いた時にしかしないのだ。まともな食事を食べられる。それだけで彼女達の目を変えるには充分だった。

「それでは早速カレーにしましょう……使うのはこの鍋で……」

その時だった。目の前を再びミネズミが走り去っていく。奴らの手には鍋。ナナ達が状況を理解するまでに約五秒。そして状況を理解した時のナナ達の行動。それは一択。ミネズミを追うだった。既にムンナのトリックの範囲外で取り返すのは難しい。つまりやるとしたら物理的に倒すしかない。

「ナナ！ 私は右から責める！」

「分かったわ！ それじゃあ私は左から！ 挟み撃ちよ！ お願い！

ダークライ！」

ナナはムンナを抱き抱えて僕をボールから出した。そしてナナは僕に身を投げる。ナナをお姫様抱っこして僕はミネズミを追う。キラランさんとの修行。それで大きく変わったのは速さだ。前とは比べ物にならないくらい速くなっている。具体的に言うならメガルカリオの動きに対応出来るようになったくらいだ。

「ミネ？（え？）」

そしてミネズミに追いつく。逃げようとした先にはメアのウルガモスがいて完全な挟み撃ちで逃げ場はない。仕方なくミネズミは木を登り、上へと逃げていく。しかし遅い。迷わずダークホールを使つてミネズミを眠らせる。深い眠りに落ちたミネズミは木から落下してドシンと音が響く。そして悪夢にうなされはじめる。

特に悪意はないのだが、こればかりは仕方ない。そういう体質なのだから。どうか恨まないでくれると幸いである。

「よしっ。無事に取り返したし、戻りましょうか」

「……ねえナナ。そういえばどうやって戻るの？」

「そんなの来た道をそのまま……」

そこで気付く。辺り一面が木々で来た道が分からないことに。これは困った。完全に迷子だ。そういえばこの森は迷子の名所として有名だったな。

「ま、まあコンパスが……」

コンパスを取り出すが磁気不良。そういえば木々が磁気を発して
いてコンパスが使い物にならないんだよな。ここは……

「完全にダメだね。これは」

「脱出だけならメアのウルガモスに乗って飛んで出たらいい。しかし
先程の料理人と合流となると困難……完全に困ったわ」

僕はミネズミを軽く叩く。ミネズミが目を覚ます。

「なんすつか?」

「済まぬ。先程の料理人のところに案内をしてくれぬか?」

「うーん。あつしらも森で迷子になって数年。旅人から食べ物も頂戴
して、生き延びているのが現在つすからねえ……早い話すると知ら
ねえってやつです」

「そうか……ありがとう」

「それではあつしらはこれで!」

ミネズミとの対話を終える。ミネズミは森の奥深くへと去って
いく。収穫はなし。ナナに近づいて、そのことを身振り手振りで報告
する。

「ダークライ。ありがとう」

「それでどうする?」

「ていうか私達が探すんじゃないかと、向こうに私達を探してもらえば
?」

「それが得策か……それじゃあ、このメア! 歌います! 野外ゲリ
ラライブだよ!」

メアがルンパツパを出す。ルンパツパがギターを奏でる。そして
メアはマイクを持って歌い始める。歌は森中に響き渡り、気付いたら
様々なポケモンが集まってきていた。色々な野生ポケモンがメアの
歌に魅入られていく。

「……おお! 素晴らしい歌に釣られてくれれば貴方達でしたか!」

「そうだよ。あとこれが鍋ね」

「おお! ありがとうございます! これで早速……」

メアが歌をやめて鍋を手渡そうとした時だった。足元がグラツと
揺れる。僕はなにかがあつた時にすぐに対応出来るようにナナを抱

き抱えて、その場から少し離れる。

「なんですか!」

「あー……」

「ナナ?」

「簡単な話よ……私達は恐らくドダイトスの背中でのんびりしてたのよ。そしてドダイトスもメアの歌に魅入られていて、その歌が止まったことで疑問に思っただけで動き始めた」

「おお……まじかよ。今までドダイトスの背中にいたのかよ。そして気付くと地面がメアと料理人を攫って浮き始めていた。赤色の目がこちらをぎよろりと見る。少し大きなドダイトスだ。さて、どうするか……」

「眠らせてもいいけど、悪夢でうなされてジタバタされると面倒よね」

「ソウダナ」

「メア。ここから料理人を連れて降りれる?」

「ちよつと確約はできないかなー。私としてはドダイトスを刺激しないでくれると助かるかな」

「分かったわ。ダークライ。お願いするわ」

僕はナナを降ろして動く。そのままドダイトスに近づき背中から二人を抱えて、退避する。ドダイトスがギロリとこちらをみる。

「ドダアアアアアア (ポケモンバトルか! やろうせ)」

「モウ……オワツテル」

ドダイトスは動こうとするが上手く身動きが出来ない。何故なら足元が凍っているから。馬鹿力で動かそうとするが、まだ動けない。それほどまでに氷はしっかりとドダイトスを固定している。

「ダークライ。ナイスれいとうビームよ」

「ウム……」

「さあドダイトスとポケモンバトルといきましょうか!」

抱えた二人を降ろすと同時に氷はバキンと碎かれる。これが戦闘開始の合図か! 面白い!

「下からハードプラントが来るわよ」

足元からは木の根っこが生える。それは生き物のように意志を

もって動く。こちらを叩き落とさんとばかりに。少し前なら避けるのが精一杯だっただろうな。

「思い出しました！ このドダイトスはこの主です！ とんでもなく強いのです！ いますぐ逃げましょう！ 危険です！」

料理人のベアルンが叫ぶ。

「……だそうよ。ダーククライ」

相手にとって不測なし。少しは準備運動になると良いな。

「三十秒……いや、二十秒で片付けなさい」

ちよつと厳しいかもな。迫りくるハードプラントを避けながらドダイトスに接近する。根はこちらを掴もうと動く。だから動きは分かりやすい。つまり簡単に見切れる。

「あのポケモンなんて速さなんですか！」

「私のダーククライは最強なのよ」

そして闇を放出して爪を作る。それでドダイトスの足を切り裂く。技名はシャドークロウ。近接戦では重宝する。今までは遠距離攻撃のみだった。つまり近づかれると不利になる。その解決案として生み出された技。それにより戦闘で対処できる自体が大幅に増えた。

「あと六秒」

ドダイトスは最後に一撃を浴びせようと前足をあげた。あの構えはマズい。地震をやるつもりだ。ここだとナナ達にも被害が出る。だけど大丈夫。あの距離なら間に合う。

影から出るエネルギーを一点に凝縮。そして球体を作り、一気に放つ。技名はシャドーボール。あくのはどうは少し撃つまでに時間がかかる。それに対してシャドーボールは撃つまでに殆ど時間を必要としない。つまり今回はこっちの方が適している。黒い影の塊はドダイトスの腹を打ち抜き、軽く吹き飛ばした。それによりドダイトスは戦闘不能。

「な、なんて強さ……主を赤子を相手にするようになんて……」

「ダーククライ。二秒オーバーよ」

「ウツ……」

「でもよくやったわ。ドダイトスに必要なダメージも与えていな

い。なんの問題もなしよ」

ナナは僕の頭を撫でる。そしてボールに戻した。久々の戦闘だが上手く動けた。だけどまだ遅い。特にシャドーボールを放つまでに時間がかかる。もっと反射的に撃てるようにしなければ。それにシャドークローの威力も甘い。ドダイトスを倒しきれなかった。そこが反省点だな。

「いやあナナは随分と強くなったね。私はビックリだよ」

「まだよ。今のままじゃゴウー団の幹部にも勝てないわ」

「そうだね。だってまだキンランさんに遠く及ばないもんね」

メアは遠慮することなくナナにグサリと刺さる言葉を言う。しかしナナは表情には出さず、そのままベアルンに近づく。

「それじゃあ鍋も取り返したことだし約束通り料理をご馳走してくれるかしら？　もうお腹もペコペコだわ」

「もちろんですー！」

そしてようやく食事でありつける。

41話 目撃情報

「うーん。美味しい！」

約束通り僕たちはカレーをご馳走になっていた。場所は謎の一室。ツリーハウスとか車の中とかいう話ではない。言葉通りの謎の部屋。見た目はアンティーク調のカフェ。果たしてここはどこなのだろうか。

「しかし驚いたわ……まさかテレポートを使うブーバーがいるなんて」

いや、ナナ。そこじゃなくて別の場所に驚けよ。たしかにテレポートを使うブーバーなんて始めて見たし、まさか使えるとも思わなかったけどさ……

「私の大切な相棒です。バトルは出来ませんが」

「そうなの？」

「はい。そもそも私はバトルをするのは好きじゃないんですよ。見るのは好きですが……」

「ふーん」

「基本的に私は料理人。ポケモンと一緒に料理をするのが好きなので。火起こしのブーバーに冷却役のバニプッチ、そして試食役のゴンベ。私は一流の料理人になって店を持つのが夢なのです」

ナナはカレーを平らげてジュースを一口だけ飲んで一拍置いて喋る。

「ねえ一緒に旅をしない！」

僕は思わず吹き出しそうになる。ナナは一体なにを！ まだ会って数時間しか経ってないぞ！ そんな人をいきなり旅のメンバーに加えるなんて……

「あなたの料理は美味しいわ！ もっと食べたいわ！ それにテレポートも気に入った！」

「テレポートが気に入った？」

「ここはどこか遠くにあるベアルンの家なのでしょう？ あなたは寝るときや料理をする時だけテレポートで家に帰っている。そうする

ことで旅の荷物を最低限にしているのでしょうか？」

ああ。そういうことか。ていうかテレポートにそんな使い道があるのか。旅の道具というのは想像以上に多い。寝袋に着替え、それに食料やランプに傷薬等の道具。とにかく多いのだ。その関係でナナは調理器具を断念していた。もつとというと雨が降った時なんて最悪だ。洞窟等の雨宿りを出来る場所を見つかるまでびしょ濡れになる。幸いにもナナが常に雲を見て、簡単な天気予測をして雨に降られる前に雨宿り場所に移動しているため濡れたことは殆どないが。

でもベアルンが加われれば、このような問題が全て解決するのだ。ぶっちゃけ旅としてはどうなんだと思うが、楽を出来る時はしたい。もつともテレポート用のポケモンを捕まえれば済む話でもあるがナナは何故か頑なに捕まえようとしない。彼女曰く、そのためだけにポケモンを捕まえるのは違う気がするとのこと。

「そうですよ。しかし最低限の調理器具は持ち歩いてますけどね。何故って？ 私は料理人だから！ もつともその結果としてミネズミに襲われ……」

「災難だったわね」

「しかしナナさんはどうしてテレポートポケモンも連れないで旅を？」

「歩いていくと想像以上に面白い発見がある。そして、それが成長に繋がるからよ。私は自分の目で見て肌で空気を感じたいの。でも重い荷物だけはもう勘弁よ！ せめて寝る時だけは暖かい部屋で寝たい……出来るなら手ぶら旅がしたい……」

「なるほど」

「だからベアルンと一緒に旅をしてほしいの！ 基本的に歩いて街を目指す。そして夜になったらここに移動して寝泊まり。起きたら昨日テレポートをした地点に戻って旅を再開する。重さから解放された最高の旅だわ！」

いや、もうケーシイとか捕まえろよ。まじでそうしろよ。そしたら全て叶うぞ。もしかしてこれが女心というやつだから分からないのか？ いいや、そんなはずはない。

「そうですね……たしかに私も目的もなく彷徨う旅人ではありません……しかしメリットが特にならないのですよね……」

「メリット？ 私が毎日歌うんじゃダメ？」

メア……さすがに無理だ。可愛い子の歌や踊りで釣られるのなんてオタクくらいだ。さすがにそれだけじゃ……

「おおおおおお！一緒に旅をします！」

「やった！」

いや、それで良いんかい！メアさんまじで凄いな！女の子の歌が聴きたいから旅をしますって危ない匂いしかないな。でも別に良いか。上手い飯が食べれるし。しかしメアさんと一緒に旅をしていてマジで良かった……ほんとにありがとうございます。

「ていうか今なんか歌ってくださいよ！」

「いいよ。ルンパツパ。音楽お願い」

「パツパ！（任せろ！）」

ルンパツパが歌い始める。そしてウルガモスが何故かカラフルな『あさのひざし』を使ってメアを照らす。ウルガモスよ……いつの間にそんな芸当を……

「それじゃあメア！歌います！」

「M・M・T！」

MMT？ベアルンがそんなことを言うが、なんだそれは……

しかしメアは気にせずウインクで返事するとステップを踏んで踊りながら可愛いソプラノ声で踊り始めた。その様子は僕でも目を奪われた。完璧な足裁きに一切の音程のズレがない歌。どこを取っても完璧だった。メアから目を離せない……

「……さて、これからどうするかルートの確認をしましょう」

ナナは横で地図と新聞を出して整理していく。ナナは主にレジ系の記事を重点的に調べていた。レジ系。それはレジアイス・レジスチル・レジロックの総称である。レジロックが封鎖地域で見つかったのは有名な話。それからレジアイス、レジスチルも見つかった。そして問題はそこからだ。なんと封鎖地域から逃げ出してデトワール地方を徘徊しているのだ。

相当な強さを誇るらしく、ナナも出来れば戦いたくはないといっている。そのためレジ系が目撃された付近には移動しないようにルートを組んでいる。

「……ん？」

「ドウシタ？」

「いや、この記事……もしかして……」

そこには緑色の五線譜のような髪がぼんやりと写っていた。ピンボケしていてハッキリとは分からない。なんでも写真は読者投稿らしく記事も小さい。文には未知のポケモンである可能性は高いということだけ書かれている。しかし読者投稿か……デマも多いからな。しかし、そのポケモンはなんなんだろうか？

「メア。ちよつと来て」

「なに？」

メアが歌をやめてナナの方に寄ってくる。それに少しだけガツクリするベアルン。そんなベアルンにメアは「ごめんね」と軽く謝っていた。そしてナナはメアに記事を見せる。

「これどう思う？」

「おおおおおおお！　ねえそれどこ！　どこよ！」

メアは興奮気味に喋る。一体なんなんだ。この写真がなんだと言うのだ……

「やっぱり私の見間違いじゃないわよね。これってどう見てもメロエツタの髪よね……」

「うん！　間違いなくメロエツタの髪だよ！　メロエツタ検定一級の私が言うんだから間違いはない！」

「メロエツタ検定なんてないでしょ……そして場所はシノノタウン付近の林ね」

「え！　つまりここじゃん！」

「落ち着きなさい。まだデマの可能性もあるのよ。こういう読者投稿ではメタモンに変身させて撮った悪質なフェイク写真も多い。だからこそ小さい記事になるわけで……」

「ねえ探そうよ！　メロエツタ探ししようよ！　私ね！　絶対にメロ

エツタをゲットするんだ！」

「こんな簡単に幻のポケモンが出るわけがないでしょ……」

「ダークライを持つてるナナがそれ言う？」

ナナはあからさまに目を逸らす。しかしメロエツタか。どんなポケモンだっただろうか。歌と踊りが得意なポケモンということは知っているが……

「あの……もしかして二人はそのポケモンを探してるの？」

「うん！」

「そのポケモンならこの林だよ。写真投稿したの僕だし……」

「え！」

おお！ まさかこんな身近に写真投稿者がいるとは。それは少しだけメロエツタの信憑性も上がってきたな。これは本格的にメロエツタ捕獲作戦を……

「ちよつとその話を詳しく教えて！」

「なんでもそのポケモンは誰か探してるようでしたよ。そして僕に気付くとすぐに体が透けていったので慌てて写真を撮って……」

透明化。そういういえば幻のポケモンは姿を消すポケモンが多いから見つけるのが難しいってキンランさんも言っていたな。たしか探す時は体温でどこにいるか判断するためサーモグラフィカメラが必須と言っていたな。そんな高価なものはないわよ……

「一日も早くアメコミタウンに行くわよ」

「え！ ナナのいじわる！」

「冷静になりなさい。相手は姿を消すポケモン。捕まえるなら、それなりの機材が必要になる。それにほとんどの人がデマと考える。まづ人が動くことはないわ」

「そっか……」

「それに幻のポケモンの強さも未知数。それなりに戦えるようにしてから行くべき。それに誰かを探しているような挙動をしていたのも気になるわ」

「たしかに！」

「もしかしたらメロエツタにもトレーナーがいるのかもしれない。そ

れも兼ねてアメコミタウンで情報収集するべきよ。少なくとも数日前に私達はシノノタウンにいて情報は入って来なかった。つまり情報の期待はできないわ」

「情報があるとしたらアメコミタウンか……」

「そうよ」

ナナが地図を広げてペンを出す。ベアルンに詳しい位置を聞いて丸を付ける。そうするとアメコミタウンに近い場所だった。そこからナナは簡単な考察をする。

「メロエツタは恐らくシノノタウンもしくはアメコミタウンの方を指してる」

「うん」

「そしてシノノタウンを指していた場合はすれ違う可能性がある。仮にアメコミタウンの方を向かってる場合は私達が追う形になる。そう考えると向かう方向は一択じゃないかしら？」

「なるほどー」

「というわけで私達はすれ違う可能性を考慮して徒歩でアメコミタウンを指す。異論はないかしら？」

「うんー」

「はい。僕もメロエツタというポケモンは見てみたいですね。なんかこういうのうてワクワクしますね」

幻のポケモン捕獲作戦。不思議と全員がワクワクしていた。メロエツタ。どんなポケモンなのだろうか。ゲット出来なかったとしても一度は見てみたい。

「それじゃあご飯も食べ終えたし行きましようか」

ブーバーのレポートで再び先程の場所へと戻る。先程と同じ林だ。そのどこかにメロエツタがいるかもしれない。僕は目を凝らして見る。

「……透明になってるとしても実態がないわけじゃない。歩けば足跡。草木に触れたらガサガサという音がする。それを見逃さないことね」

そしてメロエツタ搜索戦が開始した。

42話 ポケモン会談

林を歩く。耳を澄ませながら歩くが自分達の足音もしない。

「……メロエツタどこかなあ」

「簡単には出てこないわよ。伝説なもの」

「みなさん。慌てず気長に行きましょう」

しかしお喋りはこの上なく賑やかなくらいしている。手話で。まさかみんな手話を使ったなんて……頭の良いナナとメアはともかく料理人のベア alun ですら素っ気なくこなしている。どこで覚えたんだよ……

「……右後ろで物音がした」

ナナの手話でえ足を止めて、そつちを見る。十秒ほど見るがなにもし起こらない。聞き間違いかと思つたその時だった。茂みからリングマが飛び出す。それに対してナナは僕のボールを投げて外に出す。しかしリングマつて怖いな。大きさも成人男性と同じくらいあるし、個体によつてははかいこうせんというビームを出したりする。それだけなら良い。しかしリングマは熊だ。日本でも熊だけはヤバイ。登山とかでも熊にだけは気を付けろというくらいだ。その熊が場合によつてはビームを撃つ。考えただけで異常なんだよな。まず僕が地球でリングマに会つたら絶望して真っ先に逃げるね。戦おうだなんて思わない。

「ダークライ。ダークホール」

しかし今はポケモン。戦つたら勝つのは僕だ。小さな闇の玉を作り、リングマの眉間をそれでぶち抜く。見事なヘッドショット。リングマは倒れていびきをかいて眠り始める。しかしすぐに悪夢にうなされて呻く。可哀想だが僕の特性なんだ。諦めてくれ。

「さあ行きましょう」

ナナは手話で指示をする。全員が頷いて歩き始める。そして僕はボールへと戻された。僕がボールに戻ろうと同時に悪夢が終わったのか、リングマが少しだけ落ち着いた表情をみせる。改めて思うがポケモンの世界って怖いよな。ポケモンを持つてたとしてもリングマ

に勝てる保証はないし、負けたらどうなるか分からない。そんな世界だ。ほんとにとんでもないと思う。そもそも旅の初日に僕はスピアーにコテンパンにやられてるから笑えない。あの時はスピアーが追ってこなかったから良かったが、追ってきたら大変だった。

「……吾輩はバトルを嗜むのみ。トレーナーは襲わぬ」

「いや、そもそも人間サイズの蜂とか怖すぎなんだよ」

「そういうものか？」

「うん」

スピアーがボール越しに話しかけてくる。実はボールの中にいる時は近くのボールに入っているポケモンと会話出来るのだ。しかし近くと言っても相当近くないと無理。例えばメアがナナに抱きついてもメアのニンフィアやルンパツパとは会話出来ない。何故なら遠いから。意外と反応はシビアなのだ。

「ていうか俺の出番まだかよ」

「ムンナ。しばし待たれよ」

「俺もそろそろバトルしてえな」

「吾輩も同じである。というよりダークライが戦いすぎるのだ」

「……ナナに言ってくれ」

「俺は思うんだよな。ダークライの出番が多いのはダークホールという便利技があるからだ。基本的にダークホールを打てば勝負は終わる。つまり俺達もダークホールに匹敵する必殺技があればいいんじゃないかねえか？」

「一理ある。だがダークライの出番が多いのは遠距離攻撃が出来るからだと思うぞ。吾輩達は接近戦がメインなため、近づくまでに時間がかかるのだ。その結果として時短のためにダークライが選ばれる」

「俺もあくのはどう使えるぞ」

「……そういえばそうだったな」

そしてスピアーが黙る。まあたしかに最近僕の出番が多い。そもそもナナが基本的に僕を使い、搦め手が有効な相手やタイプ相性的に不利な相手にはムンナ。素早く接近戦を主流としてくる相手にはスピアーと使い分けているのだ。

「しかしムンナの言う通り吾輩達の出番の無い問題は想像以上に深刻であるぞ」

「ジム線で嫌でも出番はある。それに僕が戦う相手は基本的に弱い奴だ。それこそ危うい状況になることすらない。そんな相手と戦って楽しいか？」

「たしかにダーククライのいうことも一理あると思うぜ。でも、そろそろ体を動かしてえんだよなあ。その気持ち分かるか？」

「まあアメコミタウン着いたらポケセンでメアとの練習試合があるだろ」

「まじか……俺ウルガモス苦手なんだよな」

「僕もだ。むしのさざめきがキツイ」

「分かる。マジで分かる。しかも音の振動派で全体を攻撃するから避けるのがキツイ。だから距離を置くとぼうふうでフィールドを荒らしてくるんだよなあ……」

「吾輩も同じだ。あやつのほのおのまいがキツイ。避けれるが当たれば致命傷だ」

あれ？ やばくね？

僕は悪タイプでウルガモスの虫技に弱い。ムンナもエスパーだから同じ。そしてスピアーは虫で飛行技と炎技に弱い。全員がウルガモス苦手じゃねえか。

「でもムンナは良いだろう。ころがるで弱点を突けるんだから」

「ん？ あれ忘れたぞ。避けられること多いし、必要ないかなあと……」

待て！ お前の岩技がなくなったらガチでウルガモスに勝てなくなる！ 次のメアとの練習試合でどうやって戦うんだよ！ 下手したら三人まとめてウルガモスにやられてぼろ負けですとかもありえるぞ！

「そんな心配するなって。代わりにがんせきふうじを覚えたからよ」

「両方じゃダメなのか……」

「そろそろ頭が痛くなってきたからなあ……恐らく俺の技限界が八つなんだろ。無理して九個目を覚えてもいいが……これ以上は試

合中にど忘れしそうで怖いわ」

「なるほど……」

ちなみに僕は現在は十つの技を覚えている。まだ頭の痛くなる気配はない、やはり前世が人間のことが関係してたりするのだろうか……

「なんでみんなそんな多い？」

「そういうスピアーはどうなんだ？」

「恥ずかしながら六つ……」

「まあポケモンの覚えられる技は平均四つと言うし、気にするな」

平均四つか。それは全部のポケモンの平均だ。レベルの高い大会に行けば賢いポケモンが多く、そこだけで平均を取ったら八くらいになりましたというケースもある。

それに技を覚えるのも至難の業だ。技を覚えるには明確なイメージが必要になる。自分のどのような器官やエネルギーを使って生み出すのか。そして自分なら出来ると思うことが重要だ。幸いにもナナも知識があるため理屈の説明をしてくれるからイメージが明確なり、さらにキンランさんというプロもいたから実際に技を見たりすることも出来たが……裏を返せばそういう環境でもない限り技の習得というのは難しいのだ。

そうなると多くの技を覚えることが出来るが技を覚える機会がないから覚ええないという自分のスペックを持って余してる個体も少なくないのかもしれない。

「優秀なトレーナーになればなるほど技を教えるのが上手いからポケモンも覚える技が多くなる……」

「たしかにダークライの言う通りかもな。キンランさんのマルマインとか普通に十くらい使ってきたしな」

もつとも技を覚えていると言ってもバトルで使うのは多くて六つだろう。それは単純にナナが判断に迷うから。一瞬が勝負を分けるバトルでは考えてる時間が惜しい。そのため直感的に動きたい。だからナナの場合は事前に試合で使う技を四つくらいに絞っている。

例えば僕の場合はメインとなるダークホールとあくのはどうの二

つは確定。そこから相手のポケモンに合わせて有利な技を二つという感じだ。そしてシャドークローの指示は基本的でない。ナナ曰くシャドークローに関してはポツ拳の要領で自己判断で使えと言われている。

「まあ……」

そんな時だった。ナナの足が止まる。彼女の手には僕のボールが握られている。

「おいおい俺達とやる気か？」

「あなたポケモンハンターでしょ……ここになんの用？」

近くにはポケモンハンターがいるらしい。ムンナ達との会話に気を取られていてまったく気付かなかった。ポケモンハンターは罨や非合法な道具などを使用してポケモンを捕まえて売りさばく非合法な連中だ。基本的にこの世界ではポケモン以外でポケモンを弱らせるのは禁止とされている。もつとも襲われた時などの例外は存在するが……

よく言われているのは一般トレーナーはポケモンを捕まえてるのにポケモンハンターはどうしてダメなのかという問いかけがある。それは単純にモンスターボールを使わないからだ。そして悪質なハンターは人のポケモンも奪う。

「珍しいポケモンがいるようだから捕まえにきたのさ。だけど気が変わった。お前はナナだろ。シノノカップでダーククライを使ったトレーナー。お前のダーククライを貰い受ける！」

「お願い！ ダーククライ！」

ナナが僕のボールを投げる。それと同時に相手もボールを投げる。ポケモンに適うのはポケモンだけ。だから悪の組織だろうが重火器を使わずポケモンを使う。単純にポケモンの方が強いからだ。相手のポケモンはニドキングか……

「ナナ？ ドウスル？」

「あれは使うまでもないわよ。ダークホール！」

「ストーンエッジで壁を作れ！」

目の前に岩の壁を作られ、ダークホールが阻まれる。そして僕は地

中に潜り、ニドキングの背後を奪い、シャドークローで切り裂く。背中に一撃食らわして怯んだところに更に数回の連撃を浴びせる。

「なんだとー！」

「説明するほど優しくないわよ？」

ああ、お腹が空いたな。

修行中に知ったのだがダークライは実は体がすり抜けさせることが出来るのだ。もっとも問題は多くある。これをやると物凄く腹が減る。そしてナナはそれを応用して地面に僕を潜らせて背後に現れて奇襲させる技を身に付けさせた。

「ニドキングー！ 距離を……！」

「遅い……！」

ニドキングがドサツと倒れる。別にダークホールをしたわけじゃない。単純にシャドークローでダメージを受けすぎて戦闘不能になった。それだけのことだ。まだ主のドダイトスの方が強かったな。

「クソツッ！ ニドク……あれ？ ボールはどこだ！」

「ごめんね？ 奪っちゃった」

ハンターはナナの方を睨む。そしてナナが見覚えのないボールを床に転がす。近くではムンナがどや顔している。簡単なことだな。ムンナがトリックで相手のボールを物理的に奪ったのだ。反則も良いところの最悪の外道戦術。

「そんなこと許されると思うのか！」

「あなたがそれ言う？ 地面には地雷や落とし穴とか様々な罠。悪いけど埋め直した後とかで丸わかり。雪なのになんで分かるのかって？ それは雑だからよ。あと明らかに私のダークライを狙ったものだよね。そんなルール無用の戦い。それならこっちも相応の戦い方をする。それだけよ」

「くっ……！」

「別に戦いを続けてもいいわよ？ あなたなんて怖くないもの」

ナナがムンナにトリックさせてボールを返す。ハンターは下唇を噛んでこちらを睨む。

「……ニドクイン。頼むぞー！」

結局戦うのか。現れたポケモンはニドクイン。ドシンと土煙を撒き散らしながらここよく降臨する。それじゃあどうやって倒しますか。

「ダークライ。れいとうビーム」

手から氷の光線を放つ。それにニドクインは避けきれず、お腹に直撃をくらう。そして体が凍り始め、やがて氷の中に閉じ込められて身動きが出来なくなる。俗に言うこおり状態というやつだな。そんなニドクインを無視して、僕は無言でポケモンハンターに近づく。

「く、くるな！」

「ここら辺に張り巡らされた罠。そして罠が用意された場所で偶然あなたと私が会うとは思えない。つまりあなたは最初から私を待ち伏せしていて私のダークライが狙いだった」

「そうだよ！ 最初からお前のダークライが狙いだよ！」

「……私の嫌いなことは三つある。一つ目は手も足も出ずに敗北すること。二つ目は自分のポケモンが馬鹿にされること。そして三つ目はポケモンと引き離されることよ！」

ナナが目配せで合図する。それと同時にポケモンハンターの額に触れる。それと同時にガタンと眠りに落ちる。そして悪夢にうなされて呻く。

「とりあえず終わったわよ」

「凄い！ あのポケモンハンターをこんなにも容易く倒すなんて！」

それに壁抜け？ あんなの始めて見ました！」

「やってることはゲンガーとかのゴーストタイプのポケモンと同じよ。たまたまダークライがゴーストタイプに近い体質を持つてるのが分かったからやってみたの」

壁通過。便利な能力で戦略も大きく広がった。しかしもつと応用は出来る。今の壁通過は通過を始めるのに一秒間くらいかかる。そのため移動にしか使えない。だが極めれば相手の攻撃を全て透かすことも出来るはずだ。それが出来るようになればもつと強くなれる。「でも無敵じゃないんだよ。使い続ければお腹が空いて、やがて空腹で動けなくなる。地面の中で動けなくなったら誰も助けにいけない

から最悪。あんまりこういう言い方はしたくないんだけど、ポケモンが死ぬことだつてある」

「そうなのよね……まあそこら辺はダークライに調整してもらうしかないわね」

「あの……使わないという選択肢は……」

「ないわよ。むしろ危ないから使うなどというのはダークライに失礼よ。もちろん積極的に使おうとも思わないし、使う前提の作戦も組まない」

「それも……そうですね」

そしてブーバーにお願いしてレポートでシノノタウンに行き、ポケモンハンターを警察に突き出す。アメコミタウンに行かなかつたのは始めて訪れた感動を損ねたくないからだ。そして元の場所に戻り、旅を再開しようとした。

——だけど戻ると全員が驚くことが起こつた。そこには緑色の髪の毛のポケモンがいたのだ。誰も声を発しない。そしてポケモンが鳴く。それで始めて現実に戻された。

「メロ?」

あまりに神秘的なメロエツタの鳴き声に。

43話 メロエツタ

メロエツタ。幻のポケモンで目撃例は少ない。まず一生に一度会えるかどうかのポケモンだ。そんなポケモンがこの場にいる。

「メロ〜！ メロ！（ダークライだ！ 初めて見た）」

「……ナンダ？」

「メロロロロロ！（どんな鳴き声かと気になったけど、まさかの人語！）」

それからメロエツタは僕の周りを飛んでジロジロと観察する。

「メロ……メロ！（ダク、ダークとか鳴いてたらカッコ悪いもんね。うん！）」

なんだ……このやかましいポケモンは……どうすればいいんだろうか。

「ねえメア。このメロエツタ。放っておいても離れそうにないけど、私はどうしたらいいのかしら？ ダークホールで眠らせるのも心が痛むというか……」

「うん。分かる。逃げてくれたり戦ってくれたりしたら攻撃も出来るんだけど、こうも親しげにされると調子が狂うよね」

「メロ？（もしかしてあなたにはトレーナーがいるの？）」

「アア……」

「メロロ！（あ！ メアちゃん見つけた！）」

そしてメロエツタはメアの方にすり寄っていく。今の言動は一体どういうことだろうか？ まるでメアと顔見知りのような言い方。少なくともメロエツタはメアを知っているみたいだが……

それに対してメアは困惑する。メアは数秒経ってから、とりあえずボールを出しえみる。でも投げる気はなさそうだ。

「メロエツタ。ねえ私と一緒にアイドルをやらない？」

「メロ！（ボールは嫌い！）」

小さな足でボールを弾くメロエツタ。どうやらモンスターボールに入る気はないようだ。まあさすがに簡単にゲットは出来ないだろうな。そのうち放っておいたらどっかに行くだろうな。うん。

「そっか……変なこと言っでごめんね？」

「メロ？（どうして謝るの？）」

「だって急に变なこと言ったから……まだ私のことなにも知らないのに「うん！」とは言えないよね……」

「メロ！（違うよー）」

メロエツタは身振り手振りで否定する。それに対して少しだけメアが驚きを見せた。

「メロ〜メロ！（別にメアとアイドルをするのは良いんだよ。ただボールに入りたくないの！）」

「えっと……ボールが嫌いってこと？」

「メロ！（うん！）」

ボール嫌いのポケモン。それは少し怖いな。ボールに入らないということはその人のポケモンだと証明する手段がない。つまりいきなりボールを投げられて『メロエツタ！ ゲットだぜ！』と言われても文句の一つも言えないわけだ。つまりなにかあつた際にメアがメロエツタを守ることが出来なくなる。

「……ナナ。どうすればいい？」

「困ったわね……ボールに入れられないってことはポケモンが危険に迫った時に対処出来ないということ。いざという時はボールに戻して守ることが出来る……」

「そうなんだよね……ナナはどうやってダークライをボールに入れたの？」

「自分から寄ってきて入ってくれたわよ。なんでも私が大切な人に似てるからって理由で……」

「え！ ナナがダークライを捕まえたのってそんな経緯だったの！」

「そうよ」

「てつきり激闘の末にゲットかと……」

そんな話を聞いてるとメロエツタが怖くなったのかそつくと動いて先程自分で弾いたボールに触れて入った。カランカランと揺れてカチツと音が鳴って入った。あれ？ これってもしかしてメロエツタゲットになるのか？ こんなに呆気なくゲット？

いや、まさか！ そんなわけが……

「あれ？」

「……入ったわね」

「入ったね」

「メロエツタゲットでいいのかしら？」

「これでもゲットしたことになるよね……多分……うん……メロエツタ……ゲット……だぜ？」

困惑しながらメロエツタのボールを拾った。しかしメロエツタに引つかかる部分があるんだよな。あとで詳しく聞いてみよう。それしかないだろう。

「メロ！ メロ？ メロ？（これで問題なし！ だよね？ だよね？）」

「わ、ビックリした！」

「メロロロロメロ！（とりあえずボールには入ったけど、基本的には外にいるんだからね！）」

「うん……分かったよ。ボールの中が嫌いなんだね？」

「メロ！（うん！）」

「他に嫌いなことってある？」

「メロ！（バトル！）」

メロエツタが空中でシャドーボクシングをする。ボール嫌いでバトル嫌いか。これは扱い大変だな。うん……

「えー……バトルが嫌いなんだね？ それじゃあ好きなことは」

「メロ！（歌と踊り！）」

軽く歌って一回転する素振りを見せる。それに思わずメアが拍手する。

「嫌いなのはボールの中とバトル。そして好きなのは歌と踊りか」

「メロ！（うん！）」

「……メア。相当大変そうなポケモンを捕獲したわね」

「そうだね。でも頑張るよ！」

もしかして幻のポケモンって捕まえたあとが一番大変なのか？

いや、そんなはずは……あるかもしれない。そしてメロエツタを加

えて旅を続行。そのままアメコミタウンを目指す。順調に行けば明日にはアメコミタウンに着くだろう。そして夜になり、レポートでベアルンの家へと行き、料理を平らげる。そして天気が良いので寝袋を持って外で寝ることになった。そして僕は叩き起こされた。

「ねえダーククライ。起きて」

「なんだ」

そう。メロエツタに。ていうか夜遅くになんだよ。昼間に話せよと思いつながらメロエツタの方へと見る。

「やつと二人になれたね。ダーククライ」

「要件なら手短に頼む」

「そんな大した用じゃないよ。ダーククライはどうしてナナと旅をするの？」

「どういう意味だ？」

「いや、正直に言うとおのポケモンが人のポケモンになるなんて珍しんだよ。だって幻のポケモンはそもそもポケモンとしての成り立ちから大きく違うもの。それは幻のポケモンのあなたが一番分かっているんじゃない？」

そうは言われてもな。僕の場合は特殊だ。そもそも前世が人間で気が付いたらポケモンになっていた。恐らくメロエツタの言うケースとは少し違う。

「そういえばダーククライって今は何歳なの？」

何歳？

そう言われると難しい。人間だった時も含めると二十は超える。しかしダーククライになってからという意味だと四ヶ月になるかならないか……

「答えたくないなら別にいいよ。ちなみに私は二ヶ月」

「年下だな……」

まるで鎌かけのような質問。メロエツタはなにを探ろうとしているのだろうか。まったく掴めない。このポケモンの狙いが分からない。もしかして良からぬことを考えてるのではないか？

「お前は どうしてメアのポケモンになった？」

「私は気付いた時にはこの森の中にいた。右も左も分からない中で聞こえたのは綺麗な歌声だった。それを発していたのはメア。私は偶々メアの歌を聞いたの」

「うむ……それで？」

「それから私はメアを探した。だけど途中で見失ったの。それでずっと森の中でメアを探してた。彼女の歌をまた聴きたいから」

まるでメアのポケモンになるべくしてなったようだ。一言で言うなら運命的な出会いだな。もっとも僕もナナは人間だった時の恋人と瓜二つだったからナナのポケモンになったわけだが。

「……それで僕になにが聞きたい？」

「そうだね……まだ言っても信じてもらえないかな」

「言ってみないと分からないだろ」

「そうだね……恐らく私も貴方と同じだと思うの」

その後。メロエツタから驚きの言葉が出てきた。絶対に聞くとは思っていなかった言葉。

「私は地球の日本という場所出身なの」

「……！」

「この反応。あなたもやっぱり同じ。あなたも前世は人間で気が付いたらポケモンになっていた類なのね。つまり私と同じ転生者なのかな？」

44話 幻のポケモン

「つまり……元は人間なのか？」

「そうだよ。ポケモンはUSUMまでプレイ済み。もつともレート戦は嗜む程度でガルミミガツサで1950くらいかなあ……だからバトル方面は期待しないでくれると嬉しいかな。まあ私は基本的に色粘り勢だから大目に見て。あなたは？」

「……最後にやったのは十年くらい前のプラチナ」

「あー……うん。大丈夫」

明らかにメロエツタがガツクリした表情を見せる。まあ分からなくもない。正直に言っただけでやり込んでた人と話せば考察も出来る。情報はあつた方が有利だ。ていうかメロエツタの言ってる言葉の一割も理解できなかったんだが……

「それじゃあダークライ。推しポケは？　ちなみに私はヌマクロー」

「……ピカチュウかな？　ちなみに嫌いなポケモンはニンフィアだ」

いや。好きなポケモンとかいないし。話を振られても困るな。真面目にポケモンやっとならば良かったよ……。

「さて、まあその辺にしておいて来た経緯を話しましょう。私はいつも通り仲間連鎖でマスボ色ミミッキュの色違いを粘ってたら眠くなって……気付いたらメロエツタになってました！」

「……僕は彼女が死んで、やり残したポケモンUSをせめて殿堂入りまではやろうと代わりにやったら眠くなって……いつの間にかダークライになってたという感じだな」

「なんか変なこと聞いてごめん……そんな重いとは思わなかった……」

「それで森を彷徨っていると彼女と瓜二つの人に会った。それがナナ……僕はナナをチャンピオンにしたい。前世で出来なかったから……」

「……なんか凄いロマンチック！　素敵！」

しかし、この世界で同士に会えるとは。それが少しだけ嬉しい。自分と同じ境遇の人がいるというのは安心するものだ。

「ちなみに私はメアの歌声に惹かれたと言ったでしょ。実はホントのことを言うと少しだけ違うの。メアの歌声。それが私の死んだお姉ちゃんの歌声にそっくりだったの」

「……似たようなものだろ」

「ダークライには負けるよ。でも……偶然かな？ たまたま近くに前世で大切だった人に似たトレーナーがいる。ダークライは容姿、私は歌声。もしかして運命的な出会いになるように仕組まれてる？」

仕組まれてるか。そんなことは考えたこともなかったな。しかし仕組んだとしたら誰がなんのために？ それにそんなことが出来る存在なんているのか？

「ゲームだと幻のポケモンは基本的に『運命的な出会いをした』という表記になっていることが多いの。そして私達なら普通は捕まらないよね？」

「そうだな」

「つまり幻のポケモンは全ての個体が前世は人間であり、前世で大切だった人の元に行く。だから絶対に運命的な出会いになる……つて考えられないかな？」

「分からん。普通の幻のポケモンはただのポケモンかもしれない。もつと幻のポケモンを見てみないとなんとも言えないだろ……」

結局のところ事例が少なすぎる。僕達だけが例外とも考えられる。今の情報だけじゃ核心には到達できないだろう。

「少しだけ本編以外の情報からも整理しようか、アニポケに出てきた幻のポケモンは前世が人間だと思わせる描写は当たり前だけど無し。そして前世が人間のポケモンと言えば不思議のダンジョンシリーズくらい……だけどあれはポケモンだけの世界でトレーナーはいない」
やばいな。まったく話についていけない。このメロエツタ。ただのガチ勢じゃないか。心強いといひかなんというか……

「しかしゲームでは幻のポケモンというのはマナフィを除いて『どう誕生するか明かされていない』。それに対して伝説……少なくともシンオウ三龍はHGSSのシント遺跡イベントで卵、ポケモンスナップでファイヤー、サンダー、フリーザーの卵が確認されている。そうい

う観点やその他設定から全てのポケモンは卵から生まれるものときれるが、今回は私達という例外が発生したわけよ。」

「つまり？」

「まだポケモンの世界は謎だらけってこと！　しかしポケモンの世界は何度も行きたいと思っただけど、まさかポケモンになっちゃうなんてなあ」

「なんの進展もねえじゃねえか！　まったく……話に付き合っただけで損した。」

「だけどポケモンが全て卵からだとしたら私達は転生じゃなくて憑依って可能性もあるのかなとは思うかな」

でも結局のところ確かなことはなにも分からない。分かったとしてもどうすることも出来ない。意味のない情報にしかない。それに分かったことでやることは変わらない。僕はナナをチャンピオンにする。もっともこういう話も面白いけどな。

ここで話し合っても答えは永遠に出ない。というより本当のことなんか一生分からない。だから今のことだけを考えようそれがいい。

「ていうかダーククライ。バトル怖くないの？」

「最初は怖い慣れると楽しいぞ。ナナと一心同体になったような気がするし」

「それじゃあ痛くないの？　バトルって痛そうだから絶対に嫌だって感じなんだけど……」

「そういえば最近は感じないな。最初のうちはそこそこ痛みはあったが……」

「ふーん……そういえば最初はモンスターボールとか狭そうだし絶対に入りたくないって思ってたけど入ってみたら意外と広かった。だからやってみたら違ったりするのかな？」

あーだからボールに入ろうとしなかったのか。前世が人間だからこそその思考だな。モンスターボールは良いぞ。なにもない広い部屋だが赤い部分がクリア素材になっていて外も見れる。それに音も聞こえる。ただ少しだけ退屈だが……

「こんど私もバトルしてみようかな……でもメアにバトルは嫌い」と

言った以上は少しだけやりにくさがあるかな」

「でも技を出すのは少しだけ苦労する」

「あ、それは大丈夫。技が打てるのはイメージさえ出来れば打てるのは検証済みだから」

メロエツタが軽く手から電気を出す。その様子だと問題なさそうだな。しかし僕は技を覚えるのにあんなに苦労したというのに……

「でも、『いにしえのうた』だけが分からないの。あれが出来ればステップフォルムになって苦手な悪や有効打に欠ける鋼に有利になれるんだけどね。もつとも教え技だし仕方ないものなのかもしれないけどさ……そうなると当分はワロス玉で戦うしかないのかなあ」

この様子だとメロエツタがどんなポケモンなのか。どういう技を覚えるかというの把握してみたいだな。あと彼女には一つだけ言っておくべきことがあるな。

「メロエツタ。一つ聞いてくれ」

「なに？」

「この世界にはゴウー団という悪の組織がいる」

「ふーん。目的は？」

「強くなることと言っている。それでダークポケモンというポケモンをポケモンを……」

「ダークポケモンね。地球だとポケモンコロシウムで出てきた要素だね。あと最近だとポケモンGOでもあったっけ？」

「そいつらは死ぬまで戦う」

「技は？」

「技？　なんでそんなことを……」

「普通に使うぞ？」

「ポケモンコロシウムのやつとは少しだけ違うっぽいね。どちらかというとならポケモンGOに近いのかな？　それなら飴進化もありそう」

「飴進化？　まあなんでもいいか。しかし話がポンポン進んでおりがたいな。これほど楽な説明もない。」

「まあだから下手したらメロエツタも場合によっては戦うことになる可能性はある」

「あーたしかに私は幻のポケモンだし狙われるのかあ……まあ覚悟はしとくね」

「とりあえず僕は寝る」

「うん。私も寝るね〜おやすみ〜」

そして朝になる。メロエツタを加えて林を歩く。既にメロエツタはメアと意気投合していて彼女の肩に乗っている。まるでどこかのピカチュウを連想させる。それともメロエツタも意識してのことなのだろうか。そして今日だけは僕もボールから出て歩いている。

「そういえばダークライ。メアとベアルンが悪い夢を見たそうだけど心当たりあるかしら？」

「シ、シラナイ……」

「そう。夜にメロエツタと話すのも良いけど周りの人に悪夢を見せるんだから気を付けてね」

あ、はい……ていうか完全にバレてるし。

いや、まあナナに隠し事は出来ないか。

「それとダークライ。見えてきたわよ。アメコミタウンが！」

そして遂に新しい街に着く。

45話 ヴイラン

アメコミタウン。カイヨウシティと同レベルの大規模都市。しかし殆どの建物に人が住んでいない。それは簡単だ。全てが映画撮影用に建てられたものだ。

怪獣映画を撮ろうと言うならば容赦なく建物を壊す。それがその街である。そして再建されて再び派手な映画撮影が行われる。

「おおー。ここがアメコミタウン！ こんな大都市は始めてです！」

ベアルンが興奮気味に言う。そしてこの街はトレーナー人気も高い。何故なら申請さえ出せば都市で戦えるのだから。もちろん建物の破壊も問題なし。やはり街を駆けまわりながら戦うのは一度はやってみたいことだよな。ちなみに倒れたビルの下敷きになっても自己責任だが……

「メア。そういえばメロエツタは？」

「近くを飛んでるよ。人目に付くと面倒だから透明になってもらってるけど」

「みなさん！ 見てください！」

そしてベアルンが近くの看板を指差す。そこには一言だけ書かれていた『ヴィラン募集中』と。なんだこの勧誘ポスター……

「ヴィラン……悪役か」

「ナナ。こっちにはヒーロー募集だって」

「あー……思い出した。今の時期って仮想戦闘祭の時期じゃない」

「そっか！ もうその時期か！ 私達も自分のポケモン持つてるから出られるんだよね！」

「これは出るわよ！ ねえメア！」

「もちろん！ 私はヒーロー陣営！ ナナは？」

「ヴィラン陣営！ 悪役になれる機会になれるなんて滅多にないもの！」

仮想戦闘祭。あとで聞いた話だがデトワール地方を代表する一体だけ自分のポケモンを持つて参加するお祭りらしい。ルールは簡単でヴィランとヒーローに分かれて都市を一つ借りて行う団体戦。し

かしポケモンバトルではない。会場には一般人に見立てたマネキンがあり、ヒーローはそれを救出という名目で自分の拠点まで運ぶ。そしてマネキンを全て運び終えたらヒーローの勝ち。それに対してヴィランはヒーローを全滅もしくはマネキンを2/3破壊したら勝ちとなっている。

また当然ながらヒーローがヴィランを襲うのはあり。自分のポケモンが戦闘不能になれば失格となり脱落。そしてマナーとしてヴィランは悪役らしい言動、ヒーローは正義の味方らしい言動を心掛けなければならない。

「二人とも出るんですか？」

「もちろん。ベアルンは？」

「僕はバトルが嫌いなのでパスです。ただ観戦はしますよ！」

「そう。しかしどのポケモンで出ようかしら……ていうかヴィランネームも決めないと」

「ナナ。それなら良いのがあるよ。『悪夢姫』なんてどうかな？」

「素敵！ それにするわ！ メアはヒーロー名どうするの？」

「うーん……『キュートガール』とか？」

「悪くないわね」

自分で自分のことを可愛いと言うのか。いや、アイドルを目指す以上は自分を可愛いと言い切る自信がないとやっていけないか。

「あとポケモンも悩むわよね。メアはどうするの？」

「ニンフィアかな」

「なるほど。私はダーククライでいこうかしら。やっぱりヴィランをやるなら悪タイプじゃないとね」

これはムンナ達からブーイングされそうだな。済まぬ。しかし問題はどうか立ち回るか。今回は団体戦。団体戦ではどう戦えば良いのやら……

「とりあえず参加手続きをしましょう」

そして会場に向かい、参加手続きをする。会場に行くとは様々な人が溢れていた。それにどこかで見たことや聞いたことのある強者も多い。これは相当レベルが高いな。

「こちら仮想戦闘祭の受付です。どちらの陣営に所属しますか？」

「ヴィランでお願いします」

「はい。どのポケモンを使いますか？」

「ダークライです」

「ダークライ？ まあいいでしょう。祭り中は他のポケモンが使えないので気をつけてください。それと仮想戦闘祭ではビルの倒壊等による怪我が発生する場合がありますので、こちらの誓約書をよく読んでサインをお願いします」

適正検査とか行われぬのか。てつきり簡単な思考テストとか行うと思っていた。そして同意書の内容。それは人に危害を加えてはならない。人のポケモンを奪ってはならないということも書かれていた。いくらヴィランと言え、そういう行いは禁止なのか。

「今回のヴィランはヒーローを正面からポケモンバトルで倒して悪の時代が来たと知らしめることが目的となっています。そのためポケモンを奪うようなことはしません」

そんな設定まであるのか……なんかすごいな。

「ヒーロー側の設定を聞いてもいかしら？」

「はい。今回はヴィランがヒーローをおびき寄せるために民間人を襲ったのが発端となっています。そのためヒーローは民間人を保護しながらヴィランと戦わなければなりません。また民間人が周囲にいるため全力を出すことが出来ません。裏を返せば民間人も避難が終わればヒーローは全力を出せます。そして全力を出されたらヴィランは絶対に勝てないという設定です。だから民間人に見立てたマネキンの保護が勝ちに繋がります」

「……ヴィラン。少し矛盾してないかしら？」

「矛盾してるからヴィランなんですよ！」

「納得だわ」

そしてナナは誓約書を読み終えてエントリーを済ませた。開催は明日。危ない。もしも一日でも到達が遅れていたら、こんな面白い祭りへの参加を逃すところだった。

「それと最後に一つ。ヴィランと活動する際の名前をお答えしても

らつてもよろしいでしょうか？ もちろん本名でもよろしいですが、悪役らしい名前があつた方が盛り上がりますよ」

「……『悪夢姫』よ」

「分かりました」

そしてナナは部屋を後にする。ナナは受付を済ますと近くににいる人に声をかけられる。その人は上半身裸でかなりがっしりした体系の人だった。しかし……どこかで見た気が……

「おお。いつかのダーククライ使い。お前さんも祭りに参加か？」

「はい。それとお久しぶりです。ニリンさん」

あー思い出した。最初に挑んだジムリーダーだ。たしか氷タイプの使い手。しかしジムリーダーダーククラスも祭りに参加するのか……下手したら瞬殺されるかもな。

「おうよ。それでヴィランか？ ヒーローか？ ヴィランだったら少し用がある」

「ヴィランですが……」

「よし！ ついてこい！」

そしてナナは肩を叩かれて外の禍々しいテントに連れてこられた。そこには一人の男がいた。その男はフードを被っていて顔は見えない。しかし机に足を乗つけて、タバコを吸うとかなり行儀の悪かった。

「ボス。新入りを連れてきました！」

「……ああ。シノノカップで話題になったダーククライ使いの女の子か。カイヨウシテイぶりか？」

そして男はフードを上げる。白髪に不健康そうな顔をした男だ。目は隈だらけで髪はぼさサボサ。髭も剃っていない。もつと身なりに気を使ってほしいものだ。

「その声……！」

「カイヨウシテイで俺のあげた本は役に立ったか？」

その言葉で初めて気がつく。この男はカイヨウシテイでナナに不自然にぶつかり、本を渡した男だ。まさかそんな人物までいるとは！

「……なにをしたいんですか？」

「先輩からのアドバイスだよ」

そういうと男はボールを投げた。そこで驚くべきポケモンが出てきた。そのポケモンに目を疑う。なんでこのポケモンがここにいる！ ダークライがもう一体いる！

しかも色が違う。微妙にマゼンタ色になっている。このダークライは一体……

「ニシンさん……この人は？」

「俺も詳しく知らん。だがヴィランの中で一番強い。三日前にやってきて俺を含む他のヴィランを全て倒して、リーダーとして認められた。それ以来は彼が全てを指揮している」

「そういうことだ。それとニシン。お前は出ていけ。俺は二人で話したい」

「おう……」

そうしてナナは男と二人だけになる。空気は少し重い。ナナは完全に警戒している。素性も分からない。得體も知れない男。そして彼のダークライは喋らない。緊迫した空気の中で男が軽く口を開いた。

「三つだ。三つだけどんな質問にも答えてやる」

「……ダークライはどこで手に入れたんですか？」

「ここではない遠くの地方で二十年くらい前だ」

「カイヨウシティで私に本を渡した目的は？」

「自分でも分からん。だから答えられん。ただ本能的にお前はダークライについて知るべきだと思った」

「最期に……あなたは何者なのですか？」

男は軽く頭をかいた。そして足を下して一口だけコーヒーを口に含む。そして驚きの言葉を口にした。ここにいて良い存在ではないのは明らかだった。本来なら今すぐに倒さなければならぬ存在。正真正銘のヴィランだった。

「——ゴウー団のボス『ラルム』それで伝わるか？」

「ダークライ！ あくのはどう！」

そこからナナの動きは速かった。僕に迷わず全力であくのはどうを使うことを命じた。僕も迷わずラルムにあくのはどうを叩きこむ。ナナはなにひとつ疑っていない。彼がゴウー団のボスだということ。それを事実だと思わせるオーラがある。そして彼のダークライが腕を払い、あくのはどうの軌道を逸らす。ナナはその隙に僕をボールに戻し、走って逃げようとする。だが目の前にマゼンタ色のダークライが現れて道を塞ぐ。万事休すか……

「そう慌てるなよ……俺の目的は完全に成し遂げられた。もうお前のダークライも必要ないし、襲う気もない。それにお前は逃げられないし、勝てない。俺の話を座って聞いた方が賢明だろ」

「……なんの話をするの？」

「決まってるだろ。ヒーローの潰し方だ。俺にはヒーローをぶっ潰す策があるんだ。たしかにゴウー団は悪だ。しかし今は同じヴィランで仲間だ。違うか？ 俺の駒になれよ。ナナ」

46話 ポケモンが好き

「それと言い忘れていたが今の話はオフレコで頼む。口外したら——分かるよな?」

これは脅しじゃない。まじでやるつもりだ。ナナがごくりと生唾を飲む。

「そもそもゴウー団に用はもうない。解散しても構わん。むしろ管理とか面倒だからしてくれ。潰したいなら潰せばいい。というより潰してくれ。俺は静かにダーククライと暮らしたいだけなんだ」

「……ゴウー団の狙いはなに?」

「それをお前に話すメリットは?」

ナナは黙る。まったく全貌が掴めない。なにを考えている?

「まあ説明しないと勘ぐられて面倒だな。それに話しても損はないし、暇だから話してもよいか。ゴウー団の目的。それはダーククライの復活だ」

「どういうこと?」

「お前。自分のポケモンは好きか? 俺は好きだ。心の底から愛している。それで自分のポケモンが植物状態になったらどう思う? また他のポケモンを犠牲に蘇る術があるとしたら?」

「まさか!」

「ダークポケモン。強さを求めるなんて建前でしかない。本当な目的は植物状態になった俺のダーククライを甦らせること。俺はダーククライのためならなんだってやるし、悪魔にでも魂を売ってやると決めた。とりあえず座れよ。細かく話してやるから。同じダーククライ使いのよしみだ」

それから彼は話した。彼のダーククライは病気になり自ら『やみのエネルギー』を生成出来なくなった。その結果として十年前から植物状態だった。そんな時に彼はコスモッグという莫大なエネルギーで異世界に行くポケモンを見つけた。彼はそれを捕獲してコスモッグのエネルギーをやみのエネルギーに変換する研究を行った。そしてダーククライが本来持つ、やみのエネルギーと比べて問題がないか検証

するために普通のポケモンに注入した。それがダークポケモン。また研究を続けるためのカモフラージュとしてダークポケモンを配布してゴウー団を作り出した。そして先日ダークライに人工的に作り出したやみのエネルギーを注入することによりダークライは普通に生活する分には問題ないくらいに復活した。つまり彼の目的は果たされたのだ

「…なぜ私のダークライを奪いにこなかったの？ 普通ならあなたが直々に奪いに来てもおかしくない。むしろ私があなたの立場なら絶対にそうする……」

「簡単なことだ。お前の目撃情報があった時には完璧なやみのエネルギーの生成はあと一歩のところまで進んでいた。それにお前のダークライを全く使わなかったわけじゃない」

「え？」

「心当たりあるだろ。俺達がシノタウンでダークライを奪っただけ。そこでやみのエネルギーが正常なものか最終確認をした。その結果として問題なしと判断したから俺は自分のダークライを蘇らせた。もつともそちらのダークライはそのせいでやみのエネルギーに目覚めたみたいだが。ちなみにお前のダークライに記憶はねえぞ。強力な催眠術で消したからな」

ナナは今にも殴りかかりそうだった。しかしグツと堪える。ここで手を挙げても碌なことにはならない。むしろ返り討ちにされるのがオチだ。

「俺は悪いことをしたとは思っていない。だけどお前に俺に怒る権利もあると思っっている。もしも俺がお前の立場なら死ぬほどキレてる。だから一発だ。一発だけ殴らせてやる。それでキャラにしよう」

バチンという平手打ちの音が響いた。ナナが全力で男の頬を叩いた。それに対して男は不気味に笑う。しかし怒ってはなさそうだ。

「それでキャラだな」

「ええ。とりあえずこれでダークライの件は水に流すわよ。でもダークポケモンのことは許さない。あなただのせいでスピアーは……それはやめましょう。でも再び私のダークライに手を出したら許さない

から」

「それで構わん。だが勝手に暴れてるゴオー団の残党がいるのも事実で俺の管轄外だ。もしもそいつらが襲ってきたら俺に連絡しろ。全力で叩き潰してやる」

男はナナに連絡先を渡す。ナナはそれを受け取る。そして机にあるコーヒーを一杯だけ飲んだ。

「しかし、あなたは どうしてこんな祭りに参加してるの?」

「……祭りに参加する理由? 楽しそうだからにあるのか?」

「それもそうね。それじゃあ本題に入りましょう。どうやってヒーローを潰すのかしら?」

「今から説明する。まず最初に……」

そういえばエネルギーの抽出に使われたコスモッグは今どうしてるのだろうか。しかし誰もコスモッグには触れていないので黙っておいた。

そして作戦会議は終わり、禍々しいテントを後にする。そしてメアとベアルンと合流して軽く観光を楽しんだ。その時にナナは一言もゴウー団のボスのラルムの話は一切しなかった。

「そういえばヒーロー陣営はどんな感じだったのかしら?」

「うーんとね……元チャンピオンのエンペラー。それに国際警察も何人かいたよ。さすがにボルノはいなかったけどね。あそこまでの強者が揃うなんて凄い祭りだよな」

ヒーロー陣営には元チャンピオン。ヴィラン陣営にはゴウー団のボス。なんて豪華面子だろうか。どちらもトップクラスに強いトレーナーだ。下手したらデトワール地方の戦力が全て集まっている説もあるな。もつとも僕たちの身近な強者であるキンランさんやナナの兄にして、現チャンピオンのカナタはいないが。

「でもナナの相手にとって不足なし。今の実力の確認にもなるんじゃないかな?」

「ええ。それが狙いだもの」

互いの主要戦力をまとめるとこんな感じだ。

まずヒーロー陣営が国際警察のメデア&ローブシン、ジムリーダー

のアーモンド&ハッサム、元チャンピオンのエンペラー&サザンドラ。そしてアメモミタウンにおいて最高のヒーローとして名高い俳優のウルトラ&エンテイといったところ。

それに対してヴィラン陣営はジムリーダーのニシン&マニョーラを始めとして元ポケモンレンジャーのダロウ&ペルシアン、さらに前回ポケモンリーグの優勝者のポポ&ラグラーズ、そしてゴオー団のボスのラルム&バタフリー。他にもナナやメアクラスの戦力が何人もいる。ちなみにラルムはダークライを使わない。それは単純に今のダークライは戦える状態じゃないからとのことだ。

どれも真っ向から戦ったら絶対に勝てない。しかし今回は違う。奇襲もありだし集団で襲うのもあり。はたまた逃げながら時間稼ぎをするのも意味がある。もつともヒーローを全て全滅させなければ勝ちにはならないが、時間稼ぎしている間に他のヒーローを倒すことに繋がるからだ。そしてマネキンを破壊する勝ち筋もあるわけだ……

しばらくして僕たちは時間潰しも兼ねて場所の下見をする。それは地球のニューヨークを連想させるような街並み。いくつも並ぶビル。もちろん内部に入ることも可能。そして人目のつかない路地裏、そして薄汚い路地裏。しかし野生ポケモンは一切いない。これなら派手に暴れられそうだな。

「うーん。ナナがダークライにお姫様抱っこされながらビルから逃亡したら映えそう」

「……いくらなんでも心臓に悪いわ」

「たしかに。私もウルガモスで同じことをしてって言われたら断る自信がある」

そんな話をしているとメロエツタが透明化を解除して現れ、辺りをキョロキョロしながら飛び回る。

「メロ〜(ここで戦うなんて映画みたい)」

「メロエツタ。あなたはお休みだよ?」

「メロ! (なんでよ!)」

「バトル嫌いでしょ?」

「メロー（ムー）」

「頬を膨らませて怒っても既に申請したのでダメです。でも次のお祭りがあつたらメロエツタにお願いするね」

「メロー！（やった！）」

「ていうか、そんなに戦いならここでダーククライと戦いましょう。ナナ。どう？」

「私は良いわよ」

いや、マジかよ。たしかに係員から自由にバトルしてもいいとは言われてるが。

メロエツタ。明らかに地球時代の知識持ちで強いのは確定してるんだよなあ。

「あなたはどんな技を使えるの？」

「メロー！」

メロエツタがメアの前で一通りの動作をする。そしてメアは全て把握したようだった。

「なるほど……インファイトにサイコキネシス、ハイパーボイス。さらに10まんボルト、シャドーボール、きあいだま、エナジボール、マジカルシャイン。他にもれいとうパンチ、かみなりパンチ、ほのおのパンチにその他諸々だね」

「メロ（うん！）」

いや、待て！ 技が十一以上って反則だろ！ たしかに前世が人間で知能が違うというのもあるのだろうが、さすがに反則過ぎるぞ！

「メア……少しそのメロエツタ強すぎない？」

「ねーすごく頭の良い個体なんだね！ メロエツタ凄い！」

「いや、まあ……うん」

「それじゃ始めようか？」

「メロ（うん）」

「ダーククライ。技が多いと言っても実際のバトルで全てを使うわけじゃない。それを念頭に置いて戦いなさい」

「ナナ。ナイトメアシフトはあり？ できれば無しの方がありがたいな」

「分かったわよ。ナイトメアシフトはしないわよ。でもナイトメアシフト禁止ならメアの歌も禁止ね」

「おっけー」

そしてバトルが始まる。さてナイトメアシフトという必殺技も禁止されてしまった。それをやると並大抵のトレーナーが相手にならなくなるから仕方ない。もつともナナもジム戦では使うだろうが、そのレベルの相手じゃないと使わないだろう。

「それじゃあ、メロエツタ！ 戦闘開始だよ！ まずはいにしえのうた！」

「メロ（それ無理）」

「あー……ナナ。ちょっと待って。どっかで埋め合わせするからお願い。ね？」

「仕方ないわね……良いわよ」

そしてナナはメロエツタに近づいて軽く歌を聞かせる。メロエツタもそれを真似る。それに対してメアが親指を立ててメロエツタを励ます。あれ？ とんでもないパワーアップしてないか？

「それじゃあ仕切り直して戦闘開始だよ！ メロエツタ！ いにしえのうた！」

「ダークライ！ 耳を塞いで！」

ナナの指示は間に合わなかった。最高の気分だ。ここまで良い歌があっただろうか。

「メロエツタ。そのままインフアイト」

その瞬間。腹に激痛が走る。それから何度も連撃が飛んでくる。しまった！

僕は一体なにをしていた！

「ダークライ。あくのはどうで吹き飛ばして距離を取りなさい！」

「メロエツタ。避けて」

「メロ！（これがポケモンバトル！）」

あくのはどうを撃つ。メロエツタは避けようとすつが間に合わず掠る。しかしなんともないようにピンピンしている。しかもメロエツタの緑の髪は跡形もなく消えて、オレンジ色のカールがかかった

髪。それに歌姫というより踊り子のようだ。いまのは一体……

「ダークライ！ 路地裏に逃げるわよ！」

「アア」

「逃がさない！ シャドーボールで追撃！」

僕もシャドーボールで反撃して追撃を免れる。これはマズい。マジでヤバイ。あのメロエツタというポケモンめちやくちや強い。それに加えてメアの適切な指示が厄介過ぎる。しかしナイトメアシフトすれば簡単に勝てるのに！

「いにしえのうた。あれは聞いたポケモンの心に訴えかけて攻撃する技なの。それに眠ることもある。でも一番厄介なのはフォームチェンジ。それでエスパークタイプの遠距離主体から格闘タイプの近距離主体へと変わる」

「……ナルホド」

「詳しく知ってるのはメアに耳にタコが出来るほど聞かされたからよ。ここなら風通しも完璧ね。ここで待ち伏せるわよ」

そして足を止めてメロエツタが現れるのを待つ。しかし現れない。不自然に思っていると再び腹に激痛が走った。そして再び連撃を叩きつけられる。あまりに一方的。しかしどこからの攻撃だ！

「完全に盲点だったわ……」

「メロエツタの透明化。忘れたとは言わせないよ？」

メアが現れる。同時にメロエツタも姿を見せる。そういえば透明化があることを完全に忘れていた。幸いにもレベルが低いのか威力は高くない。しかし厄介極まりないな。

「メロ！ (楽しいわ！)」

「でも作戦に支障なし。それじゃあダークライ。そろそろ反撃に行くわよ。あやしいかぜ！」

手を振り、突風が巻き起こす。それにメロエツタが攫われて宙に浮く。その隙を逃さずにシャドークロウで連続的に引つ掻く。ザザザザザザンツと何度も確実に仕留めるために！

「メロエツタ！」

「透明化しようが全体を巻き込む攻撃なら避けきれないでしょう？」

特に風通しの良い路地裏で風を起こされたらね」

そしてメロエツタが空からガクリと落ちる。戦闘不能だな。もしもインファイトの威力がもう少し高かったら負けていた。インファイトは致命傷になるから気を付けろと口酸っぱくナナに言われているのに。

「ダークライ。最後のシャドークローの連撃はナイス判断よ。でもビビりすぎ。あなたは強いんだからドンと構えてなさい」
「ウム……」

「メロエツタ。お疲れ様。初めてのバトルどうだった？」

「メロ……（痛い……）」

「動き判断。どれも完璧で凄く良かったよ！でもやっぱりレベル差がキツイね。もしもメロエツタとダークライが同レベルだったら絶対に勝てたよ！」

「メロ……（レベル差なら仕方ない……か）」

メアはメロエツタの回復を終えたらポフィンを投げる。メロエツタはそれを食べる。そして目を輝かせた。メアはそんなメロエツタの頭を優しく撫でる。

「頑張った子にはご褒美がないとね。それとメロエツタ。このまま歩いて帰る？それともボールに入っただのんびりする？」

「メロ！（ボール！）」

そしてメロエツタはボールへと戻っていく。

「そういえばメロエツタが素直にボールに入ってくれるようになったの。最初はボールは窮屈というイメージがあっただけ、入ってみたら意外と居心地が良かったから気に入ったみたいなのかな？」

「私に言われても分からないわよ……」

「だよなーとりあえず戻ろうか」

そしてメロエツタの初バトルを終えて、今日は解散となった。

47話 開戦

祭りが始まった。ナナは逃げていた。相手は国際警察のメデア。使うポケモンはローブシン。見た目からは想像できないくらい早いパンチでこちらを的確に追い詰めていく。

「ローブシン。さあマツハパンチでトドメだ」

その時だった。上からバタフリーが現れてぼうふうでローブシンを吹き飛ばした。しかしローブシンはすぐに体勢を空中で整えて上から岩を降らす。しかしバタフリーの姿はない。ついでに言うなら僕の姿もない。何故なら僕たちはビルの中にいるから。簡単な話だ。僕とナナはバタフリーのぼうふうで空を飛び、予め割ってあった窓から侵入。そしてバタフリーはレポートをした。後ろからコツンコツンと足音がする。バタフリー使いのお出ました。

「おはようだな……腐れヒーロー」

「お前は！」

「ヴィラン名は『ボス』。それにしても随分と強いローブシンだ。でも終わりだ」

その時だった。ローブシンが苦しみ始めた。まるで計算通りと言わんばかりに男は上から叫ぶ。それをメデアは睨んでいた。

「逃がすか！ ローブシン。そのままマツハパンチで……」

「ダークライ。あくのはどう」

僕はナナに言われた通りにあくのはどうでローブシンを地面に帰す。そしてドシンという音が地面に鳴り響く。

「さすがだ。悪夢姫」

「ボス。早く撤退よ」

「ああ」

そして消えていく。バタフリーの鱗粉は毒だ。それをローブシンは受けて毒でもがき苦しんでいる。相手も相当な強者で普通なら通しない。少なくともナナと僕が逃げに徹しても危ないくらいの相手。それなのに毒が効いた理由。それはバタフリーが想像以上に強かったというしかないだろう。それだけの話だ。

僕たちはテレポートして酒場に行く。ここはヴィラン本拠地。ポケモンが傷ついたらここで回復を行い、体制を整えて出る。今回のラルム立案の作戦。まず最初にヒーローの絶対にバレない本拠地を作り、そこにラツキー等で他のポケモンを回復できるポケモンを持つトレーナーを配置することで疑似的なポケモンセンターを作る。そして常に誰かとペアになり、数的有利を取られないようにする。

そのペア組の結果として僕たちはヴィランのボスであるラルムとペアを組んでいた。そして事実上の側近のような感じになっていた。

「……マネキンの数は？」

「破壊が3。手元にあるのが28」

「ヒーローのマネキン状況は？」

「現在は41体保護です」

ラルムが近くにいる人に状況を話させた。今回のラルムの作戦はかなり下衆だ。まず最初にマネキンを拠点において隠す。そうすることで『存在するマネキンを全て回収する』の条件を満たせなくした。破壊すれば存在しないマネキンになるため敢えて破壊していないのだ。

「全部でヒーローが三百八名。それに対してヴィランが七十八名。やっぱり例年通りヴィランが不利過ぎるんだよ。まったく」

「ボス。しかしこちらは被害が八人に対してヒーローは既に五十名近くになっています」

「……おかしいな。ヒーローの死人が少ない」

「情報によるとキュートガールというヒーローが歌でポケモンを強化して回っているそうです」

「だからか……全員に連絡しろ。キュートガールというクソヒーローを最優先で潰せと」

キュートガール。メアのことか。戦況はこちらら有利とさえ思った以上に良くない。もつとこちらら有利で進む想定だった。

「ボス！ 連絡です！ たった今こちら陣営が一気に十二名死亡！ それで計二十になりました！」

「……まあ上手くはいかない……か。誰にやられた？」

「ヒーローウルトラ！ ヒーロー最強と名高く四天王と同レベルのバトルの実力の持ち主……」

「ポポ……たしかヴィラン名はダークナイト。そいつに行かせろ。それに腕に覚えがあり水タイプのパートナーにしている者を四名当たらせろ。恐らく死ぬかもしれんが構わん。それでウルトラを倒せるなら儲けだ」

「分かりました！」

「あと悪夢姫。お前も行け。だがお前は生きて戻ってこい」

「……ボスは？」

「これはチャンスだ。折角だからエンペラーでも落としてきてやるよ」

そうして次の作戦が始まる。ナナが行った時には既に炎の海だった。そんな中でエンテイとメガラグラージが激しく戦っていた。それにカオスだ。天気が晴れたり、雨が降ったりとコロコロ変わっている。

「どうしたヴィランよ！ そんなものか！」

「こつちのセリフだよ！ ヒーローも随分と衰えたものだね」

メガラグラージのパンチがエンテイにダイレクトに辺り吹き飛ばされる。それからゴルダック、ニョロトノ、ヌオー、ドヒドイデが水技を使ってエンテイを追い込んでいく。

「卑怯とか言わないでくださいよ。今の僕はヴィランなのですから」

メガラグラージ使いの方を見ると青髪の女性だった。しかも水色の夜会服のようなものを着ていて、とても美しい。あれが前回のポケモンリーグ優勝者。そんな中でナナが僕に合図をする。次のエンテイの動きを見越して……

「……は不利だな。ハッハッハ！ 逃げるぞ！ エンテイ！ じならしだ！」

エンテイが雄叫びをあげた後に地震を起こして周りのポケモンを吹き飛ばす。それにラグラージ以外のポケモンが一切対処出来ずに戦闘不能になる。そしてエンテイはウルトラを乗っけてビルを駆けのぼる。

「ごめんなさいね」

僕たちはそんなエンテイの目の前に現れ、そしてシャドーボールで足を崩していく。ナナはエンテイの逃走を完全に読んでいた。そして逃走経路に先回り、一番避けられないタイミングでの一撃。しかもエンテイは狙わない。恐らく本体に当たっても大したダメージにはならないし、なにより直接狙った攻撃は反応される。だからバランスを崩すためのだけの一撃だ。

「今年のヴィランは容赦ないね！　だが、それでも負けないからヒーローなのだよ！」

「ダークライ！」

そんな時だった。一気に体が吹き飛ばされる。エンテイは空中を蹴り、こちらに突進してくる。無茶苦茶だ。こいつ……空中でも歩けるとでも言うのかよ！

「覚悟はいいか！　ヴィラン！　エンテイよ！　だいま……」

「ナイスファイト。あとは任せて」

その時だった。下から水の弾丸がビルを登り、エンテイの腹を貫いた。水の弾丸の正体。それはメガラグラージ。あの技はまさか『たきのぼり』か！　ビルを滝に見立てて上ったというのか！

「少し力を借りれるかな？　このヒーロー。しんそくの要領で足が落ちる前に宙を蹴り、空中を走るくらい無茶苦茶な存在。僕一人だと五分五分なのよ」

メガラグラージ使いは僕っ娘か。しかしどうすれば……

「君のトレーナーの指示に従って。恐らく君のトレーナーはどう動くのが一番助けになるか分かっているから」

「……ダークライ！　大丈夫？」

ナナが駆け寄ってくる。しかし手には傷薬はない。理由は単純。道具の持ち込みが禁止されているから。つまり回復が不可。そのためラルムは回復出来るポケモンを集めた疑似的なポケモンセンターを最初に作った。しかしダメージを負えば回復薬のラツキーへの負担が増えていく。だからなるべく避けていきたい……

「やっぱり次元が違う……真っ向からやって勝てるわけがない。その

気になれば今の私達なら瞬殺されてもおかしくない……」

「ドウスル……？」

「あなたが一番分かっているでしょ？ 今の私達よりも強くなるわよ」

ナナの合図と同時に僕はやみのエネミーを体内に巡らせる。放出はしない。体に纏う鎧のようなイメージ。今はまだ完璧に扱えない。体が持たないから。だから――

くくく

「とりあえずこんなもんね」

思い出すのはキンランさんのトレーニングと時。マルマインに手も足も出ない。シャドークローも覚えて近接戦闘も可能になった。それでも足りない。具体的に言うなら速さ、それに攻撃の重さが……

「キンラン先生……私になにが足りないのですか？」

「……エネルギーね。例えば私のピカチュウなんか日頃から頬に電気を貯めて、足りないエネルギーを補っている。それに特性『もらいび』を持つポケモンは炎をあびることで強くなったりする。つまりダークライもなんかしらのエネルギーを作り出して身体能力を上げる術が必要なのよ」

「なるほど……」

「今日の練習はここまで。少し考えてみなさい」

そしてナナと僕は部屋に戻って考える。どうしたら強くなれるのか。そんなことを。しかし答えは出ない。そのまま朝になる。またキンランさんにボコられる。どう足掻いても勝てない。ナナの指示に体が間に合わない。どうしたら速くなれるのか……

そんな時にナナは口を開いた。

「ダークライ。あなたのやみのエネルギーを一斉放出で撃てないのかしら？ 素早さが足りないなら避けきれないくらいの攻撃で全てを吹き飛ばせば……」

そんな感じで攻略の糸口が掴めた。それからやみのエネルギーを一点に集めて放出。それは体の内部から裂くような痛みがあった。結果として勝負にするならずにフルボッコ。大きなエネルギーは問題なく撃てた。マルマインのひかりのかべを破壊する威力もあった。

しかし腕が腫れて使い物にならない。自爆覚悟の一撃でポケモンバトルでは使えない。だけどナナは方向も間違っていないという核心があった。そして僕も確かな手応えがあった。

僕はボールの中で少し考えた。どうしたら強くなれるのか。そもそも強くなってどうしたいのか。強くなる動機が強さに繋がる気がしたから。そして出た答えが『ナナを悲しませたくない』というもの。そして腫れた腕を見ながら地球時代に買っていた漫画のことを思い出した。その主人公も同じような力の扱いで悩んでいた。僕と似たような力だ。そして主人公は力の扱いで視点を变えて答えを出していた。僕はふと思いついた。その主人公と同じ力の使い方が僕もできるのではないかと。

その結果として僕はエネルギーの扱いに成功した。それはマルマインと互角以上に戦える力を僕に与えてくれた。そして名づけた名前前は……

くくく

「それじゃあダークライ。全力で勝ちにいくよ！」

あの時に覚えた必殺技。まだ完成形ではない。もっと上の力もある。でも今の僕にはこれが限界。だけどこれからもっと強くなる。ナナを絶対に悲しませないように負けないように……

『ナイトメアシフト・2%』

48話 ナイトメアソフト

宙を賭ける。ここではビルの壁を床にしてエンティとメガラグラージが物理法則を無視して戦っている。僕は背後からエンティにダークホールで襲い掛かる。しかしエンティは簡単に回避。そのまま僕に襲い掛かってくる。そのエンティの勢いをあくのはどうで殺して距離を取る。いくら物理法則を無視した動きだとしても物理法則から逃れられるわけじゃない。少しでも気を抜けば落下だつてする。だが本気のあるのはどうでも勢いを殺すくらいの威力しか出ないのかよ！ 明らかにデタラメじゃねえか！

そんなエンティが僕に追撃をしようとするが、それが幸いにもメガラグラージが間に入り、パンチでカウンターを決めてくれたおかげで僕に攻撃は届かない。

世の中はレベル差が全てだ。レベル差は相性も上回る。レベルが離れば電気タイプの子でも地面タイプに効いたり、ゴーストタイプの技がノーマルタイプに通用したりする。僕がメロエツタにシヤドークローを当てた理屈がそれだ。そして防御面も然りだ。弱点を突こうがレベルの離れたエンティには通用しないことすらありえるだろう。それでも勝ちたい！

「ダークライ！ もっと強く！ 今のあなたの力はそんなもんじゃないはずよ！」

ナナからの責。そうだよな。レベル差は絶対だ。しかし勝負中にレベルが上がらないと誰が決めた？ レベルが足りないなら上げればいい……体よ……一瞬だけ持つてくれよ！

『ナイトメアソフト・5%・あくのはどう』

一時的にやみのエネルギーの放出量を上げる。そして体がダメージを負わないギリギリのあくのはどうをエンティに叩きつける。メガラグラージに完全に気を取られていたエンティはあくのはどうを直撃して、吹き飛ばされる。しかしすぐに起き上がってくる。全力でも吹き飛ばすだけかよ、しかもダメージにすらならない。がちでメガラグラージがいなかったら瞬殺されてるな。

「まったく……随分と暴れてくれる。でも貴様らが暴れているということは市民は眠れぬ夜を過ごすということ。そんなの私が許さん！」

エンテイが炎を体に纏う。明らかに火力が桁違い。当たれば間違いないく即死。がちで入院クラスのケガをするぞ。それにあんな炎を纏えばエンテイ自身も相当なダメージを負うはずだ。どう対処すれば……

「ヴィランは私が討つ！ エンテイ！ フレアドライブ！」

方法はあるだろ。忘れるな。僕には必殺技がある。レベル差があるろうが、それが実態を伴った攻撃なら僕には通用しない。僕はダークライだ。その辺のポケモンとは格が違う！

「なんだとー！」

「そのチャンスを逃さないわよ！ ラグラージ！ たきのぼりからのたたきつける！ そしてじしん！」

エンテイは僕に突進した。しかし僕には当たらない。体が透けてエンテイの攻撃を避ける。エンテイは実態を捉えられていない。通過を相手の攻撃に合わせて行うことで攻撃を避ける。付け焼き刃だけど上手くいった。そしてメガラグラージはその一瞬を見逃さない。あれほどの一撃を奪った。必ず倒すという確信が無ければ打てないだろう。だからこそ外した時はどんなに強いポケモンだろうが一瞬だけ隙が生まれる。その隙があればメガラグラージがエンテイを倒すのには充分だ。

メガラグラージはそのままたきのぼりでエンテイを宙に吹き飛ばす。メガラグラージのダメージをクリーンヒットしたのは初めてだろう。相当なダメージを負ってすぐには体勢を整えられない。そんな一瞬にメガラグラージが自慢の拳で殴り、地面に叩きつける。そして地にエンテイが落ちた瞬間にメガラグラージはエンテイを殴る。エンテイを震源地として大地震が起こり、ビルが倒壊する。そんな様子をナナが遠目で見る。

しばらくして地震が収まると辺り一面にビルの瓦礫が散らばっていた。そして中心には戦闘不能のエンテイ。そしてメガシンカが解除されてハトハトのラグラージ。

ただのじしんでここまでの威力。改めて思うととんでもないな。だが、ここ一帯の都市が崩壊したただけでまだ都市は残っている。しかしラグラージがじしんを連発したら容易く平らに出来るだろう。これがポケモンリーグ優勝者の実力……恐ろしいな。

「……あなた。名前は？」

「悪夢姫よ」

「ナイスファイト。最後のフレアドライブを避けたのがなかったらもっと長引いてたよ」

「前回ポケモンリーグ優勝者。ポポ。あなたのヴィラン名は？」

「ブレイカー……あとメガシンカしてラグラージも体力を相当消費してるから拠点に戻るまで護衛してくれると嬉しいな」

「もち……」

そんな時だった。マツハでコンクリートの柱が飛んできてラグラージを吹き飛ばす。それから人型のポケモンが飛んできてラグラージをタコ殴り。それによりラグラージが戦闘不能。何者だ！

「悪夢姫。あの時は逃したが、次は逃がさない」

「国際警察メディア！」

「今はヒーロー。ロボロボだ！」

まだ退場してなかったのか。これはマズい。あいつはヒーローの中でも主要戦力の一人。まともにやって勝てる相手じゃない。しかも毒も完治されている。あのマツハパンチを避けられるだろうか。初撃は通過で避けたとしても、その後はどうする？

すぐに対抗策を見つけてくるだろう。ここは退くしかないか。僕はナナを抱えて上から逃げようとする。上ならローブシンは追えない。しかし獣のような四つ足のポケモンが飛んできて、僕を蹴落とす。ドシンと音がする。幸いにもナナは僕が下になったおかげで怪我はなさそうだが……よりによってこいつまで……

「逃がさないよ！ ナナ……ううん、悪夢姫！ このキュートガールの名前に賭けて！」

「メア……最悪のタイミングね」

近くにはニンフィアもいる。かくとうタイプとフェアリータイプ。

どちらもおたくタイプの僕が苦手なポケモン。それに一体の相手ですら敵しいというのに……

「戦闘開始だよ！」

メアが歌い始める。そしてローブシンが明らかに先程も早く、重く殴りかかってくる。僕は通過させて攻撃を回避する。それと同時に腹がグウーとなる。これはマズい。あと一度でも通過したら空腹で動けなくなる。そんな時に背後にニンフィアが現れて僕を後ろ足で蹴る。重い一撃で吹き飛ばされるが、幸いにも致命傷にはならない。

「ダークライ！　しゃがんで！」

ナナの声に直感的に従う。すると真上をコンクリートの柱が掠る。間違いなくローブシンのマツハパンチ。もしも当たっていたら一撃で戦闘不能になっていた。

しかしメアの歌で明らかにローブシンもパワーアップしている。そういえばメアが言っていたな。どんなポケモンでも力を増強させる歌が唄えるようになったと。改めて思うとメアが強すぎる。あの歌で様々な強者をパワーアップされたら、一気に戦況がヒーロー陣営が強くなる。あまりにメアという存在が団体戦において厄介。サシの勝負でも勝つのは困難なくらい強いと言うのに……

「ロボロボ！　笑顔を絶やささないで！　笑って勝つからヒーローなんだよ！」

少し真剣な表情をしていたメアがロボロボに責める。しかしどうするんだよ……いや、やることは決まってるだろ。もう負けないと誓った。どんな強敵だろうが僕は勝って乗り越える！

「ダークライ！　いくよ。常時ナイトメアシフト・5%！」

ナナの指示通りにナイトメアシフトをする。今までの限界値は2%。その更に向こうの力。今の僕に耐えられるか分からない。でも不利な相手に勝つというのはそういう無茶をするということだ！

「……あくのはどうー！」

体から闇が溢れてくる。まるで闇の霧を纏っているみたいだ。体が裂けそうなくらい痛いのが、動けないほどではない。さっきのエンテイを吹き飛ばした時は一瞬だけの5%。でも今は常に5%の出力

……とりあえずナナの指示通りに手を振るう。あのエンティを吹き飛ばした威力のあくのはどう。それはローブシンを吹き飛ばすには充分だった。接近してきたローブシンを遥か遠くに吹き飛ばす。しかし、すぐに起き上がってくるだろう。その間にニンフィアを片付けなければならぬ。影を爪として纏い、瞬足でニンフィアに接近。連続的に闇で構成された爪で引つ掻き、ニンフィアの体力をゴツソリと削っていく。しかしニンフィアは耐えて、大きな声をあげる。それは衝撃波となり、僕の体を少しだけ吹き飛ばした。しかし距離は大きく離されていかない。そのままあくのはどうをニンフィアに叩き込み、大打撃を喰らわせる。ニンフィアは大きなダメージを負って動くのが厳しそうだ。今がチャンスだ！

「ダークライ！ 深追いは絶対にダメ！」
「ん？」

その時だった。頬が物凄い衝撃で殴られる。顔をあげるとローブシンの持つコンクリート柱が頬に練り込んでいた。物凄い痛みだ。だが、ここで意識を手放すわけにはいかない。ここでやられたらメガルカリオの時と同じだ。大きな後悔を残す。なんとか耐えるんだ。

「ダークライ！ ダークホール！」

ナナは信じていた。僕が絶対に耐えると。だから耐えることを前提でダークホールを命じる。僕もナナの指示通りにダークホールを撃つ。一撃を喰らわせて勝ったと思っっているローブシン。不意打ちに近い形で打つことになったダークホール。それは必中だった。ローブシンが深い眠りに落ちる。そして悪夢にうなされて呻く。

しかしチリンチリンという音がして、すぐにローブシンは目覚める。音のなる方を見るとニンフィアが鈴のような声を発して鳴いていた。あれは『いやしのすず』か。どんな状態異常でも治す厄介な技。目覚めたローブシンはすぐに戦闘態勢に戻る。そしてニンフィアも起き上がれるくらいまで傷が癒えていた。

「避けられるなら、避けられなくするのよ！ ダークライ！ 雨を降らせなさい！」

そういうことか！ 僕はダークホールを空に目掛けて撃つ。それ

と同時にローブシンが殴りかかってくる。僕はそれを影で出来た爪で受け止めて、やり過ぎそうとする。しかしすぐに粉碎されてローブシンは追撃に入る。しかし僕の手の方が早い。空から闇の雨が降り注ぐ。雨粒が全てダークホール。当たれば即眠り。やり過ぎせるものなら、やる過ぎしてみろ！

「ローブシンー！」

雨を避けるなんて並大抵のポケモンでは不可能だ。この場にいる全てのポケモンが眠りに落ちる。ニンフィアも眠った。この場には起こせるポケモンはいない。そして僕もガクリと倒れる。ナイトメアシフトも完全に解除。もう完全にダメージが許容限界を超えている。でも速くトドメを刺さないと。そうしないとローブシンはすぐに起き上がってくる。そうじゃないと……

『仮想戦闘祭終了！ ヴィラン陣営が民間人を二百名以上の殺害を確認！』

そんな時だった。アナウンスが鳴って試合の終わりが告げられた。一体なにが起きた？

「……あー負けちゃった」

メアがうなだれる。ナナも呆氣にとられる、一体なにが起きたのだろうか。そんな中でローブシンのトレーナーであるメデアが解説する。

「あの大地震だな……恐らくあれでゴツソリとマネキンを破壊。数で言うとおと百といったところだろうな。そして残りの百。しかもこっちはウルトラがない。恐らくヴィランの精鋭達が走り回り、マネキンの破壊に専念したんだろうな」

「あ……」

これはあれだな。ナナも僕も完全に時間稼ぎに使われた。その間にボスが全てのマネキンを破壊した。それにジムリーダーのニシンもいる。不可能ではないはずだ。それにボスの力が未知数過ぎる。その気になれば最初から勝っていたのかもしれない。

そんな時だった。テレポートでラルムが現れた。雰囲気はまるでラスボスだ。

「戦いに専念して、チームワークも連携も出来ていないクソヒーロー。ヴィランを倒すことばかりに気を取られて市民も守れねえのはどんな気持ちだ?」

「……お前は?」

「ヴィラン名はボス。素性の掴めない男だけど、私達に指示を出していた男よ」

「ああ……デトワール地方で最大級の祭りだと期待してみればこんなものか。張り合いがねえぞ……」

「……随分と好き勝手言うんだね。それでなにを言いに来たの?」

「あ? ヴィランが勝ったらヒーローを煽るのは当然だろ。むしろ互いに検討を称えあうみたいなのヴィランらしくねえことしろとでもいうのか?」

「……うーん。祭りなんだから互いに気持ちよくなるように心掛けるべきなのかなと私は思うよ」

「それなら俺を気分良くさせてくれよ……お前らが弱すぎるせいで俺の作戦が全て使うまでもなく終わっただろ……まったく……実につまらない。真面目に作戦を寝ないで考えた俺が馬鹿みたいだ。それとナナ。ダークライの使い方はちよつとは分かったかよ?」

「……まだですかね」

「そうかよ。弱かったらなにも守れねえぞ」

そしてボス……ゴウー団のボスのラルムはバタフリーのテレポーターで消えていく。そして彼の姿は閉会式でも見ることはなかった。

49話 悪夢姫

仮想戦闘祭が終わった。改めて実力が足りていないと実感させられた。ナナが目指すのはチャンピオン。今回はギリギリの勝ちだった……しかしそれじゃダメだ。危険の一つも感じないくらい強くならなければ。僕たちが目指すのはそういう道だ。ナイトメアシフトの5%では恐らく本気のジムリーダーには通用しない。もっと出力を上げなければ……

この世界に来て気づいた。この世界にギリギリの接戦なんてない。あるのは呆気ない勝利だけ。もしも接戦があるとしたら、それは負けないように必死に足掻いている時。つまり自分が不利な状況が有利な状況に変わろう。もしくは有利から不利になろうとしている時。ギリギリの接戦なんて起こってはいけないのだ。いつだって余裕の勝利じゃなければならぬ。

「……ダーククライ。今回の敗因はなんだと思う？」

そしてナナと反省会。まずエンテイの時。あれは悪くはなかった。いま出来る最善のことをした。問題はニンフィアとローブシン。あの時はどうすれば良かったのだろうか。今回の行動は本当に最善手だったのだろうか？

「そうよね……絶対にもっとうまく立ち回れた。でも私達にはその方法が分からない。どうすれば良かったのかしら……」

そんな時だった。ムンナがボールから無理矢理出てくる。ナナは少しだけ驚きの表情を見せる。しかしすぐに冷静になり、ムンナが言いたいがあるのだと察して、ムンナに喋るように促す。

「ンナッ。ンナ（あれはいくらなんでも無理。勝てただけ奇跡）」

「そうだけど……」

「ンナ……ンナ（そもそもダーククライ一人に背負わせすぎなんだよ……ポケモンにも有利と苦手。得意と不得意がある）」

そこで気がつく。僕が全てやる必要はない。もしも僕一人で全て大丈夫なら、他のポケモンはいらないはずだ。僕一人でナナをチャンピオンにするわけじゃない。ムンナやスピアールとみんながナナを

チャンピオンにする。僕が勝てないならムンナやスピアーが……そして逆にムンナ達で勝てないなら僕が勝つ。それでいいんだ。

「そうだね……ごめんね。ムンナ。スピアー」

「ンナツ（俺達も頼れよ）」

「……敗因はダークライ一人に全て背負わせたことね。私はポケモントレーナー。ダークライ一体が全てじゃないのよね」

そして今日の反省会を終える。ナナは手元にあった新聞を読む。その新聞を読んでナナが少しだけ真剣な表情になっていく。

「レジアイスの捕獲……？ 前のジムリーダー含む大規模なレジアイ

ス討伐部隊が組まれたが全て返り討ち。さらにレジロツクに関して事情ありとは言えキンランさんが取り逃がすようなポケモンよ？

「いったい誰が……」

新聞の記事には新人トレーナーがレジアイスを激闘の末に単独で捕獲と書かれていた。さらに記事の写真を見て驚く。そこにはグソクムシヤを相棒にしてる僕たちのよく知っているトレーナーが写っていたから……

「ノエル！ 彼は一体どこまで強くなってるの！」

レジアイスを捕獲したのはノエル。新聞には大々的に取り上げられていて、インタビュー記事まで書かれている。ノエルもチャンピオンを目指している。恐らくポケモンリーグで戦うことになるだろう。レジアイスを一人で捕まえるようなトレーナーと戦わなければならぬのか。

「そして国際警察が秘密裏に確保していた色違いのボルケニオンの情報はデマだと判明？ 正体はメタモンであり、悪質なトレーナーが色違いボルケニオンの姿を覚えさせてデマを拡散していたことが判明……国際警察は裁判を起こす気ているがどうなるか不明……か。これはどうでもいいわね」

それから他の記事にも目を通す。色々な記事がある。小さくだがナナのこと書かれた記事もある。最近ではナナに熱心なファンが出来て、意外と記事の需要はあるらしい。もっとも何故かナナの元にインタビューはこないが。それに今夜の仮想戦闘祭のことも書かれ

ている。それにやはりラルムのことも書かれている。それよりもメインは……

「ポケモンリーグ新規参加者予想リスト。やっぱり連載されているわね」

この時期になると毎年恒例のものだ。若手の注目ルーキーやベテラントレーナーを集めて今年のポケモンリーグが誰が出るか予想記事が書かれる。そこに書かれているトレーナーというのは当然ながら新参者。つまり期待のルーキーとして扱われている一目置かれた存在ということになる……

「……え？」

そこにはナナとノエルの名前。それにボルノの名前も書かれている。まあボルノはシノノカップで優勝しているから当然。ノエルもレジアイス捕獲という実績もある。ナナに関してはシノノカップで高成績を収め。キンランの弟子。そしてチャンピオンの実の妹ということで注目株だ。だが……メアがどうして書かれている？

「わあー私が書かれてる！ でもポケモンリーグは興味ないし、バトルは嗜む程度なんだけどなあ……」

メアがひよっこりと現れてナナに後ろから記事を眺める。しかし嗜む程度とは言ってもメアって相当強いんだよな。少なくともバトルで小遣い稼ぎ出来るくらいには。

「ていうか私たちの全員がポケモンリーグ出場候補になってるわね」

「あ、私はポケモンリーグに出ることは確定してるから！」

「……ふへっ？」

「いやあ……まあ選手としてじゃないんだけど。シノノカップからしばらくしてポケモンリーグ委員会からバトル中に歌ってほしいという依頼が来てね。だから流れで……って感じ？」

「いつの間に……凄すぎて言葉も出ないわ」

「ほら、実は雑誌のインタビュートか受けてたり？」

そしてメアが雑誌を渡す。それはファッション誌だった。ページを開くと可愛らしくメアが色々な服を着ている写真がある。ほんといつの間に有名人に……

「まあでもポケモンリーグの話はオフレコだけだね」

もうメアは本物のアイドルだな。しかしメアもかなり注目株になってきた。そう思ってた矢先だった。ピンポンと部屋のベルが鳴った。ここはポケモンセンターで宿屋として一室借りているが、用がある人は普通にインターホンを使用する。それどころか頼めば配達員が来たりもする。

「誰かしら？ 私が出るわね」

ナナが出るとそこにはスーツの男がいた。ゴオー団の服もスーツだが少し形状が違う。恐らくゴオー団とは無関係だな……

「あ、ナナ様ですか？ それとメア様もいますか？」

「そうですけど……」

「実は私はこういうもので……そのファッション誌の表紙トレーナーのモデルになってくれませんか？」

「はあ……」

「衣装はいつもの黒いロリイタ服で大丈夫ですよ。実はナナ様の容姿に魅了されるトレーナーが意外と多くてこっちの業界ではシノノカップ以降ずっと話題になってるんですよ。それなので今回は『話題のトレーナーナナのファッション！』という記事を書こうかなと」

「今回のファッションは私はこんな服を着てますよーという記事を書きたいから、いつもの服でいいということですね？」

「はい。それとずっと前から声をかけようと思っていたんですが……ジムリーダーのキンランさんに修行の邪魔になると門前払いされてですね……ずっと私達もナナ様の写真を撮りたくてもどかしかったんですよ……」

なるほど。考えてみたら強くて可愛くてダークライを使い、さらに現チャンピオンの妹のナナが話題にならないわけがない。しかしナナに記者とかは来なかった。それはキンランさんが全て払っていたからか……全てが繋がった。

「別に良いわよ。でも賃金が出るのかしら？」

「もちろんです」

「いくらくらい？」

「そうですね……(ご)によ(ご)によ……くらいはどうでしょう?」
ナナがニヤリと笑う。そして二つ返事で写真撮影を受けた。

翌日。待ち合わせ場所にメアと共に呼ばれた場所に行く。ナナはいつも通りの黒のロリイタ服。メアは可愛い黄色のスカートに白のブラウスという現代日本にいてもおかしくない感じの衣装だ。そして待ち合わせ場所は廃墟だった。アメコミタウンは様々な建物がある。それらは全てが映画撮影用。ここで作られた映画はポケウツドとしてデトワール地方各地に送られる。しかし映画撮影だけではなく、このようにファッション誌の撮影や仮想戦闘みたいな祭りにも使われていたりする。

「よく来てくれました!」

「こちらこそ、お仕事の紹介ありがとね。ところで今回はポケモンは出すの?」

「そうですね……たしかにナナと言えばダークライという節もあり、ダークライも見た目の良さから大変人気が高いですよ。それにメアさんのニンフィアも……うん、予定にはありませんがポケモンを出す読者受けが良さそうですね。両方の写真を撮りましょうか」
「いいよー」

「それじゃあ本日のスケジュールの確認です。まずナナ様とメア様だけのツーショット写真。その次にお二方にポケモンを出して頂いて一枚。それを終えましたらメア様だけの写真を数枚、ナナ様だけの写真を数枚撮って解散という流れになります」

「おっけー。ナナもそれでいい?」

「ええ」

そして僕とニンフィアがボールから出される。このニンフィアとツーショットとかマジかよ。今すぐメロエツタとチェンジしてほしいのだが……

「フィア〜(ダークライに写真撮影は少し早いんじゃない?)」

「ア?」

「フィア(こういうのは私みたいな品のあるポケモンが……)」

「ニンファイアはこれ以上煽るのはやめようか」

メアがニンファイアを軽く叩く。ざまあだな。トレーナーに注意されるとかまじでポケモンとして情けねえ。いや面白れえわ。

「ダークライも小馬鹿にしない。しかしニンファイアとダークライは本当に仲が悪いわね」

今度は僕がナナに叩かれる。なんだよ……ちよつとニンファイアのことを笑っただけじゃないか。まったく……

「とりあえず二人とも後でお仕置きだね」

メアが笑いながら言う。しかし目が笑ってないから怖い。あとでいったいなにをされるのだろうか……ああ……考えただけで寒気が……

「それじゃあ写真を撮りますよー私の指示通りにポーズをしてください」

それから本格的に写真撮影が始まる。フワンテにぶら下がったチョンチーが証明の代わりになったり、オニドリルが影になるために飛んだりと本格的だ。しかし写真撮影までポケモンを使うのか……

写真はポーズや向きを変えてたくさん取る。あとで聞いた話だが一枚というのは乗せる枚数であり、枚数だけはたくさん取るらしい。しかしどんな写真が撮れるのか楽しみだな。

「それとすみません。大変申し訳ないのですが私のカメラ写真を一枚だけいいですか？ ナナとの思い出。私はナナと一緒にいたという証拠を写真として残したいんです」

「ええ。いいですよ」

メアが写真撮影が終わりそうなタイミングでカメラマンに声をかける。カメラマンも二つ返事でOKを出した。そしてメアがボールを投げてポケモンを出す。ルンパツパにウルガモス、それにメロエツタだ。

ナナもそんなメアを見てボールを投げてムンナとスピーアーを出す。そして鞆から卵を出して抱える。

「ナナ？ その卵は？」

「せっかくの記念撮影だもの。これから仲間になるこの子も入れてあ

「げたいの」

「そっか」

カシャリとシャッター音が鳴る。記念写真が一枚撮られて、思い出が形として残される。これからなにがあるうと、この写真が僕たちの関係の証明になるだろう。

「撮れました」

「ありがとうございます。無茶なお願いしてすみませんでした」

「いえいえ。このくらいお安い御用ですよ」

「……メア。あとで写真を一枚貰えるかしら？」

「うん。いいよ！」

その後は個人の撮影に変わる。カメラマンの指示に従って先程と同じように写真を取る。早朝から始まった写真撮影は気が付いたら昼頃になっていた。

「そういえば多くのトレーナーは二つ名がありますよな。ナナ様はあののですか？」

「そうね……一応『悪夢姫』というのがあるわよ」

「そちらの服と相まって素敵なお二つ名ですね。ご自身で考えたのですか？」

「いいえ。私の大切な人に付けてもらったのよ」

「そうですか」

それで写真撮影が終わり、お開きになった。後日ナナとメアが表紙を飾った雑誌が販売される。そこには『『悪夢姫』ことナナ。彼女の魅力に迫る』と少しファッション誌からズレたインタビュー記事が記載されたりもした。そしてこの一件以降ナナは『悪夢姫』の二つ名と共に大きくデトワール地方に知られることになった。

50話 ダグトリオ山脈での出来事

僕たちはアメコミタウンを後にして南西にある山にいた。通称ダグトリオ山脈。僕たちはここを超えてデウスシテイを目指す。しかし問題はダグトリオ山脈。実は三ヶ月の修行でナナの登山嫌い一切克服出来てない、つまりナナがレポートでデウスシテイに行きたいと駄々をこねはじめたのだ。しかしメアがそれを許さない。一度決めたルールはしつかり最後まで通すべきだという。

「ていうかなナ。いま思ったんだけどシノノタウンから北に真っ直ぐ行ってルルタウンのジム戦をすれば良かったんじゃない？ それで西の方から攻めれば……」

「レジよ。レジ達がルルタウン周辺にいたのよ。だから東から攻めることにしたの」

「なるほど」

「まあとりあえずお昼にしましょう！」

ベアルンの提案に二人とも二つ返事で答える。今日は天気が良いから外でバーベキューだな。ナナもメアもボールから全てポケモンを出す。ベアルンもブルーバー、ゴンベ、バニプッチと全てのポケモンが出てくる。それじゃあ昼に……

「ダグ！ ダグ！ ダグ！」

「あら……野生のダグトリオ。まあダグトリオ山脈の近くだし当たり前か」

「そうね……って！ ダグトリオ！ これはマズいわ！ ここのダグ……」

ナナがボールを握って僕たちを戻そうとする。しかし足元に大穴が開き、一気に飲み込まれる。突然のことの誰も対応出来ない。しかも中は複雑なトンネルで落下中にみんなとはぐれてしまう。そんな中でナナの声だけが聞こえた。

『このダグトリオはいたずら好きだと……そしてダグトリオ山脈の頂上に集合』と。

それから数十分トンネルで回されて地面に落ちる。恐らくダグト

リオの掘ったトンネル。たしかナナの話だとダグトリオの穴はダグトリオ山脈の内部に通じている。つまり道なりに進めばダグトリオ山脈に出るわけだ。そしてナナは言った、頂上で待つと。それなら……「いったー。もう最悪！」

そんな時だった。忌々しい声が聞こえる。なんでよりによっていつと同じ場所に落下するんだよ。あのメアのニンフィアと同じ場所なんて……

「おい。僕は一刻も早くここから出たい」

「私も同感。こんなジメジメしたところ御免だわ」

「……仕方ねえ。今だけは強力するか」

「強力してくださいの間違いでしょ？」

「あ？ お前が強力を仰ぐ立場だろ」

「品のないポケモンと組みたくはないわ」

そんな時だった。地響きがする。気が付いたら目の前にバンギラスが現れる。しかも荒れている。恐らくダグトリオにいたずらされたとかいうオチだろ。

「ニンフィア。あいつは悪タイプ。お前のハイパーボイスで倒せるよな？」

「もちろん。ダークライはダークホールで足止め出来る？」

「当たり前だろ」

「それじゃあ頼んだわよ」

僕はダークホールを飛ばす。本能的にヤバいと感じたのかバンギラスは穴を掘ってダークホールを避ける。これが戦闘開始の合図だった。バンギラスは僕の真下から飛び出て襲い掛かってくる。僕は一步下がって回避。カウンターのシャドークロードバンギラスの腹を切り裂き、怯ませる。その隙にニンフィアがバンギラスを後ろ足で蹴り飛ばす。僕は飛んでくるバンギラスを避けてニンフィアの後ろに回る。そしてニンフィアがハイパーボイスでバンギラスにトドメの一撃を叩き込んで戦闘不能に追い込んだ。

「……ダークライ。なんでダークホール外してるの？」

「お前こそ穴にハイパーボイスを叩き込むくらいの工夫はしろよ」

少し口喧嘩をしてると天井がグラグラと揺れ始めた。これはヤバいな。ニンフィアのハイパーボイスの衝撃で少し倒壊が始まったか。

「……まずは逃げるか」

「そうね。生き埋めは御免だもの」

僕とニンフィアは走り始める。しかし途中で大きく洞窟が崩れ始める。これはマズいと感じた僕はナイトメアシフトを5%でやってニンフィアを抱えて一気に駆け抜ける。だけど目の前を大岩が道を塞いでいた。それに素早く気づいたニンフィアが周りに影響を与えないくらい小さなハイパーボイスで見事に岩だけを破壊する。岩を破壊して先に行くとなりに繋がる穴があった。僕はニンフィアを抱えて真っ直ぐ上を目指した。結果から言うと九死に一生を得る形で間に合った。ナイトメアシフトをしたせいでごっそりと体力が持つていかれたが無事だ。しかし仮想戦闘祭の時より体が重くない。間違はなく5%に体が慣れてきている。恐らく今なら常時2%くらいなら出来るだろうな。しかし、これなら近いうちに最大出力を8%くらいに上げてても問題ないか？

「……ありがとう」

「ごっちゃんもハイパーボイスで岩を破壊してくれたのは助かった」

上に来たら壁が土から石に変わった。恐らく本格的にダグトリオ山脈に迷い込んだのだろう。しかし見た感じだと完全に人の手がまったく入ってない天然の洞窟だな。そういえばナナが基本的にダグトリオ山脈は岩山で外は内部は天然の洞窟を進むと言っていた。そして中のダグトリオは見かけたら迷わず戦闘不能に追い込まないと大変なことになるとも……

「ダークライ。これからどうしようか？」

「とりあえず上を目指す」

「私が言いたいのは上を目指す方法だよ。正直に言うとなに行く道を探して……なんてやっていたら日が暮れると思うの。だから天井を壊したりとかね？」

「それはやめといた方がいい。洞窟が倒壊したら危険すぎる」

「そうだよね……」

しかしニンファイアの言う通り正攻法で攻略したら日が暮れるよな。なるべく早く行かないとナナも心配しているだろう。そんな日が暮れるまでなんて待てない。行くなら最短距離だ。だけど最短とは……

「ダークライ。ごめんね……私のせいで……」

「いつになく弱弱しいな」

「もしもダークライ一人なら通過で頂上まで一瞬で行けるよね？ だから……」

「馬鹿言うな。お前一人残して行ったら僕が怒られるだろ。出る時は二人一緒だ」

壁抜けも不可能ではない。しかし途中で空腹で力尽きたら最悪だ。出来るだけリスクは背負いたくない。

「ダークライ……」

「なあ考えたんだが、最短距離を知ってるやつがいるだろ。そいつに吐かせるのはどうだ？」

「あ……」

「そうだ。ダグトリオなら知ってるんじゃないやねえか。ここら辺の地理は」

そんな時だった。爆走で走り回るポケモンがいる。それに傍迷惑なことに地面を炎で焼きながらだ。しかも目を凝らすと見たことのあるポケモンだ。あいつら一体なにをしてるんだよ……

「よっ！ ダークライ！」

「ムンナ……ウルガモスに乗ってなにをしている？」

「いや、ウルガモスと会ったから二人で上に行く道を探してるんだ」

「その通りだ。ちなみに私は地面を熱してダグトリオの炙り出しを狙っている。あいつらにはお仕置きしなければ気が済まぬ」

「いや、意味ないと思うぞ。地中深くに潜られたら熱は届かねえし」

「不覚……」

「しかしダークライ。これからどうするんだよ？ 俺はまだナナと旅をしたいぞ」

「頂上に行くしかないだろ」

「……ねえ思ったんだけどウルガモスに乗せてもらって外から頂上を目指すのはどうかな？ もっともブルーバーを見つけた方が早いとは思うけど……」

「その手があったか！」

それなら問題ない。上に続く道を探すより出口を探した方が手っ取り早い。こればかりはニンフィア、ナイスアイディアだ。

「でも全員が離れるのは不安が残るな……テレポートの出来るブルーバーはともかくスピアー、ルンパツパ、ゴンベ、バニプッチは無事に頂上まで行けるのか？」

「しかしナナ達と合流してる可能性もある。一度合流してからナナ達と一緒に探した方が確実ではないか？」

「それもそうだな……」

そんな時だった。綺麗な歌声が聞こえた。それに美味しそうな匂いもする。一体なにをなんなのだろうか？

「……罨だろ」

「罨だね」

「俺も罨だと思う」

「いや、誰が罨を仕掛けるんだよ」

今回の一軒は野生のポケモンによるものではない。罨が仕掛ける人はいない。だから安心していいだろ。それになにかあつてもこの面子ならどうにかなるだろ。

「それじゃあ罨じゃない？」

「罨じゃないと思うぞ」

「俺も罨ではないと思う」

「それじゃあ行くか」

そして匂いのする方に行く。ジュウウウウとなにかが焼ける音。聞いただけで唾液が止まらない。それに綺麗な歌。それが僕達を魅了する。もしもこの歌を聞きながら食事が出来たらどんなに良いか……

「……っってお前らかい！」

僕は顔を上げてツツコミを入れる。歌の正体はメロエツタ。そし

てスパイアがタコ焼きを焼いている。近くではゴンベが椅子や机をセッティング。バニプッチが近くににいるダグトリオや先程のバンギラスにタコ焼きを振る舞っている。

いや。待てよ。なんでダグトリオが普通に客としているんだよ。

「あー久しぶり！ 地底湖でタコが採れたからタコ焼きの屋台をやっているよ！ 鉄板や他の材料はゴンベが拾ってきてくれたの！」

「さあ食べ食べ！」

「味は塩だれとタレだよ」

「とりあえずメロエツタ！ 歌います！」

心配して損した……なに？ 気に屋台を開いてるんだよ。ていうかポケモンが屋台を開くとか前代未聞だろ。色々とおかしいだろ。マジで。

「あ！ ダーククライ！ ムンナ！ 無事でよかった！ それとタコ焼き食べる？」

「ニンフィアとウルガモスもどう？」

そして座席に座ってナナとメアも普通にくつろいでるし……しかもよく見たら近くにベアルンとブーバーもいる。頂上で待つってなんだったんだよ……

「……タコ焼き食べ終えて一息付いたらブーバーのレポートで頂上に行くつもりだったわよ」

「でも彷徨ってたらベアルンのゴンベが私達のポケモンとタコ焼き屋やってるからビックリだよ」

「ゴンベは味見係ですが、僕の助手で料理を手伝ってもらってますから」

しかしスパイアよ。手の針でタコ焼きをひっくり返すとは随分と器用だな。ナナ達が普通に食べれているということは毒が入ってるとかはないだろうが……

「さあとりあえずタコ焼き食べてダグトリオ山脈を抜けよう？ ダーククライ」

ナナが僕の口にタコ焼きを投げる。それはムカつくくらい美味しかった……

51話 四匹目

それから何事もなくダグトリオ山脈を抜けた。ナナ達はいつの間に仲良くなっていて、ダグトリオ達から悪戯されることもなかった。そして現在はダグトリオ山脈の頂上。時間は夜。星が凄く綺麗だ。あとは山を下ってデウスシティに行くだけだ。しかしこ暗いので街に行くのは明日になるだろう。そんな時だった。僕たちは光るポケモンが大量にいるのを見つけた。それはまるで地上の星のようだった。しかも赤色や青色、黄色など個体によって色も違う。だけど凄く綺麗だ……あれ？ 一体だけ石みたいなのポケモンが紛れてるぞ？

「……ダークライ。行くわよ」

見惚れているとナナが冷たく言う。まるでそのポケモンに興味がないかのようだ。そしてメアもなにも言わずにその場を後にする。

「え!! ああのポケモンの様子をみないんですか？ 殻から出られなく困ってそうですよ?」

この場を素早く後にしようとするベアルンが陽気にナナ達にそう言う。しかしナナ達は冷たくあしらった。今までにないくらい冷たく……

「観察したいなら勝手にすれば？ 私は絶対に嫌よ」

「ナナに同感。とりあえず私達はテント立ててくるね」

「ダークライも様子をみたいならベアルンと一緒にどうぞ」

一体なんなんだ。まるで二人共あのポケモンに関わりたくないという感じだ。しかし止めないことから危険はないのだろう。でもどうして……

「まあいいです。ダークライ。二人で観察しましょう」

「ソウダナ」

「無事に周りの子達と同じように光れるといいですね。しかし二人とも随分と冷たいです」

「アア……」

眠くて疲れているからか？ いや、でも態度が明らかに不自然だ。それからしばらくするが石のポケモンの殻が一向に割れる気配は

ない。周りの子達も宇宙に行ってしまった。そんな時にナナが寝間着でやってくる……

「ダークライ、寝るからボールに戻って」

「ナナ……」

「……分かったわよ。このポケモンの殻が割れるまでここにいるわ。だから最後まで責任持つて、このポケモンの面倒をみなさい。たとえどんな結末になろうともね」

そして、この日を終えた。ナナは綺麗な朝日と共に目を覚ます。そして周りに誰も寝ていないことを確認すると僕をボールから出す。僕はベアルンの方に行く。するとベアルンは赤く光るポケモンと遊んでいた。

「ダークライ！ 昨日の子の殻が割れましたよ！」

「オオ！」

「先程ナナにポケモンの名前を聞いたところメテノというそうですよー無事に他の子達と同じように宇宙に行けると良いですね」

メテノ？ そういえばナナが前に言っていたような気がする。

たしか人がいないと生きていけないポケモンだと……それはどういう意味だろうか？

「ダークライ？ どうしました？」

「……ナンデモナイ」

「そうですね。しかしメテノというポケモンは可愛いですねー。それじゃあ僕は朝御飯を作ってきます」

そしてベアルンがメテノを連れて朝御飯を作りに行く。今日の朝御飯はサンドイッチでとても美味しかった。それから日課のポケモンバトルだ。メアといつものように軽く手合わせ。それでも時間が余る。そして各自の自由時間だ。ナナはポケモンの知識を深めるために本を読みふける。メアは歌と踊りの練習。僕たちは暇だ。だからナナに許可をもらってムンナと二人でメテノのことに行くことにした。

「みなさん！ こんにちは！ メテノです！」

「おつす。みんなと同じように無事に空に行けるといいな」

「はいー」

ムンナとメテノが無邪気にじやれ合う。そんな時にベアルンがポフィンを焼いて持つてくる。僕たちはそれを美味しくいただく。しばらくするとウルガモスやスピアーも様子を見に来る。そしてメテノの交えて軽く遊ぶ。途中からルンパツパやニンファイアもやってきて先程よりも賑やかになる。しかしナナとメアだけは混ざることがなかった。

そして夜になった。さすがにナナ達も外に出てくる。空からは大量のメテノが降ってくる。まるで流れ星のようだ。そして殻が割れて空に飛んでいく。この様は凄く綺麗だった。

もちろん僕たちが面倒を見ていたメテノも例外ではない。周りと同じように空に飛んでいく。僕たちはメテノから目を離さないように必死に目で追う。だけど驚くことが起こった。

「……エ？」

啞然とする。メテノが消えたのだ。言葉通り跡形もなく消えたのだ。

メテノはどこに行っただ？ おい。無事なのか？

「……ダークライ。メテノは空に飛んでいくと——死ぬのよ」

「ウソダツ！」

「そういうポケモンなのよ……だからメテノとは関わりたくないのよ」

二人の冷たい態度の理由が分かった。二人ともメテノというポケモンについて知ってたんだ。メテノの寿命が長くないということ。そして仲良くなれば別れが辛くなるから関わらないようにしてた。

「そんな……死……ぬ？」

ベアルンがガクリと膝を折って、地面に足をつく。ナナはそれを無言で見っていた。ポケモンも死ぬ改めて、そのことを強く実感させられた、ポケモンだって生き物で寿命がある。身近な死を体験することで強く思い知らされる。

「ああああああああああああああああああ！ メテノ！ メテノ！」

ベアルンが叫ぶ。声がこだまして帰ってくる。ふと周りをみるとムンナもニンフィアもみんな泣いていた。ナナとメアだけは無言で立っている。そしてメアは興味がないかのように、その場を後にする。しかしナナはその場に残り傍にいた。

「そうだ……ボールで……捕まえれば!」

「ボールの中なら殻を再構築出来るから生きられるわね。だけどメテノだって一体じゃない。全ての個体を同じように可哀想と思って保護してたらキリがないわ」

「でも……」

「それに死ぬのが不幸ってわけじゃないわ。メテノだって自分が空に飛んでいけば死ぬのはわかっていたはず。それなのに空に飛んでいったのはどうして?」

「僕は……」

「少なくとも私が見たメテノは死ぬ時に悲しそうな表情をしてなかったわ。それどころか嬉しそうだって。きっとベアルンと一緒にいれて幸せだったと私は思う」

ナナはベアルンの隣に座ってメテノを眺める。綺麗な光景。しかしメテノが全て死ぬということを知ってしまうと素直に楽しめない……なんか手はなかったのかな。

「死ぬから不幸なんて思うのはメテノに失礼よ。私達が思っても良いのは寂しいということだけ」

「そうですね……」

「……これだからメテノとは関わりたくないのよ。だって別れが約束されてるんだもの」

ナナの言葉に妙に納得した。どうにかして生かそうとするのはメテノへの冒瀆かもしれない。メテノは死んだ。しっかりと自分の生を全うして死んだのだ。だから外野がとやかく言うことじゃない。

しかしナナは大人だな。年齢はまだ十二歳のはずなのに心が僕なんかよりよっぽど大人で……強い。きちんとメテノという生き物に敬意を払って自分の感情に流されずに生物として尊重出来る様は誰が見ても大人の行為だった。

「でも……死ぬポケモンはなるべく減らしたいわね」

そしてナナもその場を後にする。僕もナナに続いて立ち去る。ナナはそんな僕の頭を軽く撫でる。それは少しだけ気持ちいい。ナナは僕たちが思っているより何倍も強い。改めてそう思った。だから安心してナナを信じられる。ナナの指示に身を委ねられる。ナナなら勝たせてくれると……恐らくそういうのはバトルの腕だけじゃない。ポケモンに対する考え方や理解に尊重。そういうのもなければ成立しないだろう。僕のトレーナーがナナで本当に良かったと改めて思う。

翌朝。メテノの件を忘れたわけじゃないし、まだ少しショックもある。それでもデウスシテイに行こうとテントを片付けて準備をしていた。しかし途中で思いもよらなかったことが起こった。

「ツタアアアアジャァー！」

ナナの持っていた卵が孵って産声を上げたのだ。

「……色違いのツタァージャ。しかもメス。あの人はとんでもない卵を渡してくれたわね」

生まれたのはなんと色違いのツタァージャだった。そしてナナの手持ちに四匹目加わることになる。

51話 3つ目のジム戦

そしてツター ज्याを加えてデウスシティに到着する。ツター ज्याはボールの中でスヤスヤと寝ている。生まれてからすぐに寝たため会話もしていない。ていうかボールの中以外で眠られると困るんだよな。僕の特性はナイトメアだから……

「そういえばツター ज्याに名前は付けるの？」

「付けないわよ。少なくとも私は」

「だよー」

名前を付けない理由。それは単純に責任を負いたくないのだ。もしもポケモンが気に入ら名前を付けたら悲惨だ。それをずっと背負わせることになってしまう。だから名前を付けずに種族名で呼ぶ方が無難である。あとは単純に他の人にも種族名の方が伝わりやすいというのがあるが……

「とりあえずジム戦をしましょう」

「そうだね」

そしてジムに行く。幸いにもジムリーダーは空いていて今からでもジム戦が出来るそう。相手は少し大人の男性。髪の色は黒髪。細身だがしっかりとした筋肉が付いている。

「……ナナか」

「私を知ってるんですか？」

「話題の人だからな。知らぬ者の方が少ない。ああ……勝てる気がしねえな。前のノエルというトレーナーも化け物みたいに強かった。せめて俺が全力で戦えればいいんだが……まあ出来る限りのことはするか」

ドンとナナの目の前に立ち塞がる。すごいプレッシャーだ。たしか相手のポケモンはかくとうタイプ。僕は滅法不利なんだよな。

「それじゃあ問おう。挑戦者ナナ。お主のジムバッジの個数は？」

「二つです」

「我が名はクロバラ。規約に従い俺はポケモン一体のみ使う。全力で倒してみせよ」

クロバラがボールを投げる。そこから現れたのはゴロンダという大きなパンダみたいなポケモン。しかも見た目からしてかなり凶悪そうだ……

「……あくとかくとうの複合タイプ。苦手だわ」

「お主のポケモンは把握している。ダークライは格闘に弱い。そして残りはスピアーとムンナ。そしてムンナは悪タイプに弱い」

これやばいな。完全に対策されてる。たたでさえ強いジムリーダーがこつちを研究して対策して勝負を挑んでくるとか難易度がハードだな。もつとも裏を返せばジムリーダーもナナを舐めておらず、強者だと判断したからだろうか。

「お願い！　ムンナ！」

「ンナツ（いてえ……）」

そうすると火傷したムンナが出てくる。ジムリーダーはナナがなにをしたのか察して顔が青ざめていく。そして試合開始のコングが鳴る。

「ムンナ。トリック！」

ムンナの方が早い。ゴロンダは燃える玉を持ち、火傷する。それに対してムンナはラムのみを食べてやけどを回復させる。理屈は簡単だ。ムンナは勝負が始まる前に『かえんだま』という持つと火傷する道具を持っていた。そしてトリックは相手の道具を奪うだけではなく渡すことも出来る。それでゴロンダが『かえんだま』を握らされて大火傷。

そしてゴロンダの持っていたラムのみをムンナは奪って頬張り、やけどを回復。恐らくラムのみは僕のダークホール対策に持たせたんだろうな。単純に裏目に出たな。

「……ゴロンダ。なげつける」

「ゴロツ！　（あちいんだよ！）」

クロバラの冷静な指示。それからかえんだまが高速でムンナの方に飛んでいき、吹き飛ばされる。ムンナはなんとか立ち上がるが再びやけどを受けてしまう。ムンナが苦しそうな表情を見せる。そしてゴロンダは根性で火傷を治す。最悪だ。一気にナナが不利になった。

「ムンナ。大丈夫?」

「ンナツ……(ああ)」

「すまないね。こう見えて日頃からゴロンダとのコミュニケーションはしっかりしてるんだ。仲の良いポケモンは気合で致命傷を耐えたり、状態異常を治したりする。他の地方だと『ポケリフレ』と呼ぶみたいだよ」

「そのくらい知ってるわよ!」

それ初耳だ。でも言われてみれば何度か致命傷を受けても立ち上がったことあったな。あれは根性論じゃなくちゃんとした名称があったのか。もつともナナは知っていたみたいだが。

「ンナッ! (仲の良さなら負けてねえよ!)」

「ムンナ!」

ムンナが気合で火傷を治す。これはナイスだ。しかしこれからどう立ち回るのだろうか。あのゴロンダは相当強い。火傷した状態のなげつけるあの威力だ。しかもタイプ相性も不利ときた。

「さて、一気に攻めますか」

「……ん?」

「ムンナ。おんがえし」

その時だった。ムンナが素早く動いて体当たりでゴロンダの巨体を一気に吹き飛ばした。それでゴロンダが壁に練り込む。しかしすぐに起き上がり、戦闘態勢に戻る。

「……この小さな体でゴロンダを吹き飛ばすか」

「私のムンナは強いだよ?」

「ゴロンダ。かみくだくだ!」

「ムンナ。まもるよ!」

ゴロンダのムンナに噛みついてくる。それに対してムンナがバリアを一瞬だけ展開してゴロンダの攻撃を完全に防ぎきる。しかしゴロンダはムンナに対して連続的に拳で殴りかかってくる。

「まもる。瞬きするくらいの時間だけどんな攻撃でも防ぐ技。使うタイミングは相当シビア。この猛攻を全て防ぎきれるかな?」

ナナは不気味に笑う。そして手を叩く。ムンナはそのタイミング

でももるを使つて全ての攻撃を受けていく。ナナはクロバラに一言だけ言う。

「悪いけど超余裕」

ナナは相手の癖などを分析して未来予知に等しい読みが出来る。だからこそ的確なタイミングでコンマ数秒のズレもなくまもるを展開してゴロンダの攻撃を完全に防ぐことが出来るのだ。普通のトレーナーなら不可能。そもそも瞬きするくらいの時間だけ無敵になる技を扱えるトレーナーなんて殆どいないだろう。しかし未来予知に等しい読みの出来るナナなら扱える。

「トレーナーは余裕でもムンナが疲れてくるんじゃないか？」

「その前に勝負はつけるわよ！ ムンナ！ 隙を見ておんがえし！」

ムンナがゴロンダの攻撃を弾く。そして一瞬で懐に潜り込み、顎に体当たりして、今度は巨体を宙に舞わせる。ズシンという音と共に落ちてくるが、ゴロンダはなんとか立ち上がってくる。

「……想像以上に強いムンナだ、俺達も全力で行くぞ！ ゴロンダー！」「ゴロツ！（おう！）」

ゴロンダが雄叫びを上げる。そしてクロバラの腕が光る。あれはマズい。

「俺たちはお前を挑戦者とは思わない。対等な実力をもった強者と思つている。だから本気で勝ちに行く！ ブラックホールイクリプス！」

大きなブラックホールが生み出され、それがムンナを飲み込む。そこからはなにが起こったか分からなかった。しかし一つ言えることがある。それはムンナが戦闘不能になつていたということだ。

「Zワザは分かるわ。でもアクZつてなによ？ 格闘タイプのジムリーダーでしょ」

「こちとらナナを侮つてないからな。使える手はなんでも使う。ただできえポケモンが一体というハンデを背負つてるんだ。許してくれ」
「ありがとう。ムンナ。それじゃあスピーアー。お願い」

ナナがムンナをボールに戻してスピーアーを繰り出す、もうZワザは使えない。そしてこちらは絶対的なエースのスピーアーだ。勝つたも

同然だろう。

「一気に決めるわよ！ スピアー！ メガホーン！」

「スピッツ（了解）」

「ゴロンダ。受け止めてともえなげ！」

ゴロンダの胸にスピアーのメガホーンが当たる、しかしゴロンダはそのまま掴みスピアーを投げ飛ばす。それによってスピアーがボールに戻される。

「ツタア？（なに？）」

今度はナナの顔が青ざめていく。ともえなげは一番後ろのポケモンと強制的に交換させる技。その結果、生まれたてのツタージャがバトルの場に出される。これはマズいとナナは急いでツタージャをボールに戻そうとする。しかし……

「ゴロンダ。とおせんぼう」

ゴロンダに妨害されてツタージャをボールに戻せない。ナナが舌打ちをする。これだけはやばい。最悪の展開だ。

「そんな慌ててどうした？ ナナ。この色違いのツタージャは非合法なものだったりするのかな？」

「……簡単よ。このツタージャ。生まれて間もないのよ。しかも数日なんてものじゃない。ほんとに数時間前に生まれたばかりの……その無理を言ってるのは分かるんだけど、さすがに戻させてくれないかしらっ。」

「なるほど。つまりレベルが低いということだな！ しかしそれならここに連れてくるべきではなかったな！」

ゴロンダがツタージャを叩き潰そう。ナナが舌打ちする。まあそんな甘い話があるわけないよな。だがツタージャは涼しい顔で避けた。あれは間違いない。どう動けば良いのか本能的に理解している。

「ツタツ（遅い）」

ナナと僕は理解した。ツタージャがバトルの才能をあることに。しかし相手はジムリーダー。才能だけで勝てるほど甘くない。ツタージャが負けてもスピアーでバトルには勝てるだろう。しかしツタージャは絶対に自分が負けるとは思っていない。もしも負けたら

ナナのせいだと思うだろう。つまりツター ज्याがナナに心を閉ざしてしまふのだ。だから『生まれたてのツター ज्याで勝つ』という道しか残っていないということも。

「……ツター ज्या。私の指示に従ってくれるかしら？」

「タ ज्या（この程度は私一人で勝てるわ）」

「なら勝手にしなさい。でも勝てないと判断したら私に頼りなさい。勝たせてあげるから」

これはマズいな。状況は最悪過ぎる。ナナはツター ज्याでどうやって倒すつもりなのだろうか。ハッキリ言って今までの中で最高レベルに厳しい。そしてナナの腕がもつとも問われる。

「ゴロンダ！ ほのおのパンチ！」

ツター ज्याはステップで避けながらつるのムチで反撃していく。しかし、それがマズかった。ゴロンダにつるのムチを握られて、体を引っ張られて地面に叩きつけられてしまう。

「タ ज्या！（いたっ！）」

それからツター ज्याが逃げようとするがゴロンダが足で踏みつけてツター ज्याの動きを封じる。そして手に炎を纏い、殴ろうとしていた。ツター ज्याは足掻くがゴロンダから逃れられない。絶体絶命のピンチ。そんな中でナナが静かに口を開いた。

「……ツター ज्या。メロメロよ」

「タ？（え？）」

「あなたは世界で一番可愛いわ。ゴロンダを魅了してあげなさい！」

「タ ज्या（うん！）」

それからツター ज्याが甘えるような瞳でゴロンダを見つめる。するとゴロンダから一瞬だけ力が抜けて、隙間が出来る。ツター ज्याはそれを見逃さずに脱出。そしてナナの近くに行き、ゴロンダを見る。

「ツター ज्या。あなた一人じゃ勝てない。だから私に従いなさい」

「ツタツ（うん）」

「メロメロ……厄介な技を」

「タマゴの時から世界一可愛いアイドルを見てきた女の子よ？ メロメロの一つも覚ええない方が不自然よ」

だからか。ナナはメアが近くにいたからタマゴの時からメアを見ていたツタージャなら相手を魅了する術を本能的に知っている。だからメロメロが使えると判断したのか。

「……………ふう……………ツタージャ。二秒後に飛んでリーフストーム！」

ゴロンダが突進してくる。しかしナナの予想の範疇だ、ツタージャ。は指示通りに動いてゴロンダの攻撃を完全に避ける。それで真上から草の嵐でゴロンダを襲う。しかしゴロンダはビクともしない。

「弱い！ そんな攻撃は効かねえぞ！」

「タジャ！（私の必殺技が……………）」

「問題無いわ！ ツタージャ！ そのまま攻撃を避けて！」

ゴロンダの猛攻をひたすら避けるツタージャ。しかし疲れが見えてくる。ツタージャはつるのムチで反撃しようとするがナナに止められる。一方的に押されるばかりだ。あれではツタージャの体力が持たない。

「今よ！ 股をぐぐり抜けて背中にリーフストーム！」

再びリーフストームが命中する。しかも明らかに前よりも威力が高い。ゴロンダがうめき声をあげる。どういうことだ？

「……………そのツタージャ。あまのじゃくだな？」

「そうよ。撃てば撃つほどリーフストームの威力は上がる。それで次で決めるわ！」

「悪いが俺の方が速い！ ゴロンダ！ バレットパンチ！」

瞬足だった。明らかにツタージャの体が反応出来ていない。あれでは避けきれない。もしも当たれば致命傷。一撃でノックアウトだ。どうする……………

「ツタージャ。避けようと思わないで。相手を睨みつけなさい」

ツタージャがギロリとゴロンダを睨んだ。それによってゴロンダの動きが痺れたかのように止める。あれはへびにらみ。睨んだ相手を麻痺にする技だ。そうか。ツタージャは蛇だからへびにらみができるのか。

「その一瞬を逃がさない！ グラスフィールド！ そこからリーフストーム」

「タアアアアアアアジャヤヤヤヤヤ！」

足元に草木が覆い茂る。そしてフィールド全体に台風のような草の嵐が舞う。それは物凄い勢いでゴロンダを飲み込み、体をシエイクした。そして嵐が過ぎ去った後には戦闘不能になったゴロンダと無傷で立つツタージャがいた。

「……完敗だな。ナナ。君の勝ちだ。さすが話題のルーキー」

「ありがとうございます」

「トレーナーとしての腕は既に並大抵のジムリーダーと同格以上……少なくとも俺より上だな。本当に恐ろしいよ。そういえば色違いのツタージャはなんだったんだい？」

「キンランさんにタマゴで渡されたんです。なんでも悪の組織に非合法な方法で作られた卵とかで……さすがに初戦でジム戦はヒヤリとさせられました」

「なるほど……それで珍しい『あまのじやく』の特性。さらにリーフストームという大技を覚えていたのか。しかし君が非合法なことをしてなくて安心した」

「はい……さすがにリーフストームを覚えているかどうかは賭けでしたけど」

「とりあえずエリユーバッジを渡すよ。それと君にこれを」

目の前でクロバラさんが腕のバンドを取る。そしてナナに手渡す。これは一体なんなんだろうか……

「いいんですか？」

「君は俺と違って大物になる。その時に絶対に必要になるはずだ。Zパワーリングが」

Zパワーリング。それはZワザを使うのに必要な道具。まさかこんな貴重なものを頂けるなんて……

「それとアクZも渡そう。俺は戦ってないから、明言は出来ないがダークライの役に立つはずだ」

「ほんとにありがとうございますー！」

「その代わりと言ってはなんだが、チャンピオンになったらここに来てくれないか？」

「いいですけど……」

「今度は規約に縛られないで本気のフルバトルで手合わせしたいんだ。それで次こそは絶対に勝つ！」

「ええ。でも私も負けませんよ」

ナナとクロバラが硬い握手をする。ナナは三つ目のジムバッジを手に入れると同時にZワザという新たな武器を得たのだった。しかし翌日ナナの元に国際警察がやってくることになる……

52話 お父さん

「……ナナさん。こちら国際警察のミカエルです。あなたに少しポケモン管理法違反の容疑がかけられましたので少しお話を疑ってもよろしいですか？」

「……は？」

翌朝。ナナの元に国際警察の者がやってきた。柔らかい物腰だが明らかにこちらを疑っている。一体どうして……

「簡単な話ですよ。ダークライだけならまだしも色違いのツタージャ、メガホーンという珍しい技を覚えたスピーアーに異常なまでに賢いムンナも持っている。つまり我々はあなたが非合法な手段でポケモンを手に入れている……具体的に言うならポケモンハンターからポケモンを買っているのではないかという疑いがあるんですよ」

「そんなこと！」

「もちろん証拠は一つもない。だから今回は事情聴取ですよ」

そしてナナとミカエルの二人の会話となる。ミカエルはナナに詳細にどのようにポケモンを手に入れたのか答えていく。幸いにもスピーアーはジュンサーさん、ツタージャはキンランさんという確かな立場の者が身元を出所を証明してくれたため問題はなかった。しかし僕とムンナ。それだけは身元の証明が出来なかった。

「……まあ今までの実績から見てもムンナは自分で育てて賢くしたと考えましょう。しかしダークライは気になりますよね。エラニの森に初めてのポケモンを手に入れようと思ったら偶然やってきて自分からボールに入った。さすがに出来過ぎた話だと思いませんか？」

「それでも事実よ」

「そうですね……しばらくダークライをこちらに預けさせてもらえますか？ ダークライ側にも事情を聞きたい」

「私じゃなくてダークライに聞いて。ダークライが同行すると言ったなら私からはなにも言わないわ」

困ったな。ここで行けばナナの嫌疑は晴れるだろう。しかし僕はナナと離れたくはない。そもそもナナはなにもやましいことをして

いない。だったら……

「そうですか……それと別件ですがハクガ山で初心者狩りをしたという話もありますね。それって買ったダークライの力が本物かどうか試したかったとは考えられませんか？」

「その時の私はジムバッジがゼロ。しかも旅を始めて三日くらい。客観的に見ても初心者のはずよ。もしかして初心者が初心者を倒したとしても問題になるのかしら？ それにお金が欲しいからポケモンバトルをするというのは大人の世界でも普通にあるはずよ」

「動機とか善悪は聞いていません。ただ私は辻褄が合うという話をしているだけですよ？」

ナナは冷静になって座る。そして無言で考える。なにを考えているか分からない。静寂がその場を包む。沈黙を破ったのはミカエルだった。

「……どうしました？」

「あなた達の狙いを言いなさい。今のところダークライと私の関係は問題になっていない。それにポケモンハンターにダークライを取られたという被害届もないはずよ。そのことから被害者がいないのは明白。だから正義感からというわけじゃないでしょ？」

「そうですね……まさか隠し事も通用しないとは。でも事実として私が正式に訴えを起こせば受理されて調査をすることを出来るだけの材料にはなりません」

「はやく本題に入りなさい」

「匿名でゴオー団のアジトの情報が入りました。裏取りをした結果としてガセネタではないことが判明。そしてゴオー団のアジトに乗り込むので私にダークライを貸していただけませんか？」

「そうですね……断ります」

ナナが一瞬の迷いもなくきっぱりと断った。そりゃそうだな。

「第一に私のポケモンを危険に晒したくない。第二にゴオー団とか関わりたくない。そして第三に貴方の事が信用できない。そんな相手に私のポケモンを任せることは出来ない」

「騙そうとしたのは申し訳ない。しかしダークポケモンとの戦いを想

定するなら眠らせるポケモンというものは欲しいのですよ。それに正直に言つてナナはダークライを私に預けますか?」

「ありえないわね」

「なるほど。なら少しだけ話のレベルをあげましょう。今のナナは悪夢姫として名が知れ渡っている。中にはナナの活躍を快く思わない者もいる。そして僕以外の国際警察の中にもダークライが正式なゲットで手に入れたのか疑う者がいる」

「……そうね」

「今回ダークライを貸していただければ揉めた時には私が間に入りましょう。ナナのダークライについて国際警察内部で議論になった際には『非合法な手段はない』と証言しましょう。それでどうでしょう?」

「……魅力的ね。でもダークライを危険に晒すほどのものでもないわ」

「ここだけの話。ゴオー団がウルトラホールを開いたという話があります。ナナはウツロイドが欲しいのでしょうか?」

ナナがビクリと反応する。完全にウツロイドという言葉に釣られたな。しかしナナは私欲でポケモンを危険に晒すようなトレーナーではない。

「どうです?」

「……やっぱりありえないわね。せめてダークライにメリットのある話をしなさい。命を賭けるのはダークライよ」

「うん……トレーナーのメリットはポケモンのメリットだと思っただけだね。それじゃあ最後の話。僕はあなたのお父さんのことを知っている。なんでしたって……たしか名前は……」

「その話はやめて!」

「なら僕にダークライを貸してもらえますか?」

「……私が作戦に加わる。それで手を打ちましょう」

ナナが珍しく動揺していた。そういえばナナの兄がチャンピオンなのは有名な話だ。しかしお父さんやお母さんについては一切聞いたことがない。

「まあいいでしょう。それでは明日伺いますね」

そしてミカエルは消えていった。胸糞悪いな。まるで脅迫。しかし従うしかないことも事実。そんな時にナナは静かに口を開いた。

「……ダークライ。悪いけどメアを呼んできてくれる？」

「ん？」

「メアには話しておきたいの。誰にも言っていない私の父親のこと」

*

メアを呼んでくる。ナナは静かに座っている。一体なんの話をするつもりなのだろうか。まったく想像もつかない……しかし空気は重かった。

「むかしロケット団が『ミュウツー』というポケモンを作った。そのポケモンは恐ろしく強かった」

ナナは静かに語る。メアも静かに聞く。

「しかしミュウツーは若いトレーナーに倒されて保護された。そしてミュウツーは国際警察が今も所持している。ミュウツーは抑止力となり、世界平和を築いている。それが学校の歴史で習う話」

「うん。そうだね」

「だけど、もしもミュウツーに更に次の力があるとしたら？　そしてミュウツーを国際警察が既に持っているとしたら？」

「ナナ。結論から言ってくれるかな？」

「……ミュウツーは既に国際警察の元にはいない」

ナナが爆弾発言をする。それにメアも驚きを隠せずにいる。つまり国際警察はミュウツーを持っていないのに平和維持のために持っているかのように振る舞っているのか！

いや、それならミュウツーはいまどこにいる？　そもそもナナがどうしてそんなことを知っている？

「何故なら私のお父さんが持ち出したから。お父さんはミュウツーの新たな力を見つけてしまったの……ミュウツーのメガシンカを」

「待って！　それって！」

「ええ。もちろんミュウツーの件は表沙汰にはならないけど私のお父さんは国際警察に追われる立場。それに下手したら私達はお父さん

を呼び出すための人質にされてもおかしくなかった」

「……でもナナは普通に旅をしてるよね？」

「ええ。それはお兄ちゃんがチャンピオンだから。私のお兄ちゃんはチャンピオンになって絶対的な強さと立場を手に入れることで国際警察が手を出せないようにしたの。私が普通に生きていけるのはお兄ちゃんのおかげなのよ」

「ナナのお兄さんってすごく妹思いだったんだね。それでお父さんはどうしてるの？」

「私は知らない。赤子の時に捨てられたもの。でも一つ言えることはミュウツーを使って世界最大級のポケモンマフィアのボスをしてるってことね。ただ間違いないと言えるのはデトワール地方にはいないということ。メガミュウツーというポケモンは恐ろしく強くて誰も手を出せない。だから誰も捕まえられない故に世界最大の犯罪者。そして、その娘が私よ」

それがナナのルーツ。想像以上に重いな。まさか自分の父親が犯罪者なんて。

「……まあ二度と私と関わることはないでしょうね。もつともお兄ちゃんはチャンピオンの仕事をしながらお父さんを追いかけているみたいだけど」

「ナナ。それは絶対に誰かに言っちゃダメだよ」

「当たり前よ。死んでも言わないわ……ただ、あのミカエルという国際警察が……」

「まあそんな爆弾を出されたら従うしかないよね。それでゴオー団のアジトに乗り込むから私に待ってほしいと」

「うん」

「ありえない。ナナを一人で危険な場所には行かせない。私も一緒に行く。そして隙があつたらミカエルってやつを一発ぶん殴る」

「……メアー！」

「ナナに止める権利はないよ。私が決めたことだから」

ナナがメアに呆れる。しかしどこか嬉しそうだった。それにしても父親は世界最悪の犯罪者。これからの度に影響がないと良いが、そ

こら辺はナナのお兄さんがどうにかしてくれるだろう。少なくとも今までは影響はなかった。それはナナのお兄さんが既にある程度のケリはつけてきたというところだろう。

そして本格的にナナはゴオー団と関わっていくことになる。

幕間1 『レジアイスとの戦い』

「こりや酷いな」

白いロングコートを羽織った少年と白いフードを深く被ったピンク髪の女が凍り付いた森を見てそう言う。彼の名前はノエル。パートナーはグソクムシャ。そしてナナの同級生でもあり、最大のライバルだ。これはナナが三つ目のジムバッジを手に入れる少し前の話だ。

「さすが伝説のポケモン……ノエルはジムバッジいくつだっけ？」

「メグ先生も知ってるでしょ……七つですよ」

「言葉にすることが大事。ノエルの今の手持ちはグソクムシャ、パチリス、シャンデラの三体。だから最後のジム戦を挑めない」

ジムバッジを八つ集める時に壁は三回ある。一回目の壁は一つ目。それは初めてのジム戦であり、才能のないトレーナーは落とされる。少なくともデトワール地方のトレーナーでジムバッジを一つ以上持っているトレーナーは全体の二割もいないだろう。

二つ目の壁は三つ目。それは本気のジムリーダーのポケモン一体を攻略しろというもの。こちらは難しく、通過出来るものは一割もない。それほどまでにジムリーダーの力というのは絶対的なものなのだ。

そして三つ目の壁にして最大の難関。それは八つ目だ。八つ目は本気のジムリーダーを6VS6のフルバトルを行い、勝たなければならぬ。つまりジムリーダーよりも強いということを証明しなければならぬのだ。もっとも難易度はジムの回る順番によっても大きく変わる。最初にキンラン等の強いジムリーダーを倒し、最後の方に比較的弱いジムリーダーに挑むのがセオリーとなっている。ちなみにジムリーダーの中でも伝説のポケモンを普通に使ってくるキンランだけは明らかに別格であり、三つ目以降に挑んではいけないジムリーダーとして有名だ。もっと言うなら八つ目にキンランを回したトレーナーで勝てた人は着任以来一人もいない。

「フルバトル……ね」

「そしてノエルの八つ目の相手はジムリーダー最強格のキンラン。三

匹で突破出来るほど甘くないと思うよ。少し裏話をするけどキンランは四天王にいてもおかしくない実力者。彼女がスカウトを蹴ったからなかったことになってるけど」

「メグ先生とどっちが強いのでしょうか？」

「私……と言いたいけど五分五分かな。ていうか下手したらキンランの方が強いかも。特に彼女のピカチュウが化け物みたいに強くて手も足も出ない感じ？」

「カプ・コケコじゃないんですか？」

「あれも相当強いけどまだ常識の範囲内。ただピカチュウだけはヤバイよ。下手したらカナタのニヤースにすら匹敵するんじゃないかな？」

カナタのニヤース。デトワール地方の誰もが知っている最強のポケモン。ミュウツーと互角以上に渡り合った。絶対に傷をつかない。どんなポケモンでも一撃で倒せるなど嘘か本当か分からない噂話が尽きないポケモン。ただ一つ言えることはどんなポケモンでも敵わないということだろう。そしてチャンピオンになろうとするということは、そんなニヤースを倒さなければならない。ノエルもそれを理解している。だから一番チャンピオンに近いキンランと本気で戦うために最期に回した。何故ならキンランに勝てるようじゃないとチャンピオンには勝てないと分かっているから。

「そしてキンランさんに勝つためには圧倒的に強いポケモンが必要になる。個体値厳選はもちろん必要。それに種族値も考えないとならない」

「ええ。分かっています。だから俺はここに来た」

「そうだね。そして私からの卒業試験。内容は『レジアイスの捕獲』だよ」

「レジアイス……それがあれば俺もナナに！」
「うんうん」

この世界では三値は絶対的な悪として扱われている。しかし名高いトレーナーは誰もが信仰している。そうしなければ勝てないから。三値説の信仰は規制されている。しかし、その背景には『個体値の低

いポケモンを捨てるトレーナーが増加した』というものがある。つまり問題になっっているのはポケモンを捨てる行為であり、三値説を信仰することではない。しかし三値説の存在が表に出るとポケモンを捨てるトレーナーが増えるから仕方なく規制されている。そのため表立って口外しないという前提の上で暗黙の了解として強者の間では三値説の存在は常識となっていた。もともと性格によって変わる部分に関しては怪しむ人も多いが。

また一部のトレーナーは個体値の厳選をしないで強者になることもある。しかし、その大体は個体値を上回るレベル差によるゴリ押し、偶然良い個体値のポケモンを手に入れていたという場合が多い。そしてトレーナーとしての腕で勝つというのはありえない。

何故なら上に行けば行くほどトレーナーとしても優れた者が多く、腕で差をつけるのが困難になるのだ。トレーナーの腕が同じ者同士なら強いポケモンを使う方が勝つ。当たり前の話だ。強くなるためには個体値の存在は切っても切れない存在。もともと個体値が良いだけでは強くなれないし、良い個体値のポケモンに認められるというのはそれだけ難しく、トレーナーのレベルも問われる。しかし強者はトレーナーの腕が確かなのは当たり前という前提で話を進める。

「先生……俺は旅を始めた頃はチャンピオンになるために強いポケモンが欲しいと思った」

「急にどうしたの?」

「でも今は違う。ゴオー団のラティオスと戦って思ったんだ。俺はポケモンに敗北という想い二度とさせたくない」

「だから?」

「強いポケモンを使う。俺のグソクムシヤやパチリス……そしてシャンデラが負けられないように。そいつらが勝つためにも弱いポケモンじゃダメなんだ!」

「それがノエルの答えなんだね。トレーナーの考え方は色々あるし、正解なんてない。だから私は多くは語らない。でも一つだけ言うとノエルの考え方と私の考え方。まったく同じだよ。私は強いポケモンを使うのも優しさだと思う人だから」

そしてレジアイスを探すために周辺の散策をする。今のノエルにレジアイスを倒すのは困難だろう。しかし困難だからこそ乗り越えた時に成長するのだ。ノエルは確信している。自分一人でレジアイスに勝つと。ノエルには信頼出来るポケモンがいる。だからこそ勝てると信じられる。

「……氷は殆ど溶けていない。レジアイスは近くにいるはずなんだけどな」

「そうですね……絶対に近くにいます」

「ノエル。私はレジアイスに手を出さない。あなた一人で勝つんだよ」

「分かっています」

その時だった。草木がガサガサと揺れる。ノエルは迷わずパチリスを出した。それと同時に氷の光線が飛んでくる。パチリスが体を空中で捻り、見事に回避。

「レ・ジジジジジジ」

そして巨大な氷の塊が現れる。しかも顔には点字のような眼や鼻がある。間違いなくレジアイスだ。レジアイスが現れたのだ。メグは自分が巻き込まれないように距離を置く。ノエルも一気に真剣な表情を見せる。相手は伝説のポケモン。風の噂だとジムリーダーでも倒せなかったと聞く。そんなレジアイスとの戦い。一切の油断は許されない。

「なあパチリス。今からあいつを捕まえると思ったらワクワクしないか？」

「パチ……」

「行く……パチリス！」

ノエルは目を疑った。なんとパチリスが氷漬けになっていたのだ。そしてパチリスをボールに戻そうとするが、凍って自分の手が動きにくいことに気付く。しかし気にも留めず無理矢理パチリスをボールに戻して走り出す。ノエルは思い出したのだ。レジアイスはマイナス二百度の冷気を操るポケモン。恐らくパチリスはマイナス二百度の冷気によって瞬時に凍らされた。しかしポケモンである以上は限

度があるはずだ。だからレジアイスの射程から逃れるべく、距離を取ったのだ。あのままでは自分も氷漬けとなってしまうから。

「伝説のポケモン……いくらなんでも無茶苦茶だろ！」

ノエルは茂みに隠れて考える。レジアイスに近づくためには冷気をなんとかしなければならぬ。あれほど厄介なものはない。やるとしたらシャンデラだが、一体どのように火を広げてレジアイスと戦うのか。下手に草木を燃やせば山火事になりかねない。それは後々面倒なことになるから出来れば避けたいところだ。しかしそれ以外に方法は思い浮かばなかった。ノエルはメグにメールをして森を焼く許可を貰う。相手はレジアイス。これ以上の放置は危険だという判断からだ。しかし代わりに絶対レジアイスを捕まえるとも釘を刺される。ノエルは二つ返事で迷いなく返事して。グソクムシャを出して軽く命じる。そしてグソクムシャは完璧にノエルの指示を理解して遠くに行った。そしてノエルはシャンデラを出して、再びレジアイスの目の前に現れる。

「勝負だ！ レジアイス！」

幕間2 『レジアイスとの戦い』

「シャンデラ！ ほのおのうずでレジアスを包め！」
「シャン〜」

炎がレジアスを包む。しかしレジアイスは瞬きをする暇すら与えずにで炎を凍らせて粉碎する。そして次はシャンデラを凍らせようといとうビームを撃つが、光線はシャンデラの体を見事にすり抜けた。その事実にはレジアイスは一瞬だけ怯む。もちろんノエルは一瞬の隙の見逃さない。それを見逃すようなら、この場にはいないだろう。

「シャンデラ！ れんごくで焼き炭にしてやれ！」
「シャアアアアアアアンンン！」

大きな火柱がレジアイスに襲いかかった。レジアイスはそれに身まで焦がされそうになる。しかしすぐさま炎の柱を凍らせることで対処。ノエルは内心でビビる。シャンデラのれんごくは並大抵のポケモンなら耐えられない。それを余裕を持って凍らせるのは規格外も良いところだ。だが凍った火柱は割れる気配を見せない。ノエルはすぐに事態が深刻だと判断した。シャンデラに再びれんごくで燃やすように指示。しかし遅かった。

「レ・ジジ・ジジジジジジ！」

レジアイスは体を回転させて氷を破壊。しかも傷の一つも受けていない。ノエルはすぐにからくりに気付く。レジアイスは凍った火柱の中で眠って体力を回復させていたということに。つまり『ねむる』という技を使用したのだ。だからダメージは全てリセットされている。レジアイスは追撃をせんとばかりにシャンデラに手を突っ込む。技はれいとうパンチ。もちろんシャンデラは通過させて避ける。しかしノエルだけはすぐにレジアイスの狙いに感付いた。

「シャ………シャン」

一部のポケモンは物体を通過することが出来る。それはゴーストタイプのポケモンに多く見られる特徴だ。しかしデメリットがない

わけではない。使えば使うほど腹が減るのだ。そしてレジアイスはそれを狙ってシャンデラに通過させた状態で手を止めた。シャンデラを空腹で動けなくさせるつもりなのだ。

「シャンデラ！ レジアイスから距離を置け！」

シャンデラは主人の指示に従い、離れようとする。しかしレジアイスはピタリとくつついて離れない。レジアイスは通過というものの弱点を完全に見破り、シャンデラを離す気はなかった。恐らく数秒もすればシャンデラは空腹でバタリと倒れるだろう。

だからノエルは敢えて命じた。離れないということは大技をレジアイスは避けきらないということ。これはチャンスだと！

「そつちがその気ならこちらも決めるぞ！ シャンデラ！ ダイナミックフルフレイム！」

ノエルの腕のバンドが光り、シャンデラも輝き始める。そして爆炎を身に纏いレジアイスに特攻。大爆発が起こり、森中が紅蓮の炎に包まれる。しかし見事なタイミングで雨が降り始めて、炎が鎮火されていく。

「シャンデラ。お疲れ様」

ノエルは体力を使い果たして戦闘不能になったシャンデラをポールに戻す。レジアイスは相変わらず無傷。しかし明らかに先程よりも弱まっていた。そんな時にノエルの後ろにグソクムシャが現れる。

「グソクムシャ！ であいがしらー！」

「グソクツッ！」

グソクムシャの俊足の一撃。それでレジアイスは吹き飛ばされて初めて傷らしいものを負った。そしてノエルがレジアイスに落ち着いて解説を始める

「レジアイス。お前は炎技から身を守るために冷気を毎回使用していた。そして冷気というのは冷たい空気のこと。なら周りを温めたら冷気は消えるだろ」

「レ・ジジ……」

「それじゃあ冷たい空気はどこから出ていたのか。恐らくお前の体からだろうな。だから俺はシャンデラでお前の体を温めて体温を上げ

ていった。これでお前は得意の冷氣はつかえないだろうな」

そんな解説を聞きながらレジアイスは電気を巻き起こす。レジアイスには切り札があった。それは『かみなり』だ。自然の大災害の一つの名を関する攻撃は伊達ではない。そしてグソクムシヤは電気に弱い本来なら倒すのに十分な威力。しかし不思議なことに落ちたのは軽い電撃。グソクムシヤにダメージは殆どなかった。そしてグソクムシヤは煽るかのように踊り続ける。

「……おきみやげ。シャンデラが退場する前に撃った技だ。やられる前にはなんとしても使えと叩き込んでるからな。それによつてお前の攻撃は殆ど通用しない。諦めるんだな」

「グソク」

「レ・ジジジジジ！」

「雨を降らせた理由？ 鎮火だよ。山火事になったら大変だからな。もちろんそれだけというわけじゃないが」

その時にレジアイスは気付く。グソクムシヤの踊りが煽りではないことに。これはマズいと本能的に理解する。すぐさまレジアイスを凍らせようとするが、周りには冷氣がない。そしてグソクムシヤは踊りをやめた。

「グソクムシヤ。つるぎのまいは充分か？」

「グソク」

「レジアイス。お前はグソクムシヤのであいがしらでも倒れないくらい丈夫なポケモンみたいだな。だから俺も本気で殴る必要があるんだよ。アクアブレイクだ」

つるぎのまい。それは攻撃力を大きく上げる技。さらに天候は雨。雨の時の水技の威力は桁違いに上がる。今のグソクムシヤの一撃は最大級の一撃だった。

水を纏ったグソクムシヤがレジアイスに特攻して吹き飛ばす。本来のレジアイスなら冷氣により、グソクムシヤに触れられる前に凍らせていた。しかし現在はそれが出来ない。だがレジアイスは冷氣がなくとも並みのポケモンよりも高い耐久がある。しかしグソクムシヤはそれを上回る。グソクムシヤの一撃がレジアイスを吹き飛ば

すのだ。

レジアイスは必死に考える。グソクムシャに勝つ方法を。そして思い出す。自分達には一つだけ大技が残っていることに。その技を使えばグソクムシャを倒して、逃げられる可能性は高い。しかしデメリットとして当分の間は自分達が動けなくなってしまう。もしも白いロングコートの特レーナーにポケモンがもう一体いたら負ける。しかしいなくなったら逃げる事が出来て、冷気だつて時間を置けば回復する。そしたら二度と負けることはない。

そしてレジアイスは賭ける。ポケモンがグソクムシャで最後である可能性に。レジアイスは最大の特技を放つ。名前は『はいこうせん』ありとあらゆるものを破壊する禁断の技。グソクムシャは避けきれずに当たる。それによりレジアイズに勝ちを確信した。

——しかしグソクムシャは仁王立ちしていた。

「随分と舐められたものだな。はいこうせん程度で俺のグソクムシャがやられるわけないだろ。お前の負けだ。レジアイズ」

そしてレジアイズは負けを確信した。自分はこの特レーナーには敵わないと。赤いボールがレジアイズに向かって飛んでくる。レジアイズはそれを避けることなくぶつかると。そして吸い込まれて、ボールは何度か揺れてカチャと音を立てて止まる。

「レジアイズ。捕獲完了。寒いのは二度と御免だな」

ノエルはレジアイズを捕獲。無事に卒業試験を終えたのだった。同時にグソクムシャがガクリと膝をつく。グソクムシャも無敵ではない。ダメージもきちんと負うし、負けることもある。ノエルはグソクムシャに近寄り優しく抱きしめる。

「やっぱりおきみやげをしてもレジアイズのかみなりを受け切るのはキツイか。グソクムシャ。よく頑張ったな。お前は最高の相棒だ」
「グソク」

ノエルのグソクムシャは飛びぬけて強いわけではない。それ故にあらゆる攻撃を余裕で受けているフリをして主人を心配させまいとする。どんなに辛いダメージを負っても瞬き一つしないで余裕を演

じる。グソクムシヤはノエルがチャンピオンになると確信している。だからこそノエルは舐められるわけにはいかない。そんなノエルのポケモンである以上は上面だけでも強いと思わせなければならぬのだ。そしてノエルもそれを分かっている。

「安心しろ。俺は絶対にチャンピオンになって俺の夢を叶える。お前の今までを絶対に無駄にしない」

グソクムシヤは満足気に頷いた。ノエルはグソクムシヤをボールに戻す。ノエルは三値説を信仰している。それ故に個体値厳選等も行うこともある。しかしグソクムシヤだけは強いとか弱いとか考えないで選んだ。何故ならコソクムシだった時の怯えた彼の目が幼い時の自分の目に似ていたから……

「個体値が全てだ。そんなことは分かっている。でも俺はグソクムシヤと大舞台に行きてえんだよ。俺は誰よりも三値説を信じてる……だけど努力がきちんと報われてるとも信じてる。だから誰よりも努力したグソクムシヤはどんなポケモンよりも強い」

ノエルはグソクムシヤが自分を弱いと思ってることを知っている。それ故に無茶をしていることを知っている。そして世界で一番強いポケモンだということも知っている。だからノエルはグソクムシヤとならチャンピオンになれると確信している。

幕間3 『レジアイスとの戦い』

レジアイスの捕獲を終えた。それは瞬く間に話題になり、ノエルの名前はデトワール地方に大きく伝わることになる。ノエルはそんな中で新聞を読んでいた。もちろん自分のペースではない。

「仮想戦闘祭でダークライを連れた少女が大活躍……か」

見ていたのはナナのページだ。ノエルが新聞を読む時はナナのことと書かれている時だけだ。ノエルはその一面を切って、手帳に貼って保存する。

「ナナちゃん。随分とすごい活躍だね〜でもメアちゃんの方が話題になってるよね」

「そつちはどうでもいいです」

ノエルだってメアが気にならないわけではない。ただメアが話題になることは当たり前だし、珍しいわけではないというだけの話だ。ただ注目することではないという話だ。

そんな時にノエルの元にハガキを加えたポツポが飛んでくる。ポツポはノエルの足元に手紙を落とすとどこかに去っていく。

「今の時代に紙の手紙？」

「そつちの方が旅をしている感じがしますから」

メグのツツコミに対して一言だけ返す。ノエルは手紙を拾う。差出人は見なくても分かる。メアからだ。入ったのはメアとナナの二人の写真が数枚と普通の手紙。それを見てノエルは頬を緩める。

「なんだって？」

「ナナの自慢話が九割。それとレジアイスのことを少し褒めてくれただけです」

「それにしても嬉しそうだね」

「……そういうものですよ」

そしてノエルは電話を取り出してボルノに連絡する。メアから手紙が来たことから、自分がレジアイスを捕獲したこと。ナナも元気にやっているみたいだということ。そしてボルノからは近々ゴオー団のアジトに国際警察が襲撃するから手を貸してほしいという連絡。

そんなことを数分だけ話して電話を切る。

「ナナも力をつけてる。俺も負けていられねえな」

「とりあえず私は教えることは全て教えた。もうノエルは私の弟子を卒業するわけだけど、これからどうするの?」

「そうですね……とりあえずボルノが困ってるようなのでそつちに行こうかなと思います。それが終わったらポケモン探しの旅ですかね」
「なるほど。ポケモン探しならドラゴンポケモンとかどう? ドラゴンタイプは強いから絶対にノエルの力になれるよ!」

「そうですね。それならフカマルでも探してみようと思います」

「おお! ドラゴンタイプで真つ先にガブリアスを選ぶか!」

「それじゃあ私は放浪の旅に戻るよ。またね!」

「今までありがとうございました!」

そしてメグはトゲキッスを出してどこかに飛んでいく。遙か上空で静かに呟く。

「ゴオー団掃討戦……まあ私も話はきてるし、ノエルにも声はかかるだろうから早ければ三日後に合流かな。でもその前に」

メグはトゲキッスを飛ばしてシノノタウンへと向かう。これから行われるゴオー団掃討戦。恐らく多くのジムリーダーや四天王。それにベテラントレーナーにも声がかかるはずだ。しかし殆どのトレーナーは参加しない。なぜなら優れたトレーナーであるほど自分のポケモンを危険に晒したくないから。だから国際警察は時に強引な手を使ってでも強引に参加させようとする。その手は恐らくナナにも届くはずだ。だから……

「キンラン。いる?」

「いるわよ」

メグはキンランの元訪ねる。今は少しでも戦力が欲しい。ノエルも参加するだろう。だからなにかあった時に師としてノエルを守れるように。

「ゴオー団掃討戦の話を見た?」

「ええ。最悪ね。カナタがいればすぐに終わった話だというのに……」

「それでキンランはどうするの?」

「参加するしかないでしょ。あの話は間違いなくナナの元にもかかる。下手したらお父さん絡みのことで脅迫に近いことをされて断れない状態になっていてもおかしくない。だから私はなにかあった時にナナを守るように傍にいたいわね。若い芽は摘ませたくないもの」

そしてキンランは静かにぼやく。ナナに声がかかるのは私をおびき寄せるためという意味もあるのでしょうか……と。国際警察としてもキンランの手をなんとか借りたい状況なのだ。

「それでお願いなんだけど……メグもゴオー団掃討戦に参加してくれないかしら? 私はナナを守るために出来る限りのことをしておきたいの」

「もちろん! というより私はキンランに参加してとお願いをするために来たから」

「ああ……ノエルね。彼はいつ私のジムに来るのかしら?」

「いま手持ちが四体だから……六体になったら来るんじゃないかな?」

「そう……しかしレジアイスなんて随分と厄介なポケモンを加えてくれたわね」

「もしかしてキンラン。勝つ自信ないの?」

「まさか。ただ絶対に勝てると言い切れないだけよ。レジアイス。野生でも桁違いの強さだった。それにトレーナーが加わったら……考えただけで恐ろしいわ」

「そうだね」

「はあ……エレキフィールドで対策が出来るダークライが恋しいわ」

「それよりも私達もフルバトルしようよ!」

「いいわよ。でも負けたらって泣かないでね?」

「そっちこそ!」

そして人知れず四天王とジムリーダーのバトルが行われた。ゴオー団掃討戦は多くのトレーナーを巻き込んだ大規模なものになるだろう。そんな戦いにナナ達は巻き込まれようとしていた……

5 ゴウー団との決戦 53話 ゴウー団掃討戦

ナナが国際警察に連れてこられた場所。そこはどこか分からない。理由は簡単でテレポートで連れてこられたから。そしてベアルンには悪いが街に残ってもらった。集まった場所には多くのトレーナーが集まっていた。それに国際警察側にはボルノもいる。

「ナナ！ 来てたのか！」

「ノエル！ あなたも来たのね！」

そこにはノエルもいた。それに辺りを見渡すと仮想戦闘祭で戦ったウルトラや四天王のメグなど知った顔もいる。しかし前回チャンピオンのポポやチャンピオンのカナタはいない。ここに来てない強者もいるということか。

「久しぶりね。ナナ」

「キンラン先生！」

ナナの師。そしてジムリーダーのキンランさんもいる。こっちは相当強い面子だな。それに対して相手は幹部が三人とボスと国際警察は考えている。幹部の一人は前に僕達で倒した赤いスーツの男、ラティ兄妹を使う女、そして三人目は不明。ボスはラルムだが恐らくいないだろうな。もっというならば今回アジトの情報を国際警察に流したのがラルムだと考えてもいいくらいだ。国際警察にゴウー団を潰させるために。

「みなさん。忙しい中で集まってくれて感謝する。私の名前はブルー。そして一つだけ最初に詫びをしなければならぬ」

周りがざわつく。一体なにを詫びるといふのだろうか？

「この件はミカエルが受け持つはずだった。しかし我々の独自調査によりミカエルが国際警察として相応しくない方法で皆様方を集めたことが判明した。そのためミカエルは本件から外れ、私が担当することになったというわけだ。この一件に関しては国際警察の管理の甘さが招いた事態だ。本当に申し訳ない！」

ブルールが頭を下げる。謝罪するだけなら誰でも出来る。辺りがガヤガヤとざわめいてくる。そしてキンランが隣にやってきてマイクを奪って演説を始める。

「……でも戦力が欲しいのは事実よ。そもそも本来ならこういう場合はチャンピオンのカナタが代わりに引き受ける。でも今はカナタがないのよ」

そういうことか。本来ならナナのお兄さん一人で済む案件なんだ。しかし今はカナタがアローラに行っていない。だから一般トレーナーに声が……

「自分のポケモンを傷つくことが怖いのはよく分かる。だけどゴオー団を野放しにしたら被害は増えるばかり。もしかしたら旅をしてた一人の時に襲われるかもしれない。そうならないために私達は討つ必要があるの！ もちろん無理にやれとは口が裂けても言えないし、嫌だという人がいるなら逃げて誰にも笑わせない。ただ、それでも安心に日々を過ごすために私達に力を貸してほしい！ もしも国際警察が信用できないと言うなら私に力を貸して！」

そしてキンランが頭を下げる。もちろん帰りたいたいというトレーナーは多くいた。その人はブルールさんがテレポートを使って帰っていた。そんな中でナナは帰ろうとしなかった。

「ナナ？ 帰らないの？」

「大丈夫よ。この場にキンランさんがいるなら私達に危険はないわ」

ああ。キンランさんを信頼してるからか。まあたしかにあの人がいるなら間違いなく安全だな。

「それにキンランさんも言ってたけどゴオー団を放置して私達だけの時に襲われたら？ そうなる前に叩いてしまった方が得策よ」

「たしかに。メロエツタにダークライ。奴らが欲しがりそうなポケモンを持って旅をしてる身としてはそっちの方が安全か」

最終的に約六割。人数にして八人のトレーナーが残った。それから細かな作戦が組まれている。テレポートで四人一グループの三手に分かれて侵入。そして迅速に動き、幹部とボスの捕縛を最優先として動く。そして僕達は第三チーム。メンバーは……

「私とナナ、ブルール、ノエルね」

「お願いします。キンランさん」

「ええ。とりあえず雑魚はナナのダークライで眠らせて基本は無視。私達は例のラティ使いを討ちにいくと」

「ああ。このチームは基本的にラティ兄弟に相性で有利を突けるグソクムシヤ、レジアイスを使うノエル。同じくダークライ、スピアーを使うメアで構成している」

「合理的ね。ただラティ兄妹は相当強いわよ……それに彼女の腕にはキーストーンがあつた。もしかしたらメガシンカする可能性すらある」

「把握している。もしもメガシンカしたら適うのは最強のジムリーダーのキンランさんだけだ。だからメガ個体をキンランさん。メガしてない方を私とノエルとナナの三人で倒すことになるだろう」

「なるほど。このチームはラティ兄妹を倒すことを最重視したつてことね。でも、それなら私とメグの二人で組ませた方が得策だわ。メグと私の二人なら誰にも負けないもの」

「ああ。それも候補にあつた。しかしそれだと三人目の幹部にやられる」

「三人目の幹部。誰なの？」

「……三人目の幹部は人間じゃない。異様に知能が発達したカラマネロが務めている」

全員が衝撃を受けた。ポケモンがゴウー団の組織の幹部だと！

そんなことってあるのかよ！

「待つて！ カラマネロが相手にメグは危険すぎるわ！ それこそカナタが来るまで先延ばしにした方がいいわ！」

「……キンランさん……あのカラマネロですよね？」

「ええ。ポケモンで一番強力な催眠術を使うとされてるカラマネロよ。洗脳を得意として悪事に利用する組織が後を絶たない」

「でもポケモンですよね？」

「だからヤバいのよ！ ポケモンなのに幹部を務めているということはそのかなりの知能があること。つまりなにをしてくるか分からない

！」

「……そうだ。しかしカラマネロは野生。つまりモンスターボールで捕獲が出来る。だから捕獲することで無力化する。それにメグは四天王だ。彼女に勝てないなら誰に任せればいい？」

「違うのよ！ メグは強い！ だからカラマネロに洗脳されたら取り返しがつかない！」

「ならどうすればいい？ カナタが来るまで待つか？ それまでにどのくらい被害は増える？ そしてカナタ以外で任せられるのは誰だ？」

「……なるほど。賭けをしないといけない段階まで追い込まれてるのね」

「そういうことだ」

「腑に落ちないけど、これが今の最善手ね」

作戦の説明が終わる。そしてゴウー団掃討戦が本格的に始まろうとしていた。

雲行きは怪しい。それでもやるしかないのだ。

54話 炸裂!! Zワザ

メンバーとしてはウルトラとボルノがいる第一チーム。それが赤スーツの男を捕獲と並行して攪乱を行う。また手が空くことが前提で、その場合は周りの増援に当たる。そしてメとするメンバーで固めた第二グループ。そして単純に強いトレーナーを集めてラティ兄妹を倒すことだけを考えた第三グループ。

「来い！」

既に掃討戦は開始している。僕達はテレポトでアジトに乗り込み、奇襲をしかけた。それは大成功。乗り込むと同時にキンランさんが電気タイプのポケモンで回線を全て壊してゴオー団の連絡手段を断つ。あとは気付かれる前に逃亡するだけだ。

「お、俺はごめんだぜ！ ケーシィ！ テレポト！」

「無駄だ！ ゴチルゼル！ シャドーボール！」

そして容赦のない団員へのダイレクトアタック。ブルールのポケモンはゴチルゼル。特性は『かげふみ』。それによりテレポトで逃がすことを許さない。こちらも完全に対策済みだ。絶対に逃がさない。

「……私達の出番がないわね」

「当たり前だ！ 君達が戦うのはラティ兄妹。弱くはない！ 出来る限り温存するんだ！」

「ええ……！ それで幹部の部屋は？」

「もうそろそろだ！」

そしてエレベーターに乗り込み、下へと移動する。そして降りた先にゴオー団の女が一人現れる。キンランさんが戦おうとするがブルールさんが静止する。

「ブルール先輩！ ダークポケモンの解放をしました！ ここから先は少し混乱してます！」

「助かる。これで騒ぎの原因はダークポケモンの暴走だと思って時間稼ぎは出来る」

「あとは虚偽の情報を流してきますね！」

そして女は去っていった。今は一体……

「俺が送り込んだスパイの一人だ」

「スパイなんて存在してるなら、もっと早くアジトの位置を……」

「それは無理だ。座標情報を知るのは幹部格だけだからな」

「待って！ それじゃあ情報を流したのって……」

「少なくとも幹部以上だろうな。つまりゴオー団の中にも裏切り者がいることになる」

間違はなくボスのラルムだな。しかし言えない。僕達は口止めされてる。もつとも言ったところで得はないのだが……

「罠の可能性は？」

「ない。裏取りはした」

「さっきのスパイね」

そんな時だった。爆音が鳴った。キンランさんが迷いなくボールを投げてカップ・コケコを出す。そして反射的に命じる。

「先手必勝！ カップ・コケコ！ スパーキングギガボルト！」

キンランさんの腕のバンドが光り、爆音がする方に電気のビームを吹き飛ばす。そして辺り一面を焼き払った。いきなりZワザだと！

迷いが無い！

そして壁が割れて水が入ってくる。ここは海中だったのか。

「先にいきなさい！ ここは私が引き受ける！」

「キンランさん！」

「こいつはメガラティアスよ！ つまり別の場所にラティオスがいます！ 探し出してそつちを倒して！」

「キュキュン」

そして薄紫色のジェット機が起き上がる。しかも前に見た時よりも翼は大きい。これがメガラティアスなのか？ しかもカップ・コケコのデンキZを耐えるとはなんという耐久力。

「……守るをしなければ危なかったわ」

「ゴオー団幹部マリア！ あなたはここで捕まえる！」

「最強のジムリーダー。キンラン。相手にとって不足無し。楽しいバトルになりそう！ ラティオス。そつちの子供二人の足止めは任せ

る。最悪は殺してもいいわ」

そしてラティオスがこちらに向かってくる。ナナがボールを投げ
て僕を出す。僕はシャドークローを出してラティオスを抑える。し
かし探す手間はなくなつたな！

それからラティオスは転回して離れていく。そんなラティオスを
見てキンランさんが指示を出す！

「追いなさい！ あなた達はラティオスを倒すことだけ考えなさい
！」

「はい！」

「ほら、余所見は厳禁！」

キンランさんとメガラティアスの激しい攻防。その光景に背中を
向けて走り、ラティオスを追う。あの時の恨みを果たさせてもらうぞ
！

『ナイトメアシフト・100%！』

「ダークライ。体は大丈夫？」

やみのエネルギーはオーラとなり、を体に纏う。そして心配するナ
ナに大丈夫と頷く。正直に言うのと相当キツイ。それでもラティオス
にはそのくらいしないと勝てない！ この身を犠牲にしないと勝て
ない！ ナナを守るためならいくらでも体を犠牲にしてやる！

「俺も負けてられないな！ グソクムシャ！ であいがしら！」

僕とグソクムシャがラティオスに追い付き殴り込む。グソクム
シャは拳でラティオスを殴り飛ばし、僕が追撃するようにラティオス
を連続的に引つ掻く。でも、まだまだ！ まだ足りない！ それなら！

『ナイトメアシフト・100% あくのはどう！』

やみのエネルギーを右腕だとフルで稼働。それで放つ一撃でラ
ティオス一気に勝負を決めにいく。全力のあくのはどうは想像を絶
する威力を誇り、辺り一面を焼け野原にした。瓦礫すら残さず飲み込
み、ズワザに負けず劣らずの威力。そして壁が派手に壊れて大量の水
が一気に流れ込んでくる。

「クッ……」

「ダークライ！ なにをしているの！」

「ウガアアアアアアアア」

右腕を見ると壊死していた。痛くてまったく動かない。やっぱり全開放は体が追い付かない。そしてラティオスはボロボロになりながらも起き上がる。もう一撃を叩き込めば勝てる。左腕がまだ……

「戻りなさい！ スピアーお願い！」

しかし僕はボールに戻された。ナナ！ どうして！

「馬鹿じゃないの！ こんなことして！少しはボールの中で反省してなさい！ もう二度とやらないで！」

ボールから出ようとするもナナがグッと握って出られない。

「スピツ（あとは任せろ。ダークライ）」

「今がチャンスだ！ ナナ！ 受け取れ！」

「ありがとう！ ノエル！ ムンナもお願い！」

ノエルから深緑色のクリスタルを受け取ると自分のZパワーリングに挿入。そしてナナはボールを投げてムンナを出す。ムンナもやることを分かっているようだ。

「ンナッ！（おう！）」

ムンナはトリックでスピアーになにかを渡す。そしてナナのZパワーリングが光る。

「スピアー！ ここで決めるよ！」

「スピツ！（いくぜ！）」

「ぜったいほしよくかいてんぎん！」

あれはまさかムシZ！ ノエルはナナにムシZを渡したのか！

それでムンナのトリックにスピアーにパス。これなら勝てるか！

スピアーは糸を吐き、ラティオスを眉で包む。そして眉を巻き込み、見事な一刀両断。Zワザが終わる頃がラティオスがそれでも立ち、こちらを睨んでいる。なんて耐久力だ。

しかし確実にダメージは……

「ナナ！ ムシZを返せ！」

「ムンナ！ またお願い！」

ノエルの元にトリックでZパワーリングが戻ってくる。そして次はノエルのZパワーリングが輝き始めた。そしてグソクムシヤも輝

きを放つ。

「まだ終わりじゃねえぞ！ ラテリオス！ 覚悟はいいか？」

「テイエイエイエアアアアアアア！（やめろおおおお！）」

「グソク（ここで終わらせる！）」

「ぜったいほしよくかいてんざん！」

ノエルからもムシZが放たれる。再びラテリオスを眉で捕縛。そして包み込み、グソクムシャが腕で見事に一刀両断。そしてラテリオスにトドメの一撃。それによってラテリオスがドサツと倒れる。これは戦闘不能だな。

「ノエル！ やったね！」

「ああ！ 俺たちの勝ちだ！」

ノエルとナナが無邪気にハイタッチを決める。完璧な連携にZワザの連続攻撃。そこまでやってなんとかラテリオスを倒したか。しかし同時にナナの体から力が抜けて倒れそうになる。それに対してノエルがすぐに駆け寄り、抱き上げる。

「ナナ！ 大丈夫か！」

「ええ……Zワザって想像以上に体力が持っていられるわね」

「なんだ……心配させるなよ」

そんな時だった。ラテリオスの後ろから風鈴みたいなポケモンがやってくる。たしか名前はチリーンだよな……？

「チリーン（もう一回遊べるよ！）」

「マズい！ グソクムシャ！ アクアジェットだ！」

グソクムシャが高速で近づく。しかし間に合わない。そして鈴を鳴らす。同時にラテリオスの体が光って起き上がる。そしてチリーンがドサツと倒れる。なにが起こった？

「いやしのねがいで完全回復……最悪だわ」

「あのラテリオスをZワザ無しで相手しろっていうのは少しキツイな」

完全回復だと！ つまり今与えたダメージが全て無駄になったっていうのかよ！ それで完全に元気なラテリオスと戦えと！ なにがもう一回遊べるだ！

「ナナ。どうする?」

「勝つわよ! ノエル!」

「そうこなくちゃ! いくぞ! 勝負はここからだ!」

「スピッ! (何度起き上がろうが倒すのみ)」

「グソク… (同じく…:…)」

しかしノエルもナナも諦めていない。それどころか楽しそうだ。そして負けるつもりはないらしい。僕は壊死した右腕を見る。まだ治りそうにない。これはポケモンセンターに行かないと無理だな。恐らく戦いには参加出来ない。ここはスピアーに任せるしかないか。そして最悪の第二ラウンドが始まろうとしていた。

55話 VSラティオス

グソクムシャが殴りかかる。ラティオスが上に回避。それに対してスピアーがミサイルばりで援護するが、ラティオスは素早く、当たらない。

「ノエル！ どうする？」

「あいつにりゆうせいぐんを使わせる！ そうすれば技の威力が落とせる！」

「りゆうせいぐんに耐えられる保証は？ ポケモンは大丈夫でも私達が巻き込まれて死ぬ可能性もあるわ！」

「じゃあどうするんだよ！ 俺のグソクムシャもバテてきたぞ」

あれから数分が経った。ラティオスは逃げと回避に専念していて、こちらの攻撃は当たらない。それに当たったとしても……

「……それを考えてるのよ！」

「ああ！ そうかよ！ なら俺が大きい一撃を叩き込んでやるからグソクムシャをラティオスの前に飛ばせ！」

「……あれは切り札よ！」

「今やらないでいつやるんだよ！」

「必ず仕留めなさいよ！ ムンナ！ サイドチェンジ！」

「ンナツ（了解）」

その瞬間、ラティオスとムンナの位置が入れ替わってグソクムシャの目の前に現れる。そしてグソクムシャが手を振りかぶって一気に殴り込む。

「グソクムシャ！ であいがしら！」

ドシンと重い一撃がラティオスに叩き込まれ、一気に壁に練り込み。もちろんナナもラティオスに生まれた一瞬の隙を見逃さない。

「スピアー！ 追撃のメガホーン！」

見事な連携攻撃。それでラティオスを一気にダメージを与える。しかしラティオスはビクともしないで紫色の光線を放つ。技名は『りゆうのほう』。ドラゴンタイプの基本技と言っても過言ではない。スピアーに当たりそうになるがグソクムシャが間に入り、スピ

アーの代わりに受ける。そして気にするなという表情を見せる。

「ナナ。これで手が一つ潰れたぞ」

「大丈夫。手はまだある。それにレジアイスだってまだ残ってるでしょ？」

「そうだが……出すとヤバいことになるぞ？」

「とりあえず、まだ全ての手を明かしたわけじゃない。それに私にも切り札はあるしね」

「まさか……」

「Zワザ。意識を手放す覚悟をしたら一発は撃てるわよ？」

「それはやめてくれ。そんなナナは見たくないし、三日は昏睡状態になるだろ」

「ここで殺されるよりマシでしょ？」

「そうならないように俺が倒してやるよ！ グソクムシャ！ であいがしらー！」

再びグソクムシャがラティオスの元に近づき、殴りかかる。しかしラティオスは簡単に躲す。ラティオスは速すぎて先程から攻撃が殆ど当たらない。

「そういえばノエルのグソクムシャ。ボールから出た直後じゃなくてもであいがしらを撃てるのね！」

「そう呼んでるだけだ！ 実際は不意打ちにならないから普通に見切られるし、出た直後より速度も落ちる！ ただ不意を突かなくて良いならであいがしらと同じ威力で殴ることは理屈上なら出来るだろ？」

「それなら一緒だけ私が気を引く。そしたらであいがしらの要領で拳をグソクムシャに連打させられないかしら？」

「やってみよう」

「ムシャ（了解した）」

連打って……つまり某ジャンプ漫画のオラオララツシュをグソクムシャでやるのかよ。ナナもえげつないことを考えるな。でもそれなら当たればラティオスに相当なダメージを……

「いくわよ！ スピアー ミサイルばり！」

スピアーがミサイルばりで牽制をしていく。しかしラティオスは

容易く飛んで回避。しかしナナは完全に予想済みのようだ。そして指を鳴らす。その瞬間にムンナが眩い光を放つ。ナナが使い道はないだろうが、あつても困らないよねということで見えさせた『フラッシュ』という技。まさか役に立つ日が来るとは……

「サンキュー！ グソクムシャ！ 頼んだぞ！」

「グソク（任せろ）」

しかしラティオスは一瞬だけ怯んだだけで、すぐに動こうとする。だがラティオスは動けない。何故ならスピアーから出された糸に縛られているから。

「グソククククククククウウウ！」

グソクムシャがラティオスをタコ殴りにして一気に畳み掛ける。しかし途中でラティオスがこちらを睨み、一気に加速。そして爪で引っ掻きグソクムシャに手痛い一撃を喰らわせる。技はドラゴンクロー。それによってグソクムシャがボールに戻っていく。

「ノエル！ なにを……」

「ききかいひだ！ 頼んだぞ！ レジアイス！」

「そういえばグソクムシャにはそんな特性があったわね……ていうか寒いわよ！ ヘクチツ」

「安心しろ！ 俺も同じだ！」

ナナが可愛らしくクシャミをする。しかしボールの中にも寒い。これがレジアイス。なんてポケモンだ……

「レ・ジジジジジジ」

言葉が分からない。レジアイスの喋ってる言葉がまったく分からない。少し他のポケモンとはワケが違うのか。

「ナナ！ くるぞー！」

「スピアー！ 受止めなさい！」

ラティオスが瞬速で動き、スピアーにドラゴンクローを仕掛ける。しかし間一髪でスピアーがお尻の針で受止める。だが、力負けして吹き飛ばされてしまう。

「……ナナ。すまん。少しだけミスをした」

「え？」

「足元を見る」

「ちよつとなにをしてるのよ!」

ナナの足首から下が凍っていた。ナナが動こうとするが氷から足が抜けずに身動きが取れない。どうしてそんなことになった!

「……俺達が暴れまわって壁を破壊しただろ?」

「そうね。それで水が流れ込んできて……今の水位は足首くらいだし大丈夫かなと思ってたけど……まさか!」

「ああ。レジアイスがボールから出たことで水が凍り、俺達は氷の足枷を嵌めることになった」

「仕方ないわね! これは貸しよ! ツタージャ! お願い!」

「タジャ(任せて)」

ツタージャがボールから出てきてナナ達の足元の氷を砕く。それでナナ達も身動きを取れるようになる。身動きが取れるようになると同時にナナはツタージャをボールに戻す。しかし地面が凍ったのは厄介だな……これじゃあ滑る。

「レジッジ・ジッジジ!」

レジアイスがラティオスに向かって、れいとうビームを放つ。しかしラティオスは綺麗に避けて吠える。すると暗雲が現れて、一気に雨が降り始める。それに対してナナの顔色が一気に悪くなる。ノエルもラティオスの狙いを察したのかレジアスをボールに戻す。

「……最悪ね。あのラティオス。完全に私達を殺しにきてる」

「ああ……恐らく逃げ回っていたのはずっとレジアイスが出てくるのを待っていたんだ」

そういうことか。レジアイスは辺りの水を瞬時に凍らせるくらい冷たいポケモン。そんなポケモンがいる中で雨が降られたら……

「それに水位が一気に膝までできてるぞ」

「一回の雨で水位ってそんなに上がるものかしら?」

ナナが少しだけ考える。そしてしばらくして叫んだ。

「違う! ラティオスは逃げ回りながら他のポケモンに『あまごい』をするようにテレパシーで命じていたのよ! それに下手したら壁の破壊も……」

「なんだって！ いや、たしかに辺りにダークポケモンを放ったって誰かが言ってたような」

「あのラティオス。この基地と一緒に沈めて私達を水死させるつもりよ！」

水死だと！ それなら今すぐ逃げないと手遅れになる。そしてラティオスは完全にやる気だ。恐らくナナ達を逃がしてくれない。

「ナナ。どうする？」

「あのラティオスは逃がしてくれるのかしら？」

「さすがにありえないだろ」

「なら水位が上がる前に倒すしかないでしょ？ ノエル。ポケモンは？」

「水があるからシャンデラは無理。パチリスは電気技を使おうものなら俺達が巻き込まれる。そしてレジアイス……」

「さすがにこの水位の水が凍ったら破壊は難しいわよ？」

そんな時だった。背後からシャドーボールが飛んできてラティオスを吹き飛ばした。それから美しい歌が聞こえて、ラティオスをオレンジ色の髪をしたポケモンが一気に殴り飛ばす。そしてバレリーナのように一回転して、こちらに微笑む。

「メロエツタ？ いや、違う！」

しかし一瞬でメロエツタは消えてスペアーが現れる。あれは幻惑か？ そういえばムンナの進化系のムシャーナは夢を現実にすることで幻惑を見せると聞いたことがある。ムンナはムシャーナに近づきかけているのか？ そしてムンナがナナに寄ってきて少しだけ話しかける。どうやらムンナに策があるようだ。

「ムンナ……ムンナ……？（ダークライなら勝てるか？）」

「もちろん。ダークライの強さはあなたが一番よく知ってるでしょ？」

「ムンナ（なら任せた）」

そしてスペアーの時間稼ぎは終わり、一気に吹き飛ばされて戦闘不能まで追い込まれる。そしてムンナが願う。僕の体が光に包まれる。壊死した右腕が治る。これは『いやしのねがい』なのか？ まさか見

て、この場で覚えたと言うのか！

「ムンナ。あとは任せなさい。勝って帰るわよ！　ダークライ！」

「アア！」

ムンナの想いも無駄にしない。ナナを殺させはしない。ラティオスも倒す。それが今の俺の仕事だ。

「絶対に勝つわよ！」

「当たり前だ！」

（ムンナの想いに答えてみせるわよ。ダークライ！）

（ムンナのためにも頼むぞ。ナナ！）

その時だった。体から一気に力が湧いてくる。今までのナイトメアシフトの比ではない。それに体が膨張していく。一体なにが起こっている？　そんな中でラティオスが危険と判断したのかこちらに攻撃を仕掛けてくる。

「させねえよ」

ノエルがグソクムシャを出して攻撃を見事に受け止めた。しかしラティオスはりゆうせいぐんでグソクムシャを蹴散らす。こちらにも隕石が流れ弾で落ちてくる。だが問題ない。僕は右腕で隕石を容易く払い、軌道を逸らしていく。

「大きさは2mくらいか？　しかし前より黒いな。それに白い頭は髪に近くなっているし、目も赤い。まるでナナみたいな姿……これはメガシンカか？　でもメガストーンがないよな。それに闇のベールは一体……」

ノエルが考察している。どうやら見た目も大きく変わっているらしい。もつとも自分では見えないからどうなっているのか分からないが……

「これがダークライの世界……見ている景色がダイレクトに見えるわね」

「まさかキズナ現象！　あれはゲツコウガだけのものではないのか！」

「なんでもいい。ラティオスを倒す！　お願い！　ダークライ！」
キズナ現象でもなんでもいい！　さっさと倒そう！　ナナ！

56話 漂流

「ティイイイイアアア！」

「ラティオス。あなたは強い。だけど私のダークライには勝てないわ！ あやしいかぜー！」

右手を振って、一気にラティオスを突風で吹き飛ばす。威力が桁違い。広範囲の風は素早くても回避は不可能。これが風というものだ。「続いて、やきつくす！」

左手で炎を巻き起こす。風に持ち上げられた青い炎は渦となり、ラティオスを包み炙っていく。ラティオスを抑えて間に水位を見る。水位は既にナナの腰まできている。これはマズい、さっさと倒さなければ！

「ナナ！ 一気に決めるぞ！」

「ええー！ ノエル！ いくわよー！」

ナナの考えがダイレクトで伝わってくる。ここでZワザをやるんだな。あくのほうでも充分かもしれない。しかし方に一つでもラティオスが耐えたら最悪。今は一刻も争う状況。だからこそオーバーキルになるうが絶対的な力で倒さなければならない。

ノエルがナナの手を握る。そしてノエルのZパワーリングで輝き、ナナのZパワーリングも輝き始める。ナナとノエルも既にZワザを使っていて二度目は無理だ。でも二人で一緒なら一度だけ撃てる。

「私達の全身全霊のゼンリョクよ！ 逃れようのない闇の飲まれて、負けを認めなさい！」

体から沸き立つエネルギー。やみのエネルギーとは明らかに違う。温かいエネルギーだ。それを流れに任せて一気に放つ。今の僕達に出来る最高の一撃。これなら確実にお前を倒せる！

「ブラックホールエクリプス！」

暗黒の玉。それがラティオスを吸い込み、一瞬で粉碎する。言葉通りのブラックホール。一度吸い込まれたら脱出は不可能。そして逃れることも出来ない。チエックメイトだな。

「……終わったわね」

技が終わると同時にラティオスがバタツと倒れてくる。完全に戦闘不能だ。それと同時にナナとのシンクロも途切れて、姿が元に戻る。さすがにラティオスはしばらく動けないだろうな。そしてナナは僕をボールに戻して、驚きの言葉を発した。

「ねえノエル。私のポケモンをお願い……」

ナナはノエルに僕以外の三つのボールを預ける。それに対してボールの中からムンナ達が驚きの表情を見せる。

「ナナ！ なにを！」

「このラティオス。放っておいたら死ぬわ。だから私はテレポートの使えるポケモンを探してくる」

「待てよ！」

「もしかしたら間に合わないかもしれない。だからムンナ達をお願いね？」

「このラティオスは俺達を殺そうとしたんだぞ！　そこまでやる理由があるのか！」

「当たり前でしょ！　どんなポケモンだとしても死んだら悲しむトレーナーがいる！　だからラティオスを見殺しにする理由にはならないわ！　私は大丈夫よ。ダークライがいるもの」

水位は既に胸まである。完全にこれはキツイな。それでもナナはラティオスを背負って歩き出す。これは間に合うのか……

「……なにを言っても無駄だな。ナナ。必ず生きてラティオスを助けて帰って来いよ！」

「もち……きやつ！」

「ナナ！　俺の手を！」

そんな時だった。一気に壁が壊れて水が流れ込んでくる。それにナナは攫われた。ナナもノエルの手を掴もう必死に手を伸ばすが、届かない。ナナは広い大海原に投げ出される。それでもナナは諦めずにラティオスを背負ったままバタ足をして海面を目指す。途中で靴から手当たり次第に色々なものを投げていく。しかし途中で呼吸が続かず、ナナの意識が飛ぶ。

「ナナ！」

僕はボールから出てナナを抱き抱える。そして、そのままナナだけを抱きかかえて海面を目指そうとする。しかしナナが朦朧とする意識の中でぎゅつと俺の胸を掴む。

「ラティオスを……見捨てないで」

ああ！ 仕方ねえな！ 僕は転回してラティオスの体を空いてる方の手で掴む。そしてラティオスをなんとか拾う。想像以上に重い。そして必死に上を目指す、ラティオスの体が重くて殆ど上がらない。ラティオスを見捨てればナナだけなら助けられる。でもナナは望まない。二人とも助ける方法を……

「ホエエエエエエ」

そんな時だった。目の前にホエルオーが現れて僕達を一気に飲み込んだ。もちろん抵抗しようとした。だけど間に合わない。成す術もなくここで終わりか……

ああ……もう少しナナと旅をしたかったな……そんな時だった。声が聞こえた。

「海底洞窟に連れていくが構わんか？ 漂流者」

気が付いたら空気もある。それに地面はピンク色の柔らかいなにかだ。僕達は一体どこにいるのだろうか？

「え？」

「吾輩の体内なら空気はある。少しは生き長らえられるだろう」

そういうことか！ ホエルオーは餌だと勘違いしたわけじゃない。僕達を助けようと口の中に入れてくれたのか。つまりここはホエルオーの体内……

「空気のある場所ならどこでもいい！」

「了解した。しかしお主のトレーナーに感謝することだな」

「え？」

「あの娘が海に様々なものを投げてくれねば気付かなかった。あの娘が投げたものの中に食材があつて、匂いに惹きつけられたら偶然見つけたのだからな」

「……なんで助けてくれた？」

「困ってる人がいたら手を貸してやるのは野生ポケモンとして当然だ

ろ」

優しいホエルオーで良かった。そんな中でナナが水を吐いて、目覚める。ナナが無事で良かった！

「ゴホッ……ゴホッ……ここは？」

「ホエルオー……」

「ありがとう。ここはホエルオーの腹の中……私達はホエルオーに助けられたのね」

いや。随分と察しが良いな！ まあナナなら朝飯前なのだろうが。

「バッグは全て流されて手ぶら。あれ？ これは？」

ナナはホエルオーのお腹の中で青色のボールを見つけた、これは一体……

「ダイブボールね。これで適当な水ポケモンを捕まえば帰れるかしら？」

「エ？」

「恐らくホエルオーは地上まで送ってくれないわよ。ホエルオーを欲しいトレーナーは山ほどいる。だから自衛のためにホエルオーは絶対に島とかに近づかないの。連れていってくれるとしたら海底洞窟辺りかしら？」

「ホエエエエエエ（察しが良くて助かる）」

「正解みたいね。そして海底洞窟ってことは、そこから脱出する手段も必要になるわ。だから水ポケモンを捕まえて、そのポケモンの力を借りて出るわ」

「なるほど……」

「ただ手元にあるのはダイブボール一つ。チャンスは一度だけ……あああああ！」

「ナナ！ どうした！」

「ダークライ！ 大変よ！ 流されたってことは『みかづきのはね』が無くなったのよ！」

え？ 待て。それってマズくないか？ 間違いなくヤバい。みかづきのはねで今までナナは僕が外にいても悪夢を見なかった。しか

し無くしたとなると、もしもナナが僕の傍で寝ようものなら……

「まあボールに入っていれば特性のナイトメアは発現しないのは確認済みだけど……色々と不便ね」

「……ソウダナ」

「あ、鞆あつたわ。ホエルオーと一緒に飲み込んだみたい。それに中のもも近くに散らばってるわ」

いや、あるんかい！ さっきの心配を返せよ！

「でも捕まえるのは水生ポケモンだし、モンスターボールがあつてもダイブボールを使わせてもらおうけどね」

「ン？」

「ダイブボールはボールの中が水で満たすことが出来るの。だからコイキングやトサキントといった水生ポケモンはダイブボールで捕まえましょうねという話よ。まああくまで満たすことが出来るだから普通のボールのように水がない状態でも使えるけどね」

なるほど。ボールにもちゃんと役割つてあるんだな……

「まあ基本的にモンスターボール以外は高いし、滅多に市場に出回らないからモンスターボールを使うのが殆どよ」

ナナはそんな話をしながらラティオスの方へと向かう。ラティオスは一向に目を覚ます気配はない。ナナはラティオスを起こさないように気を遣いながら体を調べていく。

「やっぱり傷が相当多いよね。ダークライ。きずぐすり探してきてくれる？」

ナナが鞆を逆さにする。バッグからはなにも出てこない。そして少し目線を向けると様々な道具が錯乱している。

「道具が全てバッグから落ちたのよ。恐らくホエルオーと一緒に飲み込んだからあると思うのだけど……」

「コレカ？」

「そうそう。ありがとう」

ナナにきずぐすりを手渡す。ナナは手際よくラティオスの傷を治していく。そしてある程度の治療を終えて、自分のスカートを破って包帯代わりに巻いて終わらせる。

「ナナ……」

「気に入ってた服だけど良いのよ。服なんて買えばいいのだから」

いや、その……かなり派手に破いたものだから太ももが露出されて目のやり場に困るといふか……

「でもラティオスも相当な無理をしてたみたい。恐らく数日は目を覚まさないでしょうね。あそこまで攻撃を叩き込んだのだから無理はないか。それとダーククライ。右腕を見せなさい」

「……？」

「いやしのねがいで回復させたつて言っても傷の確認くらいはしとくわよ。ポケモンの技で正式な治療じゃないし、傷口が開く可能性もあるのだから」

もつともだな。僕はナナに右腕を見せる。そしてナナはまじまじと見る。なんか少しだけ恥ずかしいものがあるな……

「完璧に治ってるわね。さすがムンナ。でもダーククライ。絶対にナイトメアシフトの100%だけは使用しないこと。やるにしても40%に抑えなさい」

「ナナ……」

「今度ナイトメアシフトで自損することがあったら二度とバトルには出さないから覚悟しておきなさい」

「スマン……」

「それはそうとよく頑張ったわね。少しぐちゃぐちゃになったけどポケットに入ってたポフィンでも食べる？」

ナナがポフィンを渡す。海水に濡れてぐしょぐしょだ。でも少しだけお腹も空いた。僕はナナに遠慮することなくナナからポフィンを受け取り、口に含む。少し塩味がするし、濡れてて感触も最悪だ。でも少しだけ甘味もあって優しい味がする……

「ホエエエエエエ (ついたぞ)」

「ホエルオー。ありがとう」

ホエルオーが口を開き、眩い光が差し込む。ナナはラティオスを必死に背負いながら砂浜へと降りる。そしてホエルオーは僕たちが降りたことを確認すると去っていった。

「光はコケによるもの……そして砂浜を少し歩くと岩場になって奥に洞窟」

ナナが砂浜に指で図を書いていく。まるで岩に囲まれた監獄だな。そして出口は目の前の海から泳いで出るしかない。

「風がないことから、あそこの洞窟は地上に繋がってないと考えてもいいわね。そして空気はある。ただ食料は無いから長い滞在は不可能。ダークライ。やきつくすで炎を出してもらってもいいかしら？」

「マカセロ」

僕は火を起こす。そしてナナが適当なものを燃やして焚火にする。それから鍋に少し細工をした後に海水を汲んできて沸かし始める。

「よいつしょ……」

「ナナ!？」

ナナが目の前に豪快に服を脱いだ。そして服を鍋に被せていく。ナナは完全に下着姿。こればかりはさすがに目のやり場に困るで済むような話じゃない。

「布はなかったから服で代用。これで真水の確保……あとは脱出のための手段だけ……ていうかダークライ。顔を赤くしてどうしたの？」

「ソ、ソノ……」

「ポケモンが人間の体に反応してるんじゃないわよ……今は非常事態。慣れなさい」

ナナの察しが良くて助かるというか……プライドがズタボロにされたというか……なんというか複雑な気分だ。ていうかナナの裸体に反応してることに気付いても顔を赤くしたり、照れたりするどころか軽くあしらわれてしまった。

「とりあえず少し様子見に泳いでくるわ。待ってて」

そしてナナが下着姿のまま海に飛び込んだ。数分してからナナが海面に浮上してくる。

「……ぶはっ！ とりあえず潜ったところ、コイキングやクズモーが多かった。あと少し大きな影もチラツと見えたから、もしかしたらドラミドロもいるかも！ それに深さもあるから泳いで出られるもの

じゃない。つまり現実的な脱出案としてはクズモーもしくはドラミドロの捕獲になるわ。まあ頑張ろうー！」

ナナが明るく言う。そして僕達の漂流生活が始まろうとしていた。そういえばドラミドロって縄張り意識が強くて、自身に近づくものを見境なく攻撃する凶暴なポケモンだよな？

果たして僕達は生きて帰れるのだろうか……

57話 奈菜とナナ

遭難生活が始まった。ナナは光るコケを見ながら目を瞑っていた。寝てるわけではないが無言でまったく動かない。そしてコケは明るく輝き、昼間のように明るい。ちなみにナナは明日から本格的に動くと言っていた。もつともこんな状態じゃ時間も分からないが。そんな時にナナの方からグウーとお腹が鳴る。

「……ナナ」

ナナは恐らく体力を相当消費している。初めてのZワザを使った後にノエルと二人では言え、二度目のZワザを使ったのだ。普通なら倒れていてもおかしくない。意識を保っているだけ凄いのだ。

「お腹空いたわね。ここから出たらなにを食べようか。ダーククライ」

「……」

「パンケーキとかも良いわね……でも今はそれよりムンナ、スピアー、ツター ज्याに会いたいわ」

ナナは手持ちの三体をノエルに預けて逃がした。そして僕だけを連れてラティオスを助けようとした。ちなみにラティオスは未だに目を覚まさない。ナナの素人診断によれば命に別条はなく、寝ているだけみたいだ。そういえばナナの性格的に僕を預けてもいい気がする。しかし事実としてナナは僕を連れてきた。それは何故だろうか？

「ダーククライ。この際だからハッキリと言う。あなたはナナのパートナーなの。だからナナは少しだけダーククライに頼りたくなっただの」

ナナの一人称が変わる。そういえばナナと初めて会った時も一人称は自分の名前だった。でも一人称が自分の名前だったのはあれつきりだ。

「ナナは……目の前が真っ暗になって不安に押しつぶされそうになると一人称が自分の名前になるんだ。あの時もダーククライに会うまで成績最下位の私はポケモンを捕まえられなくてトレーナーになれないんじゃないかって不安だったの」

「ソウカ……」

「でもダーククライに会って少しは変わった。あれから一人称はずっと私。でも今だけはナナでも許してよ……」

誰が責めるものか。ナナは間違ったことをしてない。常に最善手を打ってきた。その結果として完全に食料もない場所に孤立した。これは仕方ないことでナナを責められることではない。しかし、まだ十二歳の女の子が。それで不安になるという方が無理な話だ。だけどナナはこの瞬間まで不安の欠片も見せなかった。それは立派なこと、強い人だから出来ることだと思う。

「……ナナ達は……このまま死んじゃうのかな？」

「……ボクが……死ナセナイ」

「その言葉。信じるよ？ 私のパートナー……ううん、こっちの方がいいか。私の相棒」

ナナに足りない部分は僕が。僕が足りない部分はナナ。それでも届かない時はムンナやスパアーにツイッタージャがいる。もう一人で背負う必要はないのだ。ナナはもつと力を抜いて僕達を頼ってほしいと思う。

「ナナはチャンピオンになりたい。今まではお兄ちゃんのようになりたかった。チャンピオンになって一番自分が優秀だと証明したかった」

「ウン……」

「でも今は違う。チャンピオンになって私という存在を変えたい。強くなりたいたいからチャンピオンになりたいの。強くなって私は歪みのない普通の人になりたい」

「……ナナは充分ニ普通ダロ」

「ううん……普通じゃない。周りが私を普通だと言っても私自身が私を普通だと思えない。だから私はナナのことを普通だと肯定出来るくらい強くなりたい——そしてダーククライの大切な人になりたい」

なにを言っているのだろうか、もうナナは僕にとって大切な人だ。少なくとも命を賭けて守りたいくらいと思うくらい大切だ。ナナのためならなんだって……

「ダーククライにとって大切なのは私なの？ それとも私に似ていた人

？」

その言葉と同時に背後から鈍器で殴られたような衝撃に襲われた。僕はナナが大切だ。でも、それは地球時代に付き合っていた彼女の桜月奈菜と瓜二つだから。もしもナナの容姿が奈菜と違っても僕はナナを大切だと言えるのか？

ナナはずっと奈菜と比べていたんだ。それで僕にとつて奈菜と同じくらい大切な人になりたいと思っていたんだ。あの日の僕の何気ない発言がずっとナナを苦しめていたんだ。恐らく、あの時の言葉はナナと僕の時間が経てば経つほど重く辛いものとなっていた。

『ナナは求めていない。奈菜を求めている』

そんな風にナナを縛っていた。ナナと奈菜は違う。理屈では分かっている。それでもナナに奈菜を重ねないかと問われると難しい。そしてナナはずっと心にお面を被せ、必死に息を潜めて醜い感情を隠していた。誰にも悟られないように。だから僕達はナナに全てを任せて常に全力を出せていた。ナナならどうにかしてくるという安心があつたから。

でも、絶対にどうにかしてくれるという安心がナナにプレッシャーという重りになっていった。ナナはそれでも折れずに僕達を不安させまいと歯を食いしばっていた。改めて思う。ナナは強いトレーナーだ。でもナナはまだ自分が弱いと思っている。だからこそ絶対に崩れることのないものを崩れてしまうのではないかと心配して不安になってしまふ。

ナナは自分を信用することが出来ない。また、それがナナの最大の悩みでもある悪役適正に繋がっている。ナナの悪役適正は攻撃性の高さにある。ナナは自分に自信がないから周りに攻撃的になって、無意識のうちに自分は強いのだと自分自身を騙そうとしている。ナナの悪役適正は自分に自信がないからこそ存在してしまっているものだ。

もしもナナが望む強さを手に入れるにはナナがナナ自身を認めるしかない。それは難しい課題で大きな壁だ。しかし、それが出来なければ……

「教えてよ。ダークライ」

僕がこれから示すのはずるくて卑怯な回答だ。その問いかけに対する回答を僕は一つしか待ち合わせていない。だけど、それはありふれた回答で平凡な回答。

「……両方トモ」

「なら私か前の大切な人。どちらかとしか選べないとしたら？」

「絶対にナナだ」

桜月奈菜と僕の関係は彼女の死で終わり。ピリオドが打たれた物語は続かない。最初は現実を受け止められなかった。だけど時間が経って受け入れられるようになった。桜月奈菜は死んだ。死んだら終わりだ。それ以上を望むのは奈菜の今までに対する冒涇だ。それに今の僕は人間じゃなくてダークライ。ダークライとして新たな人生を歩んでいる。それなのに前世のことを持ち込むのは無しだ。奈菜も死んだし、僕もダークライに生まれ変わった。僕と奈菜の物語は完全に終わっている。幕が下りた物語にとやかく言うものではない。

だから僕は奈菜じゃなくてナナを選ぶ。これは奈菜と僕の物語じゃなくてナナとダークライの物語なのだから……

「……本当に？」

「アア」

僕の恋人は桜月奈菜。ダークライのトレーナーは可愛い女の子。それ以上でもなければ、それ以下でもないと思っ。どんなに悪役に近い存在だろうが、弱い存在でもダークライのトレーナーはナナであることには変わりはない。だってダークライがナナの傍にいることを望んでいるからだ。

長々と考えたが言いたいことは一つ。僕とダークライは同じ記憶があるだけで完全な別人だということ。少なくとも今の僕はそう考えている。だから僕は人間か問われたら首を横に振る。人間の記憶が存在しているだけのポケモンなのだから。今の僕はポケモンだ。

「ダークライー！」

ナナが目を開いて宝石のように綺麗な真紅色の目を輝かせて僕に抱きついてくる。僕はそれを優しく抱きしめる。

「僕はナナが好きだ。奈葉じゃなくてナナが好きだ」

「私も！」

それ以上の言葉はいらない。もちろんナナにも僕にも恋愛感情はない。恐らくそういう関係になることは絶対ない。それでもずっとナナの傍にいるだろう。

「ダークライ！ 絶対になろう！ みんなでチャンピオン……ううん、ポケモンマスターに！」

ポケモンマスターとは随分と大きく出たものだ。今まではチャンピオンだったのがポケモンマスターか。それこそチャンピオンよりも大変だ。そもそもポケモンマスターなんて概念的なもの。なる方法も分からない。強いて言うなら周りにポケモンマスターだと思わせるくらいの強さを見せつけること。

「……今の私なら何者にもなれる気がするの！」

まあポケモンマスターになるかどうかはさておき、少なくとも僕は変わらずチャンピオンにはなるつもりだ。変わったことはチャンピオンがゴールじゃなくて通過点になったこと。

「チャンピオンにナツタ後は？」

「考えてない！ だけどダークライといけるところまで行きたいの！」

ナナの目はさつきと少し違う。迷いの吹っ切れた目をしている。ナナは確実に旅を通じて成長している。色々な人やポケモンと出会って色々な考えや思想に触れて、足で新しい大地を踏んで、目で見ただことない景色を見て、肌で自分がここにいると実感する。ナナは旅の全てを自分の経験値にしてレベルアップしている。この遭難したという経験すらナナは経験値にするだろう。ナナは自分の感じたこと全てを自分の力に変えて成長出来る。敗北も勝利もナナの前では経験値になる。だからナナは強いのだ。ナナは絶対に止まらない。だから僕も止まるわけにはいかない。

「僕も同じだ！ ナナとどこまでも！」

「うん！ まずはここから出よう！」

ナナが笑顔になる。ナナと一緒に僕が足を止めなければどんな

高みにもいける。だってナナは無限に強くなるから。そして僕も無限に強くなれば理論上は絶対に最強になれる。そしてナナが僕から離れて走り出す。手にはダイブボール。ナナが叫ぶ。

「ねえ！ なにを捕まえる？」

「強イヤツ！」

「そうだよね！ コイキングやクズモーじゃない！ 折角ならここら辺で一番強いドラミドロを捕まえて出よう！」

そして海底洞窟からの脱出。ナナの五匹目のポケモンの捕獲が始まる。

58話 脱出

僕は水に手を入れる。ナナはボールを構えて戦闘準備をしていく。正直に言うとは作戦は極悪非道。最悪も良いところだ。ナナ曰く昔から水ポケモンを呼び出すならビリリダマ漁の一択らしい。しかし我々も危険な状況。手段を選ぶ余裕はない。少々荒いが許せよ！

「ダークライー！ 10まんボルトよ！」

キンランさんとの修行で教えてもらった技は多い。その中でも一番最初に教わったのは10まんボルトだ。海は電気を通す。そして水タイプのポケモンは電気に弱い。だから海に10まんボルトで電気を流して、ポケモンを一網打尽にする。

しばらくすると戦闘不能のクスモーやコイキングがプカプカと浮かんでくる。それも数体ではない。数百体の規模だ。しかし改めて思うとやってることは悪役だよな。もしかしたら僕達は悪役になって好き放題に生きるのが一番の幸せなのかもしれない……

しばらくすると目当てのドラミドロも浮いてくる。しかし戦闘不能だ。たしかタイプはどくとドラゴンで電気技は高価抜群ではないと思うのだが……

だけどナナは浮いてくるドラミドロには目もくれない。まるでなにかを待ってるようだ。

「私達が狙うのはこちら辺のヌシよ。折角なら一番の大物を狙いましょう」

「ヌシか……」

「大丈夫。ここまでポケモンを倒してヌシが黙ってるはずがないわ。あのトロピウスの時もそうだったもの」

ナナはいつの日か戦ったトロピウスクラスのポケモンを狙っていたのか。まあヌシを狙うというのはそういうことだ。それなら少しは警戒しないとな。あのトロピウスは一人でZワザを使ってきた。ヌシならそれに相当するなにかがあるはずだ。

「ドラアアアアアア！ (妻のナワバリでなにをしている！)」

「

その時に大きなドラミドロが現れた。それは大きく、僕の二倍近くの体調がある。あれは相当強いな。僕はナナの方を見る。ナナは戦う気だ。どうやら捕まえるのはこのドラミドロに決めたらしい。

「ドラアアアアアアア！ （溶かしてくれるー）」

「ダークライ。払いなさい」

毒の爆弾が飛んでくる。技はヘドロばくだん。もしも当たれば育ってないポケモンなら毒で一晩は動けなくなるかもしれない。それどころか体が溶けるかもしれない。それほどまでの威力だ。僕はそんなヘドロばくだんを当たる前に手を右に振るい、風圧で軌道を変えて弾いた。あやしいかぜの要領で風を起こしただけだが。

しかし威力が前よりも上がっている。ナイトメアシフト8%の状態でこれだ。恐らくラティオスとの戦いでレベルアップしたな。

「ド、ドラア（な、なに……）」

「……遅イ」

僕はドラミドロの背後にいた。ドラミドロは僕が喋るまで背後を取られたことに気付かなかった。僕は迷わずシャドーボールでドラミドロを吹き飛ばして地上に飛ばす。しかしドラミドロは普通に起き上がり、普通に浮いて空気の中を泳いでいた。てっきり地上に出たら身動き一つ出来なくなると思っていたんだが。

「ダークライ。水生ポケモンは普通に空を飛ぶわよ。でも個体次第だけど飛べて数分が限界。それに水中よりも動きは遅くなる」

ポケモンってすげえな。でも数分か。正直に言うとかバトルで使うには少し厳しいな。たしかに思い返してみればアズマオウやネオラントといった水生ポケモンは見たことがなかった。恐らくそういう背景もあるのだろうか。

「ドラア！ （勝ったつもりか！）」

今度は紫色の光線だ。これはラティオス戦で見た技。名前はりゅうのほう。しかしラティオスと比べても劣らないくらいの高威力。「特性は『てきおうりよく』みたいね。自分の同じタイプの技の威力が大きく上がるわ。まあドラミドロのてきおうりよくは少ない珍しい特性だけど目撃例がないわけじゃないわね。まあヘドロばくだんの

時から、そんな気はしていたけど」

僕は迷わずあくのはどうで迎え撃つて、りゅうのはどうを相殺する。そして闇の大玉を作り、そこからマシンガンのようにビー玉サイズの闇の玉を飛ばしていく。ドラミドロも危険を察知して避けようとするが、そんな簡単に避けられるものではない。闇の玉は見事にドラミドロに当たり、深い眠りに落とす。

「ダークホール。ナイス判断よー！」

ドラミドロはドスンと地に落ちてぐっすりと眠る。それもスヤスヤと。しかしおかしい。僕の特性はナイトメア。だから悪夢を見るはずだ。しかしドラミドロは悪夢をみている様子はない。もしかして僕の特性が消されたのか？

「……おかしいわね。いえきやスキルスワップは受けてない。それなのにダークライの特性が発動しない？」

「アア……」

「まあいいわ。とりあえず捕まえましょう」

ナナはダイブボールを寝ているドラミドロに投げる。しかしボールは弧を描いて壁にぶつかる。完全に忘れていた。ナナは運動音痴。狙った場所にボールを当てられないということ。

「……ごめん。ダークライ」

「……」

さすがに寝ているポケモンにボールを外すなよ……ナナは急いでダイブボールを拾ってくる。幸いにもボールは壊れてなさそう。ポケモンにも当たっていないからもう一度使える。そしてナナは寝ているドラミドロに近づき、優しくボールで触れる。そうするとドラミドロはボールに吸い込まれて、何度かボールが揺れる。やがてカチツという音がしてボールの揺れが止まる。もうこれからはボール投げないで素直に直接触れてくれ……

「ドラミドロ。ゲットね」

随分とあっさりとしたゲットだったな。これは強くなったということの良いのだろうか。ドラミドロも弱いわけではないと思うが……

「やっぱり野生ポケモンじゃ相手にならないわね。ポケモンはトレーナーが育てて、適切な指示を出すことで何倍も強くなる。野生ポケモンなら伝説や相当優秀な個体じゃない限りは、こんなもんね」

まあそれもそうか。もしも今のドラミドロにトレーナーがいたら苦戦は間違いなかった。技の威力も低いわけではない。むしろ野生であの威力なのだ。トレーニングもしないであれだけの威力を出せるのだ。そう考えるとゾツとする。そんな強いドラミドロはナナのポケモンになった。もしもじっくり育てたら……

「とりあえずドラミドロ。出てきなさい」

ナナがドラミドロのボールを投げる。そうするとドラミドロが怒った様子で出てきた。それもそうだ。いきなりナワバリを荒らされて、捕獲された。怒るなという方が無理な話だ。

「ダークライ。頼んだわよ」

「ワカッタ」

僕はドラミドロの元に行く。まずはドラミドロと和解しなければ……

「ドラミドロ。話を聞いてくれ」

「……妾を倒して捕まえる実力。それは確かなものだと認める。しかし貴様らは妾の大切な民達に手を出した。だから嫌いだ」

「あれにはワケがある。僕達はここから出て街に行きたい。そのためにドラミドロの力が必要だったのだ」

「それなら一匹だけ捕まえればいいじゃろ！　ここまでやる必要はないだろ！」

うん。ごもつとも。

だけど僕達はそうする以外の方法が分からなかった。それに……

「彼女はチャンピオンになる。だからこれから一緒に過ごすポケモンが並大抵のドラミドロというわけにはいかなかった」

「……そんなの、ここから脱出したら逃がせばいいだろ」

「ナナはそんなことはしない！　絶対に自分で捕まえたポケモンを無責任に逃がしたりしない！　ナナは一度捕まえたポケモンをお絶対に手放せない！　だから強いドラミドロじゃないとダメだったんだ

よー」

「理解不能じゃ……だが言いたいことは分かった。妾の背中に乗れ。街までは妾が送ってやる」

ドラミドロが背中を見せる。これは乗れということだろう。しかしナナは動かない。

「ドラア？（どうした？）」

「ごめんなさい。ここのラティオスが目覚めるまでは離れられないわ」

「ドラ……（ボールに戻せばいいじゃろ……）」

僕はナナとドラミドロの間に入って今までのことを説明する。ここに遭難したこと。ラティオスが自分のポケモンではないということ。その他諸々を……。しかし話しているうちにラティオスが目覚めて、僕達を軽く見て、ドラミドロの姿を確認すると一瞬で海に潜って去っていった。ナナはそれを啞然としていた。

「……求めていたわけじゃないけど、お礼の一つくらいあると思っていたわ。まあなんでもいいけど」

そしてナナはすぐに気を取り直してドラミドロに近づく。

「そういうわけでドラミドロ。用は済んだから私達を外に運んでくれていいかしら」

「ドラアアアアア（早く乗れ！）」

「ありがとう。それとダーククライもボールに戻って」

ナナが鍋に乗せていた服を取って着る。もうボロボロだ。そろそろ新しい服を買う時期か。とりあえず僕はナナに言われた通りにボールに戻る。ナナはドラミドロに駆け寄り、体に抱きつく。振り下ろされないように力強く。

「それじゃあ頼んだわよ！ ドラミドロ！」

ドラミドロが一気に海底に潜る。そして海を猛スピードで泳いで海上に浮上。ナナの体に太陽に照らされる。やっと出られた！ 外の世界に！

「あそこはカイヨウシティ！ ここは北西の海ね！ そのままカイヨウシティ……あそこの大都市に行っちゃおうだい！」

ドラミドロはそれに従って猛スピードでカイヨウシイを目指す。まるで水上バイクに乗っているかののように速い。そしてカイヨウシイの浜辺に到着して、ナナが浜辺に降りる。周辺には人がいてザワザワという声がある。

「……ナナ？」

「ナナはゴオー団を襲撃した結果死んだんじゃ……」

野次馬から様々な声がある。世間でナナは死んだことになってい
るのか。そういえばゴオー団のアジトに乗り込んだが、あの後はどう
なったんだろうか。

「……少し新聞を借りても良いかしら」

ナナは近くの人から新聞を拝借して目を通す。まず最初にナナ死
亡という情報。次にカラマネロを除く全てのゴオー団の幹部を捕縛
したという情報。そして最期に……

「……？でしよ」

メアがゴオー団に拉致されたということが書かれていた。メアは
カラマネロに洗脳されて拉致をされたと書かれていた。もつと細か
いことはキンランさんやノエルとって当事者に聞いた方が良さそ
うだ。

「ありがとう」

ナナは新聞を返す。しかし気が付いた時には人が集まり始めてい
た。ナナは人に臆することなく前に進み、華麗に宣言する。

「私……ナナは生きている！ 死亡説は嘘よ！」

そして自分がナナであることのアピールのために僕をボールから
出す。それに周りはザワザワと騒ぎ始める。そんな中で一人の男が
ナナの元に駆けてきた。

「ナナさん！」

「ベアルン。丁度良いところにきたわね。私はお腹が空いたわ」
「今すぐ！」

見事なタイミングでベアルンがやってきてナナをレポートで連
れていく。恐らくカイヨウシイ周辺はちよつとした騒ぎになっ
ていることだろう。

「しかし驚きましたよ！　メアは拉致！　ナナは死亡したという記事が出回ったんですよ」

「まあ私は色々あったけど生きてるわ」

ナナは出来た料理を端から食べていく。そこに一切の品はない。まるで掃除機のように料理を吸い込んでいく。しかし食べながら普通に喋っているのだから器用なものだ。

「あとメアの拉致について聞きたいわ。」

「世間一般ではゴオー団のアジトに乗り込んだ結果としてゴオー団の使うカラマネロに催眠で拉致されたことになってます。そもそもゴオー団のアジトに乗り込んだってなにをしてるんですか……」

「まあそれはあとで説明するわ。他のゴオー団関係の顛末をお願い」

「とりあえずゴオー団は幹部のマリアとアカイを捕縛。また団員名簿も入手して残りの団員も近いうちに捕まる。しかしボスに関しては名前すら不明で存在しているかどうか不明だとか……」

「キンランさんはしっかりと捕まえてくれたのね」

「ちなみに死傷者は……」

「それはいらないわ。聞いても暗くなるだけなもの」

死傷者か。それもそうだ。アジトが完全に沈んだんだ。少なくな
い人数のトレーナーやポケモンが死んでいてもおかしくない。

「国際警察はどうなった？」

「国際警察？　そんな単語は出てませんよ。ボランティアでゴオー団のアジトに乗り込んだのではないのですか？」

「なるほど……国際警察は飛び火しないように最初から無関係だったことにしたわけね」

一度不信任感が生まれたら信用を失い。国際警察の力が弱まる。当然といえば当然の処置で合理的か。ここで国際警察の名前を出しても利点はなに一つない。もちろんナナも理解しているようで口に出すことはない。

「ごちそうさまでした」

「お粗末様です」

「これで完全復活よ。それじゃあキンランさんの元に行きましょう。」

詳しい話は彼女に聞いた方が早い。恐らく私の生存報告を見たら間違はなくカイヨウシテイに来るはずだわ。だからメールしてカイヨウシテイから動かないのが適切ね。そういうわけだからカイヨウシテイに帰してもらっていいかしら?」

「はい」

そしてナナはキンランさんに軽くメールで要件を伝える。それからカイヨウシテイに戻って少しだけ買い物を済ませていく。海に流されて使えなくなったものも多い。まずは新しい携帯電話の契約。その後新しい服を買いに前と同じお店に行く。

「ナナ様。お待ちしております」

「……え?」

そして店に入ると何故かVIP対応だった。ナナはこの店になにかしたのだろうか。僕はナナの方を見るがナナは首を傾げる。

「ナナ様が当店の服を着てくださったおかげで服の売り上げは倍近く伸びています。これは私達の感謝でもありません」

「そういうこと……」

ナナの知名度って相当上がっているんだな。裏を返せばナナがそれほどまでに強くなったということ。もう彼女はデトワール地方指折りの実力者として認識されているのだ。

「それで本日の注文はなんでしよう?」

「ごめんなさい。ワケあって服が少しボロボロになってしまっただけ……」

「そういうことですか。了解しました」

そしてナナが店の奥の方に連れていかれる。それからスリーサイズを図られたりと色々とされている。これは一体……

「ナナ様の場合はオーダーメイドにさせていただきます。まずナナ様はこれからも旅をするのでしよう。恐らく派手に動き回り、険しい山道を登ったり、海底の奥深くに潜ることもあるでしょう。そのためには服の機能性が必要になります」

「そうね……」

「しかし、それに応えようとすると手間もかかりますし、素材も高価に

なるため商品としての販売は不可能になります。だからこそそのオーダーメイドでの対応となります」

「でも……お金は？」

「これは投資です。私達はナナ様がチャンピオンになると確信しています。もしもチャンピオンになればナナ様は立派な広告塔となります。なのでお代は結構です。ただ私達の服でポケモンバトルをしてくださいばいいのです」

「分かったわ。ならお言葉に甘えておくわ」

そして数時間くらい待たされてナナの服が完成する。前と変わらない黒いロリイタ服。しかしスカートにはフリルが増えたり、肩はレースになっていたり可愛らしさが増している。ナナは服を着て軽く跳ねる。それから間もなく驚きの声をあげた。

「すごいわ！ 羽のように軽いし、動きやすい！」

「お気に召したようですねによりです。しかしそれだけじゃありませんよ」

「気づいてるわ。この服は防塵に防刃、それに耐熱や防寒までしつかりされてる。これならどんなに激しいポケモンバトルでも耐えられる。でもこれって下手したら数百万くらいしないかしら？」

「ナナ様にはそれくらいの価値があるということですよ」

「なんかここまで持ち上げられると怖いわね。でも、ありがたく服はもらっていくわ」

「ええ。なにかあったらまた寄ってください。それと今後も当店を轟負してくださることを祈っております。それと今まで着ていた服は……」

「そうね……折角だから記念にもらっておくわ」

そしてナナは店を上機嫌で後にした。新しい服を着て、テンションが大きくなっている。それに前よりもナナが心なしか可愛く見えた気がした、いや元々可愛いのだが、それ以上に……

「ナナー！」

「きやつー！」

そんな時だった。ナナが背後から誰かに抱きつかれた。少しだけ

の驚きの声をあげるが、ナナは彼女の顔を見て安堵する。

「キンランさん」

「もう心配したのよ！ あんな無茶はしないでもっと自分を大切にしてください！」

「でもラティオスが……」

「ナナが死んだら悲しむ人がたくさんいるのよ！ もっと自覚しなさい！ ポケモンよりもまずは自分の命を絶対に優先して！」

「……ごめんなさい」

「それじゃあ、とりあえず現状報告したいから人目のないところに行きましょうか」

59話 現状とこれから

キンランさんの案内で来たのは客が殆どいないBARだった。まず最初にナナにボールが三つ渡される。入っているのはムンナにスピアー、そして色違いのツタージヤだ。

「ノエルからの預かりものよ。あの子だけはナナが生きてるって疑ってなかった」

「ありがとうございます」

「あとでポケモン達に謝っておきなさい。この子達は相当怒ってたわよ」

「怒ってる?」

「それだけ懐かれてるってことよ。幸せ者ね」

そしてキンランさんがワインに少しだけ口をつける。恐らく話の本題はここからなのだろう。まだゴオー団の問題は解決していない。

「あと幹部のマリアはしっかりと私が捕まえたわ」

「そうですか」

「でも数日もしたら保釈されるでしょうね」

「どうしてですか!」

ナナが驚きの声をあげる。今までは証拠がないから捕まえられなかった。しかし今回は明らかに現行犯逮捕だ。それなのに数日で……

「まずゴオー団に所属してただけでダークポケモンに彼女が関与した証拠が得られなかった。そして次に彼女は大金持ちで金の力どうにでも出来る」

「そんなのって!」

「これが現実よ。あの女は強すぎる。トレーナーとしてはもちろんだけど自分の保身の立ち回りが上手い。あれを正当法でどうにかするのは無理よ……」

「なんですか……それで、」

「続いて本題のメアの話。あれは厳密に言えば拉致じゃない」「え?」

「今回ゴオー団のボスの情報は一切得られなかった。だからメアは拉致されたフリをしてもらって侵入したのよ」

「なんでメアが!」

「というより気が付いたらそうなっていた。私達もメアがワザと拉致されたと知ったのは一連のゴオー団のことが終わったあとの手紙だもの」

つまりメアはゴオー団どころか僕達も騙したのか。メアが自主的に動いてゴオー団のボスの情報を掴もうとしている。なんて女だ。可愛い顔して、この場にいる誰よりも頭が回って恐ろしい女じゃねえか。

「恐らくメアは誰よりも先にゴオー団のボスがいないことを察した。だから身内すらも騙して侵入という大規模なことを考えた。そして無事に成功させてメアの作戦通りに物事は進んでいる」

ナナの元に顔写真が一つ渡される。見覚えのある顔だ。これほど強烈な人物を忘れるはずがない。

「名前はラルム。ゴオー団のボス。そして追加資料で彼はナナと同じダークライを持っているトレーナーで……狙いはダークライの病気を治すこと。そしてその狙いは果たされてゴオー団は必要なくなつたから私達にアジトの情報を流して潰させた」

「どうしてそこまで知ってるのですか?」

「全てメアが流した情報よ。もしも全てが合っていたら私はメアが恐ろしいわ」

「恐ろしい?」

「まだ十二歳の少女が国際警察が必死になつても得られなかった情報を意図も容易く入手して、さらに悟られることなく発信した。あまりに異常な光景。しかもメアは誰にもそんな芸当が出来ることを悟らせなかった。ハッキリ言つて天才の域を超えて恐ろしいレベルよ。ねえナナ。彼女は何者なの?」

「普通の女の子かと……」

「一つ言っておくわ。もしも彼女が本気でポケモンバトルをしたら誰も勝てない。ナナやノエルはもちろんだけど、私はメグ。それにカナ

夕でも相当難しいと思うわ」

「バトルの才能とそれは別では？」

「……直感よ。ただメアが目指すのはトップアイドル。だからポケモンもバトル専門に育てているわけじゃないにも関わらずあの強さよ？」

「……」

「まさか一番とんでもないのがナナでもノエルでもなくてメアだとは思わなかったわ。恐らく全てがメアの思惑通りに進んでるのでしょね。それにこうとも書いてあつたわ。恐らく仮想戦闘祭でラルムはナナに正体を明かしている……と。それに関してはどうなの？」

「口止めされてるから言えませんとだけ」

「そこまで感付いたのか。それともラルムと親密な関係になって吐かせたのか。どちらにせよメアは情報を入手して、こちらに流したの
は事実だ。」

「ただ肝心のメアの現在地は不明。こちらでもメアの奪還は不可。そしてメアも自力で抜け出すのは不可能という状況よ。言うならば『囚われのお姫様』ね」

「メアを助ける手は……」

「ないわね。ただメアからなんかしらのアクションがあるはず。だからナナはその時に問題なく動けるように強くなりなさい。具体的に言うならジムバッジを7つ集めて。8つは私がいるから無理だと思
うけど」

「これからはジム巡りか。今までみたいにのんびり鍛えるわけにも
いかなくなった。なるべく早く強くならなければならぬ。そして
強くなるにはジム戦をするのが一番手っ取り早い。」

「はいー」

「それともう一つ。カイヨウシティで三日後に『スピアーカップ』が開
かれることになったわ」

「スピアーカップ？」

「ルールは簡単。スピアーに乗って一番早くシノタウンに着く。簡
単に言うならレースよ。だけど自分のスピアーで他人のスピアーへ

の攻撃はあり。そして優勝者には『スピアナイト』が与えられる。その意味が分かるわね？」

「……メガシンカですか」

「使う使わないは後にして、強くなる手段の一つとして持っておきなさい」

そしてキンランさんと別れた。ナナはベアルンと合流して再びレポートで彼の部屋にいる。ナナはベアルンに全て話した後に彼につまみを作ってもらい、それを食べながら本を読んでいた。本のタイトルは『足りない速さ！ 補います！』というもの。

「……素早さを上げてからバトンタッチ……インドメタシンを飲ます……そんなことは8歳の時から知ってるのよー」

ナナが本を投げる。どうやら望んだ回答は得られなかったらしい。ていうか普通に高度な内容だと思っただが……

「はあ……そもそも素早さを上げてバトンタッチとか読まれるし、成功するなんて稀。インドメタシンに関してはノーコメント。ベアルンがポケモンの体作りの一環として料理に使ってくれてるという話は聞いたけど……」

マジかよ。完全は初耳だったんだが……僕達ってドーピング剤を飲まされていたのかよ。もつともインドメタシンがどんなものか知らないが……

でもベアルンの食事を食べると体から力がみなぎるのはそういう理屈だったのか。

「真面目に考えましょう。まず手っ取り早く速くするなら『こだわりスカーフ』を持たせるのが無難。だけど、それだと技が一つしか出せなくなる。今回のルールだと妨害もあり。それを考えると技の固定は痛い……まず原則として『こうそくいどう』を使うのは当たり前で……そこから一気にゴールを目指す、相手のスピアーを全て倒すの二択で……」

ナナがボソボソと呟く。そこから先は少し内容が高度過ぎて分からない。ただナナのことだから確実に勝てる作戦を組むだろう。それに今回はスピアーしか使えないのだから僕の出番はない。ボール

の中から観戦でもしておこう。

しばらくして作戦も無事に決まったようでもナナは風呂に入って歯磨きをした後に眠りについた。

60話 スピアーカップ

『始まりましたあああああああ！ スピアーカップ！』

実況がうるさいくらいに盛り上げる。そして簡潔に主要選手の紹介になる。

『そして一番の注目株！ とても可愛い容姿をしているが戦いに一切の容赦はない！ 戦った者曰く悪夢のようだと言う。そのギャップからトツプクラスの人気を誇る悪夢姫ことナナだ！』

まじか。ナナが一番の注目株なのかよ。そして一気に歓声が巻き起こる。いつの間にナナがここまで人気になっていたから。しかしナナは観客には目もくれない。その様を観客はクールで好きだと言う。

『ナナ！ 彼女は先日まで死亡説が囁かれていたが完全に嘘だと証明された！ 戦い方は基本的に瞬殺。そして知らぬ者はいない、この地方のチャンピオンの実の妹でもある！ この強さに疑いの余地は一切なし！』

「……随分と有名になったものね」

ナナがぼそりと呟く。もう完全に世間から注目の的だ。でもナナってまだジムバッジ三つなんだよな。しかも旅を始めて半年も経ってないだろうし……

『続いてはスピアー界の女王の……』

そんな感じで選手紹介がされていく。今回の大会に顔見知りはない。もつとも参加条件がスピアーを持っているというものだから少し敷居が高いから仕方ないのだが……

「行くわよ。スピアー！ いつも通り全力で！」

「スピッツ！（ああ！）」

ナナはスピアーの背中にしがみつくように乗っている。周りのスタイルは様々だ。スピアーにソリを引かせる者もいれば、スピアーの隣を走るつもりの者もいる。そしてナナのようにスピアーに乗るスタイルは見たところナナを含めて三人しかいない。

理由は簡単でスピアーがトレーナーの重さに耐えられないから。

耐えたとしても減速は免れない。もっともそれは普通のスピアーの話だ。当然ながら育て上げたスピアーならトレーナーを物ともせずに乗せて走る。しかしそこまで鍛えるのは至難の業で……

『それでは総勢二十三名によるスピアーレース！ 開幕だ！』

ホイッスルが鳴る。ナナのスピアーが頭一つ飛びぬけて速く、いきなり先頭を取る。スピアーは当然ながら開幕と同時にこうそくいどう。それにより周りのスピアーよりも段違いで速い。

「う、うそつだろ！」

「そんなの反則よ！」

様々な声が聞こえる。ていうか、ここまで離れて聞こえるってどれだけ大きな声で叫んでるんだよ。そしてナナはスピアーに軽く命じて適当なタイミングで止まるように合図する。これはレースだ。足を止める理由なんて……

「距離は300m。到達まで約5秒から7秒くらい。そして加速している個体もある。なら私達がすることは一つ。スピアー。ミサイルばり！」

「スピッツ！（へいっ！）」

スピアーが動きを止めて、的確に針を飛ばしてインベーターゲームをやるかのように相手のスピアーを一撃で戦闘不能に追い込んでいく。

『なんてことだ！ ナナ選手！ 容赦ない攻撃でスピアー達を脱落させていく！ なにが起きているー！』

『こちら解説役のスピアニストです。ナナ選手のスピアーは相当強いですね。この距離で的確に相手の動きを読んで当てる。それは至難の業です』

『な、なるほど……』

『しかもそれだけではない。威力の低いミサイルばり。その一撃だけでスピアーを戦闘不能に追い込むことから攻撃力の高さが見て分かる。彼女のスピアーは十年に一度の逸材と言ってもいい。いや、彼女がそこまで育てあげたのでしよう』

『というわけで解説が入った！ 一つ分かるのは我らのナナは想像の

遙か上をいくくらい優秀だということだ!」

『しかし今回は三冠を達成しているスピアークイーンのみロ口選手もいます。たしかにナナ選手はトレーナーとしてはとんでもなく優秀、しかしスピアー一筋の彼女にスピアーで勝てるかというところと怪しい部分でもあると思います』

残ったのは五体だった。そしてスピアーに乗って移動している選手は二人共残っている。やはりこんな小技では倒せないか……

「悪夢姫の名は伊達じゃないね! 戦い方がえげつない!」

「褒め言葉をどうも! スピアークイーン!」

ナナが隣を走る金髪ロールの女に挨拶をする。彼女のスピアーは赤いリボンを巻いていて少しだけ可愛らしい。

「それじゃあスピちゃん! メガホーン!」

「こつちもメガホーンで対抗よ!」

相手のスピアーのメガホーン。まさかナナ以外の個体もメガホーンを使ってくるとは思わなかった。そして威力は互角。そのままメガホーンを撃ち合いながらゴールを目指す。

「あなたのスピアー。相当強いわね。だけど、これで終わりよ! ス

ピアー! いばるよ!」

「スピッ、スピ……! (まったく、こんなメスガキが……)」

いばる。相手を混乱させる技だ。これで一気に主導権を……

「ピアッ! (かっこいい!)」

その瞬間にナナのスピアーが一気に減速して足を止める。待て!

なんでここで足を止めるんだよ! 今はレース中だろ!

「攻撃力。ごちそうさま」

「……メロメロ。完全にしてやられたわ」

ナナが適当にスピアーを叩いて魅了から回復させる。その間に一気に他のスピアーにも抜かれて最下位まで落とされる。

「ス、スピッ! (な、なにが!)」

「魅了から覚めた? 早く逆転するわよ!」

スピアークイーンとナナが呼んだ女は現在3位だ。いばるが効いて混乱してふらついた結果として順位を落としている。そしてナ

ナがスピアーにこうそくいどうを命じて一気に加速して一位に返り咲く。やはりナナのスピアーは飛びぬけて速いらしい。

「……させねえよ」

「ウソでしょー!」

その時だった。後ろからナナのスピアーが糸に絡めとられて転倒する。技は『いとをはく』か。完全にしてやられた。

「一位はヘイトを集めやすいから気を付けた方がいいよ」

「ヘイト……そういうこと!」

「お先に……」

「スピアー。メガホーン!」

抜こうとした男性をメガホーンで吹き飛ばして戦闘不能に追い込む。これで残り四人。ナナの現在の順位は最下位の四位。しかしナナは気が付いたようで相手のスピアーと一定の距離を保って抜こうとはしない。

「これは駆け引きよ。もしも一位になったら注目的になって他のスピアーの妨害が多く飛んでくる。それをスピークイーンは分かっていたから一位になっていない」

「スピッツ……(そういうことか……)」

「普通にレースしても勝てない。それなら私達の土俵で戦うわよ!」

「スピッツ?(ん?)」

「ポケモンバトルで全て戦闘不能に追い込んで一人勝ちを狙うのよ!」

結局そうなるのか。でもそれが一番分かりやすい。つまり簡単な話だ。相手がゴールに到着するまでに倒せば勝ち。倒せなければ負け。それだけのことだ。

「スピアー! ミサイルばりを撃ちながら進むのよ!」

「スピッツ(了解)」

スピアーがミサイルばりを撃つ。しかし残っているのは猛者立達。簡単には当たらない。そんなタイミングでゴールまで残り半分の距離となる。ナナのスピアーは距離を一気に詰めていく。そして相手のスピアーの真後ろに行き……

「……メガホーン！」

「そんなの当たるかよ！」

「転回してシザークロス！」

「な、なに！」

見事な一撃で戦闘不能に追い込み、一人脱落させる。その時だった。横からシザークロスが飛んでくる。ナナのスピアーは攻撃を受けるが大したダメージにはならない。

「そっちがその気なら俺が倒してやる」

「スピアー。メガホーン！」

「躲してエアカッター！」

風の刃がスピアーに襲いかかる。それにスピアーは少しだけダメージを受けて顔をしかめる。だけど問題なく動けそうだ。

「これは切り札だけど……やるしかないわね。アクロバット！」

「ど、どこだ！」

スピアーは軽やかに動き、背後から相手のスピアーを叩いた。それにより一撃で戦闘不能。アクロバットは飛行タイプの技でスピアーには相性が良い。そしてレベル差もあるので一撃で倒せるのだ。

「あとはスピアークイーンだけね」

「へえ……さすが注目されてるだけのことはある」

「こうそくいどう！」

「おいかぜ！」

相手のスピアーの動きが倍近く上がって一気にゴールに近づく。ナナのスピアーも全速力で駆け抜けるが相手のスピアーの方が速い。そしいシノノタウンが見えてくる。早く勝負を決めなければ！

「ミサイルばり！」

「避けて！」

相手のスピアーはミサイルばりを簡単に躲してゴールへと距離を詰めていく。ナナが

悔しそうに下唇を噛む。完全に打つ手無し。なのか……

「……遠距離攻撃で避けられない技」

そもそもスピアーは近距離の方が強いポケモンだ。しかし距離を

離されると成す術がない。その解決策として覚えたのがミサイルばり。そんなサブウェポンが通用する相手ではない。しかし追い付くのは不可能……

「スピッツ！（拙者に考えがある！）」

スピアーが電気を纏った糸玉を飛ばす。しかし当たることなく落ちる。もつと言うなら届いてすらいない。スピアーはなにをしたい？

「エレキネット……あなたはそれをやりたいのね」

「スピッツ！（ああ！）」

ナナは相手のスピアーの位置からゴールまでの時間を計算する。そして『二分と十二秒』と呟いて相手のスピアーを真っ直ぐと見る。

「原型は出来てる……だけどネットの転回のイメージがスピアーの中で完成してない。あと二分で私が的確なイメージを考えてスピアーに伝えて、技として完成させる……出来る？ ううん、やるしかない！」

エレキネット。そういえばキンランさんとの修行中に彼女のピカチュウが何度か使っていた。恐らくスピアーもそれを思い出して再現しようとしたのだろう。

「エレキネット。電気の網で相手のポケモンを捕縛する技……そして攻撃にも守りにも応用が出来る技。そしてキンランさんのピカチュウは守りや捕縛として使っていた。だからスピアーの中で守りと捕縛のイメージで固まっている」

ナナがニヤリと笑う。彼女は捉えたようだ。勝利への道を。スピアーにエレキネットを覚えさせる方法を。

「スピアー！ エレキボール！」

「スピッツ？（え？）」

「いいからやりなさい！」

スピアーが電気の玉を飛ばす。それは相手のスピアーまで届く。もちろん横に動いて避けようとする。しかし電気玉は爆発して網となり、スピアーを捕縛する。

「稀にエレキボールを使っていると突然エレキネットに変わったとい

う話を聞く！　つまり基本はエレキボールの要領と同じ！　それならエレキボールのイメージで打てば成功する！　もつともスピアーが生み出す微弱な電気じゃエレキボールは撃てないけど、イメージなら充分に使えるのよ！」

「スピッツ！（なるほど！）」

「安心して私に任せて挑戦しなさい！　あなたのしたいことを全てさせてあげる！　そのためにトレーナーがいるのだから！」

そして一気にスピアーが距離を詰める。もうそろそろ抜けると思った瞬間に相手のスピアーがエレキネットから脱出して、こちらにメガホーンを繰り出してくる。

ナナはそれを見切って、技が来るより早く避けるように指示を出してダメージを

逃れる。どうやら相手はやる気らしい……

「どうやら私のスピアーが悪夢姫のスピアーと戦いたみたいなの」

「……私にバトルに勝つ可能性が万に一つもあるとは思わないことね」

「どうかな？」

相手のスピアーが光りに包まれて変貌を始める。まさかメガシンカか！　考えたら相手はスピアークイーン。メガシンカを使えてもおかしくない。

「……正直に言うとなスピアーカップの景品に興味はない。ただ誰かに私よりスピアーの扱いに優れてるって面をされるのが癪だから参加してるだけなの。メガシンカも使う気はなかった。だけど気が変わった。あなたのスピアーをもっと知りたいの！」

「スピアーカップなんて放り出して私のスピアーと戦いというわけね

1　受けて立つわ！　勝つわよ！　スピアー！」

「スピッツ（当たり前だ）」

そしてメガスピアーとスピアーの戦いが始まるうとしていた。

61話 VSメガスピアー

既にナナはスピアーから降りて、いつも通りのポケモンバトルをしていた。走りながらスピアーの動きを一番良く見える場所で叫んで指示を出して言える。

「スピアー！ シザークロス！」

「スピッツ？（あれ？）」

スピアーはシザークロスを撃とうとする。しかし不発で終わる。ナナが舌打ちする。

「覚える技の限界ね！ エレキネットを覚えたことでシザークロスを忘れたってところかしら！」

ああ。そういえばポケモンって個体差はあるが、覚える技の限度があるんだよな。たしかスピアーは6つ。現在覚えているのは『メガホーン』『こうそくいどう』『ミサイルばり』『いばる』『アクロバット』『エレキネット』だ。

覚える技の限度なんて僕とムンナには無縁の話だからな。ナナも頭から抜け落ちていたのだろう。

「隙ありっ！ スピアー！ メガホーン！」

「ピアッツツツ（ウガアアアアア！）」

お尻の針が肥大化し、足も針に変わって羽が6枚に増えた禍々しい姿のスピアーがこちらに襲いかかってくる。しかしどこか苦しそうだ……

そしてナナのスピアーは遠くに吹き飛ばされる。

「スピアー！ まだいけるわね！」

「スピッツ！（ああ！）」

しかしナナのスピアーも物ともせずには起き上がる。もちろんナナもスピアーが耐えることを疑ってもいけないようだ。そして相手のメガスピアーは様子を見るかのようにこちらを睨んでいる。恐らくナナのスピアーを最大限に警戒してのことだろう。

「あれがメガシンカ……やっぱりポケモンへの負担は大きいみたいね」

「負担してでもスピアーは勝ちを望んだ！ だから私はこの子を勝たせてあげるの！」

「ピッツツツア！（私は最強のスピアーよ！）」

それがメガスピアーの動き出す合図だった。神速で近づいてくるメガスピアー。ナナはそれを見切り、スピアーに指示を出しながら凌ぐ。針と針の激しいぶつかり合い。一瞬でも気を抜いたら手痛いダメージを受ける。そして相手のメガスピアーの方が針は多くて有利か。事実としてナナのスピアーが押されている。

「……苦しくても勝ちたい。トレーナーのためならどんな苦しい思いも耐えられる。そんな絆の力がメガシンカ。トレーナーを想うことでポケモンが理性を保っていられるってわけね！」

「分析してる場合？」

ここで勝負を決めんと言わんばかりに一気にスピアーがお尻の針をスピアーに突き刺そうとしてくる。だけどナナのスピアーは直感的に反応してメガスピアーの攻撃を避ける。しかし再び激しい連撃がスピアーに襲いかかる。

「右、左、フェイントで上！」

ナナは相手のメガスピアーの動きを先読みして叫ぶように指示を飛ばしていく。だけど言うのは方向だけ。回避は完全にスピアーに任せきりだ。

「罫が明かない。スピアー！ メロ……」

「スピアー！ 今よ！ そのままアクロバット！ 追い打ちのメガホーン！」

その時だった。スピアーが軽やかに動き、自分より一回り大きくなった相手をスピアーは吹き飛ばして、それからメガホーンを叩き込む。見事な連撃。メロメロを発動するまでの一瞬は無防備になる。ナナはそこを突いたので。ナナはずつとメロメロを撃つ一瞬を狙っていたのだ。しかしメロメロのタイミングを完全に読み切らなければ出来ない芸当、それを意図も容易く行うことからナナの実力が伺える。だけどメガスピアーもすぐに立ち上がる。しかし少なくともダメージがあるようだ。

しかし、その一撃で勝負は一気にナナのペースになる。

「更に追い打ちのアクロバット」

「まだ負けてない！ 私達は負けられないの！ スピアー！ ヘドロばくだん！」

「まずい！ アクロバットを止めてエレキネットで自分を覆って守りなさい！」

スピアーは少し大きめのエレキネットを作り、それをシエルターのように利用して相手のスピアーの一撃を見事に防いだ。完全にエレキネットという技をマスターしているな。そして技を防がれたことでメガスピアーに動揺が走る。メガシンカはポケモンの体力を蝕む。長引けば長引くほどストレスになり、冷静な判断が出来なくなる。そして普段なら流せるミスも大きなプレッシャーとなっていく。

もちろんナナはメガスピアーの動揺を見逃さない。

「ここで勝負を決める！ アクロバットからのアクロバットからのアクロバット！」

ナナが囁みそうになりながら指示を出す。その指示を受けたスピアーは軽やかに動いて三回くらいメガスピアーを吹き飛ばしていく。見事な連続攻撃だ。同じ技を連続的に三回出すことで短時間で何度も殴っている。ナナはメガスピアーが動揺していると同時に少しの焦りがあることを見抜いていた。普段のメガスピアーなら避けられただろう。だけど体力消費の影響もありメガスピアーには『引いたら負ける』という強迫観念があった。だからこそ確実に当たると確信を持って、ナナは大技を使った。

「……ノエルのグソクムシャ。良い勉強になったわ」

なるほど。あのオラオララッシュの応用か。ノエルはグソクムシャのであいがしらを何度も叩き込むことでオラオララッシュをしていた。その要領でスピアーにも同じことをさせたのか。完全に経験物をしているな。

「スピアー！」

「ピアッ……（まだやれる……）」

しかしメガスピアーは激しい攻撃にも耐える。

いや、悲しませまいと気合いで耐えた感じだな。泣いても笑っても勝負は次の一撃できまるだろう。メガスピアーも必殺技を使わんとばかりに構えに入る。

「うん！　まだ負けてないわよね！　メガホーン！」

「こつちも追い打ちのメガホーン！」

ナナが容赦なくトドメを刺しに行く。それは相手のメガスピアーとメガホーンを打ち合う形になる。しかしナナのスピアーは正面から受けず、メガスピアーのメガホーンをしゃがんで回避。

「しまった！」

「そのまま決めるわよ！」

スピアーはお尻の針で下から力強くメガスピアーを突き上げるようにして遠くに吹き飛ばす。メガスピアーが天高く舞っていく。また舞ってる途中でメガシンカが解除されて戦闘不能になる。そしてドサツと地面に落下する。

「ス、スピアー！」

「スピアー対決。私達の勝ちよ」

『な、なんとということだ！　ナナ選手！　全てのスピアーを戦闘不能に追い込んで事実上の勝ちを掴んだ！　たしかに妨害ありの攻撃ありでルール違反はしていない！　しかしこれをレースと呼んでもいいのだろうか……ただ一つ言えることはナナ選手が強すぎる！　まさしく悪夢姫の名前に相応しいプレイ。この惨劇を悪夢と言わず、なんと言うのだろうか！』

「……レースになってないってルールがガバガバ過ぎるのよ」

遠くで聞こえる実況に対してナナが静かに呟く。考えてみたら全てのスピアーをナナが退場させたんだよな。こりやたしかに悪夢だし、悪夢姫の名前通りだよ。

そしてここまで圧倒的な実力差を叩きつけたら話題になるなどいう方が無理な話。

実力もOK。ルックスもOK。血統もOK。このOK三拍子が揃ってたら話題になるわ。そもそもチャンピオンの妹ということだ

ただでさえ注目されてるからな。そう考えるとナナの人気も妥当なのか？

「お疲れ様。良いバトルだったわ」

「……次は負けないから！」

「その次を楽しみに待ってるわ」

ナナとスピアークイーンは固い握手をした。スピアー同士の戦いはナナが勝利を収めた。メガスピアーにいスピアーで勝つとはよくやったものだと思う。

「とりあえずゴールインしましょうか」

そしてナナはスピアーに乗って静かにゴールする。周りからは歓声は上がらない。みんなナナの実力に怖気づいてしまっているのだ。良い勝負をしたというのに悲しいものだ。それからしばらくしてナナの勝ちを告げる実況が鳴り響く。

『ゴオオオオオオオルウウウウウウ！ 優勝はナナだ！ 圧倒的な実力差を見せつけて華麗にゴールイン！』

そして司会の声で一気に歓声が沸く。司会の声でナナが勝ち、大会の優勝者が決まったということを理解出来たのだ。裏を返せば理解が追い付かなくなるくらいナナの実力が圧倒的だったとも言える。

『それじゃあ優勝者にインタビューに……』

ナナの元にマイクを持って男が駆け寄ってくる。そしてマイクを渡すとスタスタと去っていく。ナナはマイクを受け取ると静かに言った……

「こういうインタビューには慣れてないんですね。えー……なにを言えばいいのかな？ まあ一般的には思ったことをそのまま言えばいいのでハッキリと言わせてもらいましょう。少しだけ棘のある内容になるのはご了承ください」

しかし、これはマズい。間違いなく毒を吐く流れだ。ナナは今から絶対に地雷を踏むぞ。きっと大炎上するぞ。そしてナナはそういうのは気にしない人で……

「みなさんのスピアーはどれも強くて、色々な戦い方をしている大きく参考になりました。それとレース形式にも関わらず私の得意分野

であるポケモンバトルに持ち込んでしまっただけです。すみません」

あれ？ 意外と普通だ。ナナのことだったら『弱すぎる』とかストリートに言うと思ったが、まさかここまで柔らかい言い方をするとは……

「しかし、それはレースという土俵では私じゃ勝てないと判断したからです。もっと言うならポケモンバトルを仕掛けるしかないくらいまで私は追い込まれました。彼等の専門はポケモンバトルではない。それに対して私はチャンピオンを目指すポケモントレーナー。自分の得意ではない舞台で、よくここまで頑張ったなと思います」

まあ無難だが言うならば『ポケモンバトルで私に適うわけがないだろ』という自意識過剰も含まれてるよな。いや、事実としてはそうなのだろうが……

「自意識過剰。世の中にはそんな言葉があります。正直に言うとな今の私はそれです。観客の中には十二歳の小娘が偉そうに思う方もいるでしょう。しかし私は思うのです。自意識過剰になれるくらいの自信も無いのは自分のポケモンに失礼ではないかと。さて、長くなりましたが最後に一つだけ……」

自意識過剰の印象を与えたのは敢えてなのだろうか。ただ一つ言えることは僕と出会った頃のナナならここまで丁寧な言い方は出来ない。まだ荒削りで改善点も多くあるだろうが、間違いなく前よりも良くなっている。

「応援ありがとうございます！ おかげで優勝することが出来ました！」

ナナはマイクを置いてからしばらくして表彰式が開かれた。それを終わると適当に近くの休憩所に行って腰掛ける。ナナは無事にスピアナイトを受け取った。しかしいどこか浮かない顔をしている。

「お疲れ様。しかしインタビュは随分とナナらしくなかったですね」

近くにベアルンがやってきて缶ジュースをナナに手渡す。ナナはそれを一気飲みする。

「周りに喧嘩を売っても得られるものはないわ。適当にペコペコしてるのが一番賢い選択よ」

「その割には周りを随分と煽ってましたけど」

「ウソツッ！ どの辺りが？」

『「チャンピオンを目指すゝ頑張ったと思います』の下りですね。あれ遠回しですが相手を下に見てると受け取られてもおかしくないですよ」

「自意識過剰に聞こえるのは途中で気が付いたけど、そういう受け取り方をされるのか。インタビューって難しいわね。苦手だわ」

「まあこれから練習すればいいのですよ。今回の大会はナナより下のトレーナーの集まりだったのは事実ですし……」

「下？ そんなことはないわよ。スピアーの扱いなら私より上手いトレーナーが何人もいた。ポケモンバトルなら勝てるけど、それ以外なら普通に負けるわ。特にスピアークイーン。彼女は間違いなく私より上だった。スピアーのレベルでも負けていた。勝てたのは相手がバトルの経験が少なかったからよ」

ナナがビー玉サイズの宝石を見ながら喋る。ナナが持っているのがスピアナイト。スピアーをメガシンカさせるのに必要になる道具、これで理論上はメガシンカを使えるが……

「メガシンカ……ね」

「どうしたのですか？」

「あんまり好きじゃないのよ。メガシンカはポケモンにかける負担が大きすぎる。だから正直に言うと思う気はない」

「なら使わなければ？」

「でもスピアークイーンとのバトルで気付かされたの。メガシンカは絆の力ってことを改めて。ポケモンの勝ちたいという想いに応えるのがメガシンカ。それならメガシンカをしないのはスピアーへの冒瀆なんじゃないかって」

「なるほど……」

「メガシンカがポケモンに良いのか悪いのか私には分からない。だけど私自身としてはさせたくないのよ」

「とりあえず夕食にしましょう。ナナも疲れたでしょうね」
「そうね」

ナナはいつでもメガシンカが出来る状況にいる。しかし色々と彼女も思うところがあり、メガシンカに積極的ではないようだ。それどころか消極的とも言える。もしもメアがこの場に言ったらナナになんとアドバイスするだろうか……

そして夜になり、夕食を食べて風呂に入り、歯磨きをして眠りにつく。今後の予定も決まった。明日にはテレポートをしてラビツトタウンでジム戦をする。普段なら歩いていくが、メアの件もあつて早急に強くなる必要があり、悠長なことも言つてられなくなった。

「……いやーエレキネット凄いな」
「だろ？」

だけどナナが寝ている深夜。そんなことお構いなしに我々ポケモンだけの謎の雑談か会が開かれる。もつともボール越しの会話で相手の顔も見えないし、おつまみも無いのだが。ちなみに発案者はムナ。

「……あなた達。いつもこんなことしてるの？ 私は眠いのだけど」
ツタージャが眠そうに会話に入ってくる。しかしクールなツタージャが話に入ってくるなんて珍しいな。

「眠かったら寝てもいいんだぞ」
「私も気になるのよ。新入りのことが」
「あー……」

そういえばナナは一度もドラミドロをボールから出していない。つまり顔合わせをしていないのだ。もつともゲットしたら流石に気付くみたいだが……

「せめて私達に名乗ってもいいんじゃないかしら？ 同じ仲間として」

「……妻の名はドラミドロ。そなたらと慣れ合う気はない。そもそも妻はナナというトレーナーを認めておらぬ」

ドラミドロが威圧するように言う。だけど誰も気にしていないようだ。

「ドラミドロ！　水生ポケモン。つまり水技が使えるじゃねえか！」
「まさか！」

「ついに勝てるんだよ！　俺達でもウルガモスに！」
「そうなるのか？」

「ああ！　俺達三人がウルガモスと相性が悪いのは知ってたこと、ツタージヤも炎でやられる。つまり全員がウルガモスに弱かった！　そんな中で遂に水技を使えるポケモンが……」

「それどころか水技を使えることでムンナとスピアーが盛り上がっている。たしかにドラミドロは水技も撃てる。だけどメインは毒技とドラゴン技なのだが……」

「ていうか僕含めて四体ともウルガモスに弱いつてパーティーバランスどうなってるんだよ……」

「ウルガモスなら岩ポケモンの方がいいわ。そしてドラミドロは最強と名高いドラゴンポケモンの一種。それなら純粋なアタッカーとして……」

「そなたら。妾が水生ポケモン。つまり地上での活動は限定的ということをお忘れおらぬか？」

「あ……」

「まったく……妾を地上で戦力として数えられるのは少し困るのじやが……」

「でもナナならどうにかするんじゃない？」

「それからムンナはスピアー達からドラミドロを質問攻めにされる。慣れ合うつもりはないというのは一体なんだったのか……」

「さて、ドラミドロのことは分かったけど、少し真面目な話をしましよう」

ツタージヤが咳払いをして話を遮る。彼女は完全にまとめ役としてパーティーに馴染んできたな。

「次のジムはナナから聞いた話だと炎タイプみたいよ。私とスピアーの相性は最悪。つまりダークライとムンナがどれだけ相手を消耗させられるか。それが重要になると思うの」

「……そうだな」

「あなた達も少しは緊張感を持ちなさい」

「ツター ज्या。少し言いくらいが明日の一番手お前らしいぞ」

「ふあつ！ 私は草タイプよ！ なにを考えてのかしら！」

「さあ？ まあナナを信じろ！」

ナナのことだから作戦はあるのだろう。無策で出すようなトレーナーではない。

「……やっぱり、あの技を完成させるつもりなのかしら？」

「あの技？」

僕は少し疑問に思い、ツター ज्याに問いかける。

あの技とは一体なんなのだろうか……

「アクアテールよ。この三日間でナナとひっそりと練習してるのだけど……」

アクアテールか。たしかに水技で覚えたら炎タイプ相手に有利に立ち回れる。それに今までツター ज्याは草技だけだった。そろそろ他の技が欲しいところでもあるが……

「水を出すって感覚が分からないのよ。体のどこを意識したら水が出るのかしら？」

「そういうのはナナに聞いた方がいい」

「ナナは蒸散の理屈だと言っていたけど……」

蒸散。植物が体外に水を出すことをいう言葉だよな。

中学校の理科で習った覚えがある。

「私も草タイプだし蒸散は常にしてる。だけど蒸散の理屈で水を一点に……ってというのが難しいのよ。意識して蒸散というのが上手く出来なくて……」

「なるほど」

僕は草タイプじゃないし、まったく分からん。

たしかに技の出し方は苦労した。10まんボルト、れいとうビーム、きあいだま。どれも覚えるのは苦労したものだ。でも技って何気ないことできっかけで急に使えるようになったりするからな。

もしかしてナナはツター ज्याにアクアテールを覚えるきっかけを与えようと先発に選んだのか。たしかに今日のスパアーみたいにな

トル中に技を覚えることは珍しくない、もしかしたらツタージャも

……

「とりあえず明日に備えて寝るわ。おやすみなさい」

「ツタージャが寝るなら俺達も寝るか。おやすみ」

そうしてムンナ達も眠りについていく。明日は久々のジム戦だ。とりあえず、どんなポケモンが出てきて、どんな戦い方をするのだろうか。楽しみだな。

62話 怒り

「待ってたわよ！ 悪夢姫！ 燃べられる覚悟はある？」

ナナは朝食を食べて、すぐにテレポートをして真っ先にジムに向かった。完全に朝一での殴り込みだ。そしてジムリーダーは赤髪の少女だ。聞いた話だと去年ジムリーダーになったばかりの新人だとか。またジムリーダーの中でも一番弱いと巷で囁かれている。

「悪夢姫。ジムバッジはいくつ？」

「三つよ」

「それなら私達の各自判断ね。なら私は六体フルで使うね」

「……は？」

「そもそもジムリーダーなんて初見で勝つのが異常。普通なら何度も敗北を重ねて攻略法を考えるのがジム戦。今回はそれを体験してもらうよ」

これ完全に勝たせる気はないな。そもそも彼女がやろうとしていることは弱いといえどジムバッジ7つ集めたトレーナーに対する処置と同じだ。もしもナナが突破したら事実上の実力としては8つ持ちと同じということになる。

しかし明らかに理不尽だ。そんなことが許されるわけがない。ジム教会にかけあつて適切な処置をしてもらおう。そっちの方がいい。……面白いじゃない。もしもあなたに勝ったら私達は今の何倍も強くなれる」

「そういうこと！」

「受けて立つ！」

だがナナは完全にやる気だ。僕もナナが六体なら文句は言わない。だがナナの手持ちは五体。つまり一体少ない状態で戦わなければならないのだ。それも格上のジムリーダーに。そして二人とも持ち場につく。間もなくバトルが始まる。

「改めてジムリーダーアザレア！ 炎タイプの使い手として悪夢姫ナナの前に立ちふさがる！ そして最初はこの子！ お願い！ ガラガラ！」

「ガラッ（応！）」

繰り出されるのはガラガラ。しかもアローラの姿だ。ナナはそれに対してどう戦うのだろうか。無難にいくなら僕が行くべきだが……

「お願い！ ツタージャ！」

「タジャ！（うん！）」

やっぱり予定通りツタージャか。それに対してアザレアが少し驚いた表情を見せる。

「草タイプ！ 本気なの？」

「いくわよ！ リーフストーム！」

そしてナナは有無を言わずに技を撃つ。それが合図となり、バトルが始まる。まず草の嵐がガラガラを包み込む。しかしガラガラは炎を纏った骨であつさりと嵐を焼き尽くし突破する。しかしツタージャは嵐に紛れて、ガラガラの懐に潜り込んでいた。

「ツタージャ！ メロメロ！」

「タジャ！（任せて！）」

「しまった！」

それでガラガラが一気にツタージャに魅了される。目がハートになって体が完全にふらついている。ナナもガラガラに出来た隙を見逃さない。

「アイアンテールからのリーフストーム！」

一気に二つの指示。だけどツタージャもナナの思考を完全に理解する。まずはアイアンテールでガラガラを吹き飛ばす。そして先程よりも威力が倍近く高いリーフストームで追撃していく。草の嵐はアイアンテールで怯んだガラガラに見事に命中して相当なダメージを与えていく。そして草の嵐が去った時にはボロボロのガラガラがいた。

「ここは退くわよ！」

「くろいまなざし」

ツタージャが力強く睨む。ボールの光も弾かれて、交代も出来ない。それに対してアザレアが下唇を噛む。

「フレアドライブをやって！」

ガラガラに指示を出すのが、ガラガラは目がハートになつていてアザレアの指示が耳に届いていない。完全にこちらが有利だ。

「そのままリーフストームで押し切りなさい」

「タジャヤヤヤ！（決めるわよ！）」

そして今度はフィールド全体を覆う草の台風がガラガラを草で切り裂きつつ、吹き飛ばした。それによりガラガラは完全に戦闘不能。

「なに……今の威力……ズワザ？ ううん、それ以上……」

アザレアは啞然としている。それに対してナナは元気にツタージャとハイタッチをしている。どうやら明らかに異常な威力のリーフストームみたいだ。

「それにリーフストームは撃てば威力が下がる技……まさか！ あまのじゃく！」

「正解よ。リーフストームは既に三回撃った。威力は最大。撃てば相性不利の炎ポケモンも問答無用で吹き飛ばすわよ」

「色違い……メス……あまのじゃく。よくそこまで珍しいツタージャを手に入れたものね」

「続けましょう」

「そうね！ お願い！ ファイアロー！」

無言で出てくるファイアロー。そのポケモンは赤色の火山地帯にいなそうな鳥でバサバサと飛んで、こちらを力強く睨んでいる。

「ツタージャ！ リー……」

「アクロバット」

気付いた時にはツタージャは背後を奪われて、空中に巻き上げられていた。そして何度もファイアローの翼で叩かれていく。

「技の威力が協力なら打たせる隙を与えなければいい。それを私のファイアローなら出来る」

「……はやてのつばさね」

「博識ね。私のファイアローは特性はやてのつばさで飛行技を撃つときだけ目にも止まらぬ速さになる」

今度はナナが下唇を噛みながら睨む。指示を出しているが、完全に

お手玉になっているツタージャに声は届かない。そのままではギリ貧でツタージャがやられてしまう。なにか手は！

「タジャヤヤー！（さつきからしつこいわね！）」

その時だった。ツタージャが尻尾に水を纏ってファイアローを叩いた。あれはアクアテール！ この土壇場で覚えたのか！

「タジャ……（今は……）」

「やったわね！ ツタージャ！ でも戻って！」

ナナはツタージャをボールに戻す。見たところアクアテールでも大したダメージになっていない。これは別のポケモンの方が良いのは明白だ。

「やっっちゃえ！ ムンナ！」

「ンナッ！（任せろ！）」

「ファイアロー！ そのままアクロバット！」

「まもる！ がんせきふうじ！」

ムンナが見事なタイミングでまもるを使って攻撃を防ぎ、念力で岩石を落としていく。岩は見事にファイアローに当たり、大きなダメージを与える。

「……ここまでまもるを完璧なタイミングで撃てるものなの！ そんなの無敵じゃない！」

「一気に決めるよ！ おんがえし！」

「ンナッ！（とりやあ！）」

ムンナがファイアローを吹き飛ばす。それによりファイアローが戦闘不能。ムンナが見事なドヤ顔をしている。

「う、嘘でしょ……二体やられて私は一体も……倒せてない？ 相性が悪いわけじゃない……それどころかエースのダークライも出てない……それなのに……」

アザレアの顔色が一気に悪くなる。あれは完全に追い詰められている顔だ。無理もない。ジムリーダーになるまで相当の経験を積んで、必死に育て上げたポケモンだ。それが旅を始めて間もないトレーナーにいいようにやられているのだ。取り乱すという方が無理な話。

「ううん！ まだよ！ まだ負けてない！ いくわよ！ ガオガエン」

「戻ってムンナ。それじゃあ頼むわよ。ダーククライ！」

ガオガエンは炎と悪の複合タイプ。さすがにムンナじゃ分が悪いと判断したのだろう。僕は静かにフィールドに出る。それにより辺りは緊迫した空気になる。アザレアも僕のことを相当警戒している。

「……ガオガエン！ DDラリアット！」

「がオッ！（ふんっ！）」

ガオガエンが手に炎を纏ってルグルと回しながら駒のようにこちらに近づいてくる。僕は手を振るい、あやしいかぜを起こしてDDラリアットの勢いを殺す。そしてガオガエンに近づき、腹を蹴り飛ばして、アザレアの方にガオガエンを吹き飛ばす。これで準備運動になった。そろそろ気合を入れていくか。僕はやみのエネルギーを今よりも強く体に纏う。

——ナイトメアシフト12%だ。

「……いくらなんでも強すぎね。ここは退くわよ。とんぼがえり！」

ガオガエンが僕の裏を軽く、殴ってボールに戻っていく。少し痛い大きなダメージではない。気にすることでもないか。次はなにが出てくるのか……

「頼んだわよ！ ゴウカザル！」

「カツザル！（俺の出番か！）」

いきなり僕の頬に拳が飛んでくる。僕は反射的にそれをシャドークローで受け止める。なんて力と速さ。少しでも反応が遅れたらやられていた……

「カザル……（ほう……）」

「オカエシだ」

そして僕は足でゴウカザルを蹴って払う。ゴウカザルは少し吹き飛ぶも体制を整えて、こちらを力強く睨んでいる。このゴウカザル。恐らく相手のエースだな。相当強いぞ。

「ダーククライ。相性は不利だけど、そのまま戦う？ それとも戻る？」
「戦ウ！」

「了解」

このゴウカザルは僕が倒す。そうしなければ他のポケモンに負担が増える。ここで止めなければ下手したら全滅もありえる。相手は格闘で不利だが、技が通用しないわけではないはずだ。それなら勝算は充分にあるはず。

「二秒後にマツハパンチ」

僕はナナに言われたタイミングが体を捻る。それによりゴウカザルのマツハパンチを見事に避ける。それからナナが手を叩く。音がするタイミングで僕は体をズラす。何故なら手が叩くタイミングでマツハパンチが飛んでくるからだ。口で言わず、手で伝えるのは言葉にしたら間に合わないから。そしてナナのタイミングは完璧で全ての攻撃を危なげなく避けれる。

「……完全に見切られてる！」

「ダークライ。私は攻撃の来るタイミングだけ伝えるから適当に攻撃しなさい」

それはありがたい！　つまり自分の判断で動いて構わないということだな！　そして攻撃が来るタイミングは完全に分かっている。それなら危なげなく戦える。

「ウキッ！（なにっ！）」

背後から飛んできてマツハパンチを避けて、ゴウカザルの手首を掴み、そのまま背負い投げして地面に叩きつける。そして手をゴウカザルの顔に添えてエネルギーを集める。

ドカンという音と共に軽く砂煙が舞う。やったのは簡単なことだ。ゼロ距離であるのはどうを撃って、ゴウカザルに攻撃を仕掛けた。さすがにゴウカザルといえど今のは致命傷に匹敵すると思うが……

「ナ、ナニッ！」

しかしゴウカザルの姿はなかった。地面を見ると穴が空いている。ゴウカザルは技を撃つ少し前に地面に穴を掘って、攻撃から逃れたのか。それならどこから……

「後ろよ」

「ウキッ！（もらった！）」

回避は間に合わない。僕は瞬時に体を透かせてゴウカザルの一撃を流す。そして上に飛んで手に電気を纏い。それを放出する。10まんボルトをフィールド全体に走らせたのだ。しかしゴウカザルは器用に動き回りながら回避。そして手を振りかぶってこちらに飛んでくる。

これはチャンスだ。ここならゴウカザルも攻撃を避けられない。こちらでもダメージを受けることになるが、それを差し引いても、この技を当てられるメリットは大きい。

「インファイト！」

ゴウカザルの連続した拳が僕に叩き込まれる。まるでガトリング砲で殴られてるようだ。一撃が重い。少しでも気を抜いたら意識が飛びそうだ。でも僕はここで決める！

「ダークホールよ！」

ナナもやりたいことを察してくれて叫ぶ。やっぱり技名は叫んでもらわないと締まらないよな！ 闇の玉を作り、そのままゴウカザルの腹に押し付ける。ゴウカザルは深い眠りに落ちて地面に墜落する。これでゴウカザルは無力化出来た！ 一気にここで決めたいところだ！ いくぞ！ ナナ！

「そのまま抜け出すことのない絶望に打ちひしがれなさい！ 私達もゼンリヨクでいくわよ！」

ナナのZクリスタルが光る。僕の手もみなぎってくる。禍々しい力だ。一点にその

力を集めていく。生まれくるブラックホール。ありとあらゆる物を飲み込み、破壊する。その一撃は必殺技と呼ぶに相応しい！

「ブラックホールイクリップス！」

ゴウカザルがブラックホールに吸い込まれる。そして気が付いた時には戦闘不能で倒れているゴウカザルがいた、それと同時に僕も体から力が抜けていく。さすがにインファイトを受けたらキツイな。

「ダークライ。いける？」

「……」

「無理ね。お疲れ様。それとありがとね」

そして僕が戦闘不能という扱いでボールに戻される。アザレアは残り三体。それに対してナナが残り四体。最初はアザレアの方が有利だったが、今はナナの方が有利だな。

「強い。私が本気で挑んでも互角以上に……ううん、私が押されてる。認めるよ。悪夢姫ナナ。あなたの実力は既に私を超えている」

「……そんな過大評価されても困るのだけど」

「悪夢姫なら……」

彼女の目が変わった。まるでナナに助かを乞うような目だ。彼女はなにをやる気だ？

「……また頼むわ。お願い！ ツタージャ！」

「タジャ！（うん！）」

「今の私に使いこなせるか分からない。私のいうことを聞いてくれるか分からない。だけど悪夢姫なら……」

アザレアが首飾りにしていた七つ目のボールに触れる。あれは飾りではなかったのか？ そして彼女がボールを握ると同時に物凄いプレッシャーを感じる。これはマズい。明らかにゴウカザル以上の化け物が出てくる流れだ。しかも彼女の口ぶりからして使う気はなかったみたいだ。

「お願い！ ヒードラン！」

「ゴフフフフフツ？（あ？ 俺を出して何様のつもりだ？）」

ヒードランと呼ばれたポケモンはゴキブリのような姿をしているが明らかに今までのポケモンとは違う。次元が違うという言葉すら相応しいポケモン……

「ゴフツ……ゴフツ……（ポケモンバトル……くだらねえ……）」

「ツタージャ！ アクアテール！」

「タジャ！（了解！）」

ツタージャがアクアテールをヒードランに放つ。しかしヒードランはビクともしない。それからツタージャは必死に何度も殴る。

「ゴフツ……（うぜえ……）」

「タジャ！（え！）」

ヒードランが咳をするように炎を撒き散らす。それにツタージャ

が吹き飛ばされる。吹き飛ばされたツタージヤは起きる素振りも見せない。たった一撃。それがツタージヤを戦闘不能に追い込んだ。実力差は火を見るよりも明らかだった。

「……なんて強さ。楽しくなってきたわね！」

しかしナナは絶望することもなかった。それどころか強いポケモンと戦えることを心の底から楽しんでいるかのような表情を見せていた。ナナは笑顔でボールを投げる。出てきたのはムンナ。ムンナもやる気だ。

「アザレア！ あなた最高ね！ でも勝つのは私達よ！」

「……うん。そしてナナ！ ヒードランを助けて！」

「は？」

ナナはアザレアの一言に啞然とするしかなかった。そしてナナ怒りがヒートアップしていく。まるで先程の喜びが？のようだ。

「……ふざけるんじゃないわよ。ジムリーダーなら自分のポケモンの問題くらい自分で解決しなさいよ！」

ナナから出た言葉は先程とは？のように冷たいものだった。

ナナは本気でキレていた。

63話 VS ヒードラン

「ムンナ。ありがとう。戻りなさい」

ナナは静かにムンナをボールに戻す。ムンナが弱ったわけでもない。そしてアザレアに背中を向けて、その場を後にしようとした。

「ちよつと待って!」

「私はジム戦をしてきたの。あなたとヒードランの関係を修復しようとか、そんな気はないわ。あなたがちゃんとジム戦をする気がないから帰る。そのなになが問題なのかしら?」

「それは……」

「私はヒーローでもなければヴィランでもないただの挑戦者。あなたはジムリーダー。それ以下でもそれ以上でもない。救ってほしいなら別の人に当たりなさい」

その時だった。ナナのボールが激しく揺れた。揺れたのはドラミドロのボールだ。どうやら彼女はナナに言いたいことがあるらしい。ナナは軽くドラミドロのボールを見るが、無視してアザレアの方を眺める。まるで彼女の動きを伺うかのように……

「このヒードランは……」

「あなたの身の上話に興味はないわ」

「もういいよ! ジム戦とか立場とかどうでもいいから助けてよ!

こちらから出せるものもない。あなたの善意に甘えるしかない。でもヒードランを倒して世界の広さを伝えてよ!」

「……分かったわよ。助けるのは一度だけだからね」

ナナが振り返ってボールを投げてドラミドロを出す。どうやらナナも戦う気になったらしい。しかし最初のナナは明らかに戦う気がなかった。それなのに……

「いくわよ。ドラミドロ。少し雑に扱うのは許しなさい」

「ドラア…… (礼を言う……)」

ああ。ドラミドロが戦いたいと言ったから戦うことにしたのか。しかしドラミドロが戦いと言うなんて……彼女の性格的に言わない

気がするんだが……

それにボール越しでドラミドロの想いを察するナナの観察眼に感服するしかない。

「ドラ……（このヒードラン。幼い時の妾をみているようでな）」

「ゴフツ（あーだりい……）」

「なんでもいいからやるわよ。ドラミドロ。あまごい」

「ドラアア！（任せろ！）」

ドラミドロが叫ぶと同時に暗雲が立ち込める。そして大粒の雨が降り始める。ナナがニヤリと笑う。ヒードランの方を見ると興味がないと言わんばかりに寝ていた。それをチャンスと言わんばかりにナナはドラミドロに次の指示を出す。

「へドロばくだんでヒードランの足元以外の地面を溶かしなさい」

「ドラツ？（え？）」

「あなたの毒は金属も溶かす。地面を溶かすくらい簡単に出来るはずよ」

ドラミドロの毒ってそんなに強力だったのかよ。そして彼女はナナの指示に疑問を抱きつつも地面を溶かしていく。そんな中でアザレアは止めようとヒードランに指示を出す。ヒードランはうるせえと言わんばかりに無視する。

そしてヒードランの足元だけを残してフィールドを完全に溶かした。毒で溶けたことで大穴が空いている。そして天候は雨で穴に水が溜まっていく。またナナの手には青色の宝石が握られていて、ナナがしれを投げる。まさかナナの狙いは！

「そろそろ責めるわよ！ それと特大サービス！ ドラミドロ！ なみのり！」

ナナが投げたのはみずのジュエルと呼ばれる宝石だ。それは使い切りアイテムだが、使うと技の威力を大きく上げるといふ効果がある。またノーマルジュエル以外は何故かイツシュ地方でしか採掘出来ず、輸入頼みとなってしまう。しかも輸入量が少ないだけではない。効果を知ってる人はベテラントレーナーくらいのため需要が殆どない。そのため流通量が少なくなり市場に出回ることには滅多にない。

そのくせ不幸なことに出回ったとしてもベテラントレーナーという大金持ち同士のオークションになりやすく、相当の大金を出さないと買えない代物。最近では簡単に出来る小遣い稼ぎとして広まり、少しは価格が落ちたみたいだが微々たるもの。

ナナはそんなものをいつの間……

そして宝石が空中で割れる。ドラミドロが軽く輝く。そしてドラミドロは大波を起こすと一気にヒードランを飲み込んだ。しかもドラミドロの起こした水は穴に飲み込まれて大きな水溜りを作っている。ナナの狙いは水溜りを作ることにあつた。ドラミドロは水生ポケモン。本来の舞台は水中。だからドラミドロが全力を出せるように水を貯める舞台を整えていたのか！

「う、うそー！」

ヒードランが水に飲み込まれて溺れていく。ドラミドロは泳ぎながらヒードランのいた陸地も粉碎。これで完全に足場はなくなった。完全にドラミドロ有利の舞台だ。

「ドラミドロ！ ヘドロばくだん！」

「ヒードランは炎と鋼の複合タイプ……毒技は効かないのよ？」

「言わなかったかしら？ ドラミドロの毒は金属も溶かすって！」

「まさか！」

「ドラッ！（喰らうがいい！）」

ドラミドロがヒードランにヘドロばくだんで攻撃する。そしてヒードランに少しでもダメージ与える。あまりに無茶苦茶だ。そんな中でヒードランがドラミドロを睨む。完全に怒っているな。

「ゴフツツツツ！（うぜえええええええええX!）」

水中からいくつもの火柱が姿を見せる。それは竜巻のように動き回り、水を蒸発させて水位を下げていく。あまりに無茶苦茶だ。そして水面から岩が一つだけ飛び出る。あれはストーンエッジか。その岩の先端にヒードランを這うようにして上ってくる。これでヒードランが水中から脱出したわけか。

「マグマストーム……初めて見たわ」

「ゴフツ……（小娘が……）」

そして水に炎を流し込む。それにより水は沸騰する。水が一気に熱湯へと変わった。あのポケモンは想像以上に規格外だ。苦手な水の中でも冷静に行動できる落ち着き、水を瞬時に沸騰させるくらいの熱を持つ炎。そんな化け物みたいな強さを持つポケモンとどう戦えばいいのだろうか……

「ヒードラン！ あなたなら絶対にそうすると思ってたわ！ ドラミドロ！ 後ろから出て！」

「ゴフツ（なに）」

「あなたはそこで勝ったと思ひ込んで必ず油断する！ ドラミドロ！ きあいだま！」

そういうことか。全てはこの一撃を当てるために。ドラミドロが渾身の力で大きな波動のような玉を出す。それはヒードランに見事に命中する。しかし……

「ゴフツ……（その程度か）」

まさか効いてない？ そしてヒードランは飛んでドラミドロを押し倒して水中に沈めた。それからドカンという大きな爆発が起こる。それと同時に水は干上がった。そこには戦闘不能になったドラミドロがいた。

「ありがとう。ドラミドロ。これで充分よ」

ナナはドラミドロをボールに戻す。あまりに無茶苦茶な強さだ。完全にドラミドロの方が有利だった。それを純粋な力で正面から突破した。ナナの残りはムンナとスピアーだけ。いったいどうすれば……

「このヒードランは父から譲り受けたポケモンで弱い私をトレーナーだと思っていない。そしてヒードランは今まで一度も負けたことがない……」

「なるほど。つまりヒードランは退屈してるのね。そりゃ退屈よね。適当にやっても勝てるのだもの。それなら私が退屈から救ってあげろ！ ムンナ！ ドラミドロの敵を取るわよ！」

ナナがムンナを出す。ムンナもやる気だ。しかしヒードランはあまりに強い。並大抵の攻撃は通用しないだろ。それこそZワザクラ

スの攻撃を撃たないと……

「ムンナ……（どうやって倒すんだよ……）」

「時が満ちたわね。正直に言うとは私はヒードランを倒すのはこれしかないと思うのだけど、ムンナはどう？」

ナナが石を出す。あれはつきのいしだ。まさか遂にやるというのか！

「ゴフツ……（ほう……やってみせよ）」

「ムンナッ！（これなら勝てるな！）」

「いくわよ！ ムンナ！ ううん……ムンナッ！」

ナナが笑顔で石を投げる。ムンナもそれをしっかりと掴む。石に触れたことでムンナが光に包まれる。そして姿が変わっていく。初めて見る。これがポケモンの進化……

「ムンナ……（うむ）」

そしてムンナの姿は変わった。前みたいに可愛らしい姿はない。まるでバクだ。それに頭からは紫色の煙が出ている。これがムンナの進化系のムンナ……

「紫色の煙。たしか悪夢だったかしら……」

「ムンナアアア……（まあダークライのせいだね）」

いや、俺のせいだよ！

「……って！ ちょっとあれはなによ！」

そんなやり取りをしていると突如として水の巨人が現れた。それに対してアザレアが叫ぶ。あれはなんだろうか？ ポケモンなのか？ そして水の巨人は大きな拳でヒードランを叩きつけた。それにヒードランは少なくともダメージを受けたようで呻いている。

「言い忘れてたけどムンナは夢に出てきたものを実体化することが出るのよ」

「なに……今の威力……」

「威力自体は大したことはないはずよ。ただ痛いと思えば相應のダメージは受けるんじゃないかしら」

「まさか！」

「ムンナの攻撃は痛いと言えどもポケモンが思えば思うほど大きくなる。

裏を返せば思い込みがなければ大したことはないはずよ」

なるほど。ムシャーナの攻撃はノーシーボ効果みたいなものか。実際は痛くないものでも痛いと思いついで受けることで実際の痛みになる。そしてムンナの時に僕の影響で多くの悪夢を食べてきた。その影響でムシャーナは多くの悪夢を知っている。つまりムシャーナが実体化するのは悪夢。すなわち他人が怖いと思つた記憶だ。他人が怖いと思つたことのあるものを具現化できる。なんて攻撃性の高さだろうか……

そうしてるうちに背景が変わる。まるで絵本の世界のような場所だ。もつというなら魔法少女系の作品で出てくる結界の中のような……

「これは！」

「夢の世界よ。ムシャーナは夢を具現化する。とりあえず私の通り名らしく、こう言いましょうか。ようこそ。悪夢の世界に！」

「ムウウシャーアアア（勝負といこうぜ）」

「ゴフツ（ござかしい）」

「ムシャーナ。サイコキネシス」

ムシャーナが念力でヒードランを吹き飛ばした。それから数百体の玩具の兵隊のような人形がマスケット銃を持って、行進する。それからヒードランに向けて一斉射撃。それにヒードランは呻く。

しかし、ヒードランはふらつきながらも立ち上がってくる。なんて耐久の高さだ。だけど不思議とムシャーナが負ける気はしなかった。何故かムシャーナならヒードランを倒してくれるという心強さがあった。そして今度はクトウルフ神話に出てきそうな容姿をした化け物が出てくる。それは言い表すことすら躊躇う容姿だ。それでも強いて言うなら蛇型の化け物といったところだろうか。それによりムシャーナ以外の全員が震え上がる。特にナナの震え方が尋常ではない。

「ムシャーナ。私の悪夢から使わなしてくれと……助かるわ」

「ムシャーア（仕方ない）」

これはナナの悪夢から引つ張ってきたものか。しかしナナよ。ど

んな悪夢を見てるんだよ。まじで笑い事じゃ済まないレベルだわ。しかし夢の具現化って想像以上に怖い能力だな……

そして蛇の化け物はブクブクと膨れ上がって、血を撒き散らせながら爆散する。明らかにグロテスクな光景だ。ムンナってこんな恐ろしい存在に進化するポケモンだったのかよ。そしてヒードランは怯えきって完全に青ざめた顔をしていた。そんなヒードランの背後から顔のない人が現れて、肩を優しく叩く。まさしく悪夢だ。どんな強いポケモンだろうが関係ない。恐怖心が存在しているポケモンならムシャーナの攻撃を防ぐ術はない。

「ムシャーナ。さすがにそろそろ解除してあげましょう」

「ムシャア……（仕方ねえな）」

そして場面は先程のフィールドに戻る。もしもバトルを続けていたら間違いなくムシャーナが勝っていた。もっというならバトルにすらならなかっただろう。それほどまでにムシャーナの夢の具現化というのは理不尽な力だった。そんな中でナナは静かにヒードランに話しかける。

「ヒードラン。あなたは随分と臆病なポケモンなのね」

「ゴ……フツ（なん……だと）」

「自分が強いと思いついて狭い世界しか見てなくて、周りが全然見えていない。ここに前に来たであろうノエルというトレーナー。あなたは彼と戦ってたら間違いなく負けてるわよ」

「ゴフツ！（そんなわけないだろー!）」

「私のお兄ちゃん、キンランさん、ゴオー団のラルムとマリア、それにメアやボルノ。私に勝てないような貴方如きには絶対に勝てないトレーナーは星の数ほどいる。それなのに簡単に勝てるから退屈？ そんなのあなたが外の世界を見たことがないだけじゃない」

「ゴフツ！（うるせえ!）」

「ムシャーナ。サイコキネシスでヒードランを叩きつけなさい」

ナナの指示と同時にムシャーナがヒードランの体を浮かして地面に叩きつける。そして再び浮かせて、もう一度地面に落とす。そんな動きを何度も繰り返す。ヒードランは念力から抜け出そうと足掻く

が、その力よりもムシャーナの方が強い。

「普段のあなたなら念力から抜けてるでしょうね。だけどドラミドロの攻撃で体力と熱を消耗した貴方なら無理よ」

「ゴフツ！（なにー）」

「熱だって無限じゃない。あれだけの水を蒸発させる程の熱を使えば、それだけ体に負担になる。特に既に消耗してる体ならなおのこと。その狙いを隠すためにきあいだまを当てるのが目的だと思わせたりして周りの目を欺くのは疲れたわ」

なんだと……？

まさか水の蒸発きあいだまでヒードランがやられないのも計算内だというのか。もつというならドラミドロはヒードランの消耗だけが目的だったのか？

そして消耗したヒードランにムシャーナを当てることが狙い。最初からヒードランはムシャーナで倒すつもりだったのか。そしてナナが付け加えるように補足説明をする。

「みずのジュエルと雨。その二重効果のなみのり。どんなに強いポケモンだろうが炎タイプなら戦闘不能は避けられない。それでも耐えた。それは熱で水の威力を殺したから。もしも、なみのりで熱を使わなかったら、水の蒸発くらいでは衰えなかったでしょうね。だけど貴方は消耗している。それに気付かずには水を蒸発させるなんて愚かなものね」

つまりなみのりでヒードランを消耗。そしてヒードランは消耗したことに気付かず、水を蒸発させたことで体に大きな負担になった。そのため今のヒードランにムシャーナのサイコネシスを抜ける力はないということなのか？

「でもアザレアなら私の小細工に気付いたでしょうね。アザレア。一つだけ聞いわ。自分のポケモンの疲れや消耗は分かるかしら？」

「ええ……自分の使い慣れたポケモンなら」

「だそうよ。もしも貴方が普段からアザレアとバトルの練習をしていたらアザレアも貴方の身体の特徴を判断して、熱の消耗を見分けられたでしょうね。これはアザレアを弱いトレーナーだと判断した貴方

の敗北よ。ムシャーナ。サイコキネシス」

そしてムシャーナがヒードランを遙か上空に持ち上げて地面に叩きつける。その一撃でヒードランは完全に戦闘不能になる。ヒードランとの勝負を制したのはナナだ。

「完敗ね……ナナ。あなたの勝ちよ」

アザレアがヒードランをボールに戻す。本気でやってナナにこの上なく負けたのだ。それも自分で扱えなかったヒードランすら完璧に攻略して。これを敗北と言わず、なんていうだろうか。アザレアはナナにジムバッジを渡そうと準備を始める。しかしナナが彼女を引き留めた。

「どこに行くつもり？」

「ジムバッジを……」

「まだポケモンが二匹残ってるでしょ。ポケモンバトルハウス終わってないわ。アザレア。早く次のポケモンを出しなさい」

「ナナ……」

「続けましょう。ジム戦を」

そしてナナはジム戦を続ける気のようにだ。互いに残りのポケモンは二体。アザレアとのジム戦は最終局面に突入しようとしていた。

64話 ヒーロー

「いきなさい！ ガオガエン！」

アザレアが出したのはガオガエン。ナナはムシャーナをボールに戻さない。恐らくムシャーナで戦うつもりなのだろう。

「ムシャ……」

「ねこだまし！ DDラリアット！」

まるでテレポートをしたかのうにガオガエンがムシャーナの目の前に現れて、ムシャーナを殴る。それから炎を腕に纏って駒のように回転しながらムシャーナに攻撃を仕掛ける。そしてムシャーナが少しだけ吹き飛ぶ。

「ムシャア……（いたい……）」

「ムシャーナ！ 悪夢に誘いなさい！」

ナナの指示で再び背景が変わる。そして玩具の兵隊が出てきてガオガエンに銃を構える。そしてガオガエンに発泡。しかしガオガエンは眉一つ動かさない。

「ガオツ……ガオツ……ガエン（これは幻覚だろ。ダメージは思い込みからくるもの。つまり痛くねえと思えばダメージはない）」

そんな中でガオガエンの足元からゾンビが出てくる。しかしガオガエンは無表情で踏みつぶす。そしてゾンビは粒子となって消えていく。完全にムシャーナと相性が悪い。幻覚の類が効かないならムシャーナは普通のエスパークタイプのポケモンに成り下がる。しかも高威力のサイコキネシスは悪タイプのガオガエンには効かない。それに体の変化に慣れてないためムンナの時のような素早い動きは出来ない。つまり技の回避は難しいだろう。

「ガオガエン。私達のゼンリョクでムシャーナを倒すよ！」

「がオツ（いくぜっ！）」

ガオガエンの体が光る。アザレアの腕も光る。まさかズワザか！
そして気が付いた時にはムシャーナの足元にリングが出来ており。

。その真ん中にある

「悪夢姫ナナ！ 鳴り響くコングの音は貴方の敗北の音よ！ 嘆きなさい！ ハイパーダーククラッシュシャー！」

そしてガオガエンがムシャーナに向かつてダイブ。一気に大爆発が起こる。なんて高威力の技だ、普通のZワザよりも明らかに高威力……

「シャア……ナ（ま……だだぜ）」
「うそでしょ！」

ほう……ムシャーナは今の攻撃に耐えたのか。相当耐久が上がっているな。だけど少なくともダメージを受けている。恐らく立つのがやっと……

「ムシャーナ！ おんがえし！」

ムシャーナが巨体でガオガエンをタツクルして吹き飛ばす。しかしガオガエンは歯を食いしばって踏ん張る。だが威力の高さに片膝をつく。しかし同時にムシャーナがドサツと倒れる。間違いなく戦闘不能だ。

「ガオツ……（なんて重い攻撃）」

「お疲れ様。ムシャーナ。慣れてない体でよく頑張ってくれたわ」

「ナナ！ 残りは一体ね！」

「そうね。だけど私の最後の一体は強いわよ。このポケモンは切り札なんだから」

「……私も負けないから」

「頼んだわよ。スピアー！」

「スピッ！（待ちくたびれたぜ！）」

遂に我らのスピアーの降臨だ。スピアーは未だノーダメージ。つまり万全の状態だ。たとえ相手が二体だろうがスピアーならどうにかしてくれるだろう。

「スピアー！ 相性ならこちらが有利ね！」

「相性なんて些細な問題よ。メガホーン！」

スピアーはお尻の針を使ってオガエンに重い一撃を叩き込む。明らかに前よりも威力が何倍にも上がっている。スピアーは恐らく相当なレベルアップをしている。スピークイーンとのバトルが大きい

な影響を与えたのだろう。しかしガオガエンは歯を食いしばってスピアーの一撃を耐える。そしてガオガエンは気合いで手に炎を纏ってスピアーを殴ろうとする。だが寸前でナナの指示が飛んできてスピアーは容易く避ける。

「もう一度メガホーン！」

スピアーのお尻から針が放たれた。それによりガオガエンは倒れる。間違いなく戦闘不能だ。アザレアはガオガエンにお礼を言っボールに戻す。

「エースのゴウカザル。相棒のガオガエンも切り札のヒードランもやられた。それでも私は諦めないんだから！　お願い！　ギャロツプ！」

「スピアー。メガホーン」

勝負は一瞬だった。ギャロツプが出てくると同時にスピアーがギャロツプの背後を奪う。そしてメガホーンでギャロツプを吹き飛ばす。ギャロツプもすぐに反撃しようとして起き上がる。しかしスピアーは再びギャロツプの背後に回っており、手痛い一撃を撃つ。それによりギャロツプは戦闘不能。あまりに呆気ないものだった。

「私の勝ちね」

「……完敗。この上なく完敗！　もう嫌になるわ！」

そしてアザレアが負けたことに泣きわめく。あまりに哀れでみづともないな。しかしナナは彼女を馬鹿にするような表情を一切見せずに真っ直ぐ見ていた。

「でも、この上なく良いポケモンバトルだった！　正直に言っ悔しい。死ぬほど悔しい！　絶対に今度は勝つんだから！」

「ええ。あなたのおかげで私は前よりも強くなれた。心の底から礼を言うわ」

「そしてごめんなさい！　ヒードランの件をナナに全て任せてしまった。それに明らかにヒードランは挑戦者に出すようなポケモンじゃなかった。だけどナナはヒードランを苦戦することなく倒した。その時のナナは凄くかっこよかった！　それにナナはヒーローじゃないと言っただけど私の目にナナの姿はヒーローとして映ったよ！」

苦戦してないか。正直に言ってヒードラン相手にナナは相当苦戦を強いられていたと思うぞ。少なくともムンナの進化にジュエルという切り札を使うくらいには。それでも第三者の目には容易く突破したように見えるのか。もしかして今までのポケモンバトルもそう見られていたのだろうか？

「私はなにもしてないわ。頑張ったのはポケモン達。ツタージャは苦手な炎ポケモンを倒して、ムンナは慣れてない力を見事に使いこなした。そしてドラミドロはヒードランを相手に完璧に私が望んだ仕事をして、スピアーは速さに磨きをかけて圧倒してくれた。そしてダークライはゴウカザルを一番の強敵だと判断して、全力で倒してくれた」

「それでも凄い！ ナナはそれを出来るように完璧な指示をした！ それにここまで育てたのがなによりも凄いと思う！ ナナは間違いなく最高のトレーナー！ そして私のヒーローなんだ！」

ナナが少しだけ笑う。そういえばナナが認められるのは僕が知る限りだと初めてだな。初めてナナという存在が肯定されて、頑張りを認めてもらった。それがナナには嬉しかったのか。まあ褒められて悪い気分になる人間はいないか。

「ナナ！ これがミネストバッジだよ！ 受け取って！」

ナナの手にジムバッジが渡される。これでやつと4つ目。まだまだ先は長いな。

「そしてもう一つ！ ナナは本気の私……つまりジムリーダーに勝った！ それは実力だけなら既にポケモンリーグにも通用するつてことだよ！ だからもつと胸を張って自分を認めてもいいと私は思う！」

「ポケモンリーグ……そこで私が通用する？」

「うん！ ただジムバッジは8つ集めないとダメだけだね」

ポケモンリーグ。そこで勝つのはチャンピオンになるためには必須だ。それが遂に現実味を帯びてきた。間違いなく僕達は夢に少し近づいている。

「……あとこのジムバッジが残ってるの？」

「ストロベリータウン……ミヤコノ遺跡都市……ルルタウン……そしてシノノタウン」

「それなら次はシノノタウンに行くことを勧めるよ。あそこのジムリーダーは最強。下手したら四天王にすら匹敵する。そしてシノノタウンを八つ目にして勝ったトレーナーは誰一人としていない」

まじか。たしかに普通のトレーナーならシノノタウンを一番目に攻略するという話は聞いたことがあるが……まさかそれほどまでに強いとは。キンランさんつてもしかして相当な規格外なのでは？

「それは無理ね。私はシノノタウンだけは最後に挑むと決めてるから」

「ええ！　いくら悪夢姫でも絶対に勝てないよ！」

「勝つだよ。私は本気のキンランさんに勝ちたい。あの人より強くなりたい。キンランさんの元で学んで分かった。私は何一つとしてキンランさんに勝てていない。だから……」

「そっか……それなら私からはなにも言わない。それとナナはこの記事を見た？」

ナナの元に新聞が渡される。その新聞の隅に小さな記事を読めとアザレアが言う。それはキンランさんが勝ったという記事だった。それを見てナナが少しだけ驚きの表情を見せた。

「少し前に私に挑んだノエルという凄く強いトレーナーがいたの。あの時の彼は三つ目のジム戦で私はガラガラで相手したのだけど秒殺された。そんな強いトレーナーでもこの様だよ？」

ボールの中から目を凝らして見る。そこには驚きの結果が書かれていた。なんとノエルが負けたのだ。それに記事によると二体しかポケモンを倒せなかったとか。彼にはレジアイスもいたはずだ。それに決して弱いトレーナーではない。それこそナナに匹敵するくらい強いトレーナーだ。そんな彼が二体しか倒せないで敗北？

しかも記事にはそれが前代未聞の快挙として書かれてノエルのことが賞賛されている。これはさすがに夢だろ？

「……キンランさん……どれだけ強いんだよ」

「これはマシな方。一体も倒せないとかザラにある。ジムバッジを七

つ集めた選りすぐりのトレーナーが一体も倒せないんだよ？ それだけ彼女の實力はジムリーダーの中で頭一つ飛びぬけてるんだよ」

ていうか待て。そんなキンランさんと互角にやりあっていたゴウー団の某ラティ兄妹使いつて滅茶苦茶強いんじゃないか！

「私が目指すのはチャンピオン。キンランさんに勝てるくらいに強くならないとチャンピオンにはなれない」

「まあたしかにキンランさんに勝てるようになればチャンピオンに一気に近づくよね。とりあえず私は応援してるね！ それとナナには必要ないと思うけど私からのプレゼント！」

そしてナナに赤い宝石みたいな石が手渡される。これは僕でも見覚えのあるものだ。こんな貴重な物を貰ってもいいのだろうか。

「知ってると思うけど。これはホノオZ。炎技をZワザにすることが出来る。もっともナナは炎タイプのポケモンを持ってないから使う機会は少ないだろうけど、持っていて損はないはずだよ！」

Zクリスタル。そういえばアクZをくれたのもジムリーダーだったな。ジムリーダーってなにかあるとZクリスタルを渡す仕来りでもあるのか？

「ありがたく貰うわ」

「それとナナには関係ないけど一応言っとくね。しばらくしたら私はジムリーダーを辞めて旅に出ようと思うの！ 今日のバトルで気が付いたの。私の知っている世界は狭くて私は弱いつて。だからヒードランを連れて色々な世界を見てくる！」

「いいじゃない。どこに行くの？」

「とりあえずカロス地方に行ってみようかな。特に深い意味はなくて、そのシヨボンヌ城を見てみたいって理由なんだけど……どうかな？」

「そのくらい自分で決めなさい」

「そうだよね……それでナナに頼みがあるんだ。もしも私がヒードランに認められて、使いこなせるような立派なトレーナーになったら……その時はもう一度ポケモンバトルをしてください！」

「いいわよ。またポケモンバトルをしましょう。でも私も今以上に強

くなってるから覚悟しなさい」

「はい！」

そしてナナはジムを後にする。最初は思うたが終わってみると気持ちの良いポケモンバトルだった。また彼女とは戦いたいものだな。

「……結局使わなかったわね」

そんな中でナナが帰路でビー玉サイズの宝石を見ながら言う。あれはスピアナイトだ。スピアーをメガシンカさせるために必要な道具。そういえばスピアーがメガシンカすることなく今回のジム戦は終わってしまった。

「メガシンカ……どうするか本気でスピアーと話さなくちゃダメね。それに私自身がメガシンカについてもっと知らない……」

しかしナナも思い詰めていることがあるようだ。具体的に言うならメガシンカ。ナナはメガシンカをするのはスピアーの負担になってしまうのではないかと思っていてメガシンカに踏み出せないのだ。恐らくナナもスピアーが嫌がらないでメガシンカを受け入れてくれるとは思っている。だからこそナナはメガシンカを出来ないのだ。心のどこかでスピアーの優しさに甘えた自分のエゴなのではないかと思ってしまうから。

「ナナ！ お疲れ様でした！ ジムバッジはゲットしましたか？」

「もちろんよ。それとベアルン。あなたの用事は終わったの？」

「はい。ちゃんとこの街の特産品は買えました。それじゃあ今夜は勝利記念のピザにでもしましょうか」

「良いわね！ 私が手伝えることはあるかしら？」

「そうですね……」

そうして一日が終わる。メアはいないけど、あれからいつもの日々を取り戻りつつある。ナナもあの時より力をつけてきた。だけど時間はない。メアの安全はいつまでも保証されているものではない。だから……

「それとベアルン。一つ話があるの」

「なんですか？」

「私。これからメガシンカについて勉強しようと思うの！」

65話 悪と男とポケモンの御伽噺

どこか深い海の底。むかしに水の民によって作られた海底神殿アークシヤというものがありました。そこには海の王冠があるのかないとか言われています。しかしそんなことはどうでもいいのです。今回大切なのは海底神殿アークシヤというのは海流に乗って常に移動しており、それは皆既月食の時にしか人の目で見ることが出来ないという点、そんな悪の組織の隠れ家にはピッタリではありませんか？

そしてもう一つの仮定を追加しましょう。もしも誰かが海底神殿アークシヤの作り方を知っていて、作ることが出来るとしたら？

さて、長々と話しても仕方ないので結論から言います。どうやって知ったのかということは置いて、今の時代は海底神殿アークシヤの模造品が作られ、それを拠点にする悪の組織のボスがいます。その男の名前はラルム。彼は現在は『メア』を連れて『レプリカ』と名付けられた海底神殿に立てこもっております。

「……ここは海の底。脱出は諦めるんだな」

「最初から逃げも隠れもする気はないよ。逃げる気ならとつくに逃げる」

「生意気だな。まあ気分が良いから今は許そう」

しかし不思議とラルムに怒りは湧いてきません。海底神殿レプリカにはどこからか幻想的な音楽が流れています。それはメロエツタの音楽。メアは拉致されると同時にメロエツタを透明化させて音楽を奏でさせました。

そしてメロエツタの音楽は感情を操ることが出来ます。それにメアはラルムを良い気分にさせて全ての情報を吐かせました。そんな中でメアに一つの問題が出来ました。

それは『ラルムのしたことは悪いことなのか』というもの。

ラルムはダークポケモンを作り出した。それはメアも疑うことなく悪だと思っている。しかし彼の動機はダークライを救うためだった。愛のために世界を敵に回す覚悟をしたのだ。彼は『有象無象のポ

ケモンよりダークライを選んだ』だけ。その選択自体は悪だったのだろうか。

「……それならどうして逃げない？」

「それは……」

逃げようと思えば逃げれる。それでもメアは何故か逃げる気にはならなかった。逃げないのはラルムへの同情か。それともラルムが捕まってほしくないかと判断したからか……

「分からないんだな」

「ただ私がいればナナやノエルが来る。私はナナ達が貴方と会話して、どう思うのかしりたい。はたして貴方を悪として罵れるのか……良くも悪くも、それはナナのためになると思うから」

「随分と偉そうな言い方だ。まるで自分だけは上の存在と言いたげだ」

「違うわね……私がナナに貴方の処遇の判断を委ねたいのかもしれないね」

「まあいい。とりあえず俺は誰が来ても潰す。返り討ちにする。それだけだ。ここで俺が逃げないのは善意だと思え。お前の問いかけに答えてやるための」

そしてラルムはボールを眺める。中に存在しているのはカラマネロ。ゴウー団の幹部を務めていたポケモン。彼はそんなカラマネロに向かって舌打ちする。

「くそっ……お前が小娘の歌にさえ魅了されなければ」

「気晴らしに一曲歌いましょうか？」

「別にそれはいい」

「あら残念」

「……ウソだ。やっぱり一曲だけ頼む」

そしてメアはいつものよう歌う。彼女の歌は悪の組織のボスさえ虜にする。それほどまでにメアの歌は魅力的で、魔法と呼んでも差し支えないレベルまで上がっていた。

「これは？」

その頃の悪夢姫ことナナ。彼女はご存知の通りジムバッジを四つ集めてメガシンカの勉強をしようとしていた。そんな中で彼女に手紙が届いた。ナナは手紙を見る。そして手紙の内容に驚愕する。

「……マリア。ほんとに捕まらなかったというの？」

そんな手紙を読んでもナナをポール内部から不安そうに眺めているのは彼女の相棒と言っても差し支えないダークライ。そしてダークライはマリアからの手紙だと気付くと怒りを露わにする。それから一人で深く考え込んでいた。ナナはダークライが考え込んでいることに気付くが、いつものことだと無視をする。

「マリアって……あの二口ロクス社の社長じゃないですか！」

「表向きはそうね。でも本当の姿はゴオー団の幹部よ」

「え！ ちょっと待ってくださいよ！ そんな大物がゴオー団と関係？ いったいどうなってるんですか！」

「私に言われても知らないわよ……」

「しかも二口ロクス社ですよ！ アローラ特有のエネルギーを解明して世界各地でZワザを使えるようにしたという……」

ナナと一緒にいた赤髪の男性が驚き混じりの声を挙げる。それに対してナナは知ってるわよと言いたげに流す。ベアルンの言っていることは事実だ。ゴウー団の幹部のマリアはZワザのメカニズムを完全に解明することで巨万の富を築いた。それにより様々な事業を展開して、会社を世界レベルまでに拡大。今では知らぬものはいない存在だ。

「Zワザの解明が六年前。そしてラルムがダークライ復活のためのエネルギー研究を始めたのは十年前……もしかしたら逆なのかもしれないわね。大物がゴオー団になったんじゃない。ゴウー団から大物が現れたのよ」

「待ってください！ それじゃあ手紙ってゴオー団から……」

「そうよ」

「これって危険なんじゃ……」

「どうかしら？ ただ、本気で私に仕掛ける気なら名前なんか書かないでしようね」

「つまり？」

「今のところは敵対する気は無し。でも私の対応次第では殺されるかもしれないわね」

「殺され……る？」

「相手はゴオー団。人殺しくらいなら平気でやるわ」

そしてナナは頭を悩ませる。マリアの元に行くか、それとも手紙を見なかったことにするか。また同時にナナは思った。どう転んでも良いことにはならない。

「そんな人間がナナになんの用なんですか？」

「相手の目的が分かかったら苦労しないわよ……それに手紙に同伴者も二人まで許可されている」

「ナナ。誰を連れていくんですか？」

「そうですね……今の私じゃポケモンバトルに勝てないからキンランさん。それに一人は国際警察の知人でも連れていくわ」

「え！ 国際警察に知り合いがいるんですか！」

「そのくらいいるわよ……ベアルン。悪いけどまた留守番を頼むわ」
「分かりました。美味しいものを作って待ってますよ」

そしてナナの方もゴオー団に本格的に巻き込まれようとしていた。世間では壊滅されたとされるゴオー団。しかし実際は違う。むしろこれからと言っても過言ではないだろう。

6 さらなる高みへ 66話 お招き

カイヨウシテイの大きな都市の喫茶店。カランカランと音が鳴った。そこにピカチュウをモチーフにした黄色いパーカーを着た金髪の女性が入ってくる。

「キンランさん。忙しいところすみません」

「ナナ。私にお願いしたいことってなにかしら？」

「こちらを……」

ナナはキンランさんに手紙を見せる。キンランさんはそれを真剣な表情で見つめる。そして一通り読み終わると口を開いた。

「それで私に来てほしいと」

「はい」

「そういうことならいいわよ。あとこれはプレゼント」

キンランさんが黄色い宝石を投げる。もう見慣れた光景だ。渡したものはZクリスタル。これは恐らくデンキZだろうな。

「これは……」

「デンキZ。私は五つ持ってるから一つくらいあげるわよ」

まずZクリスタルをお土産感覚で簡単に渡すことにも驚きだが、普通に複数個も持ってるも驚きだ。そもそもZクリスタルってどこで入手するのだろうか？

「あり……」

「さて、これでナナはアクZ、ホノオZ、デンキZの三つがあるわけね。それでデンキZはスピアーのエレキネットをZワザにする時に使うかしら」

キンランさんはナナのお礼を遮って自分の話を進める。ナナも彼女の話だけは真剣に耳を傾ける。それほど彼女の話はタメになるからだ。

「ご存知の通り電気タイプの技は水と飛行に有効になる。しかし水と飛行ならナナの場合はダークライで充分でしょうね」

「はい」

「ただナナも今回のヒードランで強く実感したんじゃないかしら。ダークライがやられると鋼タイプに滅法弱くなる。ツタージャ、スピアー、ムシヤーナ。三体ものポケモンが鋼相手に不利な状況になりかねない。それにドラミドロだって本領のドラゴン技とはがね技が通用しなくなる」

エスパー、むし、くさ、どく、ドラゴン。これが僕を除いたナナの手持ちのタイプだ。たしかにはがねタイプが来ると一気に勝負は厳しくなるな。それがナナの今の弱点……

「でもドラミドロの……」

「あれは水生ポケモンと言ってもドラゴンと毒の複合タイプ。それに水生ポケモンということは長時間の戦闘は難しいわ」

「……」

「だから自分のタイプと違う技でも一時的に大きな攻撃力で放つ必要がある。それがデンキZよ。これはダークライ無しではがね相手に戦う切り札だと思いなさい」

「ていうかキンランさん。どうしてそこまで知ってるんですか？」

「ナナ。あなただって想像以上にネット掲示板で話題になってるのよ……今回のジム戦の動画も既に動画サイトで反響を……」

「ウソでしょ！ いつの間に……」

「ホントにあなただって新聞しか読まないのね。特にヒードランとの戦いは話題騒然よ。もうナナが次世代のチャンピオンだという人もいるくらいで……」

「ネットはやらないって決めてるんですよ……お兄ちゃんが一時期寝込んだことがあって、その原因がインターネットでのアンチコメントでしたから……」

「カナタ……アンチくらいでへこたれるなんてホントに情けないわね」

そんな話をしているとカランカランと音が鳴って赤毛のスーツの男が入ってくる。ベアルンと同じ赤毛だが、彼のショートヘアとは違って赤毛は癖が強くアホ毛になっている。しかもそれだけに留ま

らず、伸びきった赤髪は片目を完全に隠している。彼は一体……

「ボルノ。待ってたわ！ それにしても随分と変わったわね。まずはボサボサの髪をどうにかしたら？」

いや、待て！ ボルノかよ！ いくらなんでも変わりすぎだろ！

「これはオラのファツション。先輩が普段だらしのない男子がシャキツとやる様はカツコイイと言いだして……」

「そ、そう……せめて前髪は？」

「片目が見えるから問題ないぞ」

「ボルノ……ああ。シノノカップ優秀者の国際警察の人ね」

キンランさんは一瞬で彼のことには気付いたようだ。国際警察として扱われている様にボルノは少しだけ照れる。

「でも、いくらなんでもドレスコードがなっていないわ。バチユルお願い」

それだけ言うとはキンランさんのパーカーの中からバチユルが現れて、ボルノの体をよじ登って髪を弄り始める。それから数秒すると彼の頭は一言でいうならチョココロネのような髪型になった。なんていうか奇抜な格好になったな。しかしよく見て見るとカツコいいよ
うな……

「これで良しね。それじゃあ三人になったし行きましようか」

「なるほど。マリアのところに行くのか」

「……よく分かったわね」

「この机に置かれている手紙の紙が明らかに高級品。そこからある程度の大富豪だと考察。しかし普通の大富豪ならナナが一人で行けばいい。それなのにオラ達を呼んだ理由は？ そんな感じで考えていっいたら簡単さ」

「さすが国際警察……」

「ナナ。彼は十二歳という前代未聞の若さで国際警察よ。それ相応の能力があっても不思議ではないわ」

「そうですけど……」

「とりあえず行きましようか。ボルノ。テレポートを使えるポケモンはいる？」

「はい。頼むよ。ダブル……」

ボルノがボールを投げる。ナナは少しだけ驚きの表情を見せる。ボルノのポケモンが増えている。あれから時間も経つし、増えているもおかしくないが、知人が新しいポケモンを持つてると驚くよな。

「ボルノ。今の手持ちは？」

「ウインディ、ルカリオ、ダブル、ゲッコウガ、ハガネール、トロピウスだ」

「あれ？ フシギソウは？」

「……………少しワケあつて逃がした」

「そう……」

「とりあえずいこうぜ」

そしてボルノはダブルに命じてテレポトをする。テレポトした先は大きな屋敷。ここは間違いなくナナが呼び出された場所だ。しかし辺りには誰もいない。そう思ってた矢先だった。音速に等しい速さでナナの方に飛んでくるポケモンがいた。

「随分と手厚い歓迎ね」

「ピカッ（そうだね!）」

しかしナナにぶつかるとはなかった。何故ならキンランさんが瞬時にピカチュウを出して、ナナに衝突する前にアイアンテールで防いだから。それによりナナの元に飛んできたポケモンの全貌が明らかになる。あれはラティオス!

「なんて速さ……」

「ナナ？」

「あのピカチュウ……めちやくちや強い。ボールに出てから一秒もかからずにここまで移動。しかも自分の倍以上の体格差のあるラティオスを簡単に弾いた」

いや、それだけじゃない。ピカチュウはキンランさんから一切の指示を受けていない。完全に自分でやることを理解して動いている。

「ナナ。違う」

それからラティオスがドサツと倒れる。なにが起こった？ これは一体……

「あのアイアンテールと同時に『でんじは』を使ってラティオスを痺れさせたんだわ。なんて器用な……」

キンランさんのピカチュウ。その強さは誰が見ても次元が違うものだとハッキリと分かった。それこそ下手したら伝説よりも強いくらい……

「私がいる限りはナナに傷一つつけられないと思いなさい！」

彼女が高らかに叫ぶ。ボール越しでも分かる。あのピカチュウは恐らくカプ・コケコよりも強いだろう。どのピカチュウでもここまで強いわけじゃない。キンランさんのピカチュウだけが明らかに別格なのだ。そしてラティオスは痺れながらもナナに近寄ってくる。

「……敵意はなさそうね」

ラティオスはナナに頬ずりをする。そしてしばらくすると距離を取ってくる。まるで戦おうと言わんばかりに。これは一体……

「ナナ。あのラティオス。なぜかあなたに相当なついでるわよ」

「そうみたいです。それにバトルを望んでるみたいでもありますね」

「ナナがバトルしたいなら私は手を出さないから勝手にしたらいいわ。それにダークライがどのくらい強くなったかこの目でみてあげるわよ」

「それならお願い！ ダークライ！」

ナナが僕のボールを投げて外に出す。ラティオスと真剣なポケモンバトル。しかも相手から殺気はない。いつものように命の駆け引きはなくて普通のポケモンバトルが出来ることか！ 面白い！

「キユキュウウウーン！」

ラティオスが叫んで気合いで麻痺を治す。そして僕の方に突進を仕掛ける。高速で動くラティオスの体はまるで弾丸。当たれば相応のダメージを受けるだろう。そんな攻撃を体を捻って避ける。そしてシャドーボールを撃ってラティオスを狙う。しかしラティオスは簡単にシャドーボールを避けていく。そんな様を見ているキンランさんから野次が飛ぶ。

「ダークライ！ シャドーボールを撃って放置しない！ しつかり集

中してシャドーボールに追尾性をもたせなさい！」

シャドーボールに追尾性か。出来なくはないが全神経を集中するため無防備になってしまう。恐らく彼女は無意識でも出来るようにしろと言いたいのだろうが、それは難しい。

「ナナ……」

「シャドーボールの追尾性ね。二つのことを同時に行う。それは慣れるしかないから気合いで頑張りなさい」

ナナに助けを乞うが望んだ答えは出ない、そうこうしているうちにラティオスが再びこちらに突っ込んでくる。僕はドラミドロの戦いを見て気が付いたことがある。それはフィールドを制するということだ。僕のシャドークローは影を結晶化させて生成した爪で引っ搔くという少し周りとは違う使い方をしている。それを応用すれば……！

「……やるじゃない！」

僕は影を結晶化させる容量でラティオスの目の前に壁を作り、守っていく。そしてラティオスの下に結晶で槍を作り、貫こうとする。しかしラティオスは意図も容易く回避して上空へと飛んでいく。

「シャドークローの実体化の応用で紫色の結晶を作り。それで壁や槍を作り遠距離的な物理攻撃を可能にしたわけね。すごい応用力」

それでも成功した！ 地形の変化。問題なく実践でも使うことは出来そうだ。

「ダークライ！ 一気に……」

バトルはこれからだ。そんなタイミングで奥から手が叩く音がする。それと同時に当Z9位に大地震が襲う。地面がグラツと揺れる。それにより僕が生成した結晶も全て破壊されてしまう……間違いないポケモンの技。おそらく『じしん』だろう……

近くにいたピカチュウが最大限の警戒を見せる。奥からは女の人がちちらにドサイドンを連れて歩いてきていた。

「そこまです。ラティオス」

ラティオスは女の人の言葉で大人しくなり、ボールに戻される、そして女は物凄い覇気を放っていた。嫌でも強者だと分かる。それと

同時に曖昧だった記憶が蘇っていく。

「改めて私はマリア。元ゴオー団の幹部でニロロノクス社の社長よ。この度は私の招待を受けてくれてありがとう。ナナ」

彼女がラティオスを使って僕達を追い詰めたトレーナーだ。あまりにゴオー団で会った時とは雰囲気違って気付くのが送れた。彼女の自己紹介にナナ達も最大限の警戒を見せる。

「私はポケモントレーナー。ちゃんとポケモンは六体いるわよ。手持ちがラティオスとラティアスだけなんてことはない」

そんな中で彼女が的外れな受け答えをする。しかし適当なタイミングで切り上げて、ナナ達に奥の方へと来るように促す。

「とりあえずお茶でも飲んで話しましょう。ナナさん」

67話 完全敗北

配はない。重々しい空気の中に最初に口を開いたのはボルノだった。

「マリア。お前のしたことは許されることじゃない」

「……証拠はあるのかしら？」

「それは……」

「証拠が無ければ無実。法は犯していないことになる。つまり潔白の善良なる市民」

「法で裁けないから正義にはならないだろ！」

「なるわ。悪と善を分けるのは法律。法律で裁けないなら悪ではない。だってそうしないと善悪は人の主観によるものになるでしょう？」

マリアが冷静に受け答えする。その言動からは確かなカリスマ性を感じることが出来る。これは間違いなく強敵。というより本気で自分を悪だと思っていない。

「国際警察の方。あなたにとって正義とはなにかしら？」

「それは……」

「あなたの感性で善悪が分けられるなら独裁主義。そうならないために善悪は法律で区別される。だから法を犯さなければ、なにをしようが悪ではない」

「正義か悪か。そんなことはどうでもいい。私が問いたいのは何故呼び出したのか。それだけです」

ナナはボルノ達の会話に微塵も興味を示さない。彼女は口を開くと真っ先に要件を聞いた。しかし彼女はナナを真っ直ぐと見て誤魔化す。

「ナナ。あなたの正義は？」

「そんなことは考えたこともない。だけど一つだけ言えることがある。あなたは悪よ」

「証拠は？」

「私の記憶。もちろん物的証拠はないから法では裁けない。それでも

私の中に確かに貴方の存在は悪として刻まれてる。だから私は貴方を嫌悪する。それだけで充分」

「あなたの正義。それは『ポケモンが幸福になること』でしょ？ つまりナナの目にはポケモンに不利益となることは悪として映る」

「あなたがそう思うなら、そうかもしれない。だけど私はあなたが嫌い。それ以外のものが必要かしら？」

「いらないわね。ちょっと見ないうちに強くなつてつまらないわ」

「私は貴方を楽しませるために生きていない」

そこでナナとマリアの会話が終わる。ナナはマリアの言葉を否定もしなければ肯定もしない。ただの事実として冷静に受け止めていく。そして受け止めた上で自分の感情だけを口にしていく。『理屈とは関係なく嫌いだから関わりたくない』と。

「それじゃあ最強のジムリーダーのキンランさん。あなたの正義は？」

「勝利。勝てば勝利。負けたら悪。あなたは裁判で勝ったから正義。それ以外の理屈はいるかしら？」

「キツパリとしてるわね」

「こんなくだらない話は切り上げて、ナナを呼び出した理由をさっさと話しなさい」

「まず一つ。私のラティオスを助けてくれたお礼」

お礼ね。ラティオスを助けたことに一応感謝はしてくれていたのか。その感謝はありがたく受け取っておくべきなのだろうか……そして目の前に数億の大金が積まれる。それにボルノとキンランさんは少し目の色を変える。しかしナナは無表情だ。

「興味ない。私はお礼を言われたくて助けたんじゃない」

「それならどうして？」

「さあ？ 気がついたら体が動いていたと言っておくわ」

ナナは嘘を吐いて誤魔化す。ナナが助けたのはポケモンと離れ離れになるのが可哀想だと思ったから。間違っても気がついたら動いていたなんてことはない。

「なら、このお金はいらない？」

「ええ。納得いかないなら適当な場所に寄付でもしなさい」

「貸しを作ったみたいで癪だわ。ならこれでも受け取つときなさい」

そしてナナに渡されるのはブラックカード。ナナはそれを迷わず懐にしまった。ナナと長い間、旅をして分かったことがある。それは思ってる以上にナナという存在は自分の欲に忠実だということ。

「……してやられた」

「おい。ちよつとどういうことだ！」

「なるほど。ナナは大金を受け取らなかつたらもつと金が出てくると読んで敢えて受け取らなかつた。すごく性格は悪いと思うけど賢いわね」

最初にマリアがナナの思惑に気付いて頭を抱える。そして理解の追い付かないボルノに横からキンランさんが補足する。これが倫理的にどうなのかは置いておくがナナの利益になるのは間違いない。

「ナナ……それってどうなんだ？」

「法で裁けないならなにをしてもいいと言ったのは彼女よ」

「そうだが……」

「まあいいわ。それじゃあ二つ目の話にいくわ」

それから少しだけ真面目な話になる。これはナナにも大きく関係する話だ。その話の内容をナナは真剣に聞く。

「メガシンカ。ナナにその手解きをしてあげる」

「え？」

「あなたがメガシンカを使わないのはポケモンの負担とか色々と考えてるからでしょ？ だからメガシンカについて軽く教えてあげるつて言ってるの」

「キンランさん……」

「まあ悪くはないわね。バトルした私だから分かるけど彼女は相当強いトレーナーでメガシンカも使いこなしてる。それに私はメガシンカに関しては専門外よ。もっとも彼女を信用しても大丈夫なのかというのは別問題だけど……」

「まあ判断はナナに任せるわ。ただ教えてほしいのならメガシンカについて本気で叩きこんであげる」

マリアからの提案。

それに対してナナの出した答え。それは受け入れるというものだった。

* * *

「とりあえず実戦形式で改めてメガシンカの強さを実感してもらおう。お願い。ラティアス」

案内されたのはバトルフィールド。そこでポケモンバトルが始まろうとしていた。ルールはナナは全ての手持ちを使ってよし。それに対してマリアはメガラティアスの一体だけというもの。そして審判はキンランさんが勤める。

「お願い！ ダークライ！」

「いくわよ。ラティアス」

そしてラティアスが光り、メガシンカして姿を変貌させる。それと同時にバトルが始まった。僕は迷わずあくのはどうを放つ。

「遅い」

しかしメガラティアスは既にいない。しばらくして後ろから激しく叩かれる。振り向くとメガラティアスがいた。あまりに速い。まったく反応すら出来ない。それからメガラティアスは再び消える。いったいどこに……

「ダークライ！ 相手は透明化してるのよ！」

透明化か！ だから消えたのか。そう思ってるうちに再び背後から殴られる。そして次は電撃が降り、体が痺れる。これは10まんボルトか……

「見えないだけじゃない……音速に近い速度で常に動いてる……」

「ラティアス。りゅうせいぐん」

そんな時だった。空から数多の隕石が降ってきた。それがフィールドに降り注ぐ。僕は必死に避けようとするが量が多すぎて、避けきれない、そして気付いた時には体がボコボコとタコ殴りにしていた。そして体から力が抜けてドサツと倒れこむ。

「ダークライ！ 戦闘不能！」

「ありがとう。ダークライ」

僕はボールに戻される。あまりに強すぎる。透明化だけでも厄介だというのに数早く、技の威力も高い。あまりに滅茶苦茶な力だ……

「お願い！ ツタージャ！」

「タジャ！（任せて！）」

「一気にいくわよ！ つるのムチでフィールド全体をしばきなさい！」

ツタージャがフィールドに出てくると同時に無造作に駆け回るメガラティアスをつるのムチで捉える。それに僕は驚いた。あんなに速くて透明化してるのにどうやって。

「なるほど。無造作につるのムチを使うことでラティアスの位置を探索。そして当たったら一気に捉えるってことね」

「ええ！」

「ラティアス。回りながらりゅうのはどう」

「ツタージャ！」

回転しながら放つりゅうのはどう。それはツタージャのつるのムチと同じようにフィールドを覆っていく。りゅうのはどうは高威力で当たったツタージャが一撃で倒される。

「ツタージャ。戦闘不能」

あの威力のりゅうのはどうがあるから迂闊にラティアスに近づくことも出来ない。攻防一体の隙のない技の使い方……

「これはカウンターシールドという技術。回転しながら撃つことで自身の周囲を包んで守ることで攻撃が防御へと変わる」

マリアから伝えられる技術。技にこんな使い方があったとは。ナナは悔しそうに下唇を噛みながらツタージャをボールに戻していく。ここからは散々なものだった。次に出したドラミドロもりゅうのはどうで一撃。ムシャーナも成す術やられ、スピアーですら手も足も出なかった。あまり散々な結果。ナナが手も足も出ていなかった。あまりに彼女は強すぎた。

「これがメガシンカ。メガシンカはポケモンを大きく強化する。攻撃は重くなり。並大抵のポケモンでは耐えられない。もしも一撃でやられなければ少しは善戦出来たと思うわ」

完全に別次元の強さだった。彼女はメガシンカのカだというのが、それだけじゃない。彼女の指示に素のポケモンの強さ。全てにおいて負けていた。そんな光景にナナは膝をつく。

「……私達……強くなっ……たよね？」

今回の敗北。それはあまりにナナには重いものだった。

ここでナナは初めて自分の力について疑いを持つことになった。

68話 弱くて病んで……………

それからナナはマリアに用意された部屋にいた。天幕付きのベッドに無言で寝ている。外は深夜で不気味なくらい物音一つしない。本来ならナナも寝ている時間だ。

「……………なんで！　なんで！」

そして数十分に一度ナナが狂ったように叫んでのたうち回る。完全にナナは今回の敗北で病んでいる。正直に言ってもう見てられないくらいだ。しかし僕に出来ることはなにもない。

「なにが足りないのよ！」

そしてしばらくすると落ち着く。もう痛々しくて見ていられない。そんな様を見てドラミドロはツタージヤは愛想を尽かし始めていた。今回の間違いなく二体の好感度は落ちたな。ちなみにスピーアーとムシャーナは特に気にしないようだ。強いて言うならスピーアーは心配そうに眺めているくらいだ。

ちなみにムシャーナは気にせずに普通に寝ている。なんて呑気なやつだろうか。一応性格は真面目と前に聞いたことがあるが、進化で性格変わったのか？

進化すると個体によっては大きく性格が変わるといふ。ムシャーナもその類か？

「ダークライ」

「なんだ？」

そんな中でスピーアーがボール越しに僕に話しかける。まあそろそろ話しかける頃合いだとは思っていた。

「見てられぬ。ナナを眠らせてくれ」

「うむ……………」

さて、どうするのがナナのためになるのか。偉そうなことを言うが挫折を知らずに強い人間などいないと思う。それにマリアは純粋な実力だけでナナに勝った。悔しいが責める余地はない。ナナが彼女より劣っているのは事実であり、負けたのは当たり前といえる。

ナナは改めて自分と向き合う時間が必要だと僕は思う。それが今

なのだろう。

だから僕は敢えてなにもしない。

「そんなことはしない」

「なにを言ってるんだよ！ 拙者は見てられ……」

「ナナはお前がゴオー団に捕まり、人へのトラウマを持っていた時にナナはお前になにをした？」

「なにもしてもらってないが、そういう問題じゃねえ！」

「そう、なにもしなかった。それはお前に一人の時間が必要だと判断したからだ。ナナも同じだ。一人の時間が必要なのだ」

「でも……」

「僕も今のナナを見るのは辛い。それでも今は堪えろ。それがナナのためだ」

そして夜が明けた。ナナは夜通し発狂を繰り返して一睡もしていない。それでも日が昇る頃には声も枯れて、無言になった。そんな時に部屋の扉が叩かれる。だけどナナは返事しない。扉を叩いた主は無言で部屋に入る。そしてナナのベッドに腰掛ける。

「なあナナ……お前らしくないな」

入ってきたのはボルノ。ナナは少しだけ顔を上げて見るが、すぐに伏せる。そんなナナにお構いなくボルノは話を進めていく。

「ナナはバトルの才能もなければ物覚えも悪かった。だけどナナは誰よりも熱心に勉強して力を身につけていった。オラは凄いと思う。自分で言うのもあれだがオラもメアもノエルも世間では天才と言われる類の人間だ。そんな中でナナは折れずに頑張った」

「だから……？」

「お前が壁を乗り越えてきたのは折れなかったからだ。どんなに高い壁でも折れずに挑むのがお前の強みだろ。それを自ら捨ててどうするんだよ」

「そんなの強みでもなんでもない！ 誰にでも出来ることよ！」

「そんなわけねえだろ！ 折れないっていうのは特別な才能で誰にも出来ることじゃない！ ナナ！ お前は特別……そして最強なんだよ！」

「最強？ 冗談は言わないで！ マリアにキンランさん。それにお兄ちゃんにメア。そしてノエルと貴方。私より強いトレーナーは星の数ほどいる！ そんな私が最強なわけ……」

「いま世間で一番話題なのはノエルでもマリアでもなくてお前だろ！ それはナナが最強だからだよ！ 強いだけが最強じゃないだろ！ 全ての要素を合わせるとナナが一番強い！」

その言葉でナナが顔を上げる。腫れた目でボルノの方を見る。まるで世界に希望を見出したようだ。いや、それはさすがに言い過ぎか……

「……ねえダークライ」

ナナが僕のボールを投げる。そして僕が外に出される。ナナの目には確かに自信が戻っていた。少し立ち直るのが早い気もするが、まあいいだろう。

「戦おう！ マリアと」

「勝テルノカ？」

「勝てるかどうかじゃない！ 勝つの！ 勝てないなら戦いの中で成長して超えていく！ 私達はいつもそうしてきた！」

いつものナナだ。無茶苦茶な根性論。それでもいい。ナナの足りない部分は僕がサポートすると決めている。僕達がナナをチャンピオンに導くのだ。それなら根性論の一つや二つやらなければならぬ。でも、これは立ち直りではない。

恐らくナナの逃げだ。ナナはバトルに逃げようとしている。

ナナは走る。廊下を走ってマリアのところを目指す。髪も整えず、腫れた目のままひたすら走った。そして寝てない影響が出ているのか走ってる途中で何度か転びそうになる。それでもナナは走ることをやめずに走った。そして息を切らしながらマリアの部屋に着く。ナナは少しだけ息を整えてから部屋の扉を開いた。

そこには？ 気に紅茶を飲みながらお茶会をしているキンランさんとマリアがいた。ナナは少しだけその様子に驚きをみせる。

「……キンランさんがどうしてここに？」

「ポケモンバトルをしたらどんな相手でも友達よ。たとえ極悪な幹部

だとしても」

「なんですか……それ……」

「少なくとも私はそうありたいと思ってるわ。だって憎むより笑いあった方が素敵でしょ？」

「それはそうですが……」

「たしかに彼女のしたことは許されることではないし罪を償うべきだとは私も思う。だけどそれとこれとは別問題よ」

ナナはどうも納得していない様子だ。もちろん僕も納得していない。ゴオー団のしたことは絶対に許されることではない。それなのに……

「それでナナはなんの用かしら？」

「マリアさん！ 私ともう一度ポケモンバトルしてください！」

「いいわ。次はもつと単純にいきましょう。一対一の一般勝負。それでメガシンカとZワザはありでどうかしら？」

「問題ありません」

「表に出なさい」

そしてナナとマリアのポケモンバトルが始まろうとしていた。マリアはボールを投げる。出してきたのはラティオス。そしてナナもボールに手をかける。しかしナナの手は僕のは触れない。そして別のボールが握られて投げられる。

「お願い！ スピアー！」

「ピアツ（任せろ）」

「スピアー……ダークライで来ると思ってたわ。どこからでもかかってきなさい」

「スピアー！ メガホーン！」

「へえーメガシンカはしないんだ。それにしても遅い。ラティオス。避け……」

「こうそくいどうで加速して逃がさないで！」

メガホーンの最中にこうそくいどう。それで速さは倍増してラティオスの本能を上回る速度で殴り、吹き飛ばす。そしてナナは攻撃を手を緩めない。

「スパイアー！ 追尾するミサイルばり！」

「なんですつて！ 避けなさい」

ラテイオスに放たれたミサイルばり。それに負けまいとラテイオスも反応をみせるがミサイルばりはラテイオスの行く方向に見事に追尾していく。そしてミサイルばりを見て感心するキンランさん。

「……追尾する技。私がダークライに言った技術。それをスパイアーが身につけて、ナナもそれに気付いて指示を出す。随分と強くなったじゃない。だけどまだ足りないわ」

「ラテイオス。ミサイルばりに突っ込みなさい」

「キョウウウン」

ラテイオスは見事な転回を見せて一気に距離を詰める。ミサイルばりに自ら受けていくラテイオス。まさか自分から攻撃を受けるとは……

だけどナナは眉一つ動かさない。まるでそうするのが分かっていたかのように。

「スパイアー。少し上に行ってエレキネット」

しかしナナは完全に読んでいた。ラテイオスがミサイルばりに突撃することを。見事なタイミングで放たれたエレキネットは見事にラテイオスを捕縛。完全に身動きを取れない状況に持ち込む。これはチャンスか！

「今の私達のゼンリョクを全て叩き込む！ 天を砕く雷で身を焦がしなさい！」

このタイミングでナナのZパワーリングが光る。その光はスパイアーへと伝わっていく。まさかナナはZワザを撃つつもりか！

「スパークキングギガボルト！」

スパイアーからお尻の棘から放たれた電気の大槍がラテイオスを貫く。その様子を見てナナがニヤリと笑う。完全に決まった。完全にナナの理想的な動き。そのまま行けば……

「見事ね。でも攻撃力が足り……」

「ウツ……」

その時だった。ナナが口から血を吹いた。それからフラフラとし

てぶつ倒れた。もちろんポケモンバトルは中断。みんなが慌ててナニにかけよる。

「ナナ！ どうしたの！」

「Zワザの使い過ぎよ……恐らく相当体力を消費してる状態でZワザを撃った。例えば徹夜明けとか……」

ものすごく心配するキンランさんと対象的に冷静に分析するマリア。とりあえず命に別条はなさそうだなによりだ。

「あ……」

「それに加えて精神的な負荷がかかれば起こってもおかしくない。とりあえずポケモンバトルはナナの勝ちにしとくわ。早く運びましよう」

ナナの勝ちか。一応ナナはマリアに勝ったんだな。しかし勝ちを譲ったという感じで腑に落ちない。これは今度改めてリベンジマッチをしなければならぬ。ナナは良くても僕の気が済まない。あそこまでコテンパンにされたんだ。どこかでリベンジを果たしたい。しかし機会はあるのだろうか……

そうしてナナは部屋へと運ばれ、数時間後に目を覚ました。

69話 Next Stage

ナナは目を覚まして夕食を食べる。あれからキンランさんはジムの仕事があるので一度帰宅した。この場にいるのはナナとボルノとマリアだけ。そして眼の前には今まで見たことないような豪華な食事……

「ナナはこれからどうするの?」

「……決めてません」

「それならこれに行ってきたよ。おそらくレベルアップに良いと思うわ」

ナナの携帯に一つの記事が投げられる。その記事によるとハクガ山付近に出没してるトレーナー狩りの通り魔とか。しかも負けたトレーナーはポケモンを全て奪われるとか書いてある。なんて物騒な……

「少し逸れるけどイッシュ地方にプラズマ団という組織がいるのよ」

「プラズマ団? それってなんですか?」

「ゴオー団に似たようなものよ。そのプラズマ団にいた強い団員。名前はドクソノというのだけど彼のすることは過激すぎて報道規制で名前すら語れることのない男。そいつがデトワール地方にやってきた」

「えー!」

「まあヒーローウルトラによって制圧されて三年前にメラオ大監獄にぶち込まれました。めでたしめでたし」

「なら関係ないじゃ……」

「しかし不幸かな。少し前にメラオ大監獄を私達が襲撃した時に彼も逃げ出しました」

「なにやってるんですか!」

「メラオ大監獄なんて歴史から抹消されるような極悪人だけが送られる収容所。一人でも逃がしたら大問題。だから絶対に報道は去れない。でもウルトラとか国際警察が血反吐を吐きながら走り回ってるじゃないかしら」

「……ボルノ」

「マリアの言うことは全て本当だ。逃げ出したのは十八名。そのうち現在は十三名を既に逮捕している。ただ残りの五名は……」

「あら、国際警察がそこまで言っているのかしら」

「構わない。内部でも悪夢姫ナナにも事情を話して協力を仰ごうという話も出ているくらいだしな」

逃げ出した悪党達か。おそらくナナが会わなかったのは事件が起きてるルートを避けて旅をしていたからだろうな。名前が分からなくても事件が起きた場所くらいは把握されるからな。

「それじゃあ話を戻すわ。このトレーナー狩りの通り魔。恐らくプラズマ団のドクソノよ。もっとも三年も監獄に入れられていたら除籍されてるだろうから元という言い方になるでしょうが」

「……それに行けと？」

「安全の確保されたポケモンバトルなんて温いわ。そんなの積み重ねても強くない。強くなりたいなら命のやりとり。死と隣り合わせのポケモンバトルをしなさい」

「嫌です。私は自分のポケモンを危険に晒したくない」

「私達のアジトに乗り込んでよく言うわ。それにあなたのポケモンを危険に晒さないなんて不可能よ。あなたのダーククライを欲しがってる人は星の数ほどいる。自分で攻めるか攻めないかの違いしかない。幻や伝説のポケモンを持つトレーナーが平穩に暮らせるわけがないじゃない」

「それは……」

「私の話をしましょうか」

それからマリアは語り始めた。自分の過去の話……

「まず私は十六の時に父に連れて行ってもらった南の孤島で初めてポケモンを捕まえた。それがラティアス」

ナナのボルノも静かに彼女の話を聞く。マリアは自分の話を通してなにを伝えようとしているのだろうか……

「それからしばらくするとラティアスを狙って何人もの密猟者達が襲いかかってくる。それどころか弟もラティアスに目が眩んで私のポ

ケモンを狙って夜な夜な襲いかかってくる。その怖さが貴方達に分かる？ 家族すらも物欲に塗れた目を向けられる気持ちだ」

「それは……」

「やがてラティアスは奪われた。それも私の弟が情報を流して……」

「ひどい！」

「その時の私は世界を恨んだ。そんな時にラルムという男が現れた。彼は私に言ったわ。助ける代わりに全てを渡せと。私はそれに従うしかなかった。私は弱かったから自分を守るためにゴオー団に入るしかなかったのよ。ラティアスと一緒に暮らすためには悪に生きるしかなかったの」

少し重いな。まさかマリアにそんな背景があったとは。ずっと悩みの一つもなく人生を謳歌しているとすら思っていた……

「それからは麻薬にポケモン実験に強奪。場合によっては殺人もしたわ。もちろん悪の組織同士の抗争にも巻き込まれた。それでも私はラルムに守ってもらいながら必死に実戦で戦い方を学んだ。時が満ちてからは詐欺まがいのことをして父の会社も奪った。憎き弟も追放してやつと私はラティアスと平穏に暮らせる日々を手に入れたのよ」

「……そういえばラティオスは？」

「あの子は私が社会的な地位を確立させて暮らせるようになってから行ったラティアスの里帰りで偶然ゲットしたポケモン。まだ育成中よ」

マリアの背景は分かる。しかしそれがなんだと言うのだろうか。同情してくれ。私は可哀想な悲劇のヒロインでなにも悪くないとも言いたいのか？

「ナナ。力がなければ私みたいに全てを奪われる。もしも今の生活をしたいなら多少はポケモンを危険に晒しても自身のレベルアップをするべきよ。ゴオー団で色々なトレーナーと戦ってきて分かった。命の駆け引きをしているトレーナーとしてないトレーナーじゃレベルが段違いなのよ。今よりも強くなりたいたいなら命を賭けなさい。あなたはその段階よ」

命の駆け引きをしなければ強くなれないか。ほんとにそうなのだろうか。たしかに死と隣り合わせのポケモンバトルは大きく実力を上げる。それはエラニの森のトロピウスやゴオー団のアジトで戦ったラティオスで身に染みて分かっているが……

「……私はそんな強さ認めない」

「なら終わったあとで後悔するのね」

そして夕食が再開される。しかしどこかナナは落ち着かない様子だった。恐らくナナ自信が一番自分の力不足を実感しているはずだ。そして強くなるためにはポケモンを危険に晒すしかないと言われた。しかしナナはそれをしたくない。だから探しているのだ。第三の道を。

「……そういえばナナのムシヤーナ。私のクソ弟のポケモンだったわね」

「違います。私のムシヤーナです」

「皮肉なものね。弱いと思って捨てたポケモンがここまで強くなると」

「あなたの弟は今どうしてるんですか？」

「聞かない方がいいと思うな。そもそもシノノカップ第三回戦が終わってから一度も彼の姿を見てない時点で察した方がいいよ」

「まさか……!」

「想像に任せるわ」

マリアは不気味に笑う。敢えて口には出さないが全員がマリアはどうしたのか察した。こいつは紛れもなく悪の組織の幹部であり。それに相応しい行為をしてくる。そんな人間だ。

「ナナ。あなたから見て私の弟はどう？」

「話してて不快でしたね」

「気が合うわね。あそこまでのクズ。私も大嫌い。私は悪の組織だけど許せないことが一つあるのよ」

「なんですか？」

「自分に私利私欲のためにポケモンを扱い、ポケモンを道具としか見ない人。それが許せないの」

「ダークポケモンなんて作つていてなにを言ってるんですか！」

このタイミングでナナが立ち上がった。表情から怒ってるのが見てわかる。それに対してマリアは涼しい顔をして話を続ける。

「あれは必要な犠牲だよ。ラルムは愛を選んだ。ダークライへの愛を。そんな彼を見て私は心打たれたのよ。ここまでポケモンを思いやられるなんてカッコいいなと」

「そのせいでどのくらいのポケモンが苦しんだと思ってる！ お前達は私利私欲のためにポケモンを使ったじゃない！ ポケモンを道具だと思ってるのは……」

「それを言うならナナはラルムを攻めれるの？ ダークライのためだけに動いた彼を私利私欲のためにポケモンを扱ったといえるかしら？」

「それは……」

「たしかに理屈的には彼は私利私欲で動いた。それは間違ってる。でも私達には心がある。だから彼を絶対悪とは言えない。正論だから正しいなんてことはない」

ナナが下唇を強く噛む。彼女は口で勝てる相手じゃない。それに彼女のネジはどこか外れている。恐らくまともに会話しちやダメだ。

「特に『人間はポケモンの道具』だと思ってるナナにはよく分かるんじゃないかしら。ラルムは『ポケモンをポケモンの道具』とした。それはあなたの価値観的に悪？ 善？」

「……悪。理由は分からないけど……ラルムのしたことは間違ってると思う」

ナナが力なく呟く。それに彼女は満足そうに微笑む。まるで欲しい回答を貰ったかのような感じの顔だ。

「結局のところ善悪なんて上手く言語化出来ないくらい曖昧なもの。ねえ……そんなものに縛られるのって馬鹿らしくない？」

「それは……」

「あなたは自分が悪だと思って悩んでいる。間違ってることはしてないのに何故？」

「分から……」

この流れはマズい！ 明らかに洗脳の類だ。もしもナナがマリヤと会話を続けたら取り返しをつかえないことになる！ それこそ悪の組織の幹部格の人間になってもおかしくない。僕はボールから飛び出てマリヤを押し倒す。

「ダークライ！ なにをしてるの！」

「……ねえダークライ。あなたはナナの幸せについて考えたことがある？ 世界から歪んだ価値観を持つナナはこんな世界で幸せに生きるのかしら？」

僕は手に力を込める。この女の話に耳を傾けるな。早く黙ってくれ。そうしないとナナが取り返しをつかえないことになる……

「世界が間違ってる。ナナが正しい。そんな世界に変えた方がナナは幸せだと思わない？」

「シルカッ！」

明らかに間違ってる。自分の都合だけで世界を変えるなんてしていいわけがない。

「ねえ……すっと思うのだけど幸せってなに？ 幸せを求めるのはいけないことなのかしら？ あなたにとってナナの幸せはなに？」

幸せ。そんなのは……

「ルールを守って、はいはいと言うことを聞いてやりたいことも出来ないのは本当に幸せなのかしら？」

その時だった。僕は強引にボールへと吸い込まれた。ナナが僕をボールに戻したのだ。そしてナナはマリヤの手を掴み、一言だけ言った。

「私は幸せになります。私は大切なものを見つけた。ダークライにムシャーナにスパアー。そしてツタージャにドラミドロ。それだけじゃない。メアにノエルにボルノ……そしてキンランさんにベアルン……一緒にいたいと思える人達も出来た」

「そう……」

「世界を変えるとかどうでもいい。私は自分のポケモンや大切な人達といられれば満足。それ以上はなにもいらんです」

「なら、それらが奪われたら？」

「死ぬ気で取り返します。ハッキリと分かりました。ラルムと私は同じ類の人間。私も彼と同じ立場なら同じことをする。ラルムは大切なものが奪われた私。だからこそ私はラルムと同じ過ちを犯さないように強くならないといけないんです」

「どうやら僕が思ってる以上にナナは大人らしい。ナナは自分の中で既に確固たる考えがあつて、それを貫く意志もある。僕が不安に思う要素なんて一切ないんだ。」

「……ずっと私はなんで負けたか考えてた。その答えがやっと分かりました」

「なにかしら？」

「自分が納得しないから世界を変えるんじゃないやダメなんです。だって世界はみんなの物だから。それはポケモンバトルも同じです。自分の中で完結させずにポケモン達としっかり向き合つてポケモンを頼る。それが出来なかったから私は負けた」

「なるほど……」

「ポケモンバトルが自分一人のものではない。それが理解出来ていなかったんだと思います。だから私はスピアーに少し頼る」

「ナナは小さな宝石を出す。真ん中には遺伝子のような模様が書かれている。まさか……」

「スピアー。今度のポケモンバトルからメガシンカ。使うわよ」

70話 ゴウー団の新幹部

あれからナナは一人でハクガ山にいた。ナナは強くなるためにドクソノと戦うことを決めた。ナナの心情にどんな変化があったのかは分からない。しかしなにか思うところがあつたのも事実だろう。ナナはボールを投げてスピアーを出す。

「いるのでしょうか。ドクソノ」

「……ドクソノって奴は知らないが、俺がここに知ってるのに来るのは自分が強いという自惚れからか？ 悪夢姫ちゃん」

岩影から黒髪の男が出てくる。ギラギラとした凶悪な目でナナを見てくる。ナナはゴクリと唾を飲んで、戦闘態勢を整える。

「お前のポケモン渡せよ。ボールに閉じ込められたままなんて可哀想だろ？」

「お断りよ。あなたの狙いはなに？」

「俺は好きなんだよ……人からポケモンを開放して、トレーナーが目に涙を浮かべる様が。その後に足か腕とか切り落とす……」

「もう喋らなくていいわ。スピアー行くわよ！」

「スピッツ（任せろ）」

「ああ……悪夢姫。その可愛い顔を傷つけてしまうのも良いかもしれない。そしたら世間様はどんな反応をするんだろうな？」

「ミサイルばり」

ナナは容赦なくトレーナーへのダイレクトアタックを始める。しかし、それは目の前に現れたキリキザンにようて防がれる。しかしナナは動揺の一つも見せない。

「こんな物騒な相手。絶対に関わるべきじゃないわね」

「ならどうしてここに来た？」

「あなたに言う必要はない……」

「遅い」

その時だった。ナナの目の前にキリキザンが現れる。なんて早い動きだろうか。そしてキリキザンはナナの顔を斬ろうと大きく刃物で出来た腕を振りかぶった。

しかしナナに当たることはない。何故ならスピアーが瞬時に戻りキリキザンの攻撃を受け止めたから。

「ポケモンっていうのはトレーナーを倒すと弱くなるんだけどなあ……」

「ええ。だから私が倒れるわけにはいかないのよ」

そして激しい技のぶつかり合いが始まる。キリキザンの攻撃を全てスピアーがお尻の針で受け止めている。しかし少しスピアーが押され気味だな。相手はナナと同レベルの強者か。そう思いながら僕はボールから出てナナの方に飛んできた矢を払う。

ドクソノの方を見ると吹き矢を構えていた。相手はトレーナーに直接攻撃を加えてくるのか。もしも僕の反応が遅れたらナナが怪我をしていたところだ。

「ダークライ。信じてたわよ」

しかしナナは動揺の一つも見せない。このポケモンバトルでナナは一切の指示を出さずに冷静に見ていた。明らかに今までのナナとは違う。ナナはなにを考えてる？

とりあえずここで僕がドクソノを倒せば……

「私達がやるのはポケモンバトル。あいつらと同じ土俵に入る必要はないわよ。ダークライ」

「デモ……」

「今は黙って私に従いなさい」

ナナが圧をかえてくる。僕もそれに不服ながら黙る。そしてナナはボソリと呟く。

「私に足りないのはポケモンを信じるということ。もしも私がルール無用で殺気溢れた相手にビビらなかつたら、それが出来るようになると思わない？」

「マサカー！」

「この勝負で私は一切の指示を出さない。全力で私を守りなさい」

まさかナナは自分の命を賭け金にして修行しているのか！ たしかに動揺の一つどころか指示も出さずに勝てたら、それは自分がポケモンを信用出来ているという確かな事実として残るだろう。それで

もいくらなんでも危険すぎる！

「どうすればダーククライ達を信用出来るのか私には分からない。けど信用しないと出来ないことを成し遂げたら出来るようになったということでしょ？」

「危険ダー！」

「どうして？ みんなが私を守ってくれてるでしょ。それに私が怪我をしても自己責任。あなた達を責めたりしないし、気にすることでもないわ」

その時だった。キリキザンが吹き飛ばされた。スピアーのメガホーンが見事に当たったのだ。明らかにスピアーの方が押され気味だった……どうして……

「スピッツツツ！ (ナナには傷一つ付けさせねえ！)」

いや、理由を求めるのは野暮だな。スピアーはナナへの想いで成長した。それだけだ。高ぶる感情はなにかを成し遂げたいと思う想いは時に大きな力を与える。

しかしキリキザンはすぐに起き上がる。大したダメージにはなっていない。これは僕も加勢した方が良さそうだな。

「スピアー。手を貸そう」

「ああ……頼むぜ！」

「うむ。とりあえずお手並み拝見といこうか」

僕は念じてキリキザンの足元に影の結晶を槍として生み出す。段々とイメージも明確になってきた。影さえあれば簡単に生み出せる。もつとも技と呼ぶにはあまりにお粗末で威力も足りないためポツ拳の域を出ないが、汎用性は高い。影の結晶は壁となり、その場に残りフィールドの制圧にも使える。

だが、キリキザンはそれを意図も容易く切り裂き、こちらに接近してくる。問題は耐久性の無さか。少しの衝撃で簡単に壊されてしまう。ここは要改善だな。そして近づいてきたキリキザンはこちらに切りかかってくる。僕はそれを後ろに下がって回避。そしてダークホールを放って眠らせる。これで終わりだな。しかし相手は相当な手練れだと言っていた。これだけだとは思えない……

「あれ？　ダークライ。お前の特性のナイトメアが発動してないぞ」

「そうなのだ……何故か最近が発動しないのだ」

「うむ……」

「ああ。情けない、これだけの攻撃で負けるとは情けない。だから弱いポケモンは嫌いなのですよ……おい、起きろよ」

それによりキリキザンは恐怖を浮かべながら目覚める。こういうスタイルのトレーナーか。相手にするのは少し厄介だな。

「そもそもキリキザンは野生で捕まえたポケモン。私の本来のポケモンを使えば……」

「もう終わりよ」

ナナが静かに口を開いた。ナナの手元にはキリキザンのモンスターボール。そして後ろにはムシヤーナがいる。ナナはキリキザンのボールを地面に置くと遠慮することなく足で踏みつけてボールを破壊した。

「あああああああ！　お前！　ふっぎけんなよ！　ぜってえにゆるさねえ！」

「モンスターボールにポケモンを閉じ込めたままなんて可哀想って言ったのは貴方。だから私はボールを壊して開放してあげただけじゃない……」

「てめえ！　ぶっ殺して……」

その時だった。ドクソノがドサツと倒れ込んだ。少し服がめくれが見えた腹に小さな拳痕が一つある。それと同時にナナの顔色が一気に変わる。僕も肌で分かる。明らかに別格のヤバいやつがいる。それこそ下手したらゴウー団の幹部格クラスだ。それにキリキザンを攻撃したポケモンすらわからなかった。そんな時だった。ドクソノが何者かの回し蹴りで意識を刈り取られた。

そこには仮面をつけた少女がいた。その少女はヤバイと本能が訴えかけてくる。間違いなく逃げた方がいい。何故か僕の体は本能的に身震いを始めていた。

「ドクソノ。ある目的でプラズマ団に入った変態。その目的はポケモンの開放を免罪符に人から奪うことに興奮する特殊性癖者。そんな

信念の欠片も無い人間がナナに勝てるわけないじゃん。ていうかドクソノと関係ない別人だし。もつとも彼はドクソノについて知ってるみたいだけど……」

その声に僕は戦慄した。よく聞いた声。なんで彼女がここにいる。僕の脳内も混乱していた。ナナも彼女の正体に気付いたのか動揺を見せる。

「こんばんは。元ゴウー団のボスの側近を務めているメアだよ。久しぶりだね！ ナナ！」

「……メア。これはどういうこと？」

「悪と男のポケモンの御伽噺。物語は常にハッピーエンドであるべきかな」

「答えて！ それにドクソノじゃないってどういうこと！」

「それなら分かりやすく言うね。この男はドクソノじゃない。ただのチンピラ。時期と手口が一致したから勘違いしたのかな。というより意図的に似せていた？」

「ていうかメアがどうしてラルムの側近をしているのよ！」

「私はラルムの味方になると決めたんだよ。イメージとしてはゴオー団の幹部的なポジションになるのかな。まあゴウー団自体が楽しんで強くなるうとするやつらの集まりだから私もゴオー団は嫌いだけだね」

それと同時に後ろからパンチが飛んでくる。僕はそれを反射的に反応して避ける。しかし腹に激しい痛みが走った。まさか同タイミングでも攻撃だと！ しかし姿は見えない……まこれは透明化か！

「メロエッタ。そのままインファイトだよ！」

「メロ♪(ごめんね♪)」

メロエッタの連続的な攻撃が僕を襲う。明らかに前よりも重い。レベルが段違いで上がっている。そして連撃が終わる頃には体中が痛む。なんて重い攻撃……

「メロメロ！（今回は私の勝ちー！）」

「メア。これはなんの冗談？」

「ポケモンバトルだよ、話し合うよりそっちの方が分かるでしょ？」

そしてメアは笑顔でナナにポケモンバトルを申し込んだ。

71話 再開

否応なしに始まったポケモンバトル。今回はナナも真面目に指示を飛ばす。恐らくナナは最大限にメアを警戒してるから……

そして実際にメアとナナの実力は互角。いや、メアの方が上だと言っても過言ではない。

「メロエツター！ いにしえのうた！ そしてマジカルシャイン！」

華麗な歌声に意識が奪われそうになる。それに僕は舌を噛んで痛みで紛らわす。そしてメロエツターはバレリーナの姿から緑色の髪が特徴的な歌姫の姿になる。また僕が気付いた時にメロエツターは上空にいて強力な眩い光こちらに放つ。それは身を焦がすように熱い。そんな中でナナの声が聞こえる。

「ダークライ！ あくのはどうでメロエツターを吹き飛ばしなさい！」

「メロエツター。避けるよ！」

メロエツターに僕の攻撃を当てるが、メロエツターはそれに耐える。それと同時にメロエツターも歌って蓋びバレリーナの姿に変身する。その姿を見てナナは僕を瞬時にボールに戻す。これは良い判断だ。メロエツターとあまりに僕の相性が悪すぎる。そしてナナはツタージャを出した。それと同時にメロエツターはツタージャが現れると同時にインファイトを叩き込む。それによりツタージャは少なくなないダメージを受けている。だけど辛うじて耐えているようだ。そんなツタージャにナナは指示を出す。

「ツタージャ！ リーフストーム」

「タジャ（ふんっ）」

「……え？」

しかしナナの指示をツタージャは無視する。そしてツタージャはつるのムチでメロエツターを襲う。メロエツターはそれを簡単に回避する。ナナは呆気にとられるように呆然と立ち尽くした。

「ツタージャ！ なにをしているの！」

「メロエツター。ほのおのパンチ」

「タ……ジャ？（え？）」

それによりツタージャは一撃で戦闘不能に追い込まれた。ツタージャは明らかに反応が出来ておらず炎を纏ったメロエツタの拳が腹に練り込んだ。遠距離も近距離も可能で様々なタイプの技を使う。あまりに厄介すぎる……そんな時だった。メアがメロエツタをボールに戻した。そしてナナに告げる。

「ナナ！ 久しぶりのポケモンバトル。楽しいね！」

「私は全然楽しくないわよ！ なにがなんなのか分からないわよ！ というかまだバトルは終わってない！」

メアはメロエツタをボールに戻して完全に帰る気にいる。まだナナの手持ちも残っている。バトルをやめる理由はないはずだ。

「楽しみは最後にとっておくもの。ここで最後までやったら本気でナナと勝負する時にテンションが下がるもん！ それじゃあ今度はストロベリータウンで会おうね！ そしてまたバトルしようね！」

「待って！」

その時だった。メアは一回転して振り向くとナナの体を抱くように優しく掴んで顔を近づける。それこそまるで彼氏に会った女の子のような感じで……

「これだけは忘れないで。私はナナのことが世界で一番大好きで愛してる。だから私はナナを傷つける人は絶対に許さない。もうナナは自分だけの旅をしてもいいんだよ？」

「メア……！」

そしてメアは驚きの行動に出た。メアは更に顔を近づけて、軽くナナの唇に自分の唇を重ねたのだ。

「さよなら。ナナ」

「さよならじゃないわよ！ 絶対に私は強くなってストロベリータウンに行く！ その時は覚悟しなさい！」

メアはナナに微笑んで指を鳴らすとその場から消えていった。恐らくなんかしらのポケモンの技だろう。ナナはメアに手を伸ばそうとするが届かない。そしてメアに手が届かないことに気付くと同時にナナが力強く岩壁を殴って手から出血する。ナナの目には怒りが満ちていた。

「ほんと……ふざけるんじゃないわよ！」

メア。彼女は どうしてここに現れて、あのような行為をしたのか。そしてゴオー団の幹部を名乗るのか。メアは拉致されてどうなったのか。あまりに謎が多すぎる。それに最後の言葉は……

「一人で抱え込んで、勝手に手の届かないところに行つて……言いたいことがあるなら私の傍で言いなさいよ！」

そうじゃないな。今のナナには強さが足りない。だからメアはナナから離れた。メアは恐らくナナが嫌いではない。その逆で大すぎなのだろう。恐らくメアはナナのためにあのような行動に出た。理由は分からないが、それは間違いないだろう。

例えばメアがラルムに『ナナを襲う。それが嫌なら俺に従え』に近いことを言われてしまったらメアは従うしかないのだろう。もつともラルムにはナナを襲う動機もないし、それはありえないだろうが。ただメアの歌に惚れて、メアを自分の元から離さないために不安を煽るようなことを言った可能性は高いだろう。そしてナナもそれは分かってはいるはずだ。

「メアの前でラルムを倒す、それで私は守ってもらうほど弱くないつてメアに教えてやるんだから……」

しかしナナの今の実力では厳しいな。やはり強くならなければならぬ。そうなるとう当分はジム巡りか。今は4つ。まだ折り返し地点だ。強くなるとしたらこれから……

「ねえダークライ……私は思ったの。ここまで来たんだし折角だから先生に相談してみない？」

ナナがボール越しに話しかける。先生。つまり博士のことだな。ナナをここまで育てた博士。ここはたしかに博士の研究所にも近い。もしかしたら強くなる方法の道標になるかもしれない。僕はナナに軽く頷く。それからナナはマリアさんに電話してハクガ山で起きたことと自分の考えを明確に言葉にして伝え、しばらく戻らないことを連絡して、今までのお礼を告げた。そしてハクガ山を抜けてエラニの森を超えて博士の元を目指す。

ナナと初めて会ったエラニの森はとてもなつかしい気持ちになる。

たま出てくる野生ポケモンも今では簡単に勝てる。自分の成長がハッキリを分かった。

そして遂に全ての冒険が始まった博士の研究所に着く。ナナは軽く深呼吸した後に呼び鈴を鳴らす。すると驚きの男が出てきた。

「どちらさま……ってナナ！」

「ノエル！ どうしてここに！」

なんとノエルがいたのだ。彼はシノタウンでキンランさんとジム戦をしていたはずではなかったのか。まさかキンランさんに勝つて……

「きつと二人共同じことを考えてますよ。ナナさん。あなたも私にポケモンバトルについて教わりにきたのでしょうか？」

博士が喋る。そこで博士は黒上のポニーテールの二十代の女性だと改めて知る。あの時も会ってはいるが、ドタバタしていて気付かなかった。もつと言うなら性別すら気付かなかった。しかし若いな……

「同じ？ ノエルもそうなの？」

「ああ。俺はキンランさんに手も足も出なかった。だけど、俺にはなんで勝てないか分からない。だからそれを先生……アルセ博士なら見つけてくれるんじゃないかと」

「私も。あれからポケモンバトルをして勝てない相手が出てきた。今の私は弱い。だから強くなりたい。そのためにはなにをしたら……そう思ったらアルセ博士の顔が浮かんだの」

「同じだな」

そしてアルセ博士は軽く微笑むとナナを研究所に招き入れた。そこには様々な雑誌やレポートに論文があった。アルセ博士は適当に一つの論文を取るとナナに渡した。

「メガシンカの考察論文よ。メガシンカをすれば大きく強くなる。まづナナはメガシンカについて知るべき」

「メガシンカ……」

「あなたは優秀な生徒です。分かっているのでしょうか。メガシンカの有用性について」

「ですが！」

その時だった。ナナの頬から軽く血が出た。そしてバスンとはいう音と共に壁に穴が空く。そこには白いチョークが突き刺さっていた……

「話は論文を読んでからです」

「はい……」

ナナも気にすることなく論文を読み始める。まるでチョークで頬が擦れるのはいつものことだと言いたげに……

「続いてノエル。課題として出した、でんきタイプのポケモンの出力電力に関するレポートと計測実験は終わりましたか？」

「はいー」

博士はノエルが手渡した数枚の紙を流し見するように読んでいく。博士はそれを一通り読み終わるとノエルに向けてチョークを投げた。ノエルはそれを首を傾けて避ける。

「なんですかこれ？ 誰がこんな常識を書けと？」

「しかしー」

「考察が甘い。どうしてでんきタイプのポケモンだけ他のポケモンに比べて出力電力が高いか書かれていない。それに他にも説明不足の部分が多く考えただけで八つ思い浮かびますが、それは自分で考えなさい。やり直し」

これは厳しいな。なんとなくノエルやナナが周りよりも滅茶苦茶強いのが分かった気がする。こんな過酷な教育を受けていたら、そりゃ周りから頭一つ飛びぬけて強くなるわ……

「さて、それとナナ。ダークライをお借りしても？」

「博士。私のダークライをどうするのですか？」

「色々調べたいの。ダークライというのは捕獲されたという話は聞いたことがないくらい珍しいポケモンよ。博士としては色々調べたいのよ」

「……ダークライにポケモンの技を当てて耐久実験とか変なことせず、ダークライの同意を得たうえでならどうぞ」

「ありがとね」

そしてナナは僕のボールを博士に手渡した。恐らく博士を信用してるからだろう。僕としては少し不安だが、まあ仕方ない。しかし色々調べたいというのが……僕はなにをされるのだろうか。博士は僕のボールを持ってご機嫌で地下へと向かう。

「さて、ダークライ。お願いします」

「ウム……」

博士にボールから出される。近くには眠そうにしてる黒くて目付きの悪いニャースと様々な測定機器がある。

「ニャル様。出番ですよ」

「はいはい」

待て。このニャル様と呼ばれたニャース。人の言葉を喋ったぞ。そんな人の言葉を喋るポケモンなんかいるのかよ……

「どうもーアルセ博士とのポケモンの翻訳係として飼われているニャースのニャル様です。黒い体はアローラの生まれだからです」

「それじゃあダークライ。よろしくお願いしますね」

72話 博士の元で

「ありがと……にゃん」

あれから二週間近くが経とうとしていた。僕は様々な検査を受けた。体毛や血液を採られたり、レントゲン検査をされたりと色々だ。そしてナナはメガシンカの論文を読むと同時に博士から仕事を任せられていた。

……猫耳メイド喫茶のメイドというところでもないやつだ。ナナは頬を赤く染めながらフリフリのメイド服を着て、語尾に『にゃん』を付けて日中は接客に励む。もちろんただのメイド喫茶というわけではないが。

「さすがアルセ博士からの派遣メイド。これで百連勝」

通称メイドバトル喫茶。本来のメイド喫茶に加えてバトルもする必要がある。そこでナナはスピアールとムシャーナだけを使って圧倒的な力を示していた。

「しかし素顔も可愛いから、こんな男装メイクしないで普通に働けばいいのに」

「絶対に嫌です。もっと言うなら声も男性に変えたいくらいです」

ナナは青色に近い黒髪の長いカツラに黒目のコンタクトレンズを使用して男装女子メイドとして働いていた。もちろん本名は使われない。『タクト』という偽名を使つての接客だ。ちなみに偽名は適当にダイスを振つて決めているところを目撃済み。

「まあ悪夢姫ナナ。世間で話題騒然の美少女最強ポケモントレーナーがメイド喫茶でバイトしてましたーなんて分かったら大変なことになるものね」

「まったく……どうして私がこんな格好を……ていうか身バレは絶対に避けたいのでタクトと呼んでください」

「はいはい」

まあそんな感じで店長と会話しながら職務に励むナナ。これに一体なんの意味があるのだろうか。ちなみに僕は現在ナナのボールの中にいる。アルセ博士に束縛されていないのはどうも彼女が僕に関

する興味深いデータが出たからということらしい。なんでも特性がナイトメアから『きずなへんげ』というもの変わっているとか。

「しかしナ……じゃなくてタクト。本当に身バレを防ぎたいなら口調に戦い方や戦術も変えるべきよ。私が若いころなんかゲンガーを使つて高速催眠とか流行っていたし、そういうのはどうかい？」

「高速催眠……」

「おっと。次の客だよ。蹴散らしてやりな」

「はい」

そして再びポケモンバトルが始まってナナが更に連勝記録を伸ばすことになった。夕方になる頃にはナナもメイクを落としてカツラを取つて、いつもの黒いロリイタ服を着て博士の研究所へと帰る。やっぱりそちのナナの方が僕は可愛くて好きだな。もつともノーメイクでメイド服を着るなら話は変わるが……

「博士。戻りました」

「はい。報告をどうぞ」

「今日のメイド喫茶で倒したトレーナーは約四十八人。そのうち炎タイプを使ったのが……」

ナナがいつものように定期報告をする。倒したポケモンのタイプ。そのトレーナーの特徴。ポケモンバトルをしてなにを思ったのか。全て話していく。大変面倒な作業だがナナは愚痴の一つも言わずに行う。博士はそれを作業しながら聞く。これに意味はあるのだろうか……

「メイド喫茶で働き始めて一週間。そろそろ気付く頃じゃないか？」

「ええ。気付いてますよ。私の戦術にはレパートリーがない」

「うむ……続けたまえ」

「羞恥心から私は自分がナナだと隠そうとした。だけどバトルでも私の癖が出てしまう……それを分からせたかつたんですよね？」

「正解だ。羞恥心があれば自分を隠そうとする。そうすれば隠すためには自分のどこを偽るか考えることになる。つまり自分という存在について嫌でも考えることになる」

「それでまだ続けるのですか？」

「結構だ。私から店長に連絡しておく。そして今日ナナに読んでもらう論文はこれだ」

「はい。ありがとうございます」

ナナがいつものように分厚い論文を受け取る。なんでもメガボーマンダに対する考察論文らしいが……

「それとダーククライについて一つナナに報告だ」

「なんですか?」

「そのダーククライ。ナイトメアは完全に消滅して特性が『きずなへんげ』に変わっていたぞ」

「……きずなへんげ?」

博士が椅子をクルリと回転させてナナの方を見る。そして真面目に説明を始めた。

「きずなへんげ。その特性のあるポケモンは絆の力で姿を変えると云われている」

「まさか……」

「察しが良くてなにより。恐らくダーククライとナナの間に強い絆があるから起こったのだろう。そして絆の力での変化を私達はキズナ現象と呼ぶ」

「それがダーククライに?」

「恐らくそうだろう。しかし絆の力で周りに悪夢を見せる特性を克服か。少しイッシュ地方で起きたストレンジャーハウス事件の話しよう」

「お願いします」

「もつとも真相は不明で考察の域を出ないが、この事件はダーククライが少女を殺したとされている」

「なんですか! それ!」

ナナが驚きの声をあげる。僕もその話は初めて聞いた。ダーククライが人を殺した?

物騒な話だが、どうしてそんなことが……

「ダーククライの特性ナイトメア。それは悪夢を見せる。そして悪夢を見続ければ体力は消耗して衰弱死する」

「そう……ですね」

「そして少女の近くには様々な物的証拠や周りの証言からダークライがいたのではないかと言われている」

「ダークライの特性で人を殺した？」

「そうだ。しかしこの事件に関してはダークライに悪気はなく、少女を好きで一緒にいたかっただけではないかとされている。これは殺人じゃなくて悲劇なんだよ」

「それがどう繋がるのですか？」

「人との絆を得ることで悪夢を見せなくする。それはダークライがトレーナーを苦しめたくないという想いから起こった奇跡のようなものかもしれない。ただ一つ言えるのはダークライはナナとの絆で自分の呪いから逃れられたんだ。それを私は素敵なことだと思うよ」

なるほど。博士の言いたいことは分かった。簡単に言うなら『トレーナーとの絆で不幸を回避するなんてめっちゃくちやエモい』ということ。それを言いたいためだけにストレンジジャーハウスの話を出したのか。

「絆があればどんな試練でも乗り越えていける。ナナにはそれを忘れないでいてほしいな。この世界で一番強いのは伝説のポケモンでもZワザでもなければ、レベルの高いポケモンでもない。メガシンカだ。メガガルーラ、メガリザードンにメガボーマンダ。そしてヌケニンと組み合わせたメガヤミラミ。どれも伝説ポケモンあるいはそれ以上の強さを誇った」

「結局それですか……」

「だけどメガシンカが強いのはトレーナーとの絆があるからだ。この世界で絆に勝る力なんていうものは存在しない。だからメガシンカは強いのだと私は思うよ。もつとも確かな知識を持たずに行うメガシンカなんて愚の骨頂だ。だからこそナナには二週間でメガシンカについて学んでもらったわけだ」

「……メガシンカを使う覚悟も出来てます。だけどやり方が分からない」

「やり方？」

「どのくらいの時間、メガシンカをさせてもいいのか。もしもメガシンカで暴走した時にポケモンをなだめる方法……そういうのが分からないんです。論文にはその辺りも書いてありました。だけど、それ通りに動いて問題ないでしようのか？」

「それはトレーナー判断だ。論文なんて所詮は理論。個体差も当然ながらある。だからナナの課題はポケモンと対話して、そのポケモンについて知るしかない」

「なるほど……」

「とりあえず今日のところは論文を読み終えたら寝なさい。明日にこれからの方針とキズナ現象についてまとめておくから」

そうしてナナは軽く論文に目を通すとシャワーを浴びて寝間着に着替えて部屋へと戻っていく。部屋に戻るとそこにはノエルがいる。ノエルとナナは同じ部屋だ。異性と同じ屋根の下で寝るのはどうかと思うが、空き部屋がないのだから仕方ないとのこと。

「ナナ。お疲れ」

「ええ」

「それと今夜は月が綺麗だよ」

ノエルは窓の方を見て、ナナに話しかける。ナナは軽く月に目をやる。それはノエルの言った通り綺麗な満月。ナナは窓に近づいて、月へと手を伸ばす。

「……月にはどんなポケモンがいるのかしら」

「きつと俺達が知らないポケモンがいっぱいいるんだろうな」

「いつか行けるかな……」

「行けるさ。夢は諦めなければ必ず叶うから……本気で願えばどこにだって行ける。何者にもなれる」

そしてノエルがナナの顎を掴む。ナナも無言でそれを受け入れる。何故か良い雰囲気になってるな。ここで口出しをするのは野暮か。

「俺は必ずチャンピオンになって、お前の兄にも負けないナナに相応しい男になる」

「無理ね。チャンピオンになるのは私よ」

「……ナナ。ポケモンリーグでの決勝でどっちが強いトレーナーなのかバトルしようぜ。俺はお前との約束を忘れてないからな」

『私とノエルの初めてのポケモンバトルはリーグの決勝戦』でしょ？私も忘れてないわよ」

そういえばノエルと一度もポケモンバトルをしたことはないな。それは意図的なものだったのか。しかしポケモンリーグの決勝なんて出るだけでも大変だ。それなのに二人は微塵も自分が出ること疑ってない。それどころか相手が決勝まで来ると思ってる。

「それでナナ。ポケモンリーグで俺が勝ったら……」

「続きは決勝戦で聞いわ。そっちの方がロマンチックでしょ？ それに私もノエルの言葉を聞くために頑張ろうって気力が涌くもの」

「……負けるんじゃないぞ」

「そっちこそ。早くキンランさんを倒してジムバッジを8つ集めなさいよ」

ナナがベッドに体を投げる。ノエルもそれに合わせて電気を消す。それでも窓からは月の光が入ってきて優しく照らす。

「俺はナナを最高のライバルだと思ってる。成績は最下位だけど優れた観察眼で一番最初に発見するのはナナだった。俺は心の底から強いと思ってる」

「私も同じよ。ノエルは成績一位で誰よりも強かった。だから私は勝ちたいと思うの」

「そうだな……ナナが問題点に気付いて、俺が解決案を言って、メアが最終調整をしてボルノが実行に移して課題をクリアしていく。あの日々は楽しかった」

「でも今はもっと楽しいわよ。初めて見る景色にポケモンと一緒に困難を乗り越える。それは、あの日々と同じくらい楽しいものだわ。もちろん旅をすれば辛いこともある。それを差し引いても私は楽しいと思うわ。ねえ……私達はどんな大人になるのかしら？」

「分からない……だけど素敵な大人になれると思う」

「おやすみ。ノエル」

「おやすみ。ナナ」

そうして二人は眠りにつく。意外とノエルとナナの関係を親密なんだな。まるで恋人のようだ。そういえばナナに好きな人とかいるのだろうか。少なくともナナの口から恋愛に関する話は聞いたことがない。もしかしてナナの好きな人って……いや、確認もないことを話すのはやめておこう。ただこんな日々がいつまでも続くといいな……

いや、もう日々は壊れてるか。今は偽りの平穏だ。ここにメアがない。それなのにどうして平穏など言えるのだろうか。メアは今の現状を守るために自分を犠牲にした。だけど、それは間違ってる。何故ならメアがいないと本当の意味での平穏は訪れないから。

きつとナナもメアが戻ってくことを望んでいる。その望みを叶えるためには僕がもっと強くならなければ。今のままじゃダメなんだ。ナナに願いを叶えることも現状維持も出来ない。どんなポケモンが相手だろうがナナと一緒に負けなくらいに。僕はダークライだ。それが出来るくらいの素質はあるはずだ……

朝日が顔を出して二人は目覚める。ナナは歯を磨いて顔を洗ってお気に入りのロリイタ服を着て博士の元に行く。ノエルも同じように身支度を整えていく。リビングに行くと既に博士は起きていて準備が出来ていた。

「さて二人共揃いましたね。あなた達は強くなりたいんですよね？」

「はい」

ナナとノエルが同時に返事をする。博士を特に表情を変えることなく話を進めていく。

「あなた達はエラニ森の少し奥にある屋敷に行つてある人物に会つてもらおうと思います」

「ある人物ですか？」

「名前はアリス。ゴーストタイプの使い手にして現在の四天王。そして私の教え子の一人です」

73話 別次元の生物

ナナ達はエラニ森を歩いてきた。なんでもその奥にアリスがいるという話だ。しかし四天王。そのトレーナーというものはどれほど強いのだろうか……

「なあダークライ」

「ムシャーナ。なんだ？」

ボール越しにムシャーナが話しかける。そろそろ本気で勝つならムシャーナの悪夢のストックも貯めたい。しかし僕からナイトメアは消失した。問題はどうかやってムシャーナの悪夢のストックを増やすか……

「俺達の旅も終わりが見えてきたな」

「終わり？」

「あとジムリーダーを三人。それにキンランを倒したらポケモンリーグだ」

「うむ……」

「ポケモンリーグは全部で四戦。それを終えたら四天王。そしてチャンピオンとのバトルだ」

恐らくナナの性格からしてラルムともバトルするだろうな。つまり大きなポケモンバトルは残り十四回。それを終えたらナナはチャンピオンになってるわけか。

「そしてポケモンリーグ開催まで残りは三ヶ月もない……」

「あ……」

「チャンピオンになって、それからどうするんだろうな……」

旅の終わりか。考えたこともなかった。だけどナナのやることは決まっている。恐らくナナはチャンピオンになっても旅を続けるだろう。ナナはチャンピオンになったら次はポケモンマスターを目指さずだ。そしてポケモンマスターへの旅はチャンピオンになる旅よりも長い。それでポケモンマスターになったら？

恐らく更に上を目指すだろう。僕たちの旅が終わることはない。ナナとの旅はまだ続く。

「ダークライ。俺は思うことがあるんだ」

「なんだ？」

「俺はナナに救われた。ナナのおかげで俺はやつと生まれてきて良かったと思える。散々な人生でナナが光になってくれた。だからナナの悲しむ顔は二度と見たくない」

「僕も同じだ」

「だから負けちゃいけないんだ。俺はナナを悲しませないためにどんなポケモンが相手だろうが勝ちたい……」

言うことは一つだ。今のムシャーンナにかける言葉は一つ。

「これから二度とナナを負けさせない」

「その言葉が聞きたかったぜ。ダークライ。俺達はナナからいっぱい貰った。」

そろそろ俺達が返す番だよな」

だけど気持ちだけで勝てるほど甘くない。それは痛いくらい分かってる。これからナナを負けさせないために僕達も勉強しなければならぬ。ナナに頼ってばかりじゃダメなんだ。今まではナナならどうにかしてくれると思っていた。でも、それじゃあダメだ。僕達でどうにかするんだ。キンランさんも言っていたように自分で考えて動く。それをもつと確かなものへと昇華するんだ……

「くだらない。ナナはトレーナーとして最悪よ。たった一度の敗北で泣きわめく。そんなトレーナーになんか出来るの？」

会話にツタージャも入り、厳しい言葉を投げる。ツタージャの言うことも間違っていない。だから否定してはいけぬ。自分力だけで……」

「私はある小娘の指示は聞かない。自分の力だけで……」

「それでメアのメロエツタに手も足も出なかったのはどこのどいつじゃ？」

「うるさいわね！ 相手が悪かったのよ！ そもそも見えない相手と戦うなんて……」

毒を吐くようにドラミドロが話に入ってくる。まさかナナのフオーをやるなんて意外だな。

「たしかにナナが未熟なのは事実。だけどそれは心意気の話。あの娘

の指示は的確で文句の言いようはない」

「あの程度の指示を出せるトレーナーなんて……」

「そうはいない。ナナの才能はトレーナーの中でも大きく飛びぬけたものだ。少なくとも妾はそう思う」

「……私は認めないんだから」

「人間性にトレーナーとしての器などは認めておらぬ。しかしバトルの腕だけは妾でも認めるしかないくらい確かだ。それに妾達はナナのポケモン。それなら指示に従うのが道理。文句があるならボールを破壊して逃げればいい」

「……分かったわよ。でも次にナナがポケモンバトルで負けたら私は絶対に信じない」

そんな時だった。ザアアアアと急に土砂降りの大雨が降る。ゲリラ豪雨というやつだろうだろう。ナナ達は走って雨宿りできる場所を探す。とりあえずツタージャの問題も少しは解決してくれただろう。ナナ達が走ってる間に僕は話に入ってこない一匹のポケモンに話しかける。彼は一体どう思ってるのだろうか……

「スピーアー……お前はナナについてどうなんだ？」

「拙者はナナに従う。ナナが倒せと言われたら倒す。それだけだ。ただ拙者も実力が足りないとは思いつつ始めた」

「うむ……」

「だから拙者は『視覚に頼らず敵の位置を見つける』ことを出来るようにすべきだと思った。メロエツタやラティアスといった透明化する相手とも戦えるように……そして拙者はなりたい。ナナが拙者を出せばどんなポケモンだろうが絶対に倒してくれると思ってくれらるくらい強いポケモンに……」

今回の四天王。恐らくナナよりも僕達の方が得る物が多そうだな。四天王の使うポケモンはどんなポケモンなのだろうか。どうして強いのか。それを知りたい。四天王クラスなら強いのがトレーナーだけなんてことはありえない。恐らくポケモンもそれ相応に強いはずだ。

「ノエル！ あそこの洋館で雨宿りしましょう！」

「エラニ森に洋館なんかあったか？　そういうときの洋館はゴーストタイプの罾だつて聞いたことがあるぞ！」

「でも、この大雨の中にいるのも危険よ！　それにポケモンもいるし大丈夫よ！」

「そうだな！」

「失礼します！」

そうしてナナ達は謎の洋館に入っていく。明らかにヤバい場所に飛び込んだな。ただナナ達もそれを理解した上で入ってくれたのが救いか。

「ふう……キャツ！」

洋館に入ると同時にシャンデリアが落ちてくる。それにナナが可愛らしく叫ぶ。ノエルは呆れ気味にシャンデラを出して辺りを照らす……

「これは明らかにゴーストタイプのポケモンの巣だろ……」

「そうね。まあいきなりで驚いたけど問題はないわ」

「ちなみにドアは開かない。これは……」

「そういう時はポケモンの特定をしましょうか」

「ゴース……ヒトモシ……カゲボウズにヨマワル……」

「最悪な場合はヨノワールにゲンガー、そしてミミツキユ……」

「ミミツキユだけは勘弁してくれよ」

「ミミツキユ。あの可愛いポケモンってそんなヤバいのか？」

「とりあえず出てきなさい。ダークライ」

「ウム……」

「とりあえず周辺の警戒をお願い。もしもポケモンが見えたら迷わずダークホールで眠らせない。特性で眠らない場合はこっちで考えるわ」

「ちなみにロトムだったら場合によっては俺はゲットする」

「それなら後で電化製品をたくさん買わないとね」

なんて呑気な会話。この状況ならもう少し怯えても良いと思うんですが……

「ダークライ。怖いのは未知だからよ。知識さえあれば怖くもなんと

もない」

ナナが見透かしたように言う。まあたしかにそうだ。ナナ達はこれから起こる怪奇現象を全て説明できてしまう類の人間だもんな……

「ただオーベムがいたら最悪だな」

「オーベムがいたらS A N値チエックは免れないわね」

なんで平然とナナはS A N値とか言うのだろうか。ニヤースのニヤル様やムシャーナの悪夢の具現化とか明らかにクトウルフの要素なのだが。この世界にクトウルフ神話あるのか？ それともクトウルフ系の存在がポケモンとしていたりするのか？

「やっぱり警戒するのはゴーストタイプよりエスパータイプだよな。うん」

「どんなポケモンだろうが怖いものは怖いだよ。少しでも扱いを間違えれば簡単に人の命を奪うくらいの力はあるのだから」

「それはそうだが……」

「とりあえずカレーでも作ろうかしら。食堂はどこだと思う？ ノエル」

「右の扉だと思う。違ったら別の部屋に行こう」

危機感というものがまったくない。それから何度も皿が飛んできたり、女の子がすすり泣く声が聞こえるが、二人は振り向きもせずスルーする。そして適当に歩いて食堂を見つけるとナナは適当に鍋を出した。そしてマッチで火をつける。

「うん。良い感じだ」

「少し屋敷が燃えないか心配ね。もしもなにかあったらポケモンで消化しましょう。とりあえず具材はヤシのミルクでモモンのみを5つ……」

「俺はオボンのみを5つ出せるぞ」

「ありがとう。それを混ぜましょう」

そして鼻歌交じりに二人は料理していく。最初に食材を切って、それからルーを入れてベースを作り、そこに先程の『ヤシのミルク』とスキのみを入れていく。

「それから適当に仰ぎます」

「よしー」

いや、良しじゃねえよ。絶対に屋敷が焼けるぞ。損害賠償とかなったらどうするんだよ。まあナナは某女社長からブラツクカードを貰っていたが……

「そしてまた混ぜる」

「こうか？」

「少し早いわね……まあいいわ。最後に真心を込めて『あまくちココナツツカレー』の完成ね！」

お、美味しそうなカレーが出来た。ナナが上手く皿に盛りつけて周りに振る舞う。そして気が付くとゴースやヨマワルにヒトモシといったポケモンが姿を見せる。ナナもそれらに気にすることなくカレーを振る舞っていく。

「かなり甘口だがミルク由来だからしつこくないな」

「そうね。次は『やさしいパツク』にクラブのみでも入れて辛口にしようかしら……」

そんな時だった。体に寒気が走った。それと同時に明らかに異質な空気が辺りに充満する。これは間違いなく別格のポケモンが近くにいるな。それこそラティ兄妹やカプ・コケコに匹敵するなにか。

「ダークライ。どうしたの？」

「イヤ……」

もっと言うなら神に等しいなにかだな。なるべくここから早く出た方がいい。どうも嫌な予感がする。ここは明らかに普通ではない。僕はそれをナナに目で訴える。

「ダークライもカレー食べたいの？」

違う！ そうではない！ なんてこういう時に限って伝わら……

「冗談よ。ここにヤバイポケモンがいるって話でしょ。私もノエルも気付いてるわよ。この感じは間違いなく伝説のポケモンね」

気付いていたのか……それでこの対応か。どれだけナナは肝が据わってるのだろうか。それとも明るく振る舞ってるのは怖さを誤魔化すためか……

その時だった。ナナ達の足元に大きな影が現れた。さすがにナナもそれには即座に反応して戦闘態勢をとる。

「ノエル！ きたわよ！」

「こりや想像以上！ 明らかに別格だ！ 勝つとかそういう次元じゃない！ ポケモンに収まる力じゃない！ 逃げるぞ！」

「そうね！」

ナナとノエルはすぐに走る。それと同時に影に包まれた強大なナニカが出てくる。ノエルの言った通り、格が違う。それが肌で分かる。間違いなく勝てる相手ではない。

「ダークライ！ あくのはどうで時間を稼いで！」

僕はナナに言われた通りにあくのはどうを撃つ。しかし陰には当たることなく貫通して壁を破壊する。技が一切聞いていないだと。それにあのビジュアル……まさか！

いや、そんなはずはない！

——こんなところに『ギラティナ』なんて規格外がいるはずがない！

恐らくギラティナに似たなにか。別のポケモンだろう。そうであつてくれ……

「……すり抜けた？」

「これは明らかに常識を逸脱している！ 戦おうとすることが間違いだ！」

もしもギラティナだとしたらノエルの言う通りかもしれない。僕達でどうこう出来る相手ではない。しかし逃げられるとも思えない……

そもそもギラティナの狙いはなんだ？

まずギラティナというポケモンは複数体いるようなものなのか。恐らく否だ。そもそも見つからない可能性すらある。だから博識のナナ達もギラティナというポケモンだと分からない。しかし何故デトワール地方に存在している？

本来ならシンオウ地方にいるポケモンだろう……つまりこいつは
ギラティナを装った別の生き物。それとも幻惑の類のもので実在は
していない？

「これは本物よ！ 幻惑でもなんでもない！ 実態もないし名前も分
からないんだけど、こいつは生き物として確かに存在している！」

ナナが叫ぶと同時に走る。そして食堂を後にしようとする。ノエ
ルもそれに続いていく。逃げられないとしても逃げるしかない。し
かし影のポケモンの方が速い。影となって瞬く間に移動してナナ達
の前に立ちふさがる。

「グソクムシャ！ であいがしら！」

「グソクツ（まかせろ）」

そしてノエルがグソクムシャを出して一撃を叩き込もうとする。
しかし影のポケモンの体に当たることはない。その技はすり抜けて
影には一切ダメージを与えられない。そして影はそのままナナ達を
飲み込んだ。それと同時に僕達は意識を奪われた……

それから数時間後。目を覚ますと群青色の空が広がっている。そ
して不気味なピンク色をした地面。それが物理法則を無視してあち
こちに散らばっている。近くにはナナ達が気を失っていて倒れてい
る。そして真上を赤と黒の腹をした大きな龍のような姿をしたポケ
モンが通りすぎていく。その龍の顔は金色の甲冑を被ったようで、体
には影で出来た細い腕が六本ある。あれは間違いなくギラティナだ
な……

どうやら僕達は本物のギラティナと遭遇してしまったらしい。

74話 ギラティナというポケモン

ナナ達が目を覚ます。最初は死後の世界なのかと動揺していたが、今では現実だと受け入れて、ここから脱出する術を考えていた。二人は空中に浮かぶ足場を移動しながら出口というものを探していた。

「重力の方向も違う……上ってるはずが下ってる滝……そしてポケモンが一切いない」

「恐らく異世界……そして影に飲み込まれてきたという経緯とその他の観点から考察するに世界の裏側である可能性が高い」

「また例の影は表世界とこちらの世界を行き来できる生命体。つまり例の生物を見つけて説得するのが戻る道……」

ナナとノエルは怖いくらい冷静で状況証拠のみでここを『やぶれたせかい』だと言い当てていた。それもギラティナの存在を知らず。やはりナナ達は只者ではないとすぐに分かる。

「ウルトラホールの世界とも考えたが、それならウルトラビーストと呼ばれるポケモンが多く存在している。さすがに一体で、こちらの世界と行き来出来る存在というのは不自然だわ」

「ナナ。もしかしたら、あの生物は新手のウルトラビーストじゃないか?」

「そうね……技が効かないのも思い返せば『ゴーストタイプ特有のすり抜ける体質』を使っていた可能性がある。あの質量なら数回使った程度じゃ空腹にはならないはずよ」

「つまりタイプはゴースト……そして龍に近い見た目と威圧感。恐らくドラゴンタイプも持つてるだろうな」

「戦うならまずは相手を空腹状態まで追い込んですり抜けを不可能にする。そのタイミングで私のダークライでズワザ……」

「そして問題はどうかやって空腹状態まで追い込むか……」

二人は神にも等しい圧倒的な力を見せつけられても諦めずに倒す術を模索していた。そして模索して作戦は現実的なものになっていく。

「追い込んだとしても攻撃力が不安だわ」

「それなら俺のレジアイスにあやしいかぜを撃ってくれ」

「そうね……あやしいかぜで身体能力を上げた後のZワザなら、あの別次元のポケモンと言えど効く可能性は充分にある」

「あとはパチリスの『うそなき』で相手の気を緩めると同時に『てだすけ』でダークライの支援に徹する。そして奴の攻撃もパチリスの『このゆびとまれ』で引き付ける。彼には少し前仕事が多いが、仕方ない」

一通り話すとナナはその場でしゃがんで体を休める。それと同時にボールを投げてスピアーを出す。スピアーはナナの方をきよとんとしたように見る。

「スピアー。ちよつと辛い思いをさせることになるわ」

「ピアツ……ピアツ！（それがナナのためなら問題ねえ！）」

ナナはスピアーの首にネックレスをかける。そこにはスピアナイトが嵌め込まれている。いつの間にかこんなものを……

「あのポケモンと戦う。その時にあなたのメガシンカは必要不可欠。それにメガシンカしても恐らく勝てない。今回の相手はそれほどまでに別次元よ……だから負けたとしても自分を責めないで」

「ピアツ？（なら拙者の仕事は？）」

「スピアー。あなたに頼むはダークライが万全のコンディションになるまでの時間稼ぎ。今回は捨て駒のように扱うわ。本当にごめんなさい。でも、これ以外に勝つ術が思い浮かばないの」

「ピアツ（そういうことなら了解だ）」

ナナは口には出さないがスピアーを信用してるから困なんて指示を出せるのだろうか。そしてナナは鞆から漁って蜂蜜が入ってる瓶を出した。

「ノエル。そろそろ例のポケモンを呼び出すけど地形の把握は大丈夫？」

「問題ない」

まさか今までの移動は出口を探していたわけではない？

あのポケモンと戦うための地形の把握をしていただけだったのか。ナナはノエルの返事を聞くと蜂蜜の瓶を砕いた。それと同時に甘い匂いが辺りに広がる。まさか蜂蜜は『あまいみつ』か！ それでポ

ケモンをおびき寄せる気か！

蜜の匂いは瞬く間に広がり、下の方から巨体が現れる。間違いなくギラティナだ。

「お願い！ ツタージャ！」

「タジャ！（あれと戦うというの！）」

「いくぞっ！ シャンデラ！」

ナナ達は戦いに巻き込まれないように距離を取る。そしてギラティナは爪で辺りを引っ掻いた。それにより突風が巻き起こる。しかし二体とも瞬時に反応して一瞬で回避。

「ツタージャ！ メロメロ！」

ツタージャはギラティナを魅了する。しかしギラティナは無関心だ。だけどナナは動揺することはない。まるで情報を得るための手だな。

「あの感じだと性別は無しよ！」

「了解！ シャンデラ！ トリック！」

それと同時にギラティナが火傷する。ギラティナの体には火炎玉が持たされていた。それによって火傷を負ったのか！

「すり抜けの利用なら変化技は防げないよな？ それじゃあトリックルーム！」

「ツタージャはトリックルームを利用してつるのムチで叩きなさい！」

周囲が半透明の箱で覆われる。それでツタージャが一気に加速。ツタージャは速いポケモンだがギラティナに比べたら遅い。トリックルームをすればギラティナより早く動けるのだ。連続的にギラティナをつるのムチで叩く。しかし技は先程と同じように体をすり抜ける。

「シャンデラはシャドーボールで援護！」

「攻撃が来るわ！ 戻りなさい！ ツタージャ！」

ナナがツタージャをボールに戻す。それと同時にギラティナの影で出来た腕が無造作に暴れ回り、辺り一面を破壊する。それにシャンデラは巻き込まれて戦闘不能。トリックルームも破壊される。もし

もナナがツター ज्याを戻すのが一瞬でも遅れていたら……

「頼むわよ！ ドラミドロ！ ムシャーナ！」

「お前に任せるぞ！ ガブリアス！」

ノエルが出したポケモンはガブリアスだ。いつの間にそんなポケモンを持っていたのか。そしてガブリアスはボールから出ると同時にマツハで動いてギラティナの頬を叩いた。それによりギラティナに初めて攻撃が当たり、少し吹き飛ばされる。

「よくやった！」

「ガブツ（俺様だぜ？ そのくらい容易い）」

なんて速さだ。完全にギラティナが反応出来ていなかった。そして同時にドラミドロとガブリアスの位置が入れ替える。そしてドラミドロが紫色の光線で間髪入れずに追撃を決めていく。攻撃を受けて怯んでいたギラティナは防ごうことが出来ずにダメージを受ける。

「トリックでポケモンとポケモンの場所を入れ替える。そんなの基本でしょ？」

「ムシャー（だな！）」

「いや、かなり変態的な使い方だぞ。理屈は分かるが普通は出来ない………ただこのムシャーナは賢いんだよ………」

「……………シャ」

しかしギラティナは何事もなかったかのように起き上がり、再び影で出来た腕で辺りを振り払う。しかも腕は伸縮してまるで嵐のように襲いかかる。それにガブリアスは辛うじて耐えるが、ドラミドロは吹き飛ばされて一撃でやられる。ナナは軽くお礼を言うとドラミドロをボールに戻した。そして起き上がったガブリアスノエルは命じる。

「げきりんだ！」

「ガブツ！（おうっ！）」

ガブリアスが連続的にギラティナを殴っていく。途中まで技は当たらなかった。しかし途中でギラティナのすり抜けが解除。それによりガブリアスの攻撃が何度か当たるようになる。ギラティナは殴られると同時に眉をひそめる。またしばらくして鬱々しくなったの

かギラティナは爪でガブリアスに攻撃しようとした。しかしガブリアスは力尽きてバタツと倒れる。そしてノエルもガブリアスは限界だと判断してボールに戻す。

「技でもない攻撃……それに火傷を入れてる。これでこの威力……桁違い。明らかに人が相手出来るポケモンじゃないわ」

「でも勝つんだろ？」

「無理よ。あれは明らかに人が勝てる相手じゃない」

「え？」

「だけど元の世界に帰る入り口くらいは作ってもらわ。幸いにも空腹まで追い込めたみたいだしね！」

「そうこなくっちゃ！」

「悪夢姫の異名を見せてあげる。ムシャーナ！ 招いてあげなさい！

悪夢の世界に！」

今後は色が一つも無い世界だ。白一色の世界。それによりギラティナは大きな動揺を見せる。なにが起こったのか理解できてない要素だ。

「あなたは地球の裏側に生きている。それで自分は世界のことは全て知った気になってる」

「……まさか！」

「未知より怖いものは無いでしょ？ 知らない世界に拉致された私達と同じ恐怖を味わいなさい」

ナナがボールを投げる。出てきたのはスピアーだ。そしてスピアーが光に包まれて姿を変えていく。これはメガシンカ！

「そして未知の世界に来たら自分の知る世界に戻ろうとするわよね？」

ナナの解説と同時に空間が歪む。そこは先程まで僕達がいた場所だ。ここに飛び込めば恐らく元の世界に戻る。しかしギラティナが先に出たら出口は塞がれるだろう。だからこそギラティナをpushさえつけて先に外に出る必要がある……

「いけっ！ パチリス！ うそなき！」

「スピアー メガホーン！」

ナナ達は指示を出すと同時に出口に向かって走り始めた。しかし途中で幅跳びをしたりと少し変則的な動きだ。普通に真っ直ぐ走れば……

「ダーククライ。これはムシャナーナの幻影よ。元あった裏世界に投影してるだけ。だから地形は一切変わってない！」

「ああ！ そのために俺達は歩いて地形の把握をしていたんだよ！」

そういうことか！　なんて頭の回転の速さ。しかも互いにそのことは一切口に出していない。それなのに伝わってるのかよ。まるで互いの考えてることが分かっているみたいだ。

「スピアーのメガシンカは成功。特に暴走もしてない」

「だけど時間はない。恐らくスピアーを倒してここまですぐに来るぞ」

「そのためのダーククライよ！」

「レジアイス！　頼んだ！」

「レ・ジジジジジジジジジ」

「ダーククライ！　あやしいかぜ！」

僕は心の中で謝りながら、あやしいかぜを何度もレジアイスに叩き込む。しかしレジアイスはものともしない。なんて硬さだろう。それをしてる最中にスピアーが戦闘不能になって吹き飛ばされる。ナナはすぐにスピアーをボールに戻す。あやしいかぜを何度か叩き込んで身体能力もある程度上がった。今ならいける！

その時だった。ギラティナがこちらを攻撃しようとしてきた。こちらに接近して攻撃をする数秒前。そんな時だった。ギラティナはパチリスの方を見て。こちらには興味を無くしたかのようにパチリスの方に向かった。

「ナイス！　このゆびとまれ！」

そしてパチリスに爪が襲いかかる。だがパチリスは体を丸くして回避。そのままころがるようにして僕の足元まで来る。

「パチツ（俺の仕事は終えたぜ。あとは任せた）」

それと同時に体から更に力が湧いてくる。今ならかつてないくらいの大技が出せる！

「俺達も援護するぞ！ グソクムシャ！ ぜったいほしよくかいてんざん！」

「私達の最高のゼンリョクを人理の外側に教えてあげる！ ブラックホールイクリプス！」

もつと体から一氣に力が湧いてくる。それを一点に集めた大きな力でギラティナを吹き飛ばす。これが今の僕とナナで出せる最高の一撃でゼンリョクだ。それにより数十メートル吹き飛ばす。しかしギラティナはなんともなく起き上がる。今の威力でもギラティナには大したダメージを与えられない。改めて絶対に勝てないと実感させられる。しかし、一瞬は稼げた。その一瞬が大きい。ナナ達はすぐに僕達をボールに戻す。それと同時に穴に飛び込み、外の世界に脱出をした。外に出ると森の中だった。既に雨は止んでいて、ギラティナが追ってくる気配もない。そしてナナ達はバタツと倒れ込む。完全に満身創痍だ。

「……さすがに疲れたわ」

「身体能力上昇にてだすけの抜群を突いたダークライのZワザでビクともしないとか化け物過ぎるだろ……」

「あれと戦うならどくどくが欲しいわね……」

「そう……だな」

無事にギラティナから逃れることに成功した。これで強く思い知らされた。この世界にはどう足掻いても勝てない存在がいると。あれは恐らくチャンピオンでも苦戦を強いられるだろう。災厄のようなものだ。まさか伝説のポケモンがここまで別格とは……

そんな時だった。木陰に一人の女の子がいることに食づく。そして女の子もこちらに気付くと、立ち上がったのんびりと向かってくる。女の子は不思議の国のアリスに出てくるアリスのような水色と白を基調としたエプロンドレスを着ている。しかし問題はそこではない。彼女の顔を見てナナ達は青ざめる。

少女の顔は怖いくらい白く、乾いた血に塗れて手術痕だらけだったから。一言で言うならゾンビだ。そんな見た目をしている。そして彼女の足元から一体のポケモンの頭だけがちよこんと出てくる。彼

女はそのポケモンの頭を優しく撫でた。

「私のギラティナ。強かったでしょ？」

それで気付く。彼女が撫でているポケモンがギラティナの頭部だということに。まさかあのギラティナが人のポケモンだということか！ あそこまでの力を持つ存在を行使するトレーナーだと！ さすがにナナ達もそれに驚きを隠せずにいた。二人が驚いてる中で少女が間髪入れずに自己紹介をする。

「初めまして！ 私はアリス！ デトワール地方で四天王をさせていただいてるゴーストタイプの使い手だよ！ ナナとノエルはあなた達で間違いないかな？」

75話 四天王アリス

「とりあえず博士からの依頼の子は貴方達で間違いなし。そしてギラティナから逃げる力もあるからトレーナーとしてもトップクラスなのは間違いない。だけど私達の次元には遠く及ばない」

ゾンビの少女は愉快に喋る。まず僕達は状況が飲み込めていない。そもそもギラティナと同レベルのポケモンを持つていること。その奇抜な見た目。全てにおいて想像を上回っている。それなのに少女は話をトントン進めてしまう。

「ギラティナに手も足も出せずにチャンピオンになるなんて本気？知らないなら言うておくけど四天王クラスのエースのポケモンは普通にギラティナと同格以上のポケモンを使う。キンランのピカチュウとカプ・コケコにメグのプクリン。そしてカナタのニャース。いま言ったポケモンは全て私のギラティナに対等以上に単体で渡り合う実力がある」

「……ギラティナってあの龍みたいな私達に襲いかかったポケモンのことですか？」

「そうだよ。博士の研究の手伝いでウルトラホールを開いて異世界に行ったら存在していた未知のポケモン。図鑑にも載ってないから知らなくても仕方ないね」

つまりシンオウ地方のギラティナとは別個体か。ギラティナのような一体しか存在してないようなポケモンでも異世界に行けば存在しているというわけか……

「まさかマスターボールを使うとは思っていなかったけど……」

しかし問題は彼女がサラツと流したセリフだ。『キンランさんのピカチュウとカプ・コケコはギラティナと同格』だと言っていた。そしてポケモンリーグに出るためにはそれに勝たなければならないのだ。しかし改めて思うとキンランさんってマジで化け物みたいに強いんだな。

「あの大変失礼ですが、あなたは人間ですか……見たところゾンビに見えるのですか？」

「ん？ ファッションだよ。ゾンビって可愛いでしょ？」

「あ、はい」

ノエルの少し失礼な質問にアリスは笑いながら答える。その顔にある手術痕とかは全てメイクなのか……

「それと参考までに一つ。四天王を倒したトレーナーはカナタがチャンピオンになってから一人も現れていない。その意味が分かるかな？」

「……ポケモンリーグを優勝するくらいじゃ四天王には及ばないってことですな」

「正解！ ドルマとは互角の勝負かもしれないけど私やメグにエンペラーが相手なら瞬殺。そして、そんな私達も意図も容易く勝つのが今のチャンピオンのカナタ。つまりナナのお兄ちゃんなんだよ。君のお兄ちゃんは君が思ってる以上に人から逸脱している。それを聞いた上でもチャンピオンになれると本気で思ってるの？」

アリスから物凄い圧と殺気が放たれる。これは間違いなく才能の差だ。ギラティナクラスのポケモンも従わせることが出来る人を超えた存在の集まり。それが四天王なのだ。今まで見ていた世界は小さくて遊びのようなものだ。それを実感させられる。少しはナナもチャンピオンに近づいたと思っていた。だけどそんなことはない。まだまだ道のりは先なのだ。僕達はスタート地点にすら立てていない。あのギラティナと対等に戦って初めてスタート地点なのだ。

「……今の私達じゃチャンピオンにはなれない。だからチャンピオンになるためにどうすればいいのか。それを学びに来たのです！」

「そんなの簡単だよ。強くなればいい」

「そんな当たり前のこと……」

「ポケモンじゃなくてトレーナーが強くなるんだよ。例えば今のナナだと周りは『悪夢姫と戦いたくない』じゃなくて『ダークライと戦いたくない』となってるわけ」

「あ……」

「そう。ポケモンの実力にとレーナーが見合っていない。相手にポケモンじゃなくて自分という存在がヤバいと思わせる。そして『ダーク

ライだから格闘を連れていこう』とかじゃなくて『悪夢姫の戦い方はこうだからこんな対策を立てよう』とポケモンの対策じゃなくてトレーナーの対策をさせる。それが強さ」

なるほど。たしかに一理あるな。ナナ自身を怖いと思わせるか。それが出来ないから伸び悩んでいるか。その考え方はなかったな。

「言うならばナナもノエルも無個性。なんの個性もなくてポケモンに指示を出すだけのトレーナー。少し賢いからの確な指示を出せるだけ。自分にしか出来ないことがない。無個性が四天王と戦えるわけがない。だからナナとノエルがやることは個性を身につけるじゃないかな」

個性か。ナナにしか出来ない戦い方。それを探すのか……しかしどうすればいいのだろうか。そんな自分にしか出来ないことなんてすぐに見つかるのだろうか。

「まあ本音の話をするとポケモンを持って半年も経たないトレーナーがチャンピオンになろうなんて無理。たった半年足らずでチャンピオンになるくらい強くなるなら数年近く頑張ってる人が可哀想」

「……」

「もつと自分を褒めてもいいと思うよ。ギラティナから逃げられるだけでも指折りのトレーナー。その領域に一生かけても行けない人が星の数ほどいる。間違いなくナナとノエルも天才。今のペースで強くなっていけば二年もした時には私達を超えと思うよ」

「アリスさん。それじゃあダメなんです。ナナはどうか知りませんが俺は勝てないやつがいるということが気に食わない。それこそ今すぐにでも超えたいと思う」

「言うねえ。それならノエルは私に短期間で勝てるようになれる？」

「そうするのが強さです。一ヶ月一睡もしないで鍛えれば俺はアリスさんを超える自信がある。人間は平均八時間の睡眠をする。つまり一週間寝ないで修行すれば他のトレーナーより四十二時間も多く修行したことになる。それで睡眠時間も含めて一日中トレーニングするトレーナーはいない。多くても三時間だ」

「……なるほど。それで一ヶ月で二年近くの努力の成果を得ると」

「はい」

「ナナの方は？」

「強さに時間は関係ない。大事なものは経験だと思います。短時間だろうが様々な経験をすれば強さに繋がる。私の強さは経験からきているものですから。だから時間がなくてもチャンピオンにはなれる」

二人の言うこともアリスの言うことも間違っていない。もつともそれが実現できるかどうかは別問題だ。

「こりや強いね……それなら一つだけいいことを教えてあげよう」

「なんですか？」

「どんなポケモンでも伝説になる」

「は？」

「強いトレーナーが育てたコイキングはミュウツーにすら匹敵する。ありとあらゆるポケモンが伝説になる素質を秘めている。あなた達はギラティナと戦って『次元が違う』と思ったはずだよ。その領域にどんなポケモンでも辿り着けるということ。キンランのピカチュウとかもその類」

あのギラティナと同じ次元に行くか。絶対に勝てないと思わせる圧に肌がピリピリするようなプレッシャーを放つポケモンになる……

「その領域にはトレーナーの力が必要不可欠。野生なら普通は不可能。しかし野生でその領域に到達する存在がいる。それが伝説のポケモン。伝説のポケモンは育てなくても強いだけで育てたポケモンとの差はないんだよ」

もつともその領域に行くまでは困難を極めるはずだ。キンランさんのピカチュウがそれだというが、裏を返せばキンランさんですらピカチュウ以外のポケモンはその領域に到達させることが出来なかった。恐らく普通はいける領域ではない。だからこそ、生まれながらにして、その領域にいる伝説のポケモンが特別だと扱われるのだ。

「それでも強いからという理由だけで伝説のポケモンを捕まえるのはオススメしない。伝説のポケモンには役割があって、いなくなると大変なことになる。本来は人間が捕まえていい存在じゃないんだよ。」

私のギラティナを含めてね」

「そもそも普通は伝説のポケモンに会えないです」

「私のギラティナはウルトラホールを超えた異世界で捕まえた。そこにはギラティナ以外のポケモンがいなかったし、なにより伝説のポケモンの生態系を説明するためのサンプルに必要だった。だから捕まえた。キンランさんのカプ・コケコは守り神としての修行として仕えてるから、そのうち別れるだろうしね」

「なにが言いたいのです?」

「簡単な話。伝説のポケモンは相応の理由がない限りは捕まえないであげてって話。ナナ達なら頑張れば伝説のポケモンを見つけて捕獲出来ると思う。でもそれをする……」

なるほど。まずギラティナとは本来は世界の裏側を管理する神のようなポケモンだ。それを捕まえたら管理者がいなくなつて大変なことになる。アリスが許されているのは異世界で捕まえて、なおかつギラティナ以外のポケモンがいなかったから。そして伝説のポケモンの生態系を説明するためにも伝説のポケモンが必要という三つの理由があるからだ。

もつとも最後の理由は身勝手なものだ。しかし伝説のポケモンのメカニズムを知ること得られるなにかがあるのかもしれない。それは場合によつてはどんな事態よりも最優先すべきことなのかもしれない。特に現実世界に影響を及ぼすことはなく、異世界に影響があるかもしれないだけならなおのこと……

「ギラティナのサンプル。しかし伝説のポケモンに関する論文が表に出たことは……」

「ないよ。アルセ博士が全て独占して秘蔵したから。本来なら公開すべきなんだけど調査結果がヤバかった。下手したら戦争が起こる。だから表舞台には出てないの」

まあそうなるのは当然か。その結果ギラティナという存在は秘蔵されてアリスに管理されているということか。それなら僕達にギラティナを見せたのはヤバいのではないだろうか。いや、別にギラティナという名前が知られていない、この地方なら気付く人もいないから

問題はないのか？　そこら辺は僕にはわからぬ。

「さて、長い話は終わり。二人ともチャンピオンを目指すんだよね？」

「はいー」

「それならギラティナ。お願い」

再びギラティナが足元から現れてナナ達を飲み込んだ。ナナ達は成す術もなくギラティナに飲まれる。そして先程と同じやぶれたせかい……

「それじゃあスタートラインに立つためにキツイ修行をしようか。ここはギラティナが統治するやぶれたせかい。腹も空かねば時間の経過すら違う。あなた達にはそこでギラティナを倒してもらおう。裏を返せばギラティナを倒すまでやぶれたせかいから出す気はない。それじゃあギラティナに勝てるようになるまで頑張ろう！」

「はあああああああああああ！」

ナナ達が絶叫する。四天王から出された試練。

ギラティナという別次元のポケモンに勝てるようになる。正直に言つて勝てるビジョンが見えない。あまりに規格外だ。それでもやるしかないだろう。

アリスはそんな僕達を見ながらニヤニヤと笑っていた。

「もしもポケモンが傷ついたら言つてね。すぐに回復させるから。負けを恐れずにトライ・アンド・エラーで頑張ろう！」

ギラティナ。明らかに勝てる相手じゃないんだよな。間違いなくポケモンという次元から逸脱している。それに勝てと普通に言ってくる。勝たなければ先に進めない。それなら勝つしかないのだろう。今の自分を超える。それをやるしかないだろう！

「ナナ。どうする？」

「やるしかないでしょ……」

しかしナナとノエルは諦めてるような感じだった。だけど、それは間違いだと次のナナ達の言葉で思い知らされる。

「いまの私達なら絶対に勝てない。だけどギラティナと戦い続ければ動きにも慣れてくる。それにギラティナは回復しない。それに対して私達のポケモンは回復出来る。そう考えると勝てる気がするわね」

「そうだな。今は勝てない。それでもあそこまでの格上と戦い続けるだけで相当なレベルアップが出来るだろう。やろうぜ！ ナナ！」
「ええ！」

76話 異能力に近い技術

あれから体感で相当な時間が経った。ここでは時計も無ければ腹が空くことも眠くなることもない。だから正確な時間は分からない。僕の目の前に影のようなムチが飛んでくる。僕はそれを考えるより先に右に避けて回避。しかし次のムチが下から襲いかかる。

「次は下よー」

ナナから遅れて指示がくる。もちろん回避できずに僕は吹き飛ばされる。体中が割れるように痛い。呼吸する度にムチで叩かれた場所が内部から痛む。そして僕を叩いたポケモン『ギラティナ』は退屈そうにこちらを見つめていた。重くて速い一撃。それを息切れ一つ起こさずにしてくる。こんな規格外。どう勝てばいいのかまったく分からない。

「これで負けは三百は超えた……」

ナナは下唇を噛む。まだ四天王には遠く及ばないと改めて実感する。そんなナナの元にノエルがやってくる。

「また派手に負けたな」

「攻撃の方向にタイミング……全て見切れるのに指示が間に合わない。ダークライに音として届く時には既に攻撃は始まっている」

「見切れても避けられない攻撃。あれはポツ拳の類だな」

「ええ……技ではないから攻撃に移るまでの溜める時間がない。あくのはどうやシャドーボールもエネルギーを貯める必要がある。しかしポツ拳はポケモンの動作の総称だから隙がなく、素早く放つことが出来る」

「ポツ拳に対応するにはポケモンの技量が求められる。ポツ拳に関してはポケモンの技術でトレーナーが外部から言えるものじゃない。外部からポツ拳の指示を出すにはコンマ一秒の遅れも許されなくなる」

ポツ拳か。少しは使えるが完璧とは言えない。それにポツ拳に対応出来ないのが問題となるとトレーナーではなくポケモンの問題となる。つまりギラティナに負けてるのは僕達のせいだと言っても過

言ではないだろう。今になってキンランさんの言っていた『ポケモンがダメ。だからナナは勝てない』の言葉が重くのしかかる。

もうナナのレベルはこの上ないくらいまで上がっている。あとは僕達の問題なのだ。

「そうなる俺達がやるのはポケモンを鍛えることか」

「……そうね」

「どうした？ ナナ？」

「優れたトレーナーはどんなポケモンでも勝つ。本当に強いトレーナーなら今の私達のポケモンでもギラティナにも勝てるのかなって思ってたね」

「それは無理だな。どんなに優れた指示を出そうがポケモンが反応出さないんじゃない。どんなポケモンでも勝てるというのは幻想だ」

「幻想ね……とりあえず私はポケモンを強くする以外に方法でギラティナの攻略を考えてみるわ」

「そんな方法はない」

正直言つて僕はノエルに全面同意だ。ギラティナと戦ってるからこそ分かる。あれはトレーナーの技量でどうにかなる敵でないと思う。そんな時にナナが口を開いた。

「……ノエル。スピアー以外の私のポケモンを鍛えてくれないかしら？」

それは驚きの発言だった。ナナが僕達を別のトレーナーに渡すことなど基本的でない。そんなナナがノエルに僕達を預けると言っているのだから。

「恐らくこれはポケモンだけで勝てる話でもトレーナーだけでも勝てる相手じゃない。そんなことは分かっている。だけどギラティナはどんなポケモンでも勝てる胸を張って言える作戦を最強のポケモンで挑むことで初めて適う相手じゃないかと思うの。だからこそ誰かがトレーナーだけでも勝てるって盲目的に信じて最善の策を考える必要がある」

「たしかにその通りだな」

「理屈上はポツ拳を極めれば勝てる。しかしポツ拳を鍛えてポケモンを強くしたから勝てましたっていうのは違うと思う」

「そういえばアリスさんが気になることを言ってたな。『個性がない』って」

「……個性。意味としてはその人にしかない物。なるほど。そういうことね。私はなんとなく勝ち方が見えてきたわね」

「どういうことだ？」

「個性は恐らく『そのトレーナーにしか出来ない戦術のこと』だから私達トレーナーは『個性』。そしてポケモン達は『ポツ拳』を習得。そして最強のポケモンで私達にしか出来ない戦い方をする」

※ ※

私は大事なポケモン達をノエルに預けた。あまりこういうことは言いたくないが正直に言うレベルが足りていない。こちら辺で壁に当たるのは分かっていた。それに私の育て方で得られるものは既にある。だからこそノエルに預けた。トレーナーが変われば考え方も変わる。つまり他のトレーナーに鍛えてもらうことでポケモンの視野も広がる。そして視野が広がれば別の強さを見出せるだろう。

そして私は『個性』について考えなければならぬ。個性は独自性。つまりトレーナーとしてのアイデンティティを指している。だから私というトレーナーにしか出来ないことを考えなければならない。

「スピアー。 出番よ」

私は唯一手元に残したスピアーをボールから出す。手元にスピアーを残した理由、スピアーにはメガシンカがあるから。私はメガシンカを使いこなせていない。ギラティナと初めての戦いで実感した。だからこそ私はスピアーに出来ることがまだある。

メガシンカはポケモンに大きな負担がかかる。しかしトップトレーナーは簡単に使いこなす。それは何故だろうか。ずっと考えていた。しかし答えが出ない。

そして個性の話。私は聞いた時から自分にしか出来ないことが何故か分かった。そんなことが出来るのか不安もある。だけど使えば大きく強くなれる。

「私の個性」

私は考えることが出来る。分析も出来る。そして応用して人の考えも読める。未来予知に等しい読みが出来る。それを次の段階にする。そして個性として身につける。

「……人格トレース」

今までポケモンバトルをした相手のことを考える。その人はバトル中にどんなことを考えて、どんな思いでポケモンバトルをしたのか。それを完璧に理解して私に投影する。私はその人物に成りきることで、その人の技術を盗んで、そのまま手にする。ここにいるのはスピアー。それならスピアーに一番詳しい人物。スピアークイーンに。

「スピアークイーン。トレース」

彼女の思考が手に取るように分かる。そして彼女ならどうするのかもわかる。そして彼女の出来ることなら、なんでも出来るだろう。私の個性は完成した。

私の個性は『人格トレース』だ。今までバトルした相手を分析して、その人と同じ思考をする。バトルの経験を全て力に変えることが出来る。そして頭が痛い。私が痛みのあまり顔を手で抑える。その時に生暖かい感触がする。慌てて手を離す。そうすると赤い血が手にべったりと付着していた。その時に気付く。私の目から血が流れていることに。

「ピアッ！」

「大丈夫よ」

スピアーが心配して私に駆け寄ってくる。それに対して私はスピアーを撫でる。その時だった。スピアーの全てを理解する。スピアーの体温や血の流れから現在の体調から思考まで全てわかる。恐らくスピアークイーンの人格をトレースしているからだろう。

なるほど。スピアーはメガシンカした時にそう思っていたのか。全てが分かる。それならメガシンカはもう少し遠慮なく使ってもいいかもしれない。

「トレース解除」

私は人格複製を辞める。体から一気に力が抜ける。目から血も止める。完全に分析をして人格を脳内で複製して、その人と同じことをしているのだ。負担はあつて当たり前か。

「スピアー。今までごめんなさい。これからはメガシンカ。遠慮なく使うわよ」

「ピアッ！」

スピアーは喜びの声を挙げる。恐らくキンランさんをトレースしたら同じだけ強くなれる。それにお兄ちゃんのトレースも可能だ。これならギラティナと戦える。しかし負担が大きすぎる。というより人間というデータ量に脳の処理が追いついていない。だから出血を起こす。この個性を感覚的に出来るようにする。これが私の課題となるだろう。

待て。この人格トレースはバトル以外にも使える。ポケモンの育て方をトレースして私の出来ない育て方をすることが出来る。それなら……

「……メア。トレース」

メアの全てを思い出して分析する。脳が焼き切れそうになるのは気にしない。恐らくやればやるだけ脳も成長して慣れるだろう。そして今ならメアの思考も全てわかる。その中には私では絶対に思いつかないような育成理論もある。この育て方なら……

「トレース解除」

やり方も掴めてきた。これの高みも分かった。人格トレースは言うならばコピーだ、コピーは本物には勝てない。しかし私の人格トレースは自分の戦ってきた相手なら誰でもトレース出来る。つまり相手のトレースではなく相手が苦手なトレーナーのトレースをすることで真価を発揮する。

「……この短期間で個性を見つけられるんだ」

後ろからアリスが私に話しかける。彼女の足元にはギラティナを模したボロ布を被ったミミツキユがいる。随分と珍しいミミツキユ。ミミツキユの雰囲気から察するに強いギラティナに憧れてギラティナに近づこうと思って、このボロ布にしたところだろう。ギ

ラッキユなんて呼ぶと可愛いかもしれない。

「トレーナーを完全に分析して、そのトレーナーと同じ思考を出来るようにする人格トレース。そんな頭をぶっ飛んだことが出来るなんて想像以上。もはや天才……というより人間なのか疑いたくなるよ」
「そうですか？」

「ナナ。おめでとう。これでスタートラインに立てたね」
「まだです」

今の私じゃこの力は使いこなせない。これを完全に自分の力にして初めて対等になれる。私はアリスを無視してギラティナの元に向かう。今の私は不完全。それでもトレーナーのいないポケモンくらいなら勝てる。

「お兄ちゃん。力を借りるよ」

私はチャンピオンである兄をトレースする。お兄ちゃんと過ごした記憶からお兄ちゃんの趣味嗜好から価値観に性癖まで全て情報として整理。そして動画で見たバトルにハクガ山で戦った時の記憶から情報の精度を上げていく。

「メガシンカよ！」

そしてギラティナとのバトルが始まろうとしていた。

※

ドシンとなにかが落ちる音がした。一体なんだろうか？

「まさかー！」

ノエルが驚きながら声を挙げた。ノエルとの訓練を中断して僕達は音のした方に行く。そこには瀕死のギラティナ。それに顔が血だらけのナナとスピアーがいた。ナナは右目を抑えて呻いている。まさかギラティナに勝ったのか。しかしナナの手持ちはスピアーだけ。どうやって……

「ナナ！ なにがあつた！」

「……だ……いじょうぶよ」

「大丈夫じゃないだろ！」

そしてナナが力尽きたように倒れる。僕はスピアーに駆け寄る。スピアーは無傷だ。一体どうなっている。

「おい。スピアー」

「ギラティナは倒した。ナナが倒した」

「ならナナはどうして血だらけ……」

「個性と言っていた。なんでも『戦ったトレーナーを分析してトレースする』とか。それでナナはチャンピオンをトレースして……拙者でギラティナを倒した」

トレース？

明らかに異能力の類だ。この世界にそんなものは存在するのか。いや違う。ナナのトレースは誰にでも出来ることだ。全ての情報を処理して分析。それから高速で演算することさえ出来たのなら。そしてナナは出来た。恐らくこんな神業はナナにしか出来ないだろう。しかしギラティナを倒すほどの力……

「ナナは最初にスピークイーンをトレースしてスピアーの知識を手に入れた。それからメアをトレースして彼女の歌を身につけた。もちろんメアには及ばないが聞くと体から力が湧いてきた。そして最後に……」

「トレースすれば、した人物の記憶やスキルも自分の物に出来るわけか」

「ああ。もちろん歌や料理などは劣化する。しかし筋肉の使い方等の使い方を知識として身につけるわけだから最低限の真似は出来る……」

その結果がこれか。恐らくナナの思考に体が追い付いていないのだろう。脳を回転させすぎて出血する。

「とりあえず俺はナナに言われた通りにお前達を鍛える。いいな？」
そして僕達の修行が再開された。それから数時間が経つとナナが目覚める。その時のナナは右目がまったく見えないと聞いていた。そのためナナは当分の間は眼帯で過ごすことになった。しかし視力が使えないのは一時的なもので二週間もすれば復活すると自己判断していた。そして今の状態でトレースをしたら……

ナナはどうしてそこまで傷つけてまで……
自分の体をそこまで傷つけてまで……

その日の夜。もつとも本当に夜なのか分からないが、夜に該当するだろう時間。僕はナナと二人でいた。ナナはなにを指摘するのだろうか……

「最初はここまでやる気はなかった」

ナナは僕の方を見ながら話す。彼女の右目は黒いバラの眼帯をしていて少しだけ様になっていた。見た目は痛々しいくもない。それほどか美しいとすら言える。

「だけど近くにミミックユがいて……そのミミックユが私をキラキラした目で見ていた。だから期待は裏切れないと思ったの」

「ウム……」

「そのミミックユ。あとから聞いた話だとギラティナに憧れているみたいなの。それでギラティナを超えたいと思っている。けどどうしたら強くなれるか分からないみたい」

「……」

「それでギラティナを倒す私を見たら、一緒に行きたいと言い出したの。だからもしかしたらミミックユを手持ちに加えるかもしれないわ」

そんなことはどうでもいい。ただナナにはこんな無茶をしないでほしい。もう二度とやめてほしい。それをナナの顔を見て伝える。ナナはそんな僕を見て軽く指で弾いた。

「……それが私の気持ちよ」

「ン?」

「あなたがナイトメアシフト100%を勝手に使った時の私の気持ち。私の気持ちも知らないで勝手に無茶をするあなたが言えることじゃないわ」

「ソレハ……」

「だけど心配してくれてありがとうね。人格トレースは相当なことがない限りはしないわ。するとしても少しだけ情報量を抑えて不完全なものね」

ナナが少し笑う。それは天使のように可愛らしい。ナナは本気を出せば伝説にも勝てる力を得た。この短時間でナナは四天王と同等

以上の力を手に入れた。しかし使うと片目の視力を失うという大きいデメリットがある。もしもそのデメリットを克服出来たなら……

「私の人格トレース。そしてダークライがナイトメアシフト100%を使いこなせるようになればお兄ちゃんにも勝てる。私達の課題は多いわね」

「ソウダナ」

「そういえばノエルの訓練はどうだった？ 私のやり方と違って勉強になったでしょ。ダークライはノエルの技術をしっかりと盗みなさい。それはあなたの強さに繋がるわ」

ノエルの訓練はナナとは少し違い、ポケモンの基礎体力を伸ばすことに特化したものだった。バトル形式などの実践的なものはない。しかしノエルの教え方のおかげで今まで以上に体が動かしやすくなった。そしてノエルのポケモンは特別凄いわけではなく基礎能力が高いということも分かった。そして如何に今までナナ頼りだったのか強く実感させられた。

「……そういえばアリスさんとメアの話をしてたの。メアの歌による身体能力強化は間違いなく個性だそうよ。メアは既に旅を始めた段階からこの領域に辿り着いていたみたいね」

なんとなく予想はしていた。そしてこれからの戦いでは、ポケモンではなくトレーナーもなんかしらの手を打ってくる一流が相手となる。今まで以上に過酷な戦いになるだろう。

「とりあえずギラティナを倒して個性を手に入れた。私の視力の回復が終わったらレポートで次のジム戦に行くわ。それまでにノエルに揉んでもらいなさい」

そしてナナは去っていった。ナナはさらに強くなった。果たして僕は……

77話 VS ナナ

ノエルとの修行が始まって一週間近くが経った。そしてナナの視力が完治するのはアリスの素人診断で最低でも半年だと判明した。ナナは当分の間は眼帯生活だろう。そして修行をしている間にナナはさらに力を伸ばしていた。

「……トレース。ツタージャ」

トレースを人間だけではなくポケモンにも出来るようにするとう離れ業。ある程度の思考と感情まで分かるようになったみたいだが、それ以上は分からないらしい。なんでも 人間相手なら、そこから同一人物のように振る舞うことが出来ると言っていた。

「タジャ？（どう？）」

「そろそろ進化の頃合いね。あと数回バトルをしたらジャノビーになるかしら」

「タジャ！（ほんと！）」

「ええ。ただジャノビーになったら体格の変化で思うように動かせないだろうから注意なさい」

ナナの人間離れが止まらない。もう完全にポケモンと会話している。前から似たようなことはしていたが、練度に磨きがかかっている。まじでポケモンの喋っていることが分かるんじゃないかというレベルだ。

「ダークライ。私のことはいいから修行に集中なさい」

「ナ！」

「あと会話は出来ない。近くにいるポケモンの思考が手に取るように分かるようになっただけよ」

いや、もつと怖いわ！ つまり声に出さずとも思っていることが分かるということだろ。もはやテレパシーの領域だ……

「テレパシーね。分かるのは私の手持ちのポケモンだけ。そこまで万能じゃない」

それでも充分におかしいのだが。まあ気にしたら負けだろう。

「そういうえばダークライ。新しい技を覚えたみたいだけど見せても

らつてもいいかしら？」

僕はナナに言われると同時にステップを踏む。それにより僕の姿は二体にある。そしてステップを重ねて四体。次は十六体と増やしていく。厳しいノエルとの修行で身につけた技だ。

「なるほど。かげぶんしんを覚えたのね……だけど今の練度じゃ……」

ナナが近くにある小石を軽く投げて僕の分身に当てる。すると分身は跡形もなく消える。この分身は衝撃に弱いのだ。

「このように衝撃にあまりに弱い。『なみのり』や『ぶんえん』をさせたら終わりよ。もう少し強度を上げなさい」

まあそれが難しいのだが……

「それと次のジム戦だけどーククライに任せるわ。どう考えてもキンランさん以外のジムリーダーくらい一匹で勝てるようにならないと四天王には敵わない。これからのジム戦は強敵との戦いじゃなくて普段通りの野良トレーナーとの戦い程度に考えていくわ」

おう……なんてキツイ発言。しかし可能な気がする。それに今は出来ないがきずなへんげもある。それを使えば……

「それと正式にミミッキュを手持ちに加えることになったからよろしくね」

うむ。これでナナの手持ちは六体か。『ダークライ』『ムシャーナ』『スピア』『ツタージャ』『ドラミドロ』『ミミッキュ』というわけか。恐らくこのメンバーでポケモンリーグに挑むことになるのだろうか。もつともツタージャはジャローダに進化する可能性が高いが。

「ナナ。目の調子はどうか？」

そんな会話をしているとノエルが駆け寄ってくる、ナナはそれに微笑みで返事をする。

「笑うだけじゃわからねえよ……」

「もう痛みは無いわ。まだ見えないけど左目が使えるから大丈夫よ」

「そうか……」

「心配しなくてもいいのよ。眼帯も可愛くて気に入ってるのだから」

「眼帯をしているナナも可愛いよ」

「それはそうとダークライ達はどうか？」

「全体的に伸びてるぞ。パワー系アイテムを使った集中訓練で基礎能力を向上。バトルはさせていない。恐らく経験は足りてるからな」

「ポツ拳は？」

「前よりも身につけている。だけど伸ばそうと思えば、まだ伸ばせるという感じだ」

「なるほど。それじゃあダークライ。少しポケモンバトルでもしましょうか。おいでツタージャ」

は？ いや、待て。

僕にトレーナーはいない。ナナと勝負で誰が指示を出すんだよ。

「ポツ拳を身につけたならトレーナーがいなくても戦えるはずよ。自分で考えて動きなさい。それじゃあ行くわよ！ ツタージャ！」

「タジャ（うん！）」

ツタージャが有無を言わずに突っ込んでくる。衝突に始まるポケモンバトル。それに今はノエルと修行中なのだが！

「ゼロ距離でリーフストーム！」

ツタージャが無言で草の嵐を放つ。僕は瞬時に後ろに跳ねて回避。しかしツタージャは既に僕の背後に回っていた。まさかリーフストームはダミー！ リーフストームを打つと同時に走り始めていたのか！ そしてリーフストームに気を取られてる間に……

「そのままアイアンテール！」

だけど遅い。僕は体を捻ってツタージャの尻尾を使った攻撃を回避。そのままノエルに教わった技を使う。まず攻撃をした時には隙が生まれる。そしてダークライなら触れただけで相手を倒すことも可能だ。隙が出来たら触れる。それだけでいい。無駄に大きく動く必要なんかない。僕はそのままツタージャの首を掴む。

「ツタージャー！」

そして僕の流れし込むイメージで強くツタージャの首を握る。それと同時にツタージャは深い眠りにつく。その気になればダークライは触れただけで相手を眠らせられる。それをノエルに教わった。これで勝負は……

「トレース。トケイソウ」

ナナがボソツと呟く。それによりナナの雰囲気が一気に変わる。そしてナナは冷たい声で言う。

「起きなさい。ツタージャ」

その声でツタージャは瞬く間に目覚める。トケイソウは僕達が挑んだ二人目のジムリーダー。彼は脅すような感じで声一つでポケモンの状態異常を回復出来るという芸当を身につけていた。ナナはそれを模倣したのか。しかし練度が足りていない。この程度の小技で目覚める眠り。もつと深い眠りに誘えるようにならねば。声も届かないくらい深い眠りに誘うんだ。

「そのままリーフストームで押し切りなさい」

再び草の嵐が襲う。これは罠だ。僕は恐れることなく真っ直ぐ特攻する。草の葉が僕の身を刻む。しかし嵐の先にはツタージャがいるはずだ！そこを突けば……

「トレース。ダークライ。あなたの考えは全てお見通し」

嵐が終わった頃にはツタージャはいなかった。それと同時に頭に鈍器で殴られたような痛みが走る。そうかツタージャは上に飛んだんだ。そして上から回転しながら勢いをつけてアイアンテールをした。そういうことか……だけど、そのくらいで倒せるとは随分と甘く見たものだな！僕は痛みには怯むことなくツタージャの尻尾を掴んで地面に叩きつける。そして間髪入れずに首を絞めて、れいとうビームを撃って地面に固定する。

「……タジャ？（これで勝ったつもり？）」

「才前に……ナニが出来る……」

「ダークライ。随分と詰めが甘いわよ。ツタージャ。めざめるパワー」

ナナが初めて使う技。それによってツタージャが体から熱を発する。それにより固定していた氷がジワジワと溶けていく。

「ツタージャのめざめるパワー。ちなみにタイプは炎よ」

いつの間そんな技を……

「ここで決めるわよ。トレース。キンラン」

その時だった。ツター ज्याの動きが段違いに上がる。顔を叩かれたと思ったら体が殴られる。あまりに速い連撃。息をつく間もない。だけどチャンスだ。これは大きなチャンスだ。ナナの人格トレース。たしかに強力な技だ。だけど弱点もある。僕は一か八かの賭けである。くのはどうを放つ。それは幸いにもツター ज्याに命中して一撃で戦闘不能に追い込む。

人格トレース。それをしている間は『ナナはナナとしての思考』が出来なくなる。つまりトレースした相手の弱点がそのまま残る。キランさんの弱点は理論的ではない行動。今のようなギャンブル的な攻撃。そうノエルが言っていた……

しかしツター ज्याは踏ん張り。今の一撃に耐える。そして輝き始めた。これは！

「……進化ね。行くわよ。ジャンビー！」

「ジャンオ！(うん!)」

ツター ज्याは少し大きくなる。それに前よりも蛇っぽさが増している。しかし進化してくるとは少し予想外だ。これは仕方ない。少し気合いを入れていこう。

——ナイトメアシフト44%。

体が裂けそうになる。しかし最近はずっと20%くらいで活動していたため意識は保てる。ここまでの負荷なら問題ない。今の僕は天下無敵。ギラティナには敵わない。だけど並大抵のポケモンなら確実に勝てる。そしてナナとジャンビーにも……

「随分と高い出力を出せるようになったのね。だけど負けないわよ」

僕は右手を払う。青い闇の炎で辺りを覆う。やきつくすをポケモンではなくフィールドに放つことで場を制圧。そして炎の壁の効果はそれだけじゃない。

「随分と悪知恵が働くわね」

ナナの視界を炎の壁で遮る。ナナの最大の長所は目。つまり視界を奪えば一気に形成はこちらが有利になる。もともと人格トレースを使われたら話は変わるかもしれないが。

「……見えないから中の状況が分からない。ダークライの位置も掴め

ない」

人格トレース。もしも完璧なら対応されるだろう。しかし推測だがナナは自身への負担を減らすために出力を下げているはずだ。そのため視界に頼るナナの戦い方が色濃く反映されている。

「随分と舐められたものね。私がナナがいないと戦えないと思ってないかしら?！」

「ジャンノビー、お前に勝ち目はない」

僕はジャンノビーの背後に回り、れいとうビームで首元を凍らせる。それから距離を取ってシャドーボールをグミ撃ちすることでジャンノビーをじわじわと追い詰めていく。しかしジャンノビーはつるのムチ的確にシャドーボールの軌道を逸らしていく。こういうときナナなら恐らく……

『近づいてゼロ距離であくのはどう』

そう命じるだろう。ジャンノビーはシャドーボールに気を取られていて、至近距離が死角になっている。つまり近づけば確実な一撃となるだろう。

「……え！」

「終わりだ」

高速で接近してジャンノビーの胸元に手を置いてあくのはどうで吹き飛ばす。それと同時にかげぶんしんで自分の数を増やす。そして吹き飛んだジャンノビーをボールのように連続的に蹴っていく。蹴り飛ばして自分の分身にパス。そして飛んできたジャンノビーを再び蹴り飛ばす。それをジャンノビーの意識を奪うまで繰り返す。

「ジャンノ……」

ジャンノビーが倒れる。それと同時に僕は炎を消す。ナナは戦闘不能になったジャンノビーを静かにボールに戻す。なんとか勝てたな。

「ありがとう。ジャンノビー」

そしてナナの声で察する。これはかなり機嫌が悪い時の声だ。今の負けでイライラしてるんだらうな。しかし手を抜いてもナナは怒るだろう。この展開はどうしても避けられないか。

「それと見事ね。ダーククライ」

「ウム……」

「視界を遮るのは賢かった。あれは完全に私のミス。両目が使えれば対応出来ただけどね」

ん？ 両目を使えば対応出来た？

改めて思うがナナつてももしかしたら規格外で強いのではないか？

「やっぱり左目だけだと見にくいわね。両目を使わないとダメね」

待て。両目を使えたら炎の壁くらいで視界が遮れないとサラリと言うな。これは本気で人間をやめてるレベルだと思うぞ。

「……もつとも右目を使ってもダークライに勝てるか怪しかったわね」

「ン？」

「なんでもないわ」

そしてナナとのバトルも終わった。それから軽くノエルに鍛えてもらおう。そして訓練を終える。その時にナナは旅の支度をしていた。どうやらやぶれたせかいから出るらしい。それにナナもアリスに軽くメガシンカの扱いについての指導も受けていたみたいだ。恐らく完全にメガシンカを使いこなせるようになったのだろう。

「ナナ。もう行くのか？」

「ええ。ノエルは？」

「俺はもう少しだけ残るよ。少なくとも一人でギラティナに勝てるよ
うになるまでは」

「そう。ポケモンリーグには間に合わせなさいよ」

そしてナナは次に向かって歩き出す。そんなナナの前にアリスとギラティナが立ち塞がる。ギラティナは相変わらずの覇気でこちらを威圧している。しかし敵意は無さそうだ。

「ナナ。ミミツキユをよろしくね。あの子は誰よりもギラティナに憧れていて、心の底からギラティナを超えたいと思ってる。そして私ではミミツキユをその高見まで連れていけなかった。だけどチャレンジャーのナナなら……」

「安心してください。ちゃんとミミツキユを貴方のギラティナよりも強くしますから」

「そう。それなら四天王としてナナを待つわ。その時はガラティナにそれよりも強いゲンガーを使って全力で倒してあげる。もつともナナがポケモンリーグに勝てる保証はないけど」

「ええ……今までのポケモンリーグならまだしも今回はノエルがいる。きつとノエルはガラティナに勝てるくらい強くなってくる」

「それだけじゃないよ。ナナ達がやぶれたせかいい間にジムバッジを最速で八つ集めたトレーナーが現れてね。彼女も相当な強さ……」

「名前はなんていうのですか?」

「マリア。大人の女性で二口ロクス社の社長さん。裏ではゴオー団との繋がりも噂されてるけど真偽は不明。そしてラティオスとラティアスを使うみたい」

彼女もポケモンリーグに出るのか。目的は分からないが怖いな。彼女の实力は折り紙付きだ。強さも身に染みて知っている。基本的にポケモンリーグへの参加権に年齢制限はない。強いて言うならジムリーダーにフロンティアブレーン、四天王やチャンピオンは参加出来ないというくらいだ。そして優秀なポケモントレーナーは二十歳を超えたら大体がそれらの仕事に就くため大会に出場することはない。つまりマリアのようなケースはイレギュラーと言っても過言ではないだろう。

「倒した順番は?」

「詳しくは分からない。だけど一つ目にキンランを倒したのは確定みたい」

ジムの規約か。ジムリーダーはバッジが0の相手には大きな縛りが与えられる。その状態ではさすがに勝てないか。

「一部ではキンランと互角という声も……」

「知ってます。私も戦ってボコされたことがありますから」
「あらそうなの。とりあえずポケモンリーグ頑張つてね!」

そして元の世界に戻る。外に出ると夜中だった。恐らく相当な年月が経過している。また携帯の電波も繋がるようになる。ナナは最初にこの間でながあつたのか確認作業に入っていた。

「……なるほど。『ポケモンマフィア等を制圧する覆面の少女』ね。恐らくメアのこと」

その記事の一つにメアのこと書かれていた。そしてジムリーダーによってレジスチルとレジロックも捕獲されたらしい。そして記事の多くは覆面少女。現在の彼女はダークヒーローとして物凄い人気を放っている。そして対象は全てナナのダーククライを狙おうとしていた輩のことから一部では過激な悪夢姫信者ではないかという考察もある。もつとも間違っていないが……

「そしてポケモンリーグ開幕まで残り一ヶ月。つまり一ヶ月で残りのジムバッジを確保しないとイケないのね」

少なくともポケモンリーグ開催が残り一ヶ月になるまでの時間を消化したというわけか。圧倒的に時間が足りていない。しかしやるしかないだろう。

「そしてお兄ちゃんがデトワール地方に帰ってきた。お兄ちゃんを軸にゴウー団のボスであるラルムとの戦いが間もなく始まる……か」

チャンピオンの帰還か。良く悪くもこれはどう影響するのだろうか。しかしまず最初にナナがやるのはジム戦だ。そして次のジムはルルタウン。相手は『はがね』タイプの使い手。もう時間もない。恐らくテレポートで移動することになるだろう。

「少なくとも決戦の日は近い。ポケモンリーグもゴオー団関係も。だから私達もジムを終えて力をつけましょう。ダーククライ」

78話 バトルタワー

テレポートで着いた町はルルタウン。有名な鉱山都市であり、今日も様々な鉱石や進化の石の採掘がおこなわれている。そしてこのジムリーダーはがねタイプのポケモンを使うことで有名だ。そして相棒はメガハッサム。また最近は例のレジスチルを捕まえたらしい。そんな中でナナと僕は……

「相手にならないわ」

「カメックス！」

この街に最近建築された施設。バトルタワーで暇を潰していた。ジム戦をしようとしたが明日にならないとジムリーダーが返ってこないのだ。そして現在は九十九連勝中。当然のように全てのポケモンを一撃で倒して。

「悪夢姫。表舞台に最近は出ていなかったと思えば、現れると同時に圧倒的な力を見せている」

「これはスクープね。悪夢姫は今も根強い人気のあるトレーナー。記事にすれば大反響よ」

様々な野次が観客席から聞こえる。バトルタワー。そこは金銭のやり取りが発生しないで気楽にバトルを楽しめる施設であり、トレーナー達の腕試しをする場所として人気が高い。もつとも記録は良くて五連勝だとか。そして今までの最高記録は十六連勝という話だ。もつともキンランさんや四天王の誰かといった凄腕のトレーナーが使用した履歴はないが。

そんなバトルタワーでナナが九十九連勝という圧倒的な記録を叩きだした。それに伴い辺りはナナのバトルを一目見ようと様々なトレーナーがやってきている。

「次のトレーナーは飛び入り参加のベテランさん。先日遂にジムバッジを八つ手に入れてポケモンリーグへの出場権を獲得した男です。続けますか？」

「ええ、でも次で百連勝とキリが良いから最後にするわ」

そして厳格な雰囲気を持つ男が入場する。ナナは僕を出したまま

相手を待ち構える。

「……うむ。そなたが悪夢姫か。しかし我はジムバッジを八ツ手に入れた身。そこらのトレーナーとはワケが違うぞ」

「なんでもいいから早くポケモンを出しなさい」

男の手からボールが投げられる。現れたのはバクフーンだ。このバトルタワーのルールは三対三。それで先に三体を倒したら勝ちというものだ。

「そちらからどうぞ」

「ならば先手必勝！ バクフーン！ ふんか！」

バクフーンは僕が予想したよりも早く動いて背中から噴火する。それによって炎玉が流星のように降り注ぐ。この速さは恐らくスカーフだろうな。まあなんでもいいが。しかしバクフーンは速くても技が遅い。僕は右手を振って風を起こして全ての炎を風でかき消していく。

「なー」

「シヤドーボール」

僕は渾身の一撃をバクフーンに飛ばす。それをバクフーンは飛んで回避。今の技を避けるとは少しは鍛えてあるようだな。これならジムリーダーのポケモンとも渡り合えるだろう。いや、でもアザレアのヒードランには劣るか？

まあ少なくとも彼女のゴウカザルと同じくらいだとは思おう。うむ。

「……接近してくるわよ」

「効かぬならゼロ距離でお見舞いしてやれ！」

「バクッ！（おおー！）」

バクフーンが瞬足でこちらに向かってくる。僕は特に迎撃をする様子を見せずに手を静かに翳す。そして少しだけ動いて優しくバクフーンの頭を撫でる。それによりバクフーンを深い眠りに誘った。そしてバクフーンに触れたまま彼の夢を貪る。ムシャーナから教わった『ゆめくい』という技だ。しかしバクフーンは随分と良い夢をみているようだ。それなら少しばかり改悪してしまおう。最悪な悪

夢に。

「バクツ！」

「バクフーン！」

「バクフーン。戦闘不能」

気が付いたらバクフーンは動ける状態ではなかった。バクフーンは直ちにボールに戻される。残り二体。どんなポケモンが出てくるだろうか。

「……なにをした？」

「悪夢は始まったばかり。次のポケモンをどうぞ」

ナナは優雅に相手に試合の続行を強いる。相手は下唇を噛みながらボールを投げる。出てきたポケモンはカビゴンだ。

「トレースは終わったわ。あのカビゴンはカゴのみ持ちよ」

「な！ どうして分かる！」

「今のバトルの癖や目線、それに発汗等を参考にあなたのことを分析した。その結果からあなたの場合は高確率でカビゴンのカゴのみを持たせてねむるを使うと分かった」

「なんだよ……それ……」

「昔から目は良いの。それじゃあ次は私からいくわ。ダークライ。あくのはどう」

僕は右手を振るう。ただそれだけだった。その結果としてカビゴンは一撃。たった一撃で戦闘不能になった。前よりも大きく技の威力が上がっている。僕の手も相当上がったようだ。

「三体目は？」

「……降参します」

「し、勝者！ ナナ！ 悪夢姫ことナナが百連勝です！」

「ダークライ。お疲れ様」

ナナは僕をボールに戻す。そして帰宅の準備をする。そんな時だった。スタッフから慌ただしい声が聞こえる。

「続いて次のトレーナーですが……」

「もうやらないわよ」

「な、なんとチャンピオンカナタが名乗りを上げました！ どうしま

します?」

「……は?」

ナナが唾然とする。うん。これはやめておこう。チャンピオンには今の僕達ではどう足掻いても勝てない。さすがに相手が悪い。下手にやって自信を失うより戦わない方が……

「ナナ。久しぶり」

「お兄ちゃん!」

「随分と面白そうなことになってるじゃないか。噂を聞いてきてしまったよ。さて久々に兄妹水入らずのポケモンバトルでもしようじゃないか」

「……」

「それとも負けるのが怖いのか?」

チャンピオンの入場。それに観客達の唾を飲む声が聞こえる。これは明らかに断れる雰囲気ではないな。カナタは既にニヤースを出して戦う気にいる。

「ニヤース。お兄ちゃんのエースポケモン」

「ちよつとしたデモンストレーションだ。ひっかく」

「お任せでニヤース!」

ニヤースが爪で空間を引っ掻く。それと同時に空間が裂けた。なんだあれは。明らかにバグっている。普通に喋っているのも気になるが、ひっかくの威力の方が気になる。絶対に勝てる相手ではない。「俺のニヤースは知ってるの通り『ひっかく』以外の技は使えないんだぞ?」

「ひっかくだけを極めてひっかくで天を裂くことすら可能にしたのがお兄ちゃんのニヤース。ひっかくでありとあらゆることを可能なポケモン。そのひっかくに耐えたポケモンは未だにいない」

一つのことだけを極めたポケモンか。時に一つのことを極めた者が一番強いとはよく言ったものだ。しかし興味がある。恐らくニヤースの右に出るポケモンはいない。この世界で最強なのかもしれない。そんなポケモンはどれだけ強いのか……

「さて、どうする?」

「お願い！」

・・*

結果だけ言おう。完敗だった。少し頬に技を掠らせること程度が限界だった。そしてナナの連勝記録は百で止まった。あれはいくらなんでも仕方ない。

「しかしフロンティアブレーンへのスカウトを断ったのか」

「うん。そもそもあそこはバトルフロンティア委員会の認可を受けていない非公式の施設だから……」

「まあな。でも認可されていないのはフロンティアブレーンがないから。つまりナナがスカウトを受けていれば委員会に認められたかもな」

「それに私がなりたいのはチャンピオン。フロンティアブレーンじゃない！」

「そうか」

僕達は場所を移して喫茶店で少し会話をしていた。もつとも貸切にして人払いは済ませてあるが。それと先程からナナの声が随分と変わっている。それどころか口調も変わる。まるで媚びるかのような猫撫で声だ。もつともチャンピオンの前ではいつものことなのだが。それが兄だからなのかチャンピオンだからなのかは不明である。

「ところでお兄ちゃん。個性って知ってる？」

「アリスの唱える一説の論だな。自分のバトルスタイルを極限まで高めて真似の出来ない領域に到達する。そして自分特有の性質であることからアリスは個性と名付けた」

「うん。実際に個性ってあるのかなって……」

「そもそも個性という言葉は独自性を指す言葉。もつというならアイデンティティ。つまり個性の否定は人間性の否定にも繋がるだろう」

「そうなんだけど……」

「別の地方ではチート、異能力、技とか様々な言い方がされている。しかし俺としてはあれは個性という言い方がしっくりくるな」

「どうしてです？」

「チート……ずるではない。異能力……特異的なものではない。技

「……技術とも少し違う気がする。だから個性が一番それっぽい」
「なるほど……」

「聞きたいことはそれだけか？」

「お兄ちゃんの個性は？」

「ない。そもそも自分のここが周りと違う！　なんて分かる人はいないだろう。本来は無意識下で本人の自覚すらなく発動するものなんだ」

「待って。それじゃあ私のは……」

「ん？」

そこでナナはチャンピオンに全て話した。ナナのコピー能力について全てを……

「いや、それは個性の枠に収まらねえよ。どちらかというとき異能力だろ」

「やっぱりそうです？」

「瞬時に分析して自分に完璧に投影……やっぱりナナは天才だな」

「もつと褒めてくれてもいいんだよ？」

助けて。ナナのキャラ崩壊が止まらない……

いや、兄の前だからといってここまで変わるのか？

「……それじゃあ褒めたいからナナの話をもつと聞かせてくれるか？」

それからナナは様々な話をした。それは長い話で二時間くらいが過ぎる。チャンピオンはそれを静かに聞いていた。

「そうか。キンランと会ったのか。彼女は強かっただろう」

「でもお兄ちゃん！　知り合いなら言ってくれば良いのに！」

「聞かれなかったからな。しかし懐かしい名前だ。彼女とイツシユ地方に行つてシビシラスを捕まえた日のことは今でも鮮明に覚えている」

「そつか……」

「しかしキンランは相当強いぞ。一緒に旅をしていた俺だから分かる」

「分かつてるよ。だから勝ちたいの！」

「その試合は俺も見に行くよ。それじゃあ次は俺の話な」

「お願い！」

「まずアローラに行ってきた俺はコスモッグというポケモンについて調べた。その結果としてルナアローラもしくはソルガレオについて進化することが判明した」

「ルナアローラ……そういえばつきのふえ。シノノカップの景品だったつきのふえがルナアローラに関係があるとか……」

「コスモッグはエネルギーを使い果たすとコスモウムになる。そして祭壇でつきのふえとたいようのふえを同時に吹くと進化する」

「祭壇？ どのの？」

「ああ。大昔に日輪の祭壇、月輪の祭壇で進化は確認されたそうだが。しかし別の祭壇でも成功する可能性はゼロではない。もっというなら祭壇ではなくとも……」

つきのふえ。たしかボルノが手に入れて終わったな。それじゃあたいようのふえはどこにあるのだろうか？

「……大変！ お兄ちゃん！ たいようのふえだよね？」

「そうだが……」

「それはメアが持つてるの！ たいようのふえはメアの家宝なの！

あそこの家は大昔から音楽と根深い関係がある。いにしえのうたを知っていたり、日くつきの楽器を集めていたり……」

「なんだって！ メアは今のナナの話だとゴウー団に協力していたよな？」

「うん」

つまりたいようのふえは既にゴウー団の手元にあるのか。そしてつきのふえは国際警察の手元にあり。またゴウー団はコスモッグの身柄を手元に抑えている。

「……それなら俺に任せろ」

「お兄ちゃん、どうするの？」

「つきのふえを破壊する。取られるよりマシだろう。その件はこっちに任せろ」

もったいない気はするが仕方ないか。そもそも残しておく理由がない。

「……お兄ちゃん。つきのふえって人が作ったものなんだよね？」
「ああ」

「それなら壊しても無駄だと思う。向こうには音楽の天才のメアがいる。メアならたいようのふえの音だけでつきのふえの音を推測して新たに作れると思う」

「どうして言い切れる？」

「メアをトレースしたから。あの子は間違いなく天才……そのくらいやるよ。人が作った楽器ならメアは作れる」

「……ルナアールとソルガレオはウルトラホールを開き、その先にある異世界に行くことが出来る。俺もアルセ博士の実験で行ったことがあるが、ヤバい場所だ」

「そんなに？」

「アリスのギラティナはそこで捕まえた。ギラティナと同クラスのポケモンがいてもおかしくない。それにウルトラビースト。強力な上に数が多い。もしもウルトラビーストがデトワール地方に流れ込むようなことがあれば……」

「最悪だね」

ウルトラビーストか。恐らくナナ達なら勝てるだろう。しかし問題は数だ。チャンピオンは数千体規模を想定している。そうなるやさすがに厳しいかもしれない。しかしゴウー団の目的は既に果たされて事実上の解散のはずだ。そんなことには……

「ゴウー団は事実上の壊滅。だけどコスモッグとボスの行方が不明のまま」

「うん」

「そしてラルムの目的は達成済み……しかしコスモッグが気掛かりだ」

「そうだね」

「俺が恐れてるのはゴウー団というよりコスモッグが人に憎しみを持っていること。そして巧みに騙してラルムを利用して進化。そして人類を滅ぼすためにウルトラホールを開くんじゃないかと」

「それは……」

「優れたトレーナーはポケモンと会話に近いコンタクトが取れる。それでラルムが罪滅ぼしに……とか思い始めたらどうする?」

「……ないとは言い切れませんね」

「一刻も早くコスモツグの身柄を手元に収める必要がある。デトワール地方の平和のためにもな」

面倒なことになったな。悪意がないからタチが悪い。コスモツグを捕まえられれば全ての問題は解決なのだが……

「……トレース……ラルム」

「ナナ?」

ナナはそつと呟いた。そして数秒間だけ意識が飛んだようにボーとする。しばらくするとナナは意識を覚醒させて紅茶を飲み始める。

「間違いなくラルムはコスモツグを手伝うと思う」

「まさか人格トレースでラルムがどうするのか見たのか!」

「うん。だけどコスモツグの情報が不足してるから絶対とは言い切れない……」

ナナの人格トレース。こういう使い方も出来るのか。改めて思うが少しズルの領域ではないか? もはやなんでもありだ。

「既に動き始めてるか。ラルムの居場所とか分かるか?」

「そこまでは分からない。ラルムがどこまでの技術を保持してるのか不明。ただど地上にはないと思う。恐らく空中か水中……それで空中なら宇宙にでも基地を置いてない限り、既に見つかってるはず。そのことから本拠地は水中……」

「水中か……」

「そういえばメアが私と会おうと言ったのはストロベリータウン。そこは海の街として有名……」

「ストロベリータウン。そこを調べるとするか」

「私もジムバッジを7つ集めたら向かう」

「分かった。それとアローラの土産だ」

彼はそういうとナナに一つの巻物を手渡した。その巻物は『りゅうせいぐんの極意』と書かれていた。ナナは瞬時にこの意味を理解する。

「なるほど……りゅうせいぐんは秘伝の技だもんね」

「ああ。これでナナのドラミドロにりゅうせいぐんをおぼえさせてやれ」

それだけ言うとチャンピオンは去っていった。ナナは巻物を広げて目を通す。そして数秒だけ見ると僕をボールから出す。

「ダークライ。処分しといて」

「エ？」

「これは出回らせるべきではないわ。世界が滅びる」

まあ世界が滅びるかはさておき、出回っていいならネットとかでは撒かれるよな。それが現在もされていないというのはそういうことだ。僕は軽く炎を出して完全にやきつくす。そしてナナは店主にお礼を言つて軽く出ていく。そして街で『こだわりメガネ』という変なメガネを買つてテレポルト屋に頼んで広い荒野に行く。そしてドラミドロをボールに出して軽くなにかを教える。ドラミドロは頷くとナナはドラミドロに変なメガネを付けた。そして静かに一言。

「ドラミドロ。りゅうせいぐん」

「ドラアアアアアアアアア！」

ドラミドロが言葉にならない雄叫びをあげる。その瞬間に大量の流星が降り注ぐ。その流星は一つが地面にぶつかると小さな爆発を起こしてクレータを作る。しばらくすると砂埃でなにも見えなくなる。ドカン。ドカン。ドカンという音だけが聞こえる。数分が経つて砂埃がなくなる。そこはデコボコだった。地形が大きく変動している。

「てきおうりよく……こだわりメガネ。その二つの効果が適応されたりゅうせいぐんはどんなポケモンでも倒す」

ゴクリと生唾を飲む。とんでもない火力。恐らくナナの手持ちの中で最高レベルの火力。Zワザよりもさらに上に行く。これが今のナナの実力。そしてナナは静かに言う。

「これで四天王とも戦える。そして悪夢を見せるには充分ね」

ナナはニツコリと笑った。その後の話だが、このことは大きく話題となった。理屈は知らないが法律的には何故か問題ない。だからナ

ナが咎められることはなかった。しかし、その気になれば地形変動すら可能な凄腕トレーナーとして知られ、それにバトルタワーでの百人狩りも拍車をかける。そして数日後にはチャンピオンに一番近い人物と謳われるようになる。ナナはルーキーからデトワール地方で指折りのトレーナーと認知されていく。

79話 恐怖のジム戦

「我が名はアーモンド。はがねタイプの使用手である。チャンピオンの妹であり悪夢姫として名を知らしめるトレーナーナナ。よくぞまいった」

後日。ジムリーダーの帰還と共に真つ先にジム戦に挑むことになったナナ。彼女は僕だけで勝つつもりだ。そしてジムリーダーは口を開く。

「お主の覇気。既に四天王と同等以上。我では相手にすらならぬであろう。しかしバッジを簡単に譲る気はない。ポケモントレーナーはいつだってバトルの中で成長するものだ」

これは強いな。ナナがゴクリと唾を飲む。こういうトレーナーはバトルの中で成長してくる。もしかしたらナナと同じタイプだ。強敵との戦いというのは大きな成長に繋がる。

「ゆけつ。レジスチル」

「レ・ジジジジジジジジ」

「悪いが全力でいかせてもらう」

「レジスチル。いかなる攻撃も通さない鉄壁のポケモン。ダークライ。行きなさい」

そして二人は目線を合わせる。それと同時にバトルが始まった。指示もまったく同じタイミングだった。まるで先手必勝と言わんばかりに。

「これしかないな！ レジスチル！ ちょうぜつらせんれんげき！」

「漆黒の炎で溶かしてあげる！ 焼かれる悪夢を見なさい。ダイナミックフルフレイム！」

アザレアさんから貰ったホノオZ。それを使う。相手ははがねタイプなら決定打になりうる。しかし相手も同じだ。相手も自分の全力であるZワザで向かい打つ。爆発的な力がぶつかりあい、世界が大きく揺れる。しかしレジスチルは耐えるだろう。そんな確信があった。

「レ・ジジ……ジジジジ……ジ」

レジスチルはボロボロになりながらも耐えていた。ZワザでZワザを相殺したか。もつとも完全には消せずに大きなダメージを受けているようだが。

「悪夢姫のZワザを受け切るためにはこれしかなかった……それでもこの威力」

「ダークライ。あくのはどう」

僕は手をかざしてレジスチルに技を放つ。手からは紫色の鎖状の光線が放たれていく。今のレジスチルでは間違いない受け切れないだろう。

「レジスチル！ ラスターカノン！」

「ダークライ。もう一度あくのはどう」

レジスチルは苦しみながらも力を振り絞って銀色のビームで打ち消す。そしてナナは打ち消す度にナナはあくのはどうで追撃を命じる。レジスチルは呻きながらも何度もラスターカノンを放って対抗していた。そしてラスターカノンを討つたびに僕との距離をじわじわと近づけながら。まさか近づけば攻撃が通ると思っっているのだろうか。

「……なるほど。ダークライ。これは爆発するわよ」

「これで射程内だ！ よく頑張った！ だいぶくはっ！」

そういうことか。ナナの指示が遅れていたら危なかった。僕は体を完全に透過モードにしてレジスチルの攻撃をやり過ぎす。そしてしばらくすると戦闘不能のレジスチルがいた。

「……無傷だと？」

「私のダークライは強いだよ」

「なるほど。このポケモンはゴーストタイプの特徴である『透過』も持ち合わせているのか」

「さすがジムリーダー。見事な洞察力」

なんていうか悪役みたいだな。もつとも僕自身があくタイプだし、そういう方がしっくりとくるのだが。そしてアーモンドはレジスチルをボールに戻す。

「レジスチル。ありがとう。おかげでZワザの消費とダークライの特

性を掴めた。お前に頑張りは無駄にはしない」

「……良い関係ね。だけど私には勝てない。人は悪夢には抗えない」
「勝てなくともダーククライだけでも倒す！ いけっ！ エアームド！」

「ムドオオオオオ！（勝つ！ 絶対に勝つ！）」

出てきたのはエアームドか。さてどう攻めてくるだろうか。

「エアームド。空高く飛べ！」

「空中戦がお望み？ ならダーククライも飛びなさい！」

空中戦か。相手の地の利で勝つてこそその勝利というものだろう。僕はそのままエアームドを追撃するように飛ぶ。途中で何度かシャドーボールを放つがエアームドは全て回避する。

「恐怖を上げていくわよ。ダーククライ！ ナイトメアシフト46%！」

ナナからの指示が来る。それに従って一気に体にやみのエネルギーを循環させる。いつものように体が内部から裂けそうだが、ただ前よりも楽だ。体が明らかに成長して高度な負荷にも耐えられるようになっていいる。この調子なら瞬間的に60近くも出せるだろう。

「ならこちらも速度を上げるぞ！ ボディパーズ！」

それからエアームドの動きは格段に上がる。しかし僕の方が速い。エアームドが身を削って身軽になろうが僕の方が圧倒的に速い！
そしてボディパーズは耐久を落としてすばやさを上げる技。つまり一撃が先程よりも重く響く！ ポツ拳で身につけた技を今こそ見せる時だろう。エアームドの突進を躲して、首元に回し蹴りを入れて地面に叩き落とす。これで勝負はありだろう。そう思った時だった。一気に体が苦しくなる。そして視界も揺れてくる。一体なにをした……

「今だ！ エアームド！ ブレイブバード！」

「ムドオオオオオ（私の最後の足掻きを見よ！）」

そして倒したと思っていたエアームドが僕に突進してくる。あのダメージにエアームドは耐えられないはず。いったいなにが……

「なるほど。叩き落される瞬間にどくどく。そして特性がんじょうで

「ダークライの一撃に耐えたわけですか」

「ご名答。どくが回ればどんな強力なポケモンだろうが終わりだ」

「……これは仕方ないわね。ダークライ。戻って」

ナナは僕をボールに戻す。完全にやられた。まさか状態異常で攻めてくるとは思わなかった。僕一人でジムリーダーに勝つという目標が達成出来ないで申し訳ない……

「ポケモンを戻すか……」

「それじゃあミミツキユ。お願いね」

「ゴ……フツ……フツ（久しぶりのポケモンバトル……）」

うめき声みたいな鳴き声。これがミミツキユか。アリスから預かって手持ちに加えたとは聞いていたが実物を見るのは始めてだ。しかしピカチュウの布切れというよりはギラティナの布切れだな。地球でもミミツキユはポケモンをやつてなくても名前を聞くくらい有名だし、よく見かけたが……

「ミミツキユ？ タイプ相性を理解してないのか？」

「ゴースト技ははがねに等倍よ。そして技は全て避ければいいのでしょうか？」

「む……そういえばこのミミツキユは……」

「察しの通り四天王アリスのポケモン。少しワケありで預かっています」

「なるほど。それは強いわけだ」

さて、ミミツキユの実力。どの程度のものなのか見せてもらおうではないか。

「ミミツキユ。かげうち」

「ゴ……フツ（それは得意）」

「な、なにー！」

エアームドの影からミミツキユの影が現れた。それによりエアームドは一撃で落ちて戦闘不能になる。素早い一撃。あれを避けられるかと言われた正直に言うとも僕でも厳しいだろう。それに技の威力も低くはない。良くも悪くも安定しているだろう。

瞬間火力のドラミドロ、最速のスピアー、搦め手のムシャーナ、広

範囲攻撃のジャノビー。ポケモン毎の役割も決まってきたな。

「なるほど。しかしこれならどうだ」

現れたのはドリユウズ。これはミミツキユとの相性は最悪だな。彼はミミツキユというポケモンの定石を分かっている。

「俺の幼馴染にミミツキユ使いのトレーナーがいてな。ミミツキユに勝つためにはどうしたらいいかガキの頃に必死に考えた。それで行きついた答え。それははがねタイプのポケモンを使うことだった」

「……？」

「つまり俺がはがねタイプを使う理由は二度とミミツキユに負けないためなんだよ！」

「ええ……なにそれ……」

これにはナナも引いている。ていうかミミツキユが嫌われ過ぎだろう。こんなに可愛いポケモンなのに。そのなにか気に食わないのだろうか。

「ばけのかわでどんな攻撃でも無効。硬いはがねで攻めてものろいで体力を削る。拳句の果てにおにびで火力を奪う。そして隙あらばつるぎのまいでチュインチュインしてかげうち！ さらにミミツキユZとかいうワケの分からない必殺技まで持っていやがる！」

「……それがミミツキユってポケモンなんだから仕方ないじゃない」

「強すぎるんだよ！ このポケモンは！」

「結局のところミミツキユに勝てない自分が悪いんでしょ！ 完全に八つ当たりじゃない！ しかも強さだけで言うならムラツケオニゴリーの方が悪質よ！」

「ええい！ ドリユウズ！ アイアンヘッド！」

「ミミツキユ！ 避けなさい！ ドリユウズの特性はかたやぶりで下手しないでも一発アウトよ！」

ナナが髪をかきあげながら華麗に指示を飛ばす。

「……ゴフツ（わかった）」

そしてミミツキユがドリユウズの攻撃を間一髪で避ける。見るだけでむずがゆい。僕なら避けると同時にカウンターを決めるといふのに。

「ミミツキュ！ つるぎのまい！」

「させるか！ アイアンヘッド！」

「そのまま背後に回っておにび！」

つるぎのまいをしたミミツキュは一瞬だけ隙が生まれた。そしてドリユウズのアイアンヘッドがクリーンヒットする。しかしミミツキュは何故か背後に回って青い炎でドリユウズを炙って火傷にしていた。これは……

「みがわり。最初のアイアンヘッドの時にみがわりで避けた。あとはミミツキュは暗躍して隙が出来たから現れたわけ」

「みがわり。そんな指示は……まさか！」

「そう。髪をかきあげたのがみがわりの合図だったのよ」

「図つたな！」

「ポケモンバトルはそういうものよ。つるぎのまい」

再びミミツキュは踊りを見せて舞う。攻撃力を上げていく。まるで煽るかのような踊りだ。ナナとミミツキュの動きは息ぴったり。無駄というものがない。まるで相手の行動を手玉に取ってるような動きだ。

「火傷なんか知るか！ アイアンヘッド！」

「ミミツキュ。耐えてつるぎのまい」

ミミツキュにアイアンヘッドが直撃する。しかしミミツキュはなんともないようにきのみを食べながら再び舞う。このきのみは……「リリバのみ。効果抜群のはがねの攻撃を受けた時に技の威力を和らげる。それに加えて火傷状態。そこまでやればミミツキュでも耐えられるのよ。それじゃあかげうちといきましょうか」

「ゴフウ（おかのした）」

そしてドリユウズの影からミミツキュの影が現れてザクツと小さな手で突き刺す。それによりドリユウズは戦闘不能になる。とても無駄が無くて綺麗な戦闘。そういえばボール越しでナナの戦闘を見るのは久しぶりだ。ミミツキュの動きもだがナナの姿も美しい。いつもの黒いロリイタ服に加えて右目の薔薇の眼帯により触れてはいけないかのような芸術性を放っている。これは熱狂的なファンも増

えるわけだ。

「残り三体ね」

「……頼むぞ。ギルガルド」

「ギルツ！（おうおう！）」

出てきたポケモンはギルガルド。それと同時にナナは静かに呟いた。

「トレース。アーモンド」

ナナが手で長方形を作つて、そこからアーモンドを見ている。なんでも視界を限定することで情報量を抑えて脳の負荷を最小限にするとか。

「あなたの動きは全て見切つた。つるぎのまい」

「キングシールド……はっ！」

「あなたはミミツキユの攻撃力を下げようとかげうち読みのキングシールドをする。あなたの考えは全て分かるわ」

「くそっ！ ギルガルド！ かげうちだ！」

「ミミツキユ。かげうち」

この技はミミツキユの方が速かつた。ミミツキユは瞬時にギルガルドを切り裂いて一撃で戦闘不能に持ち込む。あまりに速い決着。ナナの読みが勝負を完全に分けた。

「それならこいつに任せるしかねえか！ ゆけっ！ ギギギアル！」

「ギギギ（いや無理）」

「ミミツキユ。かげうち」

またしてもミミツキユが一撃で倒す。そもそもつるぎのまいを三回したミミツキユの攻撃など並大抵のポケモンでは受け切れないだろう。アーモンドはミミツキユにつるぎのまいを三回もさせた時点で負けなのだ。そして残りは……

「まだだ……俺には最高の相棒がいる！ 頼むぜ！ ハッサム！」

「ミミツキユ。戻りなさい。そして頼むわよ。ドラミドロ」

ナナはミミツキユを戻してドラミドロを出す。ドラミドロは近くにいるだけで足が震えそうになる覇気を放ちながらフィールドに降臨する。この様はまさしくドラゴンと呼ぶに相応しいものだった。

「負けるか。一気に決めるぜ！ メガシンカだ！」

「ツサム（ああ）」

ハツサムの姿が大きく変わる。しかしナナは動揺の一つも見せない。まるで勝ちを確信してるかのよう。そしてナナは静かに言う。「新しい戦闘スタイルが確立すると実践で試したくなりますよね。ドラミドロ。りゅうせいぐん」

そこからは一瞬だった。降り注ぐ流星にハツサムは成す術もなくやられる。明らかに過剰な火力。攻撃を終えた時にはフィールドは原型を留めていなかった。明らかにドラミドロの火力が異常であると身を持って実感する。一言で言うなら戦略兵器。ナナ曰くりゅうせいぐんは一度撃てば次の威力は下がるらしい。つまりバトル中にどんなポケモンでも一度だけ一撃で倒すのがドラミドロである。

「う、うそだろ……」

「私の勝ちです。アーモンドさん。ジムバッジを貰えますか？」

そしてナナは本気のジムリーダー相手に自分のポケモンを一体もやられることなく勝ちを収めた。ナナのジムバッジはこれで六つ。残すは二つとなった。

「完敗だ。正直に言うとお悪夢だった。もう二度とやりたくねえ……」

「まあ人に悪夢を見せるのが私ですから」

「ダークライは素早さも攻撃力も相当なもの……ミミッキュに関してはナナが怖かった。なにをしても全て読まれる。まるで自分の脳が弄り回されているみたいだ。そして最後のドラミドロ。あれはゾツとしたよ。ポケモンであそこまでの威力の技が出せるんだって」

アーモンドはナナにメテルジムバッジを渡す。ナナはそれを大事に握りしめた。

「すまないが当分の間は俺の前で姿を見せないでくれ……もうポケモンバトルってなんなのか分からなくなってきた。それに悪いが滅茶苦茶怖いんだ。今でも生きた心地がしない。体中に寒気が走ってる……バトル中も頑張って明るくしてたがレジスチルが倒れた辺りから冷や汗が止まらないんだ」

「分かりました。ポケモンバトルありがとうございます」

ナナの五つ目のジム戦。それは完璧な勝利であり、とても後味の悪い
終わり方をした。

80話 波乱の気配

「ダークライ！ 避けてシャドーボール！」

電光掲示板にはナナには6。相手には2の文字。これは残りのポケモンの数をあらわす文字。アーモンドを倒して五つ目のジムバッジを手にした翌日にナナはテレポートで真つ先にミヤコノ遺跡に行った。そして現在は6つ目のジム戦だ。相手はケラリアというじめんタイプの使い手。

「つええ！ 俺が戦った誰よりも強い！ 最高だ！ マンムー！ つららばりで叩き落せ！」

つららばりが五発程度飛んでくる。一つはシャドーボールを破壊するが残り四つはこちらに向かってくる。僕はそれを闇の結晶を作って、それを盾にして受け止める。攻撃が止むと同時に体を透過させて闇の結晶をすり抜けてマンムーに接近する。

「今よ！ あくのはどう！」

ナナの指示通りにゼロ距離であくのはどうを放つ、マンムーを吹き飛ばす。しかしマンムーは根性で耐えていく。そしてケラリアもそれを信じていたかのように絶妙なタイミングで指示を出す。

「カウンターのじしん！ そしていわなだれ！」

地面がぐらりと揺れる。それと同時に空から岩石が降り注ぐ。僕は再び闇の結晶を作って傘にして攻撃を凌ぐ。結晶術も身につけてきた。しかし体力の消耗が激しい。結晶術を使う前提ならナイトメアシフトを20%くらいに抑えなければならぬ。守りは硬くなるがマンムーに手こずるくらいに威力もスピードも足りていない。人間の時で言うならば酸素が足りていないような状況だ。全力のナイトメアシフトと併用すると3分と体力が持たないだろう。

「ダークライ！ シャドーボールで追撃！」

「マンムー！」

その一撃でマンムーを仕留める。これで相手は残り一体。こちらも体力が切れてきた。さすがに本気のジムリーダーのポケモンを6体も相手にするのは厳しいな。

「お疲れだぜ。さて俺の相棒がいくぜ！　こんな楽しいポケモンバトルがもう終わりなんてつまらねえぜ！　いけっ！　シロデスナ！」

「デスナアアアアアアア（神に等しき私に逆らおうとは愚かな）」

ボールを投げると同時に現れるのは全長5mくらいある砂で出来た大きな城だった。しそしてシロデスナはメガシンカしないポケモン。つまり彼はメガシンカを使わないタイプのジムリーダーということか。

「世界で一番大きなシロデスナを使うトレーナー。これが噂のシロデスナね。ダイマックスはもつと大きいのかしら……」

「ダイマックス？　なんだそれ？」

ダイマックス。なんでも遠くにあるガラル地方でのみ見られるポケモンの巨大化現象の名称だとか。もつともデトワール地方では不可能であり、ナナも噂話で聞いたくらい知識しかない。そして現在ナナが最も気になっている事象の一つだとか。少なくともチャンピオンになったら真つ先にガラル地方に行こうとするくらいには。

「とりあえず行くわよ！　ダークライ！　あくのはどう！」

渾身の一撃でシロデスナを攻撃する。しかしシロデスナは少し痛がる素振りを見せるだけでピクリともしない。圧倒的過ぎる質量に全てが飲み込まれる。

「シロデスナ。どくどくー！」

その言葉と同時にシロデスナの口から毒の波が放出される。これで辺り一面が毒の海だ。もうこれはどくどくの範疇で収まる技ではない。これはヘドロウエーブと言っても過言ではないな。そう思いながら僕は空に飛んでモモンのみを食べて毒を癒しながら考える。「質量は時にして最大の武器ね。ただシャドーボールを残り八発撃てば落ちるかしら。そしてこの巨体では避けられない」

「心配無用！　そのまえに倒す！　シロデスナ！　ギガインパクト！」

「デスナ！　（これぞ神の鉄槌！）」

シロデスナは大きく飛び跳ねた。まさかあの巨体で飛ぶだと！　そして空中で体を捻りタツクルを決めようとしてくる。あまりに悪

質だ！ その巨体でタックルは悪質過ぎるだろ！ もつとも動きも遅いし対処しようと思えば簡単に出来る。

「ダークライ。ダークホール」

「なにつー！」

「それからゆめくい！」

僕は暗黒の玉を作り、それをシロデスナにぶつける。シロデスナは睡眠状態となり体から力が抜けて一気に地面に落ちる。僕は軽くシロデスナに手を振られて彼の夢を食べる。シロデスナはそれに呻く。これは良い夢だ。美味しいな。

「どんなに巨体で硬くても精神に作用する攻撃には対処できないでしよ」

やがてシロデスナは戦闘不能になる。そこでナナは笑顔で求める。

「良いバトルだったわ。ジムバッジをくださるかしら？」

※

そしてナナのジムバッジは6つとなった。残すはストロベリータウンのジムリーダーとキンランさんのみ。遂に終わりが見えてきた。しかしストロベリータウンはメアとの約束の地。もしかしたらゴウー団との衝突もあるだろう。今の二つのジム戦のように簡単にいくとは思えない。これからの相手は今のナナですら五分五分の相手だ。それこそ人格トレースを多用することも増えていくだろうな。そんな中でナナはある人と待ち合わせでミヤコノ遺跡にある喫茶店にいた。僕達はその間に適当にリラックスしてきなさいとボールから出されて近くの公園にいた。

「……適当にリラックスねえ。そうはいうけど私達のポケモン会議のことを把握して時間をとってくれたんじゃないの」

ジャノビーが適当に日向に当たりながら言う。間違いなくそうだろう。考えてみたらミミッキュが加わったことによる新人歓迎会もまだである。それもやりたいが……

「それだけではないだろう。これからの相手はキンラン。その対策を練っておけという意志もあると拙者は思う」

「キンランってそんな強いのか？」

ああ。そういえばキンランさんと戦った時にジャノビーはいなかったな。軽く説明しておくか。

「前に戦った時は本気の欠片も出していない彼女に手も足も出なかった」

「なるほどね。それでポケモンは？」

「エースにピカチュウとカプ・コケコ。他にはシビルドンにマルマインにバチユル、エモンガ……把握してるのはそれだけだ」

「他の四体はともかくカプ・コケコとピカチュウは選出確定で良いだろう」

ムシャーナが退屈そうにそう言う。その認識で間違いないだろう。そして問題はピカチュウ。前に暴走してナイトメアソフト100%になった僕を意図も容易く対処していた。あれは恐らく伝説に匹敵する。アリスの言っていた『鍛えて伝説の域に到達したポケモン』に該当するものだろう。

「それなら私は二体以外の四体を倒すわ。五体なら規格外の二体でも勝てるでしょう」

「ジャノビー。それは可能なのか？ 妾には不可能だと思うぞ」

「まだ時間はある。それまでに極限まで鍛えるのよ。それに私はまだジャローダへの進化を残しているし、恐らく私はカプ・コケコとピカチュウの前では足手纏いになる」

「いや、其方なら……」

「無理。私はナナの指示があってもダーククライに負けた。そんな私がそれ以上の存在に太刀打ちできるとは思えない」

「まあもつともだ……」

その会話に静かにミミッキュが入る。ジャノビーは少しムスツとした表情を見せるが特に突っかかる素振りは見せない。

「ジャノビーの戦い方は特性で威力の上がったリーフストームでの殲滅。そして一発芸だけでは相手のトップクラスには勝てない」

「……分かってるわよ」

「しかし時に一つを極めれば最大の武器となる。それはチャンピオンのニヤースで理解したはず。つまり戦い方が悪いわけではない。ボ

クが言いたいことはこの短期間でも鍛えればエースではない相手くらいなら対処出来るだろうということ。つまりジャノビーの四体討伐には賛成だ」

「なんか癪な言い方ね」

「そして問題はピカチュウ。下手したらピカチュウ一体で全滅の可能性すらある」

「ピカチュウが強いのは分かるけど具体的にどのくらい分からないわ」

「アリスの指示があるギラティナと互角に渡り合えると言えば分かるか？」

その言葉に全員が息を飲む。そのレベルのポケモンにどう勝つんだと。

「キンランは四天王に匹敵するトレーナー。それ相応のポケモンを使ってくる」

この流れはマズいな。雰囲気が悪くなるし、重くなる。ある程度まとめて指揮をとって雰囲気明るくせねば。

「……そもそもキンランさんを相手にする時点でそれは分かっていたはずだ。いまさら恐れることはない」

「そうだな！ ダークライの言う通りだぜ！」

「それにドラミドロのりゅうせいぐんもある。使うタイミングを間違わなければ一気に追い詰められるはずだ。そしてナナは間違わない」

とりあえずは全員が前向きだ。大きな問題はないだろう。そしてジャノビーは一人で四体を倒すといった。恐らく僕はピカチュウと戦うことになるだろう。つまりピカチュウを倒すことを集中しなければ。

「恐らく拙者達の中で全体を見れば一番強いのはダークライ。拙者達はダークライを温存して如何に相手を消耗させられるかということを考えればいい」

それからしばらくはガヤガヤといった話し合いになる。どんなに入念に作戦を組み立てても相手の出方次第では無意味になることもある。これが無駄とはいわないが大切なのは想定外の事態に対応す

る能力だろう。

「待たせたわね」

そしてナナが戻ってくる。近くにはベアルンがいる。彼と待ち合わせをしていたのか。これからは食事にも期待できるな。

「みなさん。お久しぶりです。急に連絡がきたと思つたらナナは痛々しい姿になられて……正直に言うとう今の私になにが出来るのか。まったく分かりません。それでも私に出来る限りのことは……」

「ええ。これからは恐らくメアと会うことになる。その時にまた三人で旅が出来るように……なにが出来るかじゃなくて一緒にいてほしい仲間だから呼んだの」

そうか。キンランさんとのバトルの前にメアとも会うんだよな。つまりゴウー団との本格的な対決になるかもしれない。

「次の街はストロベリータウン。ここからは折角だし船で行くわ。とびっきりの豪華客船のチケットを取れたから楽しみましょ？」

「おおー。それはいいですねー！」

その時だった。バキバキと音がした。音は空からした。見上げる空には亀裂が入っていた。それにより辺りはガヤガヤと少し騒がしくなる。興味本位にカメラを構える人もいれば、怯えて泣き始める子供もいる。しかしそれだけで数分が経とうがなにも起こる気配はなかった。あれはいつたい……

「ナナさん。なんですかあれ？」

「おそらくウルトラホールが開き始めているのね。あつちの空も見なさい」

「同じようにヒビが！」

「あそこからウルトラビーストという強力なポケモンが現れる。そして全ての元凶はゴウー団よ」

「なんか大変なことになってきましたね……これはもう私達がどうこう言えることじゃない気がするんです」

「悪いけど今の私はデトワール地方でも指折りの実力。既に戦力として数えられているはずよ」

ウルトラビースト。それに関してはアルセ博士の研究テーマであ

り、ナナも性質を理解しているのが幸いか。下手したらラティ兄妹やレジ系にも匹敵するとされるウルトラビースト。それとどう戦うべきか……

「もしかしたらウツロイドの一匹くらいゲット出来るかもしれないわね」

そういえばナナは前にウツロイドが欲しいと言っていたな。まさか叶うチャンスが訪れるとは思っていなかった……

「ていうかウルトラビーストってなんですか？」

「簡単に言うなら『異世界のポケモン』よ。そして異世界とこちらの世界を繋ぐ穴をウルトラホールと呼ぶの。また確認されているウルトラビーストは11種類。それに最近ではお兄ちゃんの調べでコスモッグというポケモンもウルトラビーストとわかったみたいだから正式に認可されれば増えるわ。それに下手したらアリスの使うギラティナというポケモンも……」

そこからナナはウルトラビーストの説明を始める。

まず神経毒で洗脳して他の生命に寄生するウツロイド。そして次に可燃性ガスで全てを焼き尽くすテツカグヤ、数百リットルもの毒を保持して1万メートル先まで、その毒を飛ばすアーゴヨンに有機物や無機物も全て食らいつくすアクジキング。その他にもマツシブーン、フェローチエ、デンジュモク、カミツルギ、ベベノム、ズガドーン、ツンデツンデといったポケモンの説明をしていた。

またネクロズマの名前が出てないことから恐らくネクロズマの確認はされていないのだろう。しかしどれも災害級。一体でも野放しにしたら大変なことになるのが分かりきっている。

「それ本当にポケモンですか？」

「今のところはそうなっているわ。モンスターボールには入るし、自分を捕まえたトレーナーには従順になるみたいだから。全世界規模でも一握りだけどウルトラビーストを使役するトレーナーもいるみたいだし」

「なるほど……」

「ただ普通のポケモンと比べて危険なものも事実ね」

そんな話をしていると出港の時間となる。ナナ達も船に乗り込む。目指す先はストロベリータウン。7つ目のジムがある地にして、究極のリゾート地。街の建物は全て純白であり、地球にあるギリシャのサントリーニ島を連想させる。そんな島を前に僕は不思議と胸騒ぎがしていた。

7 VSウルトラビースト 81話 オープニング

豪華客船に乗船して初日の夜。ナナはいつもより派手に装飾された黒いロリィタ服を着ていた。なんでもドレスコードがあるとか……

そこでナナは愉快に様々な人と会話していた。その面子は大手企業の社長とかポケモンリーグの運営や政治家に遠くの地方の博士といった大物揃い。まるで貴族の食事会のような雰囲気。そしてナナも怖いくらいそこに馴染んでいる。

「ナナ殿。我が社と契約して専属トレーナーに……」

「そういうのは間に合っておりません。私の既に二口ロクス社から多額の援助を受けておりますから」

「ほうほう。いくらくらいの……」

「それを聞くのはマナー違反ですよ」

しかしナナに接待術のスキルがあつたとは。ナナのことが気になる人は多く先程から質問攻めにあっている。その中でも大きく話題になるのはドラミドロによる地殻変動の話である。はたしてナナが一人でやったのかと。ナナはそれに関しては何のコメントとしており、参加者の間で様々な推測がなされていた。ナナは基本的に他人に自分のことを多くは語らない。そのためナナという人物は世間では多くの謎に包まれている。

世間では『チャンピオンの妹であり、バトルタワーで百人斬りをして、地殻変動すら容易く行う銀髪黒服の美少女であり、ダークライという未知のポケモンを使う』ということ。これだけ聞くとたしかに話題になるなという方が無理な話である。

何故このようなことになったのか。これは偶然の産物によりものである。まず第一にナナが乗った豪華客船で偶然にも貴族たち食事会が予定されていたこと。そして第二にナナがなにを思ったのか話しかけた人が食事会の主催者だった。そこからナナは意気投合して

食事会に招かれることになったのだ。しかしナナがどうして参加したのか真偽は不明のままだ。

「そういえばナナ殿。ダークライというポケモンはどこで手に入れたのかね?」

「どこだと思います?」

「ナナ殿のポケモンは闇を使うと聞く。つまり闇の中……」

「ご想像にお任せしますよ。メルテラス卿」

そんなナナの回答。それによりナナの話は大きく膨張されて伝わることになる。まったく人騒がせなことだ……

「しかし空が不気味だ。このデトワール地方の未来はどうなることやら」

「そうですね……特になにもないといいですね」

ナナは空にまるで無知であるかのように振る舞う。これは面倒な会話を避けるためということが見て分かる。そんな中で一人の老人が言う。それはナナを誘った主催者の老人だ。なんでもデトワール地方の政治家の一人とか……

「しらばっくれるのもやめんか。メルテラス卿」

「なんのことかな?」

「あの空はウルトラホールが開く兆しということはここにいる誰もが承知のはず。無論その悪夢姫も」

「私は知らないとは一言も言ってませんから」

なるほど。たしかにここにいるのは大物揃い。そういう表舞台に出ない情報にも精通しているというわけか。

「お主はアルセ博士の教え子。ウルトラビーストに関しての最先端の知識がある。それで気付かないわけがない」

「ええ。あれは誰がどうみてもウルトラホール。しばらくしたら大量のUBがデトワール地方に放たれますね」

それと同時にナナがボールを投げる。それにより僕が外に出される。会場の空気が一変して張り詰めたものとなる。ナナはその中で静かに言う。

「あなた達はなにを考えているのですか? どうして落ち着いている

のですか?」

「対策があるからだよ。ウルトラビーストに対抗できる戦力をぶつける」

「……?」

「ゴウー団が作り出したダークポケモン。野生のポケモンを全てダークポケモンにすればウルトラビーストにも対応できるとは思わないかね?」

随分と警戒心が薄いのかペラペラと喋る。そんなに口が軽くいいのだろうか。

しかし、なんてことを考えているのだろうか。そんなことが許されないはずがない。僕は少しだけ体の底から沸き立つ怒りを隠せずにいた。しかしナナだけは冷静にいた。まるで知っていたかのように。

「そんなことは誰もが思いつく。まるで名案だという風には言わない方がよろしいかと。ご自身の価値を落とすことに繋がりますから。そしてあなた達はUBを舐めている」

「それはどういふことかね?」

「その程度では焼き石に水。UBには意味が無い。無駄な犠牲を出すだけ。ただちにやめなさい」

まさかナナはこの計画を阻止するために豪華客船に乗ったのか。しかしどうしてそのことを知っていたのだろうか……

いやナナは知っていたのではないな。恐らく人格トレースで理解したんだ。この偉い人達を人格トレースして計画の中身を予測した。なんて荒業を……

「そんなやってみないと分からないだろ」

そして老人がボールを投げる。現れたのは禍々しいオーラを放つバンギラスだった。間違いなくダークポケモン。それに関してはナナは挑発するように言う。

「他の方はポケモンを出さないのですか?」

その声に釣られて様々なダークポケモンが出てくる。その数は18近くいる。また多くがドラゴンポケモンという強力なポケモンが

揃っている。

「バンギラス、はか……」

「ダークホール」

老人が指示を出すより僕の方が速かった。僕は闇の大玉を作り、そこからマシンガンのように玉を発射する。その玉に触れたポケモンは全て深い眠りに落ちていく。ナナは静かに言う。

「私のポケモンに手も足も出ない程度のダークポケモン。それが戦力になると本気でお考えですか？」

* * *

しばらくしてナナが事前に連絡していた国際警察のボルノがやってきて、全員が逮捕ということと終わりを告げる。しかしここにいるのは大物ばかりで恐らく権力ですぐに釈放されるだろうとボルノは言っていた。だがナナは既に興味がなかった。

「しかしよく気付いたな。大手柄だぞ」

「偶然よ。それよりボルノ。国際警察の方でUBはどう対応するつもり？」

「ああ。こいつを使うつもりだ」

ボルノはナナに一つのボールを見せた。それは歪な形をした青いボールであり、初めて見るものだった。ナナもそのボールは初めて見るように頭にクエスチョンマークを浮かべていた。

「これはウルトラホール。UBを捕まえるためだけに作られたボール。これをチャンピオンや四天王にジムリーダーなど信用できる人物にだけ渡して捕獲してもらう。そして捕獲したUBは全て国際警察で管理する」

「たしかにUBは普通のボールじゃ入りにくいという研究結果があったものね」

「そしてナナにはこれを……」

そんな時にナナに紫色のボールが渡された。これは僕でも知っているボール。モンスターボールの中でも最強。どんなポケモンでも捕まえるという……

「これはマスターボール。ありとあらゆるポケモンを確実に捕まえ

る」

「ボルノ！ そんなものどこで！」

「前に任務で悪の組織と抗争した時の戦利品。オラは使い道がないがナナなら……」

「ありがとう！ 大事に使うわ！」

いや、それはナナに渡してはいけないだろう。ナナは『ボールをポケモンに当てられない』という致命的な弱点持ちだぞ。いや投げなければどうにでもなるのだが……

「それとナナ。巷で話題の覆面の少女の話だ」

「あの悪党狩りの……」

「それがメアって話なら知ってるわ」

「それだけじゃない。ドクソノ含むマリアの言っていた五人が全て彼女によって捕縛された。一時的な精神崩壊状態で」

「一時的？」

「ああ。一週間くらいで戻るんだが、その間は発狂し続けるんだ。まるで心が壊れたかのように」

「メロエツタの歌は人の感情を操る。使いこなせば人の心を壊すくらい可能か……」

メロエツタってそんなこと出来るのかよ。随分と怖いポケモンだな。

「そしてオラもメアと戦った。結果は一体も倒せず惨敗……」

「ウソでしょ！ 一体も倒せずボルノが負けた？」

「そうだ。どんなにダメージを与えてもメアの歌で傷が治る。そして身体能力も上がってく。まるで異能力……」

「私と同じことが出来るというわけね」

メアの歌。まさかレベルを更に上げていたとは。もしも相手するとなると恐ろしいな。下手したら四天王クラスの強敵。それにナナも言わないがメアのそれは……

「ナナ。メアに勝てるか？」

「どうかしら……正直に言うとなんか厳しい戦いになると思う。話を聞いた限りだと今のメアはそれほどまでに強い。だけどメアとは私が決着

をつける」

それだけ言うとナナをボルノは別れた。豪華客船一日目は少し荒れて終わりとなる。ナナは自分の部屋に戻ると真っ先にベッドに戻ってダイブする。

「疲れた！　なんで偉い人ってああなのかしら！」

先程までの態度が嘘のようだ。それからはナナの愚痴は止まらない。そして数十分の間マシシンのように愚痴を言うとナナはシャワーを浴びて眠りについた。

時は深夜。僕も眠りについてみると、とても綺麗な歌声で起こされた。僕は寝ぼけながら誰もいない甲板に行く。誰もいないはずの甲板にはメロエツタがいた。明るい月光がメロエツタを照らす。その姿はとても可愛らしく目を奪われそうになる。

しかし瞬時に我に返って僕は戦闘態勢をとる。メロエツタはメアのポケモン。ここにすることはつまり！

「なにもしないわよ。ダークライ」

「信じていいんだな？」

「ていうかボールから出ていいの？　周りに悪夢を見せるんじゃない？」

「その心配はするな。特性がきずなへんげに変化したみたい」

「なんそれ？　サトシゲッコウガじゃあるまいしそんなこつてあるの？」

「サトシ？」

「アニメのピカチュウを連れたキャラクターよ。ここの世界ではないけど転生者の貴方なら分かるでしょ？」

「ああ。そういえばアニメの主人公の名前はサトシだったな」

この世界にいると忘れそうになる。自分が前は人間で別世界にいたこと。そしてポケモンの世界がゲームだったということ。メロエツタは唯一の同郷で話も分かるんだよな。

「あれからどうだった？」

「ギラティナに襲われて死ぬかと思った」

「うそ！　ギラティナいるの！」

「四天王のポケモンだけだな。なんでもウルトラホールの先の世界で捕獲したとか」

「ああ。そういえばウルトラサンムーンでもウルトラホールの先で全ての伝説のポケモンを捕まえられたっけ。この世界でもそこは同じなんだ」

「それ初耳なんだが」

「ほんとに知らないのね……USUMで全ての伝説のポケモンが捕獲出来るのは有名よ」

「それでメロエツタの方は？」

「メアの指示で色々な悪い人を倒したわ。そして……ラルムがコスモッグに罪滅ぼしをしたいと言い出した。そして私はコスモッグの望みがウルトラホールの先の世界に帰ることだと知った。そしてつきのふえを国際警察から奪って、メアの持っていたいようなふえを使って……」

いや、国際警察から奪っていたのかよ。随分とザルだな。ていうかチャンピオンもそれを把握してないだろ。報告、連絡、相談が出来ていないな。マジで。

「コスモッグはルナアールになった。そしてルナアールは世界を滅ぼそうとウルトラホールを開こうとしている。そして今はメアとラルムが一睡もしないで戦っている」

「随分とマズいことになってるな」

「メアは巻き込んでゴメンって言って私を逃がした。だから私は野生に戻った」

「メロエツタはどうしたい？」

「メアの元に戻りたいしメアを助けない。しかし今の私には無理。だからここに来たの」

しかしメアを助けないか。そのためにはルナアールを倒さなければならぬ。どうしたものか。

「状況は？」

「最悪。戦ってる場所はウルトラホールの先の世界。そしてルナアールだけじゃなくて大量のUBもいる」

もしメアとラルムが負けたらUBがこちらの世界に流れ込んでくるってことか。それはとんでもないことだな。もう既に戦いはゴウー団との対決ではなくUBとの対決に形を変えているのか。

「捕まえても強引にボールから出る。そして生きてる限りウルトラホールを開こうとする。つまりルナアーラをどうにかしない限りは……」

「厄介だな」

「だけど、それなら一つだけ方法がある」

「どんな？」

「記憶操作。ルナアーラの記憶を奪えばいい」

「ユクシーを連れてくるというの？」

「それしか……」

そんな時だった。欠伸をしながら一人の少女がやってきた。その姿は間違いなくナナだった。まさか僕が無断でいなくなったことに気付いたのか……

「そういうことならオーベムね……あのポケモンは記憶操作できるから」

ナナが寝ぼけながらメロエツタを気にも留めることなく言う。まず普通に会話の内容を理解してすることにツツコミを入れたいがナナの場合は分析が出来るからな。恐らくその類だろう。

「オーベム！ その手が！」

「ただオーベムなんてどこにいるのかしら……とりあえず私はオーベムを連れていけばいいのね」

なるほど。つまり今後の課題はオーベムの捕獲か。ユクシーを捕まえるよりは現実的になってきた。しかし記憶操作って恐ろしい能力だな。

「それとメロエツタ。ウルトラホールには行けるのかしら？」

ナナも段々と目が覚めてきたようで受け答えがすっかりしてくる。たしかにウルトラホールに行けるかどうかは大きな問題だ。

「分からない。私を出して穴は閉じたから……」

「なるほど。それならオーベムの搜索は国際警察に任せましょう。私

達はウルトラホールの開き方を探すわ。それとメロエツタ。私の傍を離れないでね」

「え?」

「あなたを欲しがる輩は山のようにいる。もしも変なトレーナーに捕まったらメアに合わせる顔が無いわ」

そしてナナはメロエツタを保護するつもりらしい。トレーナーは原則としてポケモンを6体までしか連れて歩いてはいけないという法律がある。そのため今のナナがメロエツタを捕まえた場合、ナナは自分のポケモンを一体どこかに預けなければならなくなるのだ。

つまり保護と言ってもメロエツタをボールに入れるのは不可能だ。

「……ダークライ!」

そんな時だった。ナナが血相を変えて僕の名前を叫んだ。それとヒビの入っていた空が大きく割れて穴が開く。そこから一匹の白いゴキブリのようなポケモンが素早く飛び去っていくのが見える。あれは恐らくウルトラビーストだ。僕は考えるより先に体が動いていた。飛ぶUBの前に立ちふさがり、あくのはどうで吹き飛ばす。しかしそのポケモンは空を蹴り、華麗に回避。そのまま甲板へと降り立った。ポケモンを見てナナが静かに言う……

「UB02ビューティー。正式名称フェローチエ。厄介な相手ね」

「かぶりん!」

そしてフェローチエは理解できない鳴き声を発した後にナナに飛び掛かった。

82話 UBと海の王子

ナナに飛びかかるフェローチエ。それをメロエツタが蹴り飛ばす。メロエツタは既にステップフォルムに変化している。そして蹴り飛ばしたフェローチエに瞬く間に追撃をかける。小さな拳から放たれるパンチは真空波を生み出し、体重の軽いフェローチエの動きを縛る。そして動作の途中で蹴りを交えて的確にダメージを与えていく。そして分が悪いと判断したフェローチエは地面を蹴り、とんぼ返りでメロエツタと距離をとる。しかしメロエツタはそれを許さず、ボイスフォルムに変わり、すぐにシャドーボールで追撃へと入る。しかしフェローチエはメロエツタの技を全て叩き落す。それをメロエツタはチャンスと言わんばかりにナナを庇うようにナナの傍に立った。

「メロツッ！（ナナは私に任せて！）」
「ウム」

これでナナを気にせず戦える。しかしフェローチエの動き。あれは想像以上だ。恐らくメガスピアー以上。あの動きに対応できるとはとてもじゃないが考えにくい。

「ダークライ！ 正面から来るわよ！」

ナナの指示と同時にしゃがんで回避。フェローチエの攻撃はナナの予知無しでは回避は

不可能だ。そしてナナが一瞬でもフェローチエから目を離したら負ける。ナナもそれを分かっている。だからナナは全神経をフェローチエに集中させているはず。

せめてナナに楽をさせられればミミッキュやジャノビーといったポケモンを出せて少しは有利になるのだが。

「右下よー」

後ろに下がりフェローチエの右下からの蹴りを回避。そしてナナがなにか喋ろうとするが間に合わない、フェローチエは足を振り上げ、僕の脳天に綺麗なかかと落としを入れた。それにより頭が割れるように痛い。しかしフェローチエは止まることなく連撃を仕掛けてくる。僕は瞬時に体を透過させてフェローチエの攻撃をやり過ごす。

「かぶりん!？」

フェローチエはそれに少し動揺を見せた。あまりに速すぎる動き。連撃をされたらナナの指示も間に合わない。そんな時だった。ナナがフェローチエに背中を向けて走り出した。フェローチエは瞬時に僕からナナへと攻撃の対象を変える。しかし僕はなんとかフェローチエの動きに対応して、ナナとフェローチエの間に闇の結晶を作り、盾にする。

そしてナナはそのまま海へと身を投げる。それにメロエツタは軽い動揺を見せる。しかしナナは落下する中で腰に手を回してボールを投げていた。

「信じてるわよ! スピアー!」

「スピッツ (任せろ)」

スピアーはナナを無視して上に飛んでいく。そして上に飛びながら光に包まれて姿を大きく変貌させ、メガシンカした姿となる。その姿はとても禍々しく、痛々しいものだった。しかしメガスピアーは苦しみに耐えて戦闘態勢をとっている。そしてメガスピアーは音を置き去りにしてフェローチエを吹き飛ばした、しかしフェローチエも同時にメガスピアーに蹴りを入れる。それにメガスピアーは少し苦しむ素振りを見せるが、瞬時に吹き飛ばしたフェローチエへの追撃へと転ずる。メガスピアーは連続的な突きで的確にフェローチエを突いてダメージを与えていく。それと同時にナナがドラミドロに乗って海中から脱出。そして命じる。

「スピアーはエレキネットでフェローチエを抑えて!」

指示から一瞬の間もなく放たれたエレキネット、それによりフェローチエは数秒だけ身動きを封じられる。その数秒。たったそれだけで充分だった。

「ダークライ! ここで決めるわよ! この世の混沌を全てこの身で受け止め、逃れようのない闇を体感しなさい! ブラックホールイクリプス!」

ナナの口上と同時に僕に力が湧いてくる、そして大きなブラックホールを作り出し、それをフェローチエに叩きつけた、ドカンと大き

な爆発音と同時に船がぐわあつと大きく揺れる。そしてブラツクホールが消える頃には戦闘不能になったフェローチェがいた。

「ウルトラビースト……とんでもなく強いわね……」

ナナがその場に膝をついて息を切らしながら言う。そしてスピアーのメガシンカを解除してボールに戻す。しかし一体でこれだ。Zワザを使わされるくらいに強い。それが数百規模で襲ってくるのか。考えただけでゾツとする。

「な、なんの騒ぎだ!」

そして船の振動で起こされた観客達が慌てて飛び出てくる。近くには戦闘不能のフェローチェ。見たことないポケモンに観客達は動揺を隠せずにいる。そしてメロエツタは透明になって隠れている。

「あ、あそこの少女は悪夢姫じゃないか!」

「はい。私は悪夢姫ナナです。ただいまポケモンによる襲撃がありましたので少し対処していました」

「ポケモンの襲撃!？」

「相手はここに倒れている新種のポケモン……とりあえずボルノという男の子を呼んできてもらいますか」

そしてボルノがやってきてウルトラボールでフェローチェを捕獲。そうして襲撃事件は幕を閉じた。ウルトラビースト。一体なら手に負えないほどではない。しかし複数体に襲われると厳しくなるな。そしてナナの部屋でメロエツタは治療を受けていた。

「もう酷い怪我じゃない。ちゃんと身を委ねなさい」

メロエツタはフェローチェとの戦いの時に『いにしえのうた』を歌わずにフォルムチェンジをしていた。その際に少し体を痛めたらしい。それよりも問題はナナだ。

「ナナさん。シチュー作ったのでどうぞ」

「ベアルン。ありがとう」

ナナは普通を装っているが実は体調は良くない。隙を作るために海に飛び込んで体を冷やして風邪を引いたのだ。今では毛布に包まってメロエツタの看護をしながらベアルンの作った温かいシチューを飲みながら体温を取り戻そうとしている。

「しかし今後の作戦会議も必要ね」

「そんなに強かったのですか？」

「その質問は難しいわね……」

「どういうことですか？」

「限定的なのよ。フェローチエの場合は速くて攻撃力が高いだけだった。耐久自体はなかった。なんていうか能力が変に偏っているからやりにくいというか……」

「でもZワザを使ったのですよね？」

「ええ。恐らくZワザを使わないと避けられていた。それに他の乗客にウルトラビーストは強いと印象付ける必要があったから。もしもUBは自分でも倒せるんじゃないかって思い始めたら、被害は拡大するもの……」

「そこまで考えて……」

「今の私はデトワール地方でもトップクラスに強い。だから他の人を守る義務がある。そのくらい考えるのは当然よ」

「なんか変わりましたね」

「そう？」

「今まではポケモンさえ良ければ人間なんてどうでもいいって感じがしてましたが……」

ナナの本性にベアルンも気付いていたのか。でもたしかにベアルンの言う通りナナの闇の部分は前より薄くなった気がする。

「そうね……今もポケモンが全てだと思ってるわ」

「え？」

「だけど気付いたの。人間が好きなのポケモン。人と一緒にいたいポケモンもいるってことに。だから私はポケモンのためにも人間も守らないといけないと思うの」

「……なんか好きです。その考え方」

「そう？　でもポケモンにとって人間は道具じゃない。そして逆も然り。最近それが分かるようになってきたわ。ポケモンは人と一緒だからどこまでも強くなれるし、人間も同じ。私がここまで強くなれたのもダーククライのおかげ……ポケモンはパートナーなのよ」

いや、僕はなにもしてないだろう。なんで僕のおかげなのだろうか……

「何度も挫折そうになった。その度に近くにはダークライがいた。そしてダークライを見ると負けてはいけなさと強く思うの。ダークライはほとんど知られていないポケモン。だから私が弱かったらダークライは弱いポケモンという印象になる……」

「なるほど。ダークライが馬鹿にされないように強くなったと」

「簡単に言うतそういうことよ。私はダークライっていうのは強くてカッコいいポケモンなんだと知らしめたかったの」

それは初めて聞いた。そのナナの想いは初めて聞いたな。強くなりたい背景にはそんなことがあったなんて……

「だから私はなんだって出来た。体から力が湧いてくるから……」

そしてしばらくするとナナは眠りについた。翌朝になるとナナの熱は悪化して喋るのも辛い状況だった。そんな中で僕達はナナの許可も取り、他人に迷惑をかけず許される範囲で船内探索をしていた。

もつとも表向きはそうなっているが実際は違う。単純な話でメモエッタと少し会話をしたかったからだ。僕はメモエッタの二元に行き、話しかける。

「なあメモエッタ」

「なに？」

「ポケモンのゲームのことを教えてくれないか」

どこまで役立つかわからない。しかしあつて損はないはずだ。この世界はゲームではないが近い部分も多い。きつと参考になるはずだ。

「うん。いいよ」

「まずダークライはゲームではどうなんだ？」

「強いよ。ただダークホルルの弱体化が少しキツイくて、最近USUMでトリックホリックっていうダークライを使えるインターネット大会があったのだけど、そこではアクZを持たせたりした特殊アタッカーとして使う人もいたわね」

「なるほど……」

「そしてマーシャドーに上からインファイトで殴られたり、ミミツキユにじやれつくされたりで落ちるケースも多かった」

ミミツキユ。あれに僕は負けるキャラなのか……ていうかミミツキユってそんな強いのかよ。噂には聞いていたがダークライよりも強いとは。

「ただ第四世代では化け物みたいに強かった。全体催眠はズルいよ」

「そんなにか?」

「そんなによ!。そもそもアニポケのタクト戦とか……とにかくダークライは四世代において最強なのよ!」

「なるほど」

「でもゲームの話。実際だとダークホールは避けられるし、眠りも強いけど、ゲームほどではない。それとダークライならあれが欲しいのよね」

「あれ?」

「わるだくみ。Cを二段階上げて抜き性能を向上させる技」

なんかよく分からないが強そうだ。そんな技があるのか。これは少し覚えておきたいな。もしもわるだくみを覚えれば出来ることが広がる。

「あとは広い技範囲。れいとうビーム、10万ボルト、きあいだま、サイコキネシス、シャドーボール、ヘッドロバくだん、やきつくす。一通りの技はある。まあそこは私と同じね」

「それは使える」

「そう。それなら火力向上ね。他に聞きたいことは?」

ダークライというポケモンについても分かった。だけど僕は根本的な部分を知らない。それは原作ゲームでのポケモンバトルだ。それはどのようなものなのか。

「原作でのポケモンバトルでの勝ち方を教えてくれ」

「同じよ。相手を倒す」

「他には?」

「うーん……ポケモンって使える技の限界があって、それをPPと呼ぶんだけどPPが枯れると技が打てなくなってるあがきしか出来

なくなるの。それでPPを枯らすという勝ち方もあるけど……この世界ではPPなんて無いから無理だと思う。それに技も4つじやないし」

「そんな勝ち方が……」

「ていうかそこら辺のことなら私よりナナちゃんの方が詳しいですよ。彼女ほど知識があつて指示もしっかりしてるポケモントレーナーなんて早々いない」

「それはそうだが……」

「まあいいわ。あなた前世でチェスとかやったことある？」

「いや……」

「それと同じよ。相手の強い駒を倒せば、こちらが有利になる。そして逆も然り」

「相手の強いポケモンを倒せということか……」

「違うわよ。自分の他のポケモンが苦手なポケモンを倒すの。そして他のポケモンが通しやすくなるから」

ところどころ分らないが、なんとなく言いたいことは分かる。ようするに自分が苦手なのは他人。他人が苦手なのは自分で倒せということだろう。

「そして時として一つ。相手の王を取るという考えもある。例えば相手のパーティーがジャローダ、エンブオー、ダイケンキの場合はそれでこちらがドヒドイデの場合。私はジャローダを倒せば勝ちとなる」

「待て。それはどうしてだ？」

「相手にドヒドイデの突破手段がないからよ。それがキングを取るということ。相手の唯一の勝ち筋を潰す。チェスと同じよ。問題はキングがどれか分からないことくらい」

「キングをとるか……」

これは少し面白い考えだな。チェスの要領でポケモンバトルを考えるなんて想像したことがなかった。

「ただ何度も言うけどゲームとリアルは違う。他の駒がいきなりキングに昇格することもある。リアルは常にイレギュラーの連続だよ。だから参考程度にして、その考えに固執しない方がいいよ」

それからしばらくメロエツタと会話して、その場を後にする。僕も周りと同じように船内探索をしていると、船員の仕事の手伝いをしているジャノビーを見つけた。

ジャノビーはつるのムチを上手く使い、的確に荷物の運搬をしている。

「なにしてるんだ？」

「見ての通り仕事を手伝ってるのよ？」

「お前……そんな性格だったか？」

「ここの荷物を片付けたら、あそこの物置にあるもの自由に貰っていいと言われたのよ」

「ていうかジャノビー。人語喋れたか？」

「身振り手振りで会話したのよ」

「そうか。とりあえず僕も暇だし手伝うか」

「ありがとう。それなら、そっちの荷物を運んでくれるかしら？」

僕はジャノビーに言われた通りにテキパキと動く。荷物自体はそこまで重い物もなく、簡単に終わることが出来た。そして僕達は船員に報告するとお礼を言われ、物置部屋を開けてもらった。そして船員からも使っていない物だから勝手に持っていいってもらっていいという言葉をとった。さて、どんな掘り出し物があるだろうか。

「あ、この服って可愛い」

「魔女服……なんでコスプレ衣装があるんだよ」

「でもサイズが合わない……」

「少し貸してみろ」

僕はジャノビーから服を借りる。それと同時に近くにあつた糸と針を拾い、ジャノビーが着れるように調整していく。前にナナの服がボロボロになった時に今後のために裁縫スキルをムシャーナに教わっておいて助かった。しかしムシャーナはどうして裁縫なんて覚えていたのだろうか。まあムシャーナは賢いので知っていても不思議ではないが。

「ダークライ。あなた器用ね」

「これでサイズ合うか？」

「うん！ ばっちり！」

そして魔女つ子ジャノビーが出来る。服を着ているポケモンが見えるなんて新鮮だな。そして僕も適当に辺りを見渡すが、特に目ぼしい物はない。強いて言うなら隅にある小さなビー玉くらい。しかしあのビー玉。どこかで見た気が……

「あら、ナナが持つてるビー玉と同じ物じゃない。たしかメガストーンだっけ？」

「うむ。言われてみればメガストーンに見えないこともないな。一応もらつていくか」

「そうだね。あとダークライ。そのメガネどう？」

「これってドラミドロのメガネの色違いじゃねえか！」

「あー！ こだわりメガネ。たしか特殊技の威力が上がる代わりに精神に異常が起こるんだよな？」

「そうそう。なんでも『同じ技しか出したくなくなる』とか」

「たしかにメガネをつけたドラミドロも性格が大きく変わってたな。たしか初日は『りょうせいぐんこそロマン！ りゅうせいぐんを撃つために生きている！』とか言ってたわね」

「ほんとに恐ろしいメガネだ。見なかったことにしよう」

そして僕達は物置部屋から目ぼしいものを頂いて後にした。そして一通り探索を終えてナナの元に戻ろうと甲板にでる。その時にジャノビーが慌てて言う。

「ねえダークライ！ あれを見て」

「あれ？」

「海面よ！ あそこにあるのって！」

「ポケモンの卵だな」

そこには波の乗って海を彷徨っている青い卵があった。とりあえず僕は海に飛び込み卵を回収する。それと同時に体温で温められた影響かピキピキと割れてくる。もう間もなく孵化するだろう。そして大事に抱きしめながら甲板に戻る。

「あ……」

「マナー！」

そして同時に卵が孵化した。そのポケモンはマナフィだった。たしか幻のポケモンだよな。そんな珍しいポケモンがどうしてここに？

「……マナフィ！ うそでしょ！」

そしてマナフィを視界に入れたメロエツタが慌ててやってくる。そういえばマナフィとはどのようなポケモンなのだろうか。

「メロエツタ。教えてくれ」

「マナフィは海の王様で、どんなポケモンとも心を通わせるの。映画ではカイオーガを従わせたりしてたわ」

「そんなポケモンがどうしてここにいるんだ？」

「おそらくラルムが作った海底神殿レプリカに引き寄せられたんだと思う。その辺についてはあとで話すからとりあえずナナちゃんの元に連れていきましよう！」

卵から生まれたマナフィ。それが意味することを僕達はまだ知らなかった。幻のポケモンが存在する意味。それを僕は理解していなかったとマナフィを通じて知ることになる。

83話 VS ミミツキユ

「そう……把握したわ」

ナナは辛そうにマナファイの報告にきた僕達に返事を返す。先程より熱も弱まっているが少し喋るのは辛いようだ。

「しかし……見たこともないポケモンね」

「マナ？（ん？）」

そんな時にメロエツタに手を少し引つ張られる。なんでも話したいことがあるようだ。僕はナナに断りを入れて、マナファイを残して部屋の外に出る。

「まず海底神殿について話すね」

「頼んだ」

「マナファイというポケモンはアニメだと海底神殿を守る役割があったのよ。それで産まれるとマナファイは海底神殿を目指す」

「ほう……」

「そしてラルムは何故か海底神殿の作り方を知っていた。それでゴウー団の潜伏地点として新たな海底神殿を作った。その名前はレプリカ」

「それがマナファイと繋がるんだ？」

「ここから先は私の仮説よ。まず海底神殿にマナファイは必ず一匹はいなければならぬんじゃないかしら？」

「うむ」

僕はメロエツタに相槌を打つ。メロエツタは少しだけ息を整えた後にとても可愛らしい声で静かに自分の考察を語り始めた。

「ラルムの海底神殿にマナファイはいない。だからラルムの作った海底神殿レプリカにマナファイは行くために生まれた。そうは考えられないかな」

「だれがなんのために？」

「誰って……強いて言うならアルセウス？ まあ世界の理のようなもので意志の介入とかはないと思うよ。そもそも幻や伝説のポケモンには役割がある。なんの仕事もない私達がイレギュラーなのよ」

メロエツタの考察。それは前世の知識を最大限に活かしたものであり、妙な説得力がある。しかしメロエツタの考察通りだとするとマナフィは海底神殿に行かないといけないわけか。そしてマナフィが海底神殿に行かない場合はどうなるのだろうか？

「少なくとも私はマナフィが現れたのは必然じゃないかなと私は思ってるよ」

「必然か……」

「そうだとしたらマナフィを海底神殿に連れていかなかったらどうなるのかな。少なくとも私は取り返しをつかないことになる気がするの」

「UBと同じ時期というのが厄介だな」

「……ねえ。もしかしてマナフィはUBを止めるために来たんじゃない？」

「どうということだ？」

「UBの襲撃をマナフィの降臨。それが同タイミングで起こるなんて偶然ある？」

「……たしかに。マナフィを海底神殿に連れていけば事態が好転する可能性はありそうだ」

「しかしマナフィにそういう能力無かった気がするんだけどなあ……だからといって偶然なんてことはないだろうし」

もともと全ては考察の域を出ない。ただそうなるとマナフィは逃がすのが吉か。そう思ってた矢先にメロエツタは僕とは別の考えをいう。

「もしかしてマナフィはナナを海底神殿に導くために現れた？」

「は？」

「あなたは『きずなへんげ』を出来る特別なダーククライ。ナナがダークライと出会ったのはこの事態に対応するためで全ては必然……」

「いや、全てに理由があるわけじゃないだろ」

「それもそうね。ただマナフィに関してはナナが保護しておくのが正解じゃないかしら」

そしてメロエツタとマナフィに関する考察を終えた。ナナの元に

戻るとマナファイは彼女の手の中で眠っていた。このマナファイが恐らく鍵となる……

「とりあえずマナファイに関しては既に手持ちが6体だから外に連れて歩くわ。あなた達ものんびりしときなさい。明日にはストロベリータウンに着くわよ」

そしてナナは少しだけ辛そうに体を持ち上げた。そしてマナファイを抱っこしたまま窓を開け。するとマナファイは元気に跳ねて海に飛び込んだ。それと同時にナナはドラミドロもボールから出して、海に放つ。

「おそらくマナファイは海のポケモンでしょう。それなら海にいた方が落ち着くと思うわ。それとドラミドロはマナファイの保護者代わりになつといて頂戴」

「ドラア（承った）」

そしてナナはベッドに横になる。窓からマナファイの方をみるとドラミドロと仲良くやっっているようだ。

「昨日よりも楽だわ……明日には治りそうね。ダークライもゆつくりしなさい」

ナナはそう言って僕をボールに戻した。そして今日という日は終わった。

※ ※ ※

「着いた!」

翌日。船は無事にストロベリータウンに到着。その町は白一色でまるで地球のギリシャを連想させる。そしてナナの体調も完全に治りきっていたナナがストロベリータウンに着くと、まるでアイドルみたいな反応されて、辺りに人だかりが出来ていた。

「あなたが悪夢姫ね! 私とポケモンバトルしなさい!」

そして早速ポケモンバトルを仕掛けられる。ナナにバトルを申し込んできたのはミミッキュのパーカーを着た赤髪の女性。もちろんナナは二つ返事でそれを受けた。そして場所を移動して近くのフィールドを借りる。

「話題騒然の悪夢姫。最強のポケモントレーナーとして名前の挙がる

悪夢姫。あなたの実力を私が確かめてあげる！ ルールは3VS3よ」

突然の展開。降りてのんびりしようと思っただらポケモンバトルが始まった。まだ理解が追いついていないんだが……

「それでいいわ。しかし前年度のポケモンリーグでベスト4の戦績を残す実力者。ミミックユガール。相手にとって不足はないわね」

「あら？ 私のことを知ってるの？」

「有名なもの。ミミックユしか使わないポケモントレーナー。誰よりもミミックユに詳しいトレーナーって」

さらっと言ったけど相当な強者じゃねえか。そして気付いたら周りに野次馬も多く集まってきている。ほんとに大丈夫なのかよ……

「いきなさい！ ミミイ！」

「キユキユッ！（いきまーす！）」

彼女のボールからミミックユが出てくる。しかしナナのミミックユとは鳴き声が相当違うな。さて、どのくらい強いのだろうか。そしてナナは最初になにを出すのか。

「お願い。ジャノビー」

「それじゃあこちらから！ かげうち！」

「ジャノビー！」

はやい。今までに見たことないくらいの速さで影がジャノビーの背後で生成されて、ジャノビーを引っ掻いた。そして落下地点にも再び影が生成されてジャノビーを引っ掻こうとする。しかしナナがそんなことを許すはずがない。

「リーフストームで全て蹴散らさない！」

「ジャノ！（わかった！）」

ジャノビーが空中で回転しながら草の台風を巻き起こす。それにより影もろともミミックユを飲み込んだ的確にダメージを与えていく。あまりに広範囲な攻撃。しかしミミックユはばけのかわを盾に何事もなかったかのように立ち上がる。だがナナのジャノビーは本気の欠片も出していない。

「もう一度リーフスト……待って！」

「ジャノ？（え？）」

ナナのジャノビーの強みは特性あまのじやく。それによりリーフストームを撃てば撃つほど威力が上がる。最終的には大規模なハリケーンと同等になり、全てを破壊しつくす。いま撃てばミミツキユを確実に倒して、次のポケモンにも勝てるだろう。しかしナナはどうしてやらない？

「こないの？」

「……みちづれ。使ったでしよ？」

「バレてたかあ……すごい観察眼だね！ ミミツキユ！ シャドークロー！」

「ジャノビー！ アクアテールで相殺！」

両者の攻撃がぶつかり合う。高威力の技のぶつかり合いに軽く突風が巻き起こる。少しでも油断したら一瞬で負ける。僕は直感的に理解した。彼女は間違いなく強い。それこそ今のナナに匹敵してもおかしくないくらいに。これがポケモンリーグで好成績を残したトレーナーの実力……

「……もしかしてアーモンドより強い？」

「彼なら先日勝ってきたわよ」

「へえー！ へえー！ へえー！ それはすごいね！」

それと同時にミミツキユの猛攻が勢いを増す。

「彼がはがねタイプを使うようになった理由知ってる？」

「ええー！ たしかミミツキユに負けなためとか言ってたわね」

「そうそう！ だって彼は私のミミツキユにトラウマを植え付けられてるから！」

まさかアーモンドの言ってた幼馴染のミミツキユ使って彼女の事か。つまり彼女には本気のジムリーダーに勝ち、トラウマを残すくらいの実力がある……

「ねえねえねえ！ 大丈夫なの？」

「くっ……」

「アクアテールよりシャドークローの方が威力が高い！ ダメージはじわじわとジャノビーの方に蓄積されてる！ いつまで持つかなあ

！」

ミミツキユはシャドークローを撃つたびにキレが増していく。ナナが久々に苦戦しているのが雰囲気に分かる。そんなナナを煽るようにミミツキユガールは言う。

「悪夢姫のスタイルって攻撃を全て見切って避けるんでしょ？ 私のミミツキユの刃を避けてみてよ？ ねえ！」

「トレー……」

その時だった。ミミツキユのシャドークローが見事にジャノビーの腹を斬った。それによりジャノビーは致命的な一撃を受ける。しかし運よく戦闘不能にはならず、なんとか立ち上がる。

「一瞬でも別のことを考えると……死んじゃうよ？」

ナナが舌打ちする。トレースをする隙を与えない。それどころかナナに情報の整理をさせる暇すら与えずに攻める。だからナナは攻撃を見切れない。そんなナナを見て周りがざわつく。「悪夢姫ってそこまで強くない？」「ほんとは大したことないのでは？」といった声が聞こえる。

「悪夢姫って名前。今のあなたには重いんじゃない？」

その言葉で察する。今のナナは世間から大きく期待されてる。ナナはそれを背負って戦っているのだ。彼女は勝たなければならないという重圧の中で足掻いているのだ。

「心配は無用よ。この程度の重圧なんてチャンピオンになった時に比べたら大したことないから」

「ふーん……ねえ悪夢姫は期待の眼が同情に変わる瞬間に立ちあつたことある?!」

それと同時に再びミミツキユが動き出す。瞬速で突撃して、シャドークローを叩き込もうとする。その一撃を受ければジャノビーはやられるだろう。

「……リーフストーム！」

「ジャンオオオオオオ！（いくよー!）」

「しまった！」

草の大嵐がフィールドに吹き荒れる。それに飲み込まれたミミツ

キユは戦闘不能になり、立ちあがることはなかった。

「シャドークローの動作を始めたら急にみちづれは打てないわ」

「まいった……これは想像以上。相打ちか」

「ジャンビー！」

その時だった。ジャンビーがドサツと倒れた。ミミツキユの攻撃を受けた様子はなかった。それなのにジャンビーは何故やられた？

「まさか……くつつきバリね」

「正解。シャドークローの猛攻中に付けたの」

いつかのナナと同じ戦法。まさかそれをやられるとは。でもナナの時とは違う。彼女はミミツキユが不測の事態で負けたとき最低限の仕事が出来るようにと持たせた。それに対してナナはくつつきバリ前提で勝負を挑んでいた。彼女はもしかしたらナナが裏をかいてミミツキユに勝つかもということを考えて動いていたんだ。立ち回り方が間違いなくベテランのそれだ。

「頼んだわよ。ダークライ」

「ミミツサクツ。お願いね」

相手は再びミミツキユ。そして珍しく僕の出番だ。久々に腕が鳴るな。相手はフェアリーだがどう戦ったものか。とりあえず小手調べといこう。

「ゴフツ（ふあっ）!？」

「うそっ！」

僕は闇結晶を作り、まずはトレーナーとポケモンの視界を封じる。基本的にトレーナーというものは見なければ指示を出すことは出来ない。視界を奪えば、それだけで僕は有利になるのだ。そして同時にナナから指示が飛んでくる。

「ダークホール!!」

瞬時に闇の玉を作り、それを弾丸にしてミミツキユに放つ。そしてミミツキユは深い眠りへと誘われる。それと同時に近づき、ミミツキユの夢を喰らう。甘美な夢は力へと変わる。そして夢を蝕まれるダメージというのはとても深いもの。

「ミミツサクツ！ 起きなさい！」

「そのままあくのはどうで押し切りなさい」

一撃。その一撃は重く、ミミッキュを戦闘不能に持ち込むには充分だった。それで形勢逆転。一気にナナが有利になる。そして僕は闇結晶を解除して相手のトレーナーが次のミミッキュを出せるように舞台を整えた。

「少し想像以上……次からは全力。最高のミミッキュでいくわ」

「ええ。来なさい」

ナナから聞いたことがある。強者同士でのポケモンバトルは一瞬でも気が抜いたら負けると。一撃でも受けたら決着。だから一撃を喰らわせるために全力を尽くすと。

「ミミツレジお願いー！」

「ミ・ミミミミミミミミ (行きまする)」

またいつもと違うミミッキュか。僕もナイトメアシフトの出力をあげて備える。もう闇結晶戦術は使えないとみていい。それにミミッキュの覇気が先程とは明らかに違う。

「ダークライ！ かげぶんしん！」

「シャドークロー」

シャドークローはあまりに大きく、辺りのものを全て割いた。あまりの速さに対応が間に合わず、僕も胸に深い傷を負う。これはやばいな。このミミッキュだけは強すぎる。

「さすがポケモンリーグベスト4の実力者……」

「シャドークロー！ シャドークロー！ シャドークロー！」

何度も放たれるシャドークロー。僕はそれをナナの目線だけを頼りに避ける。そして近づこうとするとシャドークローが襲いかかり、近づくことを許さない。

「かげうちー！」

「しまったー！」

その時だった。影からの一撃で再びダメージを受ける。その攻撃は速く、回避は完全不可能の神速の一撃。そして傷も深く目眩がしてきた。

「そのままじゃれつくだよー！」

「真下に向かってあくのはどう!」

その一言。それでナナの策を察する。地面に放たれたあくのはどうで僕は宙に舞う。それにでミミツキュのじゃれつくを避ける。それと同時に地面に向かってれいとうビームを放つ。しかしミミツキュは意図も容易く回避。だけど、それでいい。

僕はそのまま空中に立ち。地上を見下ろす。

「飛んでるといふよりは浮遊に近い感じかな」

「ええ。どうするかしら?」

「ミミツキュ。飛んで」

「ミ・ミミミミ(承った)」

そしてミミツキュは規格外の脚力で地面を蹴り。宙に舞った。

それと同時に僕もシャドークローでミミツキュの攻撃を受ける。そしてミミツキュを弾いて、地面に叩きつける。しかしミミツキュは地に足が付くと同時に再び飛んでくる。僕はそれをシャドークローで躲していく。しかし明らかに分かる。これはジリ貧だということに。

「もう終わりね!」

「ええ。ダークライ! 例の位置に!」

ナナの指示通りの位置に行く。そしてミミツキュも僕を追ってくる。そして奴のシャドークローを透化で避ける。そして例の位置。すなわち先程れいとうビームで凍らせた位置にミミツキュをぶつける。そして追撃のシャドーボール。それをミミツキュは飛んで避けようとした。しかし地面は足元。氷で滑り、そのままシャドーボールでやられる。

これで勝負ありか……

「やるわね……」

「ばけのかわね」

しかしミミツキュは起き上がってきた。僕は完全に忘れていた。ミミツキュはまだばけのかわを残していたことに。そして第二ラウンドが始まる。

そんな時だった。空が裂けて一体のポケモンが現れた。

「なにつっ！」

「ウルトラビースト」

「アアアアアアアアアア！」

そのポケモンは解読不能の雄叫びをあげながら降り立ってきた。ナナはそのポケモンを見てすぐに戦闘態勢をとる。アクジキングと一言だけ呟いて。

84話 VS デンジュモク

「アグジキングはあくどドラゴンの複合タイプのパokemonよ！」

「ねえ悪夢姫！ あれってなに！」

「ウルトラビースト！ 異世界のpokemonよ！」

「倒してもいいんだよね？」

「ええー！」

突然のウルトラビーストの出現。それにより辺りは大混乱になった。ナナ達はそれに動じることなくpokemonを出していく。二人共とも出すのはミミツキュ。あいつはフェアリーに弱いことを理解している故の行動。そして指示を出そうとした時だった。

「プクリン。じゃれつく」

「たぁー！」

「アグジ!？」

神速で現れたプクリンがたった一撃の殴りで倒した。アグジキングを一撃で戦闘不能に追い込んだ。そしてプクリンは頭にリングを乗せながら鼻歌を歌っている。明らかに別格だ。これは間違いなく正面からやって勝てるようなpokemonでは……

「な、なにあのプクリン……」

「セカイイチを頭に乗せるプクリン……もしかして……」

「まったく……最近はウルトラビーストばかり出る。少しは休ませてほしいな」

「お兄ちゃん!？」

「ああ。ナナか。やっとこの街に着いたんだな」

そのプクリン使いのトレーナーは戦闘不能のアグジキングにボールをぶつけて捕獲する。そして強さに納得する。プクリン使いのトレーナーはナナの兄。つまりチャンピオンだったからだ。

「ストロベリータウンでウルトラビーストが出るのは日常茶飯事だ。まあだからこうして俺が解決に当たってるわけだが」

「悪夢姫……その人って……」

「ええ。この地方のチャンピオンにして私の兄よ」

チャンピオンの戦い。それに一気に歓声上がる。先程の戦いを見てミミツキュガールは震えていた。しかし震えながらも口を開き、チャンピオンに話しかける。

「ミミツキュガール。どうしたの？」

「悪夢姫……こんなチャンスって二度とないと思うの……だから……」

そして彼女はチャンピオンに近づいていく。その様子にチャンピオンも気付いて彼女の方を見る。

「君は前回のポケモンリーグの……」

「あ、あの……私とポケモンバトルしてください！」
「ほう？」

「勝てないのは分かってます……だけど自分がどこまで通用するか知りたくて……」

チャンピオンは少しだけ考える素振りをみせた。それから彼女の本気の間を見て二つ返事で答えた。

「いいだろう。ルールは一体一だ。それと一切の手加減はしない。泣くなよ？」

「ありがとうございます！ 行くわよ！ ミミミミ！」

「ミミミ！（おうよー）」

「この俺を超えてみせよ！ 期待のルーキーよ！」

チャンピオンの戦いを間近で見れる。その事実先程のアグジキングの事件が嘘のような盛り上がりを見せる。そして彼女はナナとの勝負でだけのかわを消耗したミミツキュは使わず、別のミミツキュを出した。それに対してチャンピオンはプクリンにフィールドに出るように命じる。

「いつでもいいよ！」

「先手必勝！ Vジェネレート！」

「ミミミミミミミ（オラオラオラオラ）」

ミミツキュは灼熱の炎を額からV字型に放出する。ものすごい熱量で辺りの温度が数度程度上昇し、周りの物質も融解を始める。これほどの熱量は始めてみた。凄いな。

「……珍しい技を使うな」

「私とミミッキュの絆の結晶にして切り札。どんなポケモンだろうが焼き尽くす!」

「だろうな。相手が俺じゃなければ苦戦は避けられないだろう。プクリン。ほのおのパンチ」

冷たい言葉とは裏腹に熱を感じさせる指示。それと同時にプクリンは頭の上のリングを遥か上空へと飛ばし、ミミッキュに対抗すべく拳を繰り出した。そしてプクリンの繰り出す拳はミミッキュの灼熱の炎を巻き取り、自分の炎へと変えていき、ミミッキュの腹に練り込ませた。それによりミミッキュは吹き飛ばすが、ばけのかわを盾に持ちこたえる。そして同時に彼女の腕が輝き、ミミッキュに力を与える。「まだよ! 私達はもつと上にいく! 全力の一撃! ほかほかフレンドタイム!」

ミミッキュのZワザか。奴はプクリンの周りを駆けまわる。それはあまりに速く、目で追えるものではなかった。その技にチャンピオンも感心した様子を見せる。

「ほう……ミミッキュZか。やるじゃないか」

「いけえええええええええええええええええ!」

「プクリン。受ける」

そしてプクリンはミミッキュに飲み込まれて、何度もミミッキュに殴られる。そんなのが数十秒に渡って行われる。やったか……

「うそでしょ!?!」

「悪いな。俺とお前じゃ格が違う」

しかしプクリンは無傷で出てくる。それから追撃の炎のパンチで本体への確実なダメージ。それによりミミッキュは戦闘不能になった。そして上から降ってきたリングを見事に頭で受け止めた。決着がつくまでに一秒もかかっていない。その事実によりミミッキュガールはそれによりガクリと膝をつく。

「本来なら覚えないVジエネレート。覚えるまでに相当な努力をしたんだな。凄かったぞ」

「……」

「ただそれだけじゃ俺には届かない。それだけだ」

そんなもんじゃない。リングの降ってきたタイミングは完璧。それと同時にバトルを終えていた。つまりプクリンはミミツキユ乙を使うことを想定し、そこから戦闘にかかる時間を計算してリングを宙に飛ばしたのだ。

本当に同じポケモンなのかあやしくなる。これが絶対王者の力……

「ど、どうして……こんなにも強いのですか？ 私になにが足りない……んですか？」

彼女が泣きそうになりながらいう。それに対してチャンピオンは優しく諭すようにいう。

「技への認識。多くの人が勘違いしているが基本的にどんな技でも直撃すれば致命傷。耐えることは難しい。君は俺のプクリンの技を避けることに専念すべきだった」

「で、でも私の乙ワザを……」

「まず最初に技をどんなポケモンでも一撃で倒すまで極める。そして技を当てる努力をする。それがポケモンバトル。冷たいようだが君はその域に達していなかった。それだけさ」

「でもテレビとかで技のぶつかり合いを見ますが……」

「あれは技を技で相殺。相性で強引に受ける。もしくは牽制やポツ拳の類だ」

「ポツ拳？」

チャンピオンはポツ拳について説明を始める。しかしポツ拳の技術って知られていないんだな。それにしても一撃で倒すか。そこまです威力を高める。まだ課題は多いな。

ていうか待て。ポケモンリーグベスト4でしか知らない技術ってなんだよ！

まずそれを平然と常識のように教えるキンランさんもあれだし、当然のように理解できるナナもあれだ。なんでこんな普通に常識のようには話してるんですかね……

そして一通り話を聞き終えた彼女は一言だけ呟く。

「私の知ってるポケモンバトルと根本的に違う」と。

「どうやら今まで僕達がやっていたのは周りのポケモンバトルとは違うなにかだったようだ。後日聞いた話だとポツ拳とかは応用の技術であり、基礎（ジムバッジを8つ集められるくらい）がしっかりしてないと無理なのだとか。」

そしてナナの場合は旅に出る前から学校で知識だけなら既にそのレベルまで到達していたから、簡単に習得できたのだとか。しばらくしてチャンピオンは彼女と分かれてナナの元へとやってくる。

「ナナ。潜伏先は恐らく海底だと分かった……だけど正確な座標がわからない」

「そっか。それとお兄ちゃん。他になにかある？」

「ウルトラビーストが他の街でも湧き始めているくらいだな……そしてウルトラビーストでも個体によって大きく実力が違うことが分かった。特にオーラを纏っているのは危険だな」

「分かった」

「問題はどうかやって座標を特定するか……」

しかし僕達は完全に手詰まりだった。

※ ※ ※

場所は変わり、シノノタウン。

その町は停電中だった。原因は数分前に現れた一匹のポケモンである。そのポケモンはケーブルのような体であり、明らかに歪。そんなポケモンの名前はデンジュモク。また今までのウルトラビーストとは違い、オーラを纏っており、圧倒的な力で街を蹂躪しようとしていた。しかし今はまだ目立った破壊活動は出来ていない。

「ピカチュウ！ 10まんボルト！」

「ピカピッ！」

地面を焦がす程の大電流。デンジュモクと名付けられたポケモンはそれを受けてもビクともしない。しかし次の瞬間に体が吹き飛ばされる。

「電気を喰らうから電気技が効かない。裏を返せば電気技以外なら通用するということでしょう？」

「ジユモク！」

そしてデンジユモクは怒り狂ったように暴れる。それと同時に大量の電撃が辺りを襲う。デンジユモクと戦う金髪の彼女は攻撃を全て見切り、ピカチュウに回避させる。

「この電圧……特性ひらいしんでも受け切れないわね」

「ジユモク！ ジョモク！」

「ピカチュウ！ ちきゆうなげでカウンター！」

「チウウウウウ！」

ピカチュウは接近してくるデンジユモクを受け流し、腕を掴むと空を駆けて、そのまま空中で一回転して地面に叩きつけた。そして彼女は隙を逃すことなく一瞬で指示を飛ばす。

「アイアンテールで胴体を叩いて！」

ピカチュウはすぐにデンジユモクに追い打ちをかけていく。完全にワンサイドゲームだった。ウルトラビースト相手にも一歩も引かず、それどころか戦いを有利に進めていた。

「ジユユユモクツツ！」

そしてデンジユモクは緑色の玉を飛ばす。その技はエナジーボール。予想外の攻撃に彼女はコンマ数秒だけ驚いた表情を見せるが、すぐに指示を飛ばす。

「エレキネットで叩きつけなさい！」

「チュウ！」

ピカチュウは尻尾から出すエレキネットでエナジーボールを掴み、そのままネットを手で持ち、振り回してデンジユモクを殴った。それでもデンジユモクは倒れることなく起き上がってくる。

「……並大抵の技じゃビクともしないわね。電気技が通ればどうにかなるのだけど。またこのような個体がくることを考えるとあの手は避けたいわね……」

「ジユモ！ ジョモク！」

一瞬だった。ほんの一瞬だけ彼女は気を抜いていた。デンジユモクは地面に手を刺して地面を砕いた。本来ならポケモンに浴びせられるはずの電気が彼女の肉体を襲った。

「あああああああああああ！」

「ピカピッ！」

そしてピカチュウもトレーナーを心配するあまり一瞬だけ気を抜いてしまう。その隙にデンジユモクはピカチュウを蹴り上げ、でんじほうで一気にピカチュウを吹き飛ばした。許容量を超えた電気はピカチュウの頬袋を爆発させて尋常ではないダメージを与えた。

ほんの一瞬。その隙を突いたトレーナーへのダイレクトアタック。もしもポケモンへの攻撃なら彼女も対応出来ただろう。しかし今回は違う。完全に自身への攻撃だった。

「ピ……カ……」

「ジヨモク」

そしてデンジユモクは弱り切ったピカチュウを弄ぶかのように持ち上げ、パワーウィップで何度も叩いた。それが数秒に渡って続く。ピカチュウの弱弱い鳴き声が聞こえる。

そんな中でピカチュウに掠れるような声で指示が飛んできた。

「1000……まん……ボルト」

そしてピカチュウのトレーナーがフラフラしながらも腕を光らせて立つ。同時にピカチュウにも大量のエネルギーが流れ込んでくる。

「私達はこんなものじゃないでしょ！ 全力で倒すわよ！ 1000まんボルト！」

「ピカピッ！」

頬袋が破裂して既に電気のコントロールが出来ないピカチュウ。それは無理をして体内に残る電力。それと溢れ出るパワーを使用して最後の特技を放つ。辺りに暗雲が立ち込めくる。

「ジヨモクウウウウ！」

「あなただってポケモン。私のピカチュウと同じように電気のおーバーフローはありえるわよね。ここで使う気はなかったけど使つてあげる。私達の最強のワザを！」

そして虹色の電気がピカチュウから放出され、デンジユモクを貫いた。それによりデンジユモクは爆発を起こし、少しだけよろける。デンジユモクは渾身の一撃に耐えたのだ。しかし既に勝負はあった。

既にデンジユモクの電力は許容上限。

「ばちばちアクセル！」

「ピカッ！」

雷速の一撃。それだデンジユモクの急所に当たり、遂に戦闘不能になった。そして彼女は勝ち誇ったかのように言う。

「シノノタウン、ジムリーダーキンラン。電気タイプのエキスパートが電気で負けるわけがないでしょ」

そして彼女は朦朧とする意識の中でボールをなげてデンジユモクを捕獲する。それと同時に気を失って倒れ込んだ。

今回のデンジユモクのようにウルトラビーストはデトワール地方の各地に少しずつだが現れてきているのだった。

85話 洞窟探索

「そういえばお兄ちゃん。あのポケモンのこと知ってる？」

夕暮れ時。そこでナナはチャンピオンにマナフィの話をした。それに対してチャンピオンは静かに語り始めた。

「マナフィ。海の王子と言われる幻のポケモンだ。なんでも海底神殿に導くとか」

「そう……しかし厄介なことになったわね」

マナフィ。現在は海にある人目の付かない洞窟にドラミドロとメロエツタ、そしてベアリングと共にいる。また厄介なことにマナフィは何故かドラミドロを母親と勘違いしてしまった。本来ならドラミドロを手持ちに戻したいのだが、それすら出来ない状況……

「ゴウー団のアジトは海底にあるが行くのは不可能。そして増えているU B……」

「うん……状況はどうなの？」

「最悪だ。ジムリーダーや四天王が対応してなんとか持ちこたえているが……」

「なるほど……」

間違いなく鍵を握っているのはマナフィ。相手の場所は海底神殿。もう答えは見えている。それなのに伝える術がない。カタコトの言葉では細かいことを伝えるのは不可能。そして伝えたとしてもどこで知ったのかという話にもなる……

手詰りの中でチャンピオンは改めて情報収集。ナナはドラミドロの様子を確認することにして一旦解散となった。そして幸いにもU Bは特に現れず、無事に辿り着くことが出来た。

「ベアロン。ドラミドロ達の様子はどうか？」

「特に問題ないですよ。元気に遊んでいます」

「そういえばこのポケモン。マナフィというそうよ」

「マナフィですか……それまた初めて聞くポケモンです」

僕は二人が話してる中でメロエツタの方に近づいていく。メロエツタはぼんやりとマナフィとドラミドロを眺めながら退屈そうに

していた。

「調子はどうか？」

「特になにもなし……メア。大丈夫かな？」

「……少し話がある」

「なにかしら？」

そして今の問題点を伝える。ナナ達にどうやって海底神殿の存在を伝えるのか。それをメロエツタに相談していく。メロエツタは一通り話を聞くと静かに返事を返した。

「……ナナの手持ちにムシャーナがいたわよね？」

「いるが……それがどうした？」

「ムシャーナで夢に干渉。それで匂わせる程度のことは出来るんじゃないかしら？」

「なるほど！」

「ただ向かったところでルナアラがどうにもならない。オーベムがいなきや意味がない」

「しかし……」

「UBが増加しているのは知ってる。だけど急いでも意味は無い」

「そうか……」

「ただ向かえば誰かがオーベムを連れてくるまでの時間稼ぎくらいは出来るかもね」

会話をしているとドラミドロがこちらに近づいてきた。遠目で見るとマナフィは遊び疲れたのか眠っているようだ。

「なあ……妾はいつまでこのポケモンの相手を……」

「私に言われても知らないわよ。あなたのトレーナーのナナに聞きなさい」

「そうは言われても困るんじゃない？」

「まあいいわ。マナフィは……」

そんな時だった。ナナがこちらに寄ってくる。なにか用があるのだろうか。

「ダークライ。行くわよ」

「ん？」

「どこって洞窟の奥に行くのよ。この洞窟の奥はどんな景色が広がっていて、どんなポケモンがいるのか気になるでしょ？ それにUB関係でずっと張り詰めていたから息抜きも必要よ」

気づいたらナナもベアルンも完全に身支度を整えている。もう完全に探索する気だ。正直言つてそこまで珍しいポケモンもないと思うし。いたとしてもナナが捕まえるとも思えないよな……：……：……か、この洞窟の奥ってどうなってるんだ？

「ナナさん。この洞窟って全体的にポケモンが凶暴で強いらしいです。地元のジムリーダーが訓練に使うくらいで……：……：……ほぼ未開の地だとか」

「面白そうじゃない。スピアー。お願いね」

「スピッツ（おう）」

そしてナナはスピアーをボールから出して奥へと足を踏み入れた。ドラミドロは流れる水を泳ぐように進み、メロエツタはナナの近くを飛ぶようにして付いていく。そしてベアルンは寝ているマナフィを起こさないように抱き抱えた。

洞窟探検の最初のうちは普通の道でポケモンが出てくる気配はない。だが、しばらくすると目の前に岩の壁が現れて行き止まりになっていた。

「これは……」

「ドラミドロ。ヘドロばくだん」

「ドラア（承った）」

ナナの指示でドラミドロが毒を吐きだし、岩を溶かしていく。すると更に通路が出てきた。まさかナナは行き止まりじゃないと分かっていたのか！

「本来なら『いわくだき』とかあると探索は楽なのよね……」

それをメロエツタは啞然としてみる。まあゲームじやいわくだきが王道だもんな。毒で溶かすなんて方法は普通はやらない。そしてベアルンの驚きの表情から察するにこれは稀な事態だ。それからしばらくすると次は大きな滝が現れた。その滝は重力に逆らい。下から上へと流れている。なんていう光景だろうか……

「すごい滝！　こんなの初めて見た！」

「ナナさん！　この滝は逆です！　逆ですよ！」

「ええ……世界って不思議ね」

いや、それで済まずな。不思議のレベルで済むものじゃない。明らかに異常だろ。

「ベアルン。あなたの手持ちってブーバー、ゴンベ、バニプッチよね？」

「はい」

「それならバニプッチを出してちょうだい。それとメロエツタはいにしへのうたでステップフォームに変身できる？」

「メロ？」

「私に考えがあるわ」

そしてメロエツタは歌い始めて、自分をバレリーナの姿へと変えて、ベアルンはボールを投げてバニプッチを出す。その様子を見てナナが二体と僕に指示をだす。

「これからドラミドロでなみのりを使って波を起こす。メロエツタはれいとうパンチ、ダークライはれいとうビーム、バニプッチもなんか氷の技で水を凍らせてくれないかしら？」

「水を凍らせる!?!」

「それで足場を作るのよ。ベアルンは水タイプのポケモンがいらないからそうしないを渡れないでしょ？」

「たしかにそうですけど……」

「とりあえず私は先に行くわ。ドラミドロ。お願い」

ナナは最初に一人でドラミドロに乗って滝を駆け登った。そして上からドラミドロに軽く命じる。『なみのり』と。

それと同時に少し小さめの波が起こる。恐らく威力も抑えているのだろう。その波を僕は氷の光線を放ち、凍らせていく。下ではメロエツタとバニプッチが懸命に頑張っていた。

「ジャノビー。ベアルンの命綱代わりになってちょうだい」

「ジャノ！　（分かった!）」

ジャノビーをボールから出して、つるのムチを上から使い、ベアル

ンの体に巻き付ける。そしてベアルンは必死に波を凍らせて出来た氷の壁をよじ登る。数十分かけて登り終えたのを確認するとナナは一つの提案をした。

「ここで夕食にしましょう」

「はい!？」

「ここから先から相当な覇気を感じるわ。恐らく強力なポケモンがいるからのんびりも……」

「オムツ!! (侵入者だ!)」

その時だった、上からオムナイトが降ってきた。しばらくすると更に何体ものオムナイトが上から降ってくる。完全に囲まれている。それに対してさすがのナナも少しだけ動揺をみせた。

「化石ポケモン!? まさか古代の環境がそのまま残ってるというね」

もともとオムナイトというポケモンが存在していることに対してのようだが。そしてナナはすぐに戦闘態勢をとる。使うポケモンはどうやらジャノビーらしい。

「つるのムチで叩きなさい!」

「ジャノ! (うん!)」

ジャノビーがつるのムチを華麗に走らせる。それをオムナイトは嘲笑うように飛んで避けて、ナナ達に距離を詰めていく。これはマズい。僕は瞬間にあくのはどうを放ってナナからオムナイトを引き離す。しかしオムナイトはなんともないように立ちあがる。

「助かったわ……このオムナイト。相当強いわね」

「……アア」

そうみたいだな。ジャノビーのつるのムチを避ける身体能力に僕があくのはどうにも耐えるくらいの耐久力。これは想像以上だ……

「ムシャーナ。出番よ」

「ムシヤアアアアア! (久々に暴れるぜ!)」

ナナは珍しくムシャーナを出す。ナナがムシャーナを使うのは稀だ。理由は三つ。一つはムシャーナは技に食べた夢のストックを使うため温存したいから。二つ目は単純に強く、本当に奥の手のため出来る限り隠していたいからだ。

「とびつきりの悪夢を見せてあげる」

「シヤアアナ (覚悟しろよ)」

その瞬間に辺り一面が血みどろの監獄のような場所になる。そして地面が割れて、針地獄が現れる。そして全てのオムナイトを敷き詰めた針が串刺しにした。それと同時に大量の血が辺りに舞う。もつとも幻惑だしダメージはない。それどころか噴き出した血すら幻惑。それなのにオムナイトは実際にダメージを受けたと勘違いして精神的なショックで意識が吹き飛ぶ。それと同時に元の洞窟に戻る。オムナイトは全てショックで気絶している。

ムシャーナをあまり使わない三つ目の理由。それは単純にグロテスクでえげつない攻撃をするからだ。それ故に人目のあるところでは使いにくい……

「ムシャーナ。お疲れ様」

「シヤアナ (おう)」

そしてナナはムシャーナをボールに戻す。しかし幻惑のリアリティも前よりも上がっている。あのオムナイトを一瞬で片付けるとは……

「さすがです……」

「とりあえず休憩しましょう。なんか来ても私が対応するから安心して」

※ ※ ※

夕食を食べ終え、再び洞窟探索が始まった。途中で水は途絶えたためドラミドロはボールへと戻し、最大限に警戒しながら奥へと進んでいく。そして心なしか少し肌寒くなってきたような気がした。そんな中で現在ナナは……

「スピーアー！ 距離をとってミサイルばり」

「ピアッ (おう)」

大きなテイラノサウルスのようなポケモンと戦っていた。そのポケモンの名前はガチゴラスというらしく、既にバトル開始から十分以上が経過している。ナナが野生ポケモンとの戦いでここまで長引いているのは珍しい。

ガチゴラスはスピアーのミサイルばりを受け切り、怯むことなく牙に炎を纏って噛みつきこうとしてくる。スピアーはそれを避けていくが、ガチゴラスは地面を蹴って空中で見事なアクロバットを決めてスピアーを追う。

「エレキネットで防御！」

「ピアッ（ああ）」

ガチゴラスの口をエレキネットで塞いで、なんとかその場を逃れる。しかしガチゴラスはすぐにエレキネットを破壊していく。そして物凄い量のエネルギーを集め、一気に放つ。

「こうそくいどうで避けて、その隙にメガホーン！」

「ピアアアアアッ！（これで決める！）」

口から放たれた熱線を間一髪で避けて、その隙に腹にメガホーンを打ち込んで、スピアーはなんとか勝利を収めた。そしてガチゴラスは放ったはかいこうせんに触れた岩はドロドロに溶けていた。そしてナナもさすがに疲れたのか、その場に座り込む。

「さすがにきつくなってきたわね……」

「明らかに野生ポケモンの強さが異常です。戻った方が……」

「ねえベアルン……ここまで強いポケモンがいる洞窟。その最深部にどんなポケモンがいるのか気にならないのかしら？」

「気になりませんよ！ これは冗談抜きで死にます！」

「このレベルの洞窟……間違いなくいるわよ……」

「なにがですか？」

「神話に名を残すようなポケモン……伝説のポケモンが」

「ほんとにいるんですか？」

「ええ。伝説のポケモンの住処には屈強なポケモンがいて、並大抵のトレーナーじゃ辿り着くことも出来ずに命を落とす。ここまでのポケモンの強さ的に普通のトレーナーじゃ確実に死ぬクラスよ」

「……ほんとにやばくなったらブルーバーのテレポートで逃げますよ」

「それは無理よ。この洞窟じゃテレポートもあなぬけのひもも使えないもの」

「え!？」

「よくあることよ。強いポケモンの住処では」

そしてナナは奥へと進んでいく。そんなナナに泣きながら付いてくるベアルン。ちよつとした探索がまさかここまでの大捜索になるとは……

しかし僕も気になる。洞窟の奥にはなにがあるのか……

再び歩く。何度か野生ポケモンが現れる。それを逃げたり、時には死闘を繰り広げて倒したりしながら奥へと進んでいく。すると目の前に大きな広間が現れた。そして階段の前には大広間がある。ナナはごくりと唾を飲む。

「この先が最深部……」

「わかるんですか？」

「ええ。あの奥から足が震えるような重圧を感じる。この覇気はどんなでもないわよ」

そしてナナが大広間に足を踏み入れたときだった。上から重圧を放つポケモンが現れた。明らかに今までの化石ポケモンよりも強い！ これはとんでもない！

「サザンツツ (小娘か)」

「サザンドラ！ いくわよ！ ミミツキュ！」

「ゴ……フツ (任された)」

サザンドラの動きは速かった。ミミツキュが出てくると同時に接近して右腕でミミツキュのボロ布を掴む。それに対してナナも臨機応変に対応する。

「ミミツキュ！ シャドークロー！」

「ゴ……フツ……」

見事に攻撃を当てて、サザンドラの束縛から離れる。それからナナは指を鳴らして指示。その意味は前進。ミミツキュはすぐに距離を詰めていく。そこにナナは瞬時に次の指示を出す。

「じゃれつくー！」

ミミツキュの攻撃は見事にサザンドラへと命中して吹き飛ばす。相手は悪とドラゴンタイプ。今の攻撃は間違いなく致命傷……

「サザン…… (久しぶりのダメージだ)」

「くっ……」

ナナは軽く睨む。四倍弱点でもビクともしていない。なんて強さなのだろうか。このポケモンをナナはどうやって攻略するのだろうか……

「サザンツ！（くらえ！）」

「ミミツキュー！」

ナナの指示は間に合わず、銀色の光線がミミツキュを吹き飛ばした。あの技はラスターカノン。鋼タイプの技。それをミミツキュに撃った……

野生ポケモンなのにタイプによる有利不利を既に分かっているのか!? 凄いぞ！

そしてミミツキュはばけのかわを盾にサザンドラの攻撃を見事に受け切った。

ナナはそれを見て少しだけ笑った。まるで楽しいとでもいうかのように。

「ここまで追い詰められたのは久しぶり。私も本気で行くわ。トレー・スミミツキュガール！」

そしてナナは珍しく人格トレースを使った。それに匹敵するだけの強敵ということ。そんな強大な洞窟最深部を守護するボスとのバトルが始まった。

86話 ほろびのうた

一撃で決める。技を当てたならば本来なら一撃で倒さなければならぬ。それなのにサザンドラはミミツキュの攻撃を直撃で耐えた。二重弱点というのに。

ナナは平常を装うが実際は相当な動揺をみせていた。二重弱点で攻撃してもビクともしないサザンドラ。そんなポケモンを相手にどう決定打を与えるのか。今の手持ちのポケモンで勝つことは可能なのかと。

「ミミツキュ！ かげうち！ かげうち！ かげうち！」

「ゴ……フツ（了承）」

ミミツキュは辺りを高速で動き回り、的確にサザンドラに攻撃を当てていく。そしてサザンドラの攻撃はナナの完璧な指示で避けていく。しかし攻撃が当たった地面が熱量で融解を始めてることから威力が規格外なのは誰が見ても明らかだった。

ナナはトレースしたことによりミミツキュに可能な動き、もつとも得意とする動きというものが手に取るようになっていた。ミミツキュだけに情熱を注いだミミツキュを扱うスキルは相当なもの。今のナナは誰よりもミミツキュの扱いに長けているといえるだろう。それ故にミミツキュの力を出せずにいた。

（どこかのタイミングでつるぎのまいを出来れば勝機は……だけど既にばけのかわはない。もう舞う機会はない）

本来ならミミツキュというポケモンはばけのかわを盾に戦うポケモン。そのばけのかわがない状態でミミツキュの扱いを覚えたとしても、意味はないのだ。

ミミツキュはばけのかわがあつてこそそのミミツキュなのだから。それでもナナはミミツキュを活かすために必死に勝ち筋を考えていた。

（そもそもダメージを受けた素振りもない。彼にレベル差があつたとして二重弱点を突いている。それなのにダメージを受けないってことはなにかしらのからくりが……まさか！）

そしてナナは一つの仮説を立てた。攻撃はもしかしたら当たって
いなかったのではないかと。例えば当たっていたように見せられて
いた。もしもナナの仮説通りなら……

「ミミツキユ！ おにびー！」

「ゴ……フ（おう）」

そしてサザンドラは炎で炙られる。しかし焼ける素振りすら見せ
ない。ナナはそれをみて想像通りだと笑みを浮かべる。

「ミミツキユ！ そいつはみがわりよ！」

部屋にいたサザンドラ。それはみがわりだということにナナは気
付いたのだ。そして上の方を見るとそこら中に横穴が空いている。
恐らく横穴のどこかに本物のサザンドラがいる。そしてみがわりを
倒したとしても現れるのは別のみがわりだとナナは察した。

「待つてください！ みがわりならじゃれつくを耐えるのは……」

「これは予想だけどみがわりにみがわりを重ねていたのよ。ありえな
いくらい精密にみがわりを扱うスキルが必要になるけど、このサザン
ドラは恐らくそれが出来る個体。そして相当な臆病者ね」

しかしナナは詰んでいた。本来のサザンドラに攻撃を当てる術が
ないのだ。上のほうにある横穴のどこかにサザンドラの本体がいる
ことは分かってても、そこまで到達する術がない。もしもサザンドラを
倒すしたらポケモンだけで行かせることになる。つまり指示の出
来ない状況でのバトルを強いることになってしまう。ナナは1秒だ
け頭を回転させてリスクとりターンの計算を行った。そしてボール
を一つ投げた。

「ピアッ!?（どうした!?!）」

そこから出たのはスピアーだった。ナナは真つ先に指輪を光らせ
てスピアーを強引にメガシンカさせる。スピアーも安心する主人に
身を委ね、姿の変貌に身を委ねる。

「スピアー！ ダークライ！ メロエッタ！ 三人で上にある横穴に
いってサザンドラの本体を倒しなさい！ あなた達なら出来るはず
よ！」

「ナナ……」

「ダークライ。信じてるわよ」

※・※

そうして僕は上の方にある無数の横穴に特攻したのだった。ナナ達の方からは派手な音と衝撃が伝わる。そして問題はサザンドラとどう戦うか。

「倒せばいいんだろ！」

「待て！ スピアー」

そして気付いたらスピアーが単独で目にも止まらない速さで特攻した。一体スピアーはなにを考えている……。まるで理性の欠片もない動きだ。

「まあ無理もないでしょ」

「メロエツタ？」

「そもそもメガシンカなんて相当な苦痛を伴うもの。それをトレーナーとの絆だけで強引に誤魔化してるの。もっというのなら頑張ってるトレーナーの声を聞いたり、見たりして必死に苦痛に耐えるの。だけどここでナナの姿は見える？ 声は聞こえる？」

「そういうことか……」

「恐らくスピアーはサザンドラを倒すだけの破壊マシン。私達だけで頑張りましょう」

「ああ……もう敵も来てるみたいだしな」

そして影から二体のゲンガーが明らかな殺意を放って現れる。それに対して僕は戦闘態勢をとる。しかしメロエツタは……

「それじゃあいくわよ！ ダークライ！」

「ちよつと待て！ なんで後ろに下がってるんだよ！」

「相手はゴーストタイプよ？ 私は明らかに不利。それにナナのポケモンじゃないから従う理由もない」

「いや、ノーマル持つてるんだからゴースト技は受けねえだろ」

「それに……」

「なんだよ？」

「いくらダークライといえど指示を出すトレーナー無しっていうのは厳しいでしょ？ 私がトレーナー代わりになってあげる」

おいおい。それで大丈夫かよ。そもそもポケモンがポケモンに指示を出すなんて今まで聞いたこともない。明らかにおかしいだろ。正気の沙汰じゃない。

「安心しなさい！ ゲンガーの種族値と技は全て覚えてるから！ それにポケモントレーナー歴はナナより長いんだから！」

「それはゲームの話だろ!？」

そんな茶番と同時にゲンガーがシャドーボールを無言で放ってくる。それを僕はギリギリで回避。それと同時にメロエツタから指示が飛んでくる。

「あくのはど……」

そしてメロエツタの指示通りに技を出そうとした時だった。目の前にゲンガーが現れて僕を拳で殴り飛ばす。それにより一気に吹き飛ばす。久々に攻撃がクリーンヒットだ。

くそ……メロエツタの指示が遅い。もっと早くならないのか……

「うそ!? 物理技ゲンガーとかありえないでしょ!？」

「次は任せたぞ」

「う、うん！ ゲンガーならダークライのあくのはどうで確一だか当てれば絶対に倒せるの！ もう一度あくのはどう!？」

「又ツ!」

僕はメロエツタの指示に従い、あくのはどうを放つ。しかしゲンガーはそれを簡単に避けて距離を詰めてくる。僕はそれをバックスで回避。そしてメロエツタの方は避けられるのが予想外と言わんばかりにアタフタしている。いつものナナの指示のタイミングなら間違いなく攻撃が当たっていたのに……

「なんで当たらないのよ! ダークライ! しっかりしなさいよ!

普通は命中100の技を外さないから!」

「……メロエツタ。悪いけどトレーナー向いてないと思うぞ」

「も、もういい! 私が倒すんだから!」

そしてメロエツタはシャドーボールを放ち、見事にゲンガーに命中させて一撃で落とす。そして二体目のゲンガーが怯んだ隙に一回転してステップフォルムにチェンジ。それと同時に影を硬質化させて

生成した爪で一気にゲンガーを引っ搔いて吹き飛ばす。するとゲンガーはニヤニヤと笑いながら地面に潜って消えていった。

「ふう……」

いや、想像以上に強いな。トレーナーとしてはド素人なのに自分が戦うと無駄のない動きに的確な技選び。この上なく完璧といえる。もう最初から自分で戦えよ。

「ポケモンバトルとはこうしてやるのよ」

「いや、ただの格闘術だろ」

「う、うるさいわね!」

結局のところ指示のないポケモンバトルというのは喧嘩と変わらない。自分で最適解を考えて、動いて攻撃を仕掛ける。どこからどうみてもただの喧嘩だ。

それに対してポケモンバトルはトレーナーからの指示を受けて、それ通りにこなすというもの。そしてトレーナーは常に最良の判断をして、一番良いタイミングで指示を出すというものなのだ。

「しかしナナやメアって天才なのね……」

「ん?」

「トレーナーごっこをして分かった。あの子達は無意識で相手のポケモンの一瞬の気の緩みで生じた隙を突くように技を指示してる。コマ数秒の中の最適なタイミングをそのポケモンに合ったタイミングで出す。だから攻撃は当たる」

それは気付かなかつたな。恐らく一般トレーナーとナナ達の差はそこなのかもしれない。彼女達は感覚的に僕達にコンディションを把握して、どの技ならすぐに撃てるかというものを分かっている。だからポケモン達は彼女達の指示を受けていれば100%以上の力を出せているのだ。それは一種の才能のようなもので、ポケモントレーナーとして欠かせないものなのだろう。

そんな時に後ろの方から物音が聞こえたのでシャドークローの要領で影を硬質化させて生成した触手のようなムチで全て叩いた。するとバタツと後ろの方でナニカが倒れる音がした。振り向くとそこにはゲンガーが二体いた。そしてゲンガーは再び地面に潜り、姿を消

していく。

「ねえダーククライ。今のシャドークローの射程って明らかに異常だしチートじゃない?」

「できる技術は使うべきだろ」

「私もシャドークローを使えるんだけど同じことって出来る?」

「無理だな。硬質化させた影にやみのエネルギーを加えて硬さは変えずに伸縮性を与えたことで可能にしてるからな」

「なるほど……やみのエネルギーはダーククライ内部で分泌されるもの。つまり実質専用技ってことね」

「まあもつともシャドークローよりも射程が長いだけで威力は変わらないが」

「分類物理で威力は70……ただのシャドークローじゃない」
「だからそう言ってるだろ」

しかし早めにスピーアールとサザンドラを探さないといけない。それにゲンガーも相当強いし厄介。またどこから攻めてくるか分からない。

「あのゲンガー。相当強いわね。弱点突いても倒れないなんて……」

「ゲームだとどうなんだ?」

「今の攻撃の話ならレベル50同士なら八割といったところね。ただゲンガーのレベルも未知。私達のレベルも不明なのだから、ダメージ感覚は当てにならないわよ」

まあただゲンガー達も無傷というわけではなさそうだ。メロエツタの攻撃でそこそこのダメージを受けて、僕の攻撃で一気に戦闘不能ギリギリまで削れた攻撃はあった。しかし戦意は消えていない。どこから現れるのか……

「それにゲームと違ってレベル上限があるとも思え……」

「メロエツタ。少し静かにしてくれ」

「そうね。私が浅はかだった。まだバトルは終わってないものね。ただゲンガーはもう出てこないと思う」

「どうしてだ?」

「少なくとも私なら出てこない。さっきの不意打ちを対応されて出て

くる気になる？」

「たしかに……」

「恐らく出てくるとしたら他のポケモンとの戦闘中とかじゃないかしら」

戦闘中か。それは厄介だな。それにまだサザンドラの本体も見つけていない。今からそれも探さなければならぬ。問題はどうか。そして見つけたらどう戦うか。

「サザンドラ。相手は悪とドラゴン。本来ならフェアリー技を使いたいわね」

「しかし誰も覚えていない」

「ええ。でもサザンドラといえど所詮はポケモン。ダークホールを撃てば眠る。そこであくむとかの定数ダメージで削っていくのが理想的な立ち回りね」

ダークホールか。強いのは知ってるが僕が好んで使う技ではない。あれは基本的に格下相手にしか当たらない。それ故に雑魚の相手にしか使うことのない技だ。ダークホールを軸にするとして問題はそう当てるのか。

「まずダークホールを軸にする理由の一つとしてはサザンドラの動きを封じたいから。そして二つ目は全体攻撃でゲンガーも眠りに誘える」

「たしかに理に適ってるな。まあ戦うことはその時に考えるとしてサザンドラが……」

「もう来るわよ。いくわよ！」

それと同時に奥からスピーアが吹き飛ばされてきた。メロエツタは一瞬の隙を逃すことなく首に回し蹴りを打ち込み、一気の大ダメージを与える。それから何度も殴り飛ばす。しかしサザンドラはそれが鬱々しいのか腕を振ってメロエツタを一撃で元の場所に叩きつけるように戻す。そしてメロエツタは痛みに呻きながら膝をつく……

「インファイトを打って起こる防御ダウンからのダメージ。何度経験しても慣れないわね」

「なあメロエツタ。どうしてサザンドラが来るタイミングが分かった

？」

「音よ。私の耳は相当良くて小さな物音も聞こえるの……」

音か。メロエツタは音楽が得意なポケモン。彼女の歌は現に一流だ。それは耳の良さからきているものかもしれないな。

……歌？　そういえばメロエツタは歌が得意だったな。それなら一つだけ良い作戦があるな。これが決まれば……

「ピアッ！（倒す！）」

「待って！　スピアー！」

「ゲンガア（チャンス！）」

そしてスピアーは闇雲に特攻していく。そんなタイミングでゲンガアが姿を見せてスピアーにシャドーボールを叩き込む。スピアーは多少のダメージを負うが気にすることなくサザンドラに特攻していく。そしてサザンドラは上空に飛んで、回避して辺りに炎を吐いて火の海にしていく。僕は瞬時に動いてスピアーを抱き寄せて技を回避。そしてメロエツタに叫ぶ。

「メロエツタ！　ほろびのうただ！」

「待って！　そんなことしたらダーライもスピアーも私も意識不明の重体よ！」

「それでサザンドラを倒せ！」

「分かった！　なんか策があるんでしょ!?　信じるわよ！」

そしてメロエツタが歌い始める。それと同時にあくのはどうで天井を砕いて通路を塞ぐ。あとは走ってボールの元に戻れば完璧だ。そして速さなら問題ない。ここにはナナの手持ちで最速のスピアーがいる。彼ならほろびのうたの効果を受ける前にナナの元に戻る。「スピアー！　ナナの元まで行け！」

「おう！」

そしてスピアーが最後の理性を振り絞り、攻撃衝動を抑えて走り出した。そんなスピアーを見僕は先程ゲンガアに使った触手型シャドークロードメロエツタを拾い、スピアーの体に巻き付ける。しかし物事はそんなに上手くはいかない。逃げようとすると同タイミングで瓦礫を壊し。サザンドラとゲンガアが物凄い速さで追ってくる。

あいつらの敗北は確定した。せめて道連れにしようという算段か。それならどう逃げる？ このままでは追いつかれ……

「ダークライ！ れいとうビームよ！」

「そんなんじや……」

「氷の壁で道を塞ぐのよ！ 時間稼ぎにはなるはずよ！」

そういうことか！

僕はれいとうビームを放って氷で道を塞ぐ。しかしゲンガーはすり抜け、サザンドラはあっさり壊してくる。こんな小細工は通用しないってことか。それなら……

「もう一度よ！」

「ああー！」

僕が氷の壁を作る。それと同時にメロエツタがリフレクターで氷の壁を保護する。それによりサザンドラの攻撃で氷の壁が一撃で崩されなくなった。しかし何度も殴られることで氷の壁にヒビが入ってくる。壊されるのは時間の問題か！ だけどゴールは見えた！

そして洞窟の横穴から一気に抜け出す。それと同時にナナの声がした。

「ドラミドロ！ りゅうせいぐん！」

「ドラア（いくぞー）」

広間に大量の隕石が降り注いでいく。それによりサザンドラのみがわりは壊れる。そしてナナも僕達の存在に気付く。そして驚きの表情を見せた。

「まさか!? ほろびのうたを使用したというの！」

ナナは瞬時に僕とスピアをボールに戻す。その場にメロエツタだけを残して。ナナは何故メロエツタを残したのだろうか。はやく戻さないと……

「ナナさん。どうしたのですか？」

「メロエツタのボールがないのよ！」

「え!? 落とし……」

「違うわよ！ メロエツタはそもそもメアのポケモンでボールを持ってるのは彼女。メロエツタのボールは最初から手元に無いわよ！」

「待つてくださいい！ それなら……」

「まだチャンスはある。ダークライ。いくわよ！」

そして再び僕をボールから出す。それと同時にナナのZパワーリングが光りだす。対象は思いつきりメロエツタ。なにをする気だ!?

「ほろびのうたでメロエツタがやられる前にメロエツタを戦闘不能にする。歌の効果から逃れるにはそれしかない！」

「マテ……」

「待たない。ほろびのうたは受けたらポケモンセンターに真っ先に連れていかないと確実な死がもたらされる危険な技。Zワザを受けてもらった方がまだマシだわ。一撃で決めないとメロエツタが危ない！ ブラツクホールイクリプス！」

そしてメロエツタにZワザが命中する。絶大なパワーを誇るZワザ。それによりメロエツタは一撃で戦闘不能になる。また横穴から飛び出してきたサザンドラとゲンガー二体。それに対して的確にモンスターボールを投げていく。そして不思議なくらいサザンドラとゲンガー二体はあっさりと捕獲された。恐らくボールに入らないと死ぬということを観察したのだろう。

「ふう……危なかったわ」

ナナは戦闘不能になったメロエツタを抱き寄せて、げんきのかたまりを与える。それでもメロエツタは目を覚ますことはなかった。どうやら僕は判断を間違えてしまったようだ。

「メロエツタがほろびのうたを使えるなんて迂闊だったわ。まあ数時間もしたら目を覚ますでしょう」

そしてナナは捕まえたサザンドラとゲンガー二体のボールを投げ、出すと同時にボールを近くにいたジャノビーに破壊させる。その様子を見た三体は納得したような表情をみせて去っていった。

「捕まえないんですか？」

「バトルもしない。ポケモンが望んだわけでもない。こんなゲットの仕方は私が御免よ」

ナナはその場に座り一息だけつく。まるで自分の判断を悔いるかのように。

「ナナさん……ほろびのうたって……」

「聞いたポケモンに確実な死を与える最強の技。そして使用が禁止されている数少ない技の一つ。もつとも使えるポケモンなんて滅多にいないけど」

「そんな技が……」

「聞いた時の対処法はボールに戻す、もしくは戦闘不能に追い込む。そうすると何故かほろびのうたの進行は止まるのよ」

ほろびのうた。まさかそこまでとんでもない技だとは思わなかった。僕はてつきりゲームと同じで戦闘不能にするだけだと思ってた。それが……そんなはずじゃ……

「まあ大事にはならなかったから良しとしましょう。それにこの一件はメロエツタの技を把握してなかった私の責任。ポケモン達は最善を考えて動いただけでなにも悪くはない。だけどメロエツタには少しキツくほろびのうたについて言い聞かせないとダメね」

それからナナは改めて入念にメロエツタの体調を確認する。そして命の別状がないことを確認すると同時に腰をあげて扉へと向かった。

「ナナさん。行くんですか？」

「ええ。メロエツタも大丈夫そうだし、それにここまで来て最深部になにかあるか確認しないと気になって夜も眠れない」

「でもサザンドラ以上のポケモンがいたら……」

「十中八九いるでしょうね。だけど……それは帰る理由……心の奥底から湧き出るワクワクを止める理由にはならない」

そしてナナはボールから出したままのジャノビーに命じてリーフストームで扉を一気に破壊する。それと同時にボール越しでも寒さを感じるくらいに圧倒的な冷気が辺りを襲った。

「さむっ！」

「ブーバー！ ねっふうー！」

それに対して瞬時に反応したのはベアルンだった。彼は自分のポケモンに命じて寒さを打ち消したのだ。しかし威力が足らず、まだ肌寒い。

「ベアロン。助かったわ」

「……しかし、まだ寒いですね」

「ええ……だけど耐えられる程度の寒さにはなったわ。そのまま行きましょう」

ナナ達は更に奥地へと向かう。扉の奥には凍り付いた階段。足を滑らせないように慎重に歩き、階段を下っていく。そして階段を降りると一面が氷の大部屋があり、冷気は先程よりも勢いを増した。

それと同時に目の前からこの上ないプレッシャーを感じる。その存在を見てナナは驚きの表情を見せた。

「なに……このポケモン……」

そこには灰色の体を持つドラゴンがいた。そのドラゴンは体の半身が凍っていた。それなのに強いプレッシャーを放ち、絶対的な格上の存在だと体に強く認識させる。

そのドラゴンは黄色い目でナナに忠告するような視線を向けている。それに対してナナは震えながらも声を振りしぼって話しかけた。

「あなたは……？」

「ひゅらららら」

その声の意味は分からない。しかし脳にドラゴンの言いたいことがダイレクトに刻まれていく。彼の思考が分かる。彼は言っている。

『汝がポケモンバトルを望むなら相手になろう。望まぬなら帰るがいい』と。

それはナナも理解できたようだった。ナナは震える手で僕のボールを掴む。その様子にドラゴンは興味深そうにみる。しかし、その目はどこか期待してるようだった。まるで退屈を紛らわせてくれるのではないかと。しかしナナはドラゴンの目を見てボールから手を離した。

『どうした。人の子よ』

再びダイレクトに言葉が脳に刻まれる。そしてナナは今度は臆することなく言う。

「今はやめとくわ。恐らくあなたとはバトルにすらならないで負ける」

『残念だ』

「でも私をもっと強くなったら、またここに来るわ」

『よかろう。その時まで再び眠りにつくとしよう』

そしてナナ達は、その場を後にした。

後に聞いた話。このドラゴンは『キュレム』と呼ばれ、全てを凍てつかせるほどの力を持つ伝説のポケモンだったそうだ。また不思議なことに今回訪れた洞窟は跡形もなく消えていた。洞窟そのものはあるのだが重力に逆らう滝が消えていたのだ。

この冒険が夢なのか現実なのか。それは誰にも分かることなく終わった。

ただ一つ言えることはキュレムというポケモンは間違いなく存在していたことだろう。

87話 7つ目のジム戦

あの探索の翌朝。メロエツタも特になんともなく、それどころか異様なまでの回復を見せ、既に元気に動き回っている頃。いつものあれが起きていた。

「七つ目のジムバッジに挑む挑戦者は悪夢姫ちゃんでしょうか？」

そう。毎回恒例のジム戦である。

「ええ。ルールはフルバトルですよ。ルピナスさん」

「もちろん」

そうして青髪の女性はボールを投げる。それと同時に現れたのはニョロトノ。そしてスタジアムに水が注がれ始める。このジムは時間経過と共に水が注がれていくギミックがある。一応、浮島がいくつか設置されているものの、足場が限られていては戦いは不利になる。「そしてルピナスさん。勝ったらホントに教えてくれるんですよ？」

「もちろん」

さて、なぜ呑気にジム戦をしているのか。理由は簡単で彼女がマナファイについて知っていると述べたから。つまりナナはマナファイのポケモンの情報入手するために戦うことになったのだ。そしてナナは最初になにを出すのか……

「行きなさい。ムシャーナ」

「ムシャーア（おうよ）」

ムシャーナがボールから出される。しかし先発にムシャーナとは珍しい選択だな。ナナはなにが狙いなのか。そして同時に雨が降り始める。

「ニョロトノの特性あめふらしですか」

「ご名答。もう待ちくたびれたんだから……はやく狩らせてちょうだい」

それが合図だった。ニョロトノは自慢の脚力を活かして、カエルのように遥か上空へ飛び立つ。それを見てナナは同時にムシャーナに指示を出す。

「トリックルーム！」

そう。新たに習得した技を。アリスのギラティナと戦う時に覚えた大技。その技により、フィールド全体が正方形の部屋に包まれる。そしてニョロトノはそのままムシャーナに向かって軽く叩いて、ボールへと戻っていく。

「とんぼがえりですか。ニョロトノが本来なら覚えられない技を使いますね」

しかしジムリーダーは少し不愉快そうな表情を見せていた。そしてナナのムシャーナには多少のダメージはあるが、大事には至っていない。

「あなた……完全にとんぼがえりを見切ってたわね。なぜ？」

「あなたのニョロトノの足の筋肉の付き方。あれなら『とんぼがえり』を使えると判断したのです」

「見事ね」

「そしてあなたが使いたかったポケモンは恐らく特性『すいすい』等の雨の時に素早いポケモン。もしくはゲッコウガ等の元々速いポケモン。それで雨により火力の上がった水技を素早く打つことでケリをつける予定だった」

「そこまで読まれていたなんて。でも一つ良いことを教えてあげる。ジムリーダーは予想外の事態にも即座に対応出来るのよ」

そして彼女はボールを派手に投げる。現れたのはアシカのようなポケモン。しかし見た目から受ける印象は人魚。その姿は大変美しく、無意識のうちに目を向けてしまう。

まるで高貴なお姫様だ。ここまで上品で美しいポケモンがいるだろうか……

「そうきましたか……」

「ええ。このポケモンはアシレーヌ。とても遅いポケモン。トリックルームがある今ならどのくらい速く動けるかしら？」

そしてアシレーヌが一気にムシャーナの前に現れた。あまりに速い動き。しかしムシャーナも負けないくらい速く、アシレーヌから距離を取る。

「さてショータイムよ！ 私のアシレーヌの美しさをご覧あれ！ ただのジムリーダーと思うなかれ！ うたかたのARIA！」

辺りに泡が舞う。それに合わせてアシレーヌが歌い始める。その様子をみて慌てたのはナナの方だった。たった一手。それだけで大きく局面は逆転してしまった。

「L a a a a a a a a a a」

「ムシャーナ！ まもるー！」

ナナの指示に従い、ムシャーナは全力で防御態勢を取る。それと同じ時に辺りの浮島もまとめて全てが吹き飛んだ。まるで小規模の爆発が各地で起こったようだ。

「もう一度うたかたのARIA」

「L a a a a a a a a a a」

「ムシャーナ！」

再び辺り一面に謎の爆発が起こる。それにより今度はムシャーナが吹き飛ばされてしまう。そして吹き飛ばされた先でも爆発が起こり、ムシャーナを連続的に襲う。ムシャーナは苦痛の表情を浮かべながらボールのように扱われる。そして数秒が経った時には戦闘不能になっていた。ナナは下唇を噛みながらボールに戻す。

「ムシャーナ。ごめんなさい」

「まずは一体目」

あれはなんなんだ。どうやって攻撃している。フィールド全体の攻撃。あんな技を防ぐ術はあるのだろうか。まずカラクリが分からない。そしてナナが二体目のポケモンを出す。

「お願い！ ドラミドロー！」

「ドラア……（ああ……）」

出されたのはナナが使う唯一のドラゴンタイプのポケモン。そのポケモンはトレードマークと言いたげに変わった眼鏡を身につけている。

場に出されたドラミドロは不安そうな表情を見せていた。これまでのジムリーダーとは格が違う。キンランさんに限りなく近い実力といつでも過言ではないかもしれない。さすが二番目に強いジムリー

ダー……

「辺りに浮いてる泡。あれ一つが小さな水の爆弾。それを歌で拡散させて攻撃する全体技。回避は困難……」

「マイナーな技なのによく知ってるわね。だけど実際に見るのは初めてでしょ？ どう対処するのかしら？」

ナナもカラクリは分かっているようだった。だったらなんの問題もない。ナナは軽く息を吸い、次の指示を大声で出した。

「ドラミドロ!! ヘドロウエエエエエエブ！」

「ドラア（了承した）」

「アシレーヌ！ ひかりのかべ！」

「レエエヌ（任せてー）」

そして毒の波を吐き、それがフィールドを覆う。水は毒に染まり、紫色へと変色を遂げていき、泡も全て碎かれる。アシレーヌだけがひかりのかべで攻撃から身を守る。

「なんて威力なの……」

「私のドラミドロ。攻撃力はトップクラスよ」

想像以上にエグい攻撃。地形を変えるりゆうせいぐん。辺りを毒に染めるヘドロウエーブ。まるで固定砲台。適当に技を放つだけで場面を制して、圧をかけられる。

純粋なパワーによる悪夢。圧倒的な火力で全ての戦術を打ち砕いていく。

「てきおうりよく……こだわりメガネ……威力だけに全てを注ぎ込んだ育て方……」

「さすがジムリーダーね。一撃で見事に分析してくるなんて」

そういうことか。ナナのドラミドロの特性はタイプが一致する攻撃技を大きく上げる。それに更に道具を持たせてパワーアップをさせてるわけか。さすがだ。

「……だけど今までの私とは違う。今の私は模索するんじゃないよ。それはジムリーダーが相手でも同じよ」

「……戻って。アシレーヌ」

ジムリーダーはアシレーヌをボールへと戻す。それをみてナナも

警戒する。まるでいつポケモンが出ても瞬時に一撃を浴びせられるように。

「行きなさい！ ブルンゲル！」

「ヘドロウエーブ！」

ボールから飛び出した風船とクラゲの二つの印象を持たせるピンク色のポケモン。そのポケモンにヘドロウエーブがダイレクトのヒットする。しかし大したダメージは受けず、そのポケモンは余裕の表情を浮かべていた。

「これが解答よ」

「ブルンゲル」

「ひかりのかべもある。毒技はいまひとつ。さらにブルンゲルは特殊技に対する防御も高く、並大抵の攻撃じゃ動じない。そしてあなたのドラミドロはこだわりメガネの影響でヘドロウエーブ以外使えない。さらにスピード自慢のダークライもトリックルーム下じゃ満足に動けないのでしょ？」

「ブルン（あらあら）」

再び形勢逆転。しかし凄いな。秒で有利不利が変わっていく。ナナが有利かと思えば数秒後には不利になっている。それに二人共動揺を見せながらも的確に対応していく。そしてナナは無言で構えている。そしてナナは僕のボールに手をかけた。

「信じてるわよ。ダークライ」

「ブルンゲル。おにび」

出てくると同時に怨念の炎が僕の身を包んだ。それにより体が焼けていく。しかし我慢できないほどではない。それよりも問題は異様なまでの体の重さ。まるで重りがついていてるかのように体が動かない。技を避けるのは間違いなく無理だ。

「さあ次はな……」

その時だった。ナナのZパワーリングが光った。まさかZワザか。あまりに早く切り札を使う。少し不安はあるが、僕はナナの動きを信じるだけ。恐らくこれが最善手なのだろう。

「ブルンゲル！ ねっとう！」

「ブルンツ（そいや）」

グツグツと沸騰した熱湯を浴びせられ、体が赤く腫れる。あまりに痛い。威力こそはないが相当な痛みがある。なんて非人道的な技なんだ。しかしこれで……

「全て終わらせてあげる。この勝負は私が勝つ。ブラックホールイクリプス！」

ブラックホールを作り、それは一気にブルンゲルを飲み込んだ。作られたブラックホールはブルンゲルの体を蝕み、一撃で戦闘不能に追い込んだ。ひかりのかべすらも貫通して一撃で倒す威力をみせた。しかしZワザはもう打てない。

「随分と早いですね。Zワザを使うのが」

「ええ。ブルンゲルさえ倒せばドラミドロのヘドロウエーブで勝てますもの」

ナナが悪女のように笑う。そうか通しか。前に聞いたことのある戦術の一つ。遠しとは相手の止められるポケモンを倒して。自分のポケモンを動かしやすくする戦術。

今の一手により、ブルンゲルは倒され、ドラミドロのヘドロウエーブに耐えられるポケモンがいなくなり、ひたすらヘドロウエーブを撃つだけで勝てるポケモンバトルになったのだ。見事な采配だ。

「こういうのはどうでしょう」

そしてジムリーダーがボールを投げる。すると今度は青色のブルンゲルが現れた。おかしい。ブルンゲルは先程倒したはず……それなのに……

「……」

「同じポケモンを二体使ってはいけないなんてルールはない」

その時だった。ナナが笑った。まるで全て計画通りだと言いたげに。それをジムリーダーは負け惜しみだと判断して、小馬鹿にした表情を見せる。そしてナナは僕に言う。

「ダークライ。悪いけどここで退場してもらおうわ」

「……あなた。なんのつもり？」

「勝つために必要なことなのよ」

なるほど。ナナの思考を完全に理解した。しかしブルンゲルは耐久寄りのポケモン。それを相手にやられるというのも至難の業だ。つまり戦闘不能になれという指示ではない。そしてひかりのかべにトリックルームがある現在で僕は満足に動けない。

下手したら起点にされかねない。

これは仕方ない。いつもとは一味違った戦い方、そして場から退場させてもらおう。

「ダークライ。かみなり！」

「ブルンゲル！　じこさい……！」

「……と見せかけてダークホール！」

黒い闇の玉。それを雨のように降らせていく。ブルンゲルは遅い。さらにそれだけじゃなくて『じこさいせい』を使う準備をしていた。そして僕は最初からナナの指示がブラフだと伝わっていた。ナナは間違っても『かみなり』なんて今の僕に使えない技を指示に出さない。電気技なら『10まんボルト』を指示する。つまり完全に相手を騙すための演技。

そして闇の雨に飲まれ、ブルンゲルは眠りにつく。それと同時にトリックルームのターンも切れて一気に体も軽くなる。しかしナナは僕を瞬時にボールに戻して次のポケモンを出した。

「頼んだわよ！　ミミッキュ！　つるぎのまい！」

「しまった！　まさかドラミドロの超火力もダークライのZワザも全て……！」

「ええ！　あの火力を見たらあなたは必ずドラミドロで私が攻略しようと思ってると思い込む！　そしてZワザを使うことで他にブルンゲルの突破手段がないと判断した！　だけど全て違う！　これらはミミッキュに繋げるための演技よ！」

そしてミミッキュが舞う。相手も瞬時に反応して指示を出す。予想外の一撃。それに動揺しつつも指示を忘れない。改めて強いジムリーダーだと認識させられる。

「ブルンゲル！　おにびー！」

しかし彼女の声は届かない。ブルンゲルは既に眠っているから。

そこでナナはさらに『つるぎのまい』を命じて攻撃力を上げていく。そして眠ったままのブルンゲルにシャドークローの一撃を叩き込み、ブルンゲルが戦闘不能。それと同時に雨も上がった。

「ゴフツ……（次は？）」

「やるじゃない……眠らせることにおにびを封じて火傷を受けないようにしたということね」

これで相手のポケモンは二体倒れた。残りは四体。そのうち二体はニョロトノとアシレーヌだと割れている。そしてこのクラスのジムリーダーにメガ棒がないとは考えづらい。そもそも彼女のネットクレスがキーストーンだ。間違いなくメガシンカは使用する。

「どんなピンチも好きなポケモンと一緒に乗り越えられる。頼んだわよ！ ニョロトノ！」

「ニョロ！（ああ）」

「れいとうパンチ！」

そしてニョロトノが現れる。ニョロトノは出てくると同時に地面を蹴り、瞬速でミミツキユと距離を詰めた。そして冷気を纏ったパンチでミミツキユに殴りかかる。それをミミツキユはナナの指示無しの自己判断で小さなシャドークローを出して受け止める。そしてナナもミミツキユならそうすると分かっていたのか、明らかにそれを前提とした指示を出した。

「じゃれつく！」

「ニョロ！（な！）」

それによりニョロトノはミミツキユに付きまとわれて、フルボッコにされる。たった一撃。それでニョロトノを倒したのだ。そしてナナの目からは強い意志を感じさせる。技を当てたら必ず倒すという。今のナナはまるで戦いの鬼だった。そんなナナに一瞬の間もない。

「ありがとう。それじゃ悪夢姫。もう一度だけとびっきりのシヨールを見せてあげる！ いくわよ！ アシレーヌ！」

「レエエヌ（任せて）」

それと同時にミミツキユの爪から電気が走る。初めて見る動き。一体ナナはなにをする気だ。ナナがミミツキユガールとの戦闘の後

にミミツキユになにか指示しているのは知っている。恐らくそれ関連。あれでナナはミミツキユについてなにか気付いてるはずなんだ。

「ミミツキユ。育て方次第で戦い方が大きく変わるポケモン」

「アシレーヌ！ うたかたのアリア」

「一気に斬りなさい！ 電撃のシャドークロー！」

「ゴフツ（おう）」

二秒もかかっていないだろう。ミミツキユはアシレーヌがうたかたのアリアを使う前に間合いに入り、一気に首をシャドークローで斬った。しかもただのシャドークローではない。電気を纏ったシャドークローだ。それにより泡は弾け飛び、アシレーヌは白目を向く。

「今のは……」

「電気を纏ったシャドークロー。キンランさんの元で学んだ電気技の性質。そして世間一般では知られてないけどミミツキユは『10まんボルト』と使える」

炎の技を主体とするミミツキユ。ナナはそれを見た。火をみごとに扱うというイレギュラーなミミツキユを見た。そこからナナは考えたのだ。雷でも同じことが出来ないかと。

「そういうこと……悪夢姫。ミミツキユに電気を出させてシャドークローに纏わせたのね。だけど今の速さは……」

「でんきエンジンって特性を知ってます？ 電気で体の筋肉を刺激させて活性化。その要領と同じです。ミミツキユは自身の電気を使つて体を刺激した」

「そんなの無理よ！ どのくらい些細なコントロールが必要だと思ってるの！ それに指導するのにも電気の知識、ミミツキユの知識。どちらも一級品のものが……」

「どちらも私にはある。それだけですよ」

そういえばナナは『トレース』が出来たな。それによりキンランさんという電気のエキスパート。ミミツキユガールというミミツキユのエキスパート。二人の知識を詰め合わせたというわけか。改めてナナの凄さが思い知らされる。

「だけど悪夢姫。私のポケモンを舐めないことね。その一撃でやられ

るほどぬるい鍛え方はしていない！ うたかたのアリア！」

ナナは下唇を噛む。ミミツキユに指示を出すもミミツキユは痺れていて動けない。自身の電気で痺れているのだ。明らかに荒業。まったく反動がないわけがない。

痺れている隙を突いてミミツキユの周りに泡が浮かぶ。これ一つでも触れたら最後。ミミツキユは吹き飛ばされてボールのように遊ばれる。もう完全に身動きが取れずにいる。そしてミミツキユの痺れも取れて、ついに動けるようになる。

「まるで水のステルスロックですね」

「良い表現をするわね。あの技にはヒヤリとしたけど私のアシレーヌは耐えた。そしてミミツキユは動けない」

ばけのかわ。それはダメーჯを無効にする。それだけで衝撃はダイレクトに伝わる。つまり吹き飛ばされるということだ。これは泡で作られた牢獄だ。遠距離攻撃が出来ないポケモンを詰ませる陣。そして恐らくポケモンを交代しようものなら出てきた瞬間に……

そうでなければナナはステルスロックなんて表現を使わない。

「アシレーヌ！ れいとうビーム」

そして氷の光線がミミツキユを襲う。すぐに飛んで回避しようとするが上空にある泡が爆発してミミツキユを吹き飛ばす。そしてミミツキユは毒の海へと叩きつけられる。本来なら水だったもの。それはドラミドロの一撃で触れたものを毒で飲み込む沼へと変わった。触れれば毒がじわじわと体力を奪い、やがて戦闘不能になる。

「ミミツキユー！」

しかしミミツキユは毒の沼から脱出して睨むようにアシレーヌを見ていた。戦闘不能になるまでカウントダウン。だけどまだ動ける。少なくともミミツキユは諦めていない。

「もう一度いくわよ。電撃シャドークロー！」

「ゴフツ（おう）」

電気を纏うシャドークロー。それは稲妻が駆けたようだった。爆発するよりも速く動き、アシレーヌへと距離を詰めていく。そして遂にアシレーヌとの間合いに入り、弧を描くような一撃がアシレーヌに

襲った。しかしアシレーヌは体を逸らして回避。そして尾びれでミツキユを叩き、戦闘不能に追い込んだ。

「お疲れ様。あなたの頑張りは無駄にはしないわ」

「次はドラミドロかしら？」

「ええ。出さない理由がない」

そしてナナはボールを投げた。出てくるのは藻類のようなドラゴン。その龍は宙を舞い、凛々しく、威厳を放ちながらアシレーヌを見つめていた。

これがナナの使う龍。ナナが大きく信頼しているポケモン。最大火力を放つ逆転の一手だ。ドラミドロに水の爆発が襲う。しかし彼女は眉一つ動かさず堂々と爆発を受け止めた。

「なんですって!?!」

「いくわよ！ヘドロウエーブ！」

ナナのポケモン。残り四体。

ジムリーダーのポケモン。残り三体。

フィールドは浮島と毒の海。そして天候は雨。相手の場にはひかりのかべ。

そんな状況で今までの中でジム戦は続く。